

アサルトリリィ Abnormal Transition

01N

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

近未来の地球。

人類は謎の生命体「ヒュージ」の出現により破滅の危機にあった。

それと同時に世界中にヒュージに対抗出来る力「マギ」を持つ人間が現れる。

ヒュージに対抗するために作られた決戦兵器「CHARM」を持ち戦う女性達は「リリイ」と呼ばれ人類を守る守護者となった。

この物語はそのリリイを養成する学園に現れた1人の少年がある誓いを守るために抗う物語。

### ※注意

この作品はキャラ崩壊、原作改変などがあります。

そして処女作であるためおかしな文章がある場合がございます。

それでも構わない方はぜひ楽しんで頂けると幸いです。

BOUQUET編

目次

第1話	1
第2話	10
第3話	23
第4話	28
第5話	36
第6話	46
第7話	57
第8話	65
第9話	80
第10話	89
第11話	101
第12話	108
第13話	126
第14話	135
第15話	148
第16話	166
第17話	175
第18話	185
第19話	198
第20話	207
第21話	214
第22話	222
第23話	233

過去⑦

過去⑥

過去⑤

過去④

過去③

過去②

追憶①

Fallen Eyes 編

閑話⑫

閑話⑪

閑話⑩

閑話⑨

緩和⑧

閑話⑦

閑話⑥

設定集・異能者

閑話⑤

閑話④

閑話③

閑話②

閑話①

閑話・BOUQUET

第26話

第25話

第24話

411

403

395

388

382

375

367

357

349

343

336

329

323

318

312

306

299

292

283

273

263

253

242



閑話2・Follow Eyes 編

閑話2 ①

閑話2 ②

ラストバレット第一章

ラストバレット1章 ①

ラストバレット1章 ②

ラストバレット1章 ③

ラストバレット1章 ④

ラストバレット1章 ⑤

ラストバレット1章 ⑥

ラストバレット1章 ⑦

ラストバレット1章 ⑧

ラストバレット1章 ⑨

ラストバレット1章 ⑩

ラストバレット1章 ⑪

ラストバレット1章 ⑫

ラストバレット1章 ⑬

ラストバレット1章 ⑭

ラストバレット1章 ⑮

ラストバレット1章 ⑯

ラストバレット1章 ⑰

ラストバレット1章 ⑱







ラスバレ1章74  
ラスバレ1章73  
ラスバレ72  
ラスバレ1章71  
ラスバレ1章70  
ラスバレ1章69  
ラスバレ1章68

1050104510391034102910231015

# BOUQUET編

## 第1話

百合ヶ浜女学院入学式当日正門にてこの物語は幕を開けた。

??? 「俺がここに来ることになるとは・・・」

と呟きながら1人の男子用の制服を着用した人物「黒鉄 蓮夜」が正門前に立っていた。

蓮夜「それにしてもよくこんなに早く制服が完成したな・・・まだ一月も経ってないのに・・・」

彼がこの学院に編入が決まったのは3月の後半それまでは普通の高校に通う高校1年生であった。

どうして彼がこの学院に通うことになったのかそれは・・・

??? 「わっ!!」

と言う声が聞こえたためそちらを見てみると

1人の少女とその目の前に1台の車が止まっていた。  
なにかあったのかと見ていると車の扉が開き

??? 「ドアくらい自分で開けます。今日からは自分の面倒は自分で見なくてはならないのですから。」

1人の少女が降りてきた。

??? 「あら?」

その少女と目の前の少女の目が合い。

?????? 「ごきげんよう。」

?????? 「へ?」

「あなた達、もう帰ってよろしくてよ。」  
「え?・・・でもわたし今着いたばかりで」  
「でも私、付き人は必要ないと申し上げたんでしてよ?」

蓮夜（いや付き人って・・・同じ制服来ているのに気づかないのか?）  
と考えていると

「つ、付き人!?違います!!わたしはれっきとした百合ヶ浜女学院の新生生です!!」

「あら?そうでしたのそれは誠に申し訳ございません。申し遅れました。私、楓・J・ヌーベルと申します。」

「わたしは一柳 梨璃です。」  
楓「ん?そう主張なさらなくても、リリイなのはわかっていますわ。」

梨璃「だ、だから名前が梨璃なんです!!」

楓「あく!リリイの梨璃さんですか!生まれながらのリリイというですわね?」

梨璃「いえ、あの・・・思い至ったのは去年なんですよ?・・・」

楓「袖触り合うは多生の縁と申し上げますしよろしければ一緒に行きませんか?」

梨璃「はい是非!!」

楓「それなら行きましょうか。」

そして楓という名前の少女が振り返ると自分と目が合い。

楓「あら?どうしてここに殿方がいらっしゃるのでしょうか?」

と問いかけて来たので生徒手帳を取り出して

蓮夜「私も今年からこの学院に通うことになったですよ。」

その言葉に楓は驚き。

楓「男性はリリイにはなれないはずでは!!」

蓮夜「検査の結果によるとリリイとしての適正がありマジの保有量

も平均よりも多いらしいんですよ。だから今年からこの学院に編入することになったと言うわけです。」

楓「そうでしたの・・・申し遅れました。私、楓・J・ヌーベルと申します。」

蓮夜「こちらこそ遅れて申し訳ありません。自分は黒鉄　蓮夜と言います。」

梨璃「あっ！わ、わたし一柳梨璃です。よろしくお願いします。」

蓮夜「こちらこそよろしくお願いします。」

梨璃「わたし・・・たちこれから入学式の会場に行くのですが、一緒にしませんか？」

蓮夜「ありがとうございます。私も道がよく分からないので途中でまごご一緒させていただけますか？」

梨璃「はい、あれ？会場までは行かないのですか？」

蓮夜「私は入学式には出ませんので。」

楓「入学式に出ない？それに入学ではなく編入と仰っておりますしどういうことですか？」

蓮夜「あっ！申し遅れました。自分二年生なんですよ。」

梨璃「えっ！ということは年上ということですか!!」

蓮夜「はい、そうです。そして私は理事長室に来るように言われているので途中までということですよ。」

楓「それでは黒鉄様とお呼びした方がよろしいでしょうか？」

蓮夜「いいえ、自分は堅苦しいことが苦手ですので普通に構いません。」

楓「わかりましたわ。」

梨璃「それでは改めましてよろしく申し上げます。黒鉄さん」

蓮夜「はい、よろしく申し上げます。」

そして梨璃と楓と共に学院へ向かった。

しばらく歩いていると人だかりがありそこから、

??? 「中等部以来、お久しぶりです。夢結様。」

夢結 「何か御用ですか、遠藤さん」

??? 「亜羅椰と呼んでいただけませんか？」

亜羅椰 「そして入学のお祝いに、CHARMを交えていただきたいんです」

梨璃 「やつと着いた・・・思ったら、なんですかあれ？」

楓 「おおかた血の多いリリイが上級生に絡んでいるんですね。」

梨璃 「そんな、リリイ同士でCHARMを向け合うなんて。」

楓 「リリイといったって、所詮は16、7の小娘ですから。」

蓮夜 (夢結ってことは)

楓 「・・・あら、あれは！」

梨璃 「えっ・・・。」

楓 「白井夢結様ですわ!!ごきげんよう、梨璃さん！」

と言いつゝ楓は夢結達の方へと向かっていった。

梨璃 「あ・・・え？」

蓮夜 (やっぱりか!!)

考えている後ろから

??? 「あ、あのっ。今のは、楓・J・ヌーベルさんでは!？」

梨璃 「えっ?う、うん」

??? 「あの方は、有名なCHARMメーカーのグランギニョルの総帥を父に持つご自身も有能なリリイなんですよ！」

梨璃 「へ、へえ・・・。」

??? 「あっちの方は遠藤亜羅椰さん。中等部時代からその名を馳せる実力派！」

??? 「もう一方のお方は、どのレギオンにも属さない孤高のリリイ、白井夢結様！」

梨璃「リリイに詳しいんだ。」

「防衛省発行の官報をチェックしてれば、このくらい……」  
「あ、わたし二川二水っていいいます。」

二水「さっきの様子だと、ヌーベルさん。夢結様とシュツツエンゲルの契りでも結ぶつもりかもですね。」

梨璃「シュツツエンゲルかぁ……。二川さんにもそういう憧れのお方はいるの？」

二水「二水でいいよ！」

二水「わたしみたいな補欠合格のへつぽこが、シュツツエンゲルなんて……。」

梨璃「あはは……。気にすることないよ。補欠なら私だって……。」

二水「あ、知ってます。一柳梨璃さん。」

梨璃「……。梨璃でいいよ。」

そして俺がいることに気がついたのかこちらに振り向き

二水「あ、あなたは初めて男性でリリイになった黒鉄 蓮夜様ですよね！」

蓮夜「はい、あっていますよ。それと二川さんでしたよね？そのよ  
うな堅い感じではなく普通で大丈夫です。」

二水「あ、はい。黒鉄さんでよろしいですか？」

蓮夜「はい、よろしく願います。」

その頃、楓は2人の近くにたどり着いていた。

楓「夢結様!!」

夢結「お退きなさい、時間の無駄よ。」

亜羅椰「なら、その気になってもらいます。」

そう言うと亜羅椰は光りだした指輪をCHARMに触れさせると  
ここで起動、宝玉が光り、大剣のような形状から変形し斧のような形状  
になった。

亜羅椰「んふ……。」

夢結「……手加減はしないわよ。」

亜羅椰「あら怖い。ゾクゾクしちゃう♪」

楓「はい、そこ！お待ちになって。」

その時、楓が仲裁に入った。

楓「私を差し置いて勝手なこと、なさらないでくださいます?」

亜羅椰「なに、あなた……。」

楓「お目にかかり光栄です。私、楓・J・ヌーベルと申します。夢結様にはいずれ私のシュツツエンゲルになっただきたくないと存じております。」

亜羅椰「しやしやり出て来て、なんのつもり?それとも、夢結様の前座と言うわけ?」

楓「上等……ですわ!」

その時楓のCHARMケースが開きCHARMを掴もうとしたその時

梨璃「だ、ダメだよ。楓さんまで!!」

楓は梨璃に腕を掴まれて止められていた。

楓「!!」

亜羅椰「!?!」

夢結「……。」

二水「あ、あれ?梨璃さん、いつの間にな?それに黒鉄さんは何を持っているのですか?」

蓮夜「これはボーラですよ。彼女が斬りかかろうとしたらこれで止めようかと。」

その時二水の頭に何かが乗っかり。

???「なかなかにすばしい奴じゃの。」

二水「じゃの?」

声の方向を向くとツインテールの少女がCHARMケースに乗っ

かっていた。どうやら二水の頭の上に乗っかっているものは彼女の髪のようなのだ。

??? 「じゃが、一歩間違えば斬られかねんぞ。それとお主なぜそのよ  
うなものを持っておる?」

二水 (ミリアム・ヒルデガルド・V・グロピウス!!)

蓮夜 (鼻血なんて流してどうした?) (これはですな色々ありまして  
こういうものを常に持ち歩いているんです。)

ミリアム 「その色々とはな

『ゴーン!!ゴーン!!』

学院に鐘の音が鳴り響いた。

その音に驚いていると。

??? 「何をなさっているのですか!?あなた達!」

4人の前に上級生と思われる生徒が現れ。

??? 「遊んでいる場合ではありません。先程、校内の研究施設から生  
体標本のヒュージが逃走したと報告がありました。出動可能な皆さ  
んには捕獲に協力していただきます。」

夢結 「・・・わかりました。」

??? 「待ちなさい、夢結さん。単独行動は禁じます。」

夢結 「・・・何故です?」

??? 「このヒュージは、周囲の環境に擬態すると報告があります。必  
ずペアで行動してください。」

そして彼女は楓の方を向き。

??? 「そうね・・・。あなた、夢結さんと一緒に行きなさい。」

楓 「えっ・・・あ、はい」

と楓は喜んでいた。



夢結「必要ありません。足手まといです。」

その言葉に夢結から目を逸らしながら。

???「・・・あなたには、足手まといが必要でしょう?」

亜羅椰「わたしの勝負く!」

???「行くよー、亜羅椰。」

「亜羅椰は緑髪の生徒に引つ張られていった。

???「実戦経験のないものは体育館へ・・・!」

指示を出していた彼女と目が合い。

???「あなたが黒鉄 蓮夜さんですね?」

夢結「!」

蓮夜「あ、はい。私が黒鉄 蓮夜です。」

???「すみません申し遅れました。私は百合ヶ浜女学院3年出江 吏房と申します。生徒会に所属しています。」

蓮夜「ご丁寧にありがとうございます。それで私に何か御用でしょうか?」

吏房「はい、理事長代理からのあなたにも出動要請が来ていますのであなたも行つて貰えませんか?」

蓮夜「わかりました。」

そして俺もヒュージ捕獲に向かおうとした時。

梨璃「わ、わたしもお供します!」

楓「何ですって!」

梨璃「お役に立ちたいんです!」

夢結「・・・いらっしやい。」

そう言うのと夢結はすぐにこの場から立ち去り。それを楓が追っていった。

楓「お待ちになつてください!」

梨璃「あ、あの、わたし一柳梨璃と言います。」

そう言いながら何かを考えている彼女の横で彼も難しい顔をして

いた。

蓮夜（あいつ・・・本当に変わっちゃったな・・・）

そして彼らは脱走したヒューズの搜索へと向かった。

## 第2話

ヒュージを捕獲に向かってからしばらく探したがヒュージは一行に見つからず。

梨璃「いませんねえ・・・」

楓「入学式の前からくたびれ果てましたわ。」

蓮夜「そうかも知れませんがいつ相手が出てくるか分かりませんか  
ら油断しないで行きましょう。」

夢結「・・・蓮夜あなたいつまでそのような話し方でいるつもりかしら、はつきり言わせて貰うけれど違和感しかないわよ。」

楓「なんのことなのでしょう？」

夢結「いつもの話し方に戻さない。こちらも疲れるから・・・」

蓮夜「了解・・・女子校だからこういうことはきちんとした方がいい  
いと思つたが逆にダメだったか？」

夢結「そうね・・・違和感しかなかったわね。」

蓮夜「それはそうと夢結お前変わったな・・・やっぱりあのことが  
？」

夢結「あなたには関係ないわよ。それとなぜあなたがここに？」

蓮夜「市街地に入りかけたヒュージを狩ってたんだがその時にリ  
イに見つかつてな・・・そのまま検査されて勝手に話が進んでこう  
なつた。」

夢結「あなたなんて無茶なことをしているの!!」

蓮夜「市街地までアイツらが来たら不味いだろ？それに戦う手段が  
あつたからな。」

夢結「CHARMも持っていないのにどうやって倒そうと言うのよ  
!!」

蓮夜「それは一旦後にして・・・1人この話についていけてないや  
ついるから後でな。」

2人が言い合っているなか話についていけず固まっていたが彼の

その言葉で動き出し。

楓「あ、あのお二人方はどのような関係で？そしてCHARM無しでヒュージと戦っていたとは？」

蓮夜「ええそれでした

楓「私にも先程の話し方で構いませんわ。」

蓮夜「わかった。簡単に言う俺と夢結は幼馴染なんだよ。直接あったのは2年前位が最後だったが月一ぐらいで連絡は取り合ってたんだよ。」

夢結「そういうことよ。連絡を取り合うと言っているけれども基本的に彼から電話が来る場合がほとんどね。彼かなり心配性だから。」

楓「そ、そうでしたか。理解出来ましたわ。それでCHARM無しでヒュージと戦っていたとはどのようなようにして戦闘をしていたのですか？ヒュージには現代兵器は聞かないはずなのに？」

蓮夜「それは

その時

夢結「一柳さん！」

梨璃「え？」

梨璃が振り返るとそこには崖に空いていた穴から出ようとしているヒュージがいた。

梨璃「うわあ！で、出たあ!!」

ヒュージは梨璃に狙いを定めたのか近づいて来る。

その時楓がCHARMを射撃形態にして構え梨璃に向かって叫ぶ。

楓「おどきなさい、梨璃！」

けれども聞こえていないのか立ち止まったままCHARMを起動しようとするが。

梨璃「う、動かない!？」

CHARMは動かずその驚きで動けなくなってしまう。

梨璃が動けないでいるところにヒュージは刃物のように鋭い足を

振り上げて攻撃をしようとする。

だが攻撃が届くよりも早く動いた夢結が梨璃を抱き抱え自身の制服のボタンを引きちぎり地面に叩きつけた。地面に接触した途端に激しい光りが発生する。

蓮夜「これは一度引いた方がいいぞ!!」

と言いながらビー玉サイズの球体をヒュージの前方辺りの地面に投げつけた。それが地面に接触した途端にこちらは大量の煙が発生した。

夢結「そうね!ここは引きましよう!」

ヒュージが自分達を見失っているうちに一時撤退をするのであった。

近くに橋があり一旦その下に隠れることにし

梨璃「ううっ!?!」

楓「あなた、CHARMも使えないで、一体何をなさるおつもりでしたの!?!」

梨璃「ごめんなさい。わたし……。」

梨璃を問い詰める楓に夢結が

夢結「いいえ、一柳さんをそこまでの初心者と見抜けなかった私の責任です。」

楓「それは……。」

楓「だからって……自重すべきでしょう。あなたは……。」

その言葉に表情を暗くする梨璃。

夢結「2人とも少しの間、周りの警戒をお願いします。」

蓮夜「了解」

楓「え?は、はい」

夢結は何かをするようなので楓と2人で周囲の警戒をしていると。

楓「あなた……どうしてCHARMを起動させませんか?まさか梨璃さんと同じで契約をしていないというわけではありませんよね?」

蓮夜「ああ、CHARMとの契約はちゃんとしているがちよつと理由があつて使う訳には行かないんだ。」

楓「それではどうするおつもりで?」

蓮夜「これを使うつもりだよ。」

そう言い懐から2本のグリップのようなものを取り出してそれを腰のベルトに着いていた筒状のものに差し込み引き出した。そうするとグリップの先端にカッターの刃のようなものが着いていたがこのようなものでは決してヒュージ対抗できるとは思えないほど貧弱なものであった。

楓「そのようなもので一体どうやってヒュージと戦うと言うのですか??」

蓮夜「戦闘が始まればわかるよ。これはそこまで長時間使えるものじゃないから今はこんな状態だけ。」

と言い周りの警戒を始めた。

ふと気になり夢結達の方を見ると梨璃のCHARMとの契約をしているようだ。

そして上を見上げたその時

楓「来ましたわ!」

ヒュージが上から楓に向かって襲い掛かる。

それをCHARMで受け止めることに成功する。

その攻撃は重く彼女の足元がひび割れ砕けてしまう程で受け止めるのに精一杯であり動けないでいた。

そこにヒュージは足を変形させて挟み込むように楓を攻撃しようとする。

『ガギーン!』

という音とともにヒュージが横に吹き飛ばされた。

音が聞こえた方を向くとそこにはCHARMよりは小さいがそれでも人が持つには大きくすぎる剣を2本の持った彼が立っていた。

蓮夜「サポートするから好きにやってくれ！」

楓「わかりましたわ！」

次は彼に向かってヒュージが突進を仕掛ける。

それを彼は左手に持つ剣でいなし関節部に右手に持った剣を叩き込む。

ヒュージが攻撃をくらい怯んでいるうちに楓で射撃をしながら近づき近接戦に持ち込む。

それに彼が合わせてヒュージを挟んで反対側に位置し行動を阻害するようにしつつ関節部を狙い攻撃を加える。

それに対してヒュージは逃げるように大きく跳躍しながらガスのようなものを噴出。

楓「ガス!？」

夢結「大丈夫。ただの目くらましよ。」

これにより視界が悪くなる中。

楓「これじゃ、私のカツコいいところを夢結様にお見せできないんですってば！」

と言いながらヒュージを追って行く。

蓮夜「危ないから戻って来い！」

視界不良の中での単独行動は危険なため呼び戻そうとするが聞こえてないのか止まらずついには姿が見えなくなってしまう。

夢結「CHARMが起動するまで、手を離さないで。」  
梨璃「は、はい……。夢結様……。いつまで?」  
夢結「その時になればわかるわ。」

『キィィィ』

背後からヒュージが現れる。

それに対して夢結が攻撃を仕掛けようとする。

梨璃「待ってください!」

梨璃が夢結の腕を掴む。

夢結「え!」

夢結も驚愕するが次の瞬間。

ヒュージが急に上へと方向転換し、追っていた楓がCHARMを向けて突っ込んで来る。

楓も突然のことであつたため対応出来ず夢結と梨璃の真横のを突き抜けていった。

その直後ヒュージが真上から奇襲を仕掛けてくるがそのヒュージに対して彼が剣を2本とも振るいその時に刃を外すところで射出、刃はヒュージの胴体に命中する。すると刃が崩壊すると共に衝撃波を発生させそれでヒュージをより遠くへ飛ばした。

その後煙が晴れ楓と合流し

楓「申し訳ありません、夢結様……!」

夢結「あのヒュージ、私達の合い打ちを狙ったわ。」

楓「まさか。ヒュージがそんな知恵を?」

蓮夜「普通の個体なら目くらましなんかは、使わないからな、知恵



というかは微妙だが本能的に狙った可能性は十分にある。」

夢結「一柳さんにお礼を言うべきね。一柳さんが私を止めなかったら、あなた、今頃真つ二つになっていたところよ。」

楓「あなた、眼はいいのね。」

梨璃「あはは、田舎者なもんで視力には自信あります。」

蓮夜「田舎者なもんって関係あるのか？」

そのような話しをしていると周りに煙が立ち込めて

梨璃「わっ、なに!？」

煙の中からこちらにヒュージが向かって来る。

夢結「・・・ッ！」

それに対して夢結がCHARMをケースから取りだし起動そのままヒュージを地面に叩き落とす。

それに合わせて彼も追撃を入れるが足で防御される。

その足が触手状に変化し剣を2本とも掴まれる。

彼はすぐさま刃を外し拘束から抜け出し新しい刃を装着し反撃をしようとした時夢結が上空に弾かれる。

防御は成功したようだがヒュージの追撃により上へと押しやられそのまま残りの足を触手状に変えたヒュージに包み込まれてしまう。

彼は触手へと攻撃を仕掛けようとした時自分を抑えていた触手が梨璃達のいる方向へと向けられた。

そちらを見ると梨璃と楓がCHARMをヒュージに向けて走ってくる。

ヒュージはあの二人の攻撃を防ごうとしているようで彼女たちの視線から狙いが夢結を捕らえている触手だとわかり。

蓮夜「させるかよ!!」

2人の攻撃を防ごうとしている触手を切断する。

そして背後から

梨璃・楓 「やああああ〜!!」

2人の攻撃は狙い通り触手を切断することに成功。

それによって解放された夢結は着地しヒュージに向かって走って  
いく。

ヒュージは危険を察知したのか触手を使い上空に逃げようとする  
が

蓮夜 「逃がすか！」

彼が先程のように刃を射出する。

その刃が触手に刺さり爆発、体勢を崩したヒュージが落ちてくる。

蓮夜 「決めろ!!」

夢結の攻撃によりヒュージ断末魔を出しながら真つ二つになり周  
囲に青い液体を撒き散らしながら壁に向かって倒れる。その衝撃で  
周囲の壁が崩れ始めた。

梨璃 「楓さんっ！」

楓 「えっ!?!」

梨璃が近くにあった穴へと楓を突き飛ばしその後すぐに穴が塞が  
る。

夢結 「梨璃！」

青い液体が降り注いで来てそれから庇うように夢結が梨璃に覆い  
かぶさった。

蓮夜「やつべ！」

彼もすぐに彼女たちの前まで移動して懐から緑色の金属板のようなものを取りだし上へと投げる。金属板が光肥大化ドーム状になって青い液体や瓦礫から彼らを守る。

蓮夜「これで多少はましかな？2人とも大丈夫か？」

夢結「ええ。」

梨璃「は、はい！大丈夫です。」

蓮夜「それは良かった：：これが落ち着いたらここを出よう。ヌーベルさんも出してあげないと行けないし。」

梨璃「はい、そうですね。それと・・・これって何なんでしょう？？」

蓮夜「ああ、これね。これは簡易版CHARMみたいな物だと思ってくればいいよ。」

梨璃「そうなんですか。凄いですね！」

蓮夜「ありがとな。外も落ち着いたようだしヌーベルさん助け出して帰りますか。」

夢結「ええ、そうね・・・。」

梨璃「はい！」

その後楓を救出した3人は、学園に帰り夢結と梨璃は同じで検疫室の中にいた。

梨璃は自分が入学した理由を夢結に伝えていると。

梨璃「あれ？そういえば黒鉄さんがいませんね？」

梨璃は彼が部屋にいないことに気づき周りを見回して知ると

??? 『男子と女子がこういう時に同じ部屋だとダメだからだろうか？』

梨璃「えっ!？」

いきなりの声に梨璃が驚き声の方向を向くとそこにはスピーカーがあり。

梨璃「あ、もしかして黒鉄さんですか？」

蓮夜『あつてるぞ。この部屋マイクがあつて部屋番号と合わせればその部屋同士で会話ができるらしい。』

梨璃「へえ、そうなのですか凄いですね！」

蓮夜『普通の所だところなもないしな。それよりも腕怪我していたみたいだが大丈夫か?』

梨璃「はい、大丈夫です。傷は残ってしまいうらしいですが、これで今日のこと、忘れずに済みそうですので。」

蓮夜『そうか・・・』

梨璃「あ、話が変わるのですが話し方が変わっていますね?」

蓮夜『ああ、これね。女子校だから話し方とかも変えた方がいいと思つたから変えていたんだよ。こっちが素ね。嫌だつたら前の話し方に変えるけど?』

梨璃「いえ、そのまま大丈夫ですよ。」

蓮夜『わかつた。それじゃ改めてよろしく一柳さん。』

梨璃「は、はい。よろしくお願いします。あとわたし梨璃でいいです。」

蓮夜『わかつた。これからはこれからは梨璃さんって呼ばせて貰うね。それと夢結いつまでここにいればいいんだ?』

夢結「・・・もうすぐ来るは。」

「誰が?」と2人して悩んでいると、

???「やあやあやあ、3人ともごつめんね。」

2人のいる部屋の扉が行き良いよく開き1人の生徒が入ってきた。

???「初めまして、私は真島百由。標本にするはずだったヒューズを

うっかり逃がしちゃって。まさか厚さ50センチのコンクリートをやぶるとはおもわなかったわく。」

夢結「うかつなものね。」

蓮夜『この設備とかって安全面大丈夫なのか?』

百由「予測は常に裏切られるものよ。私達は楽な相手と戦ってる訳じゃない。そのためのリリースでしょ?もちろん夢結とあなた達には感謝はしているのよ?それとこういうことは滅多にないからそういう問題は基本は大丈夫よ。」

蓮夜『そうですか・・・』

夢結「この子の名前は梨璃よ。」

梨璃「夢結様・・・。」

百由「わかっているわ。だからこうして来たんでしょう?あー、この言い方がいけないのよね。反省します、ごめんなさい。」

蓮夜『あ、申し遅れました。私は黒鉄 蓮夜です。よろしくお願ひします。』

百由「いいよそんなに固くならないで、私のことは百由でいいわよ。こっちも蓮夜って呼ぶから。」

蓮夜『わかった。それではよろしくお願ひします百由さん。』

百由「ええ、こちらこそよろしく蓮夜。それとあなたなかなか面白いような武器を使っているわね?CHARMと同じくマジを利用しているみたいだけどCHARMとは違うみたいだし・・・あつそうだけれが終わったら見せてくれない?」

蓮夜『こっちもCHARMの仕組みについて気になるし、こちらの仕組みを教えるのでCHARMの仕組みを教えて貰うって言う感じならいいですよ。』

百由「乗った!!それじゃすぐに行きましょう!」

蓮夜『理事長室に行かないと行けないのでその後で』

百由「ああ、そういうえばそんな話があったわね。それじゃあなたの端末に電話番号と私の部屋までの地図を送るから終わったら来てくれない?」

蓮夜『それならそういうことで、こっちの用事が終わったら伺いま

す。』

そして会話を終わらせると準備を整えて理事長室に向かうことにした。

理事長室に着き。

蓮夜「黒鉄 蓮夜です。」

???「入りたまえ。」

蓮夜「はい、失礼します。」

扉を開き中に入るとそこには理事長代理の高松 咬月がそこにいた。

高松「君はCHARM以外にヒュージに対抗できる武器を持っているのは本当かね?」

蓮夜「はい。」

高松「君がCHARMを使えない理由は知っている。だがこの学院に在籍しているということは君もリイだ。」

蓮夜「ですがなの問題を改善しない限りCHARMを使用しようとする度の損害が大きいものとなりますが・・・」

高松「わかっておる。じゃから君には工廠科に編入してもらおうと考えている。」

蓮夜「CHARMを自ら作れと言うことですね。」

高松「そうじゃ。そうすれば君が持っている知識も利用しつつ君が問題なく使えるCHARMを制作することができるじゃろう。」

蓮夜「わかりました。」

高松「何かあった場合は真島君を頼ると良いじゃろう。彼女ならきっと力になってくれるはずじゃ。」

蓮夜「わかりました。それでは失礼します。」

そして理事長室から出ていった。

### 第3話

理事長室から出てからしばらく端末に送られてきた地図を見ながら歩いていると真島百由と書かれたネームプレートを見つけた。

蓮夜「すみません。百由さんはいますか？」

百由「おー、やっと来たか！入っちゃって入っちゃって！」

蓮夜「お邪魔します。」

そうして中に入るとそこには作業中の百由がいた。

百由「ちよつと待っててね。すぐに終わるから。」

何をしているのか気になり作業台を見てみると分解されたCHARMらしきものがあつたがあつた。

蓮夜「CHARMのメンテナンスですか？」

百由「そうよ。CHARMのメンテナンスや修理とかは基本工廠科がやっているからね。」

蓮夜「あれ？これってもしかして夢結が使っていたやつじゃ」

百由「よく見てるわね。そうよ、これは夢結CHARMね。」

蓮夜「分解していますがどこか故障ですか？」

百由「夢結は結構無茶な使い方をするから結構ガタが来てるのよだから今は、ガタが来ているパーツを交換してるの。」

蓮夜「あいつやっぱり無茶してるのか・・・。」

百由「私も心配しているんだけど話を聞かなくてね・・・。」

蓮夜「わかるその気持ち！本当に話聞かないんですよあいつは！」

百由「あなたもそれで苦労している感じ？」

蓮夜「もちろん!!」

百由「だけど理由を知っているから強く言わずらいのよね・・・。あなたも知っているの？」



蓮夜「知っています。電話で話す時もいつも無理している感じがどうすればいいかと悩んでますね……。」

どんと空気が重くなっていくなか百由が話を切り替えた。

百由「それはそうと、あなたの武器のこと教えて貰うわよ。」

蓮夜「こつちもCHARMの事よろしくお願いします。俺が使っているこいつをギアって呼んでいて……。」

そこからは武器についての始まった。

百由「やっぱり考え方は似ているけど全く違う代物ね。」

蓮夜「俺のギアはバインドルーンを使ってルーン同士を重ね合わせて力を使うのに対して、CHARMはルーンで1つの文章？詩？を作って繋ぎ合わせることで力を使う感じか？」

百由「そうね、例えるならCHARMは並列、ギアは直列と言った感じかしら？。」

蓮夜「その感じが1番しつくりと行くか……。」

百由「それにこれ、完璧に使い捨て前提ね。」

蓮夜「あの問題がありますから……元々壊れるなら出力と量産性を高めようとした結果がこれと言うことで。」

百由「それにCHARMの作成か……面白そうだから私も一枚かんでいい？」

蓮夜「むしろお願いします。理事長代理にも百由さんに頼れと言われてるので。」

百由「それじゃやりましょう！あとあなたまだ話し方が堅いわよ？それに口調ぶれぶれだし。」

蓮夜「そうですか？」

百由「ええ、それに私も堅いのはのは苦手だし。もつと砕けてもいいわよ、それにさんもいらわないわ。」

蓮夜「了解。それじゃよろしく頼む百由。」

百由「まつかせなさーい。だけどこつちが大変な時は手伝って貰うわよ！」

蓮夜「任せろ！それぐらいお易い御用だ！」

そこから彼のCHARM制作について話し合いが始まり。

百由「まずベースはなににしましょうか？」

蓮夜「とにかく頑丈なものがいいですね。」

百由「ティルフィング辺りがいいかしらね？機構自体が単純だから強度も高いし？」

蓮夜「そうだな・・・データを見た感じ一番頑丈そうだしな。」

百由「そういえばあなたはレアスキルってなんなの？作るならそれに合わせてもの作りたいじゃない？」

蓮夜「わかっているんだけど、今までにないやつでな？」

百由「へえーそうなの？名前は決まったの？」

蓮夜「名称は「アルターエゴ」。5つの能力の複合型のレアスキルだけど1つずつしか使えないって感じだな。」

百由「凄いレアスキルね。それでその能力は？」

蓮夜「武器を浮遊させて使用する。」

特殊な炎を発生させて触れた者の傷などを癒す。  
最大3倍まで自己加速する。

幻覚や精神への間接的な干渉をする。

自身から一定範囲の味方の能力を向上させる。

の5つだな。」

百由「何よそれ！反則でしょう！」

蓮夜「そう言われてもしょうがないだろ・・・自分で決められないんだし・・・。」

百由「まあ、そのことはもういいわ・・・。だけどそうするとレアスキルのことは考えずに作った方がいいわね。」

蓮夜「そうしないと沼にハマりそうだしな・・・。」

百由「それじゃコンセプトはとにかく頑丈でいい？」

蓮夜「それしか無さそうだしな・・・CHARMとギアの技術を合わせて見るか？」

百由「それは面白そうね！そうするとどうやって合わせましょうか？」

蓮夜「初めてなんだからCHARMに使用する文章の一部をバインドルーンに変えて調整する感じが一番じゃないか？」

百由「それが一番簡単かしらね？バインドルーンの作成はあなたにお願いしてもいいかしら？あなたの方が得意でしょう？」

蓮夜「わかった。そうすると頑丈さ重視だからCHARMの耐久性に関わる部分を変えた方がいい良さそうだな。それでどこがそこには関係している部分なんだ？」

百由「ああ、こことここね。」

そう言いながら彼女はモニターに写っている映像の何ヶ所かを指さしていく。

蓮夜「それじゃこちら辺にそうだな・・・ヘイス停滞ヘエオロー守ヘユル再生でバインドルーンを作ったら良さそうだな。」

百由「ヘニド束縛は？」

蓮夜「あれには欠乏の意味もあるからなのか捕まえるとかならいいけど頑丈にするのには向かないみたいなんだよ。」

百由「そうなの？やっぱり少し違うのね？」

蓮夜「みたいだな。もう結構時間遅いから今日はもうやめておこうか。」

時計を見てみると既に日を跨いでいた。

百由「そうね、この続きは明日にしましょう。それじゃルーンのことお願いね。」

蓮夜「わかった、完成したら連絡する。」

百由「そういえばさつきあなたも工務科なのよねあなたの部屋はどこなの？」

蓮夜「ああ、さつき地図が送られてきたがここからかなり近いみたいだぞ?」

百由「そうなの? ねえ、場所教えてよ。」

彼は彼女に自分の部屋の場所が書かれた地図を見せる。

百由「本当に近いわね・・・てかこの2つ隣じゃない!!」

蓮夜「近いとは思ってたけどそこまで近いとは・・・」

百由「これなら、色々と連携しやすいし機材の持ち運びも楽ね。」

蓮夜「だな、それじゃまた明日。」

百由「それじゃくね。」

会話を終わらせると百由の部屋を出て自分の部屋へと向かった。

自分の部屋に入って見ると彼女の部屋と似た感じの配置になっていた。

奥の部屋に入って見るとそこにはベッドやキッチン、シャワールームなどがありここが私生活用のスペースなのだろう。

蓮夜「凄いなこれ。どれだけかかっているんだ?」

その後今日話し合ったことをまとめ、ルーンの組み合わせなどを確認してからベットに入り。

蓮夜「あいつ本当に変わっちゃったな・・・。」

そう小さく呟く。

その表情は悲しみや悔しさが強く出ており彼の瞳は薄く輝いていた。

## 第4話

次の日の朝彼はまた百由の部屋にいた。

蓮夜「ごきげんよう。こんな朝早くからどうした?」

百由「ごきげんよう。いや、そういうえばCHARM完成するまでどうするか聞いてなくてね!」

蓮夜「今使ってるのじゃダメなのか?」

百由「ラージ級までなら大丈夫でしょうけどさすがにギガント級とかはきついでしょう?」

蓮夜「そうなんだよな。さすがに刃渡りの長さ的にきついし・・・」

百由「だから何にか代わりになるものが必要でしょう?」

蓮夜「どうするかな?」

考えながら周りを見回してある装置を見つける。

蓮夜「これって金属成形機だよな?」

百由「ああ、これ?そうよ。最新式だから簡単なCHARMのパーツぐらいなら簡単にできるわよ。だけど刀身や銃身はルーンを刻まないといけないからさすがに作れないけどね?」

蓮夜「これ使えるな・・・確か俺の部屋にもあったしこれならあれも行けるな!」

そう呟いていると、

百由「どうしたのよ一人でブツブツ言ってる、私にも教えなさいよ!」  
蓮夜「ああ、すまん。いい案が浮かんだから試してみようかと思ってるな?」

百由「どうするつもりなの?」

蓮夜「俺が使ってる剣ってカッターの刃にただルーンを刻んだだけみたいな物なんだよ。」

百由「そうみたいね?それがどうしたのよ?」

蓮夜「これを使っていた理由が簡単に手に入ったからなんだが、これがあればもつと大きなものを加工できるしあとから刻み込むからルーンの形崩れも関係ないからそれにCHARM用の術式を簡易化した物ぐらい俺の持つてる道具で刻み込めるからCHARMモードキができてCHARMのデータも取れるぞ！」

百由「その手があつたか!!簡単なのは私がすぐに組めるし午前中で完成するわ!あ、そういえばルーンの方は?」

蓮夜「もう出来てる。前に作ったものをチェックするだけだったからな。今そのデータを送るは。」

百由「助かるわ!すぐに術式を組むからあなたは自分の部屋で作って!!材料はそこにあるのを使っていいから!」

そう言つて百由が指さした所には大量の金属面積み上がっていた。

蓮夜「これはCHARM用の金属か?」

百由「そうよ。術式が馴染みやすいように加工されてるからCHARM制作に最適なの!」

蓮夜「凄いな・・・それじゃ少し貰つていくぞ!」

百由「どうぞー!」

彼はすぐに自室へと戻り作業を開始する。

成形機に材料を入れすぐにプログラムを組み上げる。

プログラムが組み終わるとすぐに装置が起動させプログラムを読み込ませる。読み込みが完了するとすぐにプログラムを実行、材料がものすごい速さで決められた形へと姿を変えていく。

装置が問題なく動いていることを確認すると彼は私生活用のスペースから大きめの作業箱を取ってきて中身を取り出す。

中身ははんだごてのようなもので先が尖っておりペンのようにも見える機械とコーヒーマーカーのような見た目をした機械だった。

そのような準備をしているとドアが行き良いよく開き。

百由「術式完成したわよ!!」

蓮夜「こつちも加工が終了する!」

百由「これその術式!!」

そう言いながら百由はUSBメモリーを俺に渡してくる。

それをPCに繋ぎ中身のデータを見る。

そうするとその中には役30文字程度ルーンでできた術式が入っていた。

蓮夜「50文字ぐらいかと思ったがかなり少なくなったな!」

百由「耐久面の部分があゆるンを使つたらかなり減らせたのよ!」

彼もUSBメモリーを取りだしPCに差し込むそしてデータをUSBメモリーに移し百由に渡す。

蓮夜「これ俺が今までに作ったバインドルーンのデータ!後で見てもみてくれ!」

百由「それは助かるわね。だけどさつき渡してくれても良かったんじゃない?」

蓮夜「これは基本的にギアようだからCHARMに合うか分からないんだ。だからさつきは使えるか確認したやつだけ渡したがこれが完成すればデータ取りが楽になるなら色々試すには見せた方がいいと思つたからな!」

百由「そういう事ね。それなら私が後で確かめるは!」

そのような話をしていると成形機が停止し1本の持ち手のない剣が現れた。

蓮夜「よし出来たか!」

すぐに剣を取りだし新しい材料を成形機に入れプログラムを実行する。

動いたことを確認するとコーヒーマーカーのような機械掴みマジを流す。

そうすると中から液体状のものが生成され容器の中に溜まる。

百由「これはなんなの？」

蓮夜「これはマジ溶液生成機でこれとこのペンでルーンを刻むんだ。」

百由「どうやってたらマジが液体状になるの？」

蓮夜「この中にはヘユル<sup>変</sup>とヘラーグ<sup>水</sup>のバインドルーンが仕込んであつてそれに前を通すと一時的に液体状に変わるんだよ。」

そう言いながら剣にペンを利用して術式を刻む。

文字を刻み終わると液体状になったマジを注ぎ馴染ませる。それを1文字1文字繰り返していく。

2本目の最後の1文字を刻み終わると彼は背を伸ばし、

蓮夜「出来たっ!!」

百由「へえー、こんなふうに作っていたのね。刻み込んだ後にマジを流し込んで馴染ませることで金属そのものに定着させているよね!面白いわ!!」

蓮夜「ちゃんと機能するかな？」

彼は懐からグリップを取りだしそれを剣に繋げる。

そしてマジを流すと刃が肥大化し通常のCHARMと同じぐらいの大きさになった。

蓮夜「よし!ちゃんと機能するぞ!!」



百由「やったわね！これなら使い捨てじゃなくてしばらく持つんじゃないの？」

蓮夜「だな、崩壊も起きてないし無茶しなきゃ2、3回くらいの戦闘は持つぞ！」

百由「それでも2、3回なのね？」

蓮夜「いつも戦闘1回で10本くらい使ってたからかなり耐久性が上がったぞ？」

百由「えっ!?そんなに使ってたの、それならすごいねこれ。」

蓮夜「簡単に作ってこれだからな！もしかしたら結構早く出来るかもしれないぞ！」

百由「それ以外でもCHARM全体の性能向上にも使えるわね。」

蓮夜「そうだな。それじゃ1回俺はこれを確かめて来る。」

百由「それなら闘技場に行くといいわ。あそこなら計測用の機材とでもあるから。」

蓮夜「わかった、行ってくる！そっちも頑張れよ！」

百由「そっちもね。」

闘技場に足を運ぶとそこには梨璃達がありCHARMを展開していた。

楓「鳥の羽よりも軽く、蜂の針よりも鋭く、時に鋼よりも重く、硬く。これがCHARMですわ。」

ミリアム「ふむ。グランギニョルらしいケレン味じゃな。」

梨璃・二水「「じゃな？」」

梨璃・二水「「わあっ!？」」

ミリアム「自主練か？感心なことじゃ。」

楓「ミリアムさん。なにをしに？」

ミリアム「CHARMの調整じゃ。寮に入ってから毎日来ておるぞ。」

蓮夜「俺もCHARM？ではないが武器のデータ取りだな。」

梨璃「あ、黒鉄さん。ごきげんよう。」

蓮夜「ああ、ごきげんよう。」

梨璃「お二人ともCHARMをいじれるんですか？」

ミリアム「もちろんじゃ。わしは工廠科じゃからな。」

二水「工廠科に属しながらリリイでもあるミリアム・ヒルデガルド・フォン・グロブウズさんですよ。」

鼻血を出しながら二水は興奮気味で叫ぶ。

梨璃「わっ！二水ちゃん、鼻血が！」

ミリアム「おぬし、大丈夫か？」

蓮夜「昨日からそうだが本当に気をつけるよ？」

二水「はいっ、ご心配なく！昨日から出っぱなしですから！」

蓮夜「いや、それが心配なんだが……」

梨璃「そういえば黒鉄さん、武器のデータ取りと言っていましたか自分で作ったのですか？」

蓮夜「いや、自分だけじゃないな百由……昨日検疫室で会った人  
いただろ？あの人と共同制作だな。」

ミリアム「百由様と知り合いじゃったのか？」

蓮夜「いや、昨日知り合ったばかりだよ。ちよつと俺が使っている  
武器が特殊だな。お互いに情報共有していたら仲良くなった感じだ  
な。」

ミリアム「そうじゃったのか。」

二水「そういえば黒鉄さん、口調お変わりになりましたね？」

蓮夜「ああ、話し方気にしない人多いみたいだから素に戻したんだ  
よ。気になる人がいたらその人には口調を変えるようにしようと思  
つてな？二川さんは大丈夫かな？」

二水「は、はい、大丈夫です。あとわたし二水でいいですよ？」

ミリアム「わしも好きに呼んでもらって構わないぞ。黒鉄様。」

蓮夜「それじゃ二水さんとミリアムさんって呼ばしてもらおうかな  
？あとミリアムさん、俺堅苦しいの苦手だから様付けじゃなく好きに

呼んでくれた方が助かるかな？」

ミリアム「それでは2人を見習って黒鉄さんと呼ばせて貰うのじゃ。」

蓮夜「わかった、それでお願いな。」

ミリアム「そういえばCHARMではないと言っておったがどんなものなのじゃ？」

そう言われたので1本取りだし、

蓮夜「こんな感じだな。」

ミリアム「ふむふむ、簡略式の術式をしようしているようじゃな。それにこれは・・・バインドルーンか!？」

蓮夜「元々使っているのを改良したからデータ取りついでに試しに来たんだよ。」

ミリアム「CHARMは使わんのか?」

蓮夜「いや。使えばするんだがな?ちよつと問題があつてこつちを使っているんだ。今使えるCHARMを百由と一緒に作っているんだがな?」

ミリアム「それは面白そうじゃな。完成したら見せてはくれんか?」

蓮夜「いいぞ。俺も意見とかが欲しいし。」

しばらく会話をした後、剣を振つたりのを斬り裂いたりして性能を確認していく。

ミリアムは梨璃に近づき彼女のCHARMに触れると。

ミリアム「ふむ、マジもまあまあ貯まっておる。なかなか素直なようじゃな。」

梨璃「わかるんですか?」

ミリアム「普段からそばに置くことで、CHARMは持ち主のマジ

を覚えるのじゃ。そうやって、CHARMはリレイにとって身体の一部となる。」

梨璃「へえー。」

二水「わたし達にもそんな日が来るのでしょうか……。」

ミアム「ふむ。とはいえ百合ヶ丘に入れるということは、おぬしやおぬしにだつてきつと何かあるはずじゃ」

梨璃「だいいいですが……。」

ミアム「楓だつてそう思っているはずじゃがな。おぬしらに言っていないということは……ふむ。自身のない者の方が操りやすいから。」

楓「うぐつ……。」

二水がメモを取りながら、

二水「楓さん意外と悪どい、と……。」

楓「ちよつと！人聞きが悪すぎますわ！」

楓が二水に対して文句を言っていると、ミアムが彼女達の前に立ち。

ミアム「CHARMにことをもつと知りたければ工廠科に行つて見てはどうじゃ。百由様なら色々教えてくれるじゃろう。」

そこにデータを撮り終えた彼が合流し、

蓮夜「百由のところに行くのか？」

梨璃「はい、気になることがあります。」

蓮夜「俺も用事があるから一緒について行っていいか？」

梨璃「はい、是非！」

そうして彼女達と工廠科にある百由の部屋へと向かった。

## 第5話

闘技場を後にし彼らは工廠科へと向かった。

ミリアム「ここが工廠科じゃ。」

梨璃「地下にこんな施設があるんですね。」

ミリアム「おい百由様おるか!？」

ミリアムが百由の部屋の扉を開けると、部屋の中から強い光が漏れ出す。

梨璃「わつまぶしい！」

百由「ごきげんよう。ちよつと待って……これからCHARMの硬化処理するところなの。」

百由はアームを操作し熱せられたCHARMのパーツを取りだし別の機械に入れて冷却をしていた。

百由「いらつしやい。梨璃さんと楓さんね。えーとあなたは……。」

二水「二水です。二川 二水！」

百由「よろしく二水さん。今いいところなの。さあ、上手くいってよく。」

そう言うとまたアームを操作し始めパーツを機械から取り出した。

『パキン』

という音がパーツから鳴り、その瞬間百由は膝から崩れ落ちる。

百由「あ……。あーーー。」

顔がどんどんと絶望をしたような表情になっていき、頭を抱えて、

百由「このひと月の努力の結晶がく。」

悲痛な叫びが部屋の中に響いた。

梨璃「なんですか、これ・・・？」

モニターに写っているパーツの表面を見て梨璃は首を傾げる。

百由「CHARMの刃にはマギを制御する術式が刻み込まれているの。」

ミリアム「リリーの身体から流れ込むマギがこの術式によって活性化し、ヒューズを支えるマギをまた断ち切るのじゃ。」

梨璃「ヒューズの、マギ・・・。」

ミリアム「リリーに力を与えるのもマギなら、ヒューズに力を与えるのもまたマギじゃ。ま、道理じやの。おぬしも知っておろう？」

梨璃「はい・・・習いました。」

そのような話をしている時に百由から、

百由「あ、そうだ！蓮夜、あなたこれどうにかできない？」

蓮夜「このヒビのことか？」

百由「そうよ、あなたならあのペン見たいのでどうにかできない？」

蓮夜「ギアなら方法があるけど・・・CHARMに使えるか？」

百由「失敗しても大丈夫だからやってみてくれない？」

蓮夜「わかった・・・ちよつと待ってる道具持って来るから。」

そう言いながら彼は部屋から出ていった。

梨璃「あ、あの黒鉄さんはどちらに？」

百由「蓮夜？自分の部屋よ。」

楓「彼ならこれを直せるかもとはどうしてなのでしょうか？」

百由「それね。彼の武器・・・ギアって言うらしいんだけどCHA RMとは原理は似てはいるんだけど造り自体が全くの別物でね。どうにかできる手段があるかもしれないから聞いてみたのよ。」

扉が開き彼が戻ってきた。

蓮夜「戻ってきたぞ。百由 やつては見るがダメでも文句は言うなよ。」

百由「わかっているわよ。」

彼はパーツが置いてある台へと向かい道具を取り出す。

ペン先端を取り外し針のような物に付け替え、マジ溶液生成機のカバーを開き小さな板状の物を中に入れる。

そうして新たに極細の注射針のようなものが付いたスプレーガンのようなものを取り出した。

生成した溶液をスプレーガンに入れると

蓮夜「これから集中しなくちゃいけないからしばらく話しかけないでくれるか？後で説明するから。」

彼は望遠鏡を覗きながら作業を開始した。

梨璃「あ、あの・・・なにをしているのでしょうか？」

百由「私もよく分からないわ。だけど繊細な作業をするみたいだからアッチへ行つて話をしましょう。」

彼女達は彼が作業しているところから少し離れ会話の続きを始め

た。

ミリアムが置いてあったCHARMの銃身を手に取り梨璃に中を覗くように促す。

ミリアム「こんなのもあるぞ。ほいつ。」

梨璃「はい？」

中を覗き込むとライフリングにルーン文字が浮かび上がっている。

ミリアム「CHARMの銃身じゃ。よく見い、ライフリングにも術式が刻まれておる。弾がここを通る時にマギと共に術式が刻まれるというわけじゃ。」

百由「ヒューズと違って、リレイはCHARMを依代とすることでマギを制御する・・・んだけど。」

百由「そう言いながら彼の方を向き彼の手が止まっていることを確認すると、

百由「蓮夜、それどうにかなりそう？」

蓮夜「ヒビ埋めるのは終わったからあとは書き足すだけだすぐ終わるから少し待っててくれ。」

しばらく待っていると彼が立ち上がり、

蓮夜「終わったぞ。どうにかなったと思うが1回確認頼む。」

百由「わかったわ。」

百由がパーツに触れマギを流す。

そうすると刃の部分が淡く光り。

百由「問題なく動くわね。ありがとう助かったわ。」



蓮夜「どういたしました。」

百由「もう時間出しお昼にしましょうか？ 私は食堂に行くけどあなた達も一緒にどう？」

その言葉に全員同意し彼らは食堂へと向かった。

食堂に着き食事をする中梨璃は百由に自信が夢結とシュツツエンゲルを結びたいことと彼女の雰囲気なぜ変わってしまったのかを調べていることを話す。

百由「しっかし、よりによって夢結とシュツツエンゲルだなんてねー。」

梨璃「はい……でも全然相手してもらえなくて。あの、夢結様が今使っているCHARMは……。」

楓「ブリューナクですわ。」

梨璃「2年前に使っていたのは……？」

百由「ダインスレイフね。」

梨璃「なぜ夢結様はCHARMを持ち替えたんですか？」

百由「……なるほどね。それは本人に聞くしかないでしょうね。」

梨璃「百由様は何かご存じなんですか？」

百由「知っているわ。けど教えない。」

梨璃「なぜですか……？」

百由「本人が望んでいないことを私がベラベラ喋るわけにはいかないでしょう？」

梨璃「あ……。」

百由「リリイは税金も投入される公の存在であるけど、その個人情報は本人がそれを望まなければ、一定期間非公開されるの。」

個人の心理状態が戦力に直結する上に、感じやすい10代の女子ともなれば、まあ仕方ないかもね。」

楓「あのお方、感度高そうには見えませんが。」

百由「感じすぎるのよ。感じすぎて、振り切ってしまった。」

俯きながらそう言葉にしたが、すぐに表情を変えて。

百由「おつと言い過ぎた。あとは本人に聞いて。話してくれるからね。」

梨璃「あ、黒鉄さん。楓さんから聞いたんですけど夢結様とは幼馴染なんですよ？何か知っていることはありませんか？」

蓮夜「知ってるけど俺からも言えないな。理由はさつき百由も言っていたが本人が望んでいないということと、この件について俺が入ってはいけないからだな。」

梨璃「入っては行けないとは、どうしてですか？」

その言葉に彼は顔を顰めながら。

蓮夜「色々複雑な事情があるんだよ……これ以上は言えないかな。」

梨璃「はい……わかりました。」

梨璃が俯いていると楓が。

楓「梨璃さん、どうしてそこまで夢結様にこだわるのですか？」

梨璃「はじめて出会ったときの夢結様と、今の夢結様がまるで別人みたいで……。私、それが不思議で……。知りたいんです。」

楓「夢結様がそれを望んでいなくてもですか？それともご自分なら夢結様を変えられる？そんなのは梨璃さんのエゴではなくて？」

梨璃「それは……そうかもしれないけど……。  
夢結様が胸の内に何をしまっているのか……。  
わたし、知りたいんです。」

楓「はあ。これは当たって砕けるよりほかはなさそうですね。夢結様にケチヨンケチヨンにされてボロ雑巾のようになった梨璃さんに

私が手を差し伸べれば、一丁上がりという寸法ですわ！」

二水「楓さん妄想がダダ漏れです……。」

蓮夜「本人の目の前で言うか？……普通……。」

その後しばらく会話した後彼女達と別れた。

席を立とうとした時、隣にいた百由が、

百由「本当に良かったの？」

蓮夜「何がだ……。」

百由「夢結のことよ……あなたからも少しぐらい言っても良かったんじゃない？」

蓮夜「当事者じゃない俺が言えるわけないだろ……それに俺からは言う訳には行かないからな。」

百由「えっ、今何か言った？」

蓮夜「いいやなんにも。それよりもお前結構食べたな。」

百由「いや、最近ろくに食べてなくてね。かなりお腹空いてたのよ。」

蓮夜「体に悪いから気をつけろよ。」

百由「わかつてはいるんだけどね？つい物事に夢中になっちゃうと悪れちゃうのよ。」

蓮夜「はあ……この話はもういいや。それよりもこれから時間あるか？CHARMについてのしたくてな。」

百由「時間なら大丈夫よ。それならあなたの部屋でやりましょうか。」

蓮夜「そうだな。それじゃ行きますか。」

彼は百由と自身のCHARMのことを相談するため彼女と自分の部屋へと向かった。

彼らは部屋に着き。

百由「そういえばどうやってあのヒビを直したの？後で説明をすると言っていたし聞かせて貰うわよ。」

蓮夜「マジ溶液生成機のごとは少し説明しだろ？アレには液体状に帰る以外に他のルーンを刻んだ銀盤を入れることで他の性質を追加できるんだよ。」

百由「そうなの・・・色々と便利ね。」

蓮夜「だけど追加できる性質は1個までだけだな。まあ、それを利用して溶液に金属の性質を加えたんだよ。それをヒビに流し込んで馴染ませることでヒビ埋めをして固まったところにルーンを書き足した感じだな。」

百由「それだけでできるものなの？」

蓮夜「ああ、今回は文字の間にヒビが入っていただけで少しルーンがかけていただけだったから埋めて書き足すだけ済んだが、これがルーンにまでガッツリと入ってたら無理だったな。」

百由「結構危なかったのね・・・。」

蓮夜「そういうことだ。」

百由「あの道具って余ってない？使ってみたいんだけど。」

蓮夜「前に使ってたのを予備として持つてるからそれならあるぞ。」

百由「それ借りていい？」

蓮夜「いいぞ？てかあげようか？」

百由「本当に！」

蓮夜「ああ、成形機あるから新しく作り直そうと思ってたし、今使っているのを予備にするから。」

そうやって彼が使っていたものと少し形が違うものとUSBメモリーを取りだし百由に渡す。

蓮夜「USBメモリーに使い方入れてあるから後で見てください。」

百由「それは助かるわ。おっと話が逸れていたわね、それでバイン

ドールンを組み合わせても大丈夫そうだし本格的にCHARM制作に取り入れて行きましょう。」

蓮夜「あ、そうだあのデータに目を通したか？」

百由「ええ、よくあそこまでのパターンを調べたわね。四重まであつたわよ？」

蓮夜「五重も作ってみたんだが上手くいかなかったな。だから四重までのパターンをあらかじめ調べたんだよ。」

百由「そういえばあなたのルーンは何だったの？」

蓮夜「1回見た事はあるが多分〈ハルガ〉と〈ユル〉だったな。」

百由「結構やばいやつね・・・2つとも。」

蓮夜「聞いた話だとあれってそんなに関係ないんだろ？」

百由「そうね、レアスキルの傾向ぐらいにしか関係ないはずよ。」

蓮夜「俺のレアスキルがやばいやつだからあんなだったんだろ？」

百由「そうでしょうね。」

蓮夜「このことは今はいいとして、とにかく次はどこを弄るか話さないか？」

百由「それもそうね。耐久性はあれでいいとして次はどうする？」

蓮夜「それならマジの制御系統がいいかな？これが改善出来れば完成系にかなり近づくはずだし。」

百由「マジの制御系統だとこの部分かしら？」

蓮夜「ルーンは〈アンスール〉に〈ニイド〉や〈マン〉とかを合わせたやつでいいか？」

百由「それが1番じゃない。そうするとこことここがいらねえわね。」

改良の案はどんどんと出来上がっていく。

百由「案は纏まったしあとはパーツの準備が出来たら試してみましよう。」

蓮夜「だな、それじゃ今日はここまでとしていつ頃できそう？」

百由「大体5日ぐらいかしら？」

蓮夜「それならそれまでは一旦お預けだな。何か思いついたら話し合うということだ。」

百由「私も今日は帰るはね。おやすみなさい。」

蓮夜「ああ、おやすみ。」

そうして百由は部屋から出て行く。

その後、彼も休むことにした。

## 第6話

彼が朝、食堂に行くと夢結と梨璃が会話をしている姿がとそれを隠れて見ている楓と二水の姿があった。

梨璃「はあく。これでわたし、夢結様とシユツツエンゲルになれたんですね。」

夢結「……。」

梨璃「夢みたい！嘘みたいです！」

夢結「……。」

梨璃「早くわたしも夢結様と一緒に戦えるようにならなくちゃ。あ、でも、わたし初心者すぎて何のレアスキルなのかも分からないですよ、あはは。」

あ、二水ちゃんは『鷹の目』のスキルなんだそうです。高いところから物事を見渡せるって……。

そうだ、夢結様は何のレアスキルを……。」

夢結「ルナティックトランサー……。」

梨璃「え？」

夢結「それが私のスキル……。いえ、レアスキルなんてとても呼べない代物よ。」

2人のことを双眼鏡を使いながら隠れ見っていた楓は、

楓「朝っぱらからお二人で何いちやついてなさいますの……。」

二水「わたしにはどこかぎこちなく見えますけど……。」

楓「……ところでそのメモは？」

二水「お二人のことを週間リリイ新聞の連載記事にするんです。」

楓「あなたもなかなか容赦ないですわね……。」

蓮夜「2人して何やってんだ……。」

???「それ私も興味あるな。あの夢結をたった2日で落とすなんて、びっくりだ。」

楓「そりや梨璃さんですもの。当然ですわ。それとごきげんよう黒鉄さん・・・そして、あなたは？」

???「私は吉村・Thi・梅。2年生だぞ。」

楓「それは失礼しましたわ、梅様。」

蓮夜「申し遅れました。俺は黒鉄 蓮夜と言います。」

梅「よろしくな。蓮夜は同じ2年生だろ？なら敬語はいらぬし梅でいいぞ。」

蓮夜「わかったこれからよろしく梅さん」

梅「さんもいらぬ！」

蓮夜「それじゃ梅でいいかな？」

梅「それでいいぞ。」

蓮夜「それにしても何があつたんだ？2人のことを隠れて見たりして。」

二水「夢結様と梨璃さんがシュツツエンゲルになつたんですよ。」

蓮夜「そうなのか・・・ってマジで！」

二水「本当です。」

蓮夜「昨日のあの感じだとまだ先かと思つたが・・・」

梅「ほんと、あの夢結がな・・・。」

梅は少し嬉しそうな表情になつていた。

数時間後梨璃達に誘われて屋上へ向かうと海岸付近が騒がしくなつていた。

二水「ヒュージです!!」

梨璃「あれが・・・。」

楓「噂の鷹の目ですわね。」

蓮夜「呼ばれたから来たんだけど、どうしたんだ？」

梨璃「あ、黒鉄さん。ヒュージが来たみたいなんですよ。わたした

ちはここから見学するので一緒にどうかと・・・。」

夢結「よく見ておきなさい。」



夢結がそう言った直後轟音と共にミサイルが何本もヒュージへと向かって飛んで行く。

梨璃「わわっ!? な、何!?!」

二水「防衛軍の前段砲撃です。」

ミサイルはヒュージに当たる直前で何かによって遮られ無効化されてしまった。

二水「だけど防衛軍の装備では、ヒュージに有効な打撃を与えることが出来ないんです。」

梨璃「気のせいかな、こっちに向かってませんか?」

夢結「百合ヶ丘女学院はリリイの養成機関であると同時に、ヒュージ迎撃の最前線よ。」

梨璃「そ、そうか、ヒュージの襲来をここに集中させて周りの被害を推せるんですね!」

夢結「そして多くのリリイの集まるここは、ヒュージにとっても見逃せない場所に映るでしょうね。」

二水「アールヴヘイムがヒュージにノインヴェルト戦術を仕掛けます・・・!」

梨璃「あっ・・・。」

前方では学生数名が球体状の光りをCHARMで渡しあいながらヒュージへと向かっていた。

最後の1人と思われる人物がその光りをヒュージへと打ち込む。

梨璃「うわっ! な、なにっ!?!」

楓「レギオン9人のパスで繋いだマギスファイアをヒュージに叩き込んだのですわ。それがノインヴェルト戦術です。」

梨璃「・・・。」

その光りに当たったヒューズは爆発を起こしその姿を消した。

戦闘を見た後彼女達と別れた彼は部屋に戻りギアの治療をしていった。

一通りの完成した頃扉をノックする音が鳴り。

ミリアム「黒鉄さん、ここにおるか？」

ノックをしていたのミリアムさんのようだ。

蓮夜「入っていいぞ。」

そう言うと扉が開き外からミリアムが入って来た。

ミリアム「失礼するの。」

蓮夜「どうしたんだ？」

ミリアム「昨日使っていた道具やギアというものが気になっての。教えてもらおうと思ってきたのじゃが・・・作業の途中じゃったか？」

蓮夜「いいや、いまさつき終わったところだ。それで何が聞きたいんだ？」

ミリアム「百由が言っておった原理は似ているけど造りが違うというところなのじゃが・・・それはどう言ったところなのじゃ？」

蓮夜「ああ、それはな・・・」

それからしばらく説明が続く。

ミリアム「なるほどのう。説明感謝するのじゃ。」

何かを思いついたのか彼女は彼に対して相談をする。

ミリアム「黒鉄さん、相談があるのじゃが。」

蓮夜「どうしたんだ？」

ミリアム「フェイストラランセンデンスを知っておるか？」

蓮夜「確かマジを凝縮させて瞬間的に使うスキルだろ？確か確か使用直後に枯渇状態になってマジ保有量が極端に落ちるヤツだったはずだが。」

ミリアム「そうじゃ、わしのレアスキルがそれなのじゃが難儀しててのう。」

蓮夜「デメリットのほうか？」

ミリアム「そうじゃ、使った瞬間に動けなくなるのでな。そこをどうにかしたいのじゃが何かいい案はないかのう。」

蓮夜「そうだな・・・」

と言いながら成形機を動かすとあるものを加工し始める。

ミリアム「何をしておるんじゃ？」

蓮夜「ちよといいことを思いついてな。それを作っているんだ。」

成形機が停止し輪っか状のものが出てくる。

それにルーンを刻み込みそれをミリアムに渡した。

ミリアム「なんじゃ？これは・・・腕輪かの？」

蓮夜「その通り、ちゃんと機能するか試したいし1回闘技場に行かないか？」

ミリアム「それはいいのじゃがなんなのじゃ・・・これは？」

蓮夜「それは使って見てのお楽しみということだ。」

2人は闘技場へと向かった。

ミリアム「それでわしは何をすればいいのじゃ?」

蓮夜「フェイストランセンデンスを使って見てくれ。」

ミリアム「それはいいのじゃが使ったらわしはぶっ倒れるんじやぞ?」

蓮夜「まあ、やってみたらわかるから。」

彼に言われた通りレアスキルを発動する。

ミリアム「フェイストランセンデンスッ!!」

上に向かって砲撃を放つ。

ミリアム「・・・?」

だがいつもならすぐ来るはずの脱力感がいつまで経っても来ないで、彼女は首をかしでる。

ミリアム「どうして枯渴状態にならないんじや?」

蓮夜「どうやら上手く行ったみたいだな。」

ミリアム「本当にこれは一体何なのじや。」

蓮夜「それはな、簡単に言うとりミッターみたいなものなんだよ。それをつけた状態でスキルを使用すると必要最低限のマジが残るよ。うに制御をするんだ。」

ミリアム「それはすごいとう・・・これなら戦闘中に気にせずスキルを使えるのじや。」

蓮夜「と言っても最低限しか残らないから連発はできないしチャージ時間は変わらないぞ?」

ミリアム「それだけでも大助かりじや!」

腕輪の機能を確認した後2人は彼の部屋へと戻ってきた。

ミリアム「本当に助かったのじゃ、感謝するぞ。」

蓮夜「それは良かった。俺もCHARMについて聞きたいことがあるんだがいいか？」

ミリアム「わしでいいのならいいんじやが、百由様に聞いた方がいいのではないかのう？」

蓮夜「いや百由だけじゃなくて他の意見も聞きたいんだよ。」

ミリアム「そういうところなら全然構わんぞ。」

そこからCHARMについての会話が始まる。

しばらく会話が続き、

蓮夜「そうなるとコアの部分の交換だけで他のCHARMに契約ができるということか？」

ミリアム「いや、コアだけじゃとマギを覚えていても術式自体がコアと馴染まないはずじゃから通常よりは早く契約が完了だけでそれなりの時間がかかるはずじゃ。」

蓮夜「つまりパーツの交換だけなら契約上関係ないがコアとそれをパーツと繋ぐ本体部分を変えた時は再契約が必要ということであるか？」

ミリアム「それであっておるぞ。だからこそCHARMはリリーの体の一部と言われるのじゃ。」

蓮夜「やつぱり使い捨て前提のギアと違ってCHARMは色々複雑だな。」

ミリアム「じゃからまだ第二、三世代型が主流なんじやよ。」

蓮夜「そう考えるとCHARMを生み出した人は本当に天才だな。」

ミリアム「そうじゃな・・・CHARMが開発されなければ人類は絶滅していたじゃろうからな・・・。」

会話をしているうちにしているうちに時間は過ぎて夕方になって

いた。

蓮夜「もうこんな時間か、今日はここまでにしよう。」

ミリアム「そうじやの梨璃達に夕食に誘われているからの。黒鉄さんも一緒にどうかの？」

蓮夜「俺はちよつと用事があるからいいかな。」

ミリアム「それでは今日のことは本当にありがとうなのじゃ。」

蓮夜「ああ、またな。」

そう言うとミリアムは部屋から出て行った。

彼女が帰ってからしばらくし購買部へと向かった。

そこで食材を何点か買い部屋に戻り、キッチンへと向かい調理を開始する。完成したものを紙袋に入れて部屋を出た。

百由の部屋の扉の前に立ち、

蓮夜「おい百由いるか？」

声をかけると、

百由「空いてるから入ってきて。」

彼は扉を開き部屋の中に入る。

そこにはCHARMを組み立て直している百由がいた。

百由「どうしたの？」

蓮夜「お前今日飯食ったのか？」

百由「あ、そういえば忘れてた！」

蓮夜「だと思ったよ……」

ため息を吐きつつ紙袋を百由へ渡す。

百由「これなに？」

蓮夜「お前がどうせ食べてないと思ったから持ってきてるだよ。」

百由「ありがとう、助かるわ。」

蓮夜「それは良かった。」

百由は中身を取り出し食べ始めた。

百由「このサンドイッチってあなたが作ったの？」

蓮夜「ああ、そうだが……口に合わなかったか？」

百由「そうじゃなくて、あなた料理できたんだなくて。」

蓮夜「元々一人暮らしだったから料理ぐらい簡単にできるぞ。」

百由「一人暮らしって中学生の時よね。寮生活とかじゃなくて。」

蓮夜「甲州撤退戦の時に、ここの付近でも被害があっただろ？その時に親が……な。」

百由「……ごめんなさい。」

百由の顔が暗くなり俯く。

蓮夜「大丈夫だ。まあ、そういうことだから一人で暮らしてたんだよ。家とかは無事だったからな。」

百由「……。」

蓮夜「すまん変な話しちまったな。今日は帰るは。」

そう言いながら部屋から出ようとすると、

百由「……待って。」

百由に呼び止められる。

百由「つらくないの?」

蓮夜「そりやつらかったさ、知ったその日はずっと泣き続けたからな・・・だけどな夢結が大事な人を亡くしたって知ってなすぐに連絡を入れてたらあいつすごい思い詰めててな。それをどうにかしないとと思って色々してたら大丈夫になっちゃってな?多分必死すぎてそのことを考えられないうちに慣れちゃったんだと思う・・・。」

百由「あなた強いよね・・・。」

蓮夜「強くないよ、ただ必死だったただけだ。」

百由「それだとしても強いわよあなたは・・・。」

蓮夜「そう言ってもらえると嬉しいよ。」

しばらく無言の時間がすぎ、

百由「この話はもう辞めましょう!あ、そうだ昨日あなたに貰ったあれ試して見たんだけど使いやすいわね。どうやって思いついたの?」

蓮夜「ああ、あれな慣れなら中学の美術の授業で彫刻刀を使った時には金属にこんな感じで刻み込めなかつて思つて作つて見たんだよ。」

話が変わつたことで空気が変わりその後はたわいない会話が続いた。

しばらく経ち彼女がサンドイッチを食べ終わった頃、

百由「ご馳走様でした。」

蓮夜「お粗末さまでした。」

百由「本当にありがとうね。」

蓮夜「大丈夫だ、俺も用事を頼んじまってるしな。忙しい時はメールでもしてくれ、なんか作つて来るから。」



百由「それじゃその時は頼むわね。」

蓮夜「ああ、それじゃまた明日。」

百由「ええ、また明日。」

彼は彼女の部屋から出て自分の部屋に戻る。

日が変わる少し前、ベットに入り。

蓮夜「強い……か……俺は強くない……あの時  
あの人を助けられなかったんだからな……」

そう呟いき意識を手放した。

## 第7話

百由「完成したわね。」

蓮夜「ああ……。」

2人の目の前には1つのCHARMが置いてあった。

百由「基本は普通のCHARMとそこまでは変わらないはずだけど、耐久性とマジの制御能力だけなら既存のCHARMの中でもダントツなはずよ。」

蓮夜「だな、さっきデータを見てみたが制御能力は平均的なCHARMの倍、耐久性に至っては3倍はあったからな。」

百由「これなら使えそう？」

蓮夜「試してみないことには分からないが……多分大丈夫。使った瞬間に即ってことは無いはずだ。」

百由「それなら1回試してみましょう。」

蓮夜「それなら俺は闘技場に行くのは、試すならあそこが一番だしな。」

百由「それなら私もついて行くは、私も今日は暇だし……どれだけ性能が向上したかも気になるしね。」

2人は闘技場へと向かった。

百由「問題なく動いているわね。」

蓮夜「ああ、変形機構も機能してるし使って見た感じ変な違和感もないからな。これなら戦闘でも問題なく使えそうだ。」

百由「やったわね。」

蓮夜「俺一人だったらまだまだ完成してなかったからな、本当にありがとうな。」

百由「それはお互い様よ！私も新しい技術や道具も手に入ったし、

それを色々と試せたからね。これからの研究が捗るは!!」

蓮夜「なんかあつたら言ってくれ可能なことなら手伝うからな。」

百由「その時はそうさせてもらおうわ。遠慮はしないわよ。」

一通りの確認が終わり闘技場を出ようとした時数名の生徒が中に入ってくる。

???「あら?百由あなたがここにいるなんて珍しいわね?あと、あなたは・・・。」

百由「ごきげんよう、天葉。彼のCHARMを作ったね、その性能の確認に来ていたのよ。」

天葉「そうだったの、あつ遅くなったわね。私は天野 天葉よ、よろしくね。あと樟美、あなたも挨拶しなさい。」

樟美「はい、天葉姉様。わたし、江川 樟美と言います。よろしくお願ひします、黒鉄様。」

蓮夜「こちらこそよろしくお願ひします。あと江川さん、俺のことは様付けなくもいいから好きに呼んでくれ。」

樟美「はい、わかりました黒鉄先輩。あとわたしのことは樟美で構いません。」

天葉「私も天葉でいいわよ。」

蓮夜「わかった。これからよろしく、天葉さんに樟美さん。」

天葉「あなたってこれから用事ある?」

蓮夜「いや、特にはないが・・・」

天葉「それなら1回私と模擬戦してみないかしら?」

蓮夜「どうしてだ、俺は初心者なんだが?」

天葉「あなた、学院に来る前からヒュージと戦ってたって言うじゃない。だからCHARM無しでヒュージを倒せるあなたがどれくらい強いのが気になってね?それに、CHARMのテストも相手がい方がいいいデータも取れるでしょう?」

蓮夜「そうだな・・・それならよろしく頼むよ。」

天葉「それじゃ始めましょうか・・・ごめん樟美、少し待っててく

れない?」

樟美「はい、大丈夫です天葉姉様。」

百由と樟美はその場から離れ、2人は少し距離を開けてお互いにCHARMを向け合う。

天葉「やあー」

天葉はCHARMを振り上げながらこちらに迫る。

振り下ろされたCHARMを刀身部分の腹で滑らせるようにいなし体を回しながら横に薙ぐ。

その斬撃を彼女はバックステップで躲し距離をとりCHARMを射撃形態に切り替えながら撃つ。

彼はそれをサイドステップで躲しこちらも射撃形態に切り替え撃ち返す。

それをCHARMで防ぎながら接近してくる彼女に対してこちらも近づきながら突きを放つ。

それを体を捻じるように躲しその時の回転を利用して斬り掛かる。彼はすぐさまCHARMを手元に戻しその斬撃を防ぎ罅迫り合いに持ち込む。

天葉「本当に強いじゃない!」

蓮夜「そつちもなっ・・・!」

お互いのCHARMを弾きその勢いを利用して再び距離をとる。

次に仕掛けたのは彼で彼はCHARMを射撃形態に射撃しながら接近、相手最小限の動きで回避しながらは横薙の斬撃で対応するが、それを前転宙返りの要領で回避をしながら接近形態に切り替えたCHARMを叩きつけるように攻撃をする。

それを転がるように回避し突きを放つが、CHARMを盾にして防御、彼はその勢いで横に弾かれる。

体制を整え着地する彼に追撃として射撃、それを弾き飛ばし2人はお互いに接近、そこからお互いにCHARMをぶつけ合う。

相手のCHARMを防ぎ、躲し、逸らし相手に反撃をくわえ合う。彼女の大振りな一撃を防ぎそのまま力任せに弾いて距離をとる。

蓮夜「……………」

天葉「……………」

数瞬お互いに動かず相手の様子を探る。

体制を低くし接近をしようとしたその時は、

百由「ちよつと何マジでやっているのよ!!」

2人の動きが止まり、声の聞こえ方向を向くと、そこには少し怒ったような顔の百由と終わったような顔をした樟美がいた。

百由「あなた達CHARMを壊す気なの! あんなに無茶苦茶に使って……特に蓮夜! あなたのはデータとってる最中のやつよ! まだどれだけやれるか分からないのに無理な使い方して、壊れた時直すの大変なのよ!」

怒濤の勢いで文句を言ってくる百由に、

蓮夜「すまん。なかなかに使いやすくてついな……………」

天葉「こっちも彼が強かったからつい勢いのままやっちゃった……………」

百由「だからつてもう少し気をつけて扱いなさいよ。天葉もよくCHARMを壊すんだから。なんで私の知り合いはCHARMを無茶苦茶に扱って壊す人が多いのかしら……………」

樟美「あはは……………」

百由の言葉に言い返せず、黙っていると。

百由「今回は耐久性の確認が主だったからいいけど今度から気をつけなさいよ?」

蓮夜・天葉「はいっ、すいませんでした。」

百由の言葉に頭を下げながら謝る。

天葉「それにしても本当に強かったわね。また今度模擬戦しましょう。あと私の百由みたいにさんはいらないわ。」

蓮夜「ああ、また今度やろう。けどは百由に怒られないようにな。」

天葉「ええ、そうね。」

その後、別れを告げ自分の部屋に戻って来た。

蓮夜「まあ、さつきは結構無茶な使い方しちまったが耐久性とかも問題なさそうだな。」

百由「ええ、そうね・・・少なくとも通常の戦闘では大丈夫だと思うけど油断は禁物ね。ノインヴェルトみたいなCHARMの消耗が激しい技を使うと耐えられないかもしれないから。」

蓮夜「だとすると、緊急時にギアは持っておいた方が良さそうだな。」

百由「なくてもどうになるからってできるだけ無茶な扱いしないでよ。」

蓮夜「わかってる。けどやばい時は迷わずに使いからな?」

百由「それは構わないわ。CHARMよりも人の命の方が大事なものの。」

会話をしていると百由が、

百由「あなたは梨璃さんが夢結とシユツツエンゲルを結んだのは知ってる？」

蓮夜「ああ、そういえば楓達がそう話していたし、この前も一緒にいたな。」

百由「ここ数日、梨璃さんのことを鍛えているらしいんだけど、結構無茶させているらしいのよね。」

蓮夜「何やってんだあいつ・・・闘技場にいるのか？」

百由「今の時間帯ならいると思うけど・・・。」

蓮夜「わかった、それじゃ俺ちよつと行ってくる。」

百由「ええ、私は部屋に帰るわね。」

その後、彼女と別れ闘技場へと向かった。

闘技場に着くと夢結と梨璃が向き合っておりそれを見ている楓達の姿があった。

蓮夜「ごきげんよう、あいつらは訓練か？」

楓「ごきげんよう、黒鉄さん。そうなのですが・・・。」

夢結が攻撃を続けそれを梨璃が防いでいた。

二水「この訓練が始まってもう1週間なんです・・・。」

楓「こんなの訓練じゃありませんわ。」

確かに一方的な状況で訓練と呼べるかは微妙なものである。

それがしばらく続き、梨璃が大きく弾かれるがすぐに体制を立て直す。

梨璃「やった、やりました夢結様！」

梨璃が喜んでいるところに夢結が攻撃を加えるが、梨璃の周りにマギが集まりCHARM同士が接触した瞬間に夢結が弾かれ驚いていた。

梅「おっ！」

ミアム「夢結様がステップを崩したとな！」

楓「ようやくマギが入りましたわね。」

すると夢結がCHARMを下げて、

夢結「今日はこのくらいに……。」

『ゴーン、ゴーン』

初日に聞いた鐘の音になる。

それに梨璃が驚いていると、

夢結「行くわよ。」

梨璃「はい。……え？どこへ……？」

夢結「今日の当番に私たちもはいつているでしょう？」

梨璃「あ……！はい！」

夢結「その前に……。」

夢結は梨璃を連れてどこかに行ってしまう。

楓「私たちも向かいますよか。」

二水「はい！そうですね！」

蓮夜「そういえば俺も今日当番だったわ。」

楓「それでは黒鉄さんも一緒に向かいませんか？」

蓮夜「そうするかな。」



そうして彼らは戦場へと向かった。

## 第8話

戦場で待機していると後ろから梨璃と夢結が来た。

楓「上陸するまではまだ少し余裕がありそうですね。」

蓮夜「みたいだなまだかなり遠いようだし。」

梨璃「あれ、楓さんに黒鉄さん、2人も出動なの？」

楓「今回はまだレギオンに所属していないフリーランスのリリイが集められていますわね。この時期にはよくある光景ですわ。」

梨璃「じゃあ、二水ちゃんも？」

楓「あの方は後方で見学ですわ。実戦経験ありませんもの。」

後方を向くと学院の屋上に人影があるためあれが二水なのだろう。

楓「初陣は梨璃と黒鉄さんだけですわね。」

蓮夜「まあ、2年で初陣って言うのもおかしいけどな？梨璃さん、お互いに頑張ろうな。」

梨璃「は、はい。がんばりま……。」

梨璃自信ありげに言おうとするが、

夢結「あなたもここまでよ。」

梨璃・楓「……え？」

蓮夜「……。」

夢結「足でまといよ。ここで見ていなさい。」

梨璃「夢結様……。」

楓「来いと言ったり待てと言ったり……。」

蓮夜「おい夢結、さすがにそれはないんじゃないか……。」

夢結「あなたには関係ないわ。」

そう言いながら夢結は、ヒュージへと向かって行った。

しばらくするとヒュージの姿がはっきり見えるまでに近づいて来た。

楓「いつにもましていびつな形のヒュージですこと。」

蓮夜「なんだかあのトゲみたいなところに違和感があるな？」

ヒュージが海面から飛び上がる。

楓「飛んだ!？」

ヒュージの着地しようとしている場所に夢結が突撃し攻撃を開始した。

百由「ふーん。レストアね・・・。」

ミリアム「最近は出現率が上がっていると聞くのう。」

その声の方向を向くとそこにはミリアムとその隣で座っている百由がいた。

梨璃「わ、百由様!・・・とミリアムさん。どうしてここに?れすとあ・・・ってなんですか・・・?」

百由「工場科とはいえ、私たちもこう見えてリリイなの。結構戦えるのよ。」

蓮夜「だから工場科所属の俺もここにいるんだけどな。」

ミリアム「ワシと百由様は、今日は当番と違うがの。」

蓮夜「それじゃなんで来たんだ。」

百由「あなたが出撃するからね。そのCHARMのデータを取るためよ。あなたのそれはある意味で新型なんだから実戦データが欲しかったのよ。」

楓「新型?・・・普通のテイルフィングに見えますか?」

百由「新型と言うよりも新技術を取り入れた改造型と言った方が良かったかしらね。彼は少し特殊でね普通のCHARMだどろくに扱えないのよ。」

楓「そうだったのですか……入学式の日CHARMを使わなかったのはそのためですね。」

蓮夜「ああ、そうだな。やっと今日完成したから持つてきた感じだ。」

百由「と、話が逸れたわね。で、損傷を受けながらも生き残ったヒュージが、ネストに戻って修復された個体。」

それを私たちはレストアード……レストアと呼んでるの。何度かの戦闘を生き延びた手合いだから手ごわいわよ。」

梨璃「はあ……。」

そう話している間も夢結は手を緩めずヒュージへと攻撃を与えている。

梨璃「すごい、夢結様……。」

ミアム「じゃがちよつと危なっかしいの。」

蓮夜「そうだな、突っ込みすぎだ。」

百由「なまじテクニクが抜群だから、突っ込みすぎるのよね。」

夢結はCHARMでヒュージのトゲの部分に攻撃を加えるがなにか硬いものにぶつかり弾かれる。

その部分を確認すると何かが光っていた。

夢結「あれは……!?!」

それに気を取られているうちにヒュージが飛ばしてきたミサイルのような物が接近、どうにか防ぐがそれは爆発を起こしそれに吹き飛ばされて地面を転がる。

庇うように梅が前が出る。

梅「そろそろ引け、夢結。」

だが彼女の言葉を無視して夢結はヒュージへと接近する。

そしてミサイルのようなものを刀身で受け止めCHARMをそれごとヒュージに向けて叩きつけた。

そうするとヒュージの外殻が割れその中から姿を表したものは、

ヒュージに突き刺さっているおびただしい数のCHARMだった。

??????  
「CHARMが……。」  
「え……。」

楓「あれって……。」

蓮夜「嘘だろ……。」

梅「こいつ……どれだけのリリイを……。」

ミリアム「マジか……。」

梨璃「ど……どういうことですか……!?!」

百由「CHARMはリリイにとって身体の一部。それを手放すとしたら……。」

突如夢結が胸を抑えて苦しみ出す。

梅「もういい!!下がれ夢結。」

梅が夢結を下がらせようとするが振り向いた彼女の眼は紅く輝き出し。

梅「あっ……!?!」

黒かった髪が真っ白に染まり始める。

夢結「ううっ……。」

髪が完全に白くなり、

夢結「あっ……。」

蓮夜「夢結!!」

夢結「うああああああああっ!!」

悲鳴のような咆哮を上げながらヒュージへと向かって飛び出した。  
それに続いて彼も彼女の元へと向かう。

??? 「夢結様!」

??? 「待って雨嘉さん。」

雨嘉「え?」

??? 「あれは……。」

楓「ルナティックトランサー……。」

百由「夢結自身が封印したスキルよ。」

ミリアム「それがなんでまた……?」

百由「主を失ったCHARMの群れが、夢結を思い起こさせたの  
ね……。」

梨璃「それって……。」

百由「……夢結は、中等部時代に自分のシュッツエンゲルを亡く  
しているの。」

梨璃「あ……。」

百由「その時にルナティックトランサーを発動していたことから、  
夢結に疑いがかけられたわ。」

梨璃「そんな・・・。」

百由「実際、遺体には、夢結のCHARMで付いた刀傷もあったと言われているわ。」

結局証拠不十分で疑いは晴れたけど、夢結自身、記憶があいまいな状態で・・・それからずっと自分を苛み続けているの」

梨璃はその話を聞き何かを決心したのか、

梨璃「わたし、行ってきます・・・！」

百由「ダメ！今の彼女は危険よ！」

梨璃「わたし夢結様のこと、少しだけわかった気がします！」

百由「それ答えになっていわよ!？」

百由言葉を聞く前に梨璃は飛び出して行った。

蓮夜「おい、夢結!!」

夢結に対して呼びかけるが全く反応がなく、

蓮夜「・・・ッ！これがルナティックトランサーか!!」

夢結に向かって接近すると彼女はCHARMを振り上げ彼に攻撃を仕掛ける。

彼はそれを受け流しさらに接近し彼女のCHARMを持つ手を掴み動きを止めようとするが上空からミサイルが接近してきていたため彼女のCHARMに攻撃をし距離を離してから自身もバックステップをすることでミサイルの範囲から逃れる。

ミサイルの爆風で発生した煙の中から彼女が出てきて彼のことを

切り裂こうとする。

それを防ぎその勢いを利用して後ろに下がりながら左手を懐に入れて数本の杭のようなものを取り出し上へ投げる。

杭は一瞬空中で停止し向きを変え彼の前辺りに飛んでいき地面に突き刺さる。

それを気にすることなく接近してくるが杭の上を通り過ぎようとしたその時、杭の上部が縄状に伸び彼女を拘束しようとして襲いかかる。

彼女は体を捻って避けるが左腕だけが捕まり一瞬動きが止まるがすぐさまCHARMで縄を切断し拘束から抜け出す。

その隙を使って彼女に最接近、そのまま彼女を抑えようとしたその時、

梨璃「夢結様アアアアア!!」

振り返ると梨璃がこちらに向かって来ており、ヒューズが彼女に対してミサイルを撃つがそれを体を捻じるように躲しながらこちらに向かっていた。

それに気を取られているうちに夢結が梨璃に向かって行く。

それに気づいた彼も彼女を追う。

夢結が梨璃に攻撃をする直前に彼は一気に加速、ギリギリ間に合い二人の間にCHARMを滑り込ませた。

それにより夢結の攻撃の行き良いは弱まり梨璃も防御に成功、CHARM同士が接触したその時。

梨璃「す、すいません・・・!?」

夢結「見ないで・・・。」

強い光とともに微かだが夢結は言葉を放った。

弾かれて吹き飛ぶ梨璃を即座に抱えて近くの建物の屋上に飛び乗ると楓と梅が近寄って来た。



楓「梨璃さん！何をなさってますの!？」

梅「バカかお前は！」

梨璃「・・・わたし、今夢結様を感じました。」

蓮夜「・・・！」

楓「何を仰いますの!？」

百由「マジだわ。」

声の間こえ方向を向くと、百由とミリアムがこちらに近づいて来ていた。

百由「CHARMを通じて梨璃さんのマジと夢結のマジが触れ合っ  
て・・・。」

楓「そんなCHARMの使い方、聞いたことありませんわ。」

ミリアム「じゃが、あり得るの・・・。」

梨璃「わたし、前に夢結様に助けてもらったことがあるんです。今  
度はわたしが夢結様を助けなくちゃ！」

ミリアム「正気かおぬし!？」

蓮夜「・・・俺に考えがある・・・。」

梨璃「本当ですか!？」

蓮夜「ああ、百由には俺のレアスキルのこと話したよな？」

百由「ええ、あのインチキスキルのことでしょう？」

蓮夜「あれの効果覚えてるか？」

百由「えっ?・・・確か。」

百由は考え込むような顔をしたがすぐに意味がわかったようで、

百由「あつ、アレね。あれならなんとかなるかも!!あれの条件とか  
は?。」

蓮夜「目を合わせること。」

梨璃「すいません、お2人で何の事を話しているのですか?。」

蓮夜「あ、悪い。詳しくは後で話すがとにかく俺が隙を作らせるから梨璃さんはその隙に彼女のCHARMに向かって自分のCHARMをぶつけてくれ。その間他のみんなにはヒュージの攻撃を防いで欲しいのだけど、頼めるか。」

梨璃「わたしからもお願いします。」

楓「あとでお背中流させていただきますわよ！梨璃さん!!」

梅「しよーがないなー。」

2人が同意したため梨璃と共に夢結の元へと向かう。

???「参りますか？雨嘉さん。」

雨嘉「う、うん……。」

百由「私もCHARMもつてくればよかったかな？」

ミリアム「うううう……わしもいけばいいんじゃないだろうかあつ！」

彼がまた夢結へと接近すると彼女は彼に攻撃を仕掛ける。

それを受け止め、強く弾くことで彼女の両腕を上へ上げさせる。

そのまま彼女の両肩を掴みこちらに顔を向けさせた。

そして目があったその時。

夢結「……ううっ！」

突如夢結は頭を抱えだし、

蓮夜「梨璃さん！今だ！」

そう叫ぶと梨璃が夢結に向かって近づき。

梨璃「夢結様！わたしに身だしなみはいつでもきちんとしなさいって言っただじやないですか！夢結様、わたしを見てください。」

夢結が梨璃に向かってCHARMを向ける。  
そしてCHARM同士が接触した時先程のものと似た光が発生した。その光は球体状になり光が強くなっていく。

ミリアム「あれは……。」

楓「マギスファイアですわ……！」

夢結「ガツカリしたでしょう、梨璃？これが私よ……。憎しみに飲まれた、醜くあさましいただのバケモノ……!!」

梨璃「それでも、夢結様がわたしのお姉様です!!」

夢結「……ッ!!」

梨璃「夢結様!!」

梨璃はCHARMを手放し夢結に抱き着く。

夢結は梨璃を抱き留める。真っ白に染まっていた髪は元の黒色に戻り彼女の目から涙が流れていた。

夢結「梨璃……!!」

そこにヒュージが腕を振り下ろして来るが、

蓮夜「やらせねえよ!!」

彼が複数のギアを投擲し爆発、ヒュージの腕を吹き飛ばす。

夢結「跳ぶわよ、梨璃。」

梨璃「……はい！お姉様！」

2人の周りにマギが集まりそのマギが彼女達を乗せて上空へと登る。

梨璃「・・・わたしたち、マジに乗ってる・・・！」

夢結「梨璃、行くわよ、一緒に・・・。」

梨璃「はい・・・！」

梨璃・夢結「やあああああつつつ!!」

上空から眩い光とともに2人の攻撃がヒュージに炸裂する。

それによりヒュージは真つ二つになり完全に沈黙した。

梅「やったな・・・夢結・・・。」

蓮夜「・・・よかつたな・・・夢結・・・大切な人が見つかった。」

こうして梨璃達の初陣は幕を閉じた。

数時間後夢結と梨璃は百合ヶ丘にあるお墓に来ていた。

夢結「ソメイヨシノが花を咲かせるには、冬の寒さが必要な。昔は春の訪れと共に咲いて季節の変わり目を告げたというけれど、冬と春との境が曖昧になった今は、いつ咲いたらいいか戸惑っているよね。」

梨璃「・・・？」

夢結は握っていたペンダントを開き中の写真を梨璃に見せる。

梨璃「この方が、夢結様のシユツツエンゲル・・・。」

夢結「そう・・・。わたしの、お姉様・・・。」

梨璃「川添・・・美鈴様。」

その後梨璃と別れた夢結はとある場所に向かっていた。

目的地である部屋の前に着きノックをしようとするが手が止まってしまう。

しばらく悩んだ末、扉をノックする。  
数秒後扉が開きそこに居たのは、

蓮夜「……夢結。」

夢結「……。」

蓮夜「とにかく中に入りな。」

彼の後に続き彼の部屋へと入る。

蓮夜「ここに座っていてくれ、お茶持ってくるから。」

そう言いながら彼は奥の扉を開けて中に入っていく。

それを見送ってから彼女は彼の進めたとおりに椅子に座って待っていることにした。

しばらくすると彼がトレーを持って戻て来た。

その上には2つのポットとティーカップ、クッキーがのった小さな皿が乗っておりそれを彼女が座っている席に置き自分は反対側に置いてある椅子に座る。

ポットに入っている紅茶をティーカップに注ぎ彼女に渡し、もう1つのポットを手に取りそれを自分のティーカップに注ぐ。そちらの中身はコーヒーのようだ。

蓮夜「……夢結。」

夢結「……。」

蓮夜「……どうしたんだ？」

夢結「……。」

蓮夜「……。」

しばらく無言の時間が過ぎ。

夢結「・・・ごめんなさい。あなたには迷惑をかけていたわね。」

蓮夜「別に迷惑だと思ってるないさ。」

夢結「だけど・・・あなたが私のことを心配してしてくれたのに私はあなたを遠ざけて・・・。」

蓮夜「・・・。」

夢結「両親を亡くしてつらかったはずなのに・・・あなたはずっと私のことを心配して励まそうとしてくれていたのに・・・私は自分のことばかりで・・・。」

蓮夜「普通そうだろう。つらいことがあると周りが見えなくなる。そんなの人間なんだから当たり前だ。」

夢結「それなら・・・なぜあなたはそうならなかったの？」

蓮夜「なつてたぞ・・・。」

夢結「それならなぜ私のことを・・・。」

蓮夜「逆に余裕がなかったからだよ・・・。俺が本当の意味で心を許せたのは両親と夢結・・・お前だけだったんだ。だから両親が居なくなってお前しかいなかったから・・・絶対にお前だけは守らないと思うてな。そうしないと自分自身がおかしくなるから・・・だから俺はお前が思っているようなできた人間じゃないんだよ。自分の為だけに行動する自己中心的な人間なんだよ・・・。」

夢結「・・・。」

蓮夜「だから気にするな・・・。」

夢結「それならヒューズを倒していたのは・・・。」

蓮夜「自分でもよく分からない・・・。敵討ちなのか憎しみか・・・。」

夢結「そうなの・・・。」

蓮夜「夢結・・・。」

夢結「何かしら・・・。」

蓮夜「自分自身のことをどう思ってる？」

夢結「今まで、触れたものを全て壊してしまうバケモノだと思っ  
いたわ・・・だけど。」

蓮夜「だけど？」

夢結「少しなら守れるものもあるのではないかと思ひ始めたわ。」

蓮夜「それは梨璃さんのおかげか？」

夢結「多分……。」

蓮夜「よかったな……いい子と出会えて。」

夢結「ええ、そうね。」

蓮夜「大事にしてやれよ。」

夢結「もちろん、私がお姉様にして持ったように、私も梨璃を支えてあげようと思っているわ。」

蓮夜「そっか……頑張れよ。」

夢結「ええ……。」

夢結「本当にありがとう。私を支えていてくれて。」

蓮夜「……ッ！」

その時彼女は微笑んでいた。

その表情は昔の記憶に残っている笑顔の夢結と重なった。

蓮夜「そう思うんならそんなに暗い顔しないでくれ。」

夢結「ええ、そうね。」

そしていつもの表情に戻った夢結は、紅茶を一口飲み。

夢結「あら？美味しいわね。」

蓮夜「それはよかった。」

夢結「確かあなた紅茶飲めなかったはずよね？」

蓮夜「今も紅茶は無理だぞ？」

夢結「それならどうして美味しく淹れられるのかしら？」

蓮夜「それは色々な情報を調べたからな。コーヒー程じゃないが紅茶もある程度の味のものは淹れられる自身はあるぞ！それとその

クッキーはどうだ？」

夢結「この紅茶にあつてとても美味しいわよ……まさか。」

蓮夜「そのクッキーも俺が作ったんだが。」

夢結「本当にあなた器用ね。」

蓮夜「昔からお菓子作りは俺の趣味の1つだしな。」

夢結「この様子だとかかなり腕が上がっていきそうね。」

蓮夜「それは今度のお楽しみ。」

たわいない会話が続き時間はあつという間に過ぎていった。

蓮夜「もうこんな時間だな。」

夢結「かなり遅くまで話していたわね。そろそろ帰ろうかしら。」

蓮夜「もう遅いし送って行くよ。」

夢結「お願いするわ。」

そして彼は彼女を寮まで送ることにした。

蓮夜「着いたな。」

夢結「ええ、今日は本当にありがとう。」

蓮夜「気にすんなって、それじゃおやすみな。」

夢結「ええ、おやすみなさい。」

夢結が寮に入ったのを確認して彼は自分の部屋へと戻る。

部屋に戻った彼はベットのの上に横になり、

蓮夜「やっとあいつ前向いて進み始めましたよ……姐さん。」  
彼は眠りに着いた。



## 第9話

次の日の朝、夢結と梨璃は食堂にいた。

梨璃「えへへ。」

夢結「梨璃。あなた、そろそろ講義でしよう？予習は？」

梨璃「わかつているんですけど、今はこうしてお姉様のお顔を見て  
いられるのが幸せで幸せで・・・はああく。」

梨璃の顔が完全に緩みきっており、

夢結（ダメだわこの子完全にたるみきってる・・・まさかシュツツ  
エンゲルになったとたんここまでゆるむとは・・・うかつだった  
わ・・・。）

夢結が悩んでいるとそこに、

蓮夜「2人ともごきげんようって梨璃さんどうしたんだ？」

彼がやってくる。

夢結もそちらを見るとなんととも言えない表情をしているので彼も  
同じ考えなのだろうとすぐにわかった。

梨璃「黒鉄さんごきげんよう。お姉様とシュツツエンゲルになれて  
そうしてお顔を見ていられてそれが幸せでして・・・はああく。」

蓮夜「そうなのか・・・それはよかったかな？」

梨璃「はい。」

蓮夜「それなら夢結に恥をかかせないためにもしっかりしないと  
な。」

その言葉に梨璃はハツとして、

梨璃「そ、そうですね！お姉様のためにもわたしもすっかりしな  
いと!!」

さっきの緩みきった表情が消えていつもの表情に戻た。

夢結も少し安心したのかホツと息を吐く。

がその時、

「あら、ごきげんよう。」

「ごきげんよう、ユリさん。」

3年生の田村 那岐とロザリンデ・フリーデグンデ・v・オットー  
が挨拶をした。だが自分の名前や梨璃ではなくユリと読んでおり、誰  
のことを言っているのか困惑する。

梨璃「あ、あはは・・・ごきげんよう・・・。」

夢結「はてユリさん・・・？誰かと間違えたのかしら。」

梨璃「あ、それカップルネームです。」

夢結「カップルネーム？」

そうすると梨璃が掲示板のところまで引っ張って行き一枚の新聞  
を見せてくる。

梨璃「これです。週刊リリイ新聞の号外です。」

そこには『異色のシユツツエンゲル誕生!』と大きく書かれた記事  
があり、

梨璃「ほら、横に並べると、ユ・リって読めるんですよ。」

彼女は暗い雰囲気を出しながら俯き始める。

梨璃「あはは。やだなあ、ここまですることないのに二水ちゃんつてば……。」

「あら本物ですわよ。」

「まあ、このおふたりが!？」

「ユリ様ですわね。」

「ユリ様ね。」

「ユリ様ですわね。」

????????????

周りがそのように言いながら騒ぎ始める。

彼女は小刻みに震えだし、気のせいか黒色の髪の色が薄れ白くなり始める。

蓮夜「おいおい……嘘だろ？」

彼女の怒りが爆発した。

夢結「……!」

梨璃「お、お姉様あ!？」

蓮夜「やっぱりか!ちくしょう!？」

夢結を何とか落ち着かせることに成功した彼らは元の席に戻って来ていた。

夢結「梨璃……あなたにお願いがあります。」

梨璃「はあい、何なりと!」

夢結「レギオンを作りなさい。」

梨璃「分かりました！え……レギオン……。つてなんでしたっけ？」

二水「あいたっ！」

蓮夜「はあく」

いつの間にかいた二水がズッコケ、彼は頭を抱えながら大きなため息を吐く。

梨璃「二水ちゃん」

二水「あつ。ご、ごきげんよう。あはは……。」

夢結「二水さん、お願いします。」

二水「はっはい！レギオンとは、基本的に9人ひと組で構成されるリリーの戦闘単位のことです。」

夢結「ところで二水さん。」

二水「はっはい!？」

夢結は怖い雰囲気を出しながら、二水の方を向き。

夢結「お祝い、ありがとうございます。」

二水「ど……どういたしまして……。」

梨璃「けど、どうしてわたしがレギオンを……?」

夢結「あなたは最近たるんでいるから、少しリイらしいことをしてみるといいでしょう。」

梨璃「リイらしい……?……はあ。」

梨璃は行き良いよく立ち上がり。

梨璃「分かりましたお姉様！わたし精一杯頑張ります！」

夢結（正直、梨璃にメンバーを集められるとは思わなければ、時には失敗もよい経験となるでしょう……。）

梨璃「なんたつてお姉様のレギオンを作るんですから!!」

夢結「・・・ツ!？」

蓮夜「夢結大丈夫か？」

彼女は、少し吹き出す。

二水「わたしもお手伝いしますね!」

梨璃「ありがとう。頑張るよ!!」

二水「ではさつそく勧誘です!」

梨璃「ま、待って二水ちゃん!」

2人はすぐさま飛び出して行ってしまった。

夢結「いえ、そういう意味では・・・。」

蓮夜「行つちまったな・・・。」

夢結「ええ、なんでこうなってしまったのかしら・・・。」

蓮夜「それは梨璃さんだからじゃないか？」

その後しばらく無言の時間が過ぎ。

夢結「あなたはレギオンには入らないの?」

蓮夜「俺?・・・俺は今のところは考えてないかな?だけど・・・。」

夢結「どうしたの?」

蓮夜「梨璃さんがレギオンメンバーを集められたらそこに入ってみるのも面白いかと思つてな?」

夢結「・・・どうしてかしら・・・。」

蓮夜「そりや、彼女が集めたメンバーだぞ。面白そうな人達が集まりそうじゃん。」

夢結「あなたがいいなら別にいいけど。」

蓮夜「それじゃその時はよろしく頼むな。」

夢結「わかつたわ。」

蓮夜「それじゃ俺は講義があるから。」  
夢結「ええ、」

そうして彼女と別れ彼は講義があるためその場を後にした。

講義が終わり部屋へと戻ろうとしていると、

??? 「にやにやにやくこんなところで何してるにやあ？」

大きな音とともにそのような声が聞こえた。

気になったので声の方を見てみると、

??? 「迷子になったかにやあ？お腹すいてないかにやあ？猫缶あるから一緒にどうかにやあ？」

そこには1人の生徒が猫に向かって話しかけている姿があった。

蓮夜（大丈夫か・・・あれ？・・・てか、猫缶一緒につてお前も食べるのかい!!）

やな予感がしたためすぐにその場から離れる。  
すると後ろから、

梨璃「どうしたの二水ちゃん？あ、鶴紗さん、また会った。」

二水「どうぞごゆっくり!!」

梨璃「え？な、なに？!」

2人の声が聞こえたため彼女達も見ていたのだろう。

蓮夜（あいつら、大丈夫なのか？）

少し不安になりながら彼は部屋へと戻っていった。

次の日、突然夢結からメールが送られてきた。  
それを見てみると、

夢結『これから、訓練所のビル地帯に来て欲しいのだけど。構わな  
いかしら?』

そこにはそう書いてあり、彼は特に用事もないのですぐに指定され  
た場所へと向かった。

蓮夜「それでなんなんだ、こんなところに呼び出して?」  
夢結「梨璃にお願いされてこれから立会人をする事になってね。  
それであなたには、もう片方に何かしらなつた時にフォローして欲し  
いのよ。」

蓮夜「もう片方?・・・って言うことは2人なのか?」

夢結「ええ、それもかなり距離が離れているからわたしひとりじゃ  
カバーが難しいの。お願い出来るかしら?」

蓮夜「それぐらい問題ないぞ?それで他になんかないか?」

夢結「助かるわ。それとあなたが来ることは誰にも話していないか  
ら隠れていて貰えると助かるわね。」

蓮夜「了解。それじゃ俺も準備するは。」

『ガオン』

『ガキン』

しばらく経つと銃声と何かを弾く音が鳴り響く。

何なのかを確認するために、音の方向を確認すると、射撃形態のC

H A R Mを構えて遠距離射撃をする生徒とその弾丸を弾く生徒の姿があつた。

その近くに梨璃と夢結がそれぞれいるため夢結が言っていたことがこれであると理解する。

2発、3発と弾丸が生徒に向かって飛んでいくが、それを全て弾いている。

蓮夜「凄いな・・・弾が全部同じ場所に飛んでる。」

その後も射撃が続き9発目が終わったその時、弾丸を弾いていた生徒がC H A R Mを持ち替えた。

『ガッン』

弾丸を射撃していた生徒へと弾き返した。

蓮夜「・・・!？」

彼はすぐさま手を懐に入れてギアを使い彼女を守ろうとするが、彼女がC H A R Mを近接形態に切り替え防御をしようとしていたので手を止める。

その後、彼女達が集まったので彼もそこへと向かう。

蓮夜「もう終わったのか？」

夢結「ええ、もう大丈夫よ。」

梨璃「あれ？黒鉄さんいらしたんですか！」

蓮夜「ああ、夢結に頼まれてな。なんかあつた時のために待機してたんだよ。おっと、2人は初めましてだな。俺、黒鉄 蓮夜って言います。」



??? 「私、郭 神琳と申します。以後お見知りおきを、黒鉄様。」

雨嘉「わ、わたし、王 雨嘉と言います。よろしくお願いします、黒鉄様。」

蓮夜「こちらこそよろしく頼むよ郭さん、王さん。あと俺のことは様付けしなくていいから好きに呼んでくれ。」

神琳「分かりました。それで黒鉄さんと呼ばせていただきます。それとこちらでも神琳で構いません。」

雨嘉「分かりました黒鉄さん。それとわたしも雨嘉で構いません。」

蓮夜「わかった。それじゃ神琳さん、雨嘉さん改めてよろしくな。」

神琳・雨嘉「はい。」

蓮夜「そうだ、雨嘉さん凄い射撃の腕だったな。全て同じ場所に飛ばすなんて。」

雨嘉「あ、ありがとうございます。」

夢結「やはり、わかっていたのね。」

蓮夜「目には自信があるからな。」

蓮夜「梨璃さん、レギオンの方はどうなったんだ？」

梨璃「あと2人です。あ、そうだ、黒鉄さんもよろしければレギオンに入ってくれませんか？」

蓮夜「ちよと考えたいから、少し返事は待っていてくれるかな？」

梨璃「はい、分かりました。」

その後少し会話をした後には彼女達と別れ自身の部屋へと戻った。

## 第10話

梨璃「ふう……。」

梨璃はカフェテリアで疲れたような表情で俯いていた。

夢結「お疲れのようね、梨璃。」

梨璃「そ、そんなことないです！全然!!」

夢結「梨璃さん楓さん！」

そこに二水がやって来た。

その後ろに蓮夜も着いてくる。

二水「あつ夢結様ごきげんよう。」

夢結「ごきげんよう。」

楓「どこに行つてらしたの？そしてどうして黒鉄さんと一緒にいたのですか？」

蓮夜「途中で二水さんにあつてな。それでなんだか梨璃さんが困っているらしいから様子を見に来たんだよ。」

二水「どうです？これ。」

二水はそう言うと言手に持っていたタブレット型端末を梨璃達に見せる。

梨璃「なにそれ？まな板？」

蓮夜「まな板って……。」

楓「タブレット型端末ですわ。」

梨璃「へー。初めて見ました。」

蓮夜「昔は結構流通してたらしいけどな？」

楓「ええ、その程度のもの、昔は誰でも持っていたといえますわ。」

二水「見て下さい。それ！」

二水は端末の電源を入れる。

そうすると梨璃のホログラムと彼女のプロフィールが空中と彼女の周りに投影される。

梨璃「え・・・？は!?な、何これ!？」

楓「梨璃さんの極秘情報が！」

二水「人類の英知です！」

梨璃「みみ、見ないでください!!」

梨璃は2人を止めようとするがひらりと躲かれてしまう。

夢結（・・・6月19日？）

ふと夢結プロフィールを見た時に梨璃の誕生日が目についた。

そして壁に掛かっているカレンダーを見ると、

夢結「・・・!？」

そこには6月18日と書いてあった。

夢結（明日が梨璃の誕生日・・・？）

それから彼女は知り合いにプレゼントのことを聞いて周り。最後に訪れたのは、

蓮夜「そして俺の来たって訳か・・・それで何にするかある程度は決めたのか？」

夢結「ええ、梨璃がラムネが好きだと聞いて、ラムネにしようと思

うのだけれど・・・清涼飲料水のはずなのに固形物だったりして悩んでるのよ。」

蓮夜「そういう事か・・・」

彼は端末を起動させホログラムを展開し彼女に画像を見せる。

蓮夜「ラムネって言うのはお前が知っている清涼飲料水みたいな液体のタイプとこっちの餡みたいな形の固形タイプの2つがあるんだよ。聞いた話だと梨璃さんはどっちも好きなんだからどっちでもいいと思うが・・・。それよりも・・・なんで最初に聞いたのが百由なんだ？あいつが一番こういう話題に向いてないだろう。」

夢結「ええ、私も相談してみてもヒューズの眼球と言われて後悔したわ。」

蓮夜「まあ、こういうのは何が相手が好きかっていうのも確かにあるが、一番はやっぱり気持ちだろう。」

夢結「・・・気持ちね。」

蓮夜「憧れの人からの自分へのプレゼントっていうのはなんだって嬉しいと思うが、お前にはそういう事はなかったのか？」

夢結「・・・あるわ。」

蓮夜「それなら自分自身がそういう人から貰ったら嬉しいものとかでいいと思うぞ？」

夢結「ええ、ありがとう。参考になったわ。」

蓮夜「どういたしまして、それじゃ俺も準備するかな。」

夢結「準備とは何をする気なの？」

蓮夜「それは見てからのお楽しみ。俺もこれからやることできたからあとは自分で考えてみな。」

夢結「ええ、わかったわ。」

次の日

梨璃「黒鉄さん！」

蓮夜「梨璃さんどうかしたのか？」

「梨璃が彼の部屋を訪れていた。」

梨璃「お姉様がどこにいるかしりませんか？」

蓮夜「夢結がないのか？」

梨璃「はい、朝から探しているのですがどこにもいないんです！」

彼はすぐにPCを起動させ何かを調べ始める。

蓮夜「どうやら学院外に出ているらしいな。」

梨璃「どうしてわかったんですか？」

蓮夜「ああ、これを見てみな。」

そう言うと彼は画面を梨璃に見せる。

そこには夢結が外出届けを出していると書いてあった。

蓮夜「この学院はセキュリティとかが結構厳しいから外に出る時には外出届けを出さないと行けないんだろ？」

梨璃「はい、けどどうしてわかったんですか？」

蓮夜「それは朝から探していないって言っていたからな。もしかしてと思つて調べてみたらあつたつてわけだ。」

梨璃「そうなんですか。ありがとうございます。」

蓮夜「ああ、気にするな。それで今日は楓さん達と一緒にじゃないみたいだが……。」

梨璃「楓さんと二水ちゃんと手分けして探しているんです。それでもしかしたら黒鉄さんが知っているかと思ひ。」

蓮夜「それなら楓さん達を見つけて伝えてあげな。外出してるんじゃないでしょうもないし。これは待つしかないってね。」

梨璃「はい、ありがとうございます。」

梨璃は部屋から出て行く。

数時間後

梅「あ、夢結。」

鶴紗「……どうも。」

夢結「……ここは学院の敷地ではないでしょう。何をしているの？」

梅「この先に猫の集会所があるから、後輩を案内してたんだよ。」

鶴紗「……おかげで仲間に入れてもらえたかもしれない。」

夢結「……仲がよろしくて結構ね。」

梅「あれ？校則違反とか言わないのか？」

夢結「私の役目ではないでしょう。というか、今日はそんな気力が……。」

梅「寂しがつてたぞ。梨璃。」

夢結「え……？」

梅「誕生日なのに夢結が朝からずつといないんだもんな。おまけに今日もレギオンの欠員埋まらなかったみたいだし。あ、でもあれだろ、夢結はラムネを探しに行つてたんだろ？」

夢結「いいえ？……違うわよ？」

梅「え？違うのか？よりにもよつて誕生日にシルトをほつたらかしてまで、他にすることあんのか？」

夢結「梨璃へのプレゼントを探しに行っていたわ。」

梅「ありや？ラムネじゃないのか？」

夢結「ええ、ほかのものに変更したのよ。」

梅「そうなのか。なら早くプレゼントしに行つてやれよな！」

そうして彼女達は学院への帰えつて行く。

その時鶴紗が、

鶴紗「……んっ……。これ……」  
梅「どうした？」

彼女はゴミ箱の中を覗いており2人もつられて覗き込むとそこにはラムネ瓶があつた。

その隣には蔦だらけになり灯りのついていない自販機があり、

梅「ん……んん？」

梅が自販機に100円を入れると灯りがつく。

梅「節電モードか……」

そして蓋を開け中身を取り出すと、

梅「ラムネ……」

夢結「本当ね……何本か購入して行きましようか？」

梅「そうだな？」

ラムネを何本か購入してから彼女達はまた歩き出した。

梨璃「うわあ……」

梨璃の前にはリボンを付けたラムネがあつた。

ミアム「ほほう。これが噂のラムネか。」

梨璃「お姉様が……わたしのために……!？」

夢結「ええ、だけどそれだけじゃないわ。」

梨璃「え……?」

そう言うと彼女は懐から1つのケースを取り出し梨璃に渡す。

梨璃がケースを開けるとそこには、クローバーの形をしたペンダントが入っていた。

夢結「私がお姉様から貰った時嬉しかったから……。」

梨璃は涙を流し夢結に抱きつく。

梨璃「ありがとうございます。わたしすごく嬉しいです。」

それを優しく抱きとめて彼女の頭を撫でる。

夢結「それは良かったわ。」

梨璃「夢結様はわたしにとって最高のお姉様です！」

夢結「断じてノーだわ……。あなたがそこまで喜ぶことを、わたしがひとりでできると思わないもの。このペンダントだって彼に相談した結果思い付いたものですし……。」

梨璃「そんなの……出来ます！出来ます！じゃ、じゃあ、もういいいいですか!?!」

夢結「……ええ。」

梨璃「このペンダントをわたしに付けて貰えませんか？」

夢結「ええ、いいわよ。」

夢結は梨璃からペンダントを受け取り彼女の首に付けてあげる。すると梨璃はまた夢結に抱きつき。

梨璃「やっぱり夢結様はわたしの最高のお姉様です！」

夢結「……。やっぱり……。私のほうが貰ってばかりね……。」

夢結も梨璃のことを抱きしめ、

梨璃「お、お姉様……!?!」



夢結「梨璃、お誕生日おめでとう。」

梨璃「ふわっ・・・!!」

楓「は、破廉恥ですわおふたりとも!!」

タブレットのシャッターを連打しながら二水が、

二水「ごごご号外です!!」

梨璃「はあくく・・・。」

夢結に抱きしめられ梨璃が幸せそうにしていると、どんどん夢結の抱きしめる力が強くなる。

梨璃「お・・・お姉様・・・う、嬉しいんですけど・・・あの・・・くっ、苦しいです。」

だが夢結にはその声が聞こえていないのか力がどんどん強くなる。

二水「なんて熱い抱擁です!？」

梨璃「お姉様・・・?わたし、どうすればく・・・?」

ミアム「わしが聞きたいのじゃ。」

楓「夢結様がハグひとつするのも不慣れなことはよく分かりましたから、梨璃さんも少しは抵抗なさい!!」

梨璃の顔がどんどんと赤くなっていき

梨璃「はわわわわわわ。」

梨璃が苦しきのあまり目を回した。

夢結「梨璃!？」



楓「それはそうと！おふたりはいつまでくつついてますの!？」  
蓮夜「まあ、いいんじゃないか？今日くらいは?。」

声の方を向くと、そこに蓮夜がいた。

彼は大きめの箱が入った袋を持っており、

蓮夜「すまん少し遅れた・・・いや、ちょうどよかったか?。」

梨璃「あ、黒鉄さん聞いてください！梅様と鶴紗さんがレギオンに入ってくださいっただんです!。」

蓮夜「おお、つまり9人揃ったってことだな!。」

梨璃「はい！レギオンの完成です!。」

蓮夜「それは良かったな・・・そうだ梨璃さんはこの前のお話覚えてるか?。」

梨璃「レギオンに入ることを考えるというかことですよね?・・・!もしかして。」

蓮夜「ああ、今更かもしれないが俺も梨璃さんのレギオンに入れてくれないか?。」

梨璃「ぜひ、こちらこそよろしくお願いします。」

蓮夜「それじゃこれは梨璃さんの誕生日プレゼント兼レギオン結成記念ということぞ!。」

彼が持っていた箱をテーブルに降ろし、箱を開けると、

そこにはワンホールのショートケーキが入っていた。

それには「誕生日おめでとう」と書いたチョコプレートが乗っておりそのまわりに満遍なくイチゴが盛り付けられていた。

梨璃「わあゝ。」

蓮夜「ああ、梨璃さん遅くなったが、お誕生日おめでとう。」

梨璃「ありがとうございます。」

ケーキを取り分けてみんなで食べていると、

梨璃「美味しいですね！これどこで売っていたんですか！・・・あれ？　そういえば黒鉄さん今日学院にいたような・・・。」

楓「そうですね。それでしたらこのケーキはどうやって購入したのでしょうか？」

夢結「・・・。」

蓮夜「え？　これ買った訳じゃないぞ？」

夢結・蓮夜以外『えっ!?!』

夢結「やっぱりね・・・。」

梨璃「お姉様どういうことですか？」

夢結「このケーキは彼の自作よ・・・。」

蓮夜「いや、これ作るのに時間かかっちゃまってな・・・来るのが遅くなっちゃったんだ。」

夢結・蓮夜以外『・・・。』

蓮夜「どうした？」

彼が心配そうに彼女達を見ていると、

夢結・蓮夜以外『えええええええ!?!』

蓮夜「!?!」

夢結「そうなるでしょうね・・・。」

梨璃「これ黒鉄さんがお作りになったんですか!」

蓮夜「ああ、そうだが。」

楓・二水「「なんてだか女として負けた気がします・・・。」」

蓮夜「何いってんだ？」

神琳「お上手なんですね。」

蓮夜「趣味でやってたらいつの間にか上手くなってたんだよ。」

雨嘉「す、凄い・・・。」

ミリアム「本当になんでも出来るのう・・・。」

梅「すごく美味しいぞ!」

蓮夜「ああ、ありがとな。」

鶴紗「モグモグ・・・。」

このあともしばらく騒ぎ続け梨璃の誕生日は無事に終わった。

## 第11話

梨璃「・・・うん？」

彼女達に支給されたレギオン用の控え室に来た梨璃の目に入ったものは、

『一柳隊』

梨璃「ひとつやなぎ・・・たい・・・？」

楓「一柳隊がどうかしまして？」

二水「ええ、一柳隊ですよね？」

ミアム「うむ。一柳隊じゃな。」

神琳「たしか一柳隊だったかと。」

雨嘉「わたしも一柳隊だと思ってた。」

梨璃「・・・わたしたち『白井隊』では？」

鶴紗「どっちでもいい。だから一柳隊でいい。」

梅「もう一柳隊で覚えちゃったよ。」

蓮夜「梨璃さん以外はそう思ってたらしいぞ？」

夢結「じゃあ一柳隊で問題ないわね。」

梨璃「え？・・・ええ!？」

彼女達のレギオンの名前は「一柳隊」に決定した。

梨璃「で、でも、これじゃわたしがリーダーみたいじゃないですか！」

楓「私はちいっつとも構いませんが？」

ミアム「梨璃の働きで出来たようなもんじゃからの。」

蓮夜「だな、夢結に作るように言われたとしてもこのメンバーを集

めたのは梨璃さんだからリーダーになるのは必然だ。」

梨璃「ええ・・・？」

梅「ま、梨璃はリイとしてもまだちょっと頼りないけどな。」

蓮夜「その点は問題ないだろう？」

夢結「ええ、もちろん、梨璃に足りないところは私が補います。責任を持って。」

梨璃「よかった。ですよね。」

夢結はどこから取り出したCHARMを梨璃に向ける。

夢結「つまり、いつでも私が見張っているということよ！」

梨璃「ひいっ！」

夢結「たるんでいたら私が責任を持って突っつくから、覚悟なさい。」

梨璃「は、はいっ・・・！」

梅「ははは、これなら大丈夫そうだな。」

楓「くっ・・・なんてうらやましい・・・。」

蓮夜「何が羨ましいんだよ・・・。」

鶴紗「リーダーをつつきたいのか。」

雨嘉「百合ヶ丘のレギオンで、どこもこんななの・・・。」

神琳「そうでもないと言いたいところだけど、けっこう自由よね。」

蓮夜「いや、これ・・・その域超えてるだろ・・・。」

二水「と、ともかくこうしてレギオンが完成した今なら、ノインヴェルト戦術だつて可能なんですよ！」

ミリアム「理論の上ではそうじゃな。」

梨璃「それって、これだよね・・・？」

二水「？なんですか？」

楓「ノインヴェルト戦術に使う特殊弾ですわね。」

二水「わっ！実物は初めて見ました！」

梅「それな、ムチャクチャ高いらしいぞ。」

梨璃「そ、そうなんですか!?!」

夢結「ノインヴェルトとは9つの世界という意味よ。

マギスフィアを9つの世界に模した9本のCHARMを通して成長させ、ヒュージに向け放つの。それはどんなヒュージも一撃で倒すわ。」

雨嘉「出来るかな、わたしたちに?」

神琳「今はまだ難しいかと……。何よりもチームワークが必要な技ですから……。」

楓「ま、目標は高く、と申しますわ。」

梨璃「はあ……。そうですね。」

二水「ですがこのレギオンには10人いますのでミスがあってもカバーができますから9人でやる時よりも難易度は下がるはずです!」

蓮夜「それなんだが……。俺ノインヴェルトには参加できそうにないからカバーはできそうにないんだよ……。」

二水「えっ!?!どうしてですか?」

蓮夜「俺がしばらくCHARMを持ってなかったの時期があるだろ?その理由が俺がCHARMを使うとすぐに壊れるからなんだ。」

神琳「壊れるとは?」

蓮夜「俺がマギの出力が高すぎてCHARMが耐えきれないらしいんだ。だから改造したこのCHARMができるまでギアを使っていたんだ。」

楓「つまりマギの保有量が多いということでしょうか?」

蓮夜「そうじゃなくて勢いだな。保有量は平均的なりりよりも高い程度なんだが……。そうだな……。ホースで植物に水やりする時にホースの先端を潰して細めると行き良い強くなるだろ?それと同じなんだよ。」

ミアム「つまりCHARMが黒鉄さんのマギを送り込む行き良い間に合わず詰まってしまうということか?」

蓮夜「そういうことだ、このCHARMに変えてある程度解消はされたがやっぱり大きな負担をかけるノインヴェルトとかをすると耐えきれず壊れる可能性が高いんだ。」

楓「そうなのですか……。」



蓮夜「済まない・・・だからノインヴェルトをする時は俺がヒュージを抑えておくからみんなでやってくれ。」

梨璃「分かりました。」

蓮夜「おっとそうだ忘れるところだった。」

彼はそう言うのと、背中に背負っていたケースを降ろし中身を彼女達に渡した。

梨璃「えつと・・・これは？」

蓮夜「ギアだよ。なんかあった時ようにと思ってな、みんなにも渡しておこうと思ったんだ。」

彼女達が渡されたものを見ると筒状のものにグリップのようなものが刺さっており、その上部にはもう一つグリップをさせそうな穴があった。

蓮夜「これはリボルバーみたいになっていてな。上の穴に何もついてないグリップを刺し込むと中にある刀身が装着される仕組みになってるんだよ。真ん中のは現在装着している刀身を保持して置くためのものな。」

実演しながら彼女達に説明をしていく。

蓮夜「グリップに撃鉄みたいなものがあるだろ？それで刀身を外せてトリガーを引きながら撃鉄を引くと5秒後またはなにかに接触した時に爆発するようになってる。刀身自体もマガジを流すだけで戦闘用の大きさに変わるから扱いもそこまで難しくはないと思うぞ？」

彼女達は各々に刀身を着脱してみたり大きくしてみたりしている。

蓮夜「まあ、緊急時用の予備だと思って置いてくれ。」

梨璃「ありがとうございます。」

ミリアム「使ってみると本当に単純な仕掛けじやのう。

・ ・ ・量産性と使いやすさを重視している訳じゃな。」

神琳「ありがとうございますね。」

蓮夜「今渡したのは一番扱いやすいブレードタイプだが他にもシールドタイプやウィップタイプ、あとはグリップを使わないでただ投げで使う補助タイプとかもあるからなにか欲しいのがあったら言ってくれ。」

二水「それでしたら、何かヒュージの攻撃を防げるものはありますか？」

神琳「私も、黒鉄さんがこの前に使っていた拘束用のものが欲しいですね。」

蓮夜「それならウォールとソーンだな．．．えっと、これだ。」

2人にそれぞれ緑色の金属板と杭状のものを渡す。

蓮夜「ウォールはマジ流すとすぐ、ソーンは何か打ち込んでからマジ反応が通り過ぎると発動するから気をつけて使ってくれよ。」

神琳「はい、注意して使いますね。」

二水「ありがとうございます。」

梅「それにしても、ヒュージに対抗出来るCHARM以外の武器か．．．『死神』のアレみたいだな．．．。」

楓「死神．．．とは？」

梅「ああ、みんな甲州撤退戦は知ってるよな？」

梨璃「．．．はい．．．。」

二水「はい！．．．そうだ梨璃さんは．．．。」

梨璃「大丈夫だよ。」

梅「話を続けるぞ。その時に戦っていたのは表向きにはリイだけになっているんだが本当はリイ以外にも戦っていたのやつがいるんだ。」

夢結「ちよつと梅！それは．．．。」

梅「同じレギオンなんだからいいじゃないか。それでその時に戦っていた存在が死神と言われているんだ。

正体不明、黒い服装で大きな鎌を使ってヒュージを倒しまくっていたから死神って言われているんだ。

本当はあの戦いで倒されたヒュージの総数の半分ぐらいは死神が1人で倒したんだよ……。

その死神が使っていた鎌がな変形しなかったみたいだからCHARMじゃないんじゃないかって言われていてな？これもCHARMではないだろ？だから思い出してな。」

蓮夜「そうなのか……だけどギアじゃそういうのを作るのは無理だぞ？まずギアの性質上長時間使えないし、そもそも俺がギアを完成させたのは甲州撤退戦のあとだからな……多分本当に旧式のCHARMかまた別の何かじゃないか？」

梅「そうだよな！ただ何となく似てるかなと思ったから言ってみただけだぞ！」

蓮夜「そんなのが作れていたら俺は苦労してないよ……。」

そう言っただけが項垂れていると、

楓「そうでしたわ！以前の戦いの時にレアスキルのことを後で仰ると言われていましたがまだ聞いてませんわね。」

蓮夜「そうだったな。俺のレアスキルは『アルターエゴ』って言って5つの能力が複合されたスキルなんだよ。」

梅「5つもか！それはすごいな！」

楓「その能力とはどのようなものなのでしょう？」

蓮夜「能力は、物体を浮遊させる、傷を癒す炎を生み出す、自身を3倍速まで加速する、精神に干渉する、味方の能力を向上させるの5つだな。」

楓「百由様の仰っていたインチキスキルとはそのことだったのですわね……。本当に反則もいいところですよ！」

蓮夜「だけど一種類ずつしか使えないんだよ。」

梨璃「それでも凄いです！」

蓮夜「ありがたいな。それでこの前夢結に使ったのは精神干渉で本来は幻覚を見せるものなんだけど、少し応用して一時的に平常な状態に精神を戻したんだよ。それで出来た隙を梨璃さんについて貰ったってわけ。」

楓「そうだったのですか納得しましたわ。」

それからしばらく会話が続くが夢結が会話に参加していないことに気がつき夢結の方を見てみると、

蓮夜「夢結、電話なんか出してどうしたんだ？」

夢結「あなた達、今から行くわよ。」

梨璃「は、はい・・・って行くってどちらに？」

その問いに夢結は、

夢結「ノインヴェルト戦術の見学によ。」

夢結はそう返した。

## 第12話

梨璃「ここで見学、ですか……。」

天葉「私たちの戦闘を見学するのなら、特等席でしょ？」

依奈「あの夢結がシルトのために骨折りするのなら、協力したくもなるでしょ？そしてあなたは初めましてね？私は番匠谷 依奈これからよろしくね黒鉄君。」

蓮夜「こちらこそよろしくお願いします。番匠谷さん。」

依奈「依奈で大丈夫よ。」

天葉「そうよ。それに敬語もいらないわよ？」

蓮夜「それならよろしく頼むよ。依奈さん。」

依奈「ええ。」

天葉「ふふ……夢結をこんなに可愛くしちゃうなんて、あなたいたい何者なの？」

梨璃「え？わたしはただの新米リリイで……。」

夢結「ありがとう、天葉。」

天葉「気にしないで。貸しだから。」

依奈「ノインヴェルト戦術が見たいんでしょ？お見せする間もなく倒しちやったらごめんなさいね。」

彼女達は防衛へと向かった。

夢結「ときに梨璃……あなたレアスキルは何か分かったの？」

梨璃「え？あれから何も……。わたしにレアスキルなんてないんじゃないですか？」

何か考えるような顔をしながら、

夢結「そう……。気にすることはないわ。何であれ、私のルナティックトランサーに比べれば……。」

梨璃「いけません！そういうの。」

夢結「……。」

蓮夜「梨璃さんの言う通りだぞ。どんな力だつて結局はその人がどう使うかだ。例えば、どんなにすごい力であつても使う人が何も考えずに使うようじゃかえつて被害が出る。それと同じだ、お前がどのようにしたいか、そのためにどうやってその力を使えばいいかそれを考えて行けばいいんだよ。」

梨璃「そうですね。そんな風に言つてはいけません……。お姉様は何をしたつて素敵です！」

夢結「……そうね。そうありたいと思うわ。」

梨璃「……。」

海岸の方から大きな音が鳴りそちらを見ると、

依奈「なつ！ 私たちに陽動を仕掛けた!？」

亜羅椰「ヒュージのくせに小賢しいじゃない。」

天葉「あつ!？」

ヒュージは海面から勢いよく飛び出してきた。

梅「押されてるな。アールヴ Heim。」

夢結「ええ。あのヒュージ、リリイをまるで恐れていない……。」

蓮夜「これはまたレストアか？」

ヒュージは亜羅椰に向かって触手で攻撃する。

亜羅椰「こいつ、戦い慣れてる!？」

天葉が自身のCHARMに特殊弾を装填し、

天葉「アールヴヘイムはこれより上陸中のヒュージにノインヴェルト戦術を仕掛ける！」

天葉が打ち出したマギスファイアを依奈が受け取りそれをほかのメンバーに向かって飛ばしていく。

夢結「よく見ておきなさい。」

梨璃「は、はい……。」

二水「ノインヴェルト戦術は、その威力と引き代えにリリーのマギとCHARMを激しく消耗させる、文字通りの諸刃の剣です！」

二水が説明している間にマギスファイアは亜羅椰へと渡り。

亜羅椰「不肖遠藤 亜羅椰！フィニッシュショット、決めさせて貰いますっつ!!」

それをヒュージへと向かって打ち込む。

しかし、ヒュージは障壁のようなものを展開して防いでしまう。

天葉「何!？」

壱「フィニッシュショットを止めた……？」

亜羅椰「うそっ!？」

ミアム「何じゃー!？」

夢結「えっ……!？」

蓮夜「……アイツ普通じゃないみたいだな……。」

天葉「こんにやろー!？」

天葉が飛び出してヒュージに止められているマギスファイアにCHARMを叩きつける。

天葉のCHARMは砕け、マギスファイアは大爆発を起こす。

樟美「もう、天葉姉さま、危ないです……！」

樟美がパラソルのようなものを開きながら天葉を抱きとめてゆつくりと降下していく。

天葉「不本意ですが、アールヴ Heim は撤退します！」

天葉のことばにアールヴ Heim のメンバーは撤退を開始した。

天葉「……くっ！」

楓「アールヴ Heim がノインヴェルト戦術を使って仕損じるなんて……。」

梨璃「っ!？」

梨璃がCHARMを持って飛び出した。

二水「梨璃さん！」

梨璃「あのヒュージ、まだ動いています！黙って見てたりしたら、お姉様に突っつかれちゃいますから、」

楓「どさくさまぎれに一柳隊の初陣ですわね。」

夢結はペンダントを取り出し握りながら、

夢結（お姉様……私たちを守って）



夢結「練習通りにタイミングを合わせて！」

梨璃「は、はい！」

2人はヒュージへと向かって行く。

夢結（古い傷のあるヒュージ・・・これもレストア？）

夢結・梨璃「はあああああっ!!」

同時に斬り掛かる。

攻撃を受けたヒュージは2つに裂け中から光が漏れ出す。

楓「何ですの!?!」

雨嘉「あっ・・・。」

神琳「あの光はっ・・・。」

蓮夜「CHARMか・・・。」

蓮夜（・・・まさかアレは!!）

梨璃「・・・あっ!?!あれは・・・CHARM・・・?」

梨璃はふとある光景を思い出す。

梨璃「あ・・・。」

夢結「あっ・・・。」

夢結は呆然とし、

夢結「あれ・・・わたしのダンススレイフ・・・。」

彼女は動けないでいた。

夢結「・・・ダンススレイフ・・・。」

二水「ゆ、夢結様の動きが止まっちゃいました・・・!!」

梨璃「お姉様!!」

動けずにただ立ち尽くしている夢結をヒュージが攻撃するが、それを梨璃が弾いて防ぐ。

梨璃はヒュージの攻撃を防いでいくがどんどんと触手に囲まれていき、

梨璃「あつ!?!」

触手に包まれ身動きができなくなってしまう。

ヒュージはその触手を引き絞っていき、残りの触手が夢結へと向かって振り下ろされる。

夢結「梨璃!?!」

夢結「梨璃・・・みんなどこ・・・。」

煙が晴れ、触手が解かれるが中にいるはずの梨璃がない、それを見た夢結は胸を強く押さえ、

夢結「・・・梨璃・・・美鈴様・・・。」

呼吸が荒くなり、

夢結「あうっ・・・。」

トラウマにより彼女の中に眠る狂気が呼び起こされた。

夢結「ウ・・・ウアッアッアッ!!」

ルナティックトランサーが発動しCHARMを手ヒュージへと急接近する。

ヒュージは光線を飛ばしく迎撃する、それを躲しながら進むが避けきれずにどんどん傷を負っていく。

梨璃「お姉様！」

雨嘉「夢結様、なんて戦い方……。」

ミアム「あれじゃ近寄れんぞ。」

梅「可愛いシルトを放って何やってんだ！」

神琳「夢結様、ルナティックトランサーを……。」

蓮夜「クツソ！」

彼はCHARMを右手にギアを左手に持ち彼女の元へ飛び出した。

二水「黒鉄さん！」

梨璃「わたしも、行かなくちや……。」

楓「梨璃さん！今の夢結様は……。」

梨璃「お姉様……。」

梨璃も彼に続いて飛び出して行った。

蓮夜「夢結、落ち着け、梨璃は無事だ！」

夢結「アゝアゝアゝアゝアゝ」

夢結は彼に向かってCHARMを振り下ろす。

それを彼が防ぐが構わず攻撃を続ける。

梨璃「お姉様！」

続いてこちらに向かって来ていた梨璃が夢結に呼びかけるが、彼女は梨璃にもCHARMを振り下ろした。

それを梨璃はどうか受け止め。

梨璃「お姉様！引いて下さい！傷だらけじゃないですか!!」

梨璃のCHARMにヒビが入る。

楓「梨璃さん……。普通なら今ので斬られていますわ……。！」

楓に向かつて触手が襲いかかるがそれをミリアムがはじき返す。

ミリアム「敵に集中せんか！」

梨璃はCHARMから手を離し彼女へと近づくと、夢結は梨璃に攻撃を加えようとするがそれを蓮夜が夢結のCHARMを掴み止めた。刀身を掴んでいるので血が止めどなく溢れる。

蓮夜「……。ッ！」

梨璃「黒鉄さん！」

蓮夜「俺のことは構うな！夢結にだけ集中しろ！」

梨璃は彼女を抱きしめ、

梨璃「わたしなら大丈夫です！梅様やみんなが助けてくれたんです！」

夢結は梨璃に向かつて攻撃しようとするがそれは蓮夜よって防がれる。

梨璃「ここを離れましょう!!」

夢結「ダメ……。あのダインスレイフは私と……。お姉様の……。だから……。！」

ルナティックトランサーが解除され真っ白になっていた髪が黒に戻る。

梨璃「お姉様!!」

夢結「……。ッ！」

梨璃は夢結を抱えてここを離れた。

雨嘉「行って、梨璃！」

梨璃「すみません、すぐに戻りますから、ちよつと待ってもらえ……  
あいたつ！」

着地に失敗したようで悲鳴をあげる。

梅「大丈夫か梨璃!？」

梨璃「大丈夫です。」

鶴紗「本当に大丈夫か……?それに黒鉄先輩……血……流れ  
ていますけど大丈夫ですか？」

蓮夜「ああ、大丈夫だ。もう治った。」

彼の手から黄緑色の炎が出ており、傷も塞がっていた。

雨嘉「待つてろつて……?」

神琳「持ちこたえろという意味でしょうね。」

梅「人使い荒いぞ、うちのリーダーは。」

ミアム「どうする!むしろ他のレギオンと交代するか？」

楓「ご冗談でしょ!?!リーダーの死守命令は絶対ですわ!」

二水「そこまでは言っていないと思いますけど、楓さんに参戦です!」

神琳「あのヒュージはCHARMを扱いきれず、マジの炎で自らを  
焼いているわ。夢結様が復帰するなら勝機はあります。黒鉄さん、  
さつきから黙っていますけどどうしたんですか？」

蓮夜「……。」

神琳「……黒鉄さん？」

蓮夜「あのヒュージ……覚悟はできてるだろうな!」

彼の瞳は紅く染まっていた。

梨璃「お姉様……。」

夢結「見ないで梨璃……。私を見ないで……。」

ルナティックトランサーは、とてもレアスキルなんて呼べるものじゃない……。こんなもの、ただの呪いよ。

憎い……。何もかも憎くなる……。憎しみに呑み込まれて、周りにあるものを傷つけずにいられなくなる。彼も傷つけてしまった……。呪われているのよ、私は……。

美鈴様を殺したのは私だわ。私が……。この手で……。あのダインスレイフで……。」

梨璃「お姉様、しっかりして下さい！」

夢結「いやよ！私もヒュージと何も変わらない……！」

梨璃「夢結様！」

夢結「いや……。来ないで。」

梨璃「こつち向いて下さい！美鈴様はヒュージと闘ったんです……。お姉様のせいじゃありません！」

梨璃「そんなの梨璃に分かるわけない！」

梨璃「分かります！お姉様がこんなに想っている人を手にかけるはずないじゃないですか！」

夢結「私にはあなたを守れない……。シユツツエンゲルになる資格もない……。一人でいたかった訳じゃない。一人でしか居られなかっただけよ。私には何の価値もない……。」

梨璃「お姉様とシユツツエンゲルになれてわたし、すごく嬉しかったですよ？」

夢結「分からない……。私には分からないわ、あなたの気持ちなんて。私に愛されるのが嬉しいなんて……！」

梨璃「美鈴様だって、きつとわたしと同じです！」

夢結「あなたに何が分かるのよ!？」

梨璃「分からないけど、分かります！それに……。黒鉄さんはどうするんですか！あの人はいつもお姉様を心配しているんですよ！」

夢結「・・・ッ!？」

梨璃「お姉様がルナティックトランサーを発動したらまた私が止めます。何度でも止めます。何をしても止めます。たとえば・・・刺しても・・・だから・・・。」

夢結「ありがとう、梨璃・・・。」

梨璃「はい、お姉様・・・!？」

二水「ヒュージの腕は残り2本です！先端部はオオマツ三丁目と六丁目交差点に展開中!」

蓮夜「ゼエア!!」

彼はギアの刀身だけを6本浮かせて、ヒュージへと向かって突撃隊する。

ヒュージも光線で迎え撃つが、今までとは比べ物にならない速さで全てを躲しヒュージに一撃を叩き込む。

ヒュージも触手で追い払おうとするがそれを空中にあるものギアを飛ばしている迎撃、触手をはじき返す。

すると彼は一気に加速しヒュージの身体を縦横無尽に切り刻む。

楓「すごいですわね・・・!？」

神琳「さつきまでは相手の攻撃を躲すか逸らしてから反撃する慎重な戦い方でしたのに・・・今は豹変したかのように攻め続けていますね。どうしてしまったのでしょうか?」

梅「それよりも今がチャンスだ!あのダインスレイフ、絶対取り戻す!」

楓「無論です!ヒュージがチャームを使うなんて有り得ませんわ!」

梅は縮地を使いながら触手を走り、ダインスレイフの元へと向かう。

梅「でりゃ!!」

ダインスレイフの元に到着し引き抜こうとするが、

梅「あっ、くそ!!」

ダインスレイフはなかなか抜けない。

梅が悪戦苦闘しているとところに楓と鶴紗がやってくる。

梅「お前ら!？」

楓「急ぎましてよ。」

3人に触手が襲いかかろうとするが、

雨嘉「ふっ!!」

神琳「はっ!!」

ミリアム「わしも目立ちたい!!」

3人が触手を弾き飛ばす。

蓮夜「くらえ!!」

蓮夜のCHARMと飛ばしたギアがそれぞれ触手の付け根を切りつけ最後の2本を切断する。

二水「わ、わたしも行かなくちや……。」

二水もヒュージに攻撃を仕掛けようとしたその時、



梨璃「待つて！」

夢結「待ちなさい！」

二水「へっ!？」

梨璃と夢結の2人が戻ってきた。

二水「梨璃さん！夢結様！」

梨璃「二水ちゃんはそこにいて！」

2人は左右に別れて射撃でヒュージに攻撃する。

その衝撃でダインスレイフが抜ける。

梅・楓・鶴紗「「抜けた!!」」

彼女達が離れた直後彼女達がいたところを光線が襲う。

それはヒュージ自身に直撃し大爆発を起こす。

梨璃達の方へ戻ってきた梅がダインスレイフを地面に刺して3人とも座り込む。

梅「はー。取り返したぞ！」

楓「死守命令、果たしましたわ。」

梨璃「だ・・・大丈夫ですか、みなさん。」

梨璃は梅が持っているCHARMを見ながら、

梨璃「これが・・・あのヒュージに・・・。」

梅「これ、やっぱり夢結が使ってたダインスレイフだな。傷に見覚えがある。」

全員『……』

夢結「ええ……」

そこに、

蓮夜「夢結もう大丈夫なのか？」

彼が戻ってきた。

紅く染まっていた瞳は黒く戻り表情もいつものものに戻っていた。彼の足元から黄緑色の炎が吹き出し広がる。それに触れたみんなの傷がなくなり、

夢結「ええ、大丈夫よ。みんな心配をかけてごめんなさい……」

蓮夜「それは後でな？それに……」

雨嘉「あいつ、まだ動いてる……」

梨璃「あの……わたしたちでやって見ませんか？」

楓「何をです？」

梨璃は懐から特殊弾を取り出し、

梨璃「ノインヴェルト戦術です。」

そして梨璃は梅の方を向き、

梨璃「梅様。最初、お願いできますか？わたしたといきなり失敗しちゃいそうで……」

梅は笑いながら特殊弾を受け取り、

梅「ははは。人使い荒いぞ、うちのリーダーは。じゃあ、梅の相手は……」

周りを見渡し、

二水「え、わ、わたしですか!?!」

梅「ほんじゃあ、二水が撃つて!」

梅は特殊弾を弾き飛ばす。

それは二水のCHARMの挿入口に綺麗に収まり特殊弾が装填される。

二水「ぎゃー。何するんですか!?!何を撃つんですか!?!まさかヒュージ!?!」

梅「梅をだよ。ほら撃て!」

二水「ええ!?!気は確かですか梅様。わたし人を撃つなんて訓練したこ」

梅「早くー!」

二水「はいいい!!ひいゝゝ!」

二水が梅に向かって撃つとマギスファイアが射出され梅はCHARMでそれを受け止めた。

それによりマギスファイアの色が水色から黄色へと変わる。

二水「マ、マギスファイアが・・・!」

梅「感じるぞ!これが二水のマギか!じゃあ次は・・・。」

そう言うと梅は雨嘉の方を向く、

雨嘉「え!?!わたし!」

梅はCHARMを突き出した状態雨嘉に向かって走り出す。

梅「わんわん！CHARM出せ！」

梅は雨嘉のCHARMに自身のCHARMを叩きつけるようにマギスファイアを渡す。

雨嘉「梅様、近くありませんか・・・!?」

梅「前に夢結と梨璃がやってたんだ！こうすればパスは外れないだろ！」

雨嘉「こんなの、教本にない・・・!!」

マギスファイアの色が黄色から緑へと変わる。

ミリアム「おっし！こんどはわしによこすのじゃ！」

雨嘉「そんなにがつつかないで・・・！」

ミリアム「ちゃんと狙うんじやぞ・・・鶴紗！」

鶴紗「切っちゃつたらごめん。ほらよ神琳。」

神琳「もっと優しく扱えませんか!?気を付けて。思った以上に刺激的ですよ!？」

楓「望むことですわね！」

マギスファイアの色が緑から紫、紫から赤、赤からオレンジ、オレンジから白へと変わっていく。

楓「うふふ・・・！私の気持ち、受け取ってくださいいな、梨璃さん！」

梨璃「み、みんなのだよね!？」

梨璃も楓のCHARMからマギスファイアを受け取ろうとするが、

『パキーン』

梨璃のCHARMが耐えきれず折れてしまう。

楓「私の愛が強すぎましたわ!？」

遠くへ飛んでいくマギスファイアを蓮夜が受け止める。

蓮夜「最後任せたぞ！夢結！」

夢結の方へとマギスファイアを飛ばし、彼のCHARMが砕けクリスタルコアも真つ二つに割れてしまう。

それを夢結が受け取り、

夢結「いえ、限界よ。無理もないわ。梨璃!!いらっしやい!!」

梨璃「お姉様!」

梨璃は彼女の元へと跳ぶ。

夢結「いくわよ、このまま！」

梨璃「・・・はい！」

2人がCHARMを合わせると青色だったマギスファイアが一瞬灰色に輝いてから大きくなり薄紫色に変わる。

夢結「大丈夫、できるわ！」

梨璃「・・・はい!!」

2人はヒュージに向かってCHARMを向け、

夢結・梨璃「やあああああっ!!」

光と共にヒュージを貫いた。

夢結「梨璃・・・。私は、あなたを信じるわ。」

梨璃「お姉様・・・?」

楓「何やってますの!?!」

ミリアム「さっさと離れるのじゃ!!」

彼女達がヒュージから離れると大爆発が起こりヒュージは跡形もなく消滅した。

彼女達は草原に寝転がり、その様子を彼は静かに見ていた。

## 第13話

依奈「ごめんね、百由。色々忙しい時にCHARM壊しちゃって…  
はい、あーん。」

依奈がCHARMの修理をしている百由の口にケーキを運ぶ。

百由「CHARMを操ってノインヴェルトを無効化するなんてとんだヒュージもいたもんだわ！」

壱「本当にすいません…これもどうぞ。」

百由（だけどヒュージの能力が拡大したのは、本当にCHARMのせいだけなのかな…？そもそも契約がなければ使えないCHARMをなぜヒュージが操ったのか…。）

百由が考えながら修理をしていると、

蓮夜「百由手伝いに来たぞ。」

百由「遅いわよ！てかあなたもCHARM壊したじゃない！それなのに何が手伝い来たなのよ当たり前でしょ！」

蓮夜「ああ、すまんこれでも食って落ち着いてくれ俺も作業を開始するから。」

そう言うと彼はケーキの入った箱を百由に渡す。

百由「それならあなたはあそこにあるグングニルを2本ともお願い。梨璃ちゃんのを整備してるから慣れてるでしょ。」

蓮夜「了解した。破損状況は？」

百由「2本とも変形機構に異常があるわ。」

蓮夜「刀身とかは無事ってことでいいか？」

百由「ええ、だけど修理時にそっちでもチェックをしておいて。」  
蓮夜「わかった。」

彼も作業を開始する。

しばらくして、

蓮夜「部品足りないから部屋戻って取ってくる。」

百由「予備はあるの?」

蓮夜「ああ、何かあった時のためにメンバーのCHARMの部品は3セットずつ用意下あるから大丈夫だ。」

彼が部屋を出て行く、

百由「あら?これ美味しいわね。これって新作?」

依菜「これは彼が持ってきたやつよ?・・・こんなの売ってたかしら?」

そのような会話をしていると、大きなケースとさつき持ってきたものより一回り大きい箱を持った彼が入ってきた。

蓮夜「戻ったぞ、あと天葉これ。」

天葉「これはなに?」

蓮夜「百由に渡したのと同じやつ。待ってるだけだと暇だろうから食って待っててくれ。」

天葉「わかったわ。」

彼女達もケーキを食べ始め、彼は作業に戻る。

百由「そうだ、蓮夜、あなたこれどこで買ってきたの?」

蓮夜「それ?別に買ってきたわけじゃないぞ?」

百由「・・・え?どういうこと?」

蓮夜「俺が作ったんだよそれ。」

百由「・・・あなたが料理できるのは知ってたけど・・・お菓子作りもできたのね・・・。」

蓮夜「お菓子作りもと言うかどちらかと言うところちが趣味でやつ



てて料理はそのついででできるようになったんだが？」

後ろから何が崩れ落ちる音が聞こえたので振り向くと、

壱「女としてなんか負けたような気が……。」

依菜「私なんか……やったことすらないのに……。」

何人かが膝を着き落ち込んでいた。

天葉「あなた結構女子力高いわね。」

亜羅椰「本当に美味しいわね、これ。」

全く気にしていないのも何人かいるようで。

蓮夜「女子力ってなんだよ女子力って。別にパティシエっていう職業があるんだから男が作ったとしても普通だろ？」

樟美「え？……パティシエって女性になるものじゃないんですか？」

蓮夜「いいや、女性の場合はパティシエールな、日本だとパティシエが一般的だが。」

樟美「そうなんですか。」

雑談をしていると、

百由「蓮夜、そっちはどう？」

蓮夜「もうすぐ終わる。変化機構以外大丈夫だったからその交換だけだからな。」

百由「こっちも大体は終わったわ……だけど問題は……。」

彼女はそう言いながらは刀身と銃身がなくなった天葉のCHAR

Mを見つめて、

百由「問題はグラムなのよね・・・これは使える人が少ないしコストが馬鹿にならないから予備パーツがないし・・・。」

蓮夜「それなら問題ないぞ。」

百由「えっ?」

彼は自身が持ってきたケースからグラムの刀身と銃身を取り出した。

蓮夜「パーツなら俺が持つてるから、あとはパーツを交換して調整だけだ。」

百由「なんであなたが持っているのよ!」

蓮夜「俺が最初に支給されたCHARMがグングニルだったんだが、起動させた瞬間に壊れてな?その後頑丈なのはって感じて出てきたのがこいつだったんだよ。起動までは良かったんだが・・・変形させたら本体と変形機構がぶっ壊れ・・・なんかに使えるかと思って刀身と銃身だけ貰ってたんだ。」

百由「それで頑丈かつコストがグラムよりもましなテイルフィングを持っていたのね。」

蓮夜「まあ、丁度テスト機が余ってたみたいだからな。」

百由「それはそうとこれがあればすぐに修理できるわよ!」

それからしばらく経ち、天葉のを覗きCHARMの修理が終了し彼女は明日ということになり彼女達は帰って行った。

百由「それで次の問題はこれだけど・・・。」

蓮夜「普通に使うには問題ないがノインヴェルトが使えないのはある意味致命的だからな・・・。」

百由「いつその事変形機構なくす?」

蓮夜「ある程度頑丈になるだろうけどそれだけだとノインヴェルト

には耐えられないと思うぞ？」

百由「術式の改良もする余地ないしね。」

蓮夜「いつその事刀身を着脱式にするか？」

百由「ダメね、コストが高すぎる。」

蓮夜「・・・それよりも問題はコレだよな・・・。」

百由「・・・ええ・・・それよ。」

2人の視線の先には真つ二つに割れたクリスタルコアがあった、

百由「まさかコアが壊れるなんて・・・そんなの対処のしようがないわよ。」

蓮夜「CHARMに負担がかかりすぎてコアにまで行っちゃったんだろうな。」

その後もしばらく議論が続くが、いい案は出てこない。

百由「今日はこれぐらいにしておきましょうか？幸いあなたはCHARMなしでもどうにかなるし。」

蓮夜「そうだな、このままじゃ確実に沼に嵌るしこの話はまた明日にしよう。」

百由「それなら明日、天葉のCHARMの修理が終わったらまた考えましょう。」

蓮夜「わかった、それじゃまた明日。」

百由「ええ、おやすみなさい。」

こうして彼のCHARMについては明日になった。

天葉「大丈夫、ちゃんと動くわ。」

蓮夜「それは良かった。」

百由「壊さないように注意しなさいよ。」

天葉「気をつけます。」

天葉のCHARMの修理が終わり、彼女の手にCHARMが戻っていた。

天葉「あつ、そうだ蓮夜、あなた今から時間ある？」

蓮夜「どうしたんだ？」

天葉「これからまた模擬戦しない？」

蓮夜「俺、今CHARMないんだが・・・。」

天葉「あなた元々CHARMを使つてなかつたんでしよう？元々の戦い方も気になるし、それにCHARMの調子も確認したいから。」

蓮夜「だけどな・・・。」

百由「それならいいわよ。これから私も用事あるから。あなたが戻つて来たら考えましよう？」

蓮夜「それなら・・・わかつたやろうか。」

天葉「それなら闘技場に行くわよ！」

闘技場に着きこの前のように向かい合つて武器を構える。

天葉「二刀流なのね。」

蓮夜「元々これで戦っていたからな、火力が足りないから手数で補っていたんだ。」

それから2人とも無言になり、

蓮夜「・・・ッ！」

彼が最初に仕掛ける。

右手の剣で突きを放ちながら左の剣を背後に持つていつて隠す。

彼女はそれを躲すとCHARMを横薙ぎに振るう。

それを逆手に持ち替えていた左で防御、すぐさま刀身を外し後方へと下がる。

彼女も危険と察したのかバックステップで距離を取るとその直後地面に刺さった刀身が爆発しそれにより発生した煙で視界を奪われる。

彼女が警戒していると右から何が飛んできたのでそれを弾き飛ばそうとすると紐状の何かが飛び出し、彼女を拘束しようとする。

それを跳んで回避すると飛来した方と逆方向から彼が斬り掛かる。それをCHARMで防御しながらその時の反動で距離を取る。

天葉「正面から来ないのね。」

蓮夜「これでヒュージと真っ向から戦うのは結構キツイからなこういう戦い方を慣れちゃったんだよ。」

天葉「次はどんなものを見せてくれるのかしら?」

蓮夜「それじゃこんなのはどうだ?」

彼は体制を低くして彼女に急接近する。

そこへ六方向から刀身だけの剣が飛んでくる。

それを彼女は上下反転しながら飛びそのまま回転する要領でCHARMを振るい飛んでくる剣を弾く。

彼は追撃として斬り上げを行うが彼女はそれを身体を捻って躲す。

そこから超近距離の応酬が開始される。

しばらく斬撃の応酬が続くが、彼は火力が足りず防御が貫けず、彼女は彼の連撃になかなか反撃に出れず2人とも攻めあぐねていた。

『ピシッ!』

彼の右の剣にヒビが入る。

その瞬間彼女は彼の左の剣を弾き、右の剣を砕き彼に隙をつきCHARMを彼の首に突き付ける。

天葉「私の勝ちね。」

蓮夜「・・・それはどうかな？」

彼の言葉に彼の視線の先に目を向けると、

天葉「・・・！」

彼女の首元にも彼が右手の剣を突きつけていた。

左の剣がなくなっていたので弾かれた瞬間に手首のスナップで左の剣を投げ右手に持っていたものを離しそちらを掴み攻撃したのだろう。

天葉「本当に器用なことをするのね・・・。」

蓮夜「それが取り柄だからな。」

天葉「それにしても引き分けね。」

蓮夜「どうにか俺が持っていた感じだがな。」

2人とも武器を下ろす。

天葉「あなた、二刀流してた方が強いんじゃない？」

蓮夜「CHARMとギアの二刀流やったんだが・・・リーチとかが違くて扱わずらくてな。」

天葉「それならCHARM2本持てばいいんじゃないの？」

蓮夜「俺は円環の御手持ちじゃないから無視だ・・・ぞ・・・。」

彼は何か考えるような顔をし、

蓮夜「CHARMを2本に分割して分散すれば・・・だけどそうしても結局は・・・あのコアを使えばもしかして・・・。」

天葉「何1人でブツブツ言ってるの？」

蓮夜「この手があったか!!」

天葉「!?」

蓮夜「あつ、ごめん。いい案が思いついてな。」

天葉「そ、そうなの・・・良かったわね。」

蓮夜「ああ、本当にありがとう。それじゃ俺は百由に用事ができたから！また今度な！」

天葉「えっ、ええ。また今度・・・。」

彼は百由の部屋へと向かった。

百由「そんなことできるの？」

蓮夜「理論上は可能だな。」

彼は百由の部屋に来る途中に自身の部屋で作ったものを取り出したながら話す。

蓮夜「それに・・・これが出来たら面白そうじゃね？」

百由「ええ、そうね。」

2人はいい笑顔で作業を開始した。

## 第14話

ある日一柳隊は海岸に異変が起きたためその調査に来ていた。

楓「まったく・・・派手にやらかしてくれたものね・・・。」

梨璃「昨日って戦闘ありましたっけ？」

二水「いえ、昨日は何も無かったはずです。」

ミアム「共食いでもしたんじやろうか？」

二水「ヒュージを形作るのは全てマギの力だから、ヒュージはものを食べたりしないはずですよ。」

梨璃「あっ・・・。」

梨璃は何か気付きその場を離れる。

神琳「マギを失えば、ヒュージはその巨体を維持出来ずその場で崩壊するはずよ・・・。軟組織は一晩もあれば無機質にまで分解され、骨格も数日で・・・。」

鶴紗「それがまさにいま・・・。」

雨嘉「この匂いまだマシな方・・・。」

蓮夜「これでマシって・・・やばい時はどんだけだよ・・・。」

梨璃「・・・?」

その時梨璃は何かの繭のようなものを発見し、恐る恐るCHARMを向けて近づけると、

『バチッ』

CHARMが突如反応し、CHARMと繭の間に電流のようなものが走った。



梨璃「わっ！・・・え、何いまの？」

梨璃が自身のCHARMを不思議そうに見ていると、

二水「梨璃どうしたんですか？」

梨璃「あつ、二水ちゃん。今CHARMが・・・。」

二水「えっ？り、梨璃さん！」

二水は彼女の後ろを方を見て驚いていた。

梨璃「え？二水ちゃん、どうしたの？」

そこに梅と楓もやってくる。

梅「どうした？」

楓「なにか見つかりました？」

梨璃「いえ、なんでもCHARMがちよつと。」

二水「り、梨璃さんう、後ろ。」

二水が顔を青くして梨璃の後ろを指さす。

梨璃が後ろを振り返ろうとすると、

梨璃「えっ？うわああっ!!」

梨璃と似た髪色の少女が梨璃に抱きついていていた。

その光景に周りも驚愕している。

夢結「梨璃、何をしているの？・・・!」

梨璃「お、お姉様・・・。」

梅「なんでこんなところに人がいるんだ？」

??? 「あつ……。」

梨璃 「あつ……?」

??? 「ハックション!!」

梨璃 「うわあああつ!?!」

蓮夜 「なにかあつたのか?」

夢結 「あなたは身のためにも見ない方がいいわ。」

蓮夜 「……?なんかやな予感するし見ないでおく。」

こうして一柳隊は少女を保護し学院に向かった。

海岸で保護した少女は治療室で眠っていた。

楓 「ふあく。こんなところにおいても私たちにできることなどありませんわ。」

夢結 「出来ることはしたわ……梨璃、行きましょう。」

梨璃 「あの……わたしもう少しここに居ていいですか?」

夢結 「……わかったわ。」

梨璃 「はい……。」

蓮夜 「それなら俺も百由に呼ばれてるから……なんかあつたら連絡してくれよ?できる限りの事はするか。」

梨璃 「はい、ありがとうございます。」

百由 「海岸で少女をね……。」

蓮夜 「ちよつとおかしいと思つてな?」

百由 「ヒュージの残骸の側でしよう……普通に考えてありえないわ……。」

蓮夜 「やっぱりか……船か何かに乗つててそこをヒュージに襲われたかと思つたんだが梨璃さんに聞いたら外傷はないみたいだし……」

普通何らかの痣や擦り傷程度はできていてもおかしくないんだが……。」

百由「ともかく目覚めて見たいと分らないわね？」

蓮夜「そうだな……。とにかくそういうことだから。」

百由「ええ、わかったわ。それと蓮夜。」

蓮夜「なんだ？」

百由「アレ……。2日後には完成しそうよ。」

蓮夜「まじか、それじゃそれまでに他のものを準備しておく。」

百由「それじゃ2日後にここに来て。」

蓮夜「わかった、それじゃな。」

百由「ええ、さようなら。」

彼は百由の部屋から出ていった。

楓「治療室はお喋り禁止なんですのよ。せっかく梨璃さんといったところで黙ったままどうしろと？」

鶴紗「見舞えよ。」

梅「意外だな。【黙っていても出来ることはありませんわ。】とか何とか言うかと思ってたのに。」

梅が楓のマネをしてそう行ってみると、

楓「なるほど！その手がありましたわ！」

ミアム「あるかー!!」

蓮夜「本当にブレないな……。」

夢結「蓮夜あなた来ていたの。」

蓮夜「ちようど今な。それで梨璃さんの方はなんかあったか？」

夢結「いいえ、梨璃からは何も連絡はないわ。」

梨璃「お姉様！」

梨璃が教材を持って駆け寄ってきた。

夢結「梨璃、どうしたの？そんなに慌てて、あの子が目を覚ましたの？」

梨璃「いえ、まだ寝てます・・・ぐっすり。わたしお姉様に戦術理論で教えて欲しいところがあつたんですけど。」

「キンコーン」

鐘の音が学院内に鳴り響く。

梨璃「うわー。間に合わなかった！これから講義なんです。ごきげんようお姉様。」

彼女は慌てて講義へと向かった。

梅「夢結は授業ないんだっけ？」

夢結「取れる単位は1年生の間に全部取ってしまったから。」

梅「あつそ。じゃあな。」

夢結「ごきげんよう。」

蓮夜「俺は1年の頃いなかったから追加だぞ・・・そうだ講師を論破しまくれば・・・。」

夢結「・・・やめなさい。」

彼も講義のためにもこの場を後にする。

みんなを見送りテーブルを見るとそこには梨璃の忘れていった教科書があつた。

夢結「ふふっ・・・そそっかしいんだから。」

蓮夜「あの子・・・リリイだったのか。」

百由「ええ、それにスキラー値が50で梨璃ちゃんと同じみたいな  
の。」

蓮夜「そうか・・・。」

百由「何か思う事でもあるの?」

蓮夜「いや、なんだかやな予感がしてな・・・。」

百由「それって彼女が何かするかもって言うこと?」

蓮夜「いや、そうじゃなくて彼女に何かやばい事が起きそうな予  
感がするんだよ・・・。」

百由「そう言われてもね・・・。」

蓮夜「専門じゃ無いかもしれないが彼女のDNAとかを調べてみて  
くれないか?そうすれば彼女本人のことや親の場所とが何かわかる  
かもしれないから。」

百由「これは・・・そういうことだったのね・・・やられたわ。」

彼女の目の前には食べかけのチーズケーキが乗ったお皿があった。

蓮夜「暇な時とかでいいから頼む。」

百由「わかったわ。私も気になってはいたし・・・それでアレの  
調子はどう?」

蓮夜「最高だ。どれだけ無茶な使い方をしても壊れないし、これな  
らノインヴェルトも問題なく出来る。本当にありがたいがとうな。戦技競  
技会でお披露目するのが楽しみだ。」

百由「どういたしましたして、こっちも新しい発見ができて面白かった  
わ。」

そして彼が部屋を出て行く。

百由「それにしてもよくあんなのが思いついたわね・・・。」

彼女が立ち上げた画面に映っていた設計図には、  
『DC—00・Orthrus』と書かれていた。

梨璃に呼ばれて一柳隊のメンバーは控え室に集まっていた。

雨嘉「あの子リリイだったの……。」

梅「どこの誰だかわかったのか？」

梨璃「そ、それは、何も思い出せないみたいで……。」

神琳「差し出がましいですが梨璃さん、少々入れ込み過ぎではありませんか？」

梨璃「あの子にだって家族や大切な友達がどこかにいるんです。それを思い出せないって自分の全部が無くなっちゃったのと同じだと思っんです。だから……せめて一緒に居てあげたくて……。」

楓「だとしてもそれが梨璃さんの役割である必然性のないことはわかってらっしゃいます？」

梨璃「それは……そうなのかもしれないけど」

夢結「あなたは一柳隊のリーダーよ。その穴は誰にも埋め合わせる事は出来ません。埋められないものは埋まりません……が、それでも何とかするしかないでしょう……心配しないで梨璃。」

梨璃「は、はい!……ありがとうございます、私のわがままで……。」

夢結「わがままでは無いわ、それは思いやりよ。堂々となさい。」

神琳「こんな時代だもの、誰だって身近な誰かが傷ついているわ。」

雨嘉「手の届くところなら手を伸ばしたいのね。」

梅「そうだ、梅は羨ましいぞ!」

鶴紗「気持ちわかる。」

楓「私だって異存ございませんわ。」

ミリアム「なんでも申してみい。」

二水「私もお手伝いします。」

蓮夜「そうだぞ、このメンバーは梨璃さんのそういうところに引か

れて集まったんだ。だからもつとみんなのことを頼れ。」  
梨璃「みんな・・・ありがとうございます。」

そう言うと彼女は、扉に向かい、  
梨璃「じゃあ、行ってきます!」  
彼女は少女の元へ向かった。

夢結「一度言い出したら聞かなくて、それでいて一度にいくつもの事をこなせる程器用ではないんだから。」

楓「本当に、退屈しないお方ですわ。」

ふとテーブルを見ると紅茶の入ったカップに波紋ができており、足元を見ると、

楓「どうかなさいまして、夢結様?」

夢結「何か?」

楓「夢結様、そうは言ったもののどこか落ち着かないのではありません?」

夢結「・・・多少・・・。」

楓「胸の内がザワザワと?」

夢結「・・・かも、知れないわね。」

楓「ささくれがチクチクと痛むような?」

夢結「何故それを・・・?。」

楓「夢結様、それはヤキモチです。」

夢結「ヤキモチ?・・・私が誰に?」

楓「もちろん梨璃さんの大事なあの子にですわ。」

夢結「・・・楽しそうね、楓さん。」

楓「ええ。それはもう。一匹狼として仲間からも恐れられた夢結様が、梨璃口スで禁断症状とは。ぷぷーっですわ。」

夢結「梨璃口ッ・・・!」

楓「ことこのことにかけては、私に一日の長がありましたよ！」  
鶴紗「威張ることか……。」

その光景を彼は嬉しそうに見ており、

梅「蓮夜、どうしたんだ？」

蓮夜「ああ、夢結があんな表情するのはいつぶりかなと思ってな？」

梅「そうだな……。」

蓮夜「少しづつだけ前みたいに戻り初めて嬉しいんだよ。」

夢結「あなた達、何を話しているの？」

梅「いいや、特になんにもないぞ？」

蓮夜「そんなことよりも、梨璃ロスってなんだよ？……あつ、い

つも楓さんになってるやつか！」

楓「どういう意味ですか！」

このような感じでしたら意味の無い雑談が続いた。

数日後、夢結が紅茶を飲んでいると、

梨璃「ごきげんよう、お姉様。」

声の方を向くとそのには梨璃がいた。

梨璃「お隣いいですか。」

夢結「ええ、どうぞ、梨璃。」

梨璃「ご無沙汰しました！お姉様！」

梨璃は夢結に抱きつく、



夢結「どうしたの？ちゃんとしなさい。」

梨璃がテーブルを見るとそこには自分が無くしたはずの教科書があった。

梨璃「あつ！それわたしの教本！お姉様が持っていてくれたんですか？」

夢結「さあ、たまたまよ。」

梨璃「ありがとうございます。」

彼女達の後ろで、

楓「聞いてられませんわ！」

神琳が楓にハンカチを差し出し、

神琳「さあ、これで涙を。」

楓「泣いてませんわ！」

夢結「・・・？」

夢結は肩への重みに気が付き隣を見ると、そこには1人の少女が頭を自身の肩に乗せていた。

夢結「あなた・・・この間の・・・。」

ミリアム「ほう、元気になったか？」

二水「で、その制服！」

梨璃「うん、正式に百合ヶ丘の生徒にして貰ったって。」

雨嘉「編入されたってこと？」

神琳「まあ、可愛い。」

梨璃「ほら、ご挨拶して、こちらは夢結様だよ。」

??「ゆゆ？」

梨璃「もう、ちゃんと練習したでしょう？自己紹介しようよ。」

??? 「なんで？」

ミリアム「なんじゃ、梨璃とこの娘？」

二水「姉と妹って感じですよ。」

楓「ちよつとあなた達狭いわよ。」

鶴紗「もつと詰める。」

梅「私も見たいぞ！」

少女はテーブルに置いてあるスコーンが気になるようで、

??? 「これなに？」

夢結「スコーンよ、食べたいの？ 食いしん坊さんね、誰かさんのよ  
うだわ。」

梨璃「わたしですか！」

梅「夢結にもう1人シルトができたみたいだ！」

??? 「食べていい？」

夢結「ちゃんと手を吹くのよ。」

雨嘉「妹と言うか……。」

ミリアム「……母と娘じゃな。」

??? 「ゆゆ、お母さん？」

夢結「産んでないわよ。」

??? 「じゃあお父さん？」

夢結「違いますから。」

楓「で、この子の名前はわかったのですの？」

梨璃「それが……まだ記憶が戻ってなくて……。」

梅「それじゃ、今までなんて呼んでいたんだ？」

梨璃「えっ!？」

二水「1週間近くありましたよね？」

梨璃「それは……。」

夢結「言ってご覧なさい、梨璃。」

??? 「結梨。」

夢結「!？」

夢結は少し紅茶を吹き出す。

楓「はあ!？」

梨璃「うああ、それは……。」

結梨「わたし結梨! 梨璃が言ってた。」

梨璃「そ、それは、本名を思い出すまでの世を忍ぶ仮の名で」

二水「それ、わたしが夢結様と梨璃さんにつけたカップネームじゃないですか!」

梨璃「い、いえ、あ、あのそれは……。」

神琳「あら、いいんじゃないでしょうか。」

雨嘉「似合っる……と、思う。」

梅「なんか、愛の結晶って感じだな。」

鶴紗「一緒に猫缶食うか?」

蓮夜「食わすな!」

梨璃「あ、黒鉄さん。」

蓮夜「騒がしいから何やってんのかと思ったが……ん?」

彼はようやく結梨に気づき、

蓮夜「あの時の……はじめましてかな? 俺の名前は黒鉄 蓮夜、よろしくね……えっと……?」

結梨「結梨!」

蓮夜「ありがとう。もう一度、よろしくね、結梨さん。」

結梨「よろしく、蓮夜。」

蓮夜「ああ、よろしく。」

彼が結梨に挨拶をしていると、

二水「そこで何をしていますか楓さんは?」

楓「い、いつの間にやら、既成事実が積み重ねられてますわ！」

ミアム「じゃあ決まりじゃの。」

二水「その名前でレギオンにも登録しゃいますね。」

梨璃「二水ちゃん!？」

二水「苗字はひとまず一柳さんにしときますね?」

梨璃「ええ!？」

夢結「いいんじゃないかしら? 梨璃。」

結梨「美味しい。」

ミアム「あ、いいな、わしにもくれ。」

こうして少女の名前が『一柳 結梨』に決まり、正式に一柳隊の仲間になった。

## 第15話

結梨「へえ。これが指輪？」

梨璃「嵌めてみて。」

結梨「うん。」

結梨が指輪を嵌めると、マギが指輪に流れ光りだす。

結梨「ほお。」

神琳「これであなとも正式に百合ヶ丘のリリイの一員ね。」

夢結「指輪にあなたのマギが馴染むまで、しばらくそのままにして。」

結梨「どんくらい？」

夢結「2、3日くらいね。そうすればCHARMとも契約が出来るようになるわ。」

蓮夜「これって結構時間が掛かるんだよ。俺の場合は何故か1週間も掛かったし……。なんでこれが必要なんだ？て初めの頃は思ってたな。」

夢結「CHARMと契約して扱うためよ。あなたも説明は受けていたでしょう？」

蓮夜「受けてはいたが、元々契約とか要らないもので戦ってたからな。」

数日後、結梨がCHARMに触れるとコアが光り彼女とCHARMとの契約が完了した。

結梨「おお。」

楓「ふん！北欧の田舎メーカーじゃなくグランギニョルでしたら社割でワンランク上のものが入りますのに。」

ミリアム「このグングニルは中古じゃが、わしら工廠料が丹精込め

て全ての部品を一から組み直しておる。新品より扱いやすいぞい。」  
楓「あらそう。」

蓮夜「それにこれは百由が改造したやつだからな。性能も折り紙つきだ。」

ミリアム「なんじゃと！わしはそんなこと知らんぞ！」

蓮夜「だってこの刀身と銃身、百由が性能向上のためにつてバインドを術式に組み込んだやつだぞ？俺も手伝ったから見覚えがあるし。」

ミリアム「何を組み込んだのじゃ！」

蓮夜「確か、重量軽減に耐久性向上、あとはマジ伝導率向上だったかな？グングニルだから扱いやすさ重視にするって言ってたし。」

ミリアム「・・・それなら問題なさそうじゃ・・・。」

結梨「ねえ梨璃、リリースってなんで戦うの？」

梨璃「え？えっと、それはヒュージからみんなを守るため・・・。」

夢結「誰だって、怯えながら暮らしたくない・・・それだけよ。」

結梨「くんくん。」

結梨は夢結に近づき匂いを嗅ぎ始める。

結梨「夢結、悲しそう。」

夢結「表情が読めないとはよく言われるけど。」

梅「なんだ匂いでわかるのか？」

彼女は次に梨璃と少し離れたところにいる蓮夜を除く全員の匂いを嗅ぎ始める。

そしてソファアに座ると、

結梨「みんなも悲しい匂いがする。」

神琳「誰だって何かを背負って戦っているわ。そういうものかもね。」

結梨「くんくん……。梨璃はあんまり匂わないのに……。」

梨璃「お気楽なのかな？わたし、あはは……。」

楓「いいんですのよ！梨璃さんはいつまでもそのまま、純新無垢さが梨璃さんの取り柄ですもの！」

鶴紗「無い物ねだり……。」

ミリアム「じゃなじゃな。」

結梨「くんくん……。あつ！でも今の夢結は梨璃がいるから喜んで。梨璃が居ないといつも寂しがってるのに……。」

夢結「そ、そうかしら……。」

二水「夢結様が動揺してます。」

ミリアム「匂いは誤魔化せないようじゃな。」

そして彼の匂いを嗅いでないことに気がついたのか結梨は彼に近づき匂いを嗅ぎ始める。

結梨「くんくん……。あれ？」

梨璃「どうしたの、結梨ちゃん？」

結梨「分からないの……。」

梨璃「どういうこと？」

結梨「蓮夜から何も匂わないの……。」

蓮夜「俺ってそんなに能天気だったのか？」

楓「そうは見えませんが……。」

夢結「……。」

結梨が元の場所に戻り、

結梨「わかった！結梨もヒュージと戦うよ！」

梨璃「無理しなくていいんだよ。まだ記憶も戻ってないんだし……。」

結梨「うん、ちっとも分かんない、だから沢山知りたいたいんだ。」

梨璃「結梨ちゃん……。」

梅「あはは、そんなこと言われたら断れないな。」

神琳「さて、結梨さんのこともひと段落したところで、次は雨嘉さんね。」

雨嘉「・・・？」

神琳「これとコレ。」

神琳が何かを取り出す。

雨嘉「えっ？」

神琳の手には巫女のような衣装とメイドが付けてそうなエプロンが握られていた。

神琳「この日のために用意したの。」

ミアム「こんなものもあるぞい、ウヒヒ。」

鶴紗「あく猫耳も外せない。」

2人の手にもドレスのようなものと猫耳があった。

雨嘉「・・・いや、やめて。」

雨嘉は逃げようとするが捕まり、3人に着せ替え人形にされる。

梨璃「神琳さん達何をしてるのかな？」

二水「雨嘉さんをコスプレ部門に出場させるって。」

楓「雨嘉さんを？ちよつと地味じゃありません？」

二水「まだ何にも染まっていけないのが言いそうです。」

楓「そういうものですか？」

梅「お前、本当に梨璃にしか興味ないんだな・・・。」

楓「そりゃそうですわ！はわっ!？」

雨嘉の方を向くと、

猫耳和風メイドのような姿になった雨嘉がいた。



神琳「やりましたわ！」

ミリアム「やりきったのう！」

雨嘉「えっ、えくくと……。」

鶴紗「可愛い。」

梅「おお、わんわん可愛いな！」

雨嘉「えっ……？」

神琳「黒鉄さん、雨嘉さんはどうでしょうか……あら？」

神琳が彼にも意見を聞こうと部屋を見渡すが、彼の姿はどこにもなく、

神琳「黒鉄さんはどこに行っただのでしょうか？」

梨璃「あつ、黒鉄さんならんだかいや予感がすると行って雨嘉さんの着替えが始める前に出ていきました！」

神琳は彼を呼び戻したのだった。

数日後、学院の生徒はクラウドに集合していた。

二水「まずは、クラス対抗戦ですね。わたし達1年椿組は二人一組で技を競います。」

楓「うふふ、お邪魔虫の入らないここならば無防備な梨璃さんは私の思うがままですわ。」

彼女は梨璃の手を握ろうとしたが、見てみると握っていたのは結梨の手で、

楓「あら？な、なぜ結梨さんがここに？」

結梨「わたしも椿組だから。」

楓「なんですって！」

梨璃「編入されてもう1週間たってるよ。」

楓「お邪魔虫2号……。」

神琳「先生の話聞いていないのですか？」

楓は清々しい顔で、

楓「あいにく都合の悪いことは記憶に残さないたちなので。」

鶴紗「ポンコツか……。」

午前の競技が終わり、午後の部がはじまった。

二水「午後1番の競技は、混成レギオンによる的と棒倒し、的を落とすか棒を倒せば勝ちです。」

結梨「よし、頑張るぞ！」

梨璃「ああ、わたし達は見学ね。」

結梨「なんで？」

梨璃「この競技は各レギオンから選抜されたメンバーで行うんだって。」

梅「結梨、梅と変わるか？」

結梨「……？」

梅「習うより慣れろって言うだろ。」

梨璃「そんなダメですよ！結梨ちゃんはまだCHARMにも慣れてないですし、怪我したらどうするんですか！」

梅「へいへい……。」

結梨「むうー。」

蓮夜「やつと出番が回って来たな。」

夢結「やるからには、勝ちに行くわよ。」

蓮夜「わかってる、元々そのつもりだ。」

彼もこの競技に参加しており、参加メンバーは、

緑チーム

- ・二年：吉村・Thi・梅
- ・二年：谷口 聖
- ・一年：森 辰姫
- ・一年：倉又 雪陽
- ・一年：黒川・ナデイ・絆奈

青チーム

- ・二年：白井 夢結
- ・二年：黒鉄 蓮夜
- ・一年：田中 壺
- ・一年：清家 知世
- ・一年：北河原 伊紀

黄色チーム

- ・二年：竹腰 千華
- ・二年：石上 碧乙
- ・一年：楓・J・ヌーベル
- ・一年：高須賀 月詩
- ・一年：金箱 弥宙

オレンジチーム

- ・三年：村上 常磐
- ・二年：山梨 日羽梨
- ・一年：郭 神琳
- ・一年：遠藤 亜羅椰
- ・一年：伊東 閑

ピンクチーム

- ・三年：遠野 捺輝
- ・三年：田村 那☒
- ・三年：ロザリンデ・フリーデグンデ・v・オットー
- ・二年：木古 都々理
- ・一年：ミリアム・ヒルデガルド・v・グロピウス

となっていた。

蓮夜「なんかミリアムさんのところだけ三年生多くないか？」  
夢結「クジなのだから仕方がないでしょう。・・・それで、そのケースは？」

彼はCHARMケース2つ腰に下げている、

夢結「あなたのレアスキルは円環の御手ではなかったはずだ  
ど・・・。」

蓮夜「これか？まあ、始まってかのお楽しみだな。」

メンバーの様子を見ると、壺がミリアムに対して何かのジェスチャーをしており、

ミリアム「ちびっ子には負けんじやと・・・にやろめーい！」

二水「競技開始です！」

競技が始まるとすぐ、

弥宙「私とお手合わせお願いします。夢結様！」

月詩「こんな時でないと構って貰えませんから！」

辰姫「倒しちやったら、ごめんなさいです！」

3人が夢結へと向かって突っ込む。

亜羅椰「ちよつと抜けがけしないでよ！」

3人に対して夢結は構えて迎え撃つ。

依奈「こら！夢結は敬遠しなさいって言ったでしょう！」

天葉「しょうもない子達ね。」

樟美「いいな。」

依奈「それに、蓮夜がヤバそうなのを持って突っ込んで来てるから防衛に周りなさいよ！」

天葉「それにしてもCHARM2つか・・・だけど彼のレアスキル円環の御手じやなかったような・・・？」

弥宙・月詩・辰姫『いぎ！』

夢結「ハア！」

3人には夢結に瞬殺されていた。

夢結「もつと本気でいらっしやい。」

蓮夜「あつちも派手にやってるし俺もやるか！」

彼がケースに手をかけるとケースが分離して中のものが現れる。

出てきたものは射撃形態にそのまま刀身を付けたような変形機構の見当たらない2振りのCHARMだった。

コアも側面ではなく持ち手とサイトのようなもの間に付いており、一般的に使われているCHARMに比べて無骨さの目立ち、その表面は黒く輝いていた。

彼はそれをそれぞれを緑とオレンジチームの的に向けて狙いを定め、接近しながら打ち込んだ。

その射撃は当然防がれるが、その隙をつきピンクチームが緑チームへと攻撃を仕掛けたためオレンジチームへと接近する。

神琳「この先には行かせませんよ？」

蓮夜「いいや、通らせて貰うぞ！」

彼が射撃を行うが彼女はそれを受け流し全ての攻撃を防ぐ、そこに彼が急接近し右で突きを放つ。

彼女はそれもガードし射撃形態に変えて近距離で打ち込む。

それを下がりながらCHARMで弾きまた射撃を行う。

彼女はこちらを倒す気はないようで自チームの棒から離れず牽制と防衛に専念する。

しばらく膠着状態が続いたその時、

ミリアム「必殺！フェイストランセンデンス！」

ミリアムが壺に向けて砲撃を放つ、

壺「避けてしまえば皆同じよ！」

ミリアム「へへへっ、避けてくれてありがとうなのじゃ。」  
壺「えっ！」

その砲撃は壺ではなく青チームの的を狙っていたようで、彼女の攻撃が的へと迫る。

蓮夜「やらせねえよ！」

彼がすぐさま棒のすぐ近くに置いてあったギアを起動、そのまま浮遊させて砲撃と的の間に滑り込ませる。

そのギアは盾の形をしており表面は鏡のようになっていた。

ギアに当たると反射しその砲撃は神琳のすぐ近くへと打ち込まれる。

神琳「ぎゃあ！」

その隙に彼女の横をすり抜けてオレンジチームの棒へと向かう。

亜羅椰「やらせないわよ！」

亜羅椰がすぐさま彼を抑えようと迫る、

彼は彼女に向かって射撃を行い、

亜羅椰「そんなもの当たりません！」

亜羅椰が最小限の動きで躲そうとすると、弾丸は網状に広がり彼女を拘束する。

亜羅椰「ちよっ、何よこれ！」

彼女が網から抜け出せないうちに彼は的へと射撃をしそれは的に命中、オレンジチームはリタイヤとなる。

壱「防がれたようね。グロピウスさん、貰ったわ！」

ミアム「だと思っていたわい！」

その頃ミアムは1回その場で回転しすぐさま壱へと狙いを定め直し、

ミアム「2回目の必殺！フェイストランセンデンス！」

2度目の砲撃が打ち込まれる。

壱「えっ!?!きやあ！」

それは壱に命中し彼女は気絶する。

ミアム「まあ、わしが本気を出せばこのくらい……。」

彼女も倒れ、2人ともリタイヤとなった。

蓮夜「よっし、次は……。」

彼が周囲を確認すると、夢結がオレンジチームへと咬月を仕掛けており、楓以外は全員やられていた。

蓮夜「あっちはすぐ終わるだろうし、俺は」

緑チームとピンクチームの乱戦に乱入しようとそちらを向くと、

梅「隙だらけだぞ！」

蓮夜「・・・！」

後ろを見ると、梅がCHARMを横薙ぎに振ってきており、迎撃が間に合わないかと判断すると彼はそれをしゃがんで回避、そのままを見ずに射撃、左手のCHARMを手放し懐からソーンのギアを取り出し地面に投げる。

梅「おっと！」

梅は縮地を使いそれを回避するが、その間に彼も体勢を立て直した、

蓮夜「梅、チームの防衛は大丈夫なのか？」

梅「問題ないぞ！残りは蓮夜と夢結のチームと楓のチームだけだからな！」

その言葉に、ピンクチームの陣地を確認すると棒が倒れており守っていたであろう生徒が呆然とそれを見ていた。

蓮夜「お前・・・縮地で奇襲仕掛けたな？」

梅「よくわかったな！三年生が多かったからさすがにキツかったから速攻で落としてきたぞ！」

蓮夜「俺も同じ理由であそこは避けてたが・・・結構お前も容赦ないな。」

梅「戦いなんてそんなものだろう？とにかく次をやるぞ！」

梅は縮地を使い彼に急接近しその勢いのままCHARMを振り下ろす。

それを左で受け流し右で突きを繰り出すが、それはあっさりと躲されてしまう。



彼が両手のCHARMで射撃を仕掛けるが、彼女はそれを紙一重で躲し急接近そのまま今度は横薙ぎに振ってくる。

それを防ぎそのまま押さえ込もうと考えたのか彼はCHARMをクロスさせて守りを固めるが、彼女は身体を捻りそのまま体ごと逆向きに回転させて守りの薄い反対側に攻撃する。

それが命中し決着が着いたと思ったが、攻撃を受けた彼の姿が歪みそのまま消えてしまう。

彼女は何かを感じたのか何もない方向にCHARMを向けると、そこから弾丸が飛んできた。

それを防ぎ飛んできた方向を見ると、空間が歪みそこから彼が姿を現した。

蓮夜「やっぱり一筋縄では行かないか・・・。」

梅「いつの間にかを仕掛けたんだ？」

蓮夜「今は言えないな！」

今度は彼が彼女に向かって急接近しながら射撃を行う。

彼女はそれを難なく回避するが回避した方向には彼がおり両手のCHARMでの斬り下しをする姿があった。

それを間一髪で躲し縮地を発動、彼の後ろをとる。

それを斬り下しの勢いを利用し、前転の要領で回避した彼は腕の力で飛び上がり、上下逆さまのまま彼女に向かって射撃した。

チャンスと感じたの彼女は弾丸を気にすることなく急接近しそのまま攻撃を仕掛けるがそれは彼がCHARMをクロスさせて防がれる。

だがその一撃で彼の体勢は崩れ。

梅「私の勝ちだな！」

彼女はCHARMを振り下ろす。

しかし、

夢結「これは個人戦じゃないのよ？」

そんな彼女の背後から声が聞こえ振り向くとそこには、  
CHARMを射撃形態で構えた夢結がいた。

蓮夜「隙だらけだ！」

梅「しまっ！」

彼は梅のCHARMを弾き、その直後彼女へと夢結の放った弾丸が直撃する。

これにより彼女は動けなくなり、梅はリタイヤとなった。

夢結「お疲れ様。」

蓮夜「そっちこそ、あとありがとな、マジで助かった。」

夢結「どういたしまして。」

蓮夜「あとは緑チームだけだな。」

夢結「・・・そうね。」

その後すぐに緑チームの棒は倒され、青チームの勝利となった。

CHARMの簡単な点検を終え、彼女達の元に向かうと、

ミリアムがやるはずだった百由作のヒュージロイドとのエキシビジョンマッチに結梨が出ており、CHARMを向けながらヒュージロイドの前に立っていた。

蓮夜「これってミリアムさんが出るんじゃないかったのか？」

梅「ああ、それならミリリンの代わりに登録し直しといたぞ。」

梨璃「そんな！」

梅「相手は百由の作ったなんかだろ？大丈夫じゃないか。」

楓「百由様だから心配なのでは？」

蓮夜「確かあれっても」

彼がなにか言おうとすると地面から檻のようなものが現れて結梨とヒュージロイドを囲う。

百由「あらら、間に合わなかったか。」

梨璃「あつ、百由様、どうにかしてください！」

百由「いや、この檻勝負が終わるまであかないのよ。」

梨璃「ええ〜！」

梅「要は結梨が勝てばいいんだろ？」

雨嘉「エキシビジョンだから当然リリイが勝つように設定して……ありますよね！」

百由「いいえ、その逆よ！ゴリゴリにチューニングして、グロツピもイチコロのはずだったのに……結梨ちゃんが危ないわ！」

自信満々に説明を始めた百由だったが徐々に顔色が青くなり、

ミリアム「百由様！いつたいわしをどうするんです気だったんじゃない？てっ、慌てるのが遅いわ!!」

百由「名付けて、メカ・ルンベルシュティルツヒエン君よ！」

ミリアム「名前まであるのか！よっぽどお気に入りじゃのう！」

2人が言い争っている横で、

梨璃は檻にしがみつきながら膝をついていた。

梨璃「初心者が無茶するのはわたしの役目じゃなかったんですか〜!?!」

神琳「時代が変わったのでしょう。」

二水「はい！百合ヶ丘のゴシツプは今やすっかり謎の美少女、結梨ちゃんに取って代わられましたから！」

梨璃「二水ちゃんまで!?!」

結梨「梨璃！わたしやるよ！」

梨璃「結梨ちゃん……。」

結梨「わたしもリリイになりたいの！リリイになってもっとみんなのことが知りたいの！だから見てて！」

夢結「信じなさい梨璃、あの子はちゃんと見ているわ。あの子をちゃんとご覧なさい。」

蓮夜「そうだぞ梨璃さん・・・ヤバそうになったらヒュージロイドにこれ撃ち込んで破壊するから！」

そう言いながらCHARMを一本取り出し懐から取り出した弾丸を装填し檻に銃口をねじ込むように入れて構えた。

梅「それはなんなんだ？」

蓮夜「これか？これは徹甲起爆弾っていつてギアを弾丸代わりにして撃ち込んだ対象を内部爆発させるものだよ。さつき使ったネットの別タイプみたいなもの。」

梅「それ・・・結梨も危ないくないか？」

蓮夜「大丈夫だ、内部だけに影響を与えるやつだからそもそも小規模出しあの大きさなら内部のものが飛び出してくることはないから。」

結梨がヒュージロイドに向かってCHARMを構える。

その構えは先程の夢結と酷似していた。

雨嘉「あれは！」

鶴紗「夢結様の型・・・。」

ヒュージロイドが起動し回転をしながら腕部にて結梨を攻撃する。それを結梨はCHARMで防ぐがその一撃は重くCHARMが軽く弾かれる。

そこにヒュージロイドは畳み掛けるように連続で攻撃を行うが、彼女はそれを何度か防ぐ。

那岐「押された時は間合いを足りなさい！」

ロザリンデ「そう、相手のペースは崩すためにあるのよ！」

眞悠里「止まらずに動いて！相手に隙を作らせれば勝機がある！」

相手の攻撃を逸らした彼女はヒュージロイドの頭部を足場に相手の上をとり攻撃しようとするがヒュージロイドが腕を伸ばし攻撃をしてきたので防御する。

そのまま地面に着地し接近、ヒュージロイドが大ぶりの振り下ろしをしてくるがそれを前転の要領で躲し一撃を入れる。

周りの生徒からの応援の声が聞こえ、

梨璃「みんな・・・。」

夢結「梨璃、私が最初に手ほどきした時のこと覚えているでしょう。最初に教えたのは？」

梨璃「はい、あえて受けて流して斬る。」

夢結「そう、ほら。」

ヒュージロイドの攻撃を体勢を低くしてCHARMで流し、

梨璃・夢結「あえて受けて、流して・・・斬る！」

ヒュージロイドの動きが止まったその瞬間、彼女はCHARMで相手の胴体を横一閃に斬り裂く。

そのまま体勢を変えて縦に斬り裂きヒュージロイドは十字に斬られそのままバラバラになった。

吏房「やったー！つと、失礼。」

高松「・・・。」

結梨はこちらに振り向き。

結梨「梨璃！みんな！見てた。わたし、出来たよ！」  
元気にこちらへと駆け寄って来る。

梨璃が結梨に抱きつき、

梨璃「うわぁーん、結梨ちゃん偉いよ〜！」  
結梨「うんうん、泣くな梨璃！」

結梨は梨璃の頭を撫でていた。

その後、雨嘉がコスプレ部門の最優秀リリイに選ばれ戦技競技会は幕を閉じた。

鶴紗「雑なオチだな・・・。」

雨嘉「にや、ニヤ〜。」

鶴紗「ふにや〜!!？」

そうして、雨嘉はリリイ新聞に載り、本人は羞恥心のあまりしばらく部屋に引きこもった。

## 第16話

蓮夜「なんで俺は、ここにいるんだ？」

彼は講義が終わり部屋に帰ろうとしていた時、天葉に捕まり闘技場に連れてかれていた。

依奈「ごめんね。いきなり連れてきちゃったみたいで。天葉には後でキツク言っておくから。」

天葉「ちようど蓮夜がいてこの後暇だっただけだからいいかなって……。」

依奈「そうだとしても説明もしないで無理矢理はダメでしょう！」

天葉「ごめんなさい。……謝ったから足崩していい？」

依奈「ダメよ！しばらくそのままにしていなさい！」

彼が理由が分からず依奈に説明を求めると、すぐ彼女は連れてきた張本人である天葉を正座させていた。

蓮夜「それで2対2の模擬戦したいけど3人しか今いないから俺も参加して欲しいってことで合ってるか？」

依奈「ええ、そうよ。私は亜羅椰と組むから天葉と組んで欲しいんだけど……いいかしら？」

蓮夜「問題ないぞ。天葉とは何回も模擬戦してるから癖もわかるし。」

依奈「助かるわ！それじゃ5分くらい作戦会議の時間を設けてから始めることにしましょう！私たちはあつちで話し会うから、あと天葉……もういいわよ。」

天葉「あ、足が……。」

蓮夜「痺れてるみたいだが大丈夫なのか……これ？」

依奈「大丈夫でしょ？亜羅椰行くわよ。」

亜羅椰「はい！それでは黒鉄先輩……競技会での借りを返させて

いただきますので。」

2人は闘技場の反対側へと向かって行った。

蓮夜「足・・・大丈夫か？」

天葉「ええ・・・なんとか。」

蓮夜「それでどうする？こっちも考えとかないヤバイぞ。」

天葉「そうよね・・・初めて組むし前衛後衛を分けておいた方がいいわね。貴方は前衛と後衛どっちが得意？」

蓮夜「どっちも行けるぞ？そっちに合わせる。」

天葉「それなら後衛を頼めるかしら？私のCHARMだと援護がしづらいから。」

蓮夜「わかった。それなら俺は後ろから射撃で援護しつつチャンスが来たら凸るでいいか？」

天葉「それでいいわ。あと・・・何か依奈に仕返しできるものない？」

蓮夜「仕返して・・・お前、自業自得じゃないか・・・。」

天葉「そ、そうだけど・・・正座つらいのよ・・・。」

彼女はこちらを目を潤ませながら見てくる。

蓮夜「その顔をやめろ・・・それなら・・・。」

彼は懐からあるものを取り出し彼女に渡す。

天葉「これは？」

蓮夜「これはな・・・。」

5分が経ち両組み少し離れた位置で向かい合って、

依奈「それじゃ始めるわよ！」

彼女は端末を操作すると彼らの端末がカウントダウンを開始する。



『ビーツ』

模擬戦が開始された。

開始直後天葉が前に飛び出し、彼が相手2人にCHARMを向けて射撃を開始する。

相手側も亜羅椰が飛び出し、依奈が天葉に向かって射撃を開始した。

天葉は依奈の射撃をCHARMで弾きながら亜羅椰へと接近する。それに対して、亜羅椰は彼の射撃を回避し攻撃が間に合わないと察したため守りの体制にはいる。

依奈も危なげなく回避し今度は彼に向かって射撃を開始する。

天葉「ハアー！」

天葉の攻撃を亜羅椰が受け止めるが、余りに強く反撃ができず動きが止まる。

そこに彼女は連撃を叩き込み亜羅椰の体制を崩そうとする。

亜羅椰「・・・！」

天葉「そろそろ！反撃しないと何もしないまま負けるわよ！」

彼女の攻撃は隙がなく亜羅椰は押されている。

そこに依奈が援護をしようとするがそこに彼が射撃で阻止する。

依奈は射撃形態から剣形態に変えて彼に向かって接近、そのまま近接戦闘に仕掛ける。

彼も射撃をやめて、彼女を迎え撃つ。

彼女がCHARMで突きを放ち、それを彼は半身になって躲しそのまま左のCHARMで攻撃する。

それを突きの体制のまま前に走り抜けるように回避する。

それに彼は振り向きながら射撃を仕掛けるが、彼女は振り向かずそのまま横に回避、そのまま後ろを見ずに彼へとCHARMを後ろに向け射撃をする。

それを上半身を逸らして回避しそのまま接近し攻撃を仕掛けるが彼女はそれを受け流しつつ後ろへと下がる。

依奈「あなた本当に強いわね！」

蓮夜「そりやどうも！」

彼はまた彼女へとCHARMを連射する。

『ダダダダダダ』

それを彼女はCHARMを盾にしながら接近する。

だが彼はそのまま射撃を続け、

『ダダダダダッンダダダ』

依奈「きゃあ！」

突然の強い衝撃に彼女は吹き飛ばされ体勢を崩しそのまま地面に転がる。

そこに彼は接近しながら射撃を仕掛けようとするが、

亜羅椰「フェイストランセンデンス！」

亜羅椰がフェイストランセンデンスを発動、そのため依奈を警戒しつつ声の方を向くと、CHARMを斧形態に変形させたこちらに急接近してきた。

その後ろから天葉が追ってきているが追いつけそうにない。

亜羅椰「やあー！」

亜羅椰は大ぶりにCHARMを振り下ろすが、彼は左のCHARMで受け流しそのまま右で反撃を仕掛ける。

それを振り下ろした反動を利用して棒高跳びの要領で回避しそのまま依奈の所へと向かう。

そこに天葉が追いつき、

天葉「ごめん！」

蓮夜「大丈夫だ！依奈が体勢を崩してる！このまま一気にやるぞ！」

天葉「えええ！」

そのまま2人は接近し体勢が整っていない依奈とそれを庇う亜羅椰に畳み掛けるように攻撃を仕掛ける。

天葉が近接形態で横薙ぎの斬撃を、彼は亜羅椰の左側に移動し射撃を仕掛ける。

依奈「亜羅椰、射撃を防いで！」

依奈の声に瞬時にCHARMを盾代わりにして弾丸から自身と依奈を守り、依奈体勢を崩したままは攻撃してくる天葉に向かって射撃をする、天葉はCHARMで弾丸を弾きまた攻撃を仕掛けようとするが依奈は射撃を続けて天葉を押し返す。

射撃を仕掛けていた彼が亜羅椰に接近し右で攻撃する。

それを防ぐがそのまま彼は左で突きを放つ。

亜羅椰にはその突きが死角になっており、彼女はその攻撃に気づいていない。

突きが当たる直前で依奈が自身のCHARMを滑り込ませる形で防ぐ。

そのまま2人で力任せに彼を押し返し、依奈は体勢を整えた。

蓮夜「あれで無理だったか・・・やっぱり強いな！」

天葉「それは依奈だからね！強くて当然よ！」

依奈「どうにか凌げたわね・・・亜羅椰まだやれる？」

亜羅椰「大丈夫です、依奈様！」

今度は彼が2人に急接近しながらCHARMを振り上げ攻撃を仕掛けようとする、彼女達は防御しようとするが彼はそのまま跳び上がり上から射撃を仕掛ける。

それをCHARMで2人が防いでいると、天葉がCHARM射撃形

態にした状態で横薙ぎに構える。

依奈は嫌な気配を感じて警戒すると、

天葉のCHARMの銃口からマジで出来た刀身の3倍近くの長さの剣が展開されそのまま2人に切りかかる。

依奈「うそ!?!」

亜羅椰「ちよつ!?!」

依奈は上半身を逸らして回避し、亜羅椰はしゃがむように回避する。

依奈「ちよつと!?!なんなのよ今の!?!」

蓮夜「どうだ、俺が作った特殊弾は、結構厄介だろ?」

依奈「厄介にも程があるでしょ!?!普通銃口からレーザーブレードみたいなのが飛び出してくるなんて誰が想像するのよ!?!」

蓮夜「俺だが?」

依奈「どんな思考回路してるのよ!?!」

唐突な口喧嘩が始まり、天葉と亜羅椰は呆然としていた。  
その時、

『ピロリンーピロリンー!』

彼の端末が鳴る。

それはレギオンの緊急時のメール用の音声で、

蓮夜「ごめん!?!ちよつと待ってくれ!」

彼は急いで内容を読むと、それは夢結から送られたもので、

『結果に捕縛命令が出ました。梨璃が結梨を連れて逃亡中、みんなすぐレギオンの控え室に集まって。』

と書かれていた。

蓮夜 「ごめん緊急で用事が出来たから今日はここまででいいか？」

依奈 「えっ？どうしたの？」

蓮夜 「今は言えないから今度話す！」

依奈 「わかったわ・・・ちゃんと後で説明しなさいよ！」

蓮夜 「本当にすまん！今度お詫びにケーキ持ってくるからそれじゃ！」

彼はそう言いながら急いで闘技場を後にする。

走りながら誰もいないことを確認し、端末で百由に連絡を取る。

彼女はすぐに出て、

百由 「結梨ちゃんのことね・・・。」

蓮夜 「何があつたんだ！急に捕縛命令なんて！」

百由 「簡単に言うとなあなたの予感が当たっていたのよ・・・。」

彼女はG・E・H・E・N・A・とグランギニョルが共同研究によつてヒュージの細胞から作られた人工リイだったの、それをG・

E・H・E・N・A・とグランギニョルは政府に使つて百合ヶ丘に捕縛命令を出したの！

今から理事長代行と私で彼女は人間であることを証明して捕縛命令を解除させに行くわ！あなたに頼まれてたから詳しく調べてたら証明材料も沢山あるからどうにかなると思うわ！」

蓮夜 「頼む・・・。」

百由 「任せて！必ず結梨ちゃんが人間だって証明して見せるわ！」

彼女が通話を切りつたのですぐに端末をしまい控え室へと急ぐ。

「彼が控え室に到着すると、楓以外がみんな集まっていた。」

蓮夜「すまん、遅くなった!」

夢結「遅いわよ!」

蓮夜「闘技場にいたから時間が掛かっちゃった。理由は百由に連絡取って確認済みだ。」

夢結「それならあなたはどうするの?」

蓮夜「そりゃ、時間稼ぎだな!」

神琳「なぜ時間稼ぎなのですか?」

蓮夜「誰にも言ってなかったが、百由頼んで結梨さんのことを調べて貰ってたんだよ。DNAとかで親御さんや所属ガーデンがわかるかもと思っただけ?」

神琳「どうして私たちにその話をして下さらなかったのですか?」

蓮夜「期待させて見つかりませんでした。……と思ってな……。って! そんな事よりもこれから理事長代行と百由が政府に説得に行くから、証明材料はもう確保済みだから今日中にはどうにかできるらしい。」

夢結「そういうとこね……。命令が撤回されるまで梨璃達が捕まらないようにしよう。」

蓮夜「そういうことだ! 保護だとバレたら居場所を教えるようなものだしな。俺は探している人達の説得と妨害をするつもりだ! 百由からさっき説得に使えそうなデータを貰ったからな。みんなにも送っておく。」

彼は自身の端末を操作しここにいる全員に百由から貰ったデータを送った。

何かあった時のため梨璃が何処に居そうかを話し合っていると、

楓「皆さんお揃いですわね。」

楓が中に入ってくる。

鶴紗「どこ行ってた……。」

楓「ほんの野暮用ですわ。」

梅「梅達は、梨璃と結梨に着く……楓は？」

楓「ああ、残念ですわ。梨璃さんをお助ける栄光を私の独り占めに出来ないなんて。」

神琳「今回の件……楓さんは何かご存知ではないのですか。」

楓「たとえ知っていたとしても、私には関係の無い事ですわ。」

ミリアム「そっか……じゃあ決まりじゃな！」

蓮夜「それじゃ俺はアールヴヘイムの所に行ってくる！」

梅「どうしてアールヴヘイムなんだ？」

蓮夜「さつきまで天葉達と模擬戦してたからおおよその場所はわかるし連絡先を知ってるからな！それに俺もあそこは結構面識がある方だから説得しやすいし、もしかしたら協力してくれるかも出しな！」

夢結「だから闘技場にいたのね……。」

蓮夜「貸し作っちゃうかもだがそれは俺が相殺可能だから、梨璃さんが食われないように守つとけば多分大丈夫だ！」

鶴紗「食うって……亜羅椰だな……。」

ミリアム「あやつしかおらの……。」

二水「そ、そうですね……。」

雨嘉「そうだね……。」

神琳「そう……ですね……。」

楓「そんな事、私が絶対にさせませんわ！」

みんなの亜羅椰へと認識に苦笑しつつ彼は天葉に電話を掛けながら部屋を飛び出した。

## 第17話

依奈「なるほどね……いいわよ！私達もこの命令には納得行かなかったところだし……それに結構そう考えているところは多いと思うわよ？」

蓮夜「それは良かった……ありがとう。」

依奈「いいのよ！ちようどさつきあなたに迷惑をかけてたしそれをチャラにするってことで……。」

彼女がそう言いながら天葉を見ると、彼女はビクリと反応した。

樟美「天葉姉様……なんかしてしまったのですか？」

天葉「いいえ！そんなことないわよ！」

天葉は慌てながら弁解しようとするが、

依奈「さつき模擬戦で人を探していた時、天葉が理由も言わないで彼を捕まえて無理やり連れてきたのよ。」

天葉「ちよつ！依奈!!」

樟美「天葉姉様……。」

樟美は天葉をなんとも言えない顔で見しており、それに気がついた天葉は涙目になった。

依奈「それはそうと……蓮夜……これ、あなたが作ったの？」

蓮夜「ああ、そうだが？口に合わなかったか？」

彼女達の前には彼が持ってきたガトーショコラがあり、

依奈「いいえ、とても美味しいんだけど……ね？」

樟美「はい……ですけど女子として悔しいと言うかなんという



か・・・。」

壹「私達はこんなに手の込んだものを作れませんから・・・負けたような気がして・・・。」

そのガトーシヨコラにはオレンジピールが入っており、高級感のある大人な味わいになっており、それを食べ数名がこの前よりも凹んでいた。

蓮夜「話が逸れたんだが・・・話を戻していいか？」

依奈「ええ！そ、そうね！」

彼女は我に戻り会話を再開する。

依奈「さつき言った通り私たちアールヴヘイムは今回の命令に参加しないわ。あと出来ることは他のレギオンを説得するくらいだけど・・・。」

蓮夜「本当に助かる・・・この借りは絶対に返す・・・。」

亜羅椰「それなら梨璃を食べ・・・。」

蓮夜「それはさすがに却下で。」

亜羅椰「!?!」

蓮夜「ちなみに俺だけじゃなくレギオンの全員がやりかねないと思っているから、全力で妨害してくるぞ?・・・俺もするが・・・。」  
天葉「いつも言ってるけど、亜羅椰はもう少し恥じらいを持ちなさい!」

樟美「・・・亜羅椰ちゃん、エロい?」

亜羅椰「樟美から食ってやろうか!」

樟美「ひいっ!」

天葉「食わないの!」

蓮夜「俺はあいつらにこの事を伝えたいから席を外させてもらいな。」

依奈「ええ、そつちも頑張つてね。」

蓮夜「ありがとう。・・・今度スイーツのリクエストがあつたら言つてくれ作つて来るから。」

依奈「え、ええ・・・その時はお願いするわ・・・。」

そういうと彼は部屋を出ていき、控え室へと戻つて行つた。

蓮夜「と言うわけでアールヴ Heim は協力してくれることになつたぞ。」

夢結「そう、助かつたわ。」

蓮夜「それは俺じやなくアールヴ Heim の人達に言つてくれ・・・それで、梨璃さん達の居場所はわかつたのか？」

夢結「いいえ・・・まだよ。多分西にある危険区域にいると思うのだけど・・・。」

蓮夜「あそこ無駄に広いからな・・・。多分どつかの建物に身を隠しているとかだと思ふんだが・・・。」

神琳「虱潰しに探すととなると・・・かなりの時間がかかつてしましますね・・・。」

ミリアム「発信機でも付けておくべきじゃつたかの？」

夢結「それはダメよ。他のレギオンに居場所が特定される可能性があるわ。」

みんなで見つける方法を考えていると、

『ピリリリ、ピリリリ』

彼の端末がなった。

確認するとそこには『真島 百由』と書いてあり、

蓮夜「もしもし、どうだったんだ！」

百由「落ち着いて！結果だけで言うとは結梨ちゃんは大丈夫よ！政府に結梨ちゃんが人間であると認めさせたわ。」

蓮夜「良かった……。本当にありがとうな。」

百由「大丈夫よ、同じリリーの為だものそれに先輩として後輩を守らないとね。」

蓮夜「あとは梨璃さん達が見つければ一件落着だな。」

百由「ええ、それじゃ私はこれから学院に戻るから、あとは頼むわよ。」

蓮夜「ああ、任せとけ！」

通話を切るとみんなが彼のことを見ており、

夢結「先程の話を聞いた限り……。」

蓮夜「結梨さんの捕獲命令が撤回された。」

二水「そ、それならあとは梨璃さんと結梨さんを見つけるだけです  
ね！」

その後、彼女達が何処にいるかの話し合いが始まった。

翌日の朝、危険区域のとある建物に、梨璃と結梨はいた。

結梨「いつまでここにいて、梨璃？」

梨璃「……分からない。行き良いでできちやっただけど……だ  
けど。……大丈夫、ここにいればお姉様やみんながきつと来てくれ  
るから。」

結梨「ヒュージってわたしに似ているのかな？」

梨璃「えっ？そんな、全然違うよ。」

結梨「でもわたし、ヒュージなんですよ？」

梨璃「違うよ……結梨ちゃんは結梨ちゃんだし普通の女の子だ  
よ……。」

結梨「じゃあ、もしわたしがヒュージの所に行ってもそこにも居場  
所はないんだね……。」

梨璃「……。」

結梨「わたし……なりたくてこんな風に生まれたわけじゃないんだけどな……梨璃そんな風に思うことある？」

梨璃「そんなの……いつもだよ。お姉様みたいなサラサラの綺麗な黒髪だったらなくとか、いつも優しくてかつこよくなれたらいいなとか……。」

結梨「ふくん。じゃあきつと夢結は、夢結に生まれて幸せだね……。」  
梨璃「……！」

彼女は夢結が自身のことをどれだけ憎み、恨み、後悔をしてきていたかを思い出した。

彼女は結梨に近づき抱きしめて、

梨璃「……ごめん。何にもならなくていいよ……結梨ちゃんは結梨ちゃんのままでもいい。」

結梨「でもね……梨璃が結梨つて名付けてくれたから、わたしは結梨になったんだよ。それは、わたしとっても嬉しい。」

梨璃「大丈夫……帰る場所はきつとあるよ……みんなが作ってくれるから……。」

夢結「ええ、一緒に帰りましょう。」

梨璃「……！」

彼女が振り返るとそこには一柳隊のみんながいた。

梨璃「お姉様……みんな。」

夢結「理事長代行と百由が政府を説得してくれたわ。結梨は人間でリリイと認められた……もう大丈夫よ。」

楓「梨璃さんとの逃亡劇を少しは期待していましたのにもう終わりですか？」

蓮夜「それもどうかと思うぞ？……こういう事は早く対処した方がいいんだしな。」

梅「梨璃の逮捕命令を撤回されたぞ！良かったな。」

梨璃「た、逮捕！・・・そんなことになっていたんですか！あれ？  
けどどうしてここが・・・。」

二水「凄く分かりやすかったです・・・。」

蓮夜「包囲されてたの気づかなかったのか・・・戦車まであるの  
に・・・。」

梨璃が外を見るとそこには百合ヶ丘の生徒や軍人それに戦車など  
の目に入らない方がおかしいものまで存在しており、

梨璃「あ、あはは・・・。」

外が騒がしくなり、音の方へと向かうと、

『キュイイイイン!!』

ヒュージネスト付近から、砲撃を行うヒュージがいた。

その攻撃は待機を引き裂きながら海岸へと放たれ、それが通った場  
所は吹き飛び地面は赤熱化しガラス化している所もあった。

梅「なんだあのヒュージ・・・。」

神琳「マギを直接攻撃に使ってる・・・。」

雨嘉「そんなことをしたらあつという間にマギが無くなっちゃうの  
に！」

蓮夜「多分自滅覚悟かどこかに供給源がある感じだな。」

ミリアム「じゃがなの感じだと自滅という訳でもなさそうじゃ  
な・・・そうなる・・・。」

蓮夜「後者だろうな・・・多分ヒュージネストから直接供給されて  
るんじゃないか？だからこっちまで来ないんだろう。」

鶴紗「そうなる、一方的に撃たれるってことか・・・。」

結梨「あれがヒュージ？」

梨璃「うん、だと思っただけど・・・何か・・・。」

夢結「ヒュージはマジに操られることがあっても自らマジを操ることはないはず・・・どうして？」

結梨「あのヒュージ、やっつける？」

梨璃「うん、わたし達も早く百合ヶ丘に・・・。」

結梨がヒュージへと向かって駆け出す。

走り始めてしばらくすると急に加速し、

梅「あれ縮地だ！梅のレアスキル。」

蓮夜「俺も出る！」

彼もレアスキルを使用しヒュージへと向かう。

走る中彼は懐から箱状のものを取り出し右のCHARMの装弾口にはめ込んだ。

その頃結梨は、

二水「結梨ちゃん海の上を走ってます！」

梅「見りやわかるけど、梅だっってそんなのした事ないぞ！」

ミアム「フェイストランセンデンス・・・わしの技を組み合わせたのじゃ！」

神琳「それってデュアルスキラー？それともエンハンスメント？」

ミアム「じゃがすぐにマジを使い果たして終わりじゃぞ！」

彼も海の目の前まで来ており、自身の進行方向に右で6発打ち込み。

すると直ぐに弾丸が破裂しそこにはマジで出来たリング状のものが現れる。

それを潜るとその度に速度がまし結梨と同等の速度になって海の上を走り始めた。

梅「蓮夜まで海の上走り始めたぞ！」

ミリアム「加速前に何かを打ち込んでおつたから何かの方法でブーストをかけたんじゃないだろう。」

二水「何かをCHARMの装弾口に付けていましたから多分この前使っていた特殊弾の類かと……。」

2人は凄まじい速さでヒュージに近づいて行く、

結梨（あそこ繋がってる！）

蓮夜（何かを見たな……なにか見つけたのか？）

梨璃「……！」

夢結「梨璃！」

楓「走ったって追いつけませんわ！」

梨璃もヒュージへと走り出すが海面を上手く走れず2人に比べると速度は遅い。

梨璃「まだ無理だよ！本当の戦いなんて。」

その時ヒュージの一部が光だし、

二水「何か変です！ヒュージのマグとネストのマグが呼びあって、まるでネストのマグを吸い取ってるみたいな！」

神琳「ネストからマグを供給されているのだとしたら無尽蔵にマグを使えると言うことだけど……まさか。」

ヒュージは先程の砲撃ではなく細かい光弾を大量に放ち、こちらの接近を阻止しようとしてくる。

2人はそれを躲しながら進むが、

梨璃「あああっ!?!」

1発が梨璃に直撃、CHARMで防げはしたがそのまま海面に叩きつけられてしまう。

結梨「ヤアアアア!」

結梨は飛び上がりヒュージの周りに浮遊している物体を斬り裂いた。

結梨「私だって戦える!だって百合ヶ丘のリリイだもん!」

蓮夜「(そういう事か!)・・・援護する!」

一足遅れた彼もその浮遊体に向かって射撃、

2人の攻撃でその数を一気に減らす。

結梨「ヤアアアアア!!」

そして結梨再び飛び上がると、彼女はCHARMを天高く上げる。すると刀身にマギが集まり巨大な刃を形成、そのままヒュージを一刃断する。

蓮夜「・・・ッ!?!」

それによりヒュージが大爆発を起こし周り一帯が光で包まれた。

結梨「梨璃・・・わたしできたよ。」

直後大爆発が起き、その場には2人は無くなっていた。

海岸には結梨のCHARMが刺さっており、その前で梨璃は膝をつき、

梨璃「朝は結梨ちゃんの髪を切っていたんですよ・・・少し伸びすぎてたから・・・結梨ちゃん笑ってて、わたしも・・・なのに・・・なんで。」



涙を流す梨璃を見つめながら夢結は、悔しさと悲しさが入り交じったような顔をしていた。

## 第18話

百由「なんで……こうなるのかしらね……。」  
目をまたいだ時間、彼女は自室の椅子に座り俯いていた。  
親しかった2人が居なくなっただけでその表情いつもの明るいものとは真逆で暗くなっていた。

『ピリリリ、ピリリリ』

端末が鳴る。

理事長代行からかと思いきそのまま出ると、

百由「はい……理事長代行ですか……。」

???『ハアハア……出てくれた……。』

百由「!?」

代行ではなくそれは彼女のよく知っている人物で、

百由「蓮夜!!」

蓮夜『……ああ。』

百由「あなた無事だったの!」

蓮夜『俺は一様命に別状はない……だけど……結梨さんが……。』

百由「結梨ちゃんもいるの!」

蓮夜『いるぞ……。だけど急がないと命に関わるかもしれない。』

百由「……!」

蓮夜『今は俺のスキルで治療しているがもうそろそろマジが尽きる。だから俺の端末の信号を頼りに救助読んでくれ……。』

百由「わかったわ! すぐに向かわせるから死ぬんじゃないわよ!」

蓮夜『ああ、頼む……。』

通信が切れると彼女はすぐに代行に連絡を入れた。

その後すぐに信号を元に2人を発見し2人は救助された。

2人が見つかったことはすぐに一柳隊の全員に伝わり、彼女達はすぐに治療室に向かった。

梅「2人とも無事なのか！」

蓮夜「俺は大丈夫だが……。」

毛布にくるまり椅子に座る彼がベットへと目を向けると、そこには結梨が眠っていた。

蓮夜「脳にダメージがあるらしい……目を覚ます可能性はかなり低いらしい……。」

神琳「そんな……。」

ミリアム「嘘……じゃろ。」

夢結「……。」

楓「それでは……梨璃さんが……。」

楓の言葉に梨璃が居ないことに気づいた彼は、

蓮夜「……梨璃さんは？」

夢結「梨璃は謹慎処分を受けているわ……期間は1週間よ。」

蓮夜「そうか……。」

神琳「すいません。今は答えづらいかも知れませんが、どのようにしてあの爆発を凌いだのでしょうか？」

蓮夜「ああ、それは簡単に言うとは結梨さんに近づいてそのまま持つてる防御系の全ギアをばらまいて防御したんだよ……それでも完全に防ぎ切れなくてな、そのまま吹き飛ばされて気を失って、気がついたら結梨さんが重症でだったからスキルで治療してたんだが、マジが底つきかけてな。そのまま救助されたわけだ。」

彼の横には彼のCHARMが立て掛けてあったが、その刀身と銃身は無惨な姿になっておりあの爆発がどれだけの威力だったかがわ

かった。

その後、彼もの検査が終わり身体に異常がないことが分かりそこで解散となった。

梨璃「……………」

梨璃が部屋の隅でうずくまっていると、突然ドアが開いた。

夢結「梨璃……………」

梨璃「夢結様……………」どうしてここに？誰とも合えないって……………」

夢結「シユツツエンゲルの特権ね……………」と、言ってもほんの10分程度だけど……………。どうかしら？具合は。」

梨璃「分からないです……………」

夢結「そうね……………」馬鹿な質問だったわ……………」

梨璃「……………いいえ。」

夢結は彼女の隣に座り。

夢結「梨璃……………」2人とも生きていたわよ。」

梨璃「……………えっ！」

その言葉に梨璃は顔を上げ夢結の顔を見る。

梨璃「2人とも無事だったんですか！」

夢結は一瞬躊躇いながら、

夢結「蓮夜は異常なしだったのだけど……………」結梨が……………」

梨璃「結梨ちゃん……………」何かあったんですか……………」

夢結「脳にダメージを受けたらしく、意識を取り戻す可能性が低い  
そうよ……………」

梨璃「そんな……………」

夢結が彼女の頭を撫でようとする、

夢結「梨璃、あなた髪飾りは？」

梨璃「えっ？ああ…そうですね。無くなっちゃったんですね…。」

面会時間が終わり夢結が外に出ると、

楓「私の部屋にもこんな自動ドアが欲しいですわ。」

夢結「施設科に上申なさい。」

楓「いちいち口にしなくてたつてリリイなどしていれば何かしら抱えているものですわ！おひとり様など気取っていなで少しは周りを頼ってはいかがと申し上げているのです。」

夢結「あつ…。」

楓「本当、めんどくさいお方ですわ！」

楓「髪飾り…あの四葉のクローバーのですか？」

二水「そういえば無くなってたかも…。」

鶴紗「夢結様はそれを探すつもりか？」

夢結「ええ…。」

ミリアム「とはいえ、ひとりじゃ無理じやろうな…。」

楓「まさか浜辺で無くした髪飾りを探す話とは、思いもよりませんでしたわ。」

夢結「頼れと言ったのは楓さんでしょう。」

蓮夜「楓さん、自分で言ったんだからその言い方はやめないか…それと夢結はいじけない。」

夢結「…いじけてないわよ…。今の梨璃は心に硬い殻を作ってしまったているわ。後悔や悲しみをその内側に押し込み続けなければいつか自分を自分で呪うようになるでしょう…。」

蓮夜「…。」

楓「まるで誰かさんのようですわね。」

夢結「梨璃にはそんな風になって貰いたくないの…。」

神琳「髪飾りが見つかれば、梨璃さんが立ち直ると？」

夢結「……。」

全員無言になり、

楓「わかりましたわ！やりやいいんでしよう！」

神琳「奇跡は自らの手で起こすものです。普通の人なら無理だとしても私達にはレアスキルがあります。」

鶴紗「捜し物に便利なレアスキルなんてあったか？」

神琳「レアスキルは組み合わせることで無限の可能性を引き出せます。特に私のテストメントは増幅系のレアスキルですからそれで知覚系のレアスキルを強化して、」

二水「そっか！わたしの鷹の目を強化してもらえばいいんですね！」

楓「あら、私のレジスタだって知覚系ですわよ。」

ミリアム「ならばわしはフェイストランセンデンスでマジの供給か。雨嘉と鶴紗はなんじゃったつけ？」

雨嘉「わたしのは天の秤目、ナノレベルで対象の位置を把握できる。」

鶴紗「ファンタズム、未来予知みたいなもの」

神琳「知覚系が多いのは幸いね。えくと、夢結様は……あつ！」

夢結「私のルナティックトランサーなんてどうせ馬鹿みたいに暴れるだけで……」

夢結は自身のレアスキルが全く役に立たないことに落ち込んでいた。

梅「気にすんな！私の縮地だってここじゃ役に立たないから。」

蓮夜「そうだぞ！俺のアルターエゴだってこういう場面だと役立たずだし、2年組は全滅だから気にするな！」

夢結を励ましていると、

二水「あれ？確か黒鉄さんのアルターエゴって周囲のリリイを強化する能力ありませんでしたっけ？」

神琳・雨嘉・蓮夜「「あっ！」「」」

夢結「やっぱり私は役立たずなんだわだって見つけたとしても梅なら縮地で見失う前に回収できるし、蓮夜は……。」

夢結はより落ち込み暗いオーラが部屋全体を覆っていた。

ミリアム「空気を読まんかい。」

神琳「今のはさすがに……。」

二水「ふえええっ！」

みんなにジト目をされ二水は涙目になり、その後夢結を励ますのに1時間ほどかかった。

夢結が復活し、彼らは海岸まで来ていた。

神琳「テストメント、参ります！」

二水「た、鷹の目！」

ミリアム「フェイストランセンデンス！受け取れわしのマギ！」

2人のレアスキルで彼女のレアスキルを強化する。

二水「ふぎやあ！し、視界が広がって、色々見えます！見えすぎます……!!」

強化しすぎたからか二水は目を回し、ミリアムはマギ切れで倒れる。

神琳「二水さんに負荷がかかりすぎましたね……。失敗ですがいいデータが取れましたので今日のところは良しとしましょう。」

ミリアム「よ、良かないわ。」

楓「前途多難ですわ……。」

その後も色々な組み合わせで試すが一向に成果はです、いよいよ7日目に突入してしまった。

彼が海岸へ行くとそこには大勢の生徒がいた。

蓮夜「こんなに人が集まって、どうしたんだ？」

二水「あつ、黒鉄さん！そういう言えば言っていますね！それが梨璃さんの髪飾りを探していると言ったらみんなが手伝ってくれると言ってくれたんです。」

蓮夜「そうなのか……。」

周囲を見渡すと天葉達もおり、

夢結「ありがとう、恩に着るわ。」

天葉「恩に着るっていつの人よ？」

夢結「ごめんなさい、こういう時どういえばいいか分からなくて……。」

蓮夜「本当にありがとうな。」

天葉「いいわよ、仲間を失ったのはみんな一緒よ。だったら落ち込んでいる梨璃のためにも何とかしてあげたいと思うのは自然なことでしょう？」

楓「へっぶしゅっつ！」

雨嘉「うわっ！……いないと思ったら先に来てたんだ……。」

神琳「大丈夫です？」

楓「いいえ、お構いなく……。」

天葉「レアスキルを合成させるなら、接触式の方が非接触式よりも効率はいいわ。とはいえ、こんなに大勢でやった事はないけど……。」



蓮夜「アルターエゴ……。」  
彼が全員の能力を強化し、

天葉「今よ！」

ミリアム・亜羅椰「必殺！フェイストランセンデンス！」  
2人がマギを供給する。

レアスキルの多重合成が成功し、みんなが髪飾りを探していると、それらしきものの影が見つかり、

全員『あつた！』

楓は梅に飛び乗り、

楓「あそこです、梅様！」

梅「な、なんだ!？」

楓「レアスキル、縮地ですわ！はいよお!!」

梅「お、おう！」

いきなりのことに動揺しながら梅は縮地を発動そのまま海へと駆け出す。

鶴紗「……。なんだ？」

蓮夜「……。梅を馬かなんかと勘違いしてね？」

楓「もう少しですわあああ！」

梅「いつけえええ、楓！」

楓「ありましたわあああ!!」

梅が楓を投げ、その勢いで光っている場所まで飛びそれを掴み取る。  
彼女が掲げた手の中には梨璃が付けていた髪飾りがあった。

楓・梅「へっぶしゅつつっ！」

蓮夜「・・・大丈夫か？」

楓「・・・ご心配なく。」

梅「大丈夫だぞ！」

二水「もうすぐ梨璃さんの謹慎が終わる時間です！」

楓「そうですね！早く行かなくては！」

二水の言葉に楓は学院へと走って行く。

みんなが追いかけてしようとしますが、

蓮夜「すまん、俺少し遅れるわ・・・。」

二水「えっ？・・・どうしたんですか？」

蓮夜「梨璃さんに渡そうと思つて作つておいたクッキー持つてくんの忘れてた・・・。」

夢結「何やっているのよ・・・。」

蓮夜「すぐに俺も追いつくから！」

彼は自室のある工務棟へと走って行った。

謹慎室のドアが開き、

夢結「ごきげんよう？梨璃。」

梨璃「夢結様・・・皆さん・・・。」

楓「梨璃さん。さあ、これを。」

梨璃「これ・・・。」

楓が梨璃に髪飾りを手渡す。

楓「さあさあ、いつまでもご覧になってないで、さっさとお付けになつて。」

梨璃「これ……どこに売っていたんですか？」

楓「え!？」

梨璃「わたしの無くしたのとそっくり……。」

二水「そっくり!？」

雨嘉「同じものじゃ!？」

梨璃「わたしのは四葉の1枚にヒビが入っていたの。でもこれにはないし……。」

夢結「……。」

楓「オ、オホホホ……それはリサーチ不足……。」

夢結「どういうことかしら……楓さん……。」

楓が振り向くと夢結が彼女のことをジト目で見ていた。

楓「ひっ!い、嫌ですわ夢結様、そんな怖い顔をして……オホホホ……。」

そうすると楓がボロボロになったなにかを取り出し、それを夢結に渡すと頭を抱えていた。

梨璃はそれを見ると、

梨璃「これ、わたしのです!」

二水「梨璃さんの髪飾りが2つ!」

汐里「新しいのは楓さんが自分で作ったんです。」

二水「汐里さん!？」

梅「どういうことだ?」

楓「本物は2日目だか3日目だかに浜辺で見つけていましたの……だけだと見え見つかってもこれでは梨璃さんを余計に悲しませるだけだと……。」

神琳「では、今日の昼間見つけたのは……。」

楓「あんな大掛かりに探されてはさすがに本物の在処がバレてしま

いますから。早起きして本物を仕込んでおいたんですの。」

ミリアム「わしらまで謀つとったとは……。」

楓「それで私が最初にそれを手にして、昨夜できた偽物とすり替えたという寸法ですわ。」

雨嘉「楓が、そんな手の込んだことを！」

楓はその場には座り込み、

楓「ええええええ、梨璃さんや皆さんを欺いたのは紛れもない事実ですわ！煮るなり焼くなり好きにしてくださいまし！バレたらバレたで私が全ての攻めを負えば済むことですもの！」

壺「思いつきり汐里を巻き込んでるし。」

汐里「いえ、私は工作室をお貸しただけで、何をなさっていたかはここで知りました。」

梨璃「……。」

梅「楓……。」

楓「な、なんですの……。」

梅「お前良い奴だな！」

汐里「うんうん。」

楓「えっ！」

困惑している楓に梨璃は駆け寄りそのまま抱きしめた。

梨璃「ありがとう、楓さん。」

楓「ど、どういたしまして……。」

梨璃「それにみなさんも……楓さんの言う通りかも……この髪飾りだけだったら、わたし辛いことしか思い出せないかもしれない。だけど、こつちのがあればみんなの気持ちを感じて嬉しい気持ちになれるから。わたしにはどっちも本物です。」

楓「は、はあ……それはあれですわね。狙い通りと言うやつですわね。あ、あはは……。」

夢結「お立ちなさい、私からもお礼を言うわ。ありがとう、楓さん。」

楓「そんな、私は梨璃さんのためにしたんです。夢結様にまでお礼を言われる筋合はございませんわ。」

夢結「シユツツエンゲルとして、姉として言っているの。」

楓「ああっ、それはあれですわね。梨璃さんは私のものよ、渡さないわ。と言う私への牽制ですわね?」

夢結「ええ、その通りよ。」

楓「あああっ!認めましたわね!」

鶴紗「もうやめておけ・・・お前はよく戦った。」

梨璃「あはは・・・えっ?・・・あれ?」

周りが笑い始め梨璃もそれにつられて笑い出すが、突如として涙が流れ出した。

梨璃「ど、どうしたんだろう?嬉しいはずなのにどなんで・・・?。」

止めようとするが、逆に涙の溢れ出し。

梨璃「うっ、うう・・・うああああ。」

夢結「お泣きなさい、梨璃。今のあなたに必要なのは、何でもいい自分の気持ちを表に表すことよ。」

梨璃「わたし・・・守れなかったんです・・・!結梨ちゃんを・・・わたしが・・・ちゃんとしなくちや行けなかったのに・・・!」

そんな梨璃を夢結は抱きしめ、

夢結「あなたは出来るだけのことをしたわ・・・あれは・・・誰にも防げなかった・・・。それに、まだ彼女が目覚めるかもしれないわ。」

ここにいる誰もが悲しみに打ちひしがれているその時、

??? 「梨璃ー!」

梨璃「えっ?」

彼女を呼ぶ声の方を向くとそこには、

結梨「梨璃——！」

こちらに駆け寄って来る結梨の姿があった。

梨璃「結梨ちゃん！」

彼女は駆け寄って来た結梨をだきしてめ、

梨璃「良かったよ〜！結梨ちゃんが目を覚まして……わたし、わたしもう結梨ちゃんが目を覚まさないと思ってて……う、うああああ！！」

結梨「よしよし、泣くな梨璃！ちゃんと帰って来たぞ！」

梨璃「うん！おかえり結梨ちゃん！」

結梨「ただいま！梨璃、みんな！」

結梨が来た方向から彼もやってきて、

蓮夜「一件落着かな？」

二水「黒鉄さん遅いですよ！」

蓮夜「ごめんごめん。通り道だったから治療室によったら結梨さんが目を覚ましててな。梨璃に会いたいって言うから連れてきたんだよ。」

神琳「それって教員の方にご連絡は……。」

蓮夜「もちろんしてないから……俺は説教確定……。」

その後、彼は教員に連れて行かれ、しばらく梨璃は結梨に抱きついていた。

## 第19話

蓮夜「帰ってくるのも、久しぶりだな。」

彼の目の前には「黒鉄」と表札に書かれた一軒の家があった。彼は休日を利用して実家に帰って来ていたのだ。

彼は鍵を開けて中に入ると、

蓮夜「埃が溜まつてるな・・・まあ、半年近く帰ってきてないし当たり前か・・・。」

彼はドアを開けて玄関に入ると廊下の奥へと進んでいき一番奥にあった扉を開けた。

そこは物置のようで棚やダンボールが積まれている。

彼は部屋に入るとすぐ右にある棚から本を抜け出しその奥に手を入れる。

手が壁に当たりそこにマジを流すと、

床が沈み階段が現れた。

そこを降りるとそこには大型の機械や本棚などが並んでいた。そこを奥へと進むとそこには大量の鎖が巻かれた彼の身長よりも大きな長方形のアタッシユケースが2つとその半分位の大きさの正方形のアタッシユケースが存在し、

蓮夜「今のままじゃたま同じことになる・・・コレを使うしかないか・・・。」

彼はアタッシユケースを取ると近くにあった作業台へと移動し、背負っていた壊れたままのCHARMを下ろしてアタッシユケースを開いた。

その中には、

大量の大振りなナイフ、自身の身長よりも長い大太刀そしてその大

太刀よりも長い大鎌が入っていた。

3日後、梨璃と二水はベンチに座っていた。

梨璃「今回は大丈夫だったけど、今度はどうなるか分からない……次に同じようなことがあったら今度こそ結梨ちゃんが……皆が傷ついてしまうかもしれないから……。」

二水「梨璃さん、ちよつと変わったみたい……。」

梨璃「そうかな？」

二水「うん、強くなったと思う。」

梨璃「そうかな……だったらそれお姉様のおかげだよ。」

二水「羨ましいです……。」

梅「大丈夫！ふーみんなならきつといいシルトになれるって！」

二水「うわあっ!?!」

梨璃「梅様！」

二水の後ろから梅が現れた。

梅「本当に誰もいなかったら、私がシュツツエンゲルになってやろうか。」

二水「本当ですか！」

鶴紗「当分シルトは取らないんじゃないかなかったのかよ……先輩……？」

梅「そうだっけ？」

ベンチの影からひよつこりと猫を頭に乗せた鶴紗が現れる。

神琳「あら、先を越されましたね。」

梨璃「神琳さん、雨嘉さん。」

梨璃が声の方を向くと、神琳と雨嘉がいた。



雨嘉「あれ？さつき楓も見掛けたけど？」

雨嘉が当たりを見回していると、

神琳「出ていらしたら？」

神琳が草むらに向かって声をかけると、ガサガサと動き出し中から楓が現れた。

楓「あら、どうなさったんです皆さん？…雁首をお揃いで…。」

梅「お前照れてるのか？」

楓「こういうウエットなシチュエーションは、私の柄にそぐいませんから…。」

梅「柄って柄か…。」

二水「みんな集まっちゃいましたね。」

梅「居ないのはミリミリと夢結あとは蓮夜と結梨か…。」

神琳「ミーさんは昨夜『百由様の研究を手伝うのじゃ！』とか何とかおっしやっていたから夜なべでもしたのでしょうか。」

梅「ミーさん？」

神琳「長いので。」

梨璃「結梨はリハビリに行っていて、確か黒鉄さんは数日前からご実家に帰っているはずですけど…。」

楓「どうかいたしまして？」

梨璃「…わたしこの頃お姉様と会えていなくて…。」

雨嘉「たしかにこの何日かミーティングルームでもお見かけしない…。」

梅「あれ？講義や演習にはちゃんと出てるぞ。」

梨璃「最後にお会いしたのは、ここに一緒に美鈴様のお墓参りに来た時で…。」

その頃、

夢結「……。」

彼女は自身の端末にメールが来ており確認すると送り主は百由で、話したいことがあるから部屋に来て欲しいというものだった。

その頃梨璃はリハビリが終わった結梨と合流し、

結梨「結梨、頑張ったんだぞ！」

梨璃「結梨ちゃん本当によく頑張ったね！……確かこの後は百由様のところに行くんだっけ？」

結梨「CHARMが壊れたから、百由に直してもらおうの！」

梨璃「私も一緒について行こうか？」

結梨「1人で行けるもん！」

2人がたわい無い会話をしていると、

梅「なあ梨璃、今度パーティーやろうよ。もちろん夢結も呼んでみんなで！」

梨璃「でも、今はもっと訓練して……。」

雨嘉「根を詰めるのもいいけど息抜きも必要だよ。」

神琳「生活にはメリハリもありませんと。」

二水「そうだ！ラムネパーティーなんですか？」

梨璃「え、ラムネ？」

梅「蓮夜に頼んでお菓子とかも作って貰うのはどうだ！」

鶴紗「賛成!!」

結梨「賛成!!」

神琳「鶴紗さんに結梨さん……すっかり餌付けされてますね……。」

雨嘉「だけど美味しいのはたしか……。」

梨璃「ラムネか……。」

夢結は百由の部屋の前に来ていた。

部屋のドアを開けると中にはコンソールを操作している百由とミリアムがおり、

百由「いらっしやい。」

ミリアム「おお、夢結様。」

夢結「ごきげんよう？」

ミリアム「じゃわしは一休みじゃ……。ふわあくごゆっくり。」  
ミリアムはそう言いながら部屋か出ていった。

夢結「また徹夜？」

百由「ええ、まあ……。気にしないで、好きでやってるから。」

夢結「毎日ご苦労さまね……。」

百由「えっ？……あんた私に気を使った？」

夢結「いいえ……。別に……。」

百由「ウソウソ、ウソ！孤高の一匹狼としてリリイからも1歩引かれたあの白井 夢結がよ!!」

夢結「あの……。えっ……。」

夢結は照れくさいのか顔を逸らすとそこには、

夢結「世間話をするために読んだわけじゃないのね……。」

百由「回りくどい前置きは後回しにして……。後回しにしたら後ろ置き？……いや、違うか……。ごめんね、私もちよつと覚悟がいるのよ。」

夢結「……。」

百由「聞きたいのは美鈴様のこと……。」

夢結「……ツ!?CHARMのことではないの……。」

百由「これは元々夢結が契約していたダインスレイフだけど……。2年前の甲州撤退戦の時、最後に使ったのは誰？……美鈴様よね。」

夢結がダインスレイフを眺めていると、

百由「このCHARMね・・・術式が書き換えられているの・・・。」

夢結「えっ!？」

百由「知らないか・・・じゃあカリスマのことは？」

夢結「カリスマ？お姉様が？」

百由「カリスマは本来リリイ同士で使うレアスキルよ・・・仲間の士気を高め結果としてレギオン全体の能力を向上させる。その性質から支配のスキルとも呼ばれているわ・・・ただ、美鈴様はリリイではなくヒュージに対してそれを使った形跡があるの・・・。マジとはヒュージ使って古い秩序を破壊し、新しい世界を作る意志だとする説もあるわ・・・だけど今私たちが管轄するヒュージの行動にはこれまではないパターンが現れるようになったの・・・何がヒュージを狂わせ闇雲な凶暴性が増しているような・・・変化の現れた時期はコレを回収した戦いの前後と一致するわ・・・2年前に仕込まれていた何かにそこでスイッチが入ったとしか・・・。心当たりある？」

夢結「分からない・・・お姉様は強くて優しくて、立派なリリイだった・・・それしか分からないわ・・・。」

百由「そう・・・。」

夢結「ごめんなさい・・・。」

百由「気にしないで。」

夢結「!？」

百由「どうしたの？」

夢結「いいえ、何も無いわ・・・。」

百由「そう・・・。そうだ！あともうひとつ、これはまだ誰にも話していないのだけど。書き換えられた術式の深層領域に彼が使うものと同じ形式の術式が使われていたわ・・・。」

夢結「・・・えっ?？」

百由「可能性の話だけど、彼が何か知っているのかもしれない・・・。なにか不審な点とかはなかった？」

夢結「特にはないはずよ……。」

百由「わかったわ……何か気がついたら教えてちょうだい。」

夢結「ええ……。」

夢結は部屋から出で行き。

百由「はぁー、そんな簡単に昔みたいに戻れるわけないわよね……。」

彼女は映し出された術式を見ながら、

百由「あなたは何か知っているの?」

ここ数日連絡の取れない彼に対してそう呟いた。

その術式の中央には、

彼のルーンであるへウルとへハルガのバインドが存在していた。

彼女が考え事をしていると、

結梨「百由ー!来たよ!」

結梨が部屋に入ってきた。

百由「いらっしやい、結梨ちゃん。」

結梨「百由、結梨のCHARMは直せそうなの?」

百由「それがね……。」

百由は奥から結梨のグングニルを取り出して作業台に乗せた。

ポロポロになっていたグングニルは綺麗に修復されていたが、中心にあるはずのクリスタルコアがなくなっていた。

百由「大体の部分は直せたんだけど・・・CHARMの心臓と言えるクリスタルコアが壊れちゃってね。こればかりはそう簡単に直せないのよ・・・。」

結梨「そうなの？」

百由「ええ、綺麗に砕けちゃったからね・・・蓮夜が修復しているんだけどまだ応急処置が終わった程度みたいなのよ。だからCHARMに付けたらすぐに壊れちゃうかもしれないのよ。それにグングニルのパーツ自体がほとんど新品だからね・・・馴染ませるのに時間がかかるし・・・。」

結梨「新しいのだと行けないの？」

百由「新品パーツの1つや2つなら問題ないんだけど、そう取り換えだったからね。新品だとしてもマジを馴染ませるのに時間がかかるのよ・・・。特に元々使っていたコアを新品に馴染ませるのは時間がかかるから誰かが使っていたパーツとかだったらそれでも無いんだけどね。」

結梨「・・・？」

百由「あら、ごめんなさいね。だから直るのは彼から聞いた話とコアの修復に約3日で、明日には帰ってくるから4日それにCHARMに付けて馴染ませるのに1日だからあと5日ぐらいで直ると思うわよ。」

結梨「わかった！」

百由「直ったら呼ぶから。」

結梨「うん！」

結梨は元気に部屋から出ていった。

梨璃「お姉様」

夢結が廊下を歩いていると突如腕を掴まれ、振り返るとそこには梨

璃がいた。

梨璃「捕まえました！お姉様！」

夢結「……！」

夢結は目を見開きながら梨璃の方を見ている。

梨璃「あの、みんなが私のためにラムネパーティーを開いてくれるって……お姉様も来てくださいますよね？」

夢結「ごめんなさい、今は……。」

夢結がその場を離れようとする、

梨璃「待ってください！」

梨璃は夢結の腕を掴んだ。

夢結もう一度梨璃のいる方を向くがその視線は梨璃に向いておらず彼女の後ろを見ているようであった。

梨璃「お姉様？」

夢結「……やめて。」

梨璃「!？」

夢結は梨璃を振り払う。

夢結はそのまま何処かへ行ってしまおう、

梨璃「お姉様……どうして……。」

梨璃はその後ろ姿を見ながら動けないでいた。

## 第20話

空が暗くなり地響きとともに四条の光がヒュージネストから空へと放たれた。

その後学院全体に待避命令が発令され生徒達は避難区域へと向かっていった。

梨璃と結梨が避難区域に到着した頃、4つの何かが落ちてきて学院を光が包んでいた。

楓「梨璃さん！それに結梨さんも。よかった、探しましたのよ。」

2人を見つけた楓がこちらへとやってきた。

結梨「お、楓くー！」

梨璃「楓さん……。お姉様は何処か知りませんか？」

楓「夢結様ですか？さあ、私たちより先に避難……。なさる方でもありませんね……。あの夢結様が可愛いシルトを置いて先に避難するような聞き分けのいいシユツツエンゲルな訳ありませんもの……。」

梨璃「……。」

梨璃は先程夢結と会った時のことを思い出し、

梨璃「ツ！……美鈴様。（やっぱりお姉様はまだ美鈴様のことを……。）」

考えていたその時、学院の方から強い光と轟音が鳴り響き黒い波紋のようなものが空を埋めつくした。

梨璃「わたし戻って見てきます！」

結梨「結梨も行くぞー！」

梨璃「結梨ちゃんはここにいて、CHARMがないと危ないから！」



楓「それなら私がお供しますわ！」

梨璃がCHARMを起動するとそれに続いて楓もCHARMを起動する。

移動補助のためにマジを使い地面に円を描こうとすると、

楓「・・・!?!」

楓のCHARMにマジが通らずバランスを崩し倒れそうになり、倒れそうになった楓を梨璃が支える。

楓「マジが入らない・・・?!」

梨璃「大丈夫ですか？」

楓「え、ええ・・・どうして？」

梨璃「わたし先に行つてますね！結梨ちゃんは楓さんのそばにいますよ！」

結梨「むくく！」

梨璃は学院へと向かつて行く。

その時結梨は何かを思いついたのか、

結梨「・・・！そうだ！」

楓「あつ！結梨さん！」

結梨は学院へと走り出した。

夢結「自分自身を認められない人間はどうなると思う・・・憎むんだ・・・自分と自分以外の全てを・・・そう、お姉様は自分自身呪っていた・・・。」

結梨ちゃんは自身の部屋でCHARMを持ちながら呟いていた。いつも身嗜みを大切にしている彼女だが、今は髪はボサボサになっており風でなのか髪が靡きいつもの綺麗な黒髪が少し白く見えた。

梨璃「お姉様！」

梨璃が彼女の部屋の窓から入ってくる。

夢結「・・・梨璃。」

梨璃「お姉様、お迎えに参りましたよ！行きましょう！」

夢結「無理よ梨璃・・・私はどこにも行けない、ここで戦うことしか・・・。」

梨璃「何言ってるんです！一緒に行きましょう！」

夢結「私に指図しないで!!」

梨璃「!？」

夢結「あなたもレアスキルで私を操るの！」

梨璃「・・・えっ？」

夢結「美鈴様の幻覚をいているの・・・壊れているのよ・・・私は・・・。」

梨璃「お姉様・・・何を？」

夢結「美鈴様は全てを呪っていた・・・これは罠だ。・・・あのヒュージは、私が倒さなくちゃ・・・。」

夢結はゆっくりとした動きで振り返り梨璃にCHARMを向ける。

夢結「あなたは1人で逃げなさい・・・。」

彼女の目は紅く染まりルナティックトランサーの兆候が見えていた。

だが

梨璃（・・・悲しそう？それにあのCHARM・・・）

梨璃「お姉様・・・それ、マジが入っていませんよ。」

夢結「・・・！」

夢結の動揺によりできたその隙に、梨璃は彼女のCHARMに攻撃を加える。

それにより夢結のCHARMはひしゃげて床を転がった。

梨璃「お姉様は行っちゃダメです！レアスキルとか罠とかそんなのどうでもいいです！・・・わたしは！いいえ、わたしがお姉様をお守りします！あのヒュージは私が倒します！」

夢結「無理よ・・・あなたにお姉様が倒せるはず・・・。」

梨璃「美鈴様じゃありません！あれはヒュージです！」

そう言うのと梨璃は窓へと向かった。

夢結「待ちなさい！・・・待って・・・梨璃・・・。」

梨璃「行つてきます。お姉様。」

夢結が弱々しく手を伸ばすが届くはずもなく梨璃はヒュージの元へと向かっていった。

その頃、避難区域にいる一柳隊のメンバーは、

楓「ああもう！こんな時にCHARMが使えないなんて・・・？」

神琳「今は誰のCHARMも起動していないわ・・・悔しいのは皆同じです。」

楓「なら・・・なぜ梨璃さんだけがCHARMを使ったのです？」

ミリアム「梨璃のレアスキルと関係あるかもしれんな・・・。」

二水「ミリアムさん・・・。」

楓「レアスキル？」

神琳「カリスマ・・・支援と支配のスキル・・・。」

ミリアム「知つとつたか？」

神琳「薄々検討は……。」

雨嘉「カリスマ使いは他にもいるのにどうして梨璃だけ？」

ミリアム「そこは謎じゃな。」

二水「梨璃と夢結、それに結梨さんは大丈夫でしょうか……。」

楓「……梨璃さんに頼まれて早々に……これで結梨さんに何かあれば……梨璃さんに嫌われてしまいますわ！」

ミリアム「そこかよ！」

楓「……それに、もし今は自分しかCHARMを使えないと知ろうものなら、梨璃さんのことですからたつた1人であるのヒュージに立ち向かいかねませんわ！」

ミリアム「そこまでお馬鹿と思いたくないが梨璃ならありうるのう……。」

梅「筋金入りの無鉄砲だからな。」

鶴紗「私も無鉄砲……したい！」

雨嘉「うん！こんなところでなんも出来ないなんて嫌だ！」

神琳「もちろん諦めるには早すぎます。」

ミリアム「そりやそうじゃ！わしらが張子の虎で終わるなどありえん事じゃ！」

楓「当たり前ですわ！」

二水「そうですね……そうですね！」

そこから彼女達はなにか手がないかを考え始めた。

それに夢中だったからか彼女達は、自分達の背後の木々を抜けて学院へと向かう黒い影には気づかなかつた。

その頃梨璃の目の前には巨大なヒュージがいた。

そのヒュージは4本の大きな剣のを持ち顔と思わしきものを彼女に向けて空中を佇んでいる。

夢結「……。」

その光景を見ながら夢結は打ちひしがれていた。

足元には自身のCHARMがあるがそれは先程の梨璃の攻撃で壊れており使えない、

彼女は無力な自身への怒りなのか握る手に力が入る

夢結「・・・！」

夢結は何かを思いつきそのまま部屋を出て走り出す。

その時とある場所で1本のCHARMが光出した。

結梨「あつたぞ！」

その頃結梨は蓮夜の部屋にいた。

そこには一柳隊のCHARMのスペアとともにヒビが入ったクリスタルコアが置いてあつた。

結梨「だけどCHARM直せない・・・どうしよう・・・。」

彼女が悩んでいる時にとある機械が目に入った。

その時彼女は数日前に彼と会話した時の内容を思い出した。

数日前、

結梨「蓮夜、これなんだ？」

蓮夜「ああ、これか？・・・これは百由と共同で作ってるCHARM組立機だよ。そこにパーツごとの挿入口があるだろ、そこにパーツを入れてボタンを押すと勝手にCHARMを組み立ててくれるやつなんだけど・・・これあいつと深夜のテンションでなんでか必要ない

のに作ったやつなんだよな・・・必要性ないのに・・・。」

結梨「必要ないのか？」

蓮夜「まあ、俺が忙しい時に使えるかなと思っただけだよ。ここにあるパーツは全部一柳隊のメンバーのマギとは馴染ませてあるからな一斉に壊れたとしてもすぐに直せるようにしてある感じかな？」

結梨「そうなんだ。」

結梨はすぐにコアのそばに置いてあったパーツを機械に入れた。

幸いな事にパーツ毎に分けられていたため彼女でも直ぐに分かり全部のパーツを入れ終わるのに時間はかからなかった。

そうして機会を動かすと、

結梨「出来た！」

ものの数分で完成したが、

その見た目は歪で、持ち手部分はグングニルだが刀身はブリューナク、銃身はティルフィング、変形機構はアステリオンとバラバラになっっており本当に動くのかも怪しい状態になっていた。

それもそのはず彼女はパーツをどれがグングニル物もか分からずに適当に入れていたのだ。

だが完成したCHARMに満足したようで、彼女はそのCHARMを握り外へと出ていった。

## 第21話

梨璃の目の前にいるヒュージは不気味なオーラを漂わせながら顔と思わしき場所を彼女に向けていた。

梨璃「すごい敵意と憎しみを感じる……まるで……。」

百由「ルナティックトランサー……。」

祀「百由今なんて？」

百由「結界の中心部にあるこの波形、ルナティックトランサーのによく似てる……避難が遅れていたら私たちも被害を受けていたでしょうね……。」

眞悠理「結界……？」

百由「先に落ちた4体のヒュージは地下で繋がっているらしくてそこから強力な力場……結界が展開されているの。とにかくマジの供給量が尋常じゃなくて……CHARMが起動しなくなったのもそれが影響でしょうね……。」

夢結「ツ……！」

夢結は工廠科の廊下で苦しそうに壁に寄りかかりながらある場所へと向かっていた。

その彼女の髪は先程よりも白くなってきており、徐々にその色を失っていた。

梨璃「ちよつと！じゃなくて……コラ！そこのヒュージ！あなたの相手はわたしよ！他の誰にも手出しさせないんだから！（今は少しでも時間を稼がなきゃ！）」

ヒュージに対して射撃をするが、その効果はなくただ彼女を見下ろしている。

攻撃が通らないことが分かり、どうするべきか梨璃が考えていると、

結梨「梨璃だけじゃないぞ！結梨もだぞ！」

梨璃「結梨ちゃん!？」

梨璃の後ろから結梨が駆け寄ってきた。

梨璃「結梨ちゃんどうしてここに！それにそのCHARMは!？」

結梨「結梨だつてみんなを守りたいの！あとこれはわたしが作ったの！」

梨璃は自信満々に胸を張る結梨に思わず笑ってしまう。

梨璃「あはは、それなら2人でやろうか。」

結梨「うん、頑張るぞ！」

2人はヒュージに向かって行った。

夢結「ハア・・・ハア・・・」

2人がヒュージと戦闘を開始した頃、夢結は目的の場所である百由の部屋に来ていた。

そこには数多くの起動していないCHARMが並んでいたがその中で一つだけコアが光っているものが存在した。

夢結「ハア・・・ハア・・・ッ！」

夢結はそのCHARM・・・ダインスレイフの前に来て掴み取ろうとするが、過去の情景が脳裏をよぎり腕が止まってしまう。



夢結（またあの時のように・・・大事な人を傷つけてしまうのではないか・・・。）

この考えが夢結の動きを止めてしまう。

???（お前は1人じゃないんだ・・・お前が何か間違いを起こしたら俺が止める。まあ、俺じゃ頼りないかもしれないがな・・・だからお前は自分自身の思うがままに進んで行け。）

???（お姉様がルナティックトランサーを発動したらまたわたしが止めます！何度でも止めます！何しても止めます！例え刺してでも・・・。）

夢結「・・・！そうよね・・・何幻なんか迷惑されていたのかしら・・・お姉様の幻影に囚われていては、怒られてしまうわ・・・本当に馬鹿よね、私は・・・シュツツエンゲルである私がシルトを・・・梨璃を信じなくてどうするのよ！それにいつまでもウジウジしていたら彼にも怒られてしまうわ・・・！」

その瞬間彼女の中にあつた黒い何かが消え去りそのままダインスレイフを掴む。

するとダインスレイフが起動しコアには彼女のルーンが浮かび上がった。

夢結「あなたまだ私を覚えていてくれたのね・・・。」

真っ白に染まった髪と紅く染まった瞳が綺麗な黒に戻りルナティックトランサーの兆候が完全に消え去る。

それだけではなく彼女の右の手の甲と左頬に黒い模様のようなものが浮かび上がった。

それだけではなく今までルナティックトランサーを使っていた時に感じた力よりも強いものが体に湧き上がる。

夢結「これは・・・!？」

彼女が困惑しているその時、

??? 『ごめんね、夢結……僕はまた君を苦しませてしまった……。  
だけど、もう大丈夫だね……。君は前へと進んでいける。』

夢結「!?!? ……お姉様……。?」

幻聴なのか彼女には今は亡き彼女の声が聞こえたような気がした。  
その声は、今までの感情がかけているような声ではなく、優しさに  
溢れた声だった。

夢結「お姉様……。見守っていて……。きつとお姉様が誇れる私に  
なってみせるから。」

彼女は梨璃が戦っているであろうヒュージの元へと走り出した。

梨璃「うわっ!」

結梨「おっと!」

ヒュージから打ち出される光弾により2人はなかなかヒュージに  
近づけないでいた。

そこにヒュージは4本あるうちの腕の1本を2人に向かって飛ば  
してくる。

2人はどうにか躲すが、彼女達の後ろにあつた校舎に当たった。

バリアのようなものがあり直接あたりはしなかったがその衝撃で  
窓ガラスなどが割れている。

梨璃「……。校舎が!」

結梨「梨璃!」

梨璃「あつ……。!」

梨璃が目を離しているとヒューズがもう一本梨璃に向かって飛ばしてくる。

結梨の叫び声で振り返るともうその刃は彼女の目の前にあり、体勢を崩した2人では対処できない状態だった。

梨璃に直撃するその瞬間、

夢結「ハアツ!!」

ものすごい速さで刃と梨璃の間に割り込んだ夢結がその攻撃を防いだ。

梨璃「お姉様?・・・どうやってこの攻撃を・・・それにCHARMは使えないはずじゃ・・・」。

この攻撃はいくら夢結であろうともルナティックトランサーを使っているなら別だが、素の状態で真正面から防ぐことが出来ない威力を秘めていることは梨璃でもわかった。

それなのに彼女はマジによる身体能力補助もなしにこの攻撃を防いでいた。

そして今は自分以外使えないはずのCHARMを使えていることが不思議に思い彼女が握っているCHARMを見ると、

梨璃「ダインスレイフ!?!」

夢結「ハアツ!!」

そのまま彼女はヒューズの腕をはじき飛ばした。

そして彼女がこちらを振り向き、

夢結「遅くなつてごめんなさい・・・。梨璃には色々と迷惑をかけたわね。」

梨璃に向かって微笑みかけていた。

その笑みは昔に見たあの表情にそっくりで、

梨璃「・・・！お、お姉様！大丈夫なんですか！」

夢結「ええ、もう平気よ。」

梨璃は彼女の頬に模様があることに気が付き、

梨璃「お姉様・・・その頬にある模様は？」

夢結「手だけではなかったのね・・・。私も詳しくは分からないわ。ただ、悪いものではないことは確かよ。」

結梨「結梨もいるんだぞ！」

夢結「あら・・・どうして結梨がここに？それにそのCHARMは・・・。」

夢結が声のする方を向くとそこには頬を膨らませた結梨がおりその手にはおかしな形のCHARMが握られていた。

梨璃「このCHARMは結梨ちゃんが自分で作ったそうぞ！どうして結梨ちゃんもCHARMを使えるの！」

夢結「・・・気づいていなかったのね。」

夢結は梨璃の発言にため息を吐きつつ、

夢結「おしゃべりしている暇はなさそうね。」

ヒュージの方を見ると3本の腕をこちらに向けられており、今にもこちらへと放たれようとしていた。

飛んできた腕を夢結がどんと弾いていく、

その隙について2人がヒュージへと接近するが光弾によって進路

を塞がれ2人はなかなか近づけない。

3本とも弾き終わった夢結がCHARMを射撃モードに切り替えて2人を援護する。

それにより2人はヒュージに接近することに成功し攻撃を加えるが、ヒュージは傷一つつかない。

夢結「・・・！」

梨璃「お姉様！」

結梨「夢結！」

ヒュージは夢結を挟み込みように2本の腕を薙払いながら3本目を振り下ろす。

2人はすぐに夢結の所へと向かおうとするが、光弾に阻まれてなかなか彼女の元へたどり着けない。

夢結はその攻撃CHARMを横にして刀身と持ち手で防ぐが、その攻撃の重さによって身動きが取れなくなってしまう。

そこにヒュージは残り1本を飛ばし、夢結を串刺しにしようとする。

夢結は自身の命を刈り取るであろう刃が迫ってくるのに恐怖し目を閉じてしまった。

数秒経つても痛みが来ないことに不思議に思い目を開けるとそこには、

黒いフード付きのロングコートを着た誰かが彼女の前に立っており、その前方には無数の大きな刃が地面から生えておりそれが4本目の攻撃を防いでいた。

腕がヒュージへと戻っていくと刃は崩れ出し目の前の人物の右手へと集まり形を変えた。

その手には大鎌が現れ、夢結にはその服装と大鎌に見覚えがあり、

夢結「・・・死神・・・。」

それは2年前の甲州撤退戦に現れた謎の人物である『死神』であった。

??? 「何とか間に合ったか・・・。」

夢結「!？」

夢結には死神の声に聞き覚えがあった、その声は彼女が昔から聞いている声で、

夢結「蓮夜・・・あなたなの？」

蓮夜「ああ・・・。」

死神が振り返るとフードの奥には彼の顔があり、その瞳には、太陽のような模様と秒針のような模様がそれぞれ右眼と左眼に浮かび上がっていた。

## 第22話

蓮夜「どうにか間に合ったか……。」

彼が彼女達が大きな怪我をしていないことを確認し安心していると、

夢結「どうして、あなたがそれを……。」

蓮夜「そんなの簡単だろ? ……俺がお前達が言う死神だからだよ……。」

そこに梨璃達が戻って来る。

梨璃「黒鉄さん!? どうしてここに……それにその目は……?」

蓮夜「これは……まあ、一旦後でだな、それよりも……。」

彼がヒュージの方を見たため彼女達も見てみると、そこには4本の腕をこちらに向けすぐにでも攻撃ができる体勢になっっている姿があつた。

蓮夜「こいつを先にかするぞ!」

彼はそう言いながら大鎌を片手に接近する。

ヒュージはそれを光弾にで阻もうとするが、

次の瞬間彼の姿が消え、ヒュージの目の間にいた。

蓮夜「……。」

彼が大鎌を振り下ろす。

その一撃はヒュージの胴体に大きな怪我傷跡を残しヒュージの体勢を崩した。

そこに夢結が傷に攻撃を加え傷を大きくしその後ろから梨璃と結梨がCHARMを突き刺した。

するとそれを埋めつくしていた黒い波紋が消え、白い円状の光が空を包んだ。

ミリアム「なんなんじゃ！ありや？」

鶴紗「誰が戦ってる？」

二水「梨璃さんに夢結様、それに結梨ちゃんです！あと・・・1人誰かは分かりませんが、大きな鎌のようなものを使っている人もいますね。」

二水は避難区域から鷹の目を使い戦っている人達とその状況をみんなに伝える。

梅「夢結もか・・・。」

神琳「フーミンさんレアスキル使ってらっしゃる？」

二水「あれ？・・・そういえば使えています！」

雨嘉「マギは使えないんじゃ・・・。」

鶴紗が自身のCHARMを起動させようとすると、CHARMが起動し射撃形態に変形した。

鶴紗「・・・動いた。」

百由「結界が中和されてる・・・さっきの光と何か関係が？」

眞悠理「とにかくCHARMさえ動けば！」

百由「結界は縮小しても以前健在・・・近寄れないのは変わらないわ。」

眞悠理「クツ！何か出来ることはないのか・・・。」



神琳「ノインヴェルト戦術してみませんか？」

ミリアム「夢結様と梨璃のはどうする？」

二水「いえ、お二人とも戦っています。」

楓「二水さん、結梨さんはどうやって戦っていますの？確かCHARMの修理は終わっていないはずですが……。」

二水「結梨さんはなんだかよく分からないCHARMを使っていますね。」

ミリアム「よく分からないとな？」

二水「なんとはいえいいんでしょうか……まるで色々なCHARMのパーツを適当に繋ぎ合わせたような……。」

ミリアム「多分黒鉄さんと百由様が作った組立機に適当にパーツを放り込んでやつじやな……確か2人が深夜のテンションかなんかで作って違うCHARMのパーツ同士でも組み立てられるようにしてたはずじゃし……。」

神琳「なんて無駄な機能を……。」

ミリアム「じやが今回はそれが幸を奏した感じじやな。」

梅「二水、話し変わるけど大鎌を持った奴って黒いロングコートみたいの着ているか？」

二水「は、はい！よくわかりましたね？」

梅「……そいつ、『死神』だ……。」

神琳「『死神』とはこの前仰っていた……。」

梅「ああ、2年前に1回見たことがあるから間違いない……。」

雨嘉「敵じやないんですよね？」

梅「多分そうだが……。」

二水「梨璃さん達と一緒に戦っていますし、大丈夫かと……。」

雨嘉「それならマギスフィアを梨璃達に届ければ……。」

楓「んなことをおしやられても肝心のノインヴェルト用のバレットはどこにありますの！……あら？」

彼女が腰に手をあてると違和感がありそれを取り出すと、

雨嘉「これ……。」

二水「バレットです！」

梅「どうして楓が持つてるんだ？」

楓「あの時？」

蓮夜「やっぱりデカいだけあってなかなか倒れないな！」

その頃彼らはヒュージの周りに散らばり蓮夜と夢結は近接を、梨璃と結梨は射撃での援護する形で戦闘が続いていた。

だがヒュージになかなか有効打を与えられず攻めあぐねていた。

夢結「蓮夜！何か手はないの？」

蓮夜「あるにはあるが……くっそ！やっぱり中央か……これじゃ削るのに時間がかかるぞ！」

夢結の言葉に彼はヒュージを見ながらそう叫ぶ。

ヒュージを見る彼の左眼が模様がなくなりハイライトがない状態になりその瞳は何やら不気味な雰囲気を出していた。

夢結「中央ってないがよ！」

蓮夜「あいつの弱点みたいどころ！胴体の中心にあってそこまで削らないとそこに攻撃を叩き込めないんだよ！」

夢結「そこに攻撃出来れば倒せるのね！」

蓮夜「ああ、だが時間がかかりすぎる……俺とお前は大丈夫だろうがこのままだと……。」

後ろで援護している2人の息が上がり始めていた。

このままではジリ貧でありどうにかならないかと考えを巡らせていると、

一条の光が頭上を通り過ぎた。

夢結・梨璃「「マギスファイア!」」

蓮夜「つてことは、ノインヴェルトか!」

梨璃（みんな・・・気づいてくれたんだ・・・。）

二水「やらなくちゃ、やらなくちゃ、やらなくちゃ、やらなくちゃ、やらなくちゃ!」

どんとんと二水へとマギスファイアが迫っていく。

二水「ふえく、・・・やあ!」

二水はマギスファイアをCHARMで弾くことに成功するが、それは予定していた場所とズレてしまい、

二水「あわわわわっ!す、すいません!お願いしまーす!」

楓「いいえ!いいパスですわよ!」

そのマギスファイアを楓がキャッチしそのまま射撃形態に変形させて打ち出した。

閑「ノインヴェルト戦術!」

汐里「あんな距離で!・・・面白いことしますね、一柳隊・・・。」

百由「結界の外からつてわけね・・・てか、その前に!あの3人はなんで戦えるのよ!あと、もう1人はだれ!」

祀「カリスマ・・・。」

百由「はあ!」

祀「梨璃さんは前に、夢結さんのルナティックランサーを沈めたことがあるわ・・・同じように彼女のレアスキル カリスマがヒューズの結界に鑑賞しているんじゃない?。」

百由「なるほどカリスマね……。って！いえいえ！だからってそこまで!？」

梅「なんかいつもより調子がいいぞ！」

ミアム「わしは絶好調じゃ！」

鶴紗「いつもより体が軽い……。!!」

神琳「夢結様！梨璃さん！」

マギスファイアがどんどんとパスされていきその輝きが強くなっていく、

そして神琳がそのマギスファイアを2人の方へと飛ばした。

夢結「マギスファイアが来るわ！私が受け止めるから、フィニッシュは梨璃、あなたが！」

蓮夜「結梨さん！俺達は2人のことを援護するぞ！」

結梨「うん！」

突然ヒュージの腕のうち3本がそれぞれ3つずつに分離しマギスファイアへと向かって行った。

夢結「えっ!？」

ヒュージにマギスファイアを受け止めて自身の周りに腕を円状の並べて奪割れてしまう。

神琳「なんですつて!？」

楓「マギスファイアを横取りされた!？」

マギスファイアはヒュージの腕と当たる度にその色が黒くなっていき何周かしているうちに真っ黒に染まってしまった。

夢結「失敗だわ・・・逃げなさい梨璃！」

梨璃「お姉様が逃げて下さい！」

2人がマギスファイアへと向かって飛び出した。

結梨「結梨も！」

蓮夜「ちよつと待て！」

結梨が2人を追って飛び出そうとするのを彼が止める。

すると直ぐにヒューズの残り1本の腕が3分割された2人に襲いかかった。

蓮夜「あつちは一旦2人に任せてあれをここで抑えるぞ・・・。」

結梨「なんで！結梨もあつちに行きたい！」

蓮夜「2人のところにあれを行かせると2人が怪我するかもしれない・・・だからここで抑えておかないと行けないんだ・・・我慢してくれ。」

結梨「・・・わかった！梨璃たちの所へは行かせない！」

夢結「馬鹿！たまには私の言うことを聞いたらどうなの！あなたは！」

梨璃「た、たまには!？」

夢結「シユツツエンゲルなのよ私は！なのに梨璃は私の言うことをいつも聞かなくて！」

梨璃「ええ!?!お姉様はわたしの事そんな風に思ってたんですか？」

夢結「そうでしょう！あなたはいっつも気が付けば私を置いてけぼりにして・・・自分より他人のことに一生懸命で・・・。」

梨璃「やったあ！」

梨璃のCHARMがマギスファイアに届き受け止めるが、触れたとこ

ろからCHARMが黒く変色していき、

夢結「マギを吸いすぎてる！」

夢結が彼女のCHARMを弾きマギスフィアを剥がすことに成功するが、

夢結「クッ！」

その衝撃で梨璃のCHARMの刀身が折れ、夢結の右手首も怪我してしまう。

その衝撃でマギスフィアが飛んで行ってしまい今度こそ失敗かと思われたその時、

天葉「行くよ！樟美！」

樟美「はい！天葉姉様！」

天葉と樟美がマギスフィアへと向かって飛び出し、

天葉「重っ!？」

天葉がマギスフィアにCHARMを叩き込みそれに続き樟美もCHARMを叩き込む。

天葉・樟美「やあああああつ!!」

またマギスフィアを奪おうとしていたヒュージの腕よりも先に弾き飛ばしヒュージに奪われることを阻止する。

梨璃「マギスフィアが！」

依奈「壱！亜羅椰！」

そのマギスフィアを依奈が受け取り壱と亜羅椰の方へと飛ばす。

マギスファイアを飛ばすと彼女のCHARMの刀身が音をたてて砕けてしまった。

依奈「ッ!?これだけでCHARMが限界だなんて・・・どんだけのマギスファイアなのよ!かなりやばいやつよ!気をつけて!」

壱「望むところ!」

亜羅椰「あとは頼むわよ!」

壱・亜羅椰「みんな!」

その後も他の生徒たちがマギスファイアを繋いでいく。

梨璃「マギスファイアがまだ!」

夢結「みんなが繋いでくれているんだわ。」

梅・鶴紗「私達ももう一度!」

神琳・雨嘉「CHARMの限界まで!」

楓・二水「夢結様と梨璃さんに!」

ミリアム「頼むぞ、わしの!」

全員『タンキエム!ティルフィング!媽祖聖札!アステリオン!ジユウユース!グングニル!ニョルニル!』

彼女達のCHARMを重ねてもう一度マギスファイアを2人の元へと飛ばした。

それを奪い取ろうとヒュージが腕を出すがマギスファイアに触れた瞬間その腕は砕けてしまう。

楓「ノインヴェルトはCHARMを著しく消耗させますのよ!覚えておきなさい!」

梨璃「すいませんお姉様・・・私が無茶したから・・・。」  
夢結「大丈夫よ・・・。」

梨璃が晴れていた右手首を見ると治っており、先程まで出ていた模様も消えていた。

その代わりに白い模様が左手の甲と右頬に現れていた。

夢結「梨璃・・・。」

梨璃は自身のCHARMを手放し夢結のCHARMを握る。

そのまま2人でCHARMを握った状態で飛んで来たマジスフィアへと切っ先を向けて飛び出した。

そこを狙っていたのか、ヒュージは9本の刃を2人に向かって飛ばしていた。

それが当たる寸前、

蓮夜「ぜりやアアア！」

彼が2人の前に出ていき飛来した刃を大鎌の刀身を伸ばしながら切り裂く。

自身の体を軸にして大鎌が縦横無尽に駆け回る。

それにより7本まで切り裂くことに成功するが、

蓮夜「グッ!？」

残り2本が彼の左肩と腹部に突き刺さる。

夢結・梨璃「蓮夜！（黒鉄さん!）」

蓮夜「俺に構うな!・・・そのままいけ!!」



そのまま彼が吹き飛ばされると彼女達の目の前にマギスファイアがあり、CHARMを切っ先がぶつかる。

するとCHARMをマギスファイアに貯められていたマギが包み込む刀身が虹色の輝きを纏った。

その光は次第に2人も包みさらに加速そのままヒュージへと迫る。

夢結・梨璃「やあああああっ!!」

その一撃はヒュージを真っ二つに切り裂く。

その直後ヒュージは大爆発を起こしその姿を消した。

爆発がおさまるとそこには雲一つない晴天の空があった。

## 第23話

夢結と梨璃は先程までヒュージと戦っていた場所に戻っていた。

梨璃「結梨ちゃん！黒鉄さーん！」

一緒に戦っていた蓮夜と結梨を探すが見つからない。

梨璃「お姉様、どうしましょう！結梨ちゃんも黒鉄さんもいません！」

夢結「結梨はあの前に逃げたかもしれないけれど……彼は……。  
(完全に左腕使えない状態で出血量も多かったはず……早く見つけな  
いと!!)」

夢結は冷静でいるように見えるが内心ではかなり焦っていた。

ミリアム「さつきこつちに何か飛んできたようじゃが……二水、何  
かわからんかの？」

ミリアムの言葉に二水が鷹の目で確認すると、

二水「人です！多分大鎌の人！」

神琳「あの爆発に巻き込まれたのでしょうか……。」

梅「早く助けないとまずいぞ！」

梅は縮地を発動し救助へと向かった。

梅「おい！大丈夫……か……。」

そこには、うつ伏せになり左肩から先がなくなり下半身も皮1枚で  
ギリギリ繋がっている状態の人物がいた。

神琳「これは……。」

想像以上の悲惨な光景に梅、神琳、鶴紗を除き皆がそちらを見れない状態になっていた。

鶴紗「これじゃ……リジエネーターだったとしても……。」

神琳「せめて誰なのかだけでも確認しないと……。」

神琳が彼の顔にかかったフードをとった。

神琳「……えっ？」

梅「おいおい……嘘だろ？」

鶴紗「先輩……。」

二水「先輩？……ッ！黒鉄さん！」

同じ一柳隊に所属する黒鉄 蓮夜がそこにいた。

その頃夢結と梨璃は小さなドーム状の何かを見つけた。

梨璃「何でしょうか……これ？」

夢結「私も分からないわ。」

2人が近づくと、ドームは崩れ中から結梨が出てきた。

結梨「梨璃！夢結！」

2人の姿を見つけると結梨は2人に抱きつく。

梨璃「結梨ちゃん！良かったよ！」

夢結「結梨無事だったのね。良かったわ。」

梨璃「結梨ちゃんも見つかりましたし、あとは黒鉄さんだけですわね！」

夢結「本当ね・・・どこにいるのかしら・・・。」

結梨「蓮夜ならあっちにいますと思う。」

そういうと結梨は避難区域の方を指さした。

梨璃「なんでそう思うの？」

結梨「あっちから蓮夜を感じるから？」

夢結「とにかく行って見ましよう。避難区域の近くならもう誰かが見つけているかもしれないわ。いなくてもみんなに手伝って貰えば彼を見つけやすくなるわ。」

梨璃「分かりました！」

結梨「うん！」

避難区域に向かっていると、

梨璃「あっ！みんな！」

一柳隊のみんながいた。

そちらに近づくと彼女達が険しい表情をしていることがわかった。

梨璃「みんなどうしたの？」

楓「梨璃さん・・・。」

みんなが梨璃達の方を振り向くがその顔は暗く誰一人目を合わせようとしなかった。

夢結「あなた達無事だったのね、よかった・・・わ。」

夢結が近づ来て彼女達が見ていた方を見るとそこには、悲惨な姿になった彼がいた。

夢結「えっ?・・・嘘よね?・・・だってさっきまで・・・えっ?」

彼女には理解できなかった。

ただ呆然とした顔で彼へと近づき、

夢結「・・・。」

彼の脈を確認するが脈はなく、彼の目は開いておりその目は生気の宿っていない虚ろなものになっていた。

彼女の顔がどんどん青くなり、身体が震え始める。

予想はできていた。

理解もできていた。

ただ、理解したくなかった。

家族を失い、美鈴様を失い、自身を呪い、嫌っていたその中で唯一自身を支えてくれていた彼がいなくなる。

それを認めたくなかった。

けれど現実是自己を庇って突き刺され彼は死んでしまった。

彼女が最も恐れていた光景の1つ、

自分中で何かが壊れ始める音が聞こえる。

やっと開放されたあの地獄にまた引きずり込まれる感覚におちいる。

やはり私は誰かと関わってはいけない。

この言葉が頭を埋め尽くす。

その時自分の頬が濡れていることに気がついた。

彼女は泣いていた。

当たり前前だ、親しい人を失って悲しくないはずがない。

夢結「あなたも私を置いていくの……。」

彼の右手を掴みながら呟いたその言葉は、身勝手であったが彼女の心の叫びでもあった。

私が大切だと思った人はみんな私を置いて先に行ってしまう。

夢結「置いていかないで……。私を1人にしないで、」

その時に初めて気がついた。

自分は彼に恋心を持っていたと、

だがもう遅い、彼はもういない。

気づく機会はいくらでもあった。

だが彼女は気付かないふりをし続けてきた。

その結果がこれだ。

選択を間違え続けて行き着いた先がこれだ、

進んだ時は戻せない。

自分の中の何かが壊れるのも時間の問題だ。

これが壊れてしまったら絶対に治ることはない、その確信があった。

だが崩壊は止まらない。

酷い喪失感に襲われ始める。

だけどそれ自体に恐怖心はなかった。

全ては自業自得だ。

受け入れるしかない、

梨璃やみんなにはバレないようにしなくては、そして少しずつ離れていこう。

最後に残った一欠片に亀裂が入った。

その時、

『パキパキパキパキ!』

彼から奇妙な音が鳴る。

結晶のようなものが彼の傷口から生え始める。

夢結「・・・!?!」

その結晶は無くなった彼の左腕、皮1枚で繋がった下半身を形取った。

『チツ、チツ、チツ、チツ』

秒針のような音が聞こえ始める。

結晶が流動し色が変わる。

それは彼の身体を再現していく。

『カチン』

時を戻したかのように彼の身体が元に戻った。

蓮夜「・・・ここまでボロボロになるのは久しぶりだな・・・。」

何事も無かったように彼が立ち上がり周りを見ると、

蓮夜「・・・見られちゃったか・・・。」

その光景にみんなが呆然としている。

当たり前だ、あの状態から何事も無かったかのように立ち上がったのだ。

普通ではありえない。

この光景の異常さに誰もが固まってしまう。

その中夢結が立ち上がり、

夢結「…………馬鹿!!」

蓮夜「!？」

彼の背後から彼女が抱きつく。

夢結「死んじやったんじゃないかって思ったじゃない!」

突然の行動に彼も困惑するが彼女が震え上がり涙を流していることに気がつくのと彼女の頭を撫でて、

蓮夜「心配させたみたいだな…………ごめん…………」

その場には彼女の泣く声がこだましていた。

しばらくして彼女が泣き止み、

夢結「ごめんなさい…………もう落ち着いたわ。」

蓮夜「お前がこんなに泣くのも何時ぶりかな？」

夢結「…………泣いてないわ。」

恥ずかしかったのか、顔を赤くして彼女は俯いている。

蓮夜「お前達も迷惑をかけたな…………すまない。」

梅「それはいいんだが…………」

鶴紗「…………さつきのはなんなんですか!…………あんな怪我リジエネーターでも再生不可のなはず…………」

蓮夜「…………」



鶴紗の言葉に彼は黙ってしまおう。

神琳「話しづらいことでしたら……。」

蓮夜「いや、話すよ。これ以上黙っている訳にも行かないからな……ただこれは他の人には聞かれたくないから場所を用意できたらいいか……。」

鶴紗「それでいいです……。」

その後他の学院の生徒たちと合流すると彼女達は先程の戦闘の衝撃で湧き出てきた温泉に向かい彼ははとある場所へと向かっていた。

蓮夜「姐さん……やっとだ、やっとあいつは開放されたよ……。」

彼は百合ヶ丘の共同墓地に来ており目の前には川添美鈴と書かれた墓石があった。

蓮夜「だけどあいつもこつち側に来ちまったよ……あなたの言った通りな……俺はこれからもあいつのことを見守っていくつもりだ……だから姐さんも……。」

夢結「こつち側とは何かしら？」

蓮夜「!？」

振り向くとそこには夢結がおり、

蓮夜「梨璃さん達と一緒にじゃないのか？」

夢結「ええ、梨璃達はまだお風呂に入っていると思うわ。」

蓮夜「一緒に居てやらないでいいのか？」

夢結「大丈夫よ……それよりもあなた、姐さんってお姉様のこと……あの人とあったことがあるの？」

蓮夜「ああ、ちよつとあつてな。」

夢結「……そう。」

彼女は彼へと近づきそのまま彼に抱きつく、

蓮夜「どうしたんだ？」

夢結「……。」

彼女は彼の胸に顔をうずめて息を整え始める。

少し経つと彼女は顔を上げ、

夢結「あなたが死んじゃったんと思った時、私気づいたの……私は蓮夜のこと好きだって……。」

蓮夜「……。」

夢結「あなたが居なくなってしまうと思った時、私の一番大切な人があなただったんだって気がついたの……。どんなに辛い時でも私のことを支えてきてくれたあなたが……。」

蓮夜「……。」

夢結「だから……その……私と付き合ってください！」

これは不器用な彼女の精一杯の言葉だった。

彼女は彼の返事を待つ。

蓮夜「……ごめん。」

夢結「……えっ？」

蓮夜「夢結……俺は君とは付き合えない。」

彼の言葉が静かにその場に響いた。

## 第24話

蓮夜「夢結・・・俺は君とは付き合えない。」

彼はそう言いながらその場を去ろうとする。

夢結「待って！」

その腕を彼女が掴み、

夢結「・・・どうしてなの？」

蓮夜「・・・一緒に入れないからだよ。・・・もし付き合ったらお前が辛い思いをする・・・。」

夢結「あの瞳のこと・・・？それなら、」

蓮夜「そんな簡単なことじゃないんだよ・・・。」

彼は彼女の腕を強引に振り払い再びその場を去ろうとする。

夢結「!？」

彼女が見たその表情は、

悲しみを宿した悲痛なものだった。

夢結（その顔は・・・あなたもそうなのね。）

彼女にはその表情に見覚えがあった。

それは彼女自信がよく知る、自身のことを呪い他者を拒絶する。彼女がこの2年間ずっと抱えていたものだったものだから、

理由は分からないが彼も己を呪っているのだろう、

夢結（今度は私が支えてあげたい）

彼女がそう思うと身体が自然と動く、  
気づいた時には彼の背中に抱きついていて、

夢結「お願い・・・教えて、どうして一緒にいられないの？」

蓮夜「・・・。」

夢結「あなたのことを支えたいの！あなたが私にしてくれたように  
！」

蓮夜「・・・。」

夢結「あの瞳が原因なら方法がないか一緒に考えましょう！絶対に  
方法があるはずよ！」

蓮夜「何も知らないのに・・・。」

夢結「えっ？」

蓮夜「何も知らないのに、そんなことを言うな!!」

夢結「!？」

蓮夜「俺の気持ちも分からないでそんなことを言わないでくれ！方  
法を考えましょう？もう手は尽くしたよ！どうにも出来ないんだよ  
！俺だつてどうにかしたいさ・・・だけど無理なんだよ・・・頼むか  
らこれ以上俺を苦しませないでくれ・・・。」

その言葉には彼の強い思いが籠っていた。

それを聞いた夢結の顔が歪む、

これは自分が抱えていたものなんかよりもより重いものだ、そう直  
感させる。

だが、

夢結「お願いよ・・・どうしてなの・・・？」

彼女は諦めなかった。

その彼女の思いが届いたのか、

蓮夜「・・・歳を取らないんだ・・・。」

夢結「・・・えっ？」

蓮夜「正確にはあと数年で俺は肉体の変化が止まる。」

夢結「どういうことなの・・・？」

蓮夜「寿命がないんだよ。外的な要因がないと俺は死なない。・・・その外的な要因でも身体が再生するから死ねない。」

夢結「・・・。」

蓮夜「どんどんと周りの人はいなくなり俺だけが残る。寿命がないんだから当たり前だ・・・もしもお前のことを好きになっちゃったら俺はお前がいなくなった時、きつと耐えられなくなる。」

夢結「・・・。」

蓮夜「よく不死になりたいとか言うやつがいるだろ・・・だけど不死っていうのは生易しいものじゃない。・・・訪れるのは孤独だ・・・俺にはそれが耐えられない。」

夢結「・・・。」

蓮夜「だから俺のことはほっといてくれ・・・お前にだって俺みたくないやつよりも相応しいやつが現れるさ。」

彼の言葉を黙って聞く、

この言葉が真実ならそれは本当に地獄なのだろう。

親しい人達がいなくなり1人になる、そんなこと自分には耐えられない。

彼を助けることはできないのか、

考えるが思い浮かばない。

絶望感が彼女を埋め尽くす。

自分の好きな人にこれから待ち受ける地獄を想像すると震えが止まらない。

蓮夜「だから俺みたいな化け物ほっといてくれ。」

『パーン』

その瞬間彼の頬に痛みが走る。

彼女が頬を叩いたのだ。

「夢結「そんな事言わないで！」

蓮夜「!？」

夢結「あなたは化け物じゃないわ！」

彼女は怒っていた。

彼の言葉に、この現実には、

そして何より自身の不甲斐なさに、

夢結「あなたが抱えているものはわかったわ！」

彼女の両手に、頬に模様が走る。

夢結「私にはそれはどれだけ辛いかは想像もできない……。」

彼女の身体を黒と白のオーラのようなものが覆う。

夢結「だけど……。」

彼女の額にモヤのようなものでできた黒い角が、彼女の背中に白い光の翼が現れる。

夢結「あなたが化け物だと言うことだけは絶対に認めない！」

まるで今の彼女の感情を表すかのようにオーラの勢いがます、

その光景に彼は焦り始めた。

蓮夜「やめろ！お前はその力がどんなものか知っているのか！それ以上使ったら吞まれるぞ！」

夢結「分からないわ……ただ、あなたを苦しめているものと同種なのだけはわかる。」

蓮夜「後戻り出来なくなる！だからやめてくれ！……頼む……お前には普通の人として幸せになつて欲しいんだ……頼む。」

夢結「ふふ、あなたは優しいわね、いつも……だけどこめんなさい、あなたの言うことは聞けないわ。」

彼の瞳に模様が現れる。

すぐに彼は困惑する。

私のことを止めようとしているのだろう。

だけど意味が無い。

彼女にはわかった。

この力を使っている間、自分から受け入れなければどのようなものでも非物理的干渉なら無効化できる。

彼女は直感的にそう感じとった。

説明された訳では無い。

頭に入ってくるのだ、この力の名前もその使い方もそして危険性も、

この力の名は『異能』

その力を使う人達の名は『異能者』

リリイが生まれる前から、人類が生まれた時からある異常な力。

過去にいた英雄や魔女などの伝説の人物は異能の力を持っていた。

そしてこの力を使いすぎると異能そのものに吞まれてしまう。そうなる自我を失い本物の化け物になる。

だが異能に吞まれても自我を保つ者がいる。

そのものは異能の多大な恩恵と共に呪いを受ける。

そうなったものを『超越者』という。

これらの情報が頭の中に入ってくる。

彼も超越者になってしまったのだろう。

そのせいで苦しんでいる。

どうすれば彼の側にいられるのか、

簡単だ、自分も超越者になればいい。

呪いがどのようなものになるか分からないしそもそも超越者になれずに吞まれてしまうかもしれない。

もし私が化け物になったら彼は悲しむだろう。

夢結（だけど・・・）

諦めたくなかった。  
彼の悲しむ顔を見たくない。  
ならば成功させるしかない。  
決意を決めたその時、彼女の周りが暗くなった。

彼女の瞳から光がなくなり表情を失われていく。

蓮夜「夢結!!」

倒れそうになった彼女の体を支える。

彼はこの現象に覚えがあった。

蓮夜「まだ覚醒したばかりなのになんで・・・。」

異能に呑み込まれる時の現象だった。

震える彼女を彼は抱きしめる。

彼は彼女からのあの告白に本当は答えたかった。

だが2人の生きる時間が違いすぎる。

もし彼女の思いに答えてしまったら、いずれ彼女を悲しませてしま  
う。

いや、違うそれはただの言い訳だ。

ただ彼がこれ以上の関係になり失うことを恐れているだけだ。

そのせいで彼女は苦しんでいる。

全て自分のせいだ。

彼は絶望感に襲われる。

もしも彼女が完全に呑まれてしまい自我を失ってしまったら彼は  
彼女を殺さなければいけない。

もし異能に呑まれた者が暴れてしまったら、学院だけではなくこの  
日本自体が滅びる可能性がある。



それほどに異能の暴走は危険なのだ。  
彼女の手を血に染めさせないためにも、  
本当にそんなことができるのだろうか？  
彼女を傷つけることができるのだろうか、  
いいや、無理だ。  
できるはずがない、  
彼も彼女に恋心を持っているのだ。  
蓮夜「頼む・・・夢結・・・戻ってきてくれ・・・。」  
彼は祈るしかなかった。  
自分の無力さに怒りを覚える。

俺が居なければ、  
彼の中でこの言葉が繰り返される。

蓮夜（やはり俺は化け物なんだ、大切なものを傷つけずにはいられない。）

無意識に彼女を抱きしめる力が強まる。

目の前が暗くなり、何かに引きずり込まれる感覚に襲われる。

超越者も精神状態によっては飲まれる事がある。

今の彼はまさにその状態に陥っていた。

大切な人を失い、唯一の支えであった彼女がいなくなるかもしれない、その絶望感に蝕まれる。

このまま落ちてしまった方が楽なのかもしれない。

そう思ってしまうほどに彼の心は消耗してしまった。

夢結『すぐに隣まで行くから！』

彼女の声で彼の意識が浮上した。  
すると彼女の瞳に光が宿り、

周りが次第に暗くなったように感じる。

何かに吞まれて深く暗いどこかへと飲み込まれるような感覚に襲われる。

怖い・・・この言葉が自分を埋め尽くす。

夢結（誰か助けて・・・。）

自分が自分ではなくなるような感覚に恐怖を感じ、助けを求める。

夢結（助けて！）

彼の名前を叫ぼうとしたが、

夢結（助けて・・・。彼に助けを求めてどうするの！彼を助けてい・・・

一緒にいたいから私はここにいてるんでしよう！）

彼女は自分の目的を思い出した。

その時目の前に光が差し込む。

その形は扉のようである中には彼の後ろ姿があった。

夢結（あれがあなたの世界なのね・・・。）

彼女は光へと向かって進む。

その歩みに迷わない。

夢結（待っていなさい！すぐに隣まで行くから！）

彼女は走り出した。

そして光の中に入ると、

蓮夜「なんて無茶なことをしたんだ！」

彼が自分のことを抱きしめていた。

その顔は今にも泣きそうになっており、

彼の力が強まる。

夢結「心配かけてしまったわね・・・ごめんなさい。」

怖かったのだろう。

もし私が化け物になったらと考えて、

彼女は罪悪感に襲われるがそれよりも強い喜びを感じていた。

自分の超越者になった代償・・・呪いが頭の中に入ってくる。

それは、彼女が求めた不死であった。

彼女が受けた呪いは不死だった。

これは彼女にとって呪いではなく祝福だ。

彼女は賭けに勝ち、己の欲しいものを手に入れた。

夢結「だけどこれであなたのことを化け物とは言わせないわよ！」

彼女は満面の笑みでそう言い放った。

蓮夜「ごめん・・・俺のせいで・・・やっぱり君と一緒にいたら行けないんだ・・・だから、」

もう君に合わない。

彼の言葉が遮られる。

彼女が自身の唇で彼の唇を塞いだからだ。

蓮夜「!？」

彼の彼女の行動に驚き彼女から距離を取ろうとするが、彼女が彼に抱きつき彼の動きを止める。

彼女が唇を離すと、

夢結「あなたのせいでは無いわ。私が自分の意思で、あなたと一緒にいたいからやったのよ。」

彼女はこちらに真剣な顔を向けて言った。

蓮夜「だけど・・・。」

夢結「ただけではありません！そこまで責任を感じているのだから・・・責任を取って私と一緒にいなさい・・・私もあなたと同じ不死になってしまったのだから、」

まさか自分のためにここまでするとは彼は思っていなかった。

彼女と一緒にいることはできない、  
彼だけが取り残されていつかなくなる。  
彼の隣を歩き続けてくれるものなんていない。  
彼はこの呪いを受けてからずっとそう考えていた。

だが彼女はただ一緒にいたいという気持ちだけで人間をやめて自分の隣まで来てくれた。

彼女なら一緒に歩き続けてくれる。

殻の中に閉じこもり諦めて彼の心を彼女は救い出したのだ。

蓮夜（やっぱり君には敵わないや……。）

彼は彼女を見つめながら、

蓮夜「夢結……。」

夢結「何かしら？」

蓮夜「さつきはあんな事を言ってしまったけど……もし君が許してくれるのだったら。」

もう迷わない。

蓮夜「ずっと一緒にいてくれませんか。」

これが彼の思いの全てだ。

誰とも一緒にいることができないと思っていた彼の全てがこの言葉に詰まっている。

彼は彼女の答えを待つ。

もしかしたら……と、考えてしまう。

そして彼女から帰ってきた言葉は、

夢結「もちろん！ずっと一緒よ！」

彼女は涙を流しながら、今までで一番の笑顔でそう答えた。

2人の顔が近づき、お互いの唇を重ねた。

## 第25話

蓮夜「…なんというか、場違いなところで告白しちゃったな…。」  
夢結「ええ…自覚はあるわ…。」

2人は墓地のすぐ側で微妙な顔をしていた。  
2人とも墓地のすぐ近くで告白して…と思っているのだ。

蓮夜「…まあ、考えたってもう遅いしな。」

夢結「ええ、そうね…。」

気まずい空気となる。

その空気を帰るために、

蓮夜「そういえば夢結、お前の異能ってなんなんだ？俺のは紋章  
眼って言うんだけど。」

夢結「その名前は、あなたが決めたの…？」

蓮夜「やめろ！そんな痛いやつを見る目で見ないでくれ！…俺  
が決めたんじゃないから、異能の知識を引き出すと自然と名前が解る  
からやってみてくれ！」

彼の必死な弁解を聞いた彼女は、彼に言われた通り先程頭に知識が  
入ってきた時の感覚を頼りに異能の知識を引き出す。  
すると、

夢結「…天獄纏ね…。」

蓮夜「…。」

夢結「私が決めたわけじゃないのだからその目はやめなさい！あな  
たは知っているでしょう！」

その名前があまりに痛い名前に彼が引いてしまい彼女が怒り始め  
た。

蓮夜「いや・・・なっ？まさか俺のより痛いとは思わなくて・・・その・・・ごめんなさい！」

夢結「・・・解ればいいのよ。」

彼がすぐさま謝り事なきを得た。

蓮夜「まあ、名前に強化型の憑依系か？」

夢結「憑依系？強化型？」

蓮夜「その知識はまだ得ていないんだな。俺も異能から引き出した知識だが、まず異能は大まかに3種類に別れるんだよ。知覚型、強化型、感応型の3つだな。知覚型は自身感覚器官などを触媒に知覚範囲に干渉する能力で、強化型は読んで字のごとく自身そのものを強化する、そして感応型は自身を中心に一定範囲内の他の存在に力を伝播されて間接的に干渉する能力だな。」

夢結「知覚型と感応型は同じでは無いの？」

蓮夜「同じく決められた範囲内に干渉する能力だが、知覚型は直接的に・・・例えば空間を操作したりするんだが、感応型は間接的な干渉・・・例えば一定範囲内の味方の能力を強化するとかだな。」

夢結「そう考えると違うわね。」

蓮夜「話を戻すがその強化型には変化系、憑依系があるんだよ。変化系は自身の身体の一部又は全体を変化させる能力で、憑依系は自身に何かしらの概念的な存在を憑依させて強化する能力だな。」

夢結「その考え方なら私は強化型の憑依系であっているわね。それであなたは違うかしら？」

蓮夜「あってるぞ。俺は知覚型の刻印系だな。」

知覚型には刻印系と起点系の2つがあつてな刻印系は自身の感覚器官、俺の場合は眼を発動点にして自分の知覚範囲に干渉する能力、起点系は自身の知覚範囲に起点を作りそこを中心に能力を発動する、起点は範囲が刻印系よりも広い場合が多いが干渉力が刻印型に劣るらしい。」

夢結「そうなのね・・・そうすると感応型も2種類あるのかしら？」

蓮夜「ああ、感応型には共鳴系と支配系があるな。」

夢結「・・・支配・・・。」

蓮夜「共鳴系は自身と他者を繋ぐことで能力の供給や増幅をする能力で、支配系は他者を自身に繋ぐことで干渉する能力だな。まあ、ここは結構曖昧だけど・・・。」

夢結「曖昧？」

蓮夜「感応型だけその性質が備わっているが本質が違うって場合が多いんだよ。」

夢結「例えばどのようなものがあるのかしら？」

蓮夜「例えばだが、共鳴系で共鳴した相手を鼓舞してその人物に加護するという形で障壁を展開する能力とかな。」

夢結「それってもしかして・・・。」

蓮夜「名前までは引き出せなかったが多分お前の予想が合ってると思うぞ・・・。とまあ、こんな感じでこれだけは基本系統は関係ないな。」

夢結「わかったわ。」

蓮夜「それで・・・不死の呪いって言ったが恩恵はなんだったんだ？」

彼が一番気になっていたことはこれだ。

そもそも超越者の呪いは恩恵の効果の中で自身の望まないものを指すものだ。

もし呪いが不死だと言うのなら恩恵もそれほどのものになることは確実、恩恵によっては姿が変わるものもあるのだその場合はすぐに対処をしなくてはいけない。

今のところ容姿の変化はないがしらのことがトリガーとなり変化するものかもしれないのですぐに知らなければいけないことだ。

蓮夜「ちなみに俺の恩恵は『理外者』、概念からの干渉を受けずらくする恩恵でこの恩恵の効果で常に異能の能力の一部を受けらることに



なる呪いを持つてる。」

夢結「それがどうして不死の呪いに？」

蓮夜「俺の眼は今7つあるんだよ。その中の再生の眼の効果で自分の最高の状態に戻り続けるって言うものがあるんだ。それで身体が老いる前に戻り続け、ついでに次元の眼でその状態に固定されるから歳を取らなくなるんだ。そもそも老衰も概念だから干渉をほとんど受けないし……。」

夢結「つまり3つも不死の呪いを持っていると……。」

蓮夜「簡単に言うそうだな……。」

これは塞ぎ込んでしまうと彼女は思った。

ひとつならどうにかなるかもしれないが3つではどうにもならない。

蓮夜「おっと、話が逸れたな。それで夢結の恩恵はなんだったんだ？」

夢結「私の恩恵は『精霊化』よ。自身の存在を概念存在に変質させる。概念そのものになるから老いることを死ぬこともないらしいわ。」

蓮夜「存在の変質なら容姿は変わらないのか？」

夢結「基本的には変わらないわ。だけど異能を使用すると少し変わるらしいのよ。」

蓮夜「さっきの角と翼か？」

夢結「ええ、私の能力は悪魔と天使の存在概念を自身に纏わせることで自分自身をその存在に変化させる能力なの。」

蓮夜「なんで悪魔と天使なのに精霊化なんだ？普通恩恵は異能に強く影響を受けるはずだが……。」

夢結「それが、精霊自体は中立で善性に傾くと天使に悪性に傾くと悪魔になるらしいのよ。」

蓮夜「そうなのか、初めて聞いたはそんなこと……。」

夢結「私も……。」

蓮夜「それならレアスキルがルナティックトランサーじゃなく類似スキルだったってことでどうにかなるな。」

夢結「そうかしら？」

蓮夜「夢結のルナティックトランサーは元々容姿変化するから誤魔化せるだろう。」

夢結「そうならひとまず安心ね。」

蓮夜「そもそもルナティックトランサー自体が変質してるかもな。」

夢結「えっ？」

蓮夜「ちよつと使つて見てくれないか？」

夢結「いいけれど、暴れてしまったら……。」

蓮夜「安心しろ俺が止める。」

夢結「わかつたわ。」

夢結は彼の言葉を信じてルナティックトランサーを発動した。

するといつもなら憎しみに呑まれるはずなのに思考がしつかりとできて感覚が研ぎ澄まされる。

髪の色も変化するが、いつもの真っ白な髪でなく輝くような銀色に変わっていた。

夢結「!？」

いつもとは違う感覚に彼女は困惑する。

蓮夜「やっぱりな、レアスキルが変質してる。」

夢結「どういう事なの？」

蓮夜「異能者になると元のレアスキルから変化するらしいんだよ。」

姐さん……美鈴さんがそうだった。」

夢結「お姉様が……。」

蓮夜「美鈴さんの元々のスキルはカリスマだったんだよ。それが異能に覚醒してラプラスに変化したらしい。」

夢結「そうだったのね……もしかして！お姉様が苦しんでいたの

は……。」

蓮夜「ああ、呑まれかけてたんだ。あの人は……あの人の異能は特殊でな、止めることができないんだ。」

夢結「私が気づいてあげていれば……。」

蓮夜「それは無理だ……あの人は異能まで使って隠していたからな……お前も異能に覚醒してわかっただろ？異能には異能でしか対処できない。」

夢結「……だけど……。」

彼女の表情が暗くなる、

わかっているが苦しいのだろう。

蓮夜「……もうそろそろ出てきたらどうですか？」

夢結「……？」

彼が彼女の後ろを見ながらそう言った。

夢結は不思議そうに後ろを見るがそこには誰もいない。

蓮夜「もう条件は達成してるんでしよう？なら早く出てきてくださいよ。俺も夢結に謝りたいですし。」

夢結「何を言っているの？」

蓮夜「気まずいんですか？……そんなにうじうじしているなら強制的に引っ張り出しますよ？専門外ですけど今の俺なら見えていればそれくらいならできますから。」

???『待ってくれ!』

夢結「えっ!？」

夢結は自身の後ろから聞こえた声に驚愕する。

この声に聞き覚えがあるからだ。

夢結「お姉……様？」

その声は彼女のシュツツエンゲルであった川添 美鈴のものだっ

た。

美鈴『夢結……』

夢結が振り返るとそこには、

あの頃のままの姿の川添 美鈴の姿があつた。

美鈴「今までつらい思いをさせてしまったね……ごめん。」

夢結「お姉様!!」

夢結は彼女に抱きつく。

夢結「お姉様……わたし、私謝りたくて!」

泣きじやくる彼女の頭を撫でながら、

美鈴「いいや、夢結が謝ることじゃない。謝らないといけないのは僕なんだ。」

夢結「そんなはず!」

美鈴「あるんだよ……だってあの時夢結は僕を傷つけていないのだから。」

夢結「……えっ?」

彼女は困惑する。

間違はなく彼女はダインスレイフで美鈴を貫いているはずなのだ。

あの時の感触は今でも手にこびりついている。

それではあれはなんだったのか?

彼女の中でこの疑問が駆け巡る。

美鈴「あの時夢結が貫いたのは僕の分身……つまり偽物の僕なんだ。」

夢結「偽物?」

美鈴「ああ、私はあの時にはもう重症をおつていてね。夢結をどう

にか助けないと思つて・・・そのせいで苦しませてしまったね。」  
夢結「それならお姉様は生きていたのですか！」

美鈴が顔を俯け、

美鈴「いいや、僕はあの時に死んでしまったよ。」

夢結「なら今私の前にいるお姉様は？」

美鈴「簡単に言うなら幽霊かな？ 肉体がない魂が具現化した存在、それが今の僕だよ。」

夢結「それも異能の力なのですか？」

美鈴「そうだよ。」

夢結「・・・蓮夜、あなたは知っていたの？」

蓮夜「・・・知つてた。」

夢結「ならどうして教えてくれなかったの！」

蓮夜「それは・・・。」

夢結「教えてくれれば私はこんなに苦しまずに済んだのに！ もっと早くお姉様に会えていたのに！」

彼女は彼を問い詰める。

どうして教えてくれなかったのか、  
支えるという言葉は嘘だったのか、

彼の言葉が全て嘘だったのか、  
そう思ってしまう。

先程の告白も彼の思いも、  
そして私の思いも、

全てが偽りなのではと思つてしまう。  
この気持ちは彼が私に埋め込んだものでは無いか、

そう考えてしまう。  
自問自答を繰り返すにつれどんどん悲しみが湧いてくる。

もしもそうなら、  
震えが止まらなくなる。

美鈴「夢結!!」

夢結「!？」

美鈴の言葉で我に返る。

美鈴「彼は言わなかったんじやなくて言えなかったんだ・・・。」

夢結「・・・えっ？」

美鈴「僕の異能『虚実霊域』の能力に死んだ時に1人の人間を対象にその人の守護霊になるっていう力があるんだ。その条件が対象者が幻影の私に打ち勝つこととこの事を対象者が知ってはいけないというものがあるんだ。そして私の幻影はこの事知るものの接触到強く反応する。だから彼は教えることができなかつたんだよ。」

夢結「そうなの・・・？」

蓮夜「・・・ああ、姐さんに話によると姐さんが異能者であることを知っている時点でダメらしいからな・・・俺の言葉は絶対に夢結には響かない・・・だからお前を幻影から解き放つてくれる人を梨璃さんみたいな人を探してたんだよ。」

美鈴「だから彼を責めないであげてくれ。彼も被害者なんだ。」

夢結の中に強い罪悪感が生まれる。

夢結「ごめんなさい・・・。」

蓮夜「いいんだよ。ああなつたらみんなこうなる。」

美鈴「蓮夜・・・君にもつらい思いをさせたね。ごめん・・・。」

蓮夜「姐さん・・・これは俺が自分が好きでやったことだ・・・だから謝らないでくれ。」

美鈴「だけど・・・君は・・・。」

蓮夜「・・・姐さん。」

美鈴「なんだい？」

蓮夜「謝るよりも先に言うことがあるんじゃないですか？」

美鈴「・・・!？」

彼女は気がついたようで2人に向き直り、

美鈴「2人とも、ただいま！」

夢結・蓮夜「おかえり（なさい）!!」

こうして2年もの間続いた呪縛はついに終わりを告げた。

## 第26話

美鈴との再会した日の夜梨璃と夢結、そして蓮夜は理事長室に呼ばれていた。

百由「これが私たち百合ヶ丘女学院が管轄する7号百合ヶ丘ネストの現在の様子よ。」

百由がこちらにPCの画面を見せてくる。

百由「ここに映っているのがネストの主と目されるアルトラ級ヒュージね。」

梨璃「アルトラ級?・・・えっと、あのもしかしてこれ・・・海の底ですか?」

海の底に今日戦ったヒュージよりもはるかに巨大なヒュージが映っていた。

百由「そう、そう、そうそう!・・・ちなみにアルトラ級ヒュージの全長は400mとも1kmとも言われているのよ。」

梨璃「よく分からないけど・・・凄いですね・・・。」

百由「ここ最近のヒュージはこのアルトラ級から大量のマグ半ば奪う形で供給されていたわ。」

吏房「過剰な負荷をかけられたせいで今はネスト全体がその機能を事実上停止していると思われまます。」

蓮夜「叩くには打って付けて訳ですね。」

吏房「ええ、殲滅するにはまたと無い機会よ。」

梨璃「殲滅?」

高松「そこで一柳君にその任務を頼みたいのだが。」

夢結「・・・。」

蓮夜「やっぱりか・・・。」



梨璃「はい・・・えっ？わたし！」

梨璃は一瞬理解できなかつたがすぐに理解できその唐突な話に困惑してしまふ。

梨璃「だけどうやって・・・？」

すると梨璃目の前に1本のCHARMが置かれた。  
それは先程夢結が使っていたダインスレイフだった。

眞悠理「これだ・・・。」

夢結「これは・・・！」

眞悠理「お前たちの方が馴染み深いだろうな：ダインスレイフ：言わばこの元凶となったCHARMだ・・・美鈴様を書き換えた術式が、巡り巡って百合ヶ丘のヒュージを狂わせた・・・。」

百由「それをヒントにアルトラ級を倒すための言わばバグとしての術式を仕込んだの・・・まさかこんなすぐに使うことになるとは思わなかつたから・・・間に合わせの急ごしらえだけど・・・。」

夢結「急ぐ必要があるという事ね・・・。」

蓮夜「多分ですがCHARMの数ですよね？」

吏房「ええ、今私たちにはこの一振しか残されていないの・・・。」

眞悠理「もし今ヒュージが現れても為す術がない。」

祀「これを使用できるのはカリスマ以上のレアスキルを持つリイだけよ・・・そうでなければバクを送り込むどころか自信が汚染される恐れさえあるわ。」

蓮夜「一応俺のはありますけど1人だと限界がありますしね。」

祀「あなたのも壊れたのでは？」

彼が横に手を伸ばすと窓から粒子よのようなものが入ってきて彼の手の中で姿を変えていく。

そこに現れたものは彼の身長程の大太刀だった。

祀・眞悠理・吏房「!?」

百由「なにそれ!」

高松「・・・ほう。」

蓮夜「これはナノマシンみたいなもので構成されているので形とかを変えたり壊れても自動的に修復されるんです。・・・ですけど俺1人でちゃんとした術式の完成まで持たせることはできませんかね?」

百由「無理ね・・・CHARMが大丈夫だとしても1人で常に戦い続けるのは不可能よ。」

蓮夜「そうか・・・。」

蓮夜（異能をのことを喋ればいいが・・・。）

美鈴（それはやめておいた方がいい。）

蓮夜（やっぱりそうですか。）

夢結（私では使えないの?）

蓮夜（元々CHARM自体が契約を必要なものだからな・・・それにこいつは契約変更出来ないからな。）

霊体化してこの場に来ていた美鈴の異能で意識を繋げた3人はどうにかならないか相談を始めた。

梨璃「ええつと・・・あの、結局カリスマってなんなんでしょう?」

梨璃が自身のレアスキルに疑問を持ち質問する。

百由「今日の梨璃さんの戦い方は通常のカリスマの域を超えているわ。全リリーのパフォーマンスが著し向上を示したの・・・私たちもつい参加しといてなんだけど、全校生徒でマギスフィアを繋ぐノインヴェルト戦術なんて常識じゃありえないもの。・・・仮説だけだより上位のスキルを発現した可能性すら・・・。」

夢結「それでも、危険な任務には変わらないわ。」

吏房「ええ、」

梨璃「あの、理事長代行・・・先生？」

高松「・・・？」

梨璃「ありがとうございます。」

高松「はて？・・・わしが？」

梨璃「結梨ちゃんのこと・・・結梨ちゃんを最後まで庇ってくれたって百由様から聞きました・・・。」

高松「じゃが、わしが出来たことはそこまでだった。・・・彼が居なければ結梨君は・・・。」

梨璃「いいえ、先生が居なければ結梨は連れて行かれていたかもしれないんです。・・・結梨ちゃんを守ることができたのは先生のおかげです。ありがとうございます。」

梨璃はそう言い切ると何かを決心したのか真剣な顔になり、

梨璃「やります！わたしお姉様みたいな仲間がいなくなって悲しい思いをするリリイがもう・・・いて欲しくないから・・・。」

夢結「・・・その作戦には私も同行します。」

梨璃「お姉様・・・。」

夢結「今の梨璃の言葉は私の願いでもありません。私が梨璃を思い、梨璃が私を思う限り私たちは必ず戻ります。梨璃は私が守ります。」

梨璃「じゃあ、お姉様はわたしが守りますね！」

祀「夢結・・・梨璃さん・・・。」

吏房「ごめんなさい・・・。あなた達には大変な思いばかりさせて・・・。」

夢結「いいえ、みんな自分のすべきことをしたのよ。」

蓮夜「・・・俺も同行します。」

百由「えっ!？」

吏房「なぜあなたまで？」

蓮夜「2人を放って置けませんし、それに支援役は必要でしょう・・・ちようど俺のレアスキルはそういうことに向いていますし、それに・・・。」

彼が立ち上がりCHARMを回転させる。

すると大太刀の姿だったCHARMが姿を変えていき現れたのは、

吏房「えっ！」

眞悠理「それは……。」

彼の手には先程の大太刀よりもさらに長い大鎌が収まっていた。

蓮夜「俺はあなた達が言う『死神』です。実力的にも問題ないと思いますよ？」

梨璃「『死神』って確か……2年前の、」

祀「2年前の甲州撤退戦の時に現れたの謎の人物……まさかあなただったなんて……夢結、あなたは知っていたの？」

夢結「いいえ、私も知ったのは今日の戦いの時よ。」

蓮夜「俺も2人と同じ思いです……失って悲しむ人を減らしたい……だから俺も行きます！」

理事長代行が立ち上がりると、

高松「……どうか……頼む。」

そう言いながら頭を深く下げた。

次の日の朝、3人は輸送機に乗りネストの上空に来ていた。

夢結と梨璃はパラソルのようなものを使い、蓮夜はCHARMを分解し刃で足場を作り下へと降下して行った。

蓮夜「2人ともこっちに乗るか？足場なら大きくできるが。」

夢結「大丈夫よ、あなたは少しでも力を温存しておいて。」

3人がしばらく降下して行くと海に穴が空いたのかと思うほどの大きな渦があり、そこにはマジが充満しておりいくつもの光の輪を形成していた。

梨璃「静かです・・・。」

夢結「ここはもう海の中のはずよ。」

蓮夜「あともう少しで見えるはずだ・・・。」

彼が端末で位置を確認しながらそう言った。

蓮夜「いた！」

彼の言葉に反応し梨璃がダインスレイフを構える。

夢結がパラソルから手を離し梨璃のダインスレイフを持つ手に触れる。

梨璃「CHARMから美鈴様を感じます・・・。」

美鈴（まあ、僕はここにいるからね！）

蓮夜（今は黙ってて下さいよ・・・。）

夢結「・・・そう・・・（お姉様・・・空気を読んで下さい・・・）」

美鈴の発言に2人が心の中でツツコミを入れながら気をつけ引き締めた。

すぐ側に迫ったヒュージにCHARMを向けて、

梨璃・夢結「・・・ッ！」

ヒュージに行き良いよく突き刺した、

するとダインスレイフのコアが光り輝きいく重にも重なった術式が展開される。

そこに彼が自身のレアスキルの元となった能力、相手の能力を下げ  
て仲間の能力を上げる力・・・情読を発動。

これにより彼女達とダインスレイフの能力を向上させてヒュージ  
の身体を脆くする。

するとダインスレイフから光が漏れだし、

梨璃「わっ！」

光の勢いが強まりVの字に広がりジェット噴射のように自らの刃  
をヒュージに押し込んでいく。

するとヒュージの中へとダインスレイフが入っていき、

ダインスレイフがあったところから一条の強い光・・・高濃度のマ  
ギの塊が吹き出した。

下からヒュージの苦しむような雄叫びが聞こえて壁のようになって  
いた渦が消えどんと海水が迫ってきた。

蓮夜「2人ともこっちに！」

夢結「ええ、梨璃行くわよ！」

梨璃「お姉様！」

彼の側に来ると彼がCHARMを分解し自分たちを包むような球  
場に形を変える。

するとすぐに大きな衝撃が3人を襲い、

梨璃「!!」

梨璃がその衝撃で気を失った。

しばらくすると揺れが収まり、

蓮夜「収まったか……。」

夢結「そのようね……。」

蓮夜「少し広くするから梨璃さんを横にしてあげてくれ。」

そう言うと壁が広がり梨璃を横にして彼らが座るのに十分なスペースができる。

蓮夜「あと10分くらいで海上に出るはずだ。」

夢結「……終わったわね……。」

蓮夜「ああ、これでしばらくは学院も安全なはずだ……その間に問題をどうにかしないと。」

夢結「ええ……。」

彼が座るとその横に彼女が座り彼の肩に頭を乗せた。

彼が少し驚くがすぐに彼女の頭を撫で始める。

蓮夜「随分と甘えん坊になったな。」

夢結「……別にいいでしょう……。」

彼女は顔を赤くしてそっぽを向く。

美鈴「ここまで夢結を可愛くするとは……やるね！」

夢結「お姉様！」

蓮夜「落ち着け、梨璃さんが起きるぞ……それと姐さん、今は霊体になっておいてください。梨璃さんに今バレると大変なので。」

するとすぐに美鈴の姿が消えて、

美鈴（そうだね……これでいいかな？）

蓮夜（大丈夫です。）

美鈴（……どうするんだい？彼女達には異能のことを話すんだろ

?)

蓮夜「そうですね・・・もちろんまず確認してからですね。」

夢結「確認？」

蓮夜「ああ、もし聞いたら後戻り出来なくなる。だからまず覚悟があるか聞いてからある人だけに話すつもりだ。」

美鈴「それが妥当かな？」

話を進めっていると、

蓮夜「海上に出たみたいだな。」

彼が床に手を置くとせり上がり持ち手が現れる。

それを掴むとCHARMが姿を変えて小型の船のような形状になった。

蓮夜「それじゃ帰りますか。」

夢結「そうね。」

しばらく海上を進んでいると、

梨璃「・・・うう・・・。」

夢結「梨璃・・・梨璃。」

梨璃が目を覚ました。

梨璃「お姉様・・・ここは？」

夢結「私たちはアルトラ級ヒューズを倒したわ。これからみんなの元へ帰るところよ。」

蓮夜「お疲れ様、梨璃さん。」

梨璃「黒鉄さんもお疲れ様でした。」

蓮夜「ああ、あと少して百合ヶ丘に着くからそれまで休んでいてく



れ。」

梨璃「はい。」

楓「梨璃さん!!、夢結様ー!ご無事ですか!」

楓の声が聞こえその方向を見ると、

そこには一柳隊のみんなやアールヴ Heim・・・百合ヶ丘の全生徒がいた。

梨璃「みんなー!ただいま!!」

梨璃の元気な声が空に響き渡った。

## 閑話・BOUQUET

### 閑話①

彼らが学院に帰ってきて数日後、

百由とミリアムがシュツツエンゲルになった。

その日一柳隊のみんなは控え室に百由を呼んでお祝いをしていた。

梨璃「おめでどう！ミリアムさん！」

結梨「グロツピ！おめでどう！」

ミリアム「あ、ありがとう・・・なのじやろうか？」

梅「ありがとうでいいんじゃないか？」

神琳「おめでたいことですよ。」

ミリアム「そうなのじゃがな？・・・何故だか嫌な予感がするのじゃ・・・。」

百由「何よグロツピ！本当は嬉しいんでしよう！うりうり。」

ミリアム「も、百由様！やめてくれ・・・。」

百由に抱きつかれたミリアムは拒絶するがその顔は満更でもなさそうで、

雨嘉「そう言いつつ嬉しそう・・・。」

鶴紗「・・・ツンデレか？」

二水「ツンデレとは違くありませんか？」

ミリアム「うるさいのじゃ！」

二水「すいません、ツンデレであっていたみたいです。」

二水がメモを取っていると、

夢結「新聞に載せるのはやめてあげなさい・・・さすがに可哀想よ。」

二水「はっ、はい！」

夢結が新聞の記事にしようとしていた二水を止めた。

何回もネタにされている夢結が二水を睨むと彼女もメモをしまい静かになった。

蓮夜「ミリアムさん・・・そのやな予感多分研究に巻き込まれることだと思っぞ・・・俺もそれで7徹くらった。」

ミリアム「・・・七徹・・・嘘じゃろ？」

蓮夜「いいや、マジだ。・・・それやったあととち狂ってCHARM組立機なんて意味の無いものを作っちまったからな・・・。」

ミリアム「・・・。」

ミリアムは彼の言葉にこれから訪れる地獄を想像してしまい絶句する。

彼女たちにも想像出来てしまったのだ。

百由に巻き込まれて寝ずにデスマーチさせれる自分の姿を、

蓮夜「・・・三徹行ったら俺が強制的に眠らせるから・・・強く生きろよ・・・。」

百由「私だつてそこまで酷くないわよ！」

この言葉に3人を除く全員が苦笑する。

確かにやりそうだ・・・この言葉がみんなの頭の中に流れた。

その後も賑やかな会話が続き、

蓮夜「・・・みんなはあの日のことを覚えているよな・・・。」

彼が真剣な顔つきになりそう言った。

神琳「あの日は数日前のヒュージとの戦闘ですよ？」

蓮夜「そうだ。」

鶴紗「そういえば先輩のアレのこと後で話すって言っていたよな……。」

蓮夜「その事だ……これから話すことは聞いただけでも狙われる可能性があることだ……もし聞きたくないやつがいたらまた場所を変えるが……聞くか？」

百由「アレってなんのこと？」

神琳「それはですね……。」

唯一アレを知らない百由が首を傾げていると神琳が説明を始めた。

百由「……どうということ？……蓮夜、あなた強化リリイじゃないのよね？」

蓮夜「違うぞ。俺はそういう施設で改造されたことはない。」

百由「それに狙われるって……これから話すことがそれほどのことなのね。」

蓮夜「そういうことだ……百由にも聞くのは信用しているからだ。……それで聞きたいやつはいるか？」

彼が今まで以上に真剣な顔つきをしており、これが本当に危険なことでだと実感する。

梨璃「わたしは聞きます。……何故か他人事に聞こえませんが、それに黒鉄さんが抱えていることを知りたいですから！」

彼女の言葉に夢結を除く全員が同意する。

梨璃「あれ？お姉様は……？」

夢結「私はもう知っているの……それに私も関係者だから。」

梨璃「えっ？」

夢結の言葉に梨璃が驚いていると、

蓮夜「みんないいな・・・それじゃあ。」

彼の右眼が光り模様が浮かぶ。

彼女達がそれに驚いていると、

周りが歪み視界が真っ白になる。

いきなりのことに驚いていると、

蓮夜「よし、ちゃんと機能したな。」

先程までいた控え室ではなく無機質な機械の並んだ大きな工場のような場所にいた。

梨璃「わっ！・・・えっ？」

結梨「おぉー！」

楓「ここは・・・？」

神琳「どこでしょうか・・・。」

梅「この感覚・・・異界の門？」

二水「それって梅様の！」

鶴紗「転移か・・・。」

百由「何この機械！あつ、あれってマジ変換器！それに溶鉱炉に冷却装置までかなり本格的なのがある！それにこれ・・・カタログにもないわよ！これどうしたの！」

ミリアム「百由様・・・。」

各々が反応をしていると、

蓮夜「ちよつと移動するからついてきてくれないか？ここじゃ話ど

ころじやないからな。」

彼について行くと扉があり、その中には少し簡素な内装だがしつかりとした応接室があった。

彼女達が座ると彼が紅茶を持ってきて、

蓮夜「……これから俺が話すことは作り話じゃなくて真実だ。だから疑わずに聞いて欲しい。」

それから彼が異能の話 시작했다。

聴き始めた時はみんな半信半疑だったが彼が軽く能力を発動すると信じて貰えた。

そこからしばらく説明が続き、

蓮夜「これが俺が知る異能者の全てだ。」

梨璃「お姉様もなんですか？」

夢結「ええ、この前の戦いの時にね。」

梅「そう言われてもな……。」

百由「やっぱ信じられないわよね……まあ、あれを見た信じるしかないけど……。」

楓「レアスキルという線は？」

百由「それも考えられるけど……。」

蓮夜「なら、もつとわかりやすい例がいた方がいいかな……姐さん、出てきてください。」

梅「姐さん？」

百由「誰よそれ？」

いきなり上を見ながらそう口にする彼に疑問に思っていると、

美鈴『出てきていいのかい？』

雨嘉「えっ?」

鶴紗「誰だ・・・?」

この部屋にいる誰とも違う声に1年組が驚いていると、

百由「この声・・・。」

梅「・・・梅の空耳じゃ無さそうだな・・・。」

夢結「・・・。」

梨璃「あの、どうしたのですか?・・・えっ?」

梨璃の方が叩かれたので振り向くと、

そこには夢結に見せてもらった彼女のシユツツエンゲルである川

添 美鈴がいた。

梨璃「わっ!」

百由「美鈴様!!」

梅「どうして!確かに2年前に・・・。」

彼女達が驚いていると、

夢結「お姉様・・・梨璃達を驚かせるのはやめてください。」

蓮夜「姐さん・・・あなたこんなにはっちやけた人でしたっけ?」

2人が美鈴に呆れたような声で話しかける。

美鈴「いや。面白そうでついね?・・・それにもう色々と自由な  
んだから少しぐらいはっちやけても大丈夫だろ?」

蓮夜「まあ、そうですけど・・・。」

夢結「驚いた拍子に転んだりしたら危ないんですよ。」

美鈴「次から気をつけるから。」

3人だけで会話していると、

梅「これはどういうことだ!」

百由「なんで美鈴様が・・・本物なの?」

美鈴「僕は真正正銘川添　美鈴本人だよ・・・肉体はないけどね。」

神琳「肉体がない?」

二水「も、もしかして・・・。」

二水顔が青くなり、

梨璃「ゆ、幽霊・・・。」

美鈴「厳密に言うとは違うけど、その認識であっているよ。」

結梨「幽霊ってなに?」

二水と梨璃が抱き合いながら怖がり結梨が興味津々に美鈴のことを見ている。

蓮夜「姐さんは、みんなが知っているとおり2年前に死んでいるけど姐さんの異能で霊体化して夢結の守護霊になったんだ。」

美鈴「なったはいいいけど現界するための条件が大変でね・・・夢結にはつらい思いをさせてさせてしまった。」

美鈴は夢結へと近づき彼女の頭を撫でながら自身の異能の力とその条件を話した。

梨璃「美鈴様の幻覚って・・・。」

美鈴「私の幻影のことだよ・・・できることなら彼にどうにかして欲しかったけど。」

蓮夜「俺は知ってたから何もできなかったからな・・・夢結が梨璃さんと出会えて本当に良かったと思っっているよ。」

美鈴「・・・。」



美鈴が顔を逸らし俯く。  
やはり負い目に感じているのだろう、

蓮夜「姐さん・・・大丈夫ですから、気にしないでください。俺も自分で好きでやったことですし。」

夢結「またお姉様に会えただけで私は嬉しいんです。大丈夫ですよ。」

美鈴「2人とも・・・。」

神琳「すいません、質問よろしいでしょうか？」

蓮夜「なんだ？答えられることならできる限り答えるが。」

暗い雰囲気になり始めたので、話題を帰るために神琳が彼らに質問をする。

神琳「夢結様が異能に目覚めたのはあの戦いの時なんですよね？なものにもう超越者になっている・・・普通なら長い時間異能に目覚めた人・・・そもそも異能者でも使い続けたごく一部の人のみがる可能性があるはずですよね？」

蓮夜「ああ、そうだが。」

神琳「ならなぜ夢結様はもう超越者になっているのですか？」

夢結「それは・・・。」

夢結が顔を逸らし赤くしたまま黙ってしまふ。

蓮夜も言いづらそうでかなり迷っているような顔になった。

美鈴「愛の力だね。」

梨璃「・・・愛？」

夢結・蓮夜「「お姉様（姐さん）!?!」」

美鈴「夢結がね彼に、ウツ！」

夢結が目にも止まらない速さで彼女の首にチョークスリーパーをかけて黙らせた。

「夢結「お姉様！言わなくって結構です！」

梅「梅の縮地より早くないか・・・。」

美鈴が彼女の腕を叩くと夢結が腕を離し、

美鈴「わかったわかった、大丈夫！夢結が彼に告白して拒否されたからなんて言わないから！」

蓮夜「ちよつとー！？」

夢結「お姉様!？」

すぐさま口を滑らせてしまった美鈴に2人は叫んでしまい、  
彼がCHARMを変形させて二本の長剣を作ると片方を夢結に渡し2人で彼女の首に剣先を突きつける。

蓮夜「何注意されたそばから言っちゃってるんですか！」

夢結「私は言わないで下さいと言いましたよね・・・。」

美鈴「ご、ごめん。口が滑ってしまった。」

彼女が謝るが2人の表情が徐々に消えていき。

蓮夜「少し待っててくれないか？」

梨璃「えっ?・・・待っててとは?」

夢結「少しお姉様とお話があるから席を離れさせて貰うからよ。」

夢結が美鈴の襟首を掴み扉の方に引きずり彼と一緒に出ていきしばらくすると、

美鈴「2人とも本当にごめん！僕が悪かったからアアアアアア！」

美鈴の悲鳴と2人の怒声が響き渡った。

## 閑話②

蓮夜「話の腰折ってごめんな。」

夢結「もう大丈夫よ。続きにしましょう。」

美鈴「……。」

しばらくすると3人が戻ってきて白目を剥きながら夢結に引きずられた美鈴がいた。

この光景にみんなが絶句してする。

百由「夢結……あなたってこんな性格……だったわね。本当に昔に戻ったみたい……。」

百由が懐かしむような表情で夢結を見ていると、

ミアム「百由様、わしの知る夢結様とはだいぶかけ離れているのじゃが……。」

百由「昔は結構やんちゃだったのよ、無茶無謀は当たり前だったし……そうね、梨璃とあなたの知っている夢結を足して2で割った感じかしらね。」

ミアム「……ふむ。」

ミアムが考えてみると、レギオン結成直後に梨璃にCHARMを向けて喝を入れていたりなど思い当たる節が多く苦笑してしまう。

神琳「かなり感情的でしたんですね。」

百由「そうよく、そりやすごく可愛くてね。……あの頃に戻ったみたいで嬉しいのよ。」

夢結「……。」

蓮夜「おいおい、また話が逸れるぞ。」

百由の言葉によりまた夢結が顔を逸らし話が脱線しかけたところを彼が阻止する。

二水「それでは質問です！」

蓮夜「二水さんか・・・記事にするなよ。」

二水「どれだけ信用がないんですか！」

蓮夜「そりや・・・な？いつものを見ていると警戒するだろう？」

鶴紗「だな・・・。」

雨嘉「そう・・・だね。」

二水「お2人も!？」

蓮夜「それでなんなんだ？」

二水「えつとですね・・・先程の美鈴様のお話を詳しく・・・。」

蓮夜「だと思ったよ・・・二水さん・・・後ろ向かないことをおすすめるぞ。」

二水「えっ?・・・どういうこ、」

二水が振り向くと後ろには満面の笑みをした夢結がいた。

笑ってはいるが目が全く笑っておらずその頬には黒い模様があり額には角が生えていた。

夢結「少し向こうでお話しましょうか？」

二水「はわっ・・・はわわわ!」

先程の美鈴のように部屋から連れ出された二水を見送る一同は震えていた。

しばらくする床に2つの死体（美鈴と二水）が転がっており彼の隣に座った夢結は彼に頭を撫でられる。

蓮夜「・・・一回落ち着きな。」

夢結「・・・わかつているわよ・・・。」

顔を赤くして俯く夢結の姿に、

百由「蓮夜……。」

蓮夜「どうしたんだ？」

百由「あなた、夢結に何したの！こんなに可愛いくなくなっちゃってるじゃない！」

蓮夜「いや、それ今は関係なくないか？」

百由「関係あるわよ！てか、聞くまで絶対にやめないからね！」

蓮夜「はあく。」

やっぱり連れてこない方が良かったか？……と思いつつ彼は溜め息を吐く。

こうなつてはテコでも彼女は動かないだろう。

蓮夜「夢結……諦めて言うしかなくないか？」

夢結「だけど……。」

蓮夜「みんなに他人に絶対に言わないようにしてもらつて、最悪姐さんに記憶弄つて貰えばいいじゃないか？」

夢結「……そうね……最悪の場合はお姉様に頼みましょう……。」

地味に物騒なことを口走つた彼に彼女は同意する。

夢結も諦めたようでその時のことを話始めた。

梅「……理由はわかつたけど……さすがにないんじゃないか？」

神琳「そうですね、もつと他の言い方があつたかと……。」

蓮夜「……俺も悪い事をしたと思つてるが……あの時は俺もいっぱいいっぱいだな……考える余裕がなかつたんだよ。」

楓「それは言い訳では？」

蓮夜「……ウツ！」

彼が彼女達のダメ出しを喰らって撃沈すると、

夢結「私は大丈夫だからそれくらいにしなさい。．．．彼も辛かったのよ．．．。」

夢結の顔が暗くなり悲しそうな表情で彼を見た。

結梨「不死ってなに？」

梨璃「えっと．．．その。」

夢結「生物の全てに死と言うものがあるでしょう？それがないことを不死というの．．．簡単に言うなら死なないことね。」

結梨「すごい！羨ましいな！」

夢結「．．．！」

ミリアム「．．．結梨、これはそんなに簡単なことではないんじゃないぞ．．．。」

百由「そうよ．．．死なない言っていることは死ねないと同義なんだから．．．夢結、だから彼は苦しんでいたんでしょう？」

夢結「ええ、彼の能力に未来を見ることができるものがあるの．．．それで見てしまったのよ。」

夢結「．．．ただ1人暗い空間に佇む彼の姿が．．．とても悲惨だったわ．．．。」

夢結が今にも泣きそうな表情になる。

百由「夢結も見たみたいなの言い方だが。」

夢結「見せて貰ったのよ．．．彼に。」

梨璃「悲惨だったとは？」

夢結「何も無いの．．．本当に何も．．．。」

雨嘉「何もない．．．ですか？」

夢結「ええ．．．周りはただ黒い空間が広がり光もなく．．．そして彼の感情も．．．。」

神琳「……感情?……どうして感情がないとわかったのですか?」

夢結「表情よ……本当に何も無いまるで人形のように光の無い瞳でただただ前だけを見ている……もしかしたら本当は何も見えていないかもしれない……。……不死の行き着く先は孤独よ……。何度も何度も親しい人が先に行き自分だけが取り残される……。そしていつかは何も考えられなくなる……。それが不死を呪いという理由よ。」

結梨「みんなと会えなくなっちゃうの?」

夢結「ええ、いつかは人間は死ぬもの……。だけど不死は永遠に存在し続けるのよ。だから生きる時間が違うの……。どんどんみんなに置いていかれていつかは一人ぼっちになる……。」

結梨「結梨そんなの嫌だ!ずっとみんなといたいのに!」

蓮夜「なら不死なんか望んじゃダメだぞ……。その先は本当に地獄だからな……。」

彼が立ち直り結梨へ忠告する。

その後、彼女達に真剣な顔を向ける。

蓮夜「みんなに見て欲しいものがあるんだ。もしこれと似た者を見た時絶対に手を出さないでどうにか逃げて欲しい。」

彼がそういうと能力を発動させる。

すると彼女達の座っているソファや椅子などはそのままだが壁や天井が消えて広い草原が現れた。

梨璃「これは!?!」

蓮夜「これはただの映像だよ。これは2年前の甲州撤退戦後のものだ。」

彼が指を指したのでそちらを向くと、

そこには死神姿の彼と機械を身体中に付けた少女が15人彼を囲



むように立っていた。

彼の手には大鎌ではなく2振りのナイフがあり彼の周りを11本のナイフが彼を守るように浮かんでいた。

梅「なんなんだこいつら？・・・あの時にこんな奴らいなかったぞ？」

蓮夜「あの子達はG・E・H・E・N・Aの被害者だよ・・・拉致されて実験に利用され・・・実験に失敗した子の身体を改造され意思のない兵隊にされた・・・」

全員『!?!』

蓮夜「目的は俺の捕獲だ。」

神琳「ヒュージに対抗出来る男性だからですか？」

蓮夜「違う・・・鶴紗さん、君のブーステッドスキルにアルケミートレースがあるよね。」

鶴紗「・・・ある。」

蓮夜「みんなは強化リリイがどういうものかは全員知ってるだろう？」

その言葉に全員頷く。

蓮夜「ヒュージ由来の特殊能力を人工的に付与される・・・アルケミートレースは血液を触媒にしてコアさえあれば擬似的なCHARMを作り出せるスキルだが、これに違和感ないか？」

梨璃「違和感？」

梅「そんなのあるか？」

雨嘉「その違和感はこのスキルだけなんですか？」

蓮夜「いいや、あとはエーテルボディやマジリフレクター、あとはリジェレーターとかにもあるな。鶴紗さんが持っているもので一番わかりやすいもので選んだけど多分マジリフレクターが一番違和感を感じると思うぞ。」

ミリアム「マジリフレクター・・・確かマジを使った防御じやった

な・・・。」

夢結・神琳・百由「「!?!」」

みんな悩んでいたがミリアムの一言で3人がわかったようで、

蓮夜「夢結達はわかったみたいだな。」

梨璃「わかったんですか!」

神琳「ええ・・・ただなぜ彼を捕獲しようとしたのかの根拠には・・・。」  
百由「そうなのよね・・・考えてみれば確かにおかしい部分があるのよ。だけどさっきの話との関係性がね?」

夢結「・・・強化リリーの能力はヒュージ由来のものでは無い・・・。」

楓「どういうことですか?」

夢結「ヒュージはマジを操ることはないことは知っているわよね。」

楓「ええ、当然ですし。」

夢結「だけどマジフレクターの能力はマジを操作して防壁を作ることなのよ。」

ミリアム「そういう事か!マジを操作できないヒュージからマジを操作する能力を得るのは確かにおかしいのじゃ!」

夢結「蓮夜、もしかして異能者の能力なの?」

蓮夜「ああ、調べてみたが半覚醒の異能者を捕まったらしくその能力を使えないか実験した結果、異能者にヒュージの細胞を移植し人間を半ヒュージにしてからその細胞を他の人間に移植することで作られたのが強化リリーだ。・・・人工的に作られた劣化版異能者みたいなものだな。」

神琳「つまり狙われた理由は・・・。」

蓮夜「俺の能力目当てだな。G・E・H・E・N・A. は異能者自体を知らなかったが、そのような特異体質を持つ存在として認識していたみたいだ。」

夢結「それで捕まえた人達は?」

蓮夜「ヒュージの細胞を移植されたことによる拒絶反応で・・・。」

鶴紗「ふざけるな!」

鶴紗「G・E・H・E・N・Aは……アイツらは人をなんだと思ってる……。」

楓「お父様……なぜこのような事をする連中と共同研究なんて……。」

鶴紗は怒り、楓は自身の父が非道な実験に手を貸しているのかわからないかと不安にかられていた。

梨璃「もしかして結梨ちゃんも!？」

蓮夜「确实にな……強化リリーの性質上異能を持ってないはずだが、異能に近い力を持っていると思う。」

彼女達が人を使った非道な実験の話に表情を暗くしていたその時、

全員『!?!』

おぞましい感覚に襲われた。

その直後彼女達の身体が震え出す。

これが恐怖から来ているのかそれとも別の何かなのか判断できない。

蓮夜「来たか……。」

彼が見ている方を向くと、

先程まで彼を囲んでいた少女達が倒れておりそれを庇うように大太刀を構える彼と、

彼の前に佇む、異形の姿をした何かがいた。

梅「なんなんだ……アレは。」

夢結「あの表情は!？」

梨璃「黒鉄さん、あれはヒュージなんですか?！」

蓮夜「違う・・・あれは異能を使い続けたものの末路・・・。」

彼の雰囲気が変わる。

まるでこの場所だけ重力が何倍も掛かっているかのような重圧に襲われる。

蓮夜「・・・獣だ。」

彼の声が周囲に響き、異形が彼へと襲いかかった。

### 閑話③

神琳「獣とは確かに異能者の成れの果ての……。」

蓮夜「そうだ、それも彼女はG・E・H・E・N・Aの実験で強制的に能力を使わせれ続けて……。」

獣の姿はバツタのような足と甲虫のような外骨格に覆われた腕、そして額から生える触覚以外はただの少女の姿をしており年齢は高校生ぐらいだろ。

その獣が彼に飛びかかりながら自身の右腕をカマキリの鎌のような姿に変えて振り下ろした。

彼はそれをサイドステップで躲すと獣の右腕を目掛けて斬りつける。

獣がそれを鎌で受け止めると力任せに腕を振り彼をはじき飛ばした。

空中で一回転しながら体勢を整え着地した彼の目の前に獣が迫っておりまた右腕の鎌で斬りつける。

それを彼が受け止めるがそのまま弾かれる。

その後もしばらく同じようなことが続く、

楓「押されていますわね。」

蓮夜「そりゃ、知覚型が強化型のそれも変化系に身体能力で勝てるわけがないからな。」

梅「確か変化系は身体を変化させて動物とかの特徴を得る能力だよな? ……これは虫か?」

梨璃「虫!?!」

蓮夜「ああ、多分だけど甲虫への変化だな。」

鶴紗「大丈夫なのか? 今ここにいるから大丈夫だったんだろうけど。」

蓮夜「そこは問題ない。そもそも知覚型は近接よりも中距離で戦うことに向いている能力が多いからな……逆に強化型は距離を離され

ると攻撃手段が減るからな、相性みたいなものがあるんだよまあ、俺のは近接の方が強いが・・・」

百由「じゃあ、感応型は？」

蓮夜「姐さんみたいなのを除くと仲間がいればいいが1人だとどうにもならないな。」

雨嘉「それなら近距離は強化型が、遠距離は知覚型が、集団戦は感応型が強いって言うことですか？」

蓮夜「それでも無いな・・・異能の特性を考えるとそうなるだけで基本的に異能者同士の戦いは近接戦になる。」

ミアム「そういうことは他の異能者とも戦ったことがあるのかのう？」

蓮夜「異能者というよりも獣だな：：だいたいG・E・H・E・N・A・とかの違法実験施設で暴走させられた人達・・・」

夢結「あなたは2年間ずっと狙われ続けていたの？」

蓮夜「いいや、自分から施設に侵入してだよ。獣が暴れたら街の一つや二つ・・・下手すると国自体が壊滅するからな。」

夢結「・・・」

蓮夜「その時に囚われていた人達を保護したり、獣と戦う時に他の超越者と協力したりもしたな。」

梨璃「黒鉄さん達以外にもいるんですね・・・」

蓮夜「いるぞ。俺が知るだけでも日本に俺達以外に2人はいるし・・・アイツら元気にしてるかな・・・もう一年以上連絡ないが。」

梨璃「仲がいいんですか？」

蓮夜「仲はいいのかな？結構会ってたからな・・・基本的に違法施設潰しでだけ・・・」

鶴紗「物騒だな。」

蓮夜「そうしないとやばいからな・・・。だけどいいヤツらだぞ。確か梨璃さん達と同年だし、多分気が合うんじゃないか？」

夢結「・・・もしかして女性なの？」

蓮夜「えっ？・・・そうだな2人とも女子だぞ。」

梨璃「へえ、どんな人なんだろう？」

話しているとあちらの動きが変わった。

彼が獣の右腕関節に向かって大太刀を斬りつける。

獣の腕にヒビが入りそのまま切断された。

そのまま彼が回し蹴りをして距離を置くと左腕を振った。

すると空間が歪み先程使っていたナイフが現れる。

ナイフは一瞬空中に留まると高速で回転し獣へと飛んでいく。

獣が立ち上がるとその右腕は肘から先がなくなっているが傷口から新たな腕が生えてきた。

獣は右腕をまた姿に変えるがその姿は鎌でなく、まるで壁のような大きさの盾になった。

そのまま獣が彼に向かって突進し飛んできたナイフを弾き飛ばしながら近づいてくる。

今度は左腕を鎌に変えた獣が彼に斬り掛かるが彼の姿はそこにはなかった。

すると背後に突然現れた彼が大太刀を振り下ろす。

それを獣は盾で防御するが、まるでバターを切るように抵抗もなく盾が切れた。

彼はそのまま振り下ろす勢いを無理矢理横に変えて獣の足を切断する。

すぐに両足を再生させようとする獣だがその足は再生せずに地面を転がる。

獣が動けなくなった隙に彼はその首に大太刀を振り下ろした。

決着が着いたと思ったその時、

彼が攻撃を中断して後ろへ下がった。

全員が不思議そうなに見ていると、

先程まで彼のいた場所に獣の腰から生えた新しい腕が貫いていた。

その後獣は新たに生えた腕で立ち上がると、雄叫びをあげる。

すると今まで生身の人間だった部分も外骨格に覆われていき背中に羽が生えた。

羽を使い飛んだ獣は自分の足を根元から切断するとまた新しい足が生えてきて先程傷付けた部分が全て治ってしまう。

獣はそのまま彼を見下ろしておりいるがふとその姿が消える。

すぐに彼の背後に姿を現し振り向くとその口には彼の左腕が啜えられていた。

彼の左肩から止めどなく血液が流れ出すがすぐに先日に見た結晶が生えてきてそれが割れると腕が再生していた。

獣は啜えていた腕を咀嚼し始める。

その光景に彼女達は吐き気を覚えて顔をそらす。

夢結と鶴紗だけはそれをしていなかったがその顔色は青くなっていた。

鶴紗「これは・・・二水が寝ていて良かったな・・・。」

夢結「ええ・・・梨璃、大丈夫かしら？」

梨璃「は、はい・・・何とか・・・。」

梅「これはかなりキツイな、」

梨璃と梅は何とか声を出す但他的みんなは今も目を背けている。

蓮夜「かなりやばいだろうけど・・・まだ序の口だぞ・・・。」

彼の言葉の意味が分からず困惑していると、



また獣の姿が消えた。

彼はすぐさま背後に振り向きながら大太刀を薙ぐ。

背後では獣が両腕の鎌を振り下ろしていた。

一太刀で両腕の鎌を切断するが獣の腰に生えた2本のが彼を襲う。

それを身体を捻るようにして最小限の動きで躲すとそのまま大太刀を振り下ろした。

それにより獣の左羽を切り裂くことに成功するが蹴られてしまい彼は吹き飛ばされた。

獣の足には棘のようなものが生えておりそれに貫かれて腹部から血液が噴水のように吹き出す。

それもすぐに治るが体勢を崩されたため一旦後ろへ下がった。

すると獣は両腕と羽を切断し新しいものを再生させる。

だがその再生速度は落ちており左腕は肘から先が再生していない。

それを確認すると彼が一気に近づき獣の首へと向かって大太刀で斬り掛かる。

刃が首へと到達するその時、

獣の姿がブレて消える。

すぐに彼が振り向くと、

先程彼が無効化して少女達のところに獣がいた。

彼が焦った様子で姿を消し獣の上に現れ大太刀を振り下ろすも腰の腕を2本とも盾な変えて防がれてしまう。

先程は簡単に切り裂くことが出来た盾は傷一つついておらず彼を阻む。

すると獣は1人の少女に近づく。

少女には電流のようなものが走っており動けないでいた。彼が彼女達の動きを封じるたのだろう。

獣の口が横に開きそこから大きな顎が姿を現し少女の腹部に噛み付いた。

そのまま獣が咀嚼し始める。

彼が盾を切り裂くこと成功した時には獣は立ち上がっており少女の瞳には光が無くなっていた。

再生していなかった左腕も再生しており獣の身体が一回り大きくなっていた。

彼の顔からも感情が無くなり大太刀を構え直す。

霞の構えをとった彼は身体を前に倒し一気に獣へと接近する。

その速さは先程とはよりも何倍も早くなっており身体がブレて見えるほどだった。

彼が獣の横を通り過ぎると獣の身体中から血が飛び散った。

腰の腕と羽が無くなっており地面に転がっている。

獣は怯むことなく彼へと襲いかかった。

そこから超近距離での斬り合いが始まる。

防ぐ 斬る 防ぐ 躲す 斬る 躲す 斬る 躲す 防ぐ 斬る  
斬る 防ぐ 斬る 斬る 斬る 斬る 斬る 斬る 。

彼も初めは攻撃を防ぐか躲していたが徐々に攻撃回数が増えついにはお互いに攻撃しかしくなる。

その速度も早くなっていき彼女達には動きが見えなくなっていた。

彼の身体が徐々に傷付くが先程のように回復せず血液が流れ続ける。

獣の一撃が彼の左腕に突き刺さる。

彼はその腕を掴むことで獣の動きを封じ、

そのまま獣の両腕を切断しそのまま獣の腹部から切り裂き獣の胸下辺りから上が切り飛ばされる。

獣もすぐに再生しようとするが60cm四方くらいの透明な立方体に捕えられその再生を阻害した。

獣が右腕だけ再生させて暴れるが壊れる様子はない。

その立方体の中心に向かって彼が大太刀を突き入れると立方体内にヒビが入り、そのヒビは獣にまで広がる。

彼が大太刀を引き抜くと立方体は中心へと向かって収束し小さい球体状になり爆発した。

その爆破はその大きさからは想像もできないほどに大きく半径100m程が更地になっており先程の爆発のせいで煙で視界が遮られる。

しばらくすると煙が晴れそこには獣の姿は無くなっていた。

## 閑話④

蓮夜「これが獣との戦いだ。」

この戦闘を見ていた彼女達はその悲惨さに絶句していた。確かにヒュージとの戦闘でも重傷者や死者が出ることは少なくはないがこの戦闘は彼女達の知るどの戦いよりも苛烈で悲惨でそして狂気じみていた。

蓮夜「今回見せたのは、お互いが再生持ちだったから普通より悲惨だったのは否めないが、俺が今まで戦ってきた4回ともこんな感じの戦闘だ。」

梨璃「・・・助けることはできないんですか・・・?」

蓮夜「無理だ・・・。獣になるとその人の固有概念・・・その人をその人のたらしめる情報が変質するんだ初めからそうであつたかのように・・・。そうなると時間逆行や概念改変が意味をなさないんだ・・・元々が獣だったからな。」

そう語つた彼の顔からは悲しさや悔しさが滲み出ていた。彼も辛いのだろう、

少女は被害者だったのだ。

1人の人間が救える数などたかが知れてるのは彼もわかっているはずだ。

わかっているでも割り切れるわけがない、

そんな彼にどう話しかけたらいいか彼女達が悩んでいると、

楓「黒鉄さん、どうして映像が終わっていませんか?」

彼女が感じた違和感を口にする。

獣との戦闘が終わつたのにまだ映像が続いているのだ。

まるでまだ続きがあるかのように、

映像ないの彼が動き出す。

彼は獣に襲われた少女の前まで来た。

少女の腹部は無くなっており上半身も首から上と肩でギリギリに繋がった両腕だけになっており、下半身も膝から下しか残っていないかった。

その姿にはモヤがかかっておりそれは彼女達に見せないことの配慮だろう。

だがその光景を想像出来てしまったであろう百由と梅、そして鶴紗は口元を抑え、他のみんなも目を逸らす。

彼は少女の前で何か呟きながら開いていた目をそつと閉じさせた。

その後彼が立ち上がると少女が結晶に包まれる。

その様子を確認した彼は無事だった少女達の元へと向かう。

少女達の怪我を確認しようとしたその時、

少女達が爆発した。

その爆発に巻き込まれて彼は吹き飛ぶが体勢を整えて着地する。

爆発で左足と右腕が吹き飛ぶがすぐに再生する。

しかし先程まで少女達がいた場所には何も残されていなかった。

彼が振り返ると傷一つない状態になった少女が横たわっていた。

彼はその少女を抱えるとそのままその場を去った。

鶴紗「……。」

神琳「……これは……。」

蓮夜「これが俺がG・E・H・E・N・A. を警戒する一番の理由だ。」

百由「多分爆弾が埋め込まれていたのでしょうね……。」

蓮夜「そうとしか考えられない。……アイツらは人を人として見ない……目的のためならどんな事でもしてくるんだ。」

楓「もしかして他の人に聞かれるわけに行かないとは、このことで

しょうか？」

蓮夜「そうだよ・・・もし少しでも情報を知っているとアイツらが知ったらどんな手でも使ってくる。例えばだが親や大切な人を人質にするとかだな。」

梨璃「!？」

雨嘉「そんな・・・。」

ミリアム「そこまでやるかのう?」

鶴紗「・・・やるな。」

百由「確実にやるわね。」

蓮夜「そうだ、必ずやる。・・・俺や夢結みたいに超越者ならそもそも薬物とか効かないし捕まっても簡単に逃げられるが・・・他のみんなどはたぶん無理だ。アイツらはリリーの能力を一時的に封じる薬を持っていないからな。」

神琳「・・・そのようなものまで・・・確かに危険ですね。」

梅「梅はそんなこと知らないぞ?」

百由「隠しているんでしよう。いつもの事だわ。」

蓮夜「一応その薬を無効化する薬品とかは作ってはいるが眠らせたりされたら意味ないからな。」

百由「その薬貰っていいかしら?」

蓮夜「いいぞ、だけど絶対にこのことは・・・。」

百由「わかってる、言わないわよ。もしバレたりしたら大変でしょう：・特に百合ヶ丘はG・E・H・E・N・A・と関係が悪いから。」

蓮夜「本当に頼むぞ。」

百由「・・・ええ。」

彼はどこからか取り出したケースを百由に渡した。

開けると試験が10本入っておりその中に半透明な液体が入っていた。

中身を確認するとすぐにケースを閉じて自身の膝の上に置く。

夢結「これで終わりかしら。」

蓮夜「そうだな、本当にごめんな・・・嫌なもの見せちゃまって。」

梨璃「あ、あの、黒鉄さん。」

蓮夜「なんだ？」

梨璃「二水ちゃんにはどう伝えれば・・・。」

梨璃は床に転がっている二水を見ながら苦笑する。

蓮夜「大丈夫だ・・・直接さっきの映像を夢として見せたから。」

梨璃「えっ？」

蓮夜「さっきの映像を見ている時のそのままに二水さんには夢として見せたんだよ。もちろんみんなが話しているところを込みで。」

そう言いながら彼は時計を確認する。

壁掛けの時計はちょうど3時を指しており、

蓮夜「まだ時間はあるな・・・そうだ！みんなまだ時間はあるか？」

梨璃「は、はい。」

夢結「平気よ。」

みんな2人の言葉に同意した。

蓮夜「みんな大丈夫なら・・・CHARMどうする？」

梨璃「どうするって？」

蓮夜「いや、だってCHARM壊れてるからどうする？修復かそれとも新規で新しいのを作るか？」

神琳「修復は分かりますが、新しいものとは？」

蓮夜「直すだけなら簡単にできるんだよ・・・だけどなこれからのことを考えるとこの機会に専用機作ってもいいんじゃないかってな。」

梨璃「専用機ですか？」

蓮夜「ああ、ミリアムや梅のCHARMみたいな一点物だな。その人個人に合わせて作るから普通のよりも高いパフォーマンスを発揮できるんだ。」

ミリアム「わしや梅様、それに楓や神琳もオリジナルじゃが必要なのう？」

蓮夜「必要な訳じゃないが最近の百合ヶ丘は事件の発生率が高いからな備えみたいなものだよ。ちようどCHARMの作り直しが必要だしな。」

結梨「結梨のはあるぞ！」

蓮夜「本体は壊れていないけど結梨さん・・・君のCHARMのコア碎けてるよ。」

先日の戦いで結梨のクリスタルコアは碎けていたのだ。

二水「うつ・・・うう。」

その時二水が目を覚ましたので彼女にも説明をすると、

二水「そ、そんなものわたしなんか貰っても良いのでしょうか・・・？」

蓮夜「二水は自分の評価が低すぎるぞ。もっと自信を持って大丈夫だから。」

二水「そうなんですかね？」

梨璃「そうだよ！」

二水「梨璃さん・・・それならわたしは作ってもらいたいです。皆さんの力になりたいので。」

梨璃「わたしも！みんなを守りたいから。」

鶴紗「作ってもらえるなら・・・欲しい。」

雨嘉「わたしも。」

神琳「私もよろしいでしょうか？」

夢結「お願いするわ。」



ミリアム「わしも頼むのじゃ！何か手伝えることがあったら言ってくれ、手伝うぞ。」

梅「梅もお願いするぞ。」

楓「私もよろしいでしょうか。」

結梨「みんなが貰うならわたしも！」

蓮夜「俺から言ったことだからなんだが梅と楓さんは大丈夫なのか？2人のCHARMは親が作ってくれたものだろうか？」

梅「全然問題ないぞ！」

楓「こちらにも問題ありません！それにちょうどいいですし・・・一回お父様は頭を冷やすべきですわ！」

蓮夜「それなら問題ないな・・・百由は、」

百由「大丈夫よ。それに私は自分で作りたいから、作る時言いなさい手伝うわよ。」

蓮夜「ありがとう。その時は頼む、百由の研究に必要なデータ今度渡すよ。」

百由「わかってるわね！」

蓮夜「それじゃあ、みんな着いてきてくれ。」

彼が部屋から出ていくので彼女達もついて行く。

先程の部屋から少し離れたところに大きめな扉があり彼はその鍵を開けて入っていった。

彼女達もその中に入るとそこには、

梨璃・結梨・二水「うわあー！」

梅「すごいな・・・。」

そこには無数の武器が置かれていた。

夢結「これは？」

蓮夜「俺が作った武器だよ。何があっているかわからなかった時に色々作ったんだ。」

雨嘉「これが全部CHARM？」

百由「いいえ、CHARMじゃないは……どちらかと言うとギアと同じ部類かしら。」

蓮夜「百由ならわかるか、そうだ、同じルーンを使うがこれらはギアの原型だ。」

神琳「どうしてこれらを見せたのでしょうか？」

蓮夜「ベースを決めてもらおうと思ってな。」

鶴紗「ベース？」

蓮夜「ああ、この中から自分が使いたいものがあればそれをベースにして作ろうと思ってな。」

結梨「どれでもいいの？」

蓮夜「ああ、好きに選んでくれ。」

彼の言葉に皆が部屋を見て回る。

しばらく見ていると、

夢結「蓮夜、ちよつといいかしら？」

蓮夜「なんだ？」

夢結に呼ばれたのでそちらにいと夢結と梨璃がおりその前には1つの扉がありその扉は鎖で封じられていた。

夢結「この扉は？」

蓮夜「この中か……この中には、異能者用の武器……原初シリーズがあるんだ。」

## 閑話⑤

梨璃「原初シリーズ？」

蓮夜「ああ、俺が超越者になった時少し能力が暴走してな。その時に出来た武器だ。」

夢結「最初にあなたが作った武器ということ？」

蓮夜「まあ、そうだな。元々は夢結達が知っているギアの旧型を使っているな・・・これができてからはこつちを使っていたんだよ。」

梨璃「もしかして黒鉄さんが今使っているCHARMもですか？」

蓮夜「そうだぞ、だけど使っているやつだからここに置いてなかったが。」

夢結「ここから選んでくれないのかしら？」

蓮夜「いいけど、絶対に声が聞こえたものだけを選べよ。」

夢結・梨璃「?!」

彼の言葉に違和感を持ちながら2人は部屋を見て回る。

夢結「ここに空きがあるけれども・・・。」

蓮夜「そこにあつたのはあげたんだよ。俺は使わないからな。」

梨璃「そうなんですか？」

蓮夜「俺は大太刀、大鎌、ナイフの3つしか使わないからな。ほかは相性が悪いし、だから相性が良い奴にあげたんだよ。」

夢結「もしかして先程の話に出た他の超越者？」

蓮夜「そうだぞ、あとは姐さんにも。」

夢結「お姉様なもの？」

蓮夜「ああ、ちなみに相性がある理由は武器の特性だな。」

梨璃「特性？」

夢結「武器にもあるのね・・・ここにあるものだけなの？」

蓮夜「そうだ、俺の大太刀は『干渉』、大鎌は『変化』、ナイフは『分裂』の特性がある。ここにあるのはこういう感じの特性・・・特殊能力が備わってるんだ。」

夢結がまるで引き寄せられるように1本の太刀の前まで行きそのままその柄を持つ。

黒い鞘と深紅の柄を持ち機械的なパーツが組み込まれていた。

夢結「私は・・・？」

蓮夜「夜桜か・・・。」

夢結「・・・夜桜？」

蓮夜「原初シリーズの中でも使いづらいやつでな・・・だけど夢結には一番あつてるな。」

梨璃「そうなのですか？」

夢結「特性が私に向いているのかしら？」

蓮夜「こいつの特性は『解放』って言うてな。汎用性は高いんだが結構な曲者なんだよ。簡単に言うて能力の拡張なんだがリミッターの解除みたいなものでな使用者への負担がかなり大きいんだ。」

梨璃「それって危ないんじゃない？」

蓮夜「そこは問題ないと思うぞ。元々強化型は身体を強化するから負担も軽く済むしそれに概念存在を憑依させるからな解放の限界が異常なまでに高い。それに夢結の場合は恩恵で身体的な負担がそもそも発生しないからなデメリット自体がないんだ。」

彼女は夜桜を鞘から少しだけ引き抜き刀身を見る。

その刀身は黒に近い深い藍色をしておりその刀身は鏡のように彼女の姿を移していた。

その後刀身を鞘に戻し、

夢結「そうなの・・・それなら私はこれにしようかしら。」

梨璃「お姉様はお決まりになりましたね！わたしも早く見つけないと！」

蓮夜「少し2人で見て回っていてくれ。俺は他のみんなの様子を見てくるから。」

彼はそう言うのと部屋から出ていき武器庫の中を見て回る。  
盾の置いてあるエリアに行くとき神琳と雨嘉がおり、

神琳「黒鉄さん、お聞きしたいことがあるのですがよろしいでしょうか？」

蓮夜「なんだ？」

神琳「なぜこの盾は2つで一つの扱いなのでしょう？通常なら盾は1枚でいいと思うのですが、それにこの盾は面積が少なすぎるような？」

彼女は長楕円形の縁が刃になっている楕円盾と縁がノコギリ状の丸盾を指さしながら質問する。

どちらの盾もかなり小さく守るためのものである盾として役割を果たせるとは思えない。

蓮夜「その事か・・・みんな盾は守るものって思ってるけど、それでも無いんだよ。」

雨嘉「そうなんですか!」

神琳「・・・もしや、打撃武器としてですか？」

蓮夜「その通り、本来の目的はやっぱり守るものだけど他にもシールドバツシュニールドチャージ殴 打や突 撃みたいな打撃や縁に刃が付いていれば斬ることもできるしなんなら穿つことも可能だ。」

彼はそう言いながら右に楕円盾を左に丸盾を持った。

それらにマギを込めると、

神琳「これは・・・。」

雨嘉「大きくなった・・・。」

盾の縁から黒色の光が出て盾を何回りも大きくした。

蓮夜「こんな感じにマギを流すと盾の面積を広くできるんだ。通常

は小型にして格闘戦を防御する時は大型に変える、そういう使い方を前提とした武器だな。それと・・・」

彼は通路に誰もいないことを確認するとそちらに丸盾を投げた。

盾はそのまま飛んでいき壁にぶつかる寸前で軌道を変え弧を描くようにこちらに戻ってくる。

その盾は回転しておりノコギリ状の縁と相まってまさに電ノコのようになっており盾の中心から1本の光の線が伸びていた。

その光は彼の持つている盾と繋がっておりまるでヨーヨーのように彼の右手に引き寄せられる。

彼が飛んできた盾を左手で掴み取り、

蓮夜「こんな感じに盾同士を繋げて片方を投げることで遠距離攻撃もできるんだ。マジを調整すれば軌道を変えられるからかなり自由度が高い、他にも片方を壁に刺して引き寄せられることで移動もできるし荒業だか投げた盾の光の線・・・ワイヤーで捕まえることで人やものを引つ張って来ることもできるぞ。」

神琳「発想力が必要ですがかなり使い勝手は良さそうですね・・・黒鉄さん、私のCHARMのベースはこれに致します。」

蓮夜「そうか、それなら持つていてくれ。」

神琳「はい。」

蓮夜「雨嘉さん、何か希望はないか？」

雨嘉「えっと・・・スナイパーライフルはありませんか？」

蓮夜「SRか・・・作ってないな。」

雨嘉「そうなんですか？作ってそうでしたけど・・・もしかして近距離を重視するからですか？」

蓮夜「そうじゃなくてな、役に立たないんだよ銃器は・・・」

雨嘉「そうなんですか？」

神琳「そういえば銃器があまりありませんね。」

彼女達が周りを見ると確かに銃器の部類はない。

入り口付近に数個あったがそれだけで他は基本的に近距離用の武器が多かった。

蓮夜「銃器は扱いさえ慣れれば簡単に強くなれるが・・・火力が安定しすぎて先がないんだ。」

神琳「先がない？」

蓮夜「ああ、安定しすぎててな限界がすぐに来るんだよ。近距離重視で牽制とかなら問題ないんだが銃器だと遅すぎてな当たらないんだ・・・。」

神琳「つまり強者であればあるほど銃器は意味がないと。」

蓮夜「そういうことだ・・・だけど狙撃なら・・・着いてきてくれ。」

彼が通路の奥へと行くため2人も着いて行った。

そこには無数の弓が並んでおり、

蓮夜「これなんかいいかな？」

雨嘉「弓・・・？」

雨嘉に彼女の身長よりも長い弓を渡した。

その全体が水色で機械的なパーツが多数着いており弓の両端には刃が付いていた。

蓮夜「これなら狙撃もできるし使いやすいと思うぞ。」

神琳「なぜ弓のですか？銃器と大差ないのでは・・・？」

蓮夜「全然違うぞ。俺の知り合いの超越者に弓使いがいるぐらいだからな。」

神琳「そうなのですか？」

蓮夜「ああ、遠距離型のやつがいてなそいつが弓を使うんだ。」

雨嘉「なんで銃器はダメなのに弓は大丈夫なんですか？」

蓮夜「それはマガジを直接送るか間接的に送るかの違いだな。」

雨嘉「直接と間接？」

蓮夜「銃は弾丸を直接触れずに射出するから銃器を通して間接的にマギを送り込むのに対して剣などの直接攻撃する武器はマギを直接纏わせて使う。これの違いはマギの伝導率だ。」

神琳「伝導率ですか・・・。」

蓮夜「間接的に送るのはせいぜい7〜8割しかマギを乗せられないが、直接送る場合はマギを全て乗せることができるんだ。それに伝導率が高ければ高いほどマギの性質を変えられる。2人とも射撃よりも近接の方がヒューズにダメージを与えられるだろう？」

2人は覚えがあるようであらずく。

蓮夜「その理由がこの伝導率なんだ。だから弓だと矢を直接持つし、この弓はマギそのものを矢にするから軌道を変えたり重ねて強化したり、逆に分割して同時に数発を放ったりできるんだ。」

神琳「だから弓をおすすめされたのですね。」

蓮夜「そうだ、結構癖があるが応用性が高く使い込めば使い込むほど強くなれるからな。」

雨嘉「私・・・弓を使ったことは無かったから・・・ちゃんと使えるかな？」

蓮夜「大丈夫、最初は大変だろうけど普通の弓よりもマギで制御するから使いやすいし慣れれば色々なことができるからな。俺も教えるし慣れれば色々なことができるぞ。」

雨嘉「それなら使ってみる！」

蓮夜「ならこれで決定だな。それじゃあ俺は他を見て回るから何かあったら聞いてくれ説明や相談に乗るから。」

神琳「はい、わかりました。」

雨嘉「わかりました。」

彼は他のみんなを探しに向かった。



## 設定集・異能者

### 異能

マジとは異なり遙かに昔から存在していた異常な力。

異能に目覚めたものを『異能者』と呼ぶ。

異能は能力に馴染むことを深度呼び、異能の目覚めることで『半覚醒』し、しばらく使用し続けることで『覚醒』と呼ばれる能力を従前に使用出来るようになり、そしてその後も過剰に使用することで『超越者or獣』と深くなっていく。(例外も存在し半覚醒から一気に最高深度まで行ってしまう場合がある。)

### 獣

覚醒した異能者が能力の過剰使用をし続けることで異能に呑まれた末路。この状態になると戻ることが不可能で能力が暴走して周囲に甚大な被害を振りまく理性のない獣となる。

### 超越者

覚醒した異能者が能力の過剰使用をし続けることで異能に呑まれるが、その中で呑まれて獣にならずに最高深度に存在し続ける存在のこと。

ただし、強い精神的な負担(絶望など)を受けた場合また異能に呑まれ始めそのまま獣になってしまう場合がある。

### 恩恵

超越者になり暴走しなかった能力がそのまま自身の力になったものの。

基本的に異能の一部なので能力の類似点がある力になる。

### 呪い

恩恵の中の超越者本人にとってデメリットになるもの。

超越者本人が呪いだと認識したものが呪いとなるため人によって認識が変わる。

## 異能の分類・系統

異能には『強化型』『知覚型』『感応型』の3つの別れており、そこからそれぞれ2つの系統に別れる。

分類と系統にそれぞれ特性が存在する。

### 「強化型」

- ・自身の肉体そのものを強化する。

特性：身体強化

- ・身体能力や再生能力、五感などを常人の数倍まで強化する。

### 「変化系」

- ・自身の肉体の一部又は全身を生物又は自然現象に変質させる。

(イメージはワン・オースの自然系、動物系など)

特性：自己進化

- ・変化形態を使い続けることで最適化し能力を向上される。

### 「憑依系」

- ・自身に概念存在の情報を上書きすることでその力を扱う。(イメージはプ○ヤのイン○ツールなど)

特性：憑依派生

- ・憑依する存在に類似点があるものに繋がりその存在を憑依できるようになる。(派生の最大数は能力者の深度や経験によって変わる。)

### 「知覚型」

- ・自身の感覚器官を触媒としてそのもの知覚範囲内の事象に干渉する。

特性：知覚範囲強化

- ・自身の知覚触媒の知覚範囲を向上させる。(眼なら視力向上や視覚外などの全方位も視認可能など)

### 「刻印系」

- ・自身の異能触媒自体に刻印を発生させて自身の知覚範囲内の事象に干渉する。(イメージは型○の魔眼など)

特性：新生改変

- ・自身の持つ刻印や手に入れて情報を元に新たな刻印を作り出す。  
(刻印の最大数は能力者の深度や経験によって変わる。)

「起点系」

- ・自身の知覚範囲内の一点に起点を生み出しそこを中心にして事象に干渉する。

特性：起点記録

- ・起点となる場所を記録しておくことで知覚範囲外でも能力が使用できる。(起点の最大数は能力者の深度や経験によって変わる。)

「感応型」

- ・自身の周囲にいる存在に干渉する。

(ただし感応型のみこの特性を持つが本質が違う能力が多い。)

特性：存在把握

- ・自身から一定の範囲内の存在を認識したその場所や状況を把握できる。(認識可能距離は能力者の深度や経験によって変わる。)

「共鳴系」

- ・存在把握距離内の存在と繋がりそのものの力と共鳴することで能力を増幅させる。

特性：認識識別

- ・他人の認識の方向などを見ることが出来る。

「支配系」

- ・存在把握距離内の存在に干渉する。

特性：感情識別

- ・他人の感情を色や形として見ることが出来る。

異能：紋章眼

能力者：黒鉄 蓮夜

タイプ：知覚

系統：刻印

能力：眼を触媒にして自身の知覚範囲内の事象に干渉する。  
発動時に眼に模様が現れその模様で能力が変わる。

・壊始（ハイライト無しの渦）  
物質や事象の終わりを見ることが出来る。（終わりを形や色によって見分けることができそのパターン通りに行動を行うことで終わりの概念を付与する。）

・生成（7重の歯車）

自身の見たものまたは知識にあるものを複製する。複製物の合成又は改造も可能。

・情読（本とペン）

何かしらの物理的に存在するものの情報を書き換える。

本来の使い方は情報分析であり書き換えは副次効果なため改變能力は低い。

（無理な改變は不可能。できて強化や弱体化、あとは単純な性質変化など。）

・操作（二重丸の中に針と糸）

無機物（分子）の動きを操る。

空中に固定移動させることも可能。

・再生（太陽の中に六角形）

肉体の再生や見た範囲内の事象の巻き戻しが可能。

・次元（菱形の中に4本の秒針）

時間や空間の目視と干渉が可能。

・幻界（鏡と煙）

幻覚や精神操作。知覚範囲内での幻の具現化。

・本来の能力は壊始と生成だけであり他の能力は刻印型の特性である新生改變で新たに作り出したもの。

・壊始と生成は長時間の連続使用ができない。（壊始が1時間、生成は30分使用すると最短5分、最長2時間使用不可。）

・本来片目に紋章を展開すれば発動すれば能力が使えるが両眼に同じ紋章を展開することで能力を向上できる。しかし、壊始と生成はその状態で眼球が傷つくと体外への能力使用が1週間出来なくなる

デメリットを持つ。

恩恵：理外者

- ・概念的な干渉を受けずらくなる。

異能の能力制限にも作用するため常時能力の一部が常時発動状態になる。

呪い：不死

- ・死の概念を受けないため死ぬ事ができない。

・常時発動の能力に自身の身体の状態を最高の状態に巻き戻し低下を固定して止めるものがあるため老いることもない。

異能：天獄纏

能力者：白井 夢結

タイプ：強化

系統：憑依

能力：自身に天使か悪魔又は両方の概念存在を憑依させることで自身の存在を上書きして強化する。

- ・段階によって容姿が変化する。

- ・ 1段階：天使なら白い、悪魔なら黒いオーラを纏う。

- ・ 2段階：天使なら左手足と右頬に白い模様が浮かび、悪魔なら右手足と左頬に黒い模様が浮かぶ。

- ・ 3段階：天使なら背中に翼が、悪魔なら額に角が生える。

これから憑依型の特性である憑依派生により蓮夜のように能力が増える可能性がある。

恩恵：精霊化

- ・概念存在である精霊への存在への変質し自然事象に干渉できる。

呪い：不死

- ・概念そのものになるため死や老いの概念から抜け出す。

異能：虚実霊域

能力者：川添 美鈴

タイプ：感応

系統：支配

能力：

- ・人の意識や記憶に対して干渉する。（覚醒した異能者を除く）
- ・自身の霊的要素を放出し擬似的な幽体離脱をする。
- ・自身の霊体を複製して同一存在として存在する。（最大10人）
- ・自身の生命活動が停止した時。守護対象を選択し対象者の守護霊として現界が可能。

・現界のためには対象者が偽物の自分を完全に拒絶することで対象者との対話が可能そして同意を得ることで現界または憑依が可能となる。ただし条件を達成するまで対象者にそのことを知られてはいかず知られた場合は守護対象から外れ魂が消滅してしまう。

・この異能は4番目の能力により常時発動状態になるため制御が効かず異能に吞まれやすくなる。

恩恵：霊体化

・魂のみの存在として現世に存在が可能になる。

・物質化が可能なため一般的な生活も可能で死を乗り越えた存在であるため不死になる。

呪い：狂化

・周囲の苦しみや憎しみをなどの負の感情などを取り込んでしまい徐々に狂い始める。

現在は呪いの影響を受けなくなっており狂うことは無い。

## 閑話⑥

百由「蓮夜！」

彼が歩いていると横の通路から声が聞こえそちらに振り向くと百由とミリアムそして鶴紗がいた。

蓮夜「どうしたんだ？」

百由「これってなんなの？」

彼が指さしたところには機械が剥き出しになっている未完成のよ  
うな武器が並んでいた。

蓮夜「これは実験的に作った試験機だな。ここにあるのは扱いづら  
過ぎて結局完成品を作らなかつたやつだ。」

ミリアム「扱いづらいとはそれもなのかの？」

蓮夜「例えばコイツなんだが……。」

彼が一つの武器を取り3人に見せた。

それは折り畳み式の大型狙撃銃のようになっており、銃身の接続部  
には何やら装置が着いており百由とミリアムには普通の狙撃銃とは  
違うものだと一目でわかった。

百由「狙撃銃かしら……かなり大型ね。それにこの部品……マ  
ギの放出機構かしら？」

蓮夜「よくわかつたな、これはスナイパーキャノンとエネルギーブ  
レードの複合武装だ。作ってみたはいいが……取り回しが悪いし、そ  
もそもマギを使う武器に銃器は合わないからな……結局作つたはい  
いが完全な浪漫武器としてお蔵入りに……。」

ミリアム「銃器にマギは相性が悪いのか！」

蓮夜「そうなんだよ……。」

彼は先程神琳達に話した内容を伝える。

蓮夜「そういう訳で、そこまで相性が良くないんだよ。弓とかは作るのも整備も大変だから量産機なら銃器で全然問題ないんだが。」

百由「確かに刀身の方が威力が高いと思っていただけそうだったのね……。」

鶴紗「それじゃあ、私達も弓を使った方がいいんですか？」

蓮夜「いいや、近距離メインなら普通に銃器で問題ないしそもそも遠距離メインじゃないなら普通に剣とか使った方がいいからな、銃器で問題ないないぞ。それに弓はかなりセンスがいるし……。」

ミアム「ワシじゃ無理そうじゃな。」

蓮夜「なんかリクエストはないか？」

鶴紗「形は大剣がいいけどもつと瞬発力が欲しい。」

蓮夜「瞬発力ねえ……。」

彼が周りを見渡すと一つの大剣を手に持った。

それは赤い刀身を持ったティルフィングのような見た目をしていった。

蓮夜「これなんかどうだ？」

鶴紗「これは？」

蓮夜「これも試験機で送り込まれたマジの性質を雷に変質させる機構が備わっているんだ。」

ミアム「なぜそのようなことをするのじゃ？」

百由「……なるほどね！それは面白いわね！」

蓮夜「やつぱり百由はわかるか……リリイはCHARMを触媒にしてマジを操るだろ？」

鶴紗「ああ、」

ミアム「当たり前じゃな。」

蓮夜「これはその触媒自体に性質変化をさせて自身の持たない力を



使うことができるようにする実験で作ったやつなんだよ。異能者は触媒なしに力を使うがそれは決まったものだけだからな。」

鶴紗「わかったけど・・・これがどうして瞬発力に繋がるんだ？」

蓮夜「リリーの身体強化のプロセスはへまぎをCHARMに送る↓  
へCHARMでまぎを変換する↓へ変換したまぎを自信に纏わせる↓  
の3工程で出来ているんだがその第2工程で変換する時に雷の性質を付与するんだ。すると、身体強化の時にその付与した性質を自身にも付与できるんだよ。」

ミリアム「その説明の仕方なら性質によって効果が変わるのかの？」

蓮夜「その通り、まずまぎの基本的な自然性質は『火』『水』『土』『風』の四属性あつてそこから派生で『火』は『鉄』、『水』は『氷』、『土』は『木』、『風』は『雷』の派生属性があるんだ。」

ミリアム「8個しかないのかのう？」

蓮夜「いいや、他にもあるけどそこは通常の機構じゃ再現不可能なんだよ。それでこの属性にどんな効果があると思う？」

鶴紗「『火』は力、『土』は防御、『風』は素早さか？・・・水が想像できない・・・。」

蓮夜「どれも違うぞ。」

ミリアム「それじゃあなんなのじゃ？」

蓮夜「まず『火』はまぎ出力、『水』は柔軟性、『土』が力、『風』は抵抗力だな。」

ミリアム「『火』と『土』はわかるが・・・『水』と『風』が想像出来んな・・・。」

蓮夜「柔軟性は身体の柔らかさ・・・これが防御だな。それで抵抗力は衝撃などからの身体への負担を軽減する役割だ。」

鶴紗「『雷』は『風』の派生なのはどうしたら素早さに関係するんだ？」

蓮夜「派生属性は基本属性の性質を変質させて本来の能力を低下させて他の能力を得ることなんだ。まず『鉄』は『火』の時のまぎ出力

の強化がほとんどなくなりその代わりにマギの消費効率を高めるんだ。次に『氷』は『水』の柔軟性が損なわれる代わりに自身の身体を硬化する。そして『木』は『土』の力・・・身体強化を低下させてその代わりに治癒能力を高める。最後に『雷』は『風』の抵抗力が低下して・・・。」

彼が武器にマギを流すと刀身が帯電し身体からも雷が迸った。

蓮夜「速度の向上を特に瞬発力が高まるんだ。」

彼が鶴紗に武器を手渡すと彼女はすぐにマギを流した。  
すると彼女の身体に雷が迸る。

鶴紗「なるほど・・・いいなこれ。」

ミリアム「ほうほう・・・これは面白いの、」

鶴紗「これに決めた。」

蓮夜「それじゃあ、鶴紗さんはこれで決定だな。」

ミリアム「これは・・・。」

蓮夜「どうしたんだ？」

彼女は一つの武器を手に取り彼に見せる。

それは彼女が使っている両刃の戦斧ではなく戦鎚だった。

鎚の反対側には大型の推進機が2つ付いており彼女が使っている物よりも重厚な見た目をしていた。

蓮夜「見ての通り推進機付きの戦鎚だな。」

ミリアム「見ればわかるのじゃがなぜこれがこんなところにあるのじゃ？普通に実用的に見えるのじゃが？」

蓮夜「確かに実用性高いが・・・制御が大変だな。推進機の出力調整が大変なんだ。」

ミリアム「それほどなのか？」

蓮夜「いつも結構シビアだな・・・余っ程センスがあり尚且つ大出力をよく使い慣れている人じゃないとな・・・ん?。」

百由「それってグロツピと相性いいんじゃない?だってグロツピのフェイストランセンデンスはマジの放出が基本だから元々才能があるし普段から使い慣れているしピツタリでしょう!」

蓮夜「だけど、これ付けると斧を片側外すことになるが。」

ミリアム「それなら構わんぞ!ただ重量を両側同じにしてもらいたいのじゃが。」

蓮夜「大丈夫だぞ、だけど斧側も重くなるけどいいか?」

ミリアム「大丈夫なのじゃ!」

蓮夜「ミリアムさんの決定だな・・・あとは楓さんと二水さんそれに結梨さんか・・・どこにいるか知らないか?」

ミリアム「楓達なら入り口付近にいるはずじゃ。」

蓮夜「ありがとう、それじゃ俺はそっちに行ってくる。」

ミリアム「わかったのじゃ!」

鶴紗「また後で。」

百由「蓮夜、ここにあるの何個か研究ように持って行っていいかしら?」

蓮夜「いいぞ・・・だけど危険表示やクラス4以上は俺の許可なしだと持ち出せないしそもそも使えないようになってるから、収納の横のプレートに書いてあるからそれを確認してから取ってくれ。」

百由「わかったわまた後でね。・・・グロツピお宝見つけるわよ!」

ミリアム「ハイハイ、わかったのじゃ・・・。」

鶴紗「・・・私もついて行っていいですか?」

蓮夜「ああ、いいぞ・・・。」

興奮している百由から逃げるように2人はこの場を後にした。

## 閑話⑦

蓮夜と鶴紗はミリアムに言われたとおり入り口付近へ向かうとそこには梅に楓、二水がいた。

蓮夜「二人とも何か見つかったか？」

二水「黒鉄さん、なかなか見つからなくて決まっています。」

梅「梅もまだだな。」

楓「かなりの数がありますので確認するだけで一苦労ですわ。」

鶴紗「私も苦労した・・・別の意味で・・・。」

楓「別の意味とは？」

鶴紗「・・・百由様。」

梅「何となく察しは着いたぞ・・・大変だったな。」

二水「あはは・・・ご苦労様です。それはそうと見つかったんですか？」

鶴紗「ああ、これ。」

鶴紗自身が持ってきた物を見せながらどのようなものか説明する。

梅「そんなものもあるのか！」

二水「マジにはこのような使い方もあるんですね！」

楓「私としては銃器がマジと相性が悪いことが以外ですわ・・・。」

蓮夜「パイルみたいな超近接系や特殊弾みたいな触媒自体を打ち込むなら別だが基本的にな・・・。」

梅「パイルってあれか？」

梅が指策方向には大型の機械がありその見た目は手甲の形をしており手の甲側から鈍く光の杭が顔を覗かしていた。

蓮夜「これだな、これにも面白い機構があつてな。打撃時に杭を打ち出すんだがその時の速さに応じて威力が高まるんだ。」

楓「それは普通ではなくて？」

蓮夜「そうなんだがこれには力場の指向性制御機構が備わっていて空気抵抗や重力などから受ける力溜め込んだりを一方向に集中させたりできるんだよ。それにより打撃時だけじゃなくてその前の移動時の力もそのまま伝わるんだ。」

二水「えつと・・・つまりは？」

蓮夜「そうだな・・・衝撃時の力を10として移動時の力を1秒で5として10秒間移動したとするとその全てが衝撃時に加算されるから60・・・つまり6倍になるってことだな。」

鶴紗「えげつない・・・。」

蓮夜「まあ、このくらいにするならかなりの速度で移動しつつ尚且つ力の蓄積も1度止まったり速度が落ちるとリセットされるから速度を維持しつつ攻撃を躲す技量が必要だけだな。」

梅「それなら梅が使っているか！」

蓮夜「梅なら使えそうだな・・・手甲じゃ無くても組み込めるから形は何かいい？」

梅「それなら形をタンキエムと同じ感じにしてくれ。」

蓮夜「わかった。・・・それで2人とも何か」

楓「私はジュワユースのデザインをそのままに火力を向上させたいですわね。」

蓮夜「火力の向上か・・・。」

楓「はい、ジュワユースは速度を重視しているため一撃が一撃が強いとは言えません。ですのでそこを改善したいと考えております。」

蓮夜「デザインをそのままにしながら火力だけを向上させるか・・・元々両手持ちを考慮してないしな・・・かなりキツイぞ。パイル付けるとかなら大丈夫なんだが・・・それは嫌だろ？」

楓「そうですわね・・・。」

蓮夜「そもそも手数のみを追求したデザインだからな、両手持ちが出来ないから重くすると返って邪魔になるからな・・・どういう場面で火力が足りないと思ったんだ？」

楓「硬い表皮を持つヒュージとの戦闘時です。」

蓮夜「それなら別に火力あげなくても大丈夫だぞ？」

楓「あら？そうですの？」

彼は一振のレイピアを取り出して楓へと渡す。

一見なんの変哲もないレイピアだが手元にある引き金と撃鉄だけがその異様さをかもちだしていた。

蓮夜「こいつの機構を使えばなんとかなると思う。」

楓「ただのレイピアに見えますが……。」

鶴紗「私と同じか？」

二水「ここに撃鉄がありますよ！」

蓮夜「これには共振分離用の高周波発生機が付いていてなマジそのものを高速振動させるんだ。」

二水「共振分離？」

楓「振動でどうにかなるのですか？」

蓮夜「高速振動しているマジを浸透させることで相手のマジに反応してその波形を崩すんだ。そうするとマジで形成されているヒュージの構成物質が崩壊を開始する。」

鶴紗「さっきのもだけど……えげつないですね。」

蓮夜「これを作った時期はヒュージに慈悲なんてかける気無かったからな……今もだが。それにこれを考えついたのは俺じゃないからな？初期案はもっと酷かったんだぞ……。」

二水「これよりも酷いとは……。」

蓮夜「マジを崩壊させるのではなく浸透したマジを変質させることで元素そのものを崩壊させる……。」

楓「それは危険ではすみませんわね……。」

蓮夜「それを却下してヒュージやマジのみに効果があるように作つたがそれでもなかなか危ない代物だ。」

鶴紗「リリーの天敵にもなるからな。」

蓮夜「確かにそうだがこれは物質化したマジじゃないと意味が無いから半エネルギー体の銃弾や刀身のそのものとかは意味ないぞ？」

二水「それでも凶悪ですよ。」

楓「要するにこれを使えば相手の硬度は関係なくなるということでしょう。ならこれにしますわ!」

蓮夜「俺が進めてなんだが気をつけろよ・・・もしも刀身に触れている時に使っていたら自身の強化も無効化されるぞ。」

楓「そのようなへまはしません!」

蓮夜「冗談はさておき・・・二水さんはなにかないか?」

二水「わたしは怖がりだから皆さんのように戦うことができません・・・けどわたしも皆さんを守りたいんです!・・・だから距離が離れている人を守るようなものが欲しいんです。」

蓮夜「そうか・・・それなら。」

彼が手を目線であげると彼の目に模様が浮かぶ、

すると、彼の掌に野球ボールよりも一回り大きいぐらいの球体が現れた。

その球体にはビー玉サイズの水晶体が6つ均等に配置されていた。

二水「これは?」

蓮夜「半思考制御型重力制御式結界球・・・CHARMで言う第4世代型と同じ開発思想のものだ。」

楓「黒鉄さん、それは危険では!」

蓮夜「ああ、そうだな・・・これは脳への負担が大きく制御に失敗すれば後遺症を負う羽目になるかもしれない。」

二水「・・・これはどのようなものなんですか?」

楓「二水さん!」

蓮夜「これは本体と6つ子機に分かれていてそれぞれが起点となり重力を制御して障壁を発生させる装置だ。重力を制御する恩恵である程度自在に浮遊移動が可能で使用者の知覚範囲内ならどこへでも飛ばして防御することが可能だ。」

二水「これがあればわたしも皆さんを守れるのでしょうか・・・?」

蓮夜「それは君の努力次第だな・・・持ってきた俺が言えることじや

ないがこいつはおすすめしないぞ・・・リスクが高すぎる。」

楓「そうですね！お辞めになった方が！」

鶴紗「私みたいに治らないんだぞ！だからやめとけ！」

二水「・・・お二人ともありがとうございます。黒鉄さん・・・わたしはそれを使います。」

蓮夜「・・・本当にいいんだな？」

二水「はい！もう何も出来ないのが嫌なんです！」

彼の言葉を待つ二水に2人は焦り出す。

最悪の場合気絶させてでも止めようと考えたその時、

蓮夜「わかった・・・合格だな。」

二水・楓・鶴紗「「えっ？・・・合格？」」

蓮夜「もしも二水さんが求めても覚悟がなかったらそもそも渡す気がなかったからな。」

楓「そうなのですか、リスクがあるからでしょうか？」

蓮夜「いいや、そもそもこいつにはリスクなんてないからな。」

鶴紗「それじゃあなぜ思わせぶりな言い方をしたんですか？」

蓮夜「こいつは本当の意味で仲間を守るためのものだ。仲間を守る意思が強いやつじゃないと使う意味がないだろ？だからちゃんと覚悟があるか、そしてその覚悟がどんなものか聞いておきたかったんだ・・・これの考案者がそう願っていたからな。」

楓「黒鉄さんが作ったのでは？」

蓮夜「作ったのは俺だが考えたのは俺じゃないぞ？楓さんに渡したレイピアの初期案の考案者だな。」

楓「あの思考の持ち主がこのようなものを？」

蓮夜「あいつも色々あるんだよ・・・。」

楓「・・・これ以上は聞かないでおきますわ。」

蓮夜「そうしてくれ。」

鶴紗「なんで第4世代と同じなのにリスクがないんだ？」

蓮夜「それは第4世代にリスクがあるのは情報処理が間に合わない



からだ。それは本体を司令用のAI内蔵式の操作機器を用いることで情報を処理するから使用者の負担が少なくなるんだ。それに防御だけに機能を限定させることで制御系を簡略化するから使用者はただ移動先の指定と発動形態の指定、そして発動と解除だけを命令すればいいんだよ。」

鶴紗「なるほどな・・・だからリスクがないということか。」

蓮夜「そういうこと、怖い思いさせたいと思うがごめんな。」

二水「は、はい！大丈夫です。」

蓮夜「それじゃあ、二水さんはこれでいいんだね？」

二水「はい！よろしく願います！」

蓮夜「これであとは結梨さんだけだな・・・彼女はどこか知らない？」

二水「結梨さんなら梨璃さんのところに行くと言って黒鉄さんがくる少し前に奥の方へ行きましたよ？」

蓮夜「そうか・・・なら俺は結梨さんを探してくる。」

二水「わかりました。」

楓「ではまた後ほど。」

梅「梅は百由の暴走を止めてくるぞ！」

鶴紗「・・・願います。」

彼は彼女達と別れ結梨を探しに武器庫の奥へと戻って行った。

## 緩和⑧

蓮夜が梅と話している時、

結梨「梨璃！夢結！」

梨璃「結梨ちゃん！どうしたの？」

結梨「2人を探しに来たの！」

夢結「そうだったのね・・・他のみんなは？」

結梨「梅と楓、二水はさつきまで一緒にいたよ。百由達は分からない。」

夢結「そうなのね。それで良さそうなものは見つかったかしら？」

結梨「まだ見つかってないの・・・夢結達は？」

夢結「私は決まったわよ。」

梨璃「わたしはまだなんだよ。一通り見回ったんだけどなかなかしつくりくるものがなくってね。」

夢結「あなたも見つかってないのなら私達と一緒に探しましょう。」

結梨「うん！」

その後3人で見回ったが2人の武器がなかなか決まらず彼女達は夢結達が最初にいた原初シリーズが置かれている部屋へと戻って来ていた。

梨璃「なかなか見つかりませんね・・・。」

結梨「見つからない！」

夢結「そうね・・・彼を呼ぼうかしら？」

梨璃「そうしましょう、黒鉄さんならこの事に詳しいですからね！」

結梨「結梨が探してくる？」

夢結「いいえ、大丈夫よ。」

夢結が端末を取り出して彼に連絡を取ろうとすると、

蓮夜「やつぱりここにいたか。」

部屋の外から彼が入ってきた。

夢結「ちようど良かったわ。呼ぼうと思っていたのよ。」

蓮夜「そうなのか?・・・梨璃さんと結梨さんのか?」

夢結「ええ、そうよ。」

蓮夜「2人ともなにかリクエストはないか?」

梨璃「わたしはまだ考えている途中で・・・結梨ちゃんは何かあるかな?」

結梨「うくん、結梨は・・・みんなと同じがいい!」

蓮夜「みんなと同じ?・・・みんな使う武器の種類も機構も違うが・・・

誰のがいいんだ?」

結梨「誰かのじゃなくてみんなのがいいの!」

蓮夜「もしかして一柳隊のみんなの武器がいいってことか?」

結梨「うん!」

彼女の無理難題に彼は頭を悩ませた。

蓮夜「・・・つまり原初シリーズは再現不可能だから除外しても8

つ武器の特性を入れることになるってことだから・・・。」

梨璃「結梨ちゃん!黒鉄さんを困らせちゃダメでしょう。」

蓮夜「梨璃さん大丈夫だ。これは俺の説明不足だからな。」

夢結「それでできそうなの?」

蓮夜「何個か案はあるけどどれも実用的じゃなくてな・・・これについては少し考えてみる。」

夢結「そうなるかとは梨璃だけね・・・なにか思いついたかしら?」

梨璃「・・・よく分からないんです。」

蓮夜「よく分からない?」

梨璃「はい・・・わたしは何をしたいのか・・・入学したのもお姉様に会うためですし、最近目的というか・・・どうしたいかが分からないんです。」

夢結「・・・。」

梨璃「それに・・・先程黒鉄さんに見せていただいたあの戦闘・・・あれを見たらお姉様が遠くなったみたいで・・・。」

俯く梨璃に夢結はそつと彼女を抱きしめた。

梨璃「お姉様・・・？」

夢結「・・・梨璃、大丈夫よ。あなたを絶対に1人にしないわ・・・。」

梨璃「お姉様・・・。」

夢結「力なんて関係ないは・・・あなたは私がそのようなことで見捨ててると思っているのかしら？」

梨璃「い、いいえ！そんなこと・・・。」

夢結「私がこうして誰かと触れ合えるようになったのはあなたのお陰なのよ・・・。」

梨璃「で、ですよね！わ、わたし何をかんがえていたんでしょうか？」

梨璃が強く彼女を抱きしめるのを感じて夢結は微笑み彼女の頭を撫でた。

夢結「それに私は大切な人と一緒にいたいだけで超越者になろうと考えたのよ。・・・梨璃は私の大切な人だからあなたが嫌だと言っても離れないわ。」

梨璃「はい！」

結梨「結梨も混ぜて！」

2人だけの空間を作っている彼女達の間で結梨が割り込む。

梨璃「ゆ、結梨ちゃん!？」

夢結「あら？」

結梨「2人だけずるいの!結梨も!」

夢結「ごめんなさいね。」

結梨「結梨も撫でて!」

夢結が結梨の頭も撫でると彼女の顔が緩む、

梨璃「結梨ちゃんごめんね!よしよし、」

梨璃も結梨を撫で始めた時、

蓮夜「・・・ん?」

彼は違和感を感じた。

その違和感がどこから来ているのか当たりを見舞わたすと、

蓮夜「あれは・・・。」

彼の目には鎖の巻かれた1本の小太刀があった。

白い鞘に薄青色の柄と夜桜と真逆の色をしているそれは夜桜のよ  
うな機械的な部分がない変わりに頭には細い鎖が伸びており夜桜の  
攻撃的で荒々しい印象とは真逆で静かで穏やかな印象をかもちだ  
していた。

その小太刀は誰も触れていないのに小刻みに震えており、まるで誰  
かを待っているような雰囲気醸し出していた。

蓮夜「夢結・・・いい雰囲気のところ悪いけど何か感じないか?」

夢結「いい雰囲気って何よ・・・それに何か感じるって・・・。」

夢結は彼の言葉を理解出来ず首を傾げるがしばらくすると周りを見渡し始めた。

夢結「この感じさっきの・・・あら?・・・あれは・・・。」

彼女は何かを感じたようでそちらに向かい近寄る、

彼女の向かった先には小刻みに震えている小太刀があった。

彼女が小太刀に向かって左手を伸ばすと、

小太刀に巻きついていた鎖が解け彼女の左腕に巻き付いた。

夢結「!?」

彼女はいきなりすることに驚き手を戻すと鎖が引つ張られ小太刀が彼女の元へと飛んでくる。

小太刀が彼女の手に乗ると腕に巻き付いていた鎖が解けた。

梨璃「お姉様!?大丈夫ですか!」

結梨「夢結!大丈夫?」

夢結「ええ、大丈夫よ。・・・けれどどうしていきなり?」

蓮夜「気づいてくれなかったからじゃないか?」

夢結「・・・もしかして・・・この武器は意思があるの・・・?」

蓮夜「いいや、意識とかは無いはずだぞ?・・・まあ、相性とかがあるから本能的な何かはあるかもしれないが・・・。」

夢結「そうなのね・・・つまり私はこの小太刀と相性がいいということであっているのかしら?」

蓮夜「ああ、そうだぞ。・・・この小太刀の名前は『輪菊』、特性は『抑制』だ。」

夢結「『抑制』?」

蓮夜「そうだ、名前通りになんでも『抑制』する。・・・それが使用者であつてもな・・・夜桜と対になっているみたいなんだ。」

夢結「夜桜と・・・つまり使用者自身も弱体化してしまふというこ

となの？」

蓮夜「それがそうでも無いんだ・・・使用者自身はこの『抑制』自体を解くことができると抑えていた分の力を使用者に上乘せするんだよ。」

夢結「『抑制』していた時の力を溜め込んで使うということかしら？」

蓮夜「その考えで合ってるぞ。他にも触れた相手の力や動きを封じることが出来る。」

夢結「対になっていると言っていたけれど・・・能力が似ているわね。」

蓮夜「そう思うかもしれないが結果が似ているだけで全く別物だぞ？・・・『解放』は使用者の力を増幅させることで強化するが、『抑制』は使用者の力を溜め込んで溜まったものを上乘せすることで強化するんだ。・・・例えるなら『解放』は掛け算で、『抑制』は足し算だな。」

夢結「そう考えると全くの別物ね・・・だけどこの2振りって・・・。」  
蓮夜「夢結もわかったみたいだな・・・この2振りは相乗効果があるんだよ。『解放』で強化された力を『抑制』するから使用者が弱体化することがなくそして『抑制』による強化自体も『解放』で強化されるから、異常なくらいに能力が強化されるんだ。」

夢結「やっぱりね・・・けれど大丈夫なのかしら？」

蓮夜「大丈夫って何がだ？」

夢結「この2振りは能力が真逆になっているのだからひとつのCHARMに合わせるのは大変じゃないかしら？」

蓮夜「そこは俺がどうにかするさ・・・。」

その時彼の表情がいきなり変わった。

その表情は驚愕と困惑が混ざっておりその視線の先は、

梨璃「黒鉄さん？どうしたんですか？」

蓮夜「梨璃さん・・・その手に持っているのは・・・。」

梨璃「えっ？持っているって・・・わっ！」

彼女は自身の手を見るとそこには金色の刀身を持った大型の西洋剣があった。

梨璃「いつの間にも？」

結梨「梨璃も見つけたの？」

夢結「私と同じ感じね・・・もしかして。」

蓮夜「梨璃さんと相性がいんだな・・・その名前は『黄昏』・・・特性は『循環』だ。」

彼は何かを考え込むと端末を取り出し、

蓮夜「みんなのところに戻るぞ。」

梨璃「どうしたんですか？」

夢結「蓮夜・・・もしかして。」

蓮夜「ああ、夢結の思っている通りだ。」

彼が端末を操作しながら部屋を出ていくので3人も彼を追う。

すると外にはみんなが集まっており、

百由「何かあったの？」

蓮夜「ちよつとやばいことがわかつちまってな。」

美鈴「!?!?・・・そういうことかい？」

蓮夜「姐さんはわかつたみたいだな・・・。」

彼が真剣な顔になったのでみんなが気を引きしめる。

蓮夜「梨璃さんが異能者だった。」



## 閑話⑨

梨璃「わたしが・・・異能者・・・？」

百由「・・・梨璃ちゃんが異能者？・・・どういうことなの？」

蓮夜「みんなはこの武器庫の奥にある部屋には入ったか？」

楓「奥にそのようなものありましたか？」

梨璃「えっ？」

夢結「どういうことなの？」

楓の言葉に同意する彼女達に梨璃と夢結は困惑する。

梨璃「楓さん？何を言っているんですか・・・あるはずですよ？わたしの身長の上にある大きな扉が・・・。」

夢結「その通りよ・・・あんなに大きなもの気づかないはずがないわ。」

楓「お二人こそ何をおっしゃっていますの？・・・奥には壁しかありませんでしたでしょう？」

ミアム「そうじゃぞ？じゃが・・・黒鉄さんが言っておるのじやからあるのじやろうな・・・ここは無駄に広いから気づかなかったのかのう？」

結梨「結梨はすぐに見つけたぞ！」

鶴紗「もしかしてあれか？」

梨璃「鶴紗さんどうしたの？」

鶴紗「奥の方に行った時に一瞬壁が歪んだように見えたんだ・・・もしかして思ってた？」

百由「もしかして見える人と見えない人がいるわけ？」

謎が深まっていき彼女達が困惑していると、

蓮夜「百由の言ったことで合ってるぞ。」

百由「つまりあなたがその部屋を隠していて見える人と見えない人

がいるってこと？」

蓮夜「いいや、俺が隠しているわけじゃない……隠しているのはこいつらだ。」

彼は自身の武器である大太刀を取り出し彼女達の前に出した。

蓮夜「俺が使っている武器は『原初』シリーズって言うんだけどその武器には相性……適正みたいなものがあるんだ。」

百由「適正？……もしかしてその適性がある人しか見えないとか？」

蓮夜「いいや、それ以外にも強化リリイにも見える人はいるはずだ。」

梨璃「だから結梨ちゃんも見えたんですね！」

鶴紗「だけど……どうして私にはちゃんと見えなかったんだ？」

蓮夜「多分だが鶴紗さんは戦闘に特化しているからだと思う。結梨さんは知覚にも優れているから気づけたんじゃないかな？」

鶴紗「……そうなのか？」

蓮夜「おっと話が逸れたな……話を戻すぞ。それでその適性は異能者にしか出ないはずなんだ。」

百由「どうして異能者だけなの？」

蓮夜「それは武器に使う力の違いだな。」

神琳「力……ですか……マギではないのですか？」

蓮夜「違うぞ。異能者が能力を使う時に使うのは……『因果律』だ。」

梅「因果律？」

蓮夜「そう因果率……基本的に異能者の能力はリリイとは違いマギのようなエネルギーを使わない。全て何らかの形で『因果』に干渉して『因果律』を弄ることで発動するんだ。」

二水「そうなんですか？」

楓「ですが因果律というものをいじるだけでどうしてあのような現象が？」

百由「結果そのものが反映されるからよ……。」

梅「百由はわかるのか？」

百由「詳しくは分からないけど『因果律』って言うのは何かしらの原因によって起こる結果なの・・・それを弄ると言うことは結果そのものを強制的に書き換えて法則そのものを違うことへと変換してしまふことなの。」

梨璃「どういうことでしょうか？」

百由「簡単に言うと思っただけで自分の考えたことが実現するということね・・・。例えば、今ここで『ヒュージの標本サンプル』が欲しいと思えば何も無いのに現れる・・・みたいなことよね？」

蓮夜「例えが分かりずらいがだいたいそんな感じだな・・・何でもは出来ないが自身の能力範囲なら基本的に自由に操作が可能だ。」

梨璃「よくは分かりませんが・・・すごいんですね？」

楓「お待ちになってください？今その話をするということは・・・。」

蓮夜「そうだ・・・梨璃さんにも適正があった。」

雨嘉「えっ？・・・梨璃も異能者なの？」

蓮夜「まだそうじゃないな・・・まだ半覚醒もしていない言うなら『卵』みたいな感じだ。」

神琳「どうしてわかるのですか？」

蓮夜「それは分からないからだ。」

夢結「分からないから？」

蓮夜「ああ、俺みたいな知覚型や姐さんみたいな特殊な能力の人は知覚範囲内の異能者がわかるんだよ・・・それなのに反応しなかった。二水「それなら勘違いでは？」

蓮夜「それなら良かったんだが・・・『原初』シリーズを持てるんだから異能者なのは確定だな。」

百由「持てるって？」

蓮夜「梨璃さん。」

梨璃「はっ、はい！」

蓮夜「百由に『黄昏』を持たせてみてくれないか？」

梨璃「わかりました？」

「梨璃が百由に黄昏を渡そうとすると、  
百由「!?」

梨璃が手を離すと百由は黄昏の重さが何十倍にも増えた感覚に陥りバランスを崩し倒れてしまう。

ミリアム「百由様!?大丈夫か!」

百由「え、ええ・・・大丈夫よ・・・」

神琳「どうかしましたか?」

百由「梨璃ちゃんが手を話した瞬間にすごく重くなったのよ。」

夢結「私は普通に持てるわよ?」

夢結は黄昏を持ち上げると梨璃に返した。

その動作は軽々としたものでまるで重さを感じさせなかった。

蓮夜「こんな感じで・・・そもそも因果律を操作できない人が持つと重くなったように感じるんだ。・・・こいつは因果の塊みたいなものだからな。」

雨嘉「それと何が関係あるんですか?」

蓮夜「因果って言うのは簡単に言うとは情報だ。・・・PCとかでもデータ量の大きいものを低スペックのもので使おうとすると重すぎて使えないだろう?・・・それと同じだよ。」

ミリアム「つまりは普通の人間にはこの武器達の情報量が多すぎると言うことか?」

蓮夜「そういうこと・・・つまりこれを持ってている時点で因果律の操作ができるってことなんだ・・・」

楓「異能者だということは梨璃さんも狙われる可能性が!」

蓮夜「バれてないから大丈夫なはずだ。・・・それにまだ『卵』の状態だからちやんと覚醒するかも分からない・・・もしかしたら覚醒しないでそのままの可能性もある。」

神琳「どうした場合に覚醒するのでしょうか？」

蓮夜「簡単に言うとな能力の使用だな。異能者は基本的に能力を使い続けることで深度を深めて能力を強めていく。．．．彼女の能力がどんなものかは分からないが無茶をしたり使い続けなければ大丈夫だ。」

二水「大丈夫じゃないじゃないですか！」

梨璃「二水ちゃんどういうこと!？」

二水「だって梨璃さんは無茶と無謀の体現者じゃないですか!これからも絶対に無理をするでしょう!」

梨璃「ひどくない!？」

楓「そうですね!絶対に無理をするに決まっていますわ!!」

梨璃「楓さんも!？」

神琳「これは．．．二水さん達に同意です。」

雨嘉「うん．．．神琳の言う通り．．．絶対に無茶をする。」

鶴紗「．．．だな。」

ミリアム「そうじゃの．．．しない方がありえないのじゃ。」

梅「まあ、それが梨璃のいい所なだけだな。」

百由「そうとしか考えられないわね．．．。」

梨璃「皆さんも．．．わたしそこまで信用されていないのですか。」

結梨「梨璃．．．。」

梨璃が落ち込むなか結梨が声をかける。

梨璃「結梨ちゃん!結梨ちゃんはそう思わないよね?」

結梨「梨璃は絶対にに思うと思うぞ!結梨が梨璃のことを好きな理由だから!!」

梨璃「結梨ちゃん．．．嬉しいけど、今は違う言葉が欲しかったな．．．。」

夢結「．．．梨璃。」

梨璃「．．．お姉様?」

夢結が梨璃の頭を撫でながら優しく声をかける。  
梨璃は彼女は信じてくれると思いきちらを向くと、

夢結「絶対に無茶をしたらダメよ!!」

彼女が1番焦っていた。

それは当たり前だ。

今まで梨璃は数々の無茶無謀を繰り返した来た、  
その理由の大半が自分に関わることだけに夢結は気が気じゃなくなっていた。

梨璃「・・・お姉様・・・」

自身が本当に信用されてないことに気づき彼女は膝を付いて崩れ落ちる。

蓮夜「・・・という訳で梨璃さんがかなりまずい状況なんだ。」

美鈴「そうなると梨璃にも異能者としての戦い方や能力の使い方を教えないと行けないね・・・」

蓮夜「そういうことです。ちゃんと覚醒すれば捕まることは基本ありませんし。」

楓「そうなんですか?」

蓮夜「ああ、基本的に異能者を倒せるのは異能者かギガント級以上のヒュージ位だ。・・・それに異能者は因果律を操る性質から自然的な干渉を受けにくい。」

ミアム「自然的な干渉?」

蓮夜「薬物や毒が効かないということかな?・・・だから眠らせて誘拐とかもありえないんだよ。それに捕まっても能力封じることが出来ないから簡単に逃げられるし・・・」

楓「なんだか・・・理不尽ですわね・・・」

蓮夜「・・・そういうことだと思ってくれ・・・。」

楓「・・・わかりましたわ。」

蓮夜「だから2人のことは絶対に他人に言わないでくれ。」

その言葉に全員が同意する。

蓮夜「それじゃあ、控え室に戻ろうか。」

そういうと彼は懐からひとつの球体を取り出し上に投げた。

その球体が彼女達の目線位の高さに降りてきた時に球体が歪みそこを中心的空間が歪む。

その歪みからは彼女達がいつも使っている控え室が映し出されていた。

## 閑話⑩

二水「これは？」

蓮夜「これは起点式空間収縮機って言って簡単に言うとワープゲートみたいなものだな。」

神琳「なぜこのようなものを？・・・黒鉄さんなら自身の能力だけでも可能なはずですが・・・。」

蓮夜「ここは対異能者ように色々な対策をしてあつてなこういう専用の物を使わないと決まった場所以外では転移ができないんだ。」

神琳「そうなのですか・・・ですがそれを奪われた場合大変なのは？」

蓮夜「その点も大丈夫だぞ。この装置自体が使い捨てかつ生成から30秒以内に使用しないと崩壊する仕組みだしそもそもロック自体が硬いから解析特化の異能者でも最低60秒掛かるから抜かりはない。」

梅「なんで解析特化？でもそんだけかかるってわかるんだ？お前の知り合いがそうなのか？」

蓮夜「いいや、だって解析特化って俺のことだぞ？」

百由「そうだったの！」

蓮夜「ああ、そもそも俺の能力は触媒である眼で見た情報量を解析して手に入れた情報を改変して効果を発揮する能力なんだから・・・解析に特化してないとどうにもならないしな。」

百由「・・・言われてみれば、知覚型の性質上そうなるわね・・・もしかして知覚型は全員解析特化なのかしら？」

蓮夜「基本的に解析特化なのは刻印系・・・っと、もうそろそろ閉じるからあとは控え室でしょう。」

そういうと彼は歪みの中に入っていく、

彼女達達も彼に続き内に入るとそこには毎日のように来ている一柳隊の控え室があつた。



楓「本当に一瞬でしたわね・・・。」

百由「もしかしてこれってヒュージの使うケーブルと同じ仕組みなのかしら?」

蓮夜「似てるけど違うぞ?」

百由「そうなの・・・ってあなたケーブルの仕組みわかるの!」

蓮夜「わかるぞ?・・・てかあれ俺の知り合いに似たようなことをするやつがいるし・・・。」

百由「それでどういう仕組みなのかしら!!」

蓮夜「落ち着け・・・ケーブルの仕組みは次元位相の変化と裏次元の性質を利用することで距離を縮めることなんだ。」

専門的な単語にここにいる人の中の大半が分からず首を傾げる。

その中で百由と夢結、そしてミリアムはある程度理解出来たように、

百由「なるほどね・・・だからケーブルの行き先が解析出来なかったのね。」

ミリアム「じゃがそれが分かればどうにかなるということじゃろ?・・・百由様こと前のあのデータが使えるんじゃないかのう?」

百由「ああ、あれね・・・確かに使えそうね。後で試して見ましよう!」

夢結「それだとヒュージがマジを操っているということに・・・だけど例外を除けばヒュージは・・・。」

梨璃「あ、お姉様・・・?」

夢結「梨璃には難しいかもしれないわね・・・どのように説明すればいいかしら?。」

蓮夜「簡単に言うと今いる世界には裏の世界っていうのがあってその世界は距離が曖昧なんだよ。その性質を利用して目的地までの距離を最短にすることで長距離を短時間で移動するんだ。」

雨嘉「・・・違う世界を経由して移動するってこと?」

蓮夜「そうだな・・・これをヒュージがマジで構成されている特性

を活かして自身の次元波長・・・自身を裏世界に移すことができる  
ヒューズが移動することでケーブルが発生するんだ。」

百由「だからヒューズしか使えないのね?・・・マジ以外で体を構成している人間じゃ無理なわけね。」

蓮夜「ちなみに俺がさつき使ったのは目的地までの移動過程を切り取ることで出発位置と目的地を繋げることで移動する方法な。」

百由「だから違うのか・・・私達でも作れるかしら?」

蓮夜「作るならケーブル方式の方がいいぞ?」

百由「なんで?」

蓮夜「俺のはある意味で力技だから少しでもバランスを崩すとどこに飛んでいくか分からないんだよ・・・俺の場合は固定できるから関係ないけどなんかの拍子に目的地が変わって・・・最悪の場合マントルの中とかに。」

梨璃・二水・雨嘉『ヒィイツ!』

百由「そ、それは・・・確かに危険ね・・・。」

蓮夜「それに対してケーブルは1度道を通ることで固定するからその心配はないし人じゃなくて装置を通らせればなんにあっても人的被害はないからな。」

梅「そうすると梅のはどっちなんだ?」

蓮夜「梅のは俺のと同じ過程消去型だな。」

二水「それじゃあ危ないんじゃない?」

蓮夜「異界の門は目視範囲内だけだからそうそう失敗はないし、そもそも収縮がSクラス・・・つまり縮地に関しては完璧にマジ制御が可能なことを示すんだから下手に俺が使うよりも安全だぞ?」

二水「なら安心です。」

蓮夜「まあ、この話は一旦終わりとしてさっきの話の続きだな。異能は系統によってだいたい何が得意かは決まるんだが「変化は増強」「憑依は同調」「起点は記憶」「刻印は解析」「共鳴は調律」「支配は送信」が得意でその性質だけは変わらない。」

鶴紗「同調と調律は同じじゃないんですか?」

蓮夜「同調は自身の存在を相手側に合わせることで調律は周りを自

身に合わせるから全く逆だぞ。」

神琳「それでは送信とは？」

蓮夜「送信は自身が生み出した情報体をなにかに付与することだな。それを利用して何かを操るのが基本的な支配系の能力になる。」

梨璃「記憶って記憶力が良くなるとかですか？」

蓮夜「そう思うだろうけど、どちらかと言うと脳の能力だな。…記憶力に処理能力などの情報を処理する能力が向上することで正確に起点を指定することができる。起点系は起点を指定しそこに情報を設定として上書きすることで能力を使用するんだ。」

梅「結構ややこしいんだな。」

蓮夜「まあな…得意というより特徴って思ってくれ、そしてその性質が突出しているものが特化、他の性質に向いているものを汎用って言うんだ。」

夢結「そうすると私は特化なのかしら？それとも汎用？」

蓮夜「夢結は特化だな。だからこそ憑依系としての幅が広い。」

神琳「特化がその系統の能力に適性が高いのなら、汎用はどのような利点か？」

蓮夜「それは能力の方向性だな。汎用は一つのことの特化しない代わりに他のこともできるんだ…だから、汎用の方が系統自体の性質以外のことがしやすくなるんだよ。」

ミリアム「それなら特化と汎用はどちらの方が優れているのじゃ？やっぱり特化かのう？」

蓮夜「優劣はないな…特化は性質が尖っている分一つのことに対しては圧倒的なアドバンテージになるが、汎用みたいに色々なことができる訳じゃないから出来ることは限られてくる…まあ、要するに使い方次第だな。」

百由「そう考えると美鈴のは汎用なのよね？支配系の要素ほとんどないように思ったけど。」

美鈴「そうだね、僕の場合はかなり特殊な能力だったからかなり苦労したよ…これは異能者全員に言えることではあるけど。」

蓮夜「そうですね…姐さんの場合はこの特異性が原因で苦しみ

ましたからね。」

美鈴「そういう君もだろう。特化は制御が難しいんだ特に刻印系は身体的負担も大きいから・・・確か何回も眼が潰れたんだろ？」

蓮夜「それは慣れですよ・・・今となつては痛くもありませんし・・・まあ、さすがに最初の頃はキツかったですけど途中からはなんも感じなくなりましたよ？」

美鈴「そう考えるとなれというものは怖いね。」

蓮夜「ですね・・・大変ならそちらの方が上でしょう？発動を止められないんですから常時精神汚染状態ですよ？」

美鈴「まあね・・・だけど僕も途中から慣れててさ何も感じなくなっていたよ・・・そのせいで悪化していた事に気が付かなかつたけど・・・。」

蓮夜「2回目ですけど・・・本当に慣れてつて怖いですね。」

美鈴「そうだね・・・本当に気をつけないと。」

2人は笑いながら話しているがその内容にその場にいる全員がドン引きする。

その中1人だけ動じなかつた結梨は、

結梨「蓮夜！梨璃はどつちななの？」

蓮夜「梨璃さんは・・・まだ分からないんだよ。」

結梨「なんで？」

蓮夜「まだ能力がどのようなものか分からないから判断がつかないんだ・・・多分黄昏の特性と相性がいいから感応型の共鳴系だと思うんだけど・・・この系統だと汎用の可能性が多いみたいだから汎用かもしれないな。」

結梨「梨璃！そうなんだって！」

梨璃「えっ？あ、ありがとう結梨ちゃん・・・。」

結梨のおかげで話を持ち直すことに成功し彼女達がホツとしていると、

『ゴーン、ゴーン!!』

鐘の音が辺りに響き渡った。

蓮夜「もうこんな時間か・・・今日はここまでにしよう。」

あとから日は赤らんでおり時計を見ると長針が5時を指していた。

夢結「そうね、今日はここまでにしましょう。」

彼女の言葉を合図に皆が帰省の準備を始めそれぞれが自身の寮へと戻って行った。

## 閑話⑪

蓮夜「……これだと……」

彼は皆と別れた後自身の部屋に戻りPCと睨み合っていた。

先程彼女達が決めた武器のデータを見ながらそれをCHARMに作り替えるプランを考えているのだが、

蓮夜「やっぱり、変形機構がな……」

元々彼の作る武器は一つの形に固定することでそのパフォーマンスを最大限生かすコンセプトで出来ている。

だが、CHARMは近接形態と射撃形態を切り替えることで距離に縛られず扱うことをコンセプトとしていた。

前者はその一つの形に固定することで必要な機能だけを付けることが出来るため武器のコンセプトとあっている戦い方の時にその性能を発揮する。

そして後者は、2種類または3種類の形態を持つことで汎用性が高くなるような状況でも機能するようになっていく。

その代わりに多くの機能を付けなくては行けないため前者に比べると総合的な性能は変わらないが1つのことに関しては絶対に敵わないという欠点がある。

欠点は前者にもありそれは、状況によって発揮出来る性能の差が激しいことだ。

彼が悩んでいるのは変形機構による機能の制限である。

蓮夜「機能を付けすぎると変形機構使用時に不備が出るから……  
だけど機能付けないと行けないし……」

機能を付けると変形機構が付けられず逆に変形機構を外すとCHARMとしての汎用性を失ってしまう。

特化か汎用性……この2つのを矛盾を両立させようと考えているのだ。

蓮夜「だけど一番の問題は……。」

彼がラックに固定されている「夜桜」「輪菊」「黄昏」を見る。

蓮夜「これをどうやってCHARMに落とし込むかな……。」

原初シリーズは元々彼自身が自らの意思で生成したものではなく超越者になる時に暴走し漏れた力が形になったものだ。

暴走した異能の力……つまり彼の獣としての力でもあるのだ。

そのため未知数の部分が多く相性などがあるため彼本人でも使えませんがまともに使えるのは「新月」と「三日月大太刀」、鎌「光導ナイフ」の3つだけだ。

これをCHARMという形に落とし込みつつその特性を最大限以上に発揮出来るようになったのは3つの特性が奇跡的に噛み合ったからだ。

「干渉」が全ての機能や特性、性質に干渉し「変化」がそれらを1つの方向に合わせそして「分裂」の個別制御能力によりそれらを制御する。

この組み合わせだからこそ、このCHARM『極夜』はあの戦いの直前……3日で完成させられたのだ。

逆にこれらの特性を持たないあのものではCHARMへと落とし込むことすら不可能に近いのである。

彼がこの難題に頭を悩ましていると、

夢結『蓮夜……いるかしら?』

扉をノックする音と共に夢結の声が聞こえる。

蓮夜「……どうしたんだろ？」

時間が遅いため不思議に思いながらドアを開けると、そこには暗い表情をした夢結がいた。

夢結「今……大丈夫かしら？」

蓮夜「ああ、問題ないぞ。」

彼は夢結を部屋へと招き入れ椅子に座らせる。

彼が反対側に座ると彼の手にはポットやカップが乗ったトレイがありカップを彼女の前に置くとポットに入っていた紅茶を注いだ。

夢結「こういうこともできるのね……。」

蓮夜「まあな、伊達に使い続けてないから最初の2つ……『壊始』と『生成』以外ならリスクなく使えるぐらいには慣れてるよ。」

夢結「今作ったのではないの？」

蓮夜「時間が止まった空間に保管していたんだよ。……簡単に言うると作り置きだな。」

そう言いながら彼は他のポットを手に取り自身のカップにコーヒーを注いでいる。

蓮夜「……それでどうしたんだ？」

夢結「……それは。」

彼女の言葉が一瞬止まる、  
だが、



夢結「・・・今日あなたが見せてくれたあの戦いのことよ。」

蓮夜「かなり悲惨だったからな・・・やっぱりキツかったか・・・  
だけど。」

夢結「わかっているわ・・・これは私が選んだ道よ。覚悟はしているわ。」

蓮夜「そうか・・・。」

夢結「私が聞きたいのとはそこではないの・・・あの時の獣になっていた彼女の表情・・・あの感情の無いような表情は獣の特徴でもあるの？」

蓮夜「・・・ああ、獣は何も感じない・・・喜びも悲しみも怒りも・・・だから表情も出せないんだ。」

夢結「・・・やはりそうなのね。」

彼女の表情がさらに暗くなる、

部屋を静寂が包み彼は何かを悟ったかのような表情になる中彼女は顔を上げ、

夢結「・・・あなたが見せてくれた未来の映像・・・あれは獣になったあなたなのね。」

彼は真剣な表情で彼女を見ながら、

蓮夜「ああ・・・そうだ。」

彼の答えで彼女の予想は確信に変わった。

未来の彼は絶望したのだ。

1人だけ取り残される悲しさに潰されて、  
人は1人では生きていけない。

よくある言葉だが、それは的をえている。  
人は孤独を感じる生き物だ。

例え超越者でもそれは変えられない。

孤独とは時間が経てば経つほどより深く重くなっていく。  
終わりがわかっていれば耐えられるかもしれない

だが彼には終わりが無いのだ。

彼は必ず親しいものに置いてしまう。

特に大切な人を・・・両親を失っている彼には何にも変えられない  
ほどに辛い事はずだ。

蓮夜「夢結？」

夢結「・・・何かしら？」

彼女は紅茶を一口含む、

紅茶の香りとは裏腹に塩気を感じ疑問に思い視線を紅茶へと落とす、

蓮夜「・・・涙出てるけど・・・大丈夫か？」

そこには涙を流す自分自身が映し出されていた。

夢結「あら？・・・どうしてかしら？」

彼女はハンカチを取り出し涙を拭くが、

夢結「・・・おかしいわね・・・涙が止まらないわ。」

その涙は止まることはなく勢いをました。

どうにか止めようと必死になっている彼女の頭に何が触れた。  
彼女が上を見ると蓮夜が彼女に近づき頭を撫でていた。

それに気がつくやと涙が止まり安心したのか彼女の表情は穏やかなものになった。

蓮夜「……ごめんな、悲しいことを想像させちゃったみたいだな。」  
夢結「あなたのせいでは無いわ……ただ思い出したら……。」  
蓮夜「やつぱり優しいな夢結は……本当に君にはどれだけ救われ  
てきたことか……」

夢結「何か言ったかしら？」

蓮夜「いいや、なんにも……とにかく大丈夫だから……最近  
あの映像はほとんど見なくなったし。」

夢結「完全では無いのね？」

蓮夜「まあ、未来は不確定だから……絶対なんて有り得ないし  
な。」

夢結「そう……。」

彼女はまたしても悩んでいるような表情になる。

多分だが彼のあの未来が完全に消えていないのは私が居なくなる  
未来があるからだ。

それだけは確信がある。

一般的に見れば彼女は強く彼女を知るほとんどの人はそう口にす  
るだろう。

だが異能者……特に超越者としては彼女は弱い。

異能に目覚めてすぐに超越者になったのだからまだ体に能力が馴染ん  
でいないしそもそも使い方もろくに分からない。

彼の前にはこれからも苦難が続くだろう。

それを後ろから見ていることなんて彼女には考えたくなかった。

だが現実には彼の後ろ姿すら見ることが出来ないほどに差がある。

それは実力だけではない意志の強さもだ。

彼に追いつかねば支えるなんて夢のまた夢だ。

そうしなければ彼女が彼を悲しませてまで超越者になった意味が  
ない。

彼女は自身を抱きしめて涙を流す彼の姿を思い出した。  
痛いとする思うほどに強く抱き締めていた彼の表情、

それは彼が今までに見せたどのような表情よりも暗く悲しみに塗れていた。

もしも自身が居なくなれば彼は自分自身を怨み獣へと落ちてしま  
うだろう。

自惚れていると思われるだろうが彼女には確信があった。

『・・・俺が本当の意味で心を許せたのは両親と夢結・・・お前だけだっ  
たんだ。だから両親が居なくなってお前しかいなかったからな・・・  
絶対にお前だけは守らないと思っつてな。そうしないと自分自身がお  
かしくなる・・・』

初めてこの部屋を訪れた時に彼が口に出した言葉、

この言葉から彼が本当の意味で大切だと思う人は夢結だけなのだ  
ろう。

彼は自身の呪いにより大切な人を作らないようにしていた。

だからこそ確信が持てたのだ。

彼は夢結が思っているよりもずっと弱いのだ。

確かに実力は圧倒的であり意志の強さも常人とは比べ物にならない  
いだろうがそれは彼が努力し無理やり作り上げてきたものなのだ。

もしもその殻が破れてしまえば彼はすぐに壊れてしまう。

だからこそ支えてあげなければ行けないのだ。

失うことの悲しみを知る人が、

彼のことを一番知っている私が、

ならばどうする。

どうすれば彼に追いつける。

答えは簡単だ。

夢結「蓮夜・・・お願いがあるの。」

答えは目の前にある。

蓮夜「お願い？」

彼女は彼の目を真剣な表情で見ると、

夢結「私に異能の使い方を教えて欲しいの。」

そう、その答えとは・・・彼に鍛えてもらうことだった。

## 閑話⑫

蓮夜「鍛えて欲しい?・・・元々夢結と梨璃さんには異能の使い方とかは教える気だけど。」

夢結「使えるだけじゃダメなの・・・それだけじゃ。」

蓮夜「もしかしてアレを見たからか?・・・それならやめておけ・・・あれらの相手は俺がするから。」

夢結「私が無理やりに超越者になった理由・・・あなたは知っているでしょう?」

蓮夜「夢結が教えてくれたからな・・・俺を支えたいだったよな?」

夢結「ええ、そうよ。・・・そのためには強くならなと行けないの。」

蓮夜「強くなるって、支えるって言ったって色々あるんだぞ?別に獣と戦わなくても・・・。」

夢結「・・・傷つくのを見たくないのよ。」

蓮夜「・・・夢結、どうしたんだ?」

夢結が何かを呟くが彼はなんと云っているか聞こえず彼女にたずねる。

夢結「あなたが傷つくのを見たくないのよ!!」

蓮夜「!?!」

普段なら有り得ない夢結の叫びに彼は動けなくなるが彼女はそんなこと気にせず言葉を続ける。

夢結「これ以上大切な人を失いたくないの!大切な人が戦っているのに私は後ろで蹲っているだけなんて絶対に・・・いや。」

蓮夜「・・・。」

夢結「だから私は強くなりたいの・・・あなたに背中を預けて貰えるように・・・。」

蓮夜「……。」

彼の本心としては夢結に異能の制御以外教える気はない。もし戦いに参加してしまつたらと考えると手が震えてしまう。

彼は今まで目の前にいる人を守れなかったことが多くある。

自分が未熟なせいで助けられたはずの人を助けられなかった。

彼が違法施設に侵入して潰して回つたのも自分勝手な罪滅ぼしの一環だつた。

そうしないと自分を保てなかつたからだ。

彼はそのエゴに縋るしか無かつた。

依存症のようなものだ鎮静剤や抗不安薬のように自分が作つた誓い……エゴに縋るしかない。

なければ不安に押し潰されてしまう。

それが怖くてまた求めてしまう。

それが今の彼なのだ。

誰にも気づかれないうように隠そうとしているが果たしていつまで持つのかも分からない。

彼自身が言つた通り自分勝手なのだ。

自分が自分であるために彼女を戦いから離れたかつた。

彼女の意志を考えずに、

彼女が傷つかない事が彼女の幸せだと信じて……いいや、違う……

言い聞かせているのだ。

もし彼女が傷つきもしも居なくなつてしまつたら今度こそ彼は獣になつてしまう。

その結末を知っている……知つてしまつたから。

彼はそれを恐れるのだ。

そのために彼女を利用しようとしている。

最低な人間だ。

自分自身を罵倒する。

結局自分のためじゃないか……そんなどうしようもない事のため

に利用しようとしている。

そう考えると吐き気がする。

彼女は自身の未来すらも賭けて自分の傍にしようとしてくれている。

それなのに自分はどうか？

自問自答が始まる。

やっぱり彼女の傍に居てはいけないのでは？

自分と出会わなければ彼女はとっくに幸せを手に入れていたのではないか？

そもそも自分がいなければ彼女が傷つくことがなかったのではないか？

自分がいなければ・・・この言葉が脳裏を埋めつくしそれしか考えられなくなる。

やり直せたら・・・時間が戻れたらとすら思えてくる。

そして彼女と会わないようにする。

もしくは自分自身という存在を消してしまう。

それが彼女のためなのではないか？

周りが暗く感じる。

何回も味わった感覚だ。

呑まれかけているのだろう。

自己否定をしているのだから当たり前だ。

獣と同じ深度にいながら自我を保つ存在。

超越者は奇跡的なバランスで精神を保った獣だ。

それが何らかの影響で精神のバランスを崩してしまえば簡単に落ちたしまう。

もう落ちた方が楽なのではないだろうか？

獣に落ちたとしても対策をしてあるから周囲への被害はない。

それなら落ちてしまっただけで消えてしまえば苦しまずに済むのではないか？

今彼に残っている誓いは夢結が幸せを掴むまで見守ることだ。

彼女には梨璃さんも皆もそして姐さんいる。



自分一人いなくても彼女は幸せになれるだろう。  
俺が居なくても……。  
逆に不要なのだ。  
自分がいるから不幸になる。  
ならこのまま……。

夢結「……蓮夜、どうしたの？」

彼が俯き言葉を発さなくなり彼女が不思議に思い彼に呼びかける。

蓮夜「……。」

だが、返事が来ない。  
おかしいと思い彼の顔を覗くと、

夢結「!？」

放心したような状態で涙を流していた。

夢結「蓮夜!？」

彼女が慌てて彼の方を揺さぶるのだが、

蓮夜「……。」

彼は全く反応を示さない。  
彼女の中で不安が積もる。  
彼女にはこの現象に思い当たる節があった。  
なんせ数日前に彼女はこれを体験したからだ。

「そうでないことを願うが現実とは非情である。  
彼の顔から表情が完全に無くなり涙も止まる。  
彼の瞳からも光が消えてしまう。  
彼女の予想が最悪な形で現実になってしまったのだ。」

夢結「嘘よね？・・・どうしていきなり・・・蓮夜！しっかりしなさい！」

彼女が必死に呼びかけるがやはり反応がない。  
彼がしてくれたように抱きしめながら呼びかける。  
どうにかして彼を引き戻そうとするが、

夢結「お願い・・・戻ってきて・・・。」

状況は悪くなる一方だった。  
彼から不気味なオーラが漏れ出す。  
それを浴びた彼女をとてつもない寒気が襲いはじめる。  
まるでここが極寒の地ではないかと思うほどの寒気に凍えてしま  
うのではないかと思ってしまう、  
逃げろ！

本能が彼女に訴えかける。  
だが、彼女は彼のことを離さない。  
話す訳には行かない。

もし話してしまえば彼が居なくなってしまう、  
彼女の心がそう訴えかけているからだ。  
彼女が必死に抵抗していると、

美鈴「夢結！蓮夜！」

美鈴が姿を表した。

彼女は夢結に頼まれて彼女の傍を離れていたのだがこの尋常でない  
雰囲気につき駆けつけたのだ。

夢結「お姉様！蓮夜が・・・蓮夜が！」

美鈴「落ち着くんだ！そうしなければ助けられるものも助けられない！」

夢結「・・・！」

美鈴の言葉に彼女は冷静さを取り戻した。

美鈴が彼の額に手を添えると、

美鈴「・・・堕ちかけているね。」

夢結「はい、ですがどうしてなのか分からないんです！」

美鈴「・・・多分だけど限界が来たんだよ。」

夢結「・・・限界？」

美鈴「ああ、僕もそうだけど精神が潰れてしまったんだ・・・。」

夢結「どうしていきなり？」

美鈴「何か彼の心に負担をかけることがあったのかもしれない・・・何か思い当たる節はないかい？」

夢結は先程の会話から何かそれらしきものがないか探す。

夢結「もしかして・・・。」

美鈴「何かあったんだね。」

夢結「はい、彼がこうなる前に私強くなりたい、あなたの背中を預けて貰えるようになりたいって言ったんです・・・そうしたら彼が俯いて・・・。」

その言葉に美鈴は彼がこうなった理由を察した。

美鈴「誓い存在意義の喪失か・・・。」

夢結「誓い・・・ですか？」

美鈴「異能者は獣に堕ちないために強い意志を持ってないといけな

い・・・そのために自分自身に誓いを立てていたらしいんだ。」

夢結「立てると落ちなくなるのですか？」

美鈴「ほとんど落ちることはないらしい。そしてこの誓いというのは自分の存在する理由・・・存在意義でもある。だからこれを失うと簡単に落ちてしまうんだ。」

夢結「そうだとすると彼は・・・。」

美鈴「それが喪失したみたいだね。・・・幾つか立てていたらしいけど多分この2年間でそのほとんどを喪失していたのだろう。そして今最後の1つが無くなった。」

夢結「どうしたら彼は助かるんですか？」

美鈴「誓いがないとともう・・・。」

夢結「そんな・・・。」

夢結は彼に凭れ掛かるように膝をついた。

こんなに自分は無力なのか、

彼に相談しなければ、

彼女が自問自答をしていると、

美鈴「確か彼は・・・もしかして、夢結！」

夢結「・・・はい。」

美鈴「どうにかなるかもしれない。」

夢結「!？」

夢結の中で希望が生まれる。

美鈴「多分だけど彼に残っていた最後の誓いは夢結・・・君を守ることだ。」

夢結「私を・・・。」

美鈴「夢結には話していなかったけど、甲州撤退戦の時に彼と会っていたんだ。その時には彼は超越者になっていた。その時に彼は『夢結を守る』って言っていたんだ。」

夢結「……。」

美鈴「もしもそうなら彼の隣で君が戦う。つまり守る対象ではなく共に戦う人になってしまおう。それを想像してしまっただろう。だから自分の存在意義……彼の場合は存在価値を失ってしまった。」

夢結「……。」

美鈴「それにおかしいと思わないかい？」

夢結「……おかしいとは？」

美鈴「彼の作り出した原初シリーズ……あれは超越者になった時に暴走が起きてその力が形になった物と言っていただろう……。それなら私にそして君にも同じことが起きてもおかしくないんだ。」

夢結「!!」

そう、おかしいのだ。

超越者とは獣と同じ深度にいながら自我を保ち続ける存在だ。

つまり一回は必ず獣に堕ちかけるはずなのだ。

その時に絶対に暴走が起こる。

今の彼がその状態だ。

暴走した異能が異能者を覆い存在そのものが書き換えられる。

だとすると自分達にも何らかの現象が起きても不思議ではない。

だとすると、

美鈴「彼は一回獣に堕ちている。そこから這い上がって来たんだ。……その時に生まれた獣の力が、」

夢結「あの原初シリーズになった……。」

それなら輪菊の時の現象も納得がいく。

意識はないだろうが本能はあったのだ。

そして彼が作り出したのに使いこなせないものがあるのは彼がその力を……獣を拒絶したのだろう。

美鈴「だとすると可能性がある。もう一度こちらに引っ張って来れ

ばいいんだ。」

夢結「簡単に言いますが本当にできるのですか？」

美鈴「できるか分からない・・・だから可能性と言ったんだ。あまり時間がないから手短かに説明するよ。」

夢結は彼女の言葉を一字一句聞き逃さないように集中する。

美鈴「まず私の能力で彼の存在・・・心に干渉する。普段なら無理だが心が不安定な今なら可能だ。そしてそこに君の心を意識と共に繋げる。そのあとは彼の心の奥・・・深層で彼を探して連れて帰ってくるんだ・・・これは夢結にしかできない。」

夢結「お姉様では出来ないのですか？・・・私なんかよりお姉様の方が向いているはずでは・・・。」

美鈴「・・・絶対に無理だね・・・僕に心を開いていないからね・・・と言うよりも夢結以外にかな？・・・だから唯一彼が心を開いている夢結にしか出来ないんだ。」

夢結「・・・私に出来るのでしょうか？」

夢結は不安そうな顔をしておりそれを見た美鈴が微笑みながら、

美鈴「大丈夫・・・夢結なら出来るさ。彼を支えたいんだろ？多分だけどこれから君が見るものは彼の苦しみの根源に近いものだ。これをどうにかしないと彼はこれから苦しみ続けることになるんだよ。」

夢結の超越者としての始まりは苦しんでいる彼を支えたいからだ。もしかするとこれは好機かもしれないと気づくと、

夢結「やります！」

美鈴「そう言ってくれると思ったよ。」

夢結は漏れ出すオーラが強まる彼を強く抱きしめながら答えた。それ表情は決意に満ちており決して諦めないと言う意思がこもっていた。

すると美鈴は彼の額に置いている手とは逆の手を夢結の額に置いた。

美鈴「彼がどこにいるか分からないし君を辛い思いをすう……だけど絶対に挫けてはダメだよ。そうなったら君も戻って来れなくなる。」

夢結「わかりました。絶対に彼を連れて帰ってきます。」

美鈴が能力を発動させると2人を光が包む。

光が収まると夢結は意識を失い彼に凭れ掛かるように倒れた。

美鈴はすぐに自身の分身を作り出した夢結を支えると大きく息を吐き、

美鈴「頼んだよ夢結……。」

美鈴は彼女の無事を祈りながら2人の心を繋げることに集中した。

一瞬視界が黒くなるがすぐに周りが明るくなった。

夢結「ここは……。」

夢結の目の前に広がっていた光景は、

彼女のそして彼の家がある鎌倉府の町だった。

追憶①

夢結「どうということ?」

彼女の目の前に広がる景色は自分の記憶にある景色と変わらず現実と言われても納得してしまうほどにリアルだった。

彼女は獣に堕ちる時のような暗い世界を予想していたが予想外の光景に動けなくなる。

夢結「・・・何かがおかしい?」

彼女が周囲を見ているとは違和感感じた。  
その違和感の正体を探すと、

夢結「音がない・・・。」

そう風に揺れる木々の音も周りを歩く人の話し声・・・そして足音すら聞こえないのだ。

だが違和感はそれだけではない。

夢結「それに・・・私に気づいていない?」

もう1つの違和感・・・それは、彼女のことを誰も気づいていないことだ。

今彼女は百合ヶ丘の制服を来ておりこの制服は世界的にも知られているため嫌でも注目されるのだ。

この人混みの中なら誰がこちらを見る人が必ず居るはずなのに誰もこちらを見ない。

いいや違う、



見てはいる・・・いるのだが、

ちょうど前を歩いている人が彼女に手を振る。

その人は彼女へと近づき、

そのまま彼女の身体をすり抜けて通り過ぎた。

これは異常だ。

確実に接触したはずなのに触れた感触がないのだ。

その異常に自身の身体を確認すると、

夢結「!?!」

夢結の身体が透けていた。

腕を翳すと腕の向こう側の景色が見える。

まるで自分という存在が薄くなってしまったかのように、

夢結「もしかして・・・。」

彼女は近くの建物の壁へと手を近づける。

彼女の手は壁に触れて止まったがその感触は壁と言うよりも空気の塊に触れている感覚だった。

その次に通りかかった女性の手自身の手を重ねようとする。

その手は触れた感触もなく通り過ぎた。

夢結「やはり・・・実体がないのね。」

今の自分には実体がなく物質には触れることが出来ない、彼女はそう考えた。

夢結「お姉様の言葉からここは彼の心の中・・・つまり彼の心象風景のひとつということ・・・なら、彼の知っている物だけが映し出されるはず・・・なのにどうして彼がいないの?」

美鈴の言葉通りならここは彼の心の中つまり彼の記憶や想像を元に作り出された世界のはずだ。

つまり彼はこの情景を見ている。

でなければここまでリアルな情景にならないはずだ。

想像ならこの位簡単だと考えるだろうがここにいる人は誰一人同じ顔の人がいない。

もしも同じ顔の人又はほとんどが同一の人がいればその可能性も捨てきれないがこの場合はそれは有り得ないだろう。

ならばすぐ近くに彼が居るはずなのだが周りを見渡しても彼の姿が見えない。

彼女が考えながら彼のいる可能性が高い彼の家がある場所へと向かう、

音のない世界の中彼女が進んでいると彼女の横を電車を通った。

彼女が歩く道の隣は線路となっており1度止まり電車の中を見る、電車の音は聞こえないが中の人もやはり現実と変わらない。

このことを考えていても意味がないと考えた彼女がそのまま歩き始めようとすると、

『ガタンゴトン！ガタンゴトン！』

夢結「!?!」

電車の音が聞こえた。

だが彼女の近くには電車はなく先程自身を追い抜かした電車もかなり離れた位置にいた。

確かにこの距離でも聞こえるだろうがそれにしてはハッキリとしすぎている。

夢結「ぎつきは聞こえなかったはず・・・なのにどうして？」

聞こえた時と聞こえなかった時の違いが分からず彼女がまた首を傾げた。

『ブロロロロッ!!』

次は車の走る音が聞こえる。

しかしその肝心の車の姿が見当たらない。

なのにまるですぐ近くにあるかのように音が聞こえる。

その後も彼女は何回も車や電車などの走る音が聞こえるがその音の発信源が見つからない。

だが、彼の家に近づくほどにその頻度が増していくことは分かった。

彼の家の周辺まで着くと、

『ザワザワツ、ザワザワツ。』

周囲の人の会話声なども聞こえ始めた。

だが、その声はまるで遠くから聞いたかのように霞んでおり上手く聞き取れない。

ようやく彼女が彼の家の前に着くと玄関が開きそこから幼い彼女が姿を表した。

いきなりのことに慌てて彼女は姿を隠そうとする。

だが彼女が動こうとするが間に合わず彼と目が合う。

しかし彼の目には彼女は写って居なかったようで彼女の身体をすり抜けて家の敷地外へと歩き出した。

『コツ、コツ、コツ、コツ』

今まで聞こえていなかった足音が聞こえた。

彼女がその音の発信源を探すと、

夢結「・・・私の足元から。」

その音は彼女の足音から聞こえた。

だが彼女は今動いておらず足音が鳴るはずない。

なのに足音は彼女の足元から聞こえる。

夢結「もしかして・・・この音は彼が聴いているもの？」

その足音は彼の歩く動きと連動しており彼女はこれは彼が聴いている音なのではないかと考えた。

それなら今までの謎が納得いく。

彼が近くに居なかったから音が聞こえなかったのだ。

そして電車の音も彼の家に近づいた時に聞こえた。

他にも周りにいない車の駆動音が聞こえたのも彼の家の前を車が通ったのだろう。

この世界は彼の認識でできている。

だからこそ彼の知り得る情報以外はないのだ。

するとひとつの疑問が新たに生まれた。

それなら彼が見ていないはずの場所がなぜあそこまで現実と同じだったのかだ。

この世界は彼の認識でできている。

だからこそ彼の周り・・・つまり彼の聴こえていた音しか聞くことが出来ないのだ。

なのにこの世界は現実と変わらないほどにリアルに見えるのか？

その疑問が彼女の中で駆け回る。

夢結「音や匂いはないのになんで見ることだけはできたのかしら

？」

そう、今まで気が付かなかったが音だけではなく匂いも感じない。そして彼女がいた位置から彼の家までは軽く1km以上あった。つまりこの世界は彼を中心に少なくとも直径2kmはあるのだろう。

夢結「今の私はこの時代の彼と感覚が同調しているはず・・・なのにどうして彼の見ていないはずの場所が見えるの?・・・なんで視覚だけ・・・視覚！」

彼女は自身の呟いた言葉からあるひとつの仮説を立てた。

夢結「もしかして彼の知覚範囲だと言うの!?!この世界の全てが!?!」

彼の能力は視覚を利用した知覚範囲内に干渉する能力だ。

つまり彼の能力には視覚が重要なのだ。

そして彼の異能である紋章眼は異能の中でも知覚型と言う部類になつており知覚型には特性 知覚範囲強化が存在する。

彼から聞いたその効果には物体の透視や視覚範囲の拡大、視力の強化があった。

だから彼は目だけでは見ることが出来ないのだ視覚域や遠く離れた場所、そして壁などで中が見えない場所も見えると云っていた。

つまりこれは彼が見ていた世界なのだ。

目の前にいる彼の容姿からこの彼はおおよそ小5、6だろう。

つまりこの時から彼はこの世界を見ていた。

いつから見ていたかは分からない。

だがこの世界を見るには良さない彼には無理があるはずだ。

情報量が多くなればなるほどそれに見合った思考能力や精神が必要だ。

けれどまだ彼の年齢ではそこまで精神が成長しているとは思えず

思考能力に至っては大人でも無理があるはずだ。  
それなのに彼は平然としている。  
何か無理しているようにも見られない。

異能者なのだから当たり前なのかもしれないが彼女には彼が無理  
をしているのではないか心配でたまらなかつた。  
そう考えているうちに彼がどこかに行ってしまう。  
それに気が付いた彼女はすぐに彼のあとを追いかけて行った。

彼を追って行くとどんどん周りの人少なくなっていく。  
彼が向かっていた場所は森の中だった。  
彼女の記憶の中ではここは危険区域の近くで一般人は普通近づか  
ない場所のはずだ。

森の奥で彼は立ち止まった。

蓮夜『・・・ふう。』

彼は大きく深呼吸をする。

蓮夜『誰もいないな・・・。』  
夢結「!？」

彼の話し方は彼女の記憶にある彼のとは全くの別物になっており  
彼女はこの変わりように固まってしまふ。  
彼は深呼吸を繰り返しそっと目を閉じた。

夢結「・・・何をやる気なの？」

彼女が彼が何をしようとしているか確認しようとする、

夢結「・・・あつ、ガアああアアア!!」  
彼女の目に今までに味わったことの無い激痛が走った。

## 過去②

夢結「ウツ・・・！」

夢結は激しい痛みを感じ膝をついた。

痛みが走る右目は熱を帯びたかのように暑くなり、

彼女にはただ耐えることしか出来ない。

額から汗が滲み出る。

だんだんとその痛みは全身へと広がり息が出来なくなり、ついには自重を支えられなくなり地面に倒れたまま自身の身体を抱きしめながら蹲ることしかできなくなっていた。

そのまま彼女が蹲ること数分、

夢結「ハア・・・ハア・・・」

身体に走っていた痛みが薄れ息出来るようになったため深呼吸を繰り返すようにか息を整える。

震える身体に家を鞭を打ちどうにか立ち上がった時、

蓮夜『やつぱり潰れたか・・・最近無理なところばかりしてたからな・・・』

彼が涼しいような顔でそのような言葉を言い放った。

夢結「・・・何を言っているの？」

彼女には何を言っているかわからず彼の顔を覗きこんだ。

彼の顔はやはり痛みを感じているようには見えず何も無かったかのような表情をしているが右目だけは違った。

その右目は閉じているが、そこからは大量の血液が流れており眼球があるはずの場所が凹んでいた。



蓮夜『とにかく直すか……。』

彼がそうつぶやくと彼の左眼に太陽の模様が浮かび上がる。

そして彼が右目を開くと、

夢結「!？」

彼の右目にはそこにあるはずの眼球が無くなっておりそこには赤黒い空洞だけが広がっていた。

そこに結晶が生えてきてそれは球状に形を帰ると結晶が砕けそこから新しい瞳が現れた。

蓮夜『最近は何れてきて潰れないようになってきたんだが……やっぱり使い過ぎて消耗している時にこの瞳は無理か……するとあっちもダメだな。』

夢結「慣れて……きた？」

彼女にはその言葉が分からなかった。

いいや、分かりたくなかった。

これが彼女の考えているものならば彼は地獄のような苦しみを味わい続けていたということだからだ。

蓮夜『途中で止まったってことは……。』

彼が足元を見たのでそちらを見ると1本の刀があった。

先程まで持っていなかったのが今作り出したのだろうか。

見た時はどこからか取り出したのかと考えたが先程彼が言った「この瞳」と「あっちも」という言葉から彼の持つ瞳の中で負担が大きい『壊始』と『生成』のことを言っているのだろう。

そして何より、

蓮夜『……やっぱり中途半端だな。』

彼が刀を鞘から抜くとそこから今は今にも崩れだしそうな程ボロボロな刀身が覗いていた。

その刀身は時間経過や刀身への負担、整備の不十分などによる傷みではなく元々そこになかったかのようにパズルのピースが欠けているように見えた。

彼はその刀を頭上に投げた。

刀は投げた衝撃だけで鞘や柄の端が崩れだす。

回転する刀は彼の目の前に落下してくる。

刀が彼の目線まで落ちてきたその時に、

彼が右手を横向きに薙ぐ。

掌が刀に当たったその瞬間、

『パリーンッ！』

刀がまるで硝子のような音を立てて崩れた。

蓮夜『作り直しだな。』

彼はまた右目を閉じて集中し始める。

そしてまた目を開くとそこには幾重にも重なった歯車のような模様が浮かび上がった。

その後彼は右腕を前に出すと掌の前に結晶が発生する。

その結晶は増殖し波打つようなに形を変えていく。

結晶が彼の身長程まで大きくなり変形が止まった。

その結晶を彼が掴むと結晶が飛び散りその中から1本の刀が姿を現した。

その刀は先程のものに似ているが鞘の長さが先程よりも長くなっており先程の刀は1mぐらいだったのに対して新しく作りだした刀は1.5mぐらいの長さにまで伸びていた。

鏢がないその刀は全てが黒く光沢があり太陽光を反射して鈍く光っていた。

彼が刀を両手で持つと鞘から刀身を抜き出すと、

そこから鈍い銀色の刀身が現れた。  
彼はその出来に納得したように頷き。

蓮夜『・・・まあ、80点くらいかな?・・・これなら大丈夫か。』  
そのまま彼は素振りを開始した。  
その素振りはやはり子供が遊びのようなものでなく剣道の上級者  
のような鋭さのあるものだった。

夢結「・・・。」

その光景に彼女はまた固まってしまった。  
彼は自分のように学園などで訓練を受けている訳では無いなのに  
その動きは自身が同じ年齢だった時よりも洗礼とされているように  
感じた。

これも異能の恩恵なのか?

そう考えていると彼が素振りをやめる。  
すると彼は1回刀を鞘に戻し身体を前に倒す要領で体勢を低くし  
て、  
一気に前へと駆け出す。

その先には大きめの樹木がそびえ立っておりあと数瞬でぶつかり  
そうになる。

夢結「危ない!?!」

夢結が慌てて手を伸ばそうとすると、  
彼は後転飛びの要領で飛び上がるとそのまま前の木に足を付けて  
そのまま壁を蹴るように走り出した。

数歩上へと走ると他の木へと飛び移りまた別の木へと飛び移る。  
それを繰り返ししながら彼は近くにある枝を切り飛ばす。  
切り飛ばされた枝が中を舞う。

重力に従って落ちるはずの枝が、その法則を無視するかのよう  
に枝が浮かび上がり彼と同じくらいの高度で動きを止めた。

その枝を足場にしながら彼は離れた木へと移動しそのまま木に  
刀を突き立てて身体を固定すると枝が彼の周りに集まり始めた。

その不規則に動き続ける枝を飛び移り続ける彼の動きは予測し  
ずらく彼女が目で追うことがやつとだった。

しばらく続けると彼が地面へと降りてくる。

彼が右手を横に出すと木に刺さった刀が彼に向かって飛んで行  
き彼の右手に収まった。

刀を鞘に戻すと枝がまるで糸の切れたあやつり人形のように彼の  
周りに落ちる。

それを確認すると彼は脱力しながら目を閉じた。

すると切った枝がまた浮き上がりまるで元々切られていなかった  
かのように元通りに戻った。

蓮夜『……ふう、身体に不調はないな。』

すると彼は木にもたれかかるように座ると彼は再び目を閉じた。

数秒後目を開きすると先程刀を作りだした時と同じ模様が左眼に  
本のような模様が右眼に浮かび上がる。

その後彼が両手を前に出すと掌の間で結晶が生成される。

その結晶は掌よりも少し大きいサイズまで膨張をしその姿を変え  
た。

すると彼の掌には硝子のような結晶質のマガジンがあった。

そのマガジンは大きさや形状からハンドガンのものだろう。

それを地面に置くと再び両手を前に出しすると次は6つの結晶が  
生成される。

その結晶は先程のマガジンと比べて小さく指と変わらない大きさ  
のものだった。

その結晶が砕けると中から銃弾が出てきた。

彼はそれをマガジンに詰める。

その後も彼はこの作業を繰り返し続けた。

マガジンの数が20を超えた辺りで彼が立ち上がるとその左手には一丁の拳銃が握られておりその拳銃に先程作ったマガジンをひとつ装填した。

彼は前方にある木へと銃の照準を合わせて引き金を引き絞った。

すると銃口から軽い音と共に銃弾が飛び出した。

それは木を貫通しその後ろの木にめり込んだ。

そのことを気にせずマガジンが空になるまで打ち続けた彼はからのマガジンを取り出した投げ捨てる。

マガジンが地面に当たると砕け散りその破片すら消えてしまった。

それを確認した彼は他のマガジンと拳銃、刀をどこかに消して森の入口へと足を向けた。

上空を見ると空が赤らんでおりもう夕方なのだろう。

その後彼は家へと一直線に帰って行った。

夢結「……ずっとあのようなことを続けていたのかしら。」

彼女は彼の家の近くで壁に背を預けて考え込んでいた。

あの時の痛みを思い出すと震えが止まらなくなり今は痛くないはずの右目が痛くなったかのように感じた。

あの時美鈴と話している時に彼が言っていた「慣れた」とはこれのことを指していたのだろうか？

そう考えると彼のことを抱きしめたくなくなる。

このような辛いことを続けていたのかと怒りたくなる。

そしてその事に気が付かなかった自分自身に怒りが湧いた。

そして自分に話してくれなかったことが悲しかった。

夢結「なんで無理をするの……。」

その思いだけが頭の中を支配し彼女は泣きそうになってしまおうが、

夢結「泣くのはあとよ……とにかく彼を見つけないと。」

そう目の前にいるのは彼ではないのだ。

厳密に言うとな過去の彼であって彼女が探している現在の彼ではない。

それは直感的に分かった。

昔からだ彼が近くににいる時なら彼がどこにいるかなんともなくだ  
がわかるのだ。

何の彼を見てもその感覚がないためこれはただの映像のようなの  
だと分かった。

夢結「どうすれば彼を見られるかしら。」

彼女が考えていると、

『ガラガラ！』

彼女の上から窓の開く音が聞こえた。

音の方を確認するとそこには彼がおり窓から飛び出し隣の家の屋  
根へと飛び移る。

そのまま家の屋根伝いに彼が移動を開始した。

今の深夜であり道に人通りはなく静まり返っている中彼の小さな  
足音だけが響く。

急いで彼を追うと着いた先は先程までいた森の前で彼はそのまま  
奥へと入っていく。

それを見た彼女は再び森へと足を踏み入れた。

### 過去③

暗い森の中を進む。

普通なら生い茂る木々によって月の光が遮られており何も見えな  
いはずなのだがまるで昼間のように辺りがハッキリと見えた。

その中を彼は走り抜ける。

「夢結「こんな夜遅くに・・・どこへ向かっているのかしら？」」

彼女は後を追いながらそう考える。

このような夜遅くにどこへ行こうと言うのか？

まさか昼間のアレをまた行おうとしているのか？

しばらく走り続けると彼が足を止めた。

すると何かを探すかのように周りを見渡し始めた。

すると彼は視線をとある方向に向けて目を細める。

蓮夜『今日はあっちだな。』

夢結「・・・今日は？」

何かを確認し終わった彼の姿が霞んだ。

まるで霧状の何かに包まれたかのように彼の姿が捉えられなくな  
る。

その霧はすぐに晴れたが中から出てきた彼の服装が変わっていた。

先程まで寝間着を来ていたが今は黒を基調とした戦闘服を来てい  
た。

それはまるで軍隊が着ているようなものだったが一般のものとは  
違い関節部や背中に大量の機械群が装着されており脛脛や肩部、腰部  
に大型の推進器のようなものが取り付けられていた。

次に彼が両手を前に出すと空間が一瞬歪み彼の手に2丁の突撃銃  
が握られていた。

彼はそれを背中に向けると背中についてる機会からアームが伸び

てきて2丁とも保持し収納する。

その後拳銃を太腿に、散弾銃を背中に昼間作っていた刀を三本纏めて保持するホルダーを両腰後ろに1つずつ装着した。

最後に折り畳め式の大型狙撃銃を腰上にそして彼の身丈ほどの太刀を左越しに付けると軽く飛び跳ねなどし始めた。

蓮夜『・・・装備に以上なし。・・・行くか。』

そういうと彼は先程向いていた方向へと駆け出した。

夢結「・・・確かこの先は。」

彼女の記憶が正しければこの先は危険区域のはずだ。

最近ではケーブルの出現回数も減っているが少し前まではかなりの頻度で出現していたはずだ。

確か2〜3年前はここにケーブルが発生することが分かっておらずヒュージが市街に出現してしまい人的被害が出る寸前にまでなったことが記憶に新しい。

何しろ・・・。

その時危険区域の方向から大きな音が聞こえた。

夢結「まさかこの頃からヒュージが・・・!」

そう現在彼女が見ているのは役6〜7年前だ。

その頃はケーブルが発生していたか分からないがもしそうなら、

森を抜けて視界が開ける。

そこは無人の街になっておりそこに存在する建物のほとんどが瓦礫と化していた。

その瓦礫の一部が盛り上がり始めた。

彼が突撃銃を取り出したその時、



瓦礫の中から十数体のヒュージが飛び出してくる。  
そのほとんどはスモール級だが中に数体がラージ級の個体だった。

ヒュージを目視すると彼はすぐに射撃を開始する。

放たれた弾丸は一直線に飛んでいきヒュージへと襲いかかった。

その弾丸は1発1発では大したダメージを与えられないがスモール級個体の身体を削っていく。

だがラージ級には傷一つ与えられていなかった。

彼は射撃を続けながらヒュージへと向かって突撃する。

ヒュージに近づくにつれてヒュージの被弾数がまし削る勢いが増していった。

ヒュージとの距離が無くなる寸前彼の背中のアームが動いた。

脇を通す形で散弾銃が彼の手元に送られる。

それを確認すると突撃銃を上に向けて散弾銃を掴んだ。

投げられた突撃銃はまるで糸で引かれたかのように彼の背中に着いているラックに収納される。

彼は散弾銃を手にするですぐさま前方のヒュージに向けて撃ち込む。

それにより2体のスモール級が砕け活動を停止した。

彼は沈黙したヒュージを見ずにすぐに後ろへと引いた。

彼が先程まで立っていた場所には無数の針のようなものが刺さっている。

その針はスモール級の触腕と繋がっており彼が好きを見せると考えて打ち込んだかと思うほどのタイミングで打ち込まれたそれはコンクリートでできた地面を貫いていた。

もしこのようなものが当たっていたら一溜りもなかっただろう。

夢結「ヒュージが考えて戦っている？」

このヒュージ達は思考ができるのか？

彼女はそう考える。

夢結「それはないわね。この頃はまだお姉様は……。」

だがその答えは否、

そのような行動をするヒュージは確かにいたがそれは美鈴が使ったダインスレイフがヒュージに干渉することで始まったことだ。

この世界は自身が11〜12歳頃つまり甲州撤退戦の最低でも4年前のはずなのだ。

だからこそ思考することは有り得ないと断言できた。

彼女が思考していると彼が動き出した。

その右手には太刀が左手には拳銃が握られており散弾銃は背中に戻っている。

彼はそのままヒュージの群れに突っ込みスモール級に太刀で斬り掛かる。

太刀による一撃でスモール級一体の胴体を両断する。

次に左から襲いかかるヒュージの攻撃を身体を後ろに逸らすことで躲しそちらを見ずに拳銃を発砲、その弾丸はヒュージの脚部に辺り体勢を崩した。

そのヒュージを回し蹴りで吹き飛ばす。

次に後ろからラージ級が飛び掛って来たのでそれを身体を捻りその反動で右に逸れることで躲す。

その時にヒュージが通るであろう場所に弾丸を置くように撃ち込むとまるで吸い込まれるようにヒュージの胴体に命中し突撃銃では傷一つ付かなかつた装甲にヒビが入った。

そこに間髪入れずに太刀を突き入れるとそのヒビが広がりそのまま装甲が砕けた。

そこに追撃を加えようとするが横からスモール級が襲いかかってきたため後ろへと下がる。

その後はヒット&アウェイを続け着実に相手の頭数を減らし始めた。

スモール級の数が残り一体になった時ラージ級三体が一斉に彼へ

と襲いかかる。

それを太刀でいなしながら交代するが後ろの瓦礫からスモール級が数体這い上がってきて挟み撃ちに会ってしまった。

それを好機と感じたのかヒュージたちの勢いが増す。

彼は脇にある瓦礫に目を向けると瓦礫の一部が宙に舞いそれを足場にする事で上空に逃げた。

ヒュージはそれを追って瓦礫を登り始める。

ヒュージが彼の足元まで迫ってきたタイミングで彼は瓦礫から飛び降りて腰に吊るした刀を6本とも上空へとばら蒔いた。

そんな彼を追ってヒュージも飛び出すと、

先程ばら蒔いた刀がかなりの速度で降り注ぎヒュージ達を貫いた。

それによりスモール級三体と先程装甲を砕いたラージ級一体が活動を停止し地面に縫い付けられた。

彼が空中で体勢を整え着地するとヒュージを縫い付けていた刀が再び宙に舞いその切っ先を残りのヒュージへと向ける。

彼は太刀を収めて拳銃を持ち2丁とも別のヒュージへと向けて弾丸を撃ち込む。

それによりラージ級の片方とスモール級にヒビが入るがそのようなことにしないと気になしと言わんばかりに彼に襲いかかった。

だがそのヒュージは後ろから飛んできた刀に貫かれて先程のヒュージと同じ運命を辿ることとなる。

ついに残り一体となったヒュージに彼は畳み掛ける。

拳銃と宙を舞う刀によって着実に削られたヒュージは脚部が砕けてしまい動けなくなった。

彼はすぐに太刀へと持ち替えて相手に急接近する。

夢結「良かった・・・怪我もなさそうね。」

その光景を見て彼女はホツとしていた。

彼女は彼が戦い初めてから気が気でなかっただろう。

今も心臓の鼓動が激しいため煩くてたまらない。

今彼が自身のそばに居るのだから無事だったのは当たり前なのだがやはり見ていると彼が大怪我を追ってしまうのではないかもしれないかもしかしたら・・・と考えてしまう。

だが結果は彼は無傷でヒュージを圧倒するという結果だった。

それと同時に彼女は彼との差を強く認識してしまう。

今の自分ならあれくらいのヒュージなら楽に殲滅できるだろう。

だが彼と同じ歳で、つまり初等部時代にできただろうか？

無理だ。

確かに初等部で自身は上位に入っていた。

だがそれは初等部での話しだ。

初等部では訓練はするが実戦は絶対に有り得ない。

もしもこの頃の自身が実戦に出たら恐怖で何も出来ずに座り込みそのまま・・・。

このように自身が温室で危険のない訓練をしていたのに対して彼は命懸けでの実戦だ。

先程の戦い方は初めてでは無いはずだ。

つまり彼は死と隣り合わせの場所で戦い続けているのだ。

だからこそ差ができてしまう。

彼女が彼との差を感じていると、

『ドガーーン!!』

彼のいる方向から轟音が鳴り響くと共に体全体に激痛を感じた。

彼女は痛みに耐えながら振り向くとそこには、

瓦礫に埋もれた彼とそれを見下ろす巨大な影、

ギガント級ヒュージが立っていた。

## 過去④

夢結「蓮夜!？」

彼の元へ駆け寄って確認する。

幸に大きな怪我はなかった。

その事にホツとするのと同時に先程の自身の行動を悔やむ。

なぜ、戦場で考えにふけていたのか？

「戦場では最後まで気を抜いては行けない。」

これが鉄則だ。

なのに彼女は考え込んでしまった。

例え彼に知らせることが出来なくてもこの場で周囲の警戒を怠ったことは鈍っている証拠だ。

ここにいるのは彼を助けるためなのだど気合いを入れ治している  
と、

蓮夜『可能性として考えてはいたが、ついてないな・・・よりもよって大型・・・確かギガント級だったか・・・初めて見るがデカイな。』

彼を見下ろすヒュージの全長は20m程ありその体には分厚い装甲を纏っていた。

見た目は中世に存在した騎士甲冑をより禍々しくしたような形状で無数の棘が全身から伸びておりそれらに当たっただけで重症を負ってしまうだろう。

そして最大の特徴は両腕で、その腕はヒュージの胴よりも二回りほど大きく右手には指が無く巨大な剣状になっており左腕には指はあるが右腕の剣と変わらない長さの鉤爪になっていた。

蓮夜『あの右腕に当たるのだけは絶対に避けないといけないか・・・他にも隠し玉の一つや二つありそうだが・・・幸に人型だからどうに

かなりそうだな。』

彼はそうつぶやくと一気にヒュージへと駆け出した。

ヒュージが左腕を叩きつけるように振り下ろす。

それを指の間に入り込む形で避けた彼はそのままヒュージの左腕に飛び乗りそのまま肩口に向かって駆け登る。

ヒュージはそれを阻止しようと振り落とそうとするが彼は彼は刀を再びばら蒔くとそれを足場にするこゝとでヒュージの視覚を利用して上へと登る。

彼は肩口に到着すると肩関節に向かって太刀を振り下ろす。

だが太刀は関節部を覆う装甲に阻まれてしまい弾かれてしまう。

効かないとわかると彼はすぐに移動を開始し次は背中を駆け下りだした。

ほぼ落下と言ってもいいその速度は凄まじく地面へと急接近する。

ヒュージの腰部を通り過ぎ膝関節の辺りまで下った時身体を捻るように身体を回しその勢いを乗せて斬り付ける。

膝を通り過ぎると姿勢を整えて着地する。

その時に転がることで落下の衝撃を軽減し転がった勢いで体勢を低くしたままヒュージから距離を取った。

蓮夜『肩はダメだったが膝は大丈夫そうだな・・・だとすると肘も行けるか・・・とにかく膝狙って動きを制限してみるか!』

彼はまたヒュージへと接近する。

だがその速度は先程の半分ほどですぐにヒュージに補足されてしまう。

ヒュージはまた左腕を叩きつけるように振り下ろしてくる。

ヒュージが自身の腕で彼を目視できなくなったその瞬間、一気に加速し腕の攻撃範囲から逃れ一気にヒュージへと近づいた。ヒュージの股下を通り背後まで移動すると刀を足場に先程攻撃した左膝関節

まで駆け上がり横薙ぎに太刀を振るう。

それにより青い液体がヒュージから吹き出す。

その傷口にいつも間にか持っていた大ぶりのナイフのようなものを指の間に挟むように持ちそれを投擲する。

飛んで行った4本のナイフはヒュージの傷口に入り込み見えなくなる。彼はその場を離れた。

彼が離れた瞬間ヒュージの左膝が爆発する。その爆発は内部で発生していた。

その衝撃でヒュージの体が硬直した。そこに彼は刀を足場にして跳躍することで戻り再び左膝へと太刀を振るう。

するとヒュージの左膝が切断された。

それによりヒュージはその巨体を支えることが出来ずバランスを崩し倒れる。そこに畳み掛けるように右膝に攻撃を加える。

右手で太刀を振るい左手で持った散弾銃で傷を抉り散弾銃の反動でまた太刀を振るう。

それをしばらく繰り返すとヒュージが起き上がるが右足だけだったっている状態になっておりその右膝もボロボロになっていた。

ヒュージは不安定な体制で右腕で薙ぎ払った。

それを彼は大きく後退することで躲し即座に地面を蹴り急接近する。

そこを狙っていたのかヒュージがさらに左腕も振るうがそれを刀を足場に飛び上がることで躲す。刀の内の3本は砕けてしまいが残り3本をヒュージの頭部に向けて放つとヒュージは右腕でそれを振り払った。

それによってできた死角に彼が滑り込みそのままヒュージの右膝を狙い太刀を横薙ぎに振るう。

それによりヒュージの右膝も切断され再びヒュージが仰向けに倒れた。

彼はすぐにヒュージの首へと駆け出しそのまま太刀を振ろうとした時、

ヒュージの背部から触手のようなものが飛び出し彼に襲いかかっ

た。

その触手の先端は返しが付いた銚子のようなになっており刺さったら最後そのまま捕らえられてしまうだろう。

それを彼はヒュージの頭部に向けて飛び出し頭部を壁にして身を隠した。

彼は触手が襲ってこないことを確認すると左手に数本のペン状の金属の筒を取り出しそれをヒュージの背部に向かって投げた。

それが背中にあたると爆発を起こし触手の大半を薙ぎ払う。

爆発で起きた煙を煙幕にして再び首へと接近し1度止まり首筋を確認する。

その後太刀を振り下ろすと首筋の装甲は抵抗もなく断ち切れた。

それによりヒュージの首は半分ほど切断されるがヒュージの動きは止まらない。

彼がもう一度太刀を振り下ろそうとするがヒュージが寝返りを打つように転がったため巻き込まれないように跳躍する。

そこにヒュージの左腕が迫るが彼の太刀で薙ぎ払うとその左腕の手首から先を切り飛ばした。

彼は身体を捻り体勢を整えると太刀を上段に構えて落下の勢いを乗せて首筋に太刀を振り下ろした。

首に太刀が当たるその瞬間、

手首から先がない左腕に殴られて上空へと打ち上げられその衝撃で太刀を手放してしまう。

彼が体勢を整え下を向くと足がないため倒れているヒュージが立ち上がっていた。無いはずの両足が再生しており立ち上がりながらこちらを狙って右腕を突き出している。

足場のできるものもなく空中にいるため躲すことができない。

ヒュージの右腕が彼に当たる寸前、

夢結「蓮夜!!」

夢結は彼を庇おうと飛び出していた。



だが現実は無情であり彼女の身体は彼をすり抜けて通り過ぎた。その直後彼の胴体に剣が突き刺さる。

夢結「!!」

彼女は腹部を襲う激痛により叫ぶこともできなくなるが痛みを堪えて彼のことを確認しようと顔を上に向けようとした時、

彼の足が彼女の前を通った。

その足は太腿から上が無く繋がっていたはずの場所からは赤い液体が吹き出していた。

夢結「嘘・・・よね？」

彼女が放心してしまう。

もしも考えていることが現実になってしまったらと、それが怖く上を向きたくないという気持ちを抑え恐る恐る上を向くと、

胸から下が無い彼の上半身があつた。

まるで抉られたような傷があり先程のヒューズの右腕に貫かれたのだろう。

夢結「あつ・・・ああ・・・」

彼女の瞳から涙がこぼれ落ちる。

今も襲っているはずの痛みも忘れて彼を見る。

死んではいけないのだろうが彼があんなにも傷ついている。

守りたいと思っても守れない。

あまりにも無力な自身を呪う。

夢結「・・・ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい。」

何に對して誤っているかも知れないが彼女はその言葉を口にし  
てしまう。

彼女は両手で顔を覆い震え出す。  
彼女の髪色が薄くなり始める。  
その髪色が真つ白に染まる直前、

『ビキビキビギ!!パキーン!!』

上空から結晶が割れる音が聞こえた。  
彼女は慌てて上を向くと、

未だに胸から下が無い彼が両手に結晶でできた全長10m程の大  
太刀を構えていた。

蓮夜『ああああアアアアアアアアアアアアアアアア』

それを力任せに横薙ぎに振るう。  
それはヒュージの首筋に命中しそのままヒュージの首を切断した。  
それによりヒュージの巨体は再び倒れたしばらくは痙攣していた  
がすぐにその動かなくなりそのまま完全に沈黙した。

彼は地面に強く打ち付けられるように着地する。

その衝撃で左腕は砕け変な方向に曲がるが息はあった。

その直後『パリーン』という音と共に大太刀は砕け散り彼の身体を  
結晶が覆う。

その光景を見た彼女は再生が始まったことを察し胸を撫で下ろす。  
白くなった髪は黒く戻り思考がクリアになった。  
そして彼の元へと駆け寄ろうとした時、

夢結「!?!?」

身体を激痛が襲ったその痛みは全身を駆け巡り身体が熱くなったように感じる。

その中でも腹部と左目の痛みが強くその場に崩れ落ちるが、

夢結『・・・!!』

呼吸もまともに出来ず身体が痺れるがどうか這いずるように彼の元へと近づく。

彼の元にたどり着くと彼を覆っている結晶が割れて中から傷一つない彼が出てきた。

それを一目見ると彼女は安心したような表情になり、

そのまま視界を暗転させた。

## 過去⑤

『ザッ・・・ザッ・・・ザッ・・・』

耳元で何かが歩く音が聞こえる。

その足音は重々しくまるで疲れ切っているかのようだ。

夢結「私は・・・」。

彼女が起き上がり目を開けると、

蓮夜『気を失ってたか・・・まじでギガント級とかふざけんな。』

彼が背伸びをしながら悪態をついていた。

彼は肩を回すなどして身体をほぐしながら腕時計へと目を向ける。

蓮夜『結構明るいけど今何時だ?・・・』

空が明るくなってきたため朝なのだろうと彼女が考えていると、

時間を確認する彼が固まりながら冷や汗を流し出した。

その後すぐに彼が走り出したため彼女も慌てて追い掛ける。

蓮夜『あと30分で帰らないとバレるじゃねえか!』

彼はそう叫びながら戦闘中に身につけていた装備をしまい始める。

彼はその間も足を止めずに森の中を駆け抜けた。

バレるとは彼の両親のことだろう。

このようなことをしていることは親にも話していないはずだ。

もしも理由はバレなかったとしても小学生が夜遅くに外に出ていると知られれば監視をされてしまう。

そうならば彼は昨夜のようなことが出来ないと考えているのか彼

の顔からは焦りが滲み出ていた。

しばらく走ると森を抜けて街に着いた。

すると彼は近くにある民家の屋根へと飛び乗りそのまま行きのように屋根ずたいに家へと向かう。

蓮夜『あと15分!』

彼が再度時間を確認すると残り時間は半分になっておりこのままでは間に合わないのか彼の速度が増した。

彼女としてはこのまま見つかってあの場所に行けなくなつて貰いたいところだがあいにく彼女には彼を足止めする術がないため何も言わずに彼の後を追った。

それから10分程経つた頃彼は自身の家へと辿り着いた。

蓮夜『間に合った……』

そのまま彼は窓から自室へと入っていき窓を閉める。

夢結「……」

それを彼女は確認すると彼女は彼の家の壁に背を預けて考え始めた。

夢結「……どうしてこのようなことをしているのかしら?」

1番初めに思い浮かんだことはそれだ。

昨夜の戦いで彼の動き……あれは確実にやり慣れている人の動きだ。

つまり彼はいつからしているか分からないがかなりの期間同じことを繰り返してきたのだろう。

夢結「どうしてあなたは平気なの？」

彼の言葉からギガント級クラスは初めてだったのだろうがあの時の彼の行動・・・肉を断たせて骨を断つという言葉すら生ぬるい本当の意味での自傷覚悟の突撃・・・なのようなこと同じような状況に幾度会った人でもそうそう考えつかないはずだ。

再生能力があるからかもしれないがそれでも痛みや恐怖があるはずだ。

現在の彼女は先程まで見ていた彼・・・「過去の蓮夜」と感覚を共有している。

いいや・・・この場合は追体験と言った方が正しいか・・・つまり彼女が感じている感覚は彼がこの瞬間に感じたものだ。

昨日の昼に感じた痛み・・・あれは彼が能力を使用したことで彼の眼球が耐えられず破裂したことで起こったものだ。

あの時の痛みを思い出し彼女の身体が強ばる。

全身を貫くあの痛み戦場で傷つくことが多く痛み慣れている彼女が蹲りただ耐えることしか出来なかったアレを彼は涼しそうな顔でいたのだ。

痛み慣れているなんて簡単なことではない。

彼の場合はまるで痛覚が無いと言われた方がしっくりくるのだ。まるで痛みを感じていない。

そう考えるがそれをすぐに否定する。

彼女が意識を失う寸前に見た彼・・・その顔は苦痛に満ちていた。彼は痛覚が無い訳では無い・・・ただ耐えているのだ。

ここまで来るまでどれほどの苦痛を体験したのか・・・考えるだけ彼女の身体から熱が奪われたかのような感覚に襲われる。

耐えられるわけが無い。

こんなことが続けば気が狂ってしまう。

そのようなことを彼は続けていたのだ。

頼って欲しかった。

そんなこと無理だと分かっているが彼女の中でその気持ちで湧き上がる。

この頃の自分では足でまといにしかならない。

だが相談くらいはして欲しかった。

そこまで信じてくれていなかったのか？

頭の中でその考えが生まれるがそれは違うと直感的に感じた。

自分のことだもしもこのような話を聞いてしまえば勝手について行ってしまうだろう。

そうなった場合は彼女を守ろうとするだろう。

だが絶対に守りきれぬ保証がない。

だからこそ隠しているのだ。

大切な人達を守るために、

いつもそうだ彼は自身よりも大切な人を優先する。

自身が傷つくことも厭わずに……。

だから彼女は彼を支えようと決めたのだ。

傷つき続ける彼を……

夢結「……ふふっ……私いつから泣き虫になったのかしら？」

彼女の瞳からは涙が流れていた。

彼が傷つき続けることが悲しいのか？

それとも彼が何も話してくれないことか？

それとも彼の心の傷に気づいて上げられず彼が居なくなろうとしているからだろうか？

その答えは彼女には分からない。

ただ分かることは彼がどこか遠く……自分が行くことの出来ない場所に行ってしまうような不安感のみだ。

近くへは行けるだろうが決して隣へは行けない。

そのような場所に行ってしまう。

そう考えると胸が締め付けられるように痛む。

彼女は異能の力を手に入れた時表に出ていないが内心では喜んで

いた。

彼と同じ場所に立てると、

元々彼は自分とは違う場所にいるように感じていたのだ。

彼と自分が違うのは当たり前だ。

けれど彼女には彼が自身と同じ・・・まるで双子のように感じるころがあったのだ。

なのに何かが違う。

ほとんどが同じだが決定的に違う何かが、

それが何なのかは分からなかった彼女は異能を知った時に彼との違いは異能の有無だと思った。

そして彼女は異能を手に入れ彼と同じ場所・・・超越者の場所に立つことができた喜びを感じていたのだ。

彼女はそうだとしても彼は違うのだ。

彼はこの力に苦しみ続けられている。

だと言うのに彼女は苦しんでいる彼に気づかず彼を傷つけていたのだ。

そんな自分に怒りを感じるが今は怒りよりも悲しみの方が強い。

彼をここまで追い詰めたのは自分だと彼女は考える。

彼はいつも自分を氣遣っていた。

自分はそれに甘えていたのだ。

夢結「それなのに私は・・・」

思い返せば彼は彼女に対し弱った姿を見せたことがない。

だから大丈夫だと無意識に考えてしまっていたのだろう。

だから気づかなかったのだ。

思い返せば彼は自分と会わないようにしていた節がある。

これは彼女に自分の弱った姿を見せないようにするためだったのかと思ってしまう。

あの頃の彼女は誰かに気を使う余裕がなかった。

それは彼も同じだったはずだ。



なのに彼は彼女を心配させない為に自身を偽り続けていた。  
その無理をしすぎた代償が今の彼なのだ。

支えると言いながら苦しめているこの矛盾、

それに気づかずに行動することで生まれる悪循環、

これを解消しなければ決して彼を救うことが出来ない。

だからこそ考える。

どうすれば彼を救うことが出来るかと？

今の自分ではダメだ。

ただ助けるだけでは彼を救うことは出来ない、

ただ癒すだけでは壊れきった彼の心は治せない、

ただ隣に居るだけでは彼と共にいる事が出来ない、

何が足りないのか分からない。

けれど、

夢結「……もう少し待っていて……絶対に迎えに行くから。」

彼女は諦めない。

それが彼女の始まりだからだ。本当の意思

『彼を支えよう』これが彼女が普通人を捨てて異端超越者になった彼女の覚悟核心であり彼女を人へと繋ぎ止める誓い楔でもあるのだ。

だからこそ折れることはない。

それが彼女の願存在意義いだから。

その時、彼は家の扉が開いた。

そこから彼の両親が外に出てくる。

これから仕事に行くのだろう。

それを見た彼女はすぐさまその身体を扉に滑り込ませる。

今までドアに触れることが出来ず家の中には入ることが出来なかった彼女は彼のことを知るために彼のことを傍で見ることが一番だと考えたのだ。

夢結「・・・お邪魔します。」

扉の中には彼女もよく知る彼の家であり奥の方から光が漏れていた。

彼女の記憶が正しければあの部屋はキッチンだったはずだ。

中を覗くと彼がオーブンの前に立っておりその中を眺めていた。

蓮夜『あと少しで焼き上がるな・・・。』

彼の言葉から彼は今趣味であるお菓子作りをしているのだろう。

しばらく眺めているとオーブンが止まる。

すると彼はオーブンを開けて中身を取り出した。

トレイの上にはクッキーが乗っておりその香ばしく甘い香りが部屋全体に広がった。

蓮夜『うん、上出来だ。』

彼はクッキーの粗熱を取ると大きめの皿に盛り付けてそれをテーブルに置くと壁にかけてある時計で時間を確認した。

蓮夜『あと1時間くらいかな?』

そう言うとな彼はどこからか本を取り出しそれを読み始める。

その本は世界の天使や悪魔のことが載っているものでありそれを興味深げに読んでいた。

蓮夜『こういう能力も・・・だけどそうすると・・・。』

何やら呟きながら彼が本を読み老けていると、

『ピンポーンー』

玄関の方からチャイムの音が聞こえた。

蓮夜『おっと、来たか。』

すると彼は立ち上がり玄関へと向かった。

そして彼が玄関の扉を開けると、

蓮夜『いらっしやい！ゆゆ！』

そこには幼い時の彼女・・・白井 夢結がおり彼に笑顔を向けて、

ゆゆ『久しぶりね！れんや！』

彼女は彼の家の中へと入った。

## 過去⑥

蓮夜『うん！久しぶりだね！』

ゆゆ『うん、春休み以来かしら？』

蓮夜『そうだよ！』

今まで大人のようだった彼の口調は年相応に戻っていた。そして彼女が玄関をくぐると2人はリビングへと向かう。リビングにあるソファアームに彼女が腰掛けると、

蓮夜『ちよつと待っててね！』

彼はリビングから飛び出していく。

しばらくすると彼がトレイを持って戻ってきた。

そのトレイには先程作っていたクッキーと電気ケトル、そしてティーポットとティーカップが乗っていた。

それをテーブルに置くと近くにあるコンセントにケトルのプラグを差し込みお湯を沸かし始める。

お湯はすぐに沸いた。

そのお湯をポットに入れてしばらくすると紅茶のいい香りが部屋全体に立ち込める。

蓮夜『ゆゆ、何か楽しいことあった？』

ゆゆ『変わらないよ？れんやは？』

蓮夜『僕も何も無いよ？』

そこから2人のたわいのない会話が始まった。2人はお互いの学校などの出来事を話し合う。

夢結「こう見ると昨日のことが嘘みたいね。」

その光景を見て彼女は微笑んでいた。  
その光景に懐かしさを感じる。

夢結 「昔はよく2人でこのような会話をしていたわね。」

少し子供っぽく無いかもしれないがこれが2人の当たり前だったのだ。

彼女が学院の休みになると彼を家へと行きお互いの思い出を語り合う。

その話に面白いものがなくても2人にはどうでもよかったのだ。  
ただ2人で話しているだけでよかった。

お互いに何かと人から距離を置く性格をしていたため友達と言える人が少ない2人はこうしてただ気の許せる相手と話しが出来るだけで嬉しかったのだ。

夢結 「もうしばらくしてないわね・・・。」

彼女の表情に影が落ちる。

最後にこのような会話をしたのは2年以上前だ。

それからは彼女は一方的に彼を拒絶していたため電話で彼と話すことはあつたがそれはただの生存確認のようなものになっていた。

彼がこの話を持ちかけようとした時いつも彼女が電話を切つてしまっていたから・・・。

多分彼はこの日常が心の拠り所だったのだろう。

あの地獄のような環境で戦い傷つき続ける彼にとってこの日常こそが全てだったのだ。

もしかしたら彼が学院に入った理由はこの日常を取り戻したかったからかもしれない。

確かに彼は彼女を守りたいと言う意思で学院に来たのだろうがそれだけならば誰にも見つからないように影から見守れば良かったのだ。

そうすれば彼はここまで追い詰められることはなかったはずなのだから。

なのに彼は彼女の傍へとやってきた。

彼はきつと誰かとの関わりに飢えているのだ。

けれど彼は本当に気を許した人とししか関わる方法を知らない。だから彼は回りくどい真似をして学院に入ったのだろう。

でなければ彼が一般のリリイに見つかることなんてないはずだから。

彼女が思い吹けていると彼がポットを手に取り中に入っている紅茶をカップに注ぎゆゆへと渡した。

蓮夜『どうぞ。』

ゆゆ『ありがとう。』

2人は一旦会話をやめて一息つける。  
紅茶を飲んでいると彼が顔を顰めた。

ゆゆ『れんや・・・あなたは紅茶苦手でしょう？どうして飲んでるの？』

蓮夜『・・・ゆゆが飲めるのに僕が飲めないのが悔しいから・・・。』

ゆゆ『ふふつ、変なところに意地を張って・・・子供っぽいわよ？』

蓮夜『まだ子供なんだからいいんだよ・・・。』

彼はいじける様に顔を逸らす。

夢結「こういうところはまだ子供みたいね。」

まだ彼に子供みたいな感情がある事に彼女は喜ぶ。

もしかしたら自分が見ていた彼は作り物なのではと考えてしまっただが今の彼を見るとその考えは吹き飛んだ。

蓮夜『そう言うゆゆはコーヒー飲めないでしょう？』  
ゆゆ『・・・苦いのは・・・苦手なの・・・。』

彼の言葉にゆゆも頬を膨らめせて顔を逸らした。  
それを見た彼はくすりと笑い。

蓮夜『そう言うゆゆも子供でしょ？』

ゆゆは顔を俯かせ肩を震わせ始めた。

蓮夜『ゆゆ？・・・大丈夫？』

それを見た彼は心配そうに彼女に声をかける。  
すると彼女ががばりと顔を上げて彼に飛びかかる。

その顔は真っ赤になつており目頭には涙が溜まっていた。

ゆゆ『バカ！バカ！バカ！バカ！』

蓮夜『ちよっ！痛いって！』

彼女は彼の胸を殴り始めた。

だがそれはポカポカと擬音が聞こえそうなほどに弱いもので彼は  
痛がつているが顔を見ると笑っており痛みを感じていない。

蓮夜『ごめん！ごめんってば！』

彼が謝ると彼女の動きが止まった。

すると少し恥ずかしそうに自身が座っていた席に戻り紅茶に口を  
つけた。

ゆゆ『・・・分かればいいの・・・。』

蓮夜『・・・やっぱり子供っぽい。』

ゆゆ『何か言った？』

蓮夜『なんにも言っていないよ？』

このような子供っぽいことを挟みながら二人の会話は盛り上がった。

2人から笑みは絶えずその光景を見た夢結は後悔したような表情になる。

本当に楽しかった。

思い出すだけで笑みが出るこの記憶。

この微笑ましい光景を壊したのは自分なのだ。

あの時拒絶した時に終わってしまったこの時間が懐かしく思える。

また彼とこの光景みたいな会話をしたい。

その想いが強くなる。

こうして話していればこの2年間自身の心の殻に閉じこもらなかったかもしれない。

こうして話していれば彼は・・・。

そう考えていると、

ゆゆ『もうこんな時間・・・れんや、わたし帰らないと・・・。』

蓮夜『・・・本当だ！もうこんな時間・・・そうだね。また今度話そう！』

ゆゆ『うん！』

すると2人は立ち上がり玄関に向かった。

蓮夜『今度はいつ帰って来るの？』

ゆゆ『・・・多分夏休みかしら？』

蓮夜『夏休みか・・・結構長いね。』

2人は会話をしながら玄関を出て彼女の家へと向かった。



2人の家は徒歩数秒・・・向い隣なので目の前なのだか彼が彼女を送っていくのは2人の普通だった。

そして彼女の家の玄関先に着き。

蓮夜『またね!』

ゆゆ『うん!またね!』

お互いに手を振りながら彼は自身の家へ彼女はそのまま玄関を開けて彼女の家へと入っていった。

それからしばらく平日は学校に行き休日は森で武器の生成や訓練を、

夜になるとヒューズを狩りに森の奥へ、

そのサイクルを続ける。

その中で彼女は色々なことがわかった。

彼の異能・・・その中でも壊始と生成にはデメリットがあり使いすぎると目に負担がかかり災厄の場合力が暴走して眼球が破裂してしまうこと。

そして彼の今持っている瞳は2つ以外に「再生」「指定」「幻覚」「解析」があること。

この中の4つの瞳は彼が初めの2つの瞳を改変させて作ったものであること。

「指定」「幻覚」「解析」は彼から聞いたことの無い瞳だが能力的におそらく「操作」「幻界」「情読」の瞳の原点だろうと考えた。

その時に彼女自身もこの世界で異能が使えること。

そして異能が使えるとわかったため彼女は彼の使い方を見ながら異能の扱い方を学び始めた。

前に彼から聞いた話では異能は系統によって制御の仕方が全く違うため自分の制御方法だと上手く扱えないだろうと、

だが、その言葉とは反対に彼女は彼の制御方法で異能を上手く制御出来るようになり始めていた。

あまりに馴染むため初めの頃は困惑していたがこれを好機だと考え異能制御に精を出した。

彼が学校にいる時は異能の制御を練習して待ちそれ以外の時は彼に着いていき彼を救う方法を模索する。

それは数ヶ月繰り返し返す夏休みまであと1週間ほどになったある日、彼がいつものようにヒューズを狩るために夜の森を駆けていると、

蓮夜『……。』

ふと彼が足を止めて周りを見渡す。

蓮夜『そこにいるのはわかってる!』

彼が突如拳銃を取り出して彼の前方にある木へと銃口を向けた。

彼の眼光を鋭く彼の身体を殺気が覆い始める。

???『ごめんごめん、僕は別に君に危害を加えるつもりはないんだ。』

そう言いながら木の影から人影が姿を現した。

その人影の正体は彼よりも少し年上程度の少女だった。

その少女は百合ヶ丘の制服を着ておりその顔には優しそうな笑みを浮かべていた。

夢結「……えっ?」

その顔を見た時彼女の顔は驚愕に染まり身体の動きが止まる。

彼女にはその少女に見覚えがあった。

その少女は彼女の大切な人でありその名は……

???『私は川添 美鈴。同類さ。』

彼女のシュツツエンゲル・・・川添 美鈴がそこにいた。

## 過去⑦

蓮夜 『同類?・・・まさか!』

彼は警戒するように彼女に拳銃を向けたまま話しかける。

美鈴 『そう、僕も異能者だよ』そうか・・・それで何の用だ?』

美鈴 『簡単だよ・・・そうだ、君の周りに異能者はいるかい?』

蓮夜 『いや。』

美鈴 『なら君にもわかるはずだ。』

蓮夜 『・・・繋がりか・・・。』

美鈴 『その通り、1人では限界があるからね・・・。』

蓮夜 『目的は情報交換と能力使用の実験と言ったところか・・・。』

美鈴 『それもあるけど・・・。』

蓮夜 『他に何かあると・・・?』

彼女の表情は真剣なものになり彼にも緊張が走る。

そして1泊置いて彼女が口を開き、

美鈴 『ストレートに言うよと愚痴を言いたんだよね!』

蓮夜 『・・・はあ?』

彼はその言葉を一瞬理解出来ず固まってしまふ。

がすぐに頭を振り思考を再開する。

蓮夜 『・・・愚痴?』

美鈴 『そう!能力がバレないようにするのは大変なんだよ・・・君もそうでしょう?』

蓮夜 『・・・。』

彼は警戒を薄めてはいないがその目は遠い目をしている。

美鈴『どうやら当たり当たりみたいだね。』

蓮夜『・・・当たりだったらなんだ・・・。』

美鈴『だから異能者同士でコネクションを持って置くのもいいと思うんだ。だから誰か異能者いないか探してたら。』

蓮夜『・・・俺を見つけたと。』

美鈴『そういうこと！・・・だからどうかな？』

彼女の言葉に彼は銃口を向けたまま警戒を続ける。

蓮夜『無理だ。』

美鈴『・・・どうしてかな？』

蓮夜『・・・ここに居ない人間を信じられる訳がないだろ？』

夢結「・・・？」

夢結は理解出来ず首を傾げる。

目の前にいる彼女は間違えなく夢結のシュツツエンゲルである川添 美鈴本人のはずだ。

彼女が知る彼女よりも少し幼いが雰囲気などに違和感もなく偽物ではないことは明らかかなはずだ。

だが、

美鈴？『・・・どうしてわかったんだい？』

蓮夜『あんたが実体がないからだ。』

美鈴？『なるほど・・・そういうことでもバレるのか。』

夢結「実体がない・・・まさか！」

彼の言葉に彼女はひとつの結論に辿り着く。

蓮夜『それがあんたの異能者としての能力か？』

美鈴？『正解・・・今君の目の前に居るのは私の異能・・・「虚実霊

域」の能力で魂そのものをコピーして形作った分身……影みたいなものさ。』

そう異能だ。

彼女の能力「虚実霊域」は自身の魂を複製して分身を作り出す能力を持つ。

それを使って自身との違いがない分身を作りここへと送ったのだろう。

彼女がそう考えている間にも会話は続き、

蓮夜『俺が言ってるんだが……能力の情報をそんなに簡単に喋っているのか?』

美鈴(影)『先にこんなことをしたんだからこれくらいしないと信用してくれないだろう?』

蓮夜『この分身は本人が直接操作しているタイプであっているか?』

美鈴(影)『厳密に言うとは違うが大体はその考えで間違えないはずだ。』

蓮夜『自分の能力なのに分からないのか?』

美鈴(影)『分かるんだけど説明がずらいんだよ。』

蓮夜『……まあいい、とにかく本人が来てもらわないと信用することも出来ないな。』

美鈴(影)『だろうね。……どうするか。』

蓮夜『会わずらいのか?』

美鈴(影)『僕の服装を見ればわかると思うが百合ヶ丘女学院の生徒だね。夜間の外出は厳しいんだ。寮も2人部屋だから……本当は僕自身自ら来たかったんだけど。』

蓮夜『それが厳しいと。』

美鈴(影)『そういうことだよ、結構厳しくてね。分身ならどうにか姿を消したりして何とかなるんだけど。』

蓮夜『本人は気配を消せないと……。』

美鈴(影)『そう、まだ能力を扱いきれてなくてね。どうにかしたい

んだがあと数ヶ月後にはどうにか出来そうなんだけど。』

蓮夜『さすがに時間がかかるな・・・そうだ、その分身は物理的な接触は可能か?』

美鈴（影）『触れるし持ち運びも可能だ。』

蓮夜『それなら・・・。』

彼は左手を顔の前に出し目を瞑った。

それでも拳銃を向けたままではあるが殺気がないことから警戒はかなり緩くなったのだろう。

彼が目を開くと瞳には生成と幻覚の紋章が浮かび上がった。

すると彼の掌に結晶が現れその姿を変えていく。

しばらく肥大化と変形を続けると結晶が砕け散り中からひとつの腕輪が姿を表した。

その腕輪はシンプルな黒色のものであり裏側に何やら模様のようなものが刻まれていた。

彼はそれを彼女へと投げ渡す。

蓮夜『認識阻害と存在希薄を付与した腕輪だ。それを使えば肉眼やカメラなどでは認識されないはずだ。』

美鈴（影）『これを使えばここまでバレずに来れそうだ。わかった明日ここに来るからその時にもう1回話すことはできるかい?』

蓮夜『・・・大丈夫だ。なら明日の午前1時にここで会うというのはどうだ?』

美鈴（影）『それで大丈夫だよ。僕はこれを持って帰らないと行けないから今日は帰らせて貰うね。』

蓮夜『わかった。』

美鈴（影）『また明日!』

彼女は足早にこの場を後にして行った。

蓮夜『ふう……。』

彼女が離れたことを確認すると彼は大きく息を吐く。

蓮夜『さすがにいきなり信用は無理だししようがないんだがちよつとキツすぎたか？』

彼は先程まで彼女がいた場所を見ながらそう呟いた。

蓮夜『とにかく明日だな。……今日は特にヒュージもないから撤退するか。』

そうして彼は家へと帰って行った。

そして翌日の夜、

彼は森へと向かった。

蓮夜『待ち合わせ時間まであと30分か……。一応装備はしつかりとしておくか。』

そう言いながら彼はいつも身に付けている武装を装着し始めた。

武装の確認も終わり近くの木に寄りかかって待っていると、

美鈴？『待たせたかな？』

蓮夜『いや、時間通りだ。』

彼女が木の影から姿を現したので彼は腕時計を見ると針は12:59を指しており彼が言う通り時間通りだった。

蓮夜『今回は本人みたいだな。』

美鈴『もし今日も分身で来たら君は信用してくれないだろう？……あんな物を無償で渡してくれたんだからこれくらいの期待に答えな



いと相手に失礼だ。・・・君もそう思うだろう?』

蓮夜『そうだな・・・同意する。』

美鈴『それでどうかな?・・・僕は信用に値するかい?』

彼は1度黙り込み周りを見渡した。

すると彼女に向き直り、

蓮夜『わかった、信用する。』

彼は彼女へ手を差し出す。

それに見ると彼女は微笑みその手を握り、

美鈴『良かったよ。・・・それじゃあよろしく頼ね!・・・えっと。』

蓮夜『蓮夜です。黒鉄 蓮夜、どちらでも構いません。』

美鈴『なら蓮夜って呼ばせて貰おうかな?』

蓮夜『構いませんよ。よろしく願います川添さん。』

美鈴『うん、よろしく。・・・そっちが君の素かい?』

蓮夜『そうですね。昨日はすいません色々怪しかったもので・・・。』

美鈴『いいよ、分身だとわかる人なら警戒するのも当然さ。』

蓮夜『川添さんが異能のことを話したのに言わないのは失礼ですか  
ら俺も説明しますね。俺の異能は「紋章眼」知覚型の刻印系で自身の  
眼球の位置に紋章という形の刻印を発動させて視覚範囲内に干渉す  
る能力です。』

美鈴『やはり目に関する能力だったか。それで刻印系ってなんだい  
?』

蓮夜『あれ?覚醒した時に情報を得られるはずなんですけど・・・。』  
美鈴『そうなのかい?僕は基本的な異能の知識と自身の能力とそれ  
が感應型って言う分類に入るぐらいしかわからなかったけど。』

蓮夜『・・・知覚型は情報取得が得意だからですかね?それに俺の  
能力は解析に特化してますし。』

美鈴『情報の解析力で取得量も決まるのかもされないね。』

蓮夜『それかそもそも分類によつて手に入る情報が違ふのかも考えられますね。』

美鈴『その可能性もあるか・・・それにしても解析特化つてことは何かを見ることに能力の全てを割いているつて考えであつていかな？』

蓮夜『そうですね・・・どちらかと言うと解析してそれで得た情報に干渉する感じです。』

美鈴『直接ではなく間接的な干渉つてことかな？』

蓮夜『その考えで合つていますよ。・・・そうだ川添さんの分身が直接操作するものとは違ふつて言つてましたけどどういふことなんですか？』

美鈴『簡単に言うとな私の能力は魂への干渉なんだ。他人には感情や記憶の軽い改竄程度だけど自身に干渉した場合は魂の複製が可能なんだよ。それで複製した自身の魂を変質させて物質的な干渉を可能にしたものがあの分身なんだ。』

蓮夜『支配系の能力ですかね？・・・つまり変質させたと言っても大元は川添さん自身であるため同一人物として存在する・・・だからこそ同一人物は存在しないという世界の法則が作用してその情報同士を共有するということでは合つていますか？』

美鈴『合つているよ・・・本当に理解力が高いね。』

蓮夜『これくらい理解出来ないと俺の能力は使いこなせないのだから苦しみましたよ。』

美鈴『そこまで大変なのかい？』

蓮夜『感応型だと関係ありませんが知覚型と強化型・・・その中でも刻印系と憑依系は特性が発展性に優れますから特に・・・。』

美鈴『・・・特性？』

美鈴は聞いたことの無い単語に首を傾げる。

蓮夜『タイプ・・・分類と系統にそれぞれ特性というものがあるん

ですよ……。』

そこから彼は異能のタイプや系統について説明する。すると彼女は何か納得したかのように頷き、

美鈴『なるほど……僕のおかしな視界もその特性が原因だったのか。』

蓮夜『多分人の感情や思考が可視化されていたんじゃないですかね？』

美鈴『これはどうにか出来ないのかい？』

蓮夜『多分無理ですね。俺もずっと数キロ先まで全方位見えてる状態ですし……。』

美鈴『それじゃあ能力による常時発生している認識の変化は？』

蓮夜『能力が常時発生しているんですか？』

美鈴『そうだけど……何かまずいことでもあるのかい？』

彼が慌てながら質問を返してくるので彼女も少し不安になってい  
るのか表情が歪む。

彼はすぐに獣のことについても説明を始めた。

美鈴『これってかなり不味くないかな？』

蓮夜『ですね……かなり不味いです。』

美鈴『どうにかする方法は……。』

蓮夜『今はありません……。』

美鈴『そうなるとその超越者になるしかないってことかな？』

蓮夜『今のところはそうですね……俺の方でも方法を探してみま  
す。』

美鈴『ありがとう。僕の方も考えてみるよ。』

2人の表情が暗い中彼の腕時計からアラームが鳴った。

蓮夜『もうそろそろ帰らないと不味いですね……。』

彼は腕時計を彼女に見せながら呟いた。

美鈴『そうだね……。また明日もここで合わないかい？』

蓮夜『大丈夫ですよ……。それではまた。』

美鈴『うん、じゃあ明日ね。』

2人は別れ彼は家に彼女は学院へと戻って行った。

その2人の表情は優れておらずその顔には影が掛かっていた。

## 過去⑧

美鈴『……また凄いものを作ってきたね……。』

彼女は苦笑いしながら彼に問いかけた。

蓮夜『俺だって大きくするの嫌ですよ、取り回し悪くなりますし……。』

そう言いながら彼は自分が握っているものに目を向けた。

彼の手には彼の身長の中の半分の長さの銃身を持った大型の拳銃が握られておりそのあまりの大きさに本当に使えるのか疑ってしまうほどのものだった。

蓮夜『ですけどこれぐらい無いとろくにダメージを与えられないんですよ。小さくも出来ませんがそうすると耐久性に難がありますし……。』

美鈴『それはわかっているんだけど……本当に使えるのかい？それかなり重いだろ？』

蓮夜『ギリギリ許容範囲内ですね……重量は18kgぐらいなんです片手での運用も問題なくできますよ。』

美鈴『僕もそうだけど普通は君みたいに片手で18kgなんて持てないんだよ。』

蓮夜『リリイはあんなに重量があるCHARMを振り回していますし普通じゃないんですか？』

美鈴『CHARMは術式とかで重量軽減や身体強化の補助を受けているから使えるだけで素の身体能力だけだとあんなのはふりまわせないよ……そもそも君はリリイじゃないじゃないか。』

彼女は彼の非常識ぶりにため息を吐くと彼は納得いかないのか少し頬を膨らませ、

蓮夜『人を人外みたいに……酷くありません?』

美鈴『だってそうだから……。』

蓮夜『俺を脳筋なんかだと思ってるみたいですけどこれにも重量軽減や身体強化を付与しているんですよ!それもCHARM以上に。』

美鈴『ちよつと待って!……軽減して18kgって……一体どれだけ重いんだい!?!』

蓮夜『大体100超えてますね。……余裕で、』

美鈴『それって素材は……?』

蓮夜『ウルツァイト窒化ヨウ素です。』

美鈴『なんだいそれは?新種の物質?』

蓮夜『グラフィイトが混ざった隕石の衝突時に発生する物質ですね。ダイヤモンドの約3倍の硬度を持ちます。』

美鈴『……。』

その言葉に彼女は言葉を失う。

世界で一番硬いと言われているダイヤモンドよりも硬いとは?と、

蓮夜『それを物質の密度限界まで圧縮したのでこんな重さに……。』

美鈴『本当にチートだね……君の能力は。』

蓮夜『確かにそれは否定できませんけど姐さんも大概ですよ?』

美鈴『確かに!』

2人は顔を見合わせて笑い出す。

彼らはかなりの時間を共にしており、2人が出会った日からもうそろそろ2年が経つのだ。

初めの頃は苗字で読んでいた彼も数ヶ月たった頃に「もう親しい間柄になったのだから苗字呼びは辞めようよ。」と言われ、初めの頃は彼女の言葉を拒否していたが根負けして今は敬語はそのままだが彼女のことを「姐さん」と呼んでいる。

彼らはこの2年間夜になるとここに集まり異能の制御や使用方法などを考えたり近くに現れたヒューズを狩ったりしていた。

その間夢結もただ見ていた訳ではなく異能の制御に精を出していくつかの派生も完成させている。

そうして美鈴は中等部2年生になり、彼も中学に入学していた。

美鈴『そうだ！蓮夜！』

蓮夜『どうしたんですか？』

美鈴『今年の1年に面白い子がいたんだよ。』

蓮夜『面白い子・・・ですか？』

美鈴『そう！一人だけ妙に大人びていてね。まるで君みたいなんだ！』

蓮夜『随分と珍しいですね・・・俺と同じくらいって相当ですよ。』

美鈴『それで僕、彼女とシュツツエンゲルの誓いをしようと思うんだ。』

蓮夜『シュツツエンゲル？』

夢結『もしかして私!?!』

夢結は彼女の言葉に驚愕する。

彼女がシュツツエンゲルを結んだのは夢結1人だけだ。

そして彼女が美鈴とシュツツエンゲルとなった時期と一致している。

つまりここで彼女が言葉が指す人物は自分しかありえない。

だがまだ中等部に入学頃は彼女との交流がなかったはずだ。

それに入学式は明日なので分からないはずなのだが、

美鈴『凄く落ち着いた色をしているんだ。前々からそんな気配は感じてたんだけど今日やっと誰かわかったんだよ。』

彼女は感情を色や形として見れるのだ。

それで他と違う彼女を見つけたのだろう。

蓮夜『確か青色でしたっけ?』

美鈴『そうだよ! だけどその子は特殊で他の色を青で覆っているみたいなんだ。』

蓮夜『つまり本心を隠している?』

美鈴『そう、大人でも結構少ないのにこの歳でだよ。面白いと思わないかい?』

蓮夜『確かに興味はありますね……どんな人生を送ってきたのか。』

美鈴『違う違う! 別に無理やり塗りつぶした訳では無いから何か酷い目にあつたとかじゃないよ!』

彼が少し悲しげに呟いたため彼女は慌てて訂正をした。

蓮夜『そうなんですか……良かった。それでその子ってなんて言うん名前なんですか?』

美鈴『えつとねえ……確か「白井 夢結」だったかな?』

蓮夜『ファツ!! 夢結!!』

彼は驚き手に握っていた拳銃を落としてしまう。

それにより ズムン! という思い音と共に地面が凹み銃身が地面にめり込んだ。

美鈴『知り合いなのかい?』

蓮夜『知り合いも何も! 幼馴染ですよ! 夢結は!』

美鈴『すごい偶然だね……。』

蓮夜『本当ですよ……世界狭すぎませんか?』

美鈴『クスクス……そうかもしれないね?』

彼女は笑いながらそう呟いた。

美鈴『そうだ! 夢結って子はどんな子なんだい!?!』



彼女は顔を彼に近づけてすごい勢いで彼に問いかけた。

蓮夜『ちよつと姐さん、落ち着いてください!・・・そうですね・・・姐さんが言うように少し大人びていて落ち着いた性格ですけど根は結構な負けず嫌いのそれで優しくて・・・。』

彼は嬉しそうに彼女について語っていく。

まるで自慢しているかのように、

美鈴『君の方が落ち着こうか・・・すごく大切な人なんだね。・・・もしかして好きなのかな?』

蓮夜『えっ!?!・・・その好きってlikeの方ですよね?』

彼は顔を赤くしながら慌てるように彼女に確認する。

美鈴『もちろんLoveだよ・・・それでどうなんだい?』

蓮夜『黙秘権を行使します・・・。』

彼はそのまま俯いてしまいそのまま黙り込んでしまった。  
だがその顔は先程よりも赤くなっていた。

美鈴『黙った時点でわかるんだけどね・・・。』

蓮夜『分からないんですよ・・・もしかしたら好きなのかもしれないし、そうじゃないかもしれない・・・ただ夢結だけは何かあっても守りたいとは思います。』

美鈴『まあ、君の歳だとそうだね。』

蓮夜『そうなんですか?・・・もうかれこれ小3の時からなんですが・・・姐さんはどう思いますか?』

美鈴『僕は何も言えないかな?蓮夜・・・その答えは君自身が見つけるんだ。』

蓮夜『自分で・・・。』

美鈴『そう、それは君の気持ちなんだから君自身で答えを見つけないと意味が無い。じゃないと後悔することになるよ。』

蓮夜『・・・よくわかりませんが肝に銘じておきます。』

そういう彼に彼女は微笑み、

美鈴『いつもは大人顔負けなのにこういう時だけは年相応なんだよね・・・君は。』

蓮夜『からかっているんですか？』

美鈴『いいや、君らしいと思ったただだよ。』

蓮夜『俺らしい？』

美鈴『そう、たまに出てくる子供っぽい君だ。それが多分本当の君なんだ。』

蓮夜『本当の俺ですか？』

美鈴『いつも君は自分自身を押し込んでいるだろう？』

蓮夜『そうですね・・・周りと違いすぎますから・・・。』

美鈴『確かに異能者は精神の成長が早いからね。周りに溶け込めないのはしょうがないかもしれない・・・これが異能者の弊害のひとつなのかもしれないね。』

蓮夜『どうしようもありませんからね・・・慣れましたよ。』

美鈴『その慣れが行けないんだけど・・・君にも心を許せる人はいらるだろう？親とか・・・あとは夢結かな？』

蓮夜『そう・・・ですね。父さんと母さん、そして夢結には本心を話せます。・・・もつと子供じみた感じにしていますが、』

美鈴『そういう人たちだけでもいいからそのままではないとダメだ。そうしないと君の心は耐えられなくなるから・・・。』

蓮夜『何か言いましたか？』

美鈴『いいや、特には何も・・・今何時だろう？』

彼女は誤魔化すように腕時計を確認する。

すると秒針は4時を指しておりそろそろ帰らなければ行けない時

間になっていた。

美鈴 『もう時間だしそろそろ帰るのかな。』

その言葉に彼も時間を確認する。

蓮夜 『そうですね。それではまた明日。』

美鈴 『うん、明日ね。』

2人はお互いの帰路に着いた。

## 過去⑨

ゆゆ『ねえ蓮夜、私お姉様ができたの!』

蓮夜『いきなりどうしたんだ!?お前一人っ子だよな!・・・俺にも分かるように言ってくれ。』

興奮したような様子ゆゆの言葉に彼は困惑したまま彼女に問いかける。

ゆゆ『ごめんなさい、嬉しくってつい・・・。』

蓮夜『大丈夫だよ。・・・それでどうしたんだい?』

恥ずかしいのか顔を赤らめる彼女に彼は苦笑しながら会話を促した。

ゆゆ『私を通っている百合ヶ丘にはシュツツエンゲルの誓いというものがあるのは知っているかしら?』

蓮夜『・・・知らないね。』

彼は一瞬考え込んでからそう言った。

本当は前日に美鈴から聞かされているのだが彼女との関係がバレル可能性があるためここは嘘をつく。

ゆゆ『知らなくたって当然よ?・・・シュツツエンゲルの誓いは上級生が守護天使として下級生を導く制度なの。』

蓮夜『小学校とかでよくある上級生が下級生とペアを組んで面倒を見るあれと同じか?』

ゆゆ『その考えで問題ないわ。・・・違ふとすれば高等部からしか結べないことかしら?』

蓮夜『高等部?・・・そのお姉様?は高等部なのか?』

ゆゆ『いいえ、私の1つ上よ。』

蓮夜『2年か・・・それって大丈夫なのか?・・・どっちも高等部じゃないが?』

ゆゆ『普通はダメなのだけど中等部でも生徒会所属なら例外になるの。』

蓮夜『なるほどね。・・・それでそのお姉様?ってどんな人なんだ?』

彼は内心「姐さんだろうけど」と思いながら彼女に問いかける。

ゆゆ『そうだったわね。お姉様の名前は川添 美鈴様・・・知的で強くて、そして優しい人よ。』

蓮夜『確かゆゆって初等部の時はトップだったんだろ?そんな君が強いつて言うってどれだけなんだ?』

ゆゆ『今の私では手が出せないほどよ。この前模擬戦をしたのだけどまるで相手にならなかつたな。』

蓮夜『やっぱり中等部になるとレベルが違うんだな。』

ゆゆ『それもあるだろうけれど、お姉様は中等部でもトップクラスの实力者なの!』

その後も彼女はまるで自分のことを言うかのように彼女の事を自慢してくる。

その目は輝いておりその表情は生き生きとしていた。

それを見て「姐さんとは上手くいってるんだな」と思いながら微笑んでいると、

ゆゆ『・・・何を笑っているのかしら?』

彼女が自慢をやめてジト目で彼を見る。

蓮夜『いやあ、ゆゆにそういう人ができて良かったなってな。・・・これで俺の心配事が1つなくなったよ。』

ゆゆ『心配事って・・・心配していたの?』

彼女は一瞬頬を赤らめるがすぐに元に戻り彼に問いかける。

蓮夜『もちろん、君に親しい間柄の人ができるか心配だったんだよ。』

ゆゆ『どういう心配よ!』

蓮夜『だって君は俺と同じで友達作るのが下手でしょ?それにすぐに暴走するじゃん・・・そうなると親しい間柄の人じゃないと止められないし・・・それで1人になるんじゃないかって心配になるでしょう。』  
ゆゆ『失礼ね!私はあなたほど下手じゃないわ!それに暴走するって・・・そう思っていたの?』

蓮夜『もちろん!』

『ガクッ』という擬音がつきそうな勢いで落ち込む彼女の肩に手を置き、

蓮夜『まあ、自覚したまえ。』

彼がふざけたような言葉を口にするると彼女の肩が小刻みに震え出した。

その直後彼女は生きよう行く顔を上げて、

ゆゆ『あなたにだけは言われたくないわよ!このボツチ!』

蓮夜『ボツチ!?!』

ゆゆ『そうよどうせあなたの事だから中学でも友人はいないでしょう!』

蓮夜『少しはいるに決まってるだろ!そういう君はどうなんだ?』

ゆゆ『私だっているわよ!』

その後しばらく言い合いが続く、

しばらく続けていると疲れたのかお互いに肩で息をし始める。

ゆゆ『……もうやめましょう。』

蓮夜『……だな、ただ虚しくなるだけだし、』

これが不毛な争いだと自覚した2人はこの会話を終わらせて別のことを話し始めた。

そこからはいつもの2人の会話となり穏やかな時間が始まった。

蓮夜『つてことがあったんですよ。』

美鈴『夢結にそんな一面がね……。』

彼が今日のことを美鈴に話すと彼女はゆゆの行動が意外だったらしく思わず笑ってしまっう。

蓮夜『そうだった、なんで言ってくれなかったんですか！おかげで結構焦りましたよ！』

美鈴『ごめんごめんサプライズのつもりだったんだ。』

蓮夜『本当に姐さんは……。なんでいつもは頼もしいのにこういうところでははっちゃけて来るのか。』

彼が大きなため息を吐くと彼女は苦笑する。

美鈴『そういえば蓮夜。』

彼女が先程までの表情と打って変わって真剣な表情になる。

蓮夜『……どうしたんですか？』

美鈴『夢結ってさ……。もしかして異能者なのかい？』

蓮夜『……え？』

彼女の言葉が理解出来ず固まる。  
固まった彼も数秒して動き出し彼女に問いたです。

蓮夜『・・・どういことですか？』

美鈴『だから、夢結が異能者かもしれないことを知っているのかつて聞いたんだよ。』

蓮夜『なんでそう思ったんですか・・・。』

美鈴『君も知つていると思うけど直接相手に干渉する能力は異能者相手だと効きにくいのは知っているだろう？』

蓮夜『ええ、俺も姉さんもお互いに効きにくいですし。』

美鈴『1回気になつて彼女の魂を覗こうとしたんだ。そうしたら能力が弾かれちゃってね・・・確かに僕の能力は見ることに向いてはいないが普通だったら弾かれるはずがないんだ。』

蓮夜『・・・偶然なのでは？』

美鈴『・・・それはないね。その後も何回も繰り返したんだけど全て弾かれたからそこは間違いない。』

蓮夜『体質とか精神性によつての効き方の変化はどうなんですか？』

美鈴『それもない。・・・蓮夜・・・認めたくない気持ちはわかるけど・・・。』

蓮夜『・・・会う度に必ず確認していたのに・・・どうしてだ？』

美鈴『確かに解析特化の君が分からなかったことに違和感があるけど僕は嘘をついてないよ。』

蓮夜『もしかして最後にあつた日の後に？・・・だけどそれだと兆候があつてもおかしくないから・・・。』

美鈴『おーい、蓮夜？・・・聞いているのかい？』

蓮夜『そうすると隠蔽しているのか？・・・もしかして俺が異能者なのに気がついてる可能性も、』

美鈴『聞こえては・・・ないようだね。・・・どしたのか。』



完全に自分の世界に入ってしまった彼に彼女はため息をつく。

美鈴『いつになったら戻るのかな?』

それから数分後未だに彼は現実に戻ってくる気配はなく、独り言を呟き続けていた。

蓮夜『もしもわかっているならなんで言わないんだ?・・・もしかして信用されてない?・・・これは打ち明けるべきなのか?』

彼の思考が明後日の方向に行ってしまう始める。

美鈴『ちよつと!何をしようとしているんだ!?!』

それを聞いた彼女が慌てて彼の方を揺さぶり正気を取り戻させようとする。

しばらく揺さぶると彼が彼女の肩を叩く、

彼女が彼から手を離すと彼は頭を振り手を額に置いた。

蓮夜『すいません・・・ちよつとおかしくなりました。』

美鈴『あれはちよつとどころじゃないと思うんだけど・・・落ち着いたかい?』

蓮夜『はい、ありがとうございます。危うく凶行に出るところでした。』

美鈴『本当に焦ったよ。・・・なんであんな考えになったんだい?』

蓮夜『もしも異能者なら分かるはずなのに分からなかったということは隠蔽しているはずなんですよ。だとするとどうして相談してくれないのか、それでそこから発展して信用されていないんじゃないかって・・・。』

美鈴『普通そこまで発展するかな?・・・それにしてもそんなに夢結に信用されてないのは嫌なのかい?』

蓮夜『自分でも分からないんですよ。なんでか夢結だけはなんとい  
うか・・・過保護というかそんな感じになるんですよ。』

美鈴『過保護?・・・なのかな?』

蓮夜『それで夢結だけは絶対に守らないとって思うんですよ。』

美鈴『過保護超えてるよ。それ・・・。』

蓮夜『これが姐さんの言う恋心?なんですかね?』

美鈴『恋心とは違うと思うな?・・・なんというか比護欲というか  
義務みたいになってる・・・かな?』

蓮夜『・・・姐さんも自信ないんですね。』

美鈴『仕方がないさ。・・・それより夢結のはあくまで可能性だか  
ら君も確認を頼むよ。』

蓮夜『分かっています。今度夢結と会う時より詳しく調べてみま  
す。』

美鈴『お願いね・・・!!蓮夜!』

蓮夜『・・・。』

彼女が叫ぶと彼は真剣な表情に変わる。

すぐさま2人は目を合わせその後森の奥へと視線を向ける。

じつと観察すると美鈴はCHARMを蓮夜は太刀を手に取った。

美鈴『急いだ方が良さそうだ。』

蓮夜『・・・。』

2人はすぐさま森の奥へと駆け出した。

## 過去⑩

蓮夜 『姐さん！俺は右やります！』

美鈴 『それじゃあ私は！』

2人は木の間を縫うように進むように森を駆け抜ける。

目の前には2体のミドル級ヒュージがおりこちらに気づいたのかこちらへ飛びかかってきた。

2人はお互いの得物を握りしめ体制を低くしてさらに加速、そのまま飛びかかってきたヒュージの下を潜るように前進しながら躲し刃を上に向けて相手の勢いを利用して両断する。

2人は両断したヒュージには目もくれずそのまま森の奥へと突き進む。

美鈴 『あとどれくらいかな？』

蓮夜 『あと60秒です！準備を！』

彼の言葉に彼女の表情がより真剣味を増す。

彼も現在持っている太刀を納刀し拳銃を取り出した。

美鈴 『僕が先に出るから援護を！』

蓮夜 『了解！』

すると彼女の姿が何重にもぶれ始めた。

そのぶれは大きくなりその全てが鮮明になる。

すると彼女が3人に増える。

美鈴 『僕は前から行く！』

美鈴（影） 『それなら私は右（左）から！』

そういうと彼女達のうち1人はそのまま残り二人は左右に別れて

森を駆け抜ける。

蓮夜『・・・あと10秒!』

彼も拳銃を前方に構えて射撃する。

そのまま銃弾が無くなるまで打ち続ける。

銃弾が切れたら銃身が折れてシリンダーが顔を出した。

そこからからの薬莢が飛び出しすぐにその上に新たな薬莢が現れシリンダーに収まる。

銃身を元に戻すと再び射撃を再開する。

打ち出された銃弾は木の間を縫うように進み森の奥へと吸い込まれていく。

銃弾が見えなくなった次の瞬間金属同士がぶつかるような甲高い音が鳴り響く。

銃弾が弾かれる音になる中数回突き刺さる用は鈍い音が聞こえた時、木々が途切れ瓦礫となった街が姿を現した。

そこには数十体のスマールとミドル級と数体のラージ級そして真ん中にギガント級ヒュージが存在していた。

2人はそこに飛び込む。

ヒュージが彼らに気づき襲いかかろうとしたその時、

『ドゴーン!!』

数体のミドル級が大爆発を起こした。

爆発したヒュージは跡形もなくなりその余波で周りにいたスマール級は粉々に、ミドル級も活動停止になっておりラージ級も倒れはしないがヒビが入っていた。

その爆発で砂煙が起こり2人の姿を隠す。

ヒュージが2人を探して周りを見回していると、

ヒュージの目の前に刃が現れヒュージを両断した。  
大きな音につられてヒュージがそちらを向くと今度は逆方向から何かを切断する音が聞こえる。

それからも切断音が鳴り響く、  
だが、その音の鳴る場所はバラバラであり発生源を補足できない。  
このあともしばらく見えない驚異がヒュージを襲った。

何かを感じ取ったのか一体のラージ級が腕を前に突き出すと腕が止まりその先には今ヒュージ達を襲っている刃があった。

美鈴『勘がいい個体もいるみたいだね・・・それとも本能なのかな？』

ヒュージは少女を見つけると腕を押し付けるようにして抑え込む。  
さすがにラージ級の筋力には勝てず抑え込まれる少女を見て好機と思ったのかヒュージはもう片方の腕を彼女へと振り下ろそうとする。

だが、

美鈴『普通ならこの状況はまずいんだけど・・・。』

少女は口元に笑みが浮かんでいた。

感情のないはずのヒュージを寒気が襲う。

本能なのかそれとも別の何かかもしれないがヒュージはすぐさま振り下ろそうとしていた腕を引き戻す。

その腕を自身の上にかざそうとするが、

??? 『・・・遅いよ。』

ヒュージの視界が左右に割れる。

他のヒュージと同様に両断されたのだ。

そのヒュージの視界に最後に映ったのは、  
瓜二つの姿をした2人の少女と、

美鈴『動きは良かったけど詰めが甘かったみたいだね。』

少女から発せられる理解の出来ない音だった。

美鈴『ふう・・・ありがとう助かったよ。』

美鈴（影）『何を言っているんだ？・・・あれくらいなら受け流すなり躲すなり出来ただろに・・・。』

美鈴『ちようど君が近くにるのが分かったからね。・・・効率よく行こうと思ったのさ。』

美鈴（影）『僕が気づかなかつたら危なかったのによく言うよ・・・完全に油断してただろう？』

美鈴『まあね・・・だけど大丈夫さ、必ず気づくからね。・・・なぜなら、』

美鈴（影）『君は僕で、僕が君・・・だからだろう？』

美鈴『その通り、だから確信があつたんだ。』

美鈴（影）『理由は分かつたけど気をつけないと蓮夜にドヤされても知らないからね。』

美鈴『まあ、程々にするさ。それじゃあ残りもやろうか、』

彼女の言葉に美鈴（影）は頷き背中合わせのように真逆の方向へと駆けていった。

その後もヒュージの数が減りギガント級と数体のスモール級だけとなった時残っていたスモール級が一齐に爆発した。

それによりギガント級は体制を崩しよろける。

ギガント級の足元を影が疾走り抜ける。

するとヒュージの足クビから青い液体が吹き出した。吹き出した場所には何かに切られた傷がありそこから青い液体が止まることなく溢れだしている。

美鈴『・・・浅い。』

彼女がつぶやくとヒュージの傷が塞がり始めものの数秒で元通りになってしまった。

すると元々人型に似ていたヒュージの姿が変わり下半身は人上半身は触手出できた異形の姿へと変貌する。

自身に傷をつけた存在を見つけたヒュージは怒り狂ったかのように彼女へと襲いかかる。

ヒュージの触手が彼女達を襲う。

その触手の先端は槍状になっておりそれらが彼女達を刺し貫こうと迫り来る。

彼女達はCHARMでそれらをどうにか捌くがその物量に押され始める。

彼女達が目の前の触手に集中していると地面が盛り上がりそこから触手が突き出てきた。

彼女達はそれを何とか躲すがその隙を突かれてCHARMを弾かれてしまう。

そして、

彼女達の腹部に触手が突き刺さる。

夢結「お姉様!!」

今までずっと無言だった夢結が叫ぶ。

そして彼女の傍に寄ろうとした時、

脳裏にあの時の光景が過ぎった。

自分のCHARMで彼女を刺してしまったあの時の光景を、

夢結は固まり動けなくなる。

その瞬間彼女達に触手が襲いかかり体全体に突き刺さる。

夢結「ああ・・・ああ・・・。」

夢結が手を伸ばすとそこには全身を貫かれた彼女が落ちてきた。

その瞳には生気がなくもう心臓の鼓動が止まっているのは確実だろう。

その姿が夢結の中の彼女と重なった。

夢結の息が荒くなり過呼吸になる。

血の気の引くような寒気と共に自身の体が何かに掴まれて引つ張られる感覚に陥る。

その気配に気づいた夢結はすぐに気持ちを落ち着かせようとするがなかなか落ち着かない。

自身を引つ張る力が強まって行くのを感じて彼女に焦りが生じた。

今は何とか持ちこたえているがあと少しで落ちてしまうだろう。

夢結「・・・。」

彼女が限界を迎える直前美鈴の体が霧のように解けてきえた。

すると後ろから、

美鈴『正面からはきついかもしれないね・・・。』

蓮夜『きついかもしれないけど何やってんですか！見てるこっちがヒヤヒヤしましたよ！』

美鈴の声が聞こえたため振り向くと2人は話し合っていた。

・・・話し合っていると言うよりも彼が彼女に文句を言っているよ  
うな感じではあるが2人とも怪我どころか汚れひとつない状態で  
ヒュージのことを観察していた。

美鈴『ごめんごめん、相手の情報が欲しくてね。・・・それに分身



だから、』

蓮夜『それでも同一人物でしょうが！確かに情報は欲しいですけどもつと考えて下さいよ！』

美鈴『分かった分かった・・・次からはちゃんと行ってから行動するよ。』

蓮夜『そういうことじゃない!!』

彼の言葉をひらりと躲していた美鈴の雰囲気が変わる。

美鈴『それよりも・・・どうしようか。』

蓮夜『・・・そうですね・・・。』

それに合わせて彼の雰囲気はすぐさま変わり考え始める。

するとヒュージがこちらに気づきこちらを向く。

そして2人のことを確認するところこちらに向かつて襲いかかってきた。

## 過去⑪

2人へと放たれたヒュージの猛攻、それは豪雨のように降り注ぎ2人の命を狩り取ろうとする。時に躲し、時に弾き、時に逸らす、触手の雨を最低限の動きで凌ぎヒュージに向かって駆け抜ける。その動きに隙はなくその滑らかな動きはまるで踊っていると思ってしまうほどだ。

ヒュージが触手を数本束ね地面スレスレを薙ぎ払う。

それを跳躍で躲すとすぐ下を暴風が通り過ぎた。

その風で少し体勢を崩してしまった2人を再度触手が襲う。

それは足場のない空中にいるため身動きの取れない2人では躲すことが不可能なタイミングで襲いかかる。

触手の到達まであと数秒、それではさすがの彼でも足場を展開するには時間が足りない。

そして触手が2人の身体を貫く寸前、

蓮夜『姐さん!!』

美鈴『ああ!』

2人は得物をお互いに向かって振るった。

刃がお互いの身体へと迫る。

振るった刃の沿線にお互いの得物が重なりぶつかると。

その勢いを利用して2人は左右に身体をずらし迫り来る触手を躲す。

2人は身体を回転させることで勢いを殺し着地、再びヒュージへと迫る。

ヒュージの懐に入ることになった2人を触手が襲いかかるがその量は先程の猛攻と比べるまでもなく余裕を持って躲せるほどにまで減っていた。

余裕ができた2人は相手の手数を減らすために触手を切り裂く。

美鈴の切断した触手はすぐに再生したが蓮夜が切断した触手は一向に再生する気配を見せず徐々に手数を減らしていく。

美鈴『これは修復じゃなく再生で間違いなさそうだ!』

蓮夜『ですね!再構成までの速度が早すぎますし、それに「線」を切ったら治りませんから!』

2人は先程のお返しとばかりに猛攻をヒュージへと浴びせる。

ヒュージの体に傷が増えていき触手が初めの半分程になった頃、

蓮夜『見つけた!』

彼がそう叫ぶと太刀を鞘に収めて手を前に向ける。

すると彼の手に槍が現れた。

槍を両手で持ち直し構えるとその勢いのままヒュージへと突撃する。

ほとんどの触手は美鈴や彼のいた場所を狙っておりヒュージの胴体はがら空きになっていた。

槍がヒュージを貫く寸前、

蓮夜『!?!』

まるで新たな触手が生えてきたかのように現れた触手が彼に襲いかかった。

それをどうにか槍を引き戻し防ぐが勢いを殺しきれず弾き飛ばられる。

美鈴『蓮夜!?!』

その光景を見た彼女はヒュージの隙をつき後退、彼へと駆け寄る。

美鈴『大丈夫かい！』  
蓮夜『大丈夫です。』

幸い彼に怪我はなくすぐさま立ち上がった。

夢結『・・・良かった。』

夢結は胸を撫で下ろし大きく息を吐く、  
どうにか立ち直った彼女の息は荒くかなり消耗していることが見て取れた。

彼女は少し安心した表情で2人を見る。

詳しくは分からないが2人が優勢なことはわかっていた。

だから心配する必要はないだろうと、

だが、2人の表情からは焦りが顔を覗かせていた。

蓮夜『まずいですね・・・。』

美鈴『ああ・・・再生している。』

先程彼を襲った触手の出現部を探すとそこはちょうど彼が切断した再生しないはずの触手だったのだ。

美鈴『ちゃんと目は使っていたんだろう？』

蓮夜『間違いなく・・・しばらく再生していませんでしたし確かかと・・・。』

美鈴『あれは時間経過で消えるのもでもないはず・・・つまり何か仕掛けがあるみたいだね。』

蓮夜『そうですね・・・特にギガント級でも珍しい再生能力持ちですし何か持ってますよこれは・・・。』

美鈴『もしかして・・・。』

蓮夜『何か思い当たる節が？』

美鈴『ああ・・・予想だが、異能者を取り込んでいるかもしれない・・・。』

彼は彼女の言葉に動揺するがすぐに冷静さを取り戻した。

だがその表情は歪んでおり得物を握る手に力がこもる。

確かにその可能性は話し合っていた。

G・E・H・E・N・A.のように人間がヒュージの力を利用するならその逆もあり得ると、

しかしその可能性を間近で見ってしまうと会話していた時のようには行かない。

怒りが込上げる、

すぐにでも飛び出してしまいそうな感情を必死に抑える。

蓮夜『・・・考えたくありませんが、その可能性はありますね。』

美鈴『・・・僕も考えたくないさ。だが、君の概念付与が無効化されているんだ・・・その可能性が1番高い。』

蓮夜『概念を付与するものだから逆に上から付与されれば効果が消える・・・それが当たり前ですからね。』

美鈴『これはあくまで可能性だがもしも・・・もしもそれが現実だった場合・・・。』

蓮夜『・・・。』

その場合中にまだ行きた人間がいるのかもしれない。

異能者の能力は異能者本人が死亡してしまうと消えてしまう。

なのでもしものヒュージが異能者を取り込みその能力を利用しているなら異能者本人が生きている可能性があるのだ。

だが、それは同時に恐怖心を煽った。

仮に生きていたとしよう。

生命活動に支障がない、それは間違いない。

しかし、それはただ生きているだけの可能性もあるのだ。

もしも救出に成功しても後遺症がある可能性もある。

最悪の場合は・・・

美鈴 『蓮夜!!』

蓮夜 『!?!』

思考の底に潜りそうになった彼は彼女の声で彼も浮上させた。

美鈴 『考えるのはあとだ！今は目の前に集中するよ！』

蓮夜 『・・・わかりました。』

2人はヒュージの攻撃を捌きながら会話を続ける。

その表情には焦りが生じているがまだ少し余裕が見て取れた。彼がもう一度触手を切断した時、

蓮夜 『姐さん！あれ!!』

彼が叫んだため彼女が彼の視線を追うと、

そこには触手を自ら切り離しその切り離した部分から新たな触手が生えて来る光景があった。

美鈴 『なるほど！トカゲの尻尾切りと同じか!』

蓮夜 『なら！取り込まれている可能性も低いですね!』

2人の表情に安堵が浮かぶ、

これで最悪の事態では無い可能性が高まる。

もしも取り込まれているなら救出を視野に入れなくてはならない。

そうすると過剰な攻撃をしなければ取り込まれている人にまで危険が及ぶ可能性があるのだ。

だがその可能性が低いということは最低限の注意だけで大丈夫ということになる。

これなら戦闘もかなりしやすくなる。

そう思った瞬間ヒュージが新たな動きを見せた。

ヒュージは自身の体に触手を巻き付け始める。

それにより攻撃してくる触手量が数本になったが体全体を覆うように巻きついた触手はまるで鎧のようにヒュージの体を隠した。

蓮夜『ヒュージって思考能力ないはずでは？』

美鈴『これも生存本能なんだろう・・・それよりもヤバいんじゃないかな？』

蓮夜『ですネ・・・。』

2人の表情が曇り冷や汗が流れる。

美鈴『「核心」は見つかったんだよね？』

蓮夜『・・・はい・・・。』

美鈴『これ・・・届くかな？』

蓮夜『・・・無理です。』

彼が見つけたヒュージの「核心」・・・壊始の条件である「線」の起  
点、

そこへと攻撃を当てる事が出来れば対策がなければ確実に倒す  
ことができる全てのものに存在する最大の弱点、

それに攻撃が届かせられないのだ。

美鈴『「核心」の場所は？』

蓮夜『胸部の中央です。』

美鈴『胸部ね・・・。』

彼女はヒュージを見上げながら、

蓮夜『触手がなければ届くんですが・・・。』

美鈴『触手をどうかすればいいんだね?』

蓮夜『はい!・・・ですが、どうやって?』

美鈴『簡単だよ・・・人数で押せばいい。』

蓮夜『人数でって・・・まさか!!』

彼女の糸を察せた彼はすぐに止めようとするが時すでに遅く彼女はヒュージへと駆け出した。

蓮夜『ああ!もう!』

彼も急いで彼女を追ってかけ出す。

攻撃の密度が減ったことで余裕ができた彼女は一気にヒュージへと接近する。

彼女がヒュージの胴体へと跳躍する。

そして彼女がヒュージの胸部まで飛び上がると彼女の姿がぶれ始めた。

すると彼女が5人に増える。

美鈴『『『『はああああ』』』』

5人の美鈴は同時にCHARMを振り抜いた。

その斬撃はヒュージを守る触手の鎧を切り裂き中の本体を頭にさせる。

美鈴『今だ!!』

蓮夜『・・・あああああああ』

彼女が開いた突破口に彼が飛び込む。

そして彼は再び槍を取り出して胴体に突き刺した。

その槍はヒュージの胴体に吸い込まれるかのように深々と突き刺さり槍の持ち手すらも埋まってしまったそのとき、



『ピシリ！』

乾いた音が辺りに響きヒューズの動きが止まる。

そして2人が着地すると再びヒューズ画触手を振りあげようと持ち上げる。

だが振り下ろす寸前にヒューズの動きが鈍くなりまるで力が抜けたかのようにゆっくりと触手を地面に下ろした。

その後もしばらく動いていたヒューズだが次第にその動きは遅くなりついに止まってしまった。

美鈴 『倒せたかな？』

蓮夜 『はい、生体反応は消えました。』

蓮夜・美鈴 『……』

2人はしばらく無言になるがすぐに顔を合わせる。  
すると2人は森の奥へと消えて行った。

## 過去⑫

2人は森の中を進む。

先程までと異なり静まり返った森の中を無言のまま駆け抜ける。しばらくすると戦闘前までいた場所に着いた。

すると2人は周りを確認するとそれぞれ木にもたれ掛かるように座った。

蓮夜『・・・お疲れ様でした。』

美鈴『ああ、お疲れ様。』

息を着くと2人の口が開いた。

お互いに慰労の言葉をかける2人はだが、いつもと変わらない雰囲気を出す彼女とは違い彼の表情は暗くなっている。

蓮夜『・・・姐さん。』

美鈴『どうしたんだい？』

蓮夜『どうして無茶したんですか？』

美鈴『それは早く決着をつけるためだよ。』

蓮夜『あの敵なら少しづつ削っていけば安全に勝てたはずです。・・・なのにどうして、』

美鈴『そうすると君に掛かる負担が大きすぎるからね。』

蓮夜『俺よりも姐さんの方が危ないでしょう！まだ俺は休インターバルみを作るから余裕がありますけど、常時発動型の姐さんにはそれが無いもう姐さんには余裕が無いはずだ。』

美鈴『そうだね。・・・最近はよく引きずり込まれそうになることが多くなった。・・・あと持って数年かな？』

蓮夜『分かっているならなぜ・・・。』

美鈴『君なら分かるはずだ。・・・僕達は大人20歳になる前に死人でなくなつてんでしまう。』

蓮夜『・・・。』

その言葉を聞いた彼は黙ってしまおう。  
分かるのだ彼女の言葉の意味が、  
だからこそ彼は何も言えなくなっている。

美鈴 『僕達の運命は理性のない獣に堕ちるかそれに抗い人ならざるもの超越者になるかの2つだ。』

蓮夜 『……。』

美鈴 『たとえ獣に堕なかつたとしても超越者になつてしまつた時点で人ではなくなつてしまふ。……超越者は獣に堕ちることなく理性を持った……理性のある獣だからね。……僕は思うんだ人では無くなるということは「死」と同じなんじゃないかってね。』

蓮夜 『……。』

彼女の顔に影が落ちる。

彼女はいつものように振舞っているのだろうがその笑顔にも曇りがあり彼女の心の内を表しているかのように感じる。

美鈴 『だから、後悔をしたくないんだ……。』

彼女は彼に向かって真剣な眼差しを向ける。

その表情には迷いはなかった。

美鈴 『今を全力で生き抜く……それが僕のやるべき事だと思つて  
いる。』

蓮夜 『……やるべき事。』

彼女の言葉を聞き彼も無意識につぶやく。

その表情は何かに迷っているかのようで、真っ直ぐな彼女の瞳を見ないように目を逸らしていた。

美鈴『そして僕達には守るものがある。．．．違うかい？』

蓮夜『．．．夢結。』

美鈴『そう、夢結だ。僕にはシュツツエンゲルとして彼女を守る義務がある。．．．そして君もだろうか？』

蓮夜『．．．はい。』

美鈴『そして僕たちのうち長く夢結の傍に入れるのは．．．おそらく君だ。』

蓮夜『．．．だからって。』

美鈴『だからこそだよ。．．．さっき言ったけど夢結は異能者である可能性があるんだ。だから彼女の傍で支える存在は必要不可欠なんだよ。なんせ異能者は精神が不安定になるだけで吞まれる可能性があるからね。』

蓮夜『それで俺なんですネ．．．。』

美鈴『そう、君の方が確実に僕よりも長く人のままでいられる。』

蓮夜『もしも超越者になったとしてもどのような影響があるかも分かりませんから．．．。』

美鈴『もしかしたら感情がなくなっているかもしれない。そうなったら彼女を支えるのは不可能に近い．．．だって、考えていることが分からなくなるのだからね。そしてそれが彼女に気付かれてしまつたら．．．。』

蓮夜『確実に怒りますね．．．夢結なら、』

美鈴『そして悲しむ．．．。』

蓮夜『．．．だから悟られる訳にはいかない。』

美鈴『僕の場合は任務中に戦死としてどうにか姿を消すこともできるけど．．．君はそうも行かないからね。』

蓮夜『一般人ですからね．．．一応。』

美鈴『なんで君みたいな一般人がいるんだろう？』

蓮夜『リリイじゃないからでしょう？』

美鈴『．．．性転換してみるかい？』

蓮夜『．．．遠慮します。』

美鈴『まあ、そうだろうね。』

2人は突然笑い始める。

今までの暗い雰囲気は嘘かのような状況に違和感を感じずにはいられない。

蓮夜『あはは．．．こんな話して笑えるなんて．．．本当におかしくなってますね．．．俺達。』

美鈴『そうだね．．．もう僕達の感性は壊れてるんだ．．．時々自分自身が怖く感じるよ。』

蓮夜『俺も同じです．．．どんどんと周りとかけ離れていく．．．「本当にここにいていいのか？」って考えることも多いです。』

美鈴『僕もだよ。人間ともリリイとも違う．．．そう考えると怖くてたまらない．．．今僕が僕でいられるのは蓮夜．．．君と夢結のおかげなんだ。』

蓮夜『俺は同じ異能者だからだとして夢結もなんですね。』

美鈴『そう、夢結は僕の心を救ってくれた。いつもそばで支えてくれるからね．．．彼女は僕に取って1番の宝物なんだよ。』

蓮夜『そうですね。俺も何回助けられたか．．．多分夢結がいなければ俺はもう獣になっていますよ。』

美鈴『その夢結が今一番危険なのはわかるだろう？』

蓮夜『はい、本当に夢結が異能者になるのだとしたら、ならなかった直後．．．特にこの真実を知った時に．．．』

美鈴『ああ、絶対に心が壊れる．．．夢結はああ見えて結構繊細だからね。』

蓮夜『それは俺が1番わかっていますよ．．．夢結はいつもそうなんですよ。周りののが不安にならないようにいつも本心を押し殺して．．．優しいんですよ、本当に．．．』

美鈴『だから君の存在が必要なんだ。彼女が本当に心を許している君じゃないと．．．』

蓮夜『．．．姐さんじゃダメなんですか？』

美鈴『．．．ダメだね。』

蓮夜『どうしてです？ 姐さんになら夢結も気を許しているはずで  
す。』

美鈴『確かに気を許してくれているのは事実だ。だけど心までは  
行っていない。』

蓮夜『・・・それは数年でどうにかなるのでは？』

美鈴『蓮夜・・・さつきからどうしたんだい？ 言動がおかしくなっ  
ているようだが、まるで自分自身を否定しているような・・・。』

蓮夜『どうもしていませんよ？・・・ただ。』

美鈴『・・・ただ？』

蓮夜『ただ、どうして俺なのかって思うんですよ・・・。もつと姐  
さんとか適任な人がいるはずなのに・・・。』

美鈴『・・・蓮夜？』

突然彼の雰囲気は普通ではなくなる。

どんどんと彼の周りに暗く重い何か包むような息苦しい雰囲気  
が広がる。

この異常事態に彼女は慌てて彼の表情を確認すると、

そこには何も感情がない生気を失ったかのような表情をした彼の  
顔があつた。

美鈴『蓮夜！ しっかりするんだ！』

彼女は彼の状況を確認するとすぐさま彼の肩を掴み揺さぶる。

そうすると彼は我に返ったかのように顔を上げて辺りを確認する。

蓮夜『・・・すいません。 堕ちかけました。』

美鈴『すいませんって・・・まあ、大丈夫ならもんじゃないのかな  
？・・・それでどうして君は自分に自信がないんだい。・・・辛い  
のなら言わなくてもいい・・・だけど聞いておかないといけないことな  
んだ。』

蓮夜『・・・弱いです。』

美鈴『弱い？・・・君がかい？僕にはそうは見えないけど・・・』  
蓮夜『いいえ、弱いんですよ。どうしようもなく・・・だからすぐに呑まれかける。』

美鈴『すぐにとって良くなっているのかい！』

蓮夜『はい、軽い感じですけど2日に1回ほど・・・自力では戻って来れるんですが・・・』

美鈴『確かに危険だね・・・』

彼の言葉に彼女は考え始める。

確かに獣になる可能性が高いなら期限があるがそれまではなる可能性がほとんどない自分が残った方がいいと考えたのだろうか、

美鈴『・・・それならぼくが残った方がいいのかもしれない。』

蓮夜『それなら、』

美鈴『だけど君に負担をかけられない。』

そこで彼の言葉は止められる。

彼は言葉を失ってしまう。

どうしてなのか？

どうして彼女ではなく自分が？

残るのは彼女の方がいいはずだ。

彼はそう思っているのだろう。

それなのに彼女は彼を選んだ。

一拍置いて彼女の口が再び開く。

美鈴『蓮夜、君にしか出来ないんだよ。』

蓮夜『どうしてですか！こんな不安定な俺よりも姐さんの方がいいはずだ！それなのにどうして・・・』

彼の表情が悲痛に染まる。

今の彼は自分自身を完全に否定しているのだ。

幼い心器に大人の思考力中身そんな矛盾を持つ彼の精神は息を吹きかけてしまえば吹き飛んでしまうほどに脆い。

だからころ自分を信用出来ないのだろう。

美鈴『どうして・・・か、それは言えない。・・・なぜなら、その理由は君自身が見つけないといけない事だからね。』

そんな彼の心の内を分かっているのか彼女は彼の頭を撫でながら優しい声色で語りかける。

蓮夜『理由を見つける・・・。』

美鈴『焦らなくてもいいんだ。ゆっくりと考えればいい。』

蓮夜『・・・本当に俺でいいんですか？』

美鈴『ああ・・・僕でも他の誰でもない君だけなんだよ。・・・本当の意味で救えるのは。』

蓮夜『今なんて言ったんですか？』

美鈴『いいや何も言っていないよ。』

彼女は年相応に首を傾げる彼の頭を再び撫でた。

そのとき木々の隙間から漏れた月明かりが2人をそつと包み込んだ。



## 過去⑬

『……』

夜の森、その中を少年が走り抜ける。

少年が体勢を低くして木々の隙間を縫うように進むと、少年の左右にある木々の下から人影が襲いかかる。

人影はまるで黒い靄のようなものに覆われておりその容姿を確認することができずその手には大振りの片刃大剣のようなものが握られている。

その人影はそれぞれの得物を上段に構え少年を両断するために迫る。

刃が少年に触れる寸前、少年の姿がまるで元からいなかったかの如く掻き消える。

人影が得物を振りきった直後2人は瞬時に得物から手を離し振り下ろした勢いをそのままに前転の要領で前へと出てその走り出す。

すると先程まで人影があった場所に無数のナイフが降り注ぐが既にその場から離れている人影には当たらない。

そのナイフは地面に当たる寸前、ナイフは直角の軌道を描きながら人影を追いかける。

人影は追うナイフにどうにか対応するが得物がないたため躲すしかなくどんどんと逃げ場を失っていく。

しばらく躲し続ける人影が、ついに人影がナイフに取り囲まれてしまふ。

逃げ場を失った人影に向かってナイフが襲いかかるが人影はまるで煙の様に霧散して消える。

人影が消えたことでナイフは地面に落ちる。

するとナイフが散らばる場所の中心に少年が姿を現した。

少年が周りを警戒していると木々の影から4人の人影が襲いかかる。

そのタイミングは全てが一致しており、その一つ一つが少年の退路

を潰すようになっておりまるで刃でできた檻の様に少年を閉じ込めた。

少年は正面にいる人影へといつの間にか握られている大鎌を振り下ろした。

その一撃によって人影を弾き飛ばすことに成功するが残り3方向から刃が迫る。

少年は大鎌を振り切った勢いを利用し手首のスナップで刃を背後へと回り込ませて後方にいた人影の一撃を押される。

そのとき少年の体がぶれて半透明な少年の形をした何かが大鎌で左右の人影を迎撃した。

人影はそれを危険と感じたのかすぐさま後ろに下がり警戒している。

すると少年が右の人影へと向かってナイフを投擲し左の人影へと襲いかかる。

人影は大鎌での横薙ぎを自身の得物で防ぐが後ろから飛んできたナイフが突き刺さり体制を崩してしまう。

少年はその隙を逃さずに瞬時に体を捻り大鎌の向きを反転させて人影の胴体を薙ぐ。

その斬撃は人影の胴体に吸い込まれるかのように迫りそのまま人影を両断した。

体を上下で分断された人影は先程のように霧散する訳ではなく光の粒子のようなものに分解されるように徐々に体が薄れて消えていった。

少年はそれを確認することなく体を反転させる。

すると背後には人影が迫っており得物を横薙ぎに振っていた。

それを背面跳びの容量で躲しながら通り過ぎ間際に空中で体を拗じる要領で回転させてその勢いで大鎌を振り下ろす。

それにより体が切り裂かれた人影は先程のものと同様に消滅した。

少年が体制を整えると目の前に刃が迫る。

少年の目の前には得物を振り下ろす人影がおり、その人影には先程

投擲したナイフが刺さっていた。

先程牽制を無視して迫り来る一撃に彼は目を見開くがすぐに冷静さを取り戻し視線を上空へと向ける。

すると少年の姿が再び消えたと思うとすぐさま人影の真上に姿を現した。

すぐに姿を霧散させようとした人影に大鎌を振り下ろす。

だが、当たる寸前に人影が姿を消してしまう。

それを確認すると彼は森の中へと身を潜めた。

すると、静寂が続き辺り一面に草木のざわめきと風の音が包み込む。

しばらく息を潜めていると、再び人影が姿を現した。

? 『・・・』

その人影は肩を抑えながら当たりを警戒している。

先程の攻撃を掠めていたのか肩には大きな切り傷がありそこから光の粒子が漏れていた。

そのまましばらく観察していると人影の前に新たな人影が現れる。

その人影は当たりを確認するとすぐさまもう一人の人影に手を向けて近づいた。

その瞬間を待っていたと言わんばかりに彼は木の後ろから飛び出す。

すぐに人影もこちらに気付くが少年は既に人影の目の前まで来ており手に持つ大鎌で新たに現れた人影の首を薙ぐ。

その大鎌は人影の首筋で止まる。

すると少年は顔を上げて、

蓮夜『・・・これで勝負ありですね。』

その言葉に反応した人影はこちらに顔を向ける。

すると人影を覆う靄が晴れるとそこには美鈴の姿があった。

美鈴『・・・。』

蓮夜『姐さん?・・・終わりましたよ?』

無言の彼女に彼が違和感を感じていると突如隣にいた人影が動き始めた。

美鈴『・・・残念だけど、まだ終わっていないよ。』

蓮夜『!?・・・まさか!』

彼女の発言の意味に気づいた彼はすぐに大鎌を引き彼女の首を裂く。

すると彼女は粒子になって霧散してしまった。

蓮夜『これも囿か!』

美鈴『その通り!』

背後から声が聞こえたためすぐに振り返るとそこにはCHARMの銃口を突きつける美鈴の姿があった。

美鈴『今回は僕の勝ちだね。』

蓮夜『姐さん・・・分身の数増えたんですね。』

美鈴『正解・・・1人増えて6人まで可能になったんだ・・・それで今回は僕の勝ちでいいかな?』

蓮夜『・・・その前に姐さん今日は空気が乾燥してますね。』

美鈴『?・・・それがどうかしたのかい?』

蓮夜『乾燥していると静電気が起こるから嫌いなんですよ・・・ちょうど今日みたいな日は特に・・・。』

美鈴『まさか!』

彼女は何かを察したのかすぐさま後ろに引こうとするが、

蓮夜『遅いですよ?』

彼の一言と共に辺り一帯に光が奔る。

その光が収まると彼女とその分身は地面に倒れてしまった。

美鈴『やつてくれたね……。』

蓮夜『最後まで油断したらダメなんですよ。』

美鈴『また負けたか……。今回は勝てそうだったんだけどね。』

蓮夜『まあ、これで俺の50連勝ですね。』

美鈴『そんなに負けてたっけ？』

彼の言葉に彼女は苦笑する。

ここ最近の2人の戦いは基本的に彼が勝っていた。

出会い初めて1年程は彼女が勝ち越していたがそこからはどんどん負け越しを重ねて今ではいい所までは行くが勝つことができないまでの実力の差が生まれているのだ。

美鈴『本当に強くなったよ君は！』

だが、彼女はまるで気にせず彼の成長を喜んでいた。

元々彼女は援護を得意としているからなのか勝敗を全く気にしない彼女に彼は困惑してしまう。

普通彼女の年齢なら落ち込んだりするほどのことであるはずなのだ。だがそのような兆候が全くないのだ。

それは彼も同じで2人はまるで子供とは思えない思考をしている。

2人の姿を見ている夢結は悲しみを感じていた。

この2人には子供としての思い出が薄いのだ。

それをまじまじと見させられている彼女はまるで胸を締め付けられるかのような痛みを感じる。

夢結「あの頃の彼は……。」

そしてあの頃の彼・・・子供の頃の蓮夜が偽りだったことと彼女は自身の思い出が崩れるような感覚を味わい続けていた。その度に吞まれそうになり彼女も限界が近づいている。

夢結「・・・教えて、どうすればあなたを・・・。」

なのに、目的である彼を救う手掛りが見つからない。そこから現れる焦りが彼女を蝕む。

既にこの世界に来てから数年が経ちその間に様々のものを見ていた彼女は消耗していた。

既に顔色も悪く足もおぼつかなくなるまで消耗している彼女は目を閉じる。

「やはり、私ではダメなのか。」

この言葉が頭を埋めつくした。

それでも何とか抗おうとするが、それもここまで、

彼女の意識は薄れていく。

夢結「・・・蓮夜・・・。」

彼女は霞んだ視界に映る彼へと向かって手を伸ばす。

そしてついに彼女の意識が消えるそのとき、

美鈴『蓮夜・・・前にも聞いたが、君は夢結ことをどう思っているんだい？』

蓮夜『そんなの決まってるじゃないですか・・・好きですよ・・・ずっと昔から、』

彼の言葉に消えかけていた彼女の意識が呼び覚まされる。

蓮夜『夢結という時が俺に取って1番の救いなんです・・・こんなおかしい・・・異常な思考を持った俺に光を与えてくれる彼女が・・・』

そうつぶやく彼の手は震えていた。

彼も怖いのだ。

自分が周りと違うことに、

それは知っていた。

だけど、彼女は自身が彼の救いになっていっていると思っていなかったのだ。

何度もそう言っているが本当なのか疑問に思っていた。

そして、

蓮夜『夢結の前でだけ俺は俺でいられる気がするんです。夢結にだけは子供としての自分でいられる・・・そんな気がするんです。』

夢結「本当だったのね。」

彼女は涙を流す。

偽りではなかったのだ。

自身の・・・2人の思い出は、

蓮夜『だから俺は夢結を守るんです。俺を俺で居させてくれる・・・夢結を守るために、そのためならなんだってしますよ。・・・ただ、夢結が居てくれるそれだけで俺はいいんです。恋人とかそんなんではなく・・・ただ、話が出来れば・・・それだけで俺は救われるんですから。』

夢結「傍にいる・・・。」

彼女の頭をその言葉が駆け巡る。

その言葉を聞いた彼女はまるで掛けていたパズルのピースを見つ

けたような感覚に陥った。

あとはそれを嵌めるだけ、

そこさえ分かれば全てが噛み合う。

そんな気がしてやまない。

彼女はその答えを必死に探す。

記憶を漁り彼の言葉を一字一句思い出す。

美鈴『恋人か・・・僕は応援するよ!』

蓮夜『茶化さないでくださいよ・・・。』

美鈴『茶化してないさ・・・僕は夢結のシュツツエンゲルとして君が彼女にふさわしいと思っっているんだ・・・それに君にもね。』

蓮夜『俺の何処がふさわしいんですか?』

美鈴『君なら必ず夢結を幸せにするために力を注ぐはずだ。そうだろう?』

「夢結「・・・力を注ぐ。」

蓮夜『当たり前じゃないですか!たとえ俺が不幸になっても夢結だけは幸せにしてみせます。だけど・・・自分で言っただけですが俺はかなり面倒な性格してますよ。もしも彼女に危険が及んだら俺は命すらも賭けます。・・・そんな俺なんですもしかしたら彼女を幸せにするどころか悲しませるかもしれない。』

矛盾しているその言葉だがそれが彼の心に抱えている不安だった。それが原因で彼は前に進めずにいるのだ。

「夢結「・・・命を賭ける。」

美鈴『だからこそだよ。そんな危なっかしい君だからだ。・・・夢結なら君のことを絶対に離さない。もしかしたら縄で縛ってでも止めるかもしれないよ。』



夢結『・・・離さない。』

蓮夜『そんなことはさすがに・・・ありそう・・・下手すると鎖で、』

夢結「・・・鎖・・・縛る。」

カチリと、全てが噛み合う音が聞こえた。

夢結「何を勘違いしていたのかしら、そうよ！離さなければいいのよ！」

彼女の心に希望が芽生えた。

ついに見つけたのだ彼を救う方法が、

夢結「それにはあれが必要ね・・・蓮夜・・・もう少しだけ待っていてすぐに見つけに行くから。」

この時彼女の目的は定まった。

## 過去⑭

美鈴『それはそうと蓮夜・・・君は本当に強くなったね。』

蓮夜『そうですか？』

美鈴『ああ、もう僕では勝てないくらいにね。』

蓮夜『そうだとしたら嬉しいですね。』

美鈴『君の能力は制御が難しい・・・それを君は手足のように自在に使えるんだ。それだけでも相当な実力が無いと無理さ。』

蓮夜『それを言うなら姐さんもですよ。姐さんの能力はどちらかと言うと戦闘向きの能力じゃないのに戦闘向きの俺と互換なんですから・・・それに制御と言ったら・・・。』

美鈴『僕のは例外さ。確かに僕の能力は支援向きの能力だけど、それは君もだろうか？』

蓮夜『まあ、そうですね。俺のも解析特化ですから・・・結局は使い方ですよ。』

美鈴『そうだね、僕のも乱戦には強いから・・・それにしても面白いことを考えたね瞳の合成とは・・・。』

蓮夜『色々試した結果ですよ。いつもは左右の瞳の能力を別々に発動してるイメージなのでもしも重ねて使ったらと思つて試してみたら成功つて感じですね。・・・まあ、合成と言うよりも直列的な発動に近い感覚です。』

美鈴『能力の同時発動ができる君ならではだね。・・・それでどれくらいの組み合わせがあるんだい？』

蓮夜『そうですね、今のところは・・・「化学錬金」「次元屈折」「幻想世界」「並列存在」の4つです。』

美鈴『「幻想世界」と「並列存在」はわかるんだけど「化学錬金」と「次元屈折」とは？』

蓮夜『「化学錬金」は操作と情読の組み合わせで知覚範囲ないの原子を操作することで化学反応を起こす能力です。そして、「次元屈折」は操作と次元の組み合わせで過去または未来の自身の存在だけを連れてくることで瞬間的に複数の行動を取る能力ですね。』

美鈴『原子の操作ということはもしかして・・・核使えたりするの  
かい?』

蓮夜『姐さんの予想通り・・・メルト核熱暴走ダウン可能です。・・・最悪  
の場合反陽子爆発も・・・』

美鈴『絶対に使ってはダメだ・・・被害が予想もつかない。』

蓮夜『わかってますよ。・・・だから基本は電撃や小規模な爆発で  
の牽制用です。』

美鈴『それなら問題なさそうだね。』

蓮夜『そんなに心配しなくてもやりませんよ・・・』

彼は不服そうに彼女を見る。

彼女はその光景に苦笑しながら自身の手に視線を向ける。

美鈴『僕もそれくらい力があつたら・・・』

蓮夜『姐さん・・・』

彼女の顔に影が落ちる。

彼女の能力は支援型だ。

つまり彼女単体での戦闘能力はさほど高くはない。

そこを悔やんでいるのだろう。

自分よりも幼い彼が自身よりも強い力を持っている。

それを妬ましく思う気持ちもあるだろうが彼女が最も感じている  
のは怒りだ。

強い力にはそれ相応の代償が伴う。

彼の場合は人との繋がりと肉体への多大な負荷だ。

異常とも言える程の大量の情報により無理やり成長させられた精  
神により他者との間に溝が生まれてしまい人との関わりを拒絶して  
しまい、能力による瞳への負荷により何回も潰れては再生する地獄の  
ような苦しみを味わい続けているのだ。

とつくに精神が壊れていてもおかしくはないこの状況で彼が彼で  
あり続けられるのは彼の1人の少女のおかげであることは既に知っ

ている。

だからこそ怒りが湧くのだろう。

何もできない自分自身に、

歳下の少年1人救えない川添 美鈴本人に、

その証拠に彼女が自身の拳を強く握る。

蓮夜『姐さんは強いですよ。』

美鈴『・・・蓮夜?』

蓮夜『だつてそうじゃないですか・・・姐さんには強い心があるじゃないです・・・俺はそっちの方が羨ましいんですよ・・・こんな力よりも・・・』

美鈴『・・・』

彼の言葉を聞き彼女は言葉を発せなくなってしまう。

知っていたのだ。

彼が自身の力を呪っていることに、

求めていたのでは無いこの異質な力、

これは彼の人生を大きく変えてしまった。

彼の歳なら同い年の友人と年相応に遊び学ぶ・・・それが当たり前なのだ。

だが彼にはその当たり前がない。

遊ぶことも学ぶこともそして同年代との交友さえも全てがこの力によつて無縁となつたのだ。

彼女自身は幼いがある程度精神が成熟した歳である12歳で異能者になったため影響は薄かったが、彼の場合は小学3年生・・・つまり9歳で異能者になったのだその影響は計り知れない。

そして彼女と出会うまで彼は1人だつたのだ。

先も分からない真つ暗運命のようなその道を、

だから今の彼が生まれたのだ。

自身を呪いそれでいて救いを求める。

自身から周りとの関わりを絶とうとしていて人との繋がりに飢え

た。

相反する矛盾を抱えた人間が、

この精神性がどれほどの苦難から生まれたものか彼女には理解できない。

ただそれが壮絶であったことのみがわかる。  
当たり前だ。

彼女はその過程は知っているが経験をしていない。

知識はある・・・ただそれだけなのだ。

彼女では決して体験する事のない<sup>地獄</sup>経験、

彼女は不意に寒気を感じる。

もしかしたら自分自身が同じ道を歩んでいたかもしれない。

それが彼女の精神を凍てつかせる。

果たして耐えることができるのだろうか？

彼の場合は偶然手を差し伸べた彼女が・・・夢結がいたから耐えられたのだ。

そのような相手のいなかった自身に耐えられるのか、

不可能だ。

耐えられるわけがない。

今ですら限界に近いのだ。

だが彼はその倍以上の時間を過ごしている。

それがどれだけの苦痛か理解していたはずなのに彼女は彼に取って残酷とも言える一言を言い放ってしまったのだ。

いいや、理解しきれていなかったと言うべきか、

彼本人の苦しみを完全に理解できない彼女には無理があったのだ。

それでも彼女は彼に負担をかけないように気をかけていた。

だが、その言葉の小さな亀裂が積み重なった結果大きなヒビとなつたしまったのがこの結果なのである。

美鈴『・・・蓮夜・・・』

彼女は意を決して彼に話しかけようとした。

その時、

蓮夜『大丈夫ですよ……。』

彼が言葉を紡いだ。

蓮夜『わかっているんです……。姐さんがいつも俺に気を使ってくれていることは……。』

木に寄りかかっていた彼は立ち上がった。

蓮夜『確かに俺はこの力を呪っています……。だけどそれだけじゃないんですよ。』

彼は彼女へと視線を向ける。

その瞳にはハッキリとした意志と力がこもっていた。

蓮夜『この力があるから……普通なら男性が持つことの無いヒュージと戦うことの出来る力があるから、夢結の力になれるかもしれない。』

彼はそこまで言うとな彼女に向かって微笑み。

蓮夜『それにこの力があつたから姐さんにも会えたんです……。だから全てを恨んでいるわけじゃないんですよ。』

美鈴『……あはは！』

彼女は笑ってしまふ。

たまらなく嬉しかったからだ。

ずっと助けられてばかりいた自分が、彼に恩返しが出来ていたことが、

美鈴『そうか！僕も君の助けになつていたんだね！』

彼女は笑い終わると何かを考え始める。

しばらくすると何か思いついたのか顔を上げて彼の顔を真剣な表情で見つめた。

美鈴『決めたよ。・・・僕は夢結のシュツツエンゲルであるとともに君のシュツツエンゲル守護者の誓いを結ぶ！』

蓮夜『何言ってるんです!?!そもそもそのシュツツエンゲルっていうのは百合ヶ丘専用なんでしょう?それを学院外でリリースでもない俺になんて。』

美鈴『そんなことは関係ないさ。どうせ、学院に書類を提出する訳ではないのだからバれることもない。』

蓮夜『そうかもしれないませんが・・・夢結と結んでるんですよね?聞いた話ではシュツツエンゲルを結べるのは1人だけと聞いたのですが・・・。』

美鈴『確かにノルンのような特殊な例を除くとシュツツエンゲルは1人としか結ぶことを許されていない。だから考えたんだよ・・・君、黒鉄 蓮夜と白井 夢結を2人で1人とすればいいということだね。』

蓮夜『俺と夢結じゃ別人のような・・・。』

彼が呟くと彼女は微笑み。

美鈴『いいや、2人で1人なんだよ・・・君達は・・・まあ、その理由はいずれわかるさ。・・・それでどうするんだい?僕とシュツツエンゲルを結ぶか結ばないか、』

すると彼は何か諦めたような表情になり、

蓮夜『こうなった姐さんは梔子でも動きませんからね・・・わかりました結びましょう。』

彼の返事に満足したのか彼女は頷き、

美鈴『うんうん、恥ずかしがらないでそれでいいんだよ。』

彼女の言葉に彼は顔を逸らした。

人との繋がりに飢えている彼にとってシュッツエンゲルというものは繋がりを認識しやすい彼の求めているもののひとつだった。

だが、同時に他者との関わりを避けていた彼にとっては決して簡単に答えられることではなかったのだ。

だからこのような態度になつてしまう。

それをわかっている彼女は楽しそうに笑い。

美鈴『それならシュッツエンゲルの誓いは成立だ。これで君は僕のシルト守るべき者であり僕は君のシルト守ツツエンゲル護になる。だから誓いよ・・・決して君に辛い思いをさせないことを。』

蓮夜『・・・姐さん。』

彼女のその言葉に彼は自然と笑みを浮かべる。

今まで庇護者護る側であった彼が加護者護られる側になったのだ。

自分を護ると言ってくれた彼女に憧れを抱いていると、

美鈴『ということ・・・これからは姐さんじゃなくてお姉様・・・またはお姉さんと呼んで貰うね。』

蓮夜『・・・えっ？』

美鈴『なんならお姉ちゃんでも構わないよ！』

蓮夜『姐さん・・・色々台無しです・・・。』

彼女の一言により彼の中にあつた憧れが消えてしまう。



だが彼の中には温かい何かが灯っていた。

それからまた2年が経ち、

蓮夜『姐さん・・・今日は遅いな?』

彼はいつもの場所で彼女を待っていた。

あの話の結果彼は未だに彼女のことを姐さんと呼んでいる。

だが、その関係は協力者や利害関係のような固いものではなく、姉と弟のような優しく温かいものとなっていた。

蓮夜『いつもこの時間には来てるはずなのに・・・何かあったのか?』

まるで何か不吉なことが起きるかのような気配を感じて彼の中で不安がよぎる。

いつも遅刻した事の無い彼女が来ていない・・・これがその予感に拍車をかけた。

彼がこの予感が当たらないようにと思っていると、

美鈴『ハアハア・・・』

彼女がやってきた。

だが、その様子はおかしい、いつも涼しい顔をしている彼女が何か焦るような表情で息を荒くして来たのだ。

それが彼の予感が当たったことを示していた。

蓮夜『姐さん!どうしたんですか!』

彼はすぐに彼女へと駆け寄る。

彼女に近づくとすぐに彼女の身体を支えて近くの木に寄りかからせる。

美鈴『・・・ありがとう。』

蓮夜『いいえ、大丈夫ですよ。：姐さんは一旦休んでください。』  
美鈴『休んでいる場合じゃないんだ！』

彼女はなにかに狩り立たされるように立ち上がろうとする。  
それを彼は無理矢理であるが抑えて再び彼女を座らせた。

蓮夜『・・・焦っても何も解決にはなりませんよ？・・・一旦落ち着いて。』

彼の言葉に彼女は自身が冷静さに欠けていたことに気づき大きく深呼吸をする。

しばらく深呼吸をしていると次第に落ち着きいつもの彼女に戻った。

美鈴『ごめん、僕としたことが。』

蓮夜『大丈夫ですよ。・・・それでどうしたんですか？そんなに慌てて？』

美鈴『・・・慌てないで聞いて欲しい。』

彼女の顔が真剣な表情になる。

だがその表情は今までに見た彼女の表情のどれよりも真剣さを帯びておりこの話がそれだけのものであることが伺えた。

彼女は一瞬言葉を溜めると、

美鈴『甲州でヒュージの大進行が始まった。』

彼女はそう呟いた。

そして彼は悟った。  
これが自身の感じた不安の正体であると、

## 過去⑮

蓮夜『・・・大進行!』

彼女の言葉を聞いた途端彼は声を荒らげて叫ぶ。

蓮夜『いきなりなんですか? 予兆もなしに!』

美鈴『ああ、突然なんだ。・・・政府としての予想では複数のネストがお互いに作用し急激なヒュージの増加が発生したと考えているらしい。』

すると彼はすぐに顔をある方向に向ける。

蓮夜『・・・あつちか。』

彼が見ている方向・・・それは大進行が起きようとしている甲州であつた。

蓮夜『・・・少し見てきます。』

彼はそうつぶやくと姿を消した。

森に静けさが戻る。

彼女がしばらく待っていると、

蓮夜『お待たせしました。』

美鈴『・・・おかえり、それでどうだったんだい?』

蓮夜『政府の予想はあながち間違つてないですね・・・ただ。』

美鈴『・・・ただ?』

蓮夜『作用し合っているのがネスト本体じゃないんです。』

美鈴『ネスト本体じゃないか・・・まさか!』

蓮夜『・・・アルトラ級が増えているんです。・・・ネスト内に、』

美鈴『新しく生まれたということかい？』

蓮夜『それで間違いないかと・・・それが原因でネスト内の供給バランスが崩れたことが大進行の原因ですね。』

美鈴『そうか・・・増えたアルトラ級の数は？』

蓮夜『五体・・・ネストの発生が古い順に5個のネストでアルトラ級が増えています。』

美鈴『五体か・・・1、2体なら日本のリリイを総動員すればどうにかなるかもしれないが・・・。』

蓮夜『無理でしょうね・・・一般的なアルトラ級の力を考えると2体相手となると被害が計り知れないのに五体なんて話になりませんよ。』

美鈴『それも古いということとはネスト発生し始めた直後から存在するアルトラ級のはずだ。・・・そうすると、平均的なアルトラ級の戦力で済むかも分からない。』

蓮夜『ただリソースの大半はアルトラ級が持つてるためギガント級個体が少ないのは不幸中の幸いですかね。』

美鈴『そうだとしてもアルトラ級がいる限り状況は変わらないか・・・。』

蓮夜『アルトラ級の厄介な点は硬さと無尽蔵なマジですからね。・・・長期戦は免れません。』

美鈴『・・・政府は何を考えているんだ。』

蓮夜『何かあったんですか？』

彼女の眩きとその冷静そうに見える中にある怒りの表情に何かあったのかと問いかける。

美鈴『君には内緒にしてもすぐバレそうだから話すよ。・・・君はリリイの実戦における規定の中に年齢制限があることは知っているだろうか？』

蓮夜『はい、確か16・・・と言うよりも高等部以上でしたよね？』

美鈴『ああ、そうだ。・・・だが今回の異例の自体に政府は百合ヶ

丘女学院にある命令を出したんだ。』

蓮夜『もしかして年齢制限の撤廃ですか？』

美鈴『少し違うが大体はその考えであって、』

蓮夜『ふざけるな!!』

彼から怒声が飛ぶ。

それと同時にさっきから周辺にいた鳥や小動物が一斉に逃げ出した。

蓮夜『アイツらは子供をなんだと考えているんだ!・・・タダですら高等部・・・16歳から実戦参加でもおかしいんだぞ!子供を守るのは大人の役目じゃないのか!・・・それなのにアイツらは命を懸けて戦う彼女達を見ているだけのおのおと!』

彼の口からまるで濁流のような勢いで怒声が吐き出される。

彼の手を見ると血が出るほど強く握られており赤い筋が地面へと伸びていた。

彼の怒りは最もだと彼女は考える。

確かにヒュージに対抗するにはリリーの力が必要不可欠であろう。

だが、それでも何かできることはあるはずなのだ。

それなのに彼等は何もしない、

ただ遠く離れた場所から見ているだけなのだ。

確かに彼女達のために必死になって努力する人もいるがそのような人は数少ない。

これを聞いた時は彼女も彼と同じ内心だったのだ。

だからわかる。

彼が持つてる政府への怒りが、

それと同時に彼女はリリー達のために奮闘する自身の所属する学院のいる例外の1人のことを考えつつ、

彼へと悲しみの表情を向けていた。

彼の子供と言う言葉に彼自身が入っていないのだ。

彼は自分のことを蔑ろにする傾向にある。

最近ではそれも少し良くなつては来たがそれまでだ。

根本は変わっていない。

そんな自分自身を否定する彼を見て黙り込んでいると、

蓮夜『少し違つて言っていましたけど・・・何かあるんですか？』

美鈴『あ、ああ・・・学院にはリリーのところを大切にしている人がいてね。その人・・・理事長代行がどうか説得して1レギオンのみの出撃となつたんだ。』

蓮夜『・・・その中に姐さんが入っているということですか？』

美鈴『ああ、これを聞かされた時は理事長代行はすごく悔しそうな表情をしていたよ。・・・あの時はさすがの僕でも驚いたな・・・なんせ僕達が部屋に入った瞬間にいきなり頭を下げたんだからね。』

蓮夜『・・・そういう人もいるんですね。』

美鈴『ああ、あの人はいつもリリーのことを第一に考えてくれる人だ・・・いつもならあの手この手を使って政府を抑えるんだけど、』

蓮夜『それが通用しなかつたと、』

美鈴『その通りさ、多分だけど。』

蓮夜『・・・確実G・E・H・E・N・A・でしょうね。』

美鈴『あそことは仲が悪いからね・・・嫌がらせなんだろうけど。』

蓮夜『それに子供を使うのはおかしいでしょう。・・・やっぱり、1回潰した方が良さそうですね。』

美鈴『一旦落ち着いて、それが問題じゃないんだ。』

蓮夜『他に問題があるんですか？』

美鈴『ああ・・・今回の大規模作戦・・・甲州撤退戦に参加するレギオン「アールヴェイム」に僕を含めて13名が所属しているんだ。その中の2人は高等部んだけどあととは中等部3年なんだよ。』

蓮夜『・・・3年・・・!?!』

そこで彼は彼女の言おうとしていることに気づく。

彼の表情が蒼白となり冷や汗がとめどなく流れ身体が震え始めた。

美鈴『君の考え通り・・・夢結も入っているんだ。』

蓮夜『・・・。』

彼は口が塞がらず放心状態になった。

彼女は動かなくなった彼を声をかけながら揺さぶる。

美鈴『蓮夜・・・君の気持ちはよくわかる。・・・だから1回戻ってきてくれ!』

彼女の必死の呼び掛けに彼はすぐに正気を取り戻した。

蓮夜『すいません。・・・急に夢結が戦場に出るっていう空耳が聞こえて、』

美鈴『済まないけど・・・それは、空耳じゃないんだ。夢結が甲州撤退戦に参加するんだよ。』

蓮夜『ですよね。・・・空耳じゃないですよ。・・・嘘でしょう?』

美鈴『現実逃避は良くないよ。・・・話を戻すけど夢結を含めて1人の3年生が参加することになったんだ。』

蓮夜『G・E・H・E・N・A・潰しに行つていいですか?』

美鈴『やめなさい。』

彼が物騒なことを言ったので口にしたため彼女は彼を止めに入る。

蓮夜『・・・「アールヴヘイム」の夢結の役割はなんですか?』

彼が真剣な表情に戻った。

美鈴『主に後方支援だけど前線が押された時は遊撃に入る感じかな



？』

蓮夜『つまり危険になったら前に出ろと……。』

美鈴『そういうことだね。』

蓮夜『……その場所は山梨だったりしますか？』

美鈴『そうだけど……。』

それを聞くと彼は厳しい表情になった。

それを見て彼女は警戒心をあげる。

蓮夜『山梨にある2つのネスト……2つともアルトラ級の成長速度が早いです。』

美鈴『成長が早い？』

蓮夜『はい、今にもネストに入り切らないくらいに、』

美鈴『……まさか。』

彼女の表情が引き攣る。

これから彼の言う言葉が何かわかるからだ。

できることならこの予感が外れることを願う。

だが、

蓮夜『アルトラ級がネスト外に出現する可能性があります。……』

それも最大クラスの個体が、』

美鈴『まさに死地だね。』

さすがに異能者の彼女であってもアルトラ級を1人で相手するのは厳しいのだ。

それが2体同時となるとほぼ不可能と言ってもいい。彼女は必死に考える。

どうしたらレギオンの皆を救えるのかを、

だが、彼女には手がない。

いいや、ない訳では無いがリスクが大きすぎるのだ。

「能力を使えば皆を生き残らせることは可能だ。

だが、異能がバレる訳には行かない。

そして、能力を行使し続けられれば獣に堕ちてしまう可能性も高まり返って彼女達に危険を及ぼす可能性があるのだ。

能力がバレる事なく皆を救える方法を・・・何かの突破口がないかと考える。

その時、

蓮夜『・・・俺も参加します。』

静まり返った森の中彼の声だけが鮮明に響いた。

## 過去⑬

美鈴『・・・蓮夜・・・な、何を言っているんだい・・・。』

彼女は理解出来なかった。

彼の言い放ったたった一言が、

短文かつ簡単な単語、

それがどうしても脳が理解することを拒む。

彼女がただの空耳かと思ったその時、

蓮夜『・・・俺も前線に出るんですよ。』

美鈴『君は何を言っているのかわかっているのかい!!』

彼女は彼へと近づき力強く肩を掴んだ。

美鈴『どれだけのリスクがあるのかわかっているのか!!』

蓮夜『・・・わかっているつもりです。』

美鈴『いいや! わかっているじゃない!』

蓮夜『わかっていますよ!』

美鈴『ならなんで!』

蓮夜『これしか手が無いでしょう!』

美鈴『ツ!?!』

彼女は口を閉ざしてしまう。

そう、彼の言う通りなのだ。

彼女だけではこの件は解決出来ない。

確かに手がない訳では無いがそれにはリスクが高すぎてしまい実行に移せない。

蓮夜『姐さんが動いてはバレてしまう可能性がありますが俺なら・・・元々その場にはいないはずの俺なら正体がバレてしまうリスク

を減らせます。』

美鈴『……』

確かにその通りだ。

今回の甲州撤退戦では作戦の成功確率や被害の軽減のため人員のバイタルや位置情報などが詳しく記録される。

それが彼女にとっての最大のリスクなのだ。

彼女の能力は自分自身を複製する。

確かに、この能力があればアリバイ工作は容易になる。

そしてこの能力は応用として認識阻害も使用できるのだ。

これだけを聞けば何らデメリットが無いように感じるだろう。

しかし、そうではない。

確かに周りから見えなくなりながら戦えば周囲の人間にバレるはずがない。

これは逆に周囲の人間に混乱を与えてしまうことと同義なのだ。

誰も相手をしていない相手が突如倒される。

そのようなことが目の前で起きればどうなるだろうか？

答えは単純だ。

その場を恐怖が支配する。

突如何も無いところで攻撃を食らうのだ。

例え自信でなくても、次は……という感情に支配される。

こうなってしまう場合いるかもしれない「見えない敵」に意識を

向けてしまい帰って危険に晒してしまう可能性があるのだ。

そうなってしまうかわからないように姿を見せればいいのだが、そうすると

「複数箇所川添 美鈴が存在する。」という真実が生まれてしまう。

そうなってしまった場合確実に彼女が何らかの力を隠していることがバレてしまうのだ。

そこから彼女が異能者であること……「異能」そのものの存在が明らかになってしまう可能性がある。

だから彼女は自身の能力を使うことができないのだ。

蓮夜『俺なら気付かれても正体はバレることがないんです。』

そう、彼は違う。

彼の場合元々その場に存在しないはずの人物なので元々情報が無い。  
確かにそこに誰かがいたという情報は残るのだが、それだけだ。

それもそのはずだ。

元々彼はそこにいるはずがないのだから、

それに彼の能力は多彩であり汎用性も高い。

美鈴のような自身の複数や存在を希薄させることでの認識阻害も出来ない。

だが、彼にも認識ではなく感覚情読を隠蔽する方法なら可能だ。

そして何より彼には彼女にはない圧倒的な戦闘能力がある。

その力ならアルトラ級も被害なく単独での討伐が可能だ。

それならば彼女の目的である被害を出さずに自分達の異能がバレることなくこの作戦を完遂できる。

しかし、

美鈴『・・・それでは、また君が・・・。』

だがそれは彼を1人で戦場に立たせなくては行けないということだ。

確かに彼は彼女と出会うまで1人で戦場に立ち続けていた。

そして彼女の知る中で戦闘経験、能力ともに彼は最高峰の実力者だ。

しかし、そうだとしても彼はまだ未成年・・・それも中学生というまだ友人と遊び遊ぶ・・・そのような当たり前の生活をしているはずなのに、彼はその全てを捨ててこの血に濡れた道を歩んでいる。

そして彼も限界が近い。

まるで砂の塔のように、これ以上砂を削ってしまえばすぐに崩れ  
しまう。

彼にも後がないのだ。  
そのような状態の彼を戦場に出したくない。  
それが彼女の思いだ。

蓮夜『大丈夫ですよ・・・それに姐さんももう限界でしょう？お互い様ですよ。・・・それに失礼かもしれませんがこれは姐さんではどうにもできません。』

しかし、現実が彼女の思いを否定する。

これしか手がない。

それが真実なのだ。

彼を戦場に出したくないが出さなくては被害が想像を遥かに超えたものとなる。

その被害の中にもしも2人の護るべきものがいたら2人は確実に戻って来れなくなるだろう。

特に彼は彼女の想像も絶する悲惨の最後を迎えるだろう。

彼女は彼のそのような姿を見たくない。

だからこそこの選択肢しかないのだ。

夢結の安全と異能の秘匿を確実に成功させる方法が、

美鈴『蓮夜・・・。』

蓮夜『姐さん・・・姐さんは俺のことよりもまずは自分の心配をしてください。』

美鈴『それは問題ないさ、今は安定している。』

蓮夜『・・・俺にはそうは見えませんが?』

美鈴『・・・ッ!?!』

(しまった!)

彼女を後悔の念が襲う。

しかし悔やんでももう遅く、

蓮夜『……かなり精神的にも肉体的にも疲労が出ていますよ。……こんな状態で安定しているとは俺は考えられません。』

美鈴『これは急いできたことと急な司令で精神的にきつくてね。それが原因だと思うが?』

彼女は平然とした顔でそう言い放つ。

蓮夜『……それに、』

美鈴『……。』

蓮夜『存在核がブレてますよ?』

美鈴『そんなはずは!』

蓮夜『やつぱり……もう限界なんですわね。』

美鈴『何を言っているんだい君は?……全然不安定になってないじゃないか?』

蓮夜『そうですよ、今は……なのになんで姐さんは慌てたんですか?』

美鈴『それは君がいきなりそのようなことを言うから……。』

蓮夜『慌てないはずですよ?……姐さんの方が存在核を……魂を知覚することに長けているんですから、』

美鈴『……。』

蓮夜『今は誤魔化しているんですね?……そうじゃないとさつき  
の慌てようが説明できません。』

美鈴『……。』

蓮夜『姐さん!』

美鈴『……その通りだよ。……もう僕には余裕が無い。』

蓮夜『やつぱりそうですか……それなら尚更見過ごせません。』

美鈴『だけど君には関係のな……。』

蓮夜『関係ないわけないでしょう!』

美鈴『!?!』

彼の怒声が静まり返った森の中に再び響き渡った。

それは先程のものとは比べることの出来ないほどの怒気が込められておりその重圧に彼女は耐えきれず尻もちを着いた。

蓮夜『俺が人のことを言えないのは分かっていますが一つだけ言わせてもらいます。．．．あなたは自分のことをなんだと思っっているんですか!．．．人形ですか?．．．それとも兵器ですか?．．．姐さんのことですからどうせ生け贄とでも思っっているんでしょうけど．．．姐さんには姐さんを思っってくれる人がいるんですよ!．．．それなのに．．．夢結の気持ちはどうするんですか!』

美鈴『それは．．．分かっているさ。』

蓮夜『いいや分かかってない!．．．「決して君に辛い思いをさせない」そう言いましたよね?もうその約束を破る気なんですか?』

美鈴『．．．そういう訳では。』

蓮夜『姐さんがそう思っけていても俺にはそう感じて仕方がないんですよ!』

彼の自身の本音をぶつける。

蓮夜『それに姐さんが居なくなつて悲しむのは俺だけじゃないでしょう?』

美鈴『．．．夢結。』

蓮夜『そうです。．．．夢結は繊細ですからもしも親しい人がいなくなつたら壊れてしまうかもしれない。．．．だから2人で夢結を守ろうと決めたんじゃないですか!』

美鈴『．．．蓮夜。』

蓮夜『．．．。』

美鈴『ごめん、僕がどうかしてたよ。．．．そうだ、夢結を守るんじゃないか。．．．何を考えているんだ僕は、』

蓮夜『．．．姐さん。』

美鈴『ごめん．．．やっとなつたよ。僕のしなくては行けないことを、』



蓮夜『……』

美鈴『……蓮夜、手伝ってくれるかい。』

彼女は真剣な眼差しを彼に向ける。

すると彼は同じく真剣な眼差しを彼女へと向けて、

蓮夜『それくらいお易い御用です。……一緒にこの戦場を生き残りましょう。』

美鈴『……ああ。』

2人は拳を前に出してお互いの拳にぶつける。

その2人の表情は晴れ晴れとしたものとなっていた。

## 過去⑰

辺り一帯に金属同士がぶつかり合うような音が鳴り響く、その中を上々ではない数の何かが走り抜けた。

何かは木々の間を抜けて進む。

その生物とは思えない程異形な姿をしており、その体は鋼鉄のような輝きを放っているがその動きは生物のように滑らかであった。

何かを持つ大きな刃物のような爪は、その足が地面を抉り木々を切り裂きながら進んでいく。

破壊の権化のようなその姿を持った何か・・・ヒュージの動きは何か焦りのような感じるものであった。

ただただ前へ、物の何かから逃げるように同族であるヒュージすらなぎ倒しながら進んでいく、

ヒュージは自由意志がないためにこのような行動をせずただ周囲の同族以外の生物を殺戮するためにのみ動く、

そのはずがそこにいるヒュージはまるで捕食者から逃げる小動物のような動きをしている。

木々の間を進むヒュージの群れを影が通り抜けた。

その陰に気が付いたヒュージの群れが足を止めた。

その時、

その場にいた全てのヒュージがその胴体を切断されその活動を停止する。

ヒュージだったものの残骸の上に影が姿を表した。

蓮夜『この辺り一帯のヒュージは一掃できたか・・・。』

彼がいた。

少し息は荒いがその身体には傷もなく、彼の着ている黒色のロングコートにはホコリひとつすら着いていなかった。

蓮夜『……姐さん達が到着するまであと三日……俺は俺の仕事  
をしますかね。』

彼女から甲州撤退戦の話を聞いた彼は数日後山梨に来ていた。

蓮夜『……まだリイは拠点の設置のために動いていないな……  
なら今動くが吉か、』

すると彼は霧のようにその姿を霧散させて消える。

数秒経つと木の上に姿を現し、木の枝を足場にしてそのまま森を進  
んで行く。

しばらく進んでいると木々がなくなり広い草原が顔を出した。

彼は地面に着地すると立ち止まり前方を確認する。

蓮夜『……見つけた。』

彼の目線の先……そこには黒い壁がそびえ立っていた。

彼はそれを確認するとすぐさま上空へと跳躍しまるでそこに足場  
があるかのような足取りで空へと登った。

登っている壁が途切れ彼を月明かりが照らす。

それからしばらく彼は上へと進み、空気を強く踏み締めた。

すると足元に波紋が広がりそこに彼は降り立つ。

彼は周りを確認すると視線を下に向けた。

数秒経つと彼の表情が歪み険しいものへと変わっていく。

蓮夜『……これは想定よりもヤバそうだな……。』

彼の見ているものそれは、

蓮夜『この前確認した時よりも規模が大きくなってる。』

直径数キロにも渡る黒い球体・・・ネストがあった。

蓮夜『・・・この前見た時よりも一周り・・・いや、二周りは大きくなってるな。・・・俺が先に来て良かった。』

彼の頬を汗が伝う。

そのネストの成長速度は彼の予測を超えており、もしも彼が来る前にほかの誰かがこれを発見していたらと思うと・・・彼の背中を冷たい何かを通り過ぎた感覚が襲った。

蓮夜『これは早く取りかつた方が・・・ん？』

彼がその腰に下げている彼の身長程の長さを持つ大型のアタッシュケースに手をかけようとするやと突然携帯が鳴り出した。

蓮夜『こんな夜遅くに・・・ってことは、』

何か心当たりがあるようなことを呟きながら彼は画面を見ずに携帯を取り出し耳に当てた。  
すると、

美鈴『蓮夜・・・今大丈夫かい？』

スピーカーから美鈴の声が聞こえた。

蓮夜『やっぱり姐さんですか・・・どうしたんですかこんな時間になん？』

美鈴『いや、いつも君とあっている時間帯だからどうしてるのか気になったんだよ。』

蓮夜『今辺り一帯の障害になりそうなヒューズを一掃したところで。』

美鈴『つまりこれからのかい？』

蓮夜『はい、これからネストに強襲をかけます。』

美鈴『本当に大丈夫なのかい？・・・君一人で・・・やはり僕も行った方が・・・。』

蓮夜『大丈夫ですよ・・・ネストの成長速度も想定範囲内ですし、これなら1人でもどうにかかります。ですので姐さんはアールヴヘイムの・・・夢結のことをよろしくお願いします。』

美鈴『すまない、君に危険なことばかりさせてしまって・・・。』

蓮夜『姐さん、こういうのは適材適所ですよ。俺ならリスクなくこういう裏のことが出来ますが、逆に夢結のことを守る・・・表のことは出来ません。・・・姐さんなら夢結のことを守ることが出来ます。だからいいんですよ！お互いにできることをやれば！』

美鈴『・・・そうなのかな？』

蓮夜『そうです。だから、何も気にしなくていいんですよ。』

美鈴『わかった、こっちは任せてくれ・・・だから、そちらのことは頼むよ。』

蓮夜『はい！任せてください！』

彼は通話を切ると大きく息を吸い、

蓮夜『・・・ふう、行くか。』

彼は1歩前へと踏み出しネストへと向かって飛び降りた。

ネストの外壁にぶつかる瞬間彼は左手を前に出す。

外壁と掌が触れた瞬間火花が飛び散る。

蓮夜『・・・グッ！』

彼のロングコートの裾が飛び散り腕に幾つもの裂傷が走る。

蓮夜『・・・アアアアアアア』

彼の肩まで裂傷が達したその時、  
ガラスが割れる音と共にネストの外壁が割れる。  
彼は外壁にできた穴を通り抜けてネストへと侵入する。

蓮夜『・・・物理障壁。』

落下する中彼は再びアタツシケースに手をかける。  
その時、下から光線が彼に向かって襲いかかる。

蓮夜『チツ！』

彼は身体を捻って光線を躲しアタツシケースにマギを流した。  
するとアタツシケースが分解され中から中身が姿を表した。  
それは彼の身長よりも長く反り返った刃が月の光を反射して怪しく輝いた。

蓮夜『さあ、次はどう来る・・・。』

彼が刃・・・大鎌を構えると再び彼を光線が襲いかかった。

それを彼は大鎌を振るうことで光線を切り裂き防ぐ、  
そこから数十秒彼が光線を迎撃し続けると地面が見え始めた。

彼は地面に音もなく着地するとそこに光線では無い何か襲いかかる。

彼それを切り付けるが相手の勢いを殺し切れず吹き飛ばされてしまふ。

そこに光線が襲いかかるがその光線が当たる直前彼の姿が消えた。  
しばらくすると彼が先程光線が通り過ぎた場所の横に現れて攻撃が来た方向を見ると、

そこには、2体のアルトラ級ヒューズが佇んでいた。

片方は、圧倒的な装甲と両腕が砲門のようなになっており四本足で地面を踏みしめた超重量級。

そしてもう片方は、細身の異形の姿をしており腕もなく球体の並んだような尻尾のような器官から大きな針が生えている軽量級。

この全く正反対の印象を受ける2体が彼の前に佇んでいた。

特に異形のアルトラ級は異常であり腕以外にも足もなくその体は空中に浮いていた。

本来アルトラ級は人型が基本でありこのような異形の姿をしたアルトラ級はかなり特殊であった。

蓮夜『これは結構厄介そうだな。』

彼はすぐに体制を前に倒して異形のアルトラ級に接近する。

その時何回もアルトラ級が針で彼を串刺しにしようとするが彼は瞬時に姿を消して横に現れるを繰り返しどんどんと距離を詰めた。

異形は突きでは当たらないと考えたのか今度は針を横風に薙ぎ払う。

それを彼は跳躍することで回避しそのまま尻尾に乗って異形の胴体へと近づいた。

彼は近づきざまに異形の胴体を切り付けるとその装甲を深々と傷つけるがすぐにその傷は再生し何事も無かったかのように彼に襲いかかる。

それを躲し大鎌で逸らし弾いていると異形の針が地面に深々と突き刺さり一瞬動きを止めた。

その隙に彼が再び異形の懐に潜り込もうとした時、

彼は空中を蹴り瞬時に後退を始めた。

すると、先程まで彼のいた場所と彼が進もうとした場所に二条の光線が通り過ぎた。

蓮夜『あの砲撃が厄介だな……。』

彼が大鎌を異能のアルトラ級へと向けて、

蓮夜『引きずり込ませてもらう。』

彼がそう眩くと一帯を光が呑みこんだ。

光が収まるとそこは何も無い白い空間が広がっておりそこに彼と異形のアルトラ級のみが存在していた。

蓮夜『これで邪魔もないな……。』

そういうと彼はアルトラ級へ向けて駆け出した。



## 過去⑱

刃と刃がぶつかり合うような甲高い音が辺りに鳴り響く。

何も無い真っ白な空間で一人の少年とビルの何倍もの大きさの異形がお互いの得物で相手を狙う。

異形はその大きさにそぐわない圧倒的な大きさを持った刃を振り下ろし少年はその刃・・・大針をその手持つ大鎌でいなす。

その体格差から確実に潰されてしまいそうな細々とした身体を回して相手の力を利用して攻撃を防ぐが、大針が地面にあたる度に地面が揺れ轟音が響き渡りその風圧で少年の身体は木の葉のように舞い上がる。

少年が空中に投げ出されたことを好機と見たのか異形はその大針で少年を貫こうとする。

大針が少年を刺し貫くその時、彼の姿が消えた。

大針が先程少年のいた場所を通り過ぎた瞬間、少年が異形の尻尾の上に姿を現した。

そのまま少年は身体を捻りその勢いを利用して球体同士の付け根に大鎌を叩きつけた。

少年の振り下ろした刃はまるで抵抗がないかのように吸い込まれていきその刃渡りよりも太い尻尾を一振のもと切断した。

支えを失った大針は重力に従い大きな音を立てながら地面へと落下する。

蓮夜『・・・そこまで見ずらくないな。』

少年・・・蓮夜はそう呟きながら再び姿を消す。

異形は彼を探すように頭部を動かしていたが見つけれなかったようでその動きを止めた。

異形は自身の尻尾を前方に構える。

すると尻尾はその断面が蠢き出し再生を始めた。

しばらく経ち大針が再生仕切る間際、

蓮夜『再生能力は高いな……。』

異形の背後から彼の声が聞こえた直後、

『シャン！』

という音と共に再生した尻尾は根元から再び地面へと落下する。

蓮夜『けど速度はそこまでだな。』

彼は音を立てずに着地すると大鎌を横へと薙ぎ払った。

その直後異形の全身に無数の切傷が刻まれた。

それにより青い液体を全身から吹き出す異形はすぐさまその場を離れようとするが、再び彼が大針を振ると切傷が増えると共にまるで何かに押し潰されるかのように地面に落下した。

その衝撃で地面が揺れるが彼はそれを気にせず倒れた異形へと駆け出した。

異形へと近づいた彼は飛び上がり身体を捻って回転する。

蓮夜『これで……。ツ！』

遠心力を利用した渾身の一撃が異形へと叩き込まれる寸前彼は空中を蹴り身体を捻りながら大鎌を自身の前へと引き寄せた瞬間、

彼をとてつもない衝撃が襲った。

勢いを殺し切れず吹き飛ばされるが彼はバク宙の要領で体勢を整えて地面に大鎌の刃を突き立てた。

地面が壮絶な音を立てながら削れて行くが彼の勢いが収まってい

き彼は足をバネのようにして着地する。  
しかし、それだけでは勢いを殺し切れずに地面を転がり異形から1  
k m程離れたところでようやく止まることに成功した。

蓮夜『……』

彼はすぐに起き上がるがその身体はボロボロになっていた。

左腕はありえない方向に曲がり右足は根元から無くなっており大鎌を握る右腕も血が上がりおりその肌は真っ青に腫れ上がっていた。

彼はそのことを気にせず異形のいる方向を睨む。

するとそこには先程よりも大ぶりの針を持ち傷一つない異形の姿があつた。

蓮夜『なんで傷が消えてるんだ？』

彼が異形を凝視すると異形の下には何か巨大なものがあつた。

それは砂のように崩れてその姿を消していく。

蓮夜『もしかして脱皮か？』

彼は異形が蠍に形が酷似しているため昆虫の特徴の一つである脱皮ではないかと予測する。

蓮夜『そう考えると……まずいな。』

彼はその可能性から最悪の場合を想定した。

生物には脱皮を繰り返すことで大きく強靱な身体へと成長して行くものも存在する。

もしも、傷つく度に脱皮するなら……。

もしも、脱皮する度に成長するなら……。

この異形は短期間で恐ろしい程強化していくヒュージであるということになるのだ。

蓮夜『早く倒さないと！』

そうなると短期戦をしなければ余計に時間がかかってしまい相手の力を高めてしまうかもしれない。

そのため短期決戦を仕掛けなければ行けない。

そう確信した彼は一気に接近した。

すると異形は大針を薙ぎ払う。

その大針は先程とは比べられないほどの速度で彼へと襲いかかりそれを彼は大鎌の刃で逸らし、その勢いを利用してさらに接近する。

彼は異形の胴体に張り付くと自身の身体を軸に縦横無尽に大鎌の刃を走らせる。

それにより異形は再び深々とした傷が刻まれる。

彼が再び切りつけようとした時、後ろから大針が迫ってくる。

彼は大針に気づいていないのか異形の傷を増やしていく。

そして、大針が彼に届く寸前彼の姿が消えた。

異形は大針の勢いを止めきれずに自身の胴体を貫いた。

彼は異形の背後・・・自信を貫いた大針の上に現れてそのまま異形の背部を切り裂く。

異形はすぐに大針を引き抜こうとするが大針は引き抜けない。

大針には鎖が巻き付けられておりそれは異形の背部と繋がっており大針の動きを阻害する。

しかし異形を縛る鎖は徐々にヒビが入っていきあと数秒で壊れるだろう。

彼はそれを感じ取るとすぐさま大針から飛び降りる。

そのまま彼は反転した世界で彼は上方を切り払った。

するとその刃は尻尾へと吸い込まれ、

その刃は通り過ぎざまに尻尾を再び両断した。

それにより異形は自身を貫く大針を抜けなくなりその傷口から青い液体を垂れ流しにしている。

そのまま彼は異形の周りを回りながら大鎌を振るい続ける。

それにより再び異形の全身に切傷が刻み込まれる。

異形はそれを阻止しようと尻尾を再生されようとするが彼が先端

を切り裂き再生を阻害する。

巨体を利用して推し潰そうとすると一瞬で背後に現れてより深い傷を与える。

体を振り回し彼を振り落とそうとすると鎖で動きを止められて端からその体を切り刻む。

異形がどう動いても彼はすぐに対応し決定的な一打を与え続けその巨体はどんどん小さくなって行った。

そして異形の体積が半分になったその時、

異形の背中が開いた。

そこからは傷のない小さな異形が姿を現した。

だがその瞬間彼が後退すると球体状の炎の塊が異形へと降り注いだ。

その炎は燃え続けその熱で異形の表面が溶ける。

しばらくして異形に付いた炎が消えると全身が溶け焦げた悲惨な状態になっていた。

そこへ彼が接近し再び異形を切り刻み始める。

異形の体に先程とは比べ物にならない勢いで傷が刻まれていき、

蓮夜『・・・見つけた!!』

彼は何かを見つけながら空気を蹴り瞬時に異形の右横に回り込んだ。

そして、大鎌を振りかぶり、

全力で異形へと叩き込んだ。

その刃は先程までの切り裂く感覚とは異なりまるでまるで鍵穴に鍵を差し込むように・・・まるでそこが空洞であるかのように刃が突き立てられた。

そして全ての刃が差し込まれたその時、

異形の動きが止まる。

今まで活発に動いていたとは思えない程に硬直しその体は静かに下へと落下する。

そして異形が地面に接触したその時、  
異形の体が崩れ始めた。  
砂のように崩れる異形の体は再生する気配を見せずその形を失っ  
ていく。

蓮夜『・・・終わったか。』

彼はそう呟くと振り返る。  
すると空間を光が包んだ。

光が収まるとそこは先程までいたネストの中であり目の前にはも  
う一体のアルトラ級の姿があった。

しかし彼はそのアルトラ級に見られることなく姿を消した。

姿を消した彼はしばらくするとネストの外に姿を現した。  
そして近くに木を見つけるとそこへと歩み寄り木に背を預けて座  
り込む。

彼の息は荒くなっておりその様子から彼が疲弊していることは明  
白であった。

蓮夜『・・・次は、』

彼が次の目的地を確認するために端末を確認すると、

蓮夜『・・・姐さんか？』

そこにはびっしりと並んだ美鈴からの着信履歴があった。  
彼はそれを見て寒気を襲う。  
疲弊していることを忘れた彼は急いで彼女に連絡を取ると、

蓮夜『姐さん！どうしたんですか！』

美鈴 『れ、蓮夜！今までどうしていたんだい!？』

蓮夜 『アルトラ級と戦ってました。』

美鈴 『蓮夜・・・落ち着いて聞いてくれ。』

端末越しに彼女から安堵の音が聞こえたがすぐにその声は真剣なものに切り替わる。

その変化に彼の中で警鐘が鳴り響く、

蓮夜 『・・・どうしたんですか?』

美鈴 『先程報告があつたんだが・・・。』

彼女の言葉が止まる。

そして何かを覚悟するかのような深呼吸をする音が聞こえる。

そして、

美鈴 『鎌倉府にヒュージの大群が現れた。』

彼の中で何かが壊れる音が聞こえた。

## 過去⑬

いつも静寂さが漂う街は今騒音が鳴り響いていた。

皆が寝静まり光の消えている真夜中であるはずなのだが、今日は街全体に光が灯っており住人達がある方向へと走っている姿が見えた。

その中屋根の上を走り抜け人々とは真逆の方向へと進む小さな影があつた。

蓮夜『・・・まだ家の方までは来てないか!』

彼は何かを探すように周囲に目を配りながらどんどんと前へと進んで行った。

その先では金属同士がぶつかり合うような甲高い音と爆発音・・・そして激しい光が弾けていた。

蓮夜『どこにいるんだよ・・・!父さん!母さん!』

彼が探すもの・・・それは彼の両親だった。

彼は美鈴の連絡を受けてすぐに鎌倉府へと戻って来ていた。

その時に瞳へ多大な負荷をかけてしまい片目が弾け飛ぶがそのよくなことを気にせずには彼は自身の家へと向かう。

その間に逃げ惑う人々が目に移り最悪の事態を想像するがその考えを頭を振ることで振り払いながら足を早めた。

そして家に着くとすぐに中を確認するがそこには両親の姿はなく彼はすぐに避難所へと目指して駆け出す。

そして彼は避難所へとたどり着くがそこにも2人の姿はなかった。そして彼は今までに通ってきた場所にも2人がいなかったことから自分を探しに戦闘地域・・・いつも彼の行く森へと向かったのではないかと考えた。

彼はすぐさま駆け出し、そのまま戦闘地域に目を向けるとそこは色々な波長がいり混じり探しにくくなっているがそこから両親の反



応が僅かに感じ取ることが出来た。

すると彼はすぐに転移しようとするが片目が潰れていたため転移が不可能になっていた。

蓮夜『負担をかけすぎた！・・・頼むから間に合ってくれ！』

彼は残っている片目で能力を使用し現在彼の出せる最高速で2人の居るであろう場所へと向かった。

そして彼が反応があつた場所の近くまでたどり着いたその時、前にあつたビルが倒壊し始めた。

周りから悲鳴が響く中彼はその足を止めた。

蓮夜『・・・あつ・・・あああ。』

そこは彼の目指していた・・・両親の反応があつた場所だった。

蓮夜『・・・嘘だろ。』

彼はうわ言を呟きながらたどたどしい足取りで前へと進む。

崩れたビルの瓦礫の前に膝をついく。

そのまま彼は上を向いてただ元々ビルであつたものを見つめていた。

しばらく放心していると再び瓦礫が崩れ始めた。

その瓦礫が彼にぶつかり彼が倒れると、そのまま瓦礫に埋もれてしまった。

瓦礫に吞まれた彼はすぐにそこから脱出しようともがくが、目の前に落ちてきた2つの光るものによって頭が真っ白になってしまった。

それを見た彼は目をそらそうとするが瓦礫が邪魔をして顔を逸らすことが出来ず、まるで意思があるかのようにそれは彼の前へと転がってきた。

そんなわけが無い、

嘘であってくれ、

この2つの言葉が頭を駆け巡り脳内をかき混ぜる。  
しかしその瞳に映るものによってそれが現実だと認識させられて  
しまう。

蓮夜『・・・うそ、』

脳がそれを理解する事に頭がクリアになっていき同時に絶望感が  
彼を襲う。

蓮夜『・・・うそ・・・だ。』

彼の考えうるな方でも最悪な結果の1つが、

蓮夜『・・・嘘だ。』

現実となった。

蓮夜『嘘だ！嘘だ！嘘だ！嘘だ！嘘だ！嘘だ！』

それは・・・赤く染った、両親の結婚指輪であった。

蓮夜『・・・嘘だ!!!』

その時彼の中で何かの切れる音が聞こえた。

蓮夜『あ・・・あああ・・・。』

彼の身体がまるで痙攣するかのように激しく震える。

蓮夜『・・・あああ・・・ああ・・・。』

しばらくすると痙攣も落ち着いたが再び静かになった。

夢結「・・・蓮夜？」

彼女は恐る恐る彼へと近づく。

その間も彼は身動きもせずにいるが、その静かな様子とは裏腹にとつもなく嫌な気配が辺り一帯に漂っていた。

そして彼女の手が彼の肩に触れようとしたその時、

蓮夜『あ・・・？』

夢結「ッ!？」

蓮夜『ははは・・・はははははは・・・あははははは!!』

唐突に彼が狂ったように笑い始める。

辺り一帯に笑い声が響き渡りその声はまるで周りの音をかき消すかのように全てを呑み込んだ。

そして彼の声に呼応するように彼を呑み込んでいる瓦礫が大きな音を立てながら振動し始める。

振動は次第に多くなつていき周りの瓦礫が崩れ始める。

次第に大きくなる音に鉄骨同士がぶつかり合っているのか金属音も響き始める。

瓦礫が崩れる彼が瓦礫の外に出るとゆっくりと身体が浮いていき地面から足が離れて浮遊を始めた。

その間も彼の笑い声は止まらずに、なお響き続ける。

蓮夜『あははは・・・は・・・』

急に笑い声が止まった。

彼の顔がゆっくりと上がる。

彼女は彼の顔を覗く。

するとそこには、  
なんの感情のこもっていない、  
無表情の彼がそこにいた。

夢結「蓮夜！しっかりしなさい！」

彼女が彼に向かって声をかけるが聞こえるはずもなく彼を包み込み  
み不穏な空気がより濃くなっていき……。

蓮夜『……』

その場にある全てが消えた。

## 過去②⑩

そこにいる全てのものが消えていく。

あるものはないも無いはずの場所で切り刻まれ、

またあるものは突然現れた杭のようなものに串刺しにされ、

またあるものは黒い球体が現れて呑み込まれ、

またあるものは突然発火し、

他にも凍りつくもの、

押しつぶされるもの、

ねじ曲げられるもの、

砂になるもの、

破裂するもの、

結晶に覆われるもの、

同士討ちをするもの、

このよう自体があたり全体で瞬きの間の一瞬とも言える僅かな時間  
間に数十・・・数百回と繰り返されている。

その光景はまさに地獄がこの世界に顕現したかのようなものでありこの  
場にあるもの全てを壊し続けた。

その中でその猛威の中を平然と佇む一つの影があった。

??? 『・・・』

その人影は少年の姿をしており宙に浮いていた。

その人影はただただ正面を見るだけで微動だにせず、ただそこに佇  
み続ける。

しばらく達人影の佇み続ける場所を中心に辺り一帯の全てが消え  
去った時、

人影が手を前へと突き出した。

すると何もない場所から結晶が現れてその大きさを肥大化させて  
いく。

そして結晶達は人影の身長の数倍・・・数十倍まで成長すると一斉  
に碎け始めた。

その碎けた結晶の中から顔を出したものは、

先程壊された建築物であった。

一斉に姿を現す建築物・・・それにより街は元の姿を取り戻すが先程までいたもの・・・ヒュージだけはその存在自体がそもそもなかったかのように姿を消していた。

人影は手を下ろすと街には目もくれず森の中へと姿を消した。

人影は森の奥へと進んで行く、

その間にもヒュージに出会おうがその全てが先程と同じ末路を追った。

それから人影は森を進んで行くと唐突に歩みを止めた。

そこは小さな丘の上でありそこからは森全体を見渡すことが出来る。その森の先には海が見える。

夢結 「ツ!?!?・・・なんなの・・・これは・・・。」

彼女を突如頭痛が襲う。

今まで彼の経験を追体験し痛み慣れきったその身体には気にならない小さな痛みのはずだが、

その痛みは彼女の頭の中で強く響き渡り彼女を思考できないほどに追い詰める。

その痛みに嫌悪感はなくまるで忘れていた大切な何かを思い出したかのような幸福感を覚えるものであった。

だが、それと同時にこの先に進んでは行けないと身体が悲鳴をあげてる以下のようにも感じ取れる。

??? 『・・・ツ!?!?』

彼女が痛みを耐えようとうずくまっていると突如人影が苦しみ出した。

人影は頭を抑えて膝を着く。

しばらく経ち痛みが収まり出したことで彼女が立ち上がった。  
そして周りを確認すると人影も同じくうずくまっているのを発見  
しすぐに駆け寄る。

夢結「蓮夜!どうしたの!?

蓮夜?」……。」

人影……彼は彼女の言葉に反応せずその場にうずくまり続けた。  
その様子を心配に思った彼女は彼に向かって手を伸ばす。

触れられないことなど分かっているが彼女にはそのことなど気に  
せずに彼の肩へと手を伸ばし、

彼の肩へと触れた。

夢結「……えっ?」

彼女は困惑する。

今まで触れることの出来なかった彼に触れることが出来ているの  
だ。

彼女がこの突然起こった変化に止まっどっている、

世界にノイズが駆け巡った。

そのノイズは次第に大きくなり辺り一面を覆い尽くす。

彼女も必死に抵抗しようとするが、

その抵抗も虚しく彼女の意識は落ちた。

夢結「……うつ。」

再び襲う頭痛の痛みにより彼女は目を覚ました。

夢結「……ここは?」

彼女の目の前には木々が広がっておりそこが森であることがわかる。

このままでは詳細が分からないため周りを見渡そうとすると、

夢結『・・・首が動かない!?!・・・それだけじゃないわね。』

いくら動かそうとしても首が動くことがなく、それどころか身体そのものが動かなくなっていた。

夢結『・・・周りの景色が大きく感じるわね・・・視線が低いのかしら?』

この異常事態に彼女はすぐに冷静さを取り戻し自身の状況を確認する。

すると自身の周りのものが大きいように感じた。

??? 「置いてかないでよ!」

夢結『えっ?』

背後から懐かしい声が聞こえた。

それは自身のよく聞く声よりも幼さを感じたが、その声は彼女の記憶上にあるものであった。

彼女がすぐさま振り返ろうとするがやはり身動きすらすることができない。

それでも彼女がどうにか振り返ろうとしていると、

唐突に彼女の身体が動き始めて視点が背後へと向いた。  
そこに写っていたものは、

??? 「待って〜!」



幼い時と彼は、黒鉄 蓮夜の幼少期の姿だった。  
彼は必死にこちらへと向かってくる。

??? 「蓮夜！遅いわよ！」

夢結 『・・・この声・・・誰のかしら？』

彼女は自身の口元から発された声に違和感を感じた。

この声・・・確かに自身の知っている声のはずなのだが誰の声なのか分からない。

この声の正体を考えていると、

蓮夜 「ゆーゆー！やつと追いついた。」

彼の一言により彼女の疑問が解決した。

夢結 『・・・私の声なのね。』

この声は幼い頃の彼女自身の声であった。

夢結 『つまり私は過去白井夢結の私の中にいるということね。』

過去の私  
自身の中に今の私自身が居る。

この特殊な状況に困惑をするがすぐに冷静さを取り戻す。

ゆゆ 「蓮夜・・・大丈夫かしら？」

蓮夜 「うん！大丈夫だよ。」

ゆゆ 「それなら行きましようか！」

蓮夜 「まつ、待ってよ！」

彼女が駆け出した彼が追う。

やはりリリイになるために訓練している彼女と一般人の彼との間

では体力差があり2人の距離が離れていく。  
少し離れると彼女が止まり近づくとまた走り出す。  
それを繰り返し続けると光が差し込み。  
森が晴れた。

夢結『ここは！』

そこには森を見渡すことのできる丘だった。  
森の先には海があり太陽の光で宝石のように輝いていた。

そこは先程まで彼女のいた場所・・・彼が佇んでいた場所だった。

蓮夜「はあ・・・はあ・・・やっと着いた！」

ゆゆ「どうかしら！学院での授業の時に見つけたの。」

夢結『・・・私が見つけた？』

ここで彼女は違和感を感じる。

私はこのような場所を見つけたか？

見つけたとしても彼と一緒に来たか？

彼女には、その覚えがなかった。

まるでその記憶だけ消えたかのように、

夢結『記憶にないはずの情景・・・これは彼の見た過去軌跡のはず・・・  
まさか！』

彼女がある予測にたどり着くその瞬間、

彼の身体が空に舞った。

彼の表情は驚愕に染まっており、

彼女が確認するとそこには、

彼を押すように前に突き出された自身の腕と、

・  
・  
・  
胸の中央から生える刃があった。

## 過去☒

身体を浮遊感が襲う。

幼いこの肉体はまるで木の葉のように宙を舞う。

上下が反転した世界の中でただ青く澄み渡った空だけが見える。

何かに包まれるかのような浮遊感・・・それはすぐに終わりを告げた。

力の入らない身体にありえないほどの衝撃が襲う

視界の端には木々が生い茂っており、その先から先程まで彼女達のいた崖があった。

喉の奥から熱い何かがこみ上げる。

ゴポゴポと喉から嫌な音が鳴る。

先程まで活発に動いていた身体が次第と寒くなっていき視界が霞む。

その視界の中に生物ではない何かが映った時彼女の視界は暗転した。

その時に何か、自身を呼ぶ声が聞こえたような気がした。

??? (・・・なんで?)

誰かの声が聞こえる。

だがその声は霞んでおりよく聞こえない。

??? (・・・どうしてなの?)

その声は次第に鮮明に聞こえるようになる。

??? (・・・いたいよ。)

夢結「この声は・・・」。

この声は先程まで彼女のそばにいた。

??? (どうしてなの? ゆゆ……)

夢結「……蓮夜?」

そこで視界が開けた。

歪んだ視界徐々に晴れていき映る景色が鮮明になっていく。  
その視界の先には大きな切株があった。

周りを見渡そうとするが先程と同じく身体は動かない。

蓮夜(……ゆゆ……どうしておしたんだろう。)

耳元で彼の声が聞こえる。

蓮夜(からだがいたいよ。)

身体が動き始めて立とうとするが左腕に力が入らず体勢を崩して倒れてしまう。

蓮夜「……あれ?」

彼が自身の左腕を見ると、

蓮夜「……まがってる?」

曲がっては行けない方向へと折れており、裂けた皮膚から白い骨が顔を出していた。

蓮夜「いたい……いたい! いたい! いたい! いたい! いたい! いたい!」

彼は自身の左腕を抑えて転げ回る。  
その転がった衝撃が傷口に響より身体中に激痛が広がる。  
しばらく転がり回っていると神経が麻痺したのか痛みが薄れてい  
く。

蓮夜「・・・あ”あ”あ”。」

蓮夜（なんで？なんで？なんで？なんで？）

深く呼吸をしながら脂汗を流し、彼は心の中で疑問を膨れさせる。

蓮夜（なんでボクは・・・いたいのか？）

幼い彼には理解のできないこと。

だがその理不尽が彼を襲っている。

この理不尽が彼の頭を蹂躪しているその時、

大きな音が鳴り響き彼の前に何か大きなものが落ちてきた。

彼がそれを視認すると、

蓮夜「ゆゆ!？」

そこには夢結の姿があった。

痛みを忘れて無理やり立ち上がり彼女へと駆け寄る。

蓮夜「ゆゆ! ゆゆ!？」

彼女のそばに近寄るとそのまま彼女を揺さぶる。

しかし彼女は反応を示さない。

彼の手のひらにヌルツという感触に襲われた。

蓮夜「・・・えっ？」

彼が恐る恐る自身の手のひら見ると、  
そこには、真っ赤になった彼の手があった。  
そしてその赤の発生源を見ると彼女の胸の中央であり、  
そこには反対側が見えるほどの大きな音穴が空いておりそこから  
赤が溢れかえっていた。

蓮夜「ゆゆ？・・・うそだよね？・・・ゆゆ？」

彼は再び彼女を揺する。

やはり彼女は反応しない。

蓮夜「ねむっちゃたの？・・・ならおきてよ？・・・ねえ・・・お  
きてってば？」

彼は揺すり続ける。

その現実を認めないために、  
しかし現実残酷だった。

ゆゆ「・・・。」

蓮夜「ゆゆ！・・・ゆゆ！・・・おねがい・・・おきてよ。」

彼女の身体が冷たくなっていく、  
手を握ってもいつもの温もりはなくなただ冷たさだけしか残ってい  
なかつた。

蓮夜「・・・。」

その現実が彼を襲う。

蓮夜（なんでゆゆがつめたいの？・・・なんでゆゆはおきないの？）

それでも彼はその現実を認めない。

認めてしまったら壊れてしまうからだ。

肉体が壊れている中で精神まで壊れてしまったら戻れなくなってしまう。

それを感覚的に理解しているのだろう。

だから彼は認めない。

彼が必死に彼女の身体を揺さぶり続けていると再び大きな音ともにも彼の前に大きな影が現れた。

そこには金属のような表皮を持つ生物のような何かがあった。

それは丸い胴体に三の大きな音鉤爪が伸びておりそのひとつには赤い何かが染まつていた。

そして彼は理解した。

あれが彼女が起きない原因なのだ、

蓮夜「・・・お前のせいかな？」

理解した時、

彼の中にあつた何かが弾けた。

その瞬間彼の頭を雷のような衝撃が迸る。

それと共にあらゆる情報が駆け巡り彼の脳に焼かれたような痛みが走る。

彼はその痛みを唇を噛むことで耐える。

あまりに強く噛みすぎたため口から血が垂れた。

瞳からも血が流れ始め強くその瞳を瞑る。

彼が無防備になつているところに謎の生物が近づいていく。

その赤く染まつた鉤爪を振り下ろそうとした時、

彼の瞳が開いた。

そこには左目にいく重にも重なった歯車が、右目には何も映っておらず何もかもを吸い込みそうなほどの暗さを持っていた。



蓮夜「……早く夢結を起こしてよ？」

彼がつぶやく。

その声は何も感情がこもっておらずただ冷たさだけを感じる声だった。

その声に反応したのか謎の生物は後ずさる。

蓮夜「起こさないって言うんだったら……。」

彼はそこで1歩踏み出した。

そこで覚悟を決めたのか謎の生物は彼を威嚇するように鉤爪を振り上げた。

蓮夜「……消えてよ。」

彼はそのまま前へと進んで行った。

## 過去☒

蓮夜「……。」

彼は歩みを止めることなく思考する。

目の前には彼女に傷を負わせた生物がいる。

その生物はこの幼い身体を容易に引き裂くであろう凶刃を携えており、それがいつ彼に向かって振り下ろされるか分からない。

このような状況下に置かれた場合どのような人間であつても腰を抜かして動けなくなつてしまふような空気が一帯を包み込む。

しかし、この状況でも彼は冷静にその生物を認識し思考を深めて行つた。

蓮夜（……今俺に必要なものは？）

やつに近づくための身体能力肉体が足りない。

相手を知るための知識が足りない。

戦うための技術技が足りない。

やつの攻撃を凌ぐための反射神経が足りない。

恐怖に耐えるための精神力が足りない。

戦い続けるための体力が足りない。

そもそも、アレを仕留める為の全てが足りない。

蓮夜（……今の俺に何ができる？）

身体能力肉体は不可能だ。

今から肉体が急成長することはありえない。

もしも可能だとしてもその急成長に肉体そのものが耐えきれず身体崩壊してが壊れてしまう。

知識は可能だ。

確かに今得られるものは少ないがそこからでも知識を得ることは

できる。

技術も不可能だ。

技術は身体能力と同じく長い時間をかけて育むものだ。

もしも技術を得たとしてもそれはただの鍍金偽物であり決して戦いに役に立たず、むしろ風となってしまう。

反射神経は可能だ。

人間は限界を超えて集中した時極限集中ソールと言われる状態になることがある。

その状態に慣れれば体感速度が上がり周りが遅く感じる。

そう慣れれば相手の動きを見る知覚することが可能だ。

精神力も可能だ。

今の自身には彼女を傷つけたアレに怒りがある。

それを利用すればアレに対しては恐怖を感じることなく動くことができる。

体力は不可能だ。

これも身体能力と変わらず急成長はありえない。

確かに火事場の馬鹿力と言われるアドレナリンを出すことで自身肉体を限界以上に行使することは可能だが現実的では無い。

蓮夜（・・・ならばどうすればいい？）

相手の全てを読み解く知識が必要だ。

相手の全てを見切る反射神経が必要だ。

何にも屈しない精神力が必要だ。

そして何よりもアレを仕留める為の力武器が必要だ。

しかし、そのようなものなど幼い彼が持っているはずもない。

蓮夜（・・・いいや。）

はずだった。

蓮夜（あるじゃないか！）

先程認識した。

どうしてあるのか、いつから自身の中にあるのか分からないこの異常な力。

これには彼の望む全ての要素が備わっていた。

蓮夜（・・・まずは、）

相手の情報を探る。

相手の体の構成を、

相手の次行動の可能性を、

周りの空間の物体位置を、

相手の全てを読み解く。

蓮夜（・・・表皮の硬度は鉄以上・・・炭素結晶物質以下・・・。）

生物は動き出しその凶刃を振り上げた。

蓮夜（・・・表皮内の硬化は鉄と同等程度になるが伸縮性に優れる。）

その凶刃は振り下ろされた勢いとともに伸び彼へと襲いかかる。

それを上半身を倒すことで躲し数歩後ろへと下がる。

蓮夜（・・・碗部の収縮距離は約30m・・・。）

彼の前を凶刃が通り過ぎ。

彼がアレを確認すると振り下ろしたものは別の刃を横薙ぎに振っていた。

蓮夜（アレの間合いは把握した。・・・次は、）

彼がアレを見ることに集中すると視界から色が消え失せる。周りの景色は白黒となりどんどんと周囲に存在するものを線としてのみ知覚出来るようになっていく。

完全に色が消え失せると次第と周りの動きが遅くなる。

生物が再び攻撃をするために腕を伸ばす。

その動きは先程とは比べることが出来ないくらいに遅くなっておりただ歩くだけでも躲すことが容易だと認識してしまう程だ。

それを避けるように身体を動かすと自身の身体の動きも遅くなっていることに気がついた。

この白黒の世界は自身の知覚のみが加速したことで生まれたものだとして認識する。

彼は生物の振り下ろした凶刃を数mm単位の短い間隔で躲しより懐深くへと入り込む。

蓮夜（・・・ここまで来れば、）

あとは仕留めるだけだ。

彼は右手を前へと突き出し手を開く。すると彼の掌に光が集まり始めた。

今の自分の体格肉体ではこの鉄以上の硬度を持った生物に対抗出来る兵器どころか通常の武器すら満足に扱えない。

ならばどうすればいい？

答えは簡単だ。

作ればいい。

彼はすぐにイメージする。

この未熟な身体で振るうことの出来る武器を、

あの生物を仕留められる武器を、

今の自分には何が足りない？

あの生物に対抗出来るであろう重い武器を持つための筋力が足りない、

あの生物に攻撃を届かせるためのリーチが足りない、

戦闘技術を持たない自分では一撃では仕留めることが出来ないためそれを補う手数が足りない、

ならばどうすればいい？

何を使えば相手を仕留めることが出来る？

・・・剣か？

いいや、振るえたとしても重さが足りない、

ならば、大斧か？

いいや、重さは十分だろうが、そもそも満足に振るうことも出来ず逆に振り回されてしまう、

それならば、戦鎚か？

いいや、それでは重さと取り回しは両立出来るだろうが今度はリーチが足りない、

リーチを補うならば、槍か？

いいや、たしかにそれならばリーチもあり重さも足りる。

しかし、槍の特性上回すことで手数を稼ぐことは出来るが自分の体格と筋力では回すことが出来ず、取り回しも悪くなってしまう。

手数が足りないのならば、双剣か？

これもダメだ。そもそも自分には2つの武器を振るうどころか1つの武器を使うことすら出来るか怪しいのだ。

この状態でこの手を選択するのは愚策とすら言える。

剣の扱いやすさに、大斧の重さ、

戦鎚の取り回しの良さに、槍のリーチ、

そして・・・双剣の手数、  
この全てを併せ持つ武器などあるのか？

結論から言う存在しない。

あれば銃火器のない時代のどの歴史上の戦争にも使われているはずだからだ。

それがないということは存在しないと言うところを指し示す。

そして銃火器も不可能だ。

そもそも銃火器に至っては構造が複雑すぎるため再現することは直接見た事のない自分には不可能だからだ。

蓮夜（・・・こうすれば、）

ここで1つの解へとたどり着いた。

1つにすることを考えては行けない。

複数を持てばいいのだ。

しかしそれは諸刃の剣である。

たしかに複数の武器を持ち状況に応じて使うことが出来ればこの問題は解決するだろう。

しかし、それには相応の技術と肉体が必要不可欠だ。

もしも、技術がなければ武器そのものを扱いきれず、

肉体が足りなければそもそも武器を複数持つことが出来ず持つたとしても動けなくなってしまう。

そのような隙を与えてはこの幼い身体はすぐに切り裂かれてしま  
うだろう。

・・・本来ならば、

蓮夜（そんなこと関係ない、）

武器を持たない？

ならば持たなければいい。

複数の武器を扱いきれない？

ならば使わなければいい。

これを聞けばほとんどの人が『不可能だ』と言うであろうこの矛盾……、

それを解決する方法を、彼は持っていた。

掌に集まりだした光を雷が走る。

その雷は光が大きくなる事に強さを増していき光はその形を変えていった。

蓮夜（……物理法則は不要だ、）

光が3つに別れ、1つは掌に留まり続け、残りは彼の左右に浮遊する。

蓮夜（……重くなくても斬ればいい、）

浮遊するふたつの光はそれぞれ、

鈍い鋼色の肉厚の持ち手のない片刃に、

透き通るような黒色の車輪に、

主の思いに答えるかのごとくその姿を変えた。

そして掌に留まり続けていた光にも変化が訪れた。

その光は彼の身長よりも長くなり色を得る。

その色は何もかもを吸い込むような黒でありその素材が何なのかすら分からない。

そしてその光は完全に姿を表した。

それは持ち手の両端に1m程の刃を持った両刀剣でありその刃は触れてしまっただけで折れてしまいそうな程薄くそして細かった。

武器を得たことで攻勢に出ようとした彼へと再び2つの凶刃が襲いかかる。

その刃が彼の命を刈り取ろうとするその時、



凶刃の内の片方が止まり、片方が生物の後方へと飛んで行った。生物の前には彼が己の手にある武器を振り切った姿と、凶刃の片方を抑えるように浮遊する車輪があった。

生物はすぐさま凶刃を引き戻し再び振り下ろそうとするが、それは片刃を眼球であろう部分に突き刺さり妨害される。

蓮夜「・・・アアアアアアアアア」

その片刃に叩き込むように自身の持つ双刃を振るう。

2つの刃ばぶつかり甲高い金属音になったその時、

生物はまるで元々そうであったかのように左右に両断されてその動きを停止する。

そして、役割を終えた片刃は重力に従いその刀身を落下させ地面へと突き刺さった。

## 過去☒

蓮夜「夢結！」

彼は仕留めた生物の確認もせずに武器を投げ捨てて彼女の元へと駆け寄る。

彼は彼女の元へとたどり着くとすぐに手を握る。

彼女の手は冷たくなっており先程までであった温かさは存在しない。

蓮夜「……。」

彼はすぐに新しく得た知識から手探りで彼女の首元に指を当てる。

彼はどうしても認められなかった。

だが、現実には残酷であり非情であった。

彼女の冷たくなった首筋からは彼女の心臓脈の鼓動を感じ取ることが出来なくなっていた。

そして彼は彼女心臓のあるはずの場所……胸元をに目を向ける。

これを見てしまっただけいけないという感覚が全身を襲う。

けれど彼は目を向けた。

わかってはいた。

けれど認められなかった。

今彼は特殊な視覚を持っている。

自身を中心に辺り全体を森の全てを木々が、見に見えないほどに微細な塵が、肉眼では認識することが出来ない風の流れまで感じ取ることが出来る。

そのような異常な視覚持っていないながら彼は彼女の状態を確認出来なかった。

いいや違う……あえて見てなかったただけだ。

もしも彼女の安否が心配なのだとしたら真見つ先に確認するべきなのだ。

けれど彼は見なかった。

既にわかっているから。

それを認めたくなかった。

ただそれだけ、

諦めきれなかったのだ。

もしかしたら、彼女が起きるのではないかと、

諦めないと言えば聞こえがいいかもしれないが、それはただの  
現実逃避だ。

たしかに彼はまだ幼い。

そんな彼が、このような残酷な現実を認められずに  
現実逃避へと走ってしまうのは至極当然の事だろう。

だが、それは幼い精神での話だ。

彼は特異な力に目覚めた時に起こった大量の情報の脳が無理矢理  
処理をしてしまった影響で先程までの歳相応の精神から無理矢理大  
人と同等の精神へと成長させられてしまったのだ。

この成長は早熟などという現実的な域を超えておりこれは既に  
生まれ変わりと言ってもいいレベルとなっていた。

今までに持っていた価値観が消え去り新たな価値観を行けいれな  
ければ行けない状態へとなってしまった。

その状態の彼をあらゆる可能性が襲いかかる。

もしも、すぐに駆け寄っていたら彼女のことを救えたかもしれない。  
い。

もしも、あの生物に手間取って居なければ彼女を救えたかもしれない。  
い。

もしも、彼が崖上であの生物に気づいていれば彼女は傷つかなかっ  
たかもしれない。

もしも、森に来る前に彼女を引き止められていればそもそもあの生  
物に合わなかったかもしれない。

もしも・・・もしも、この力を早く手に入れていれば彼女を守れて  
いたかもしれない。

・・・そう、この力があれば、

蓮夜「・・・そうだ。」

まだ可能性はあるかもしれない。

たしかに今の自身は無力だ。

しかし、今の彼には力がある。

彼が手に入れた力・・・異能には因果に干渉する力がある。その力は現実すらも捻じ曲げて使用者の思う通りにしてしまうほどだ。

しかし、そのような力でも万能ではない。

異能には、その使用者に応じた干渉出来る因果が存在する。自身の干渉出来る因果以外にはいくら現実を捻じ曲げることの出来る異能であつても無意味なのだ。

しかし、これを皮肉と言うべきか、彼の干渉出来る因果は今彼の望むものではなかった。

力があるのに意味が無い。

ならば、その力に意味があるのだろうか？

答えは否、

どんなに強力な力でも使えなければただの飾りも同然だ。

だが、彼の異能はこの状況を打開出来る可能性<sup>希望</sup>を秘めていた。

蓮夜「俺の本質は・・・。」

新たなものを生み出す『創造』

そしてあらゆるものを無に帰す『消滅』

この対となる2つの力を相反するものと定義しながら同一のものとして内包する『矛盾』に対して干渉する力だ。

『創造』とは、何かを創り出す力であり、『消滅』とは、何かを消し去る力だ。

これだけを聞いたのならば対になっていると思われるだろうが、実際は違う。

『創造』は、「何かがある状態を作り出す」力であり、『消滅』は、「何も無い状態を作り出す」力だ。たしかに作るか消すかと事象の違いはあるが、どちらも「状態を作り出す」力であることには変わりない。先程から使用している見る力はこの矛盾をしている因果を操るために生み出された異能の副産物でしかない。彼の異能の本質、それは……

《因果や事象を創り変える……『改変』》

それが彼に宿った力だった。たしかにこの力には『癒す』力はない。ならばどうすればいい。簡単だ。

蓮夜「さつき見たいに……作ればいい。」

そう新たに作り出すのだ。

蓮夜「まずは、俺が『癒す』力を使えないと言う事象を壊し……」

彼の中で何かが砕かれるような音が鳴り響いた。

しかし周囲にはその音は響いていない。

聞こえないが聞こえる音が彼の中を駆け巡る。

彼は苦しそうな表情をしながら歯を食いしばる。

音が静まり出したその時、彼の身体に異変が起きた。

左瞳が輝きだしたまるで充血したかのように紅く染まる。

目の端からは鮮血が涙のように溢れ出し、光が一際強くなった瞬間、

彼の左瞳が弾け飛んだ。

鮮血が火花のように迸る。

その勢いで彼の身体が後ろに仰け反り倒れる寸前、

蓮夜「『癒す』の力が使えるように直す<sup>変える</sup>……」

倒れる寸前だった彼の身体は重力を無視して元の態勢へと戻り先程進った血液が彼の左瞳へと集まり出す。

そして彼の左瞳へと戻った血液は球状の形へと集まり、彼の左瞳を形成した。

その左瞳には先程はなかった太陽のような模様が映し出されており点滅するように淡く輝いていた。

蓮夜「構築完了……『再生』完成……」

彼は望んだ力……『癒す』事象を改変し元へと戻す『再生』が生み出された。

そして彼は再び彼女へと向き直り、

蓮夜「まだ、足りない……」

そうつぶやくと彼は自身の右瞳へと手を伸ばし、右瞳が1度強く輝いた直後、

蓮夜「……!!!」

右瞳を引き抜いた。

痛みも流れる鮮血も気にせずには彼は抜き取った右瞳を両掌の上に乗せて包む。

両掌を彼女の心臓のある位置まで持っていくと左瞳が今までにないほど輝きだしそれに共鳴して彼の両掌……その中に入っているものが輝き出す。

光が強くなりつつある中、彼の左瞳から再び鮮血が流れ出した。

蓮夜「夢結・・・ごめんね。」

さらに光が強まり彼の両掌を焼き始める。

蓮夜「僕が・・・何も出来なかったから・・・痛かったですでしょう。」

両掌が灰となって崩れ始める。

蓮夜「もう君が死ぬ姿なんて見たくない。」

両掌と言う支えの無くなった光は浮遊しながらその光が輝きを強くしながら収縮を始める。

蓮夜「だから・・・。」

へトクン・・・トクン・・・

光から鼓動が鳴り響く。

蓮夜「君を守るよ・・・。」

光が彼女に吸い込まれるように落ちる。

蓮夜「たとえ・・・。」

2人を激しい光が包んだ瞬間彼の意識は暗転した。

夢結「・・・今は・・・なんなの？」

彼女が再び目を開くとそこはあの崖の上だった。  
周りを見ると隣でまだ彼が苦しそうに唸っている。

夢結「・・・もしも、あの出来事が本当に起きたことだとしたら、」

彼女の身体から血の気が引く、

夢結「・・・私は、」

身体が震えはじめそれを止めようと身体を抱くが震えは止まらな  
い。

身体が本能がこの先を言うなど訴えかける。

しかし、彼女の意志とは反対に唇は言葉を紡ぐ。

夢結「・・・私は、」

・・・なんで生きているの？

心の中で彼女が呟いたその時、

??? 「何かが干渉していると思ったら・・・お前か・・・。」

夢結「・・・えっ？」

突如背後から声が聞こえた。

その声は酷く冷たく何も感情が籠ってないかのように静かだった。  
聞いたことのある声なのに、聞いたことの無い声・・・

その声に恐怖を感じながら彼女は後ろへと振り向く。

振り向いたら後悔するそう思いながらも振り向かずにはいられない



かった。

この声は、

夢結「……蓮夜……なの？」

彼女の探し続けていた人の声だったから、

蓮夜「……」

そして彼女の視線の先にはボロボロになった黒いロングコートを  
着た彼がいた。

## 過去☒

夢結「・・・蓮夜。」

この長い時を探し求めた彼の姿、  
その身はコート同様にボロボロになっていた。

蓮夜「・・・。」

彼女の前に佇む彼はいいまで見ていた<sup>幼い彼</sup>彼とは違い彼女を認識して  
いた。

これはいいまでなかった現象であり、それはここにいる彼が本物で  
あるという確信を与えた。

夢結「やつと・・・やつと出会えた。」

彼女の瞳から雫がこぼれ落ちる。

この時を待ち続けた彼女は彼の姿を見ることで安堵を感じる。  
しかし、その緩んだ気持ちはすぐに消え去った。

夢結（まだ、気を抜いてはだめよ！）

そう、まだ出会えただけだ。

ただ出逢えただけでは目的である彼を救うことが叶わない。

これはまだ第一段階に過ぎないのだ。

そして、これからが1番の難関でもある。

どうすれば、彼を救うことが出来るのかそれがわかっていないの  
だ。

夢結（・・・大丈夫。）

彼を救う方法に確信を持っていた。  
そのためには彼に会わなくては行けない。  
そして、今彼は目の前にいる。

夢結「……迎えに来たわ。一緒に帰りましょう。」  
蓮夜「……。」

彼女の呼び掛けに彼は応じない。  
そこに彼女は違和感を感じた。

夢結「……蓮夜？」  
蓮夜「……。」  
夢結「……どうしたの？」  
蓮夜「……。」

いくら声を掛けても反応を返して来ない。  
そこに彼女は不安感を覚える。  
そして、先程頭に過ぎった恐怖感を思い出す。

夢結「……私よ、夢結よ？分からないの？」  
蓮夜「……。」

再び彼へと、呼び掛ける。  
やはり彼は反応を示さない。  
いくら声を掛けても無言のまま佇む彼に不安を覚えた彼女は彼へと歩みよった。

そして彼女は手を彼の肩へと伸ばす。  
その手が届く寸前、  
彼女の手は弾かれた。  
弾かれた手を目で追うとそこには、

夢結「・・・どう、して？」

彼女の手を弾いたであろう彼の手がそこにあった。

蓮夜「・・・何を考えてるか分からねええが・・・消えてくれ。」

夢結「・・・えっ？」

彼女の脳内は彼の放った一言で真っ白になる。

彼は今なんと言った？

消えて？

誰が？

この言葉が脳内を埋め尽くす。

夢結「・・・どうしたの？・・・私よ！ゆ、」

蓮夜「・・・消えてくれ。」

彼女の言葉は彼に遮られる。

彼女が彼の肩を再び掴もうとした時、視界に彼の瞳が映りこんだ。

その瞳を見て彼女は自身の手を止めてしまう。

彼の瞳・・・そこには何も写っていないかった。

何も感情の籠っていない無機質な瞳、

何にも興味のないようなその瞳に彼女は恐怖を覚える。

蓮夜「お前が何を考えてるか知らないが、居なくなってくれよ。」

夢結「・・・どうしてなの？」

蓮夜「・・・どうしてもないだろう？お前に消えて欲しい、ただそれだけだ。」

夢結「・・・蓮夜、」

蓮夜「俺の事を名前前で呼ばないでくれ、寒気がする。」

彼が彼女へと向けた感情、

・・・それは拒絶だった。  
まるで、関心の無いかのように、  
その表情からは彼女と関わりたくないという感情が滲み出ていた。

夢結「・・・蓮夜？・・・今は冗談を言う時ではないわよ？」

これが本心である事は彼の雰囲気から明白であった。

しかし、彼女はそれを認めない。

いいや違う・・・認められないのだ。

もしも、ここでそれを認めてしまつては壊れてしまう。

彼女の本能がそう囁く。

だから、彼女は認めない。

もしも壊れてしまえば、私は立ち直れるのだろうか？

もしも壊れてしまえば、私はどうなってしまうのか？

もしも壊れてしまえば、彼はどうなってしまうのか？

もしも壊れてしまえば、誰が彼を救うことが出来るのか？

しかし、

蓮夜「何を言っているんだ？冗談なんか言っていないぞ？」

この意思は早々に崩れ去った。

現実を見せつけられる。

この単純だ行動で、

彼女の内側から何が壊れる音が聞こえる。

夢結「・・・どうしてなの？」

蓮夜「どうして？・・・そんなこと思い出したからだ。どうして俺  
がこんな目にあつたのかを、」

夢結「・・・思い出したってどういふことかしら？」

彼女は恐る恐る彼に尋ねる。

蓮夜「・・・お前もいたなら見ただろう。俺が初めて異能に目覚めた時のことを、」

夢結「・・・。」

蓮夜「その時俺は自身の精神を保護するためかお前に記憶処置をする時に自身の記憶まで封印した。」

夢結「・・・。」

蓮夜「もしくは俺の異能が安定しないで堕ちかけることが多かった理由・・・それを隠すためだったのか・・・もしもそうだとすれば自身の事だが大したものだ。

俺の異能が安定しないその理由がお前にあっただよ。

お前に俺の片瞳を入れたから、」

夢結「・・・片瞳を、」

蓮夜「あの時、俺は何をとち狂ったのか片瞳に消滅の力を載せた状態で心臓へと作り替えた。この意味が分かるか？」

夢結「・・・。」

彼女は口を閉じてしまう。

蓮夜「・・・その消滅の力でお前の死を消し去ったんだよ。そしてそれを定着させるためにその力を心臓に残して、」

夢結「・・・。」

蓮夜「つまりお前の身体の中に俺の異能の一部が埋め込まれていてることだ。それじゃあ安定しないのも当たり前だ。なんせ、欠けてるからな・・・ただでさえ制御が難しい異能を欠けた状態で扱うんだ。そんな状態で使い続けられズレが起る・・・それが俺の異能の不安定さの原因なんだよ。」

聞きたくなかった。

再び何が壊れる音が聞こえる。

夢結「・・・嘘よ。」

蓮夜「いいや、嘘じゃない。」

夢結「・・・嘘よ。それなら私は、」

蓮夜「・・・ただ俺の異能で生かされているだけの人形だ。」

自身の中からだけでなく周囲全体から壊れたような音が聞こえた気がした。

蓮夜「死んでいるその肉体で、ただ俺の言葉に従い動き続けるただの人形だ。」

先程よりも大きな音鳴り響く。

蓮夜「特に俺は命令した覚えはないが・・・俺に対して絶対的な信頼性などが心のどこかにあるだろうか？」

夢結「・・・。」

確かに存在する。

しかし、それは自身の本心であるはずだ。

蓮夜「俺の近くにいると安心感を覚えることがある・・・違うか？」

夢結「・・・。」

確かにある。

しかし、それは彼のことを信頼しているからだ。

蓮夜「俺の言うことなら聞き入れてしまいそうになることもあるはずだ。」

夢結「・・・。」

確かにある。

しかし、それは・・・

それは・・・

それは本当に自身の本心なのだろうか？

夢結「!?!?」

彼女は声にならない悲鳴をあげた。

それと同時に何が崩れ去る音が鳴り響く。

蓮夜「・・・あるんだな？ そうなんだろう？・・・その答えは簡単だ。」

夢結「・・・やめて、」

聞きたくない。

彼女は自身の耳を塞ぐが彼の声はまるで脳内に直接響くように彼女の鼓膜へと伝わる。

蓮夜「・・・お前は、」

夢結「お願い、もう・・・やめて、」

蓮夜「・・・俺に作られただけの存在だからな。」

彼女は膝から力なく崩れ落ちる。

その瞳には何も写っておらず、ただ涙だけが流れ続けていた。

蓮夜「・・・安心しろ、俺はお前をどうこうする気は無い。」

夢結「・・・。」

蓮夜「確かに俺がこうなったのはお前が原因だが・・・お前をこうしてしまったのは俺だ。」

夢結「・・・。」



蓮夜「・・・だから、俺はお前を恨まないし・・・だから、お前は俺に関わるな。」

夢結「・・・。」

蓮夜「・・・これは初めての命令だ。帰れ、そしてこの世界に二度と来るな。」

夢結「・・・。」

蓮夜「なに、心配するな。・・・ここを出る時にお前の記憶は消してやる。・・・それが俺がお前にする最後の慈悲だ。」

夢結「・・・。」

蓮夜「だから早く消えろ。おまけとして、迷わないように道標を作ってやったからな。」

彼女は力なく立ち上がると振り返りそのままどこかへと歩き出した。

その身体には精気を感じさせずただ彷徨い続ける亡霊のようであつた。

そして彼女が森の奥へと消えて行った時、

蓮夜「・・・ごめん。」

彼は何かを呟き、背を向け歩き出した。

## 過去☒

蓮夜「・・・行つたか、」

彼は影へと向かつて歩み寄る。

彼がすぐそばまでたどり着くと影の肩へと手を伸ばす。

その掌はまるで壁に触れたかのように影の方の手前で止まる。

彼の触れた場所からは水面に浮かぶ波紋が浮かび上がり、それは彼等の周りへと広がった。

蓮夜「・・・これで、」

彼が何かを呟こうとした時、

影『・・・!?!?』

影が動きを止めた。

する影は音もなく立ち上がり両手を前方へと向けて突き出した。

その手から光の粒子が溢れ出し、辺り全体を埋め尽くす。

その光は影の元を離れ一帯を不規則に動き周りその光を強める。

光の粒子の生成がしばらく続き数c m先すらも見えないほどに空間を埋めつくしたその時、

影『・・・!』

光が再び彼の手へと集まり始めた。

その光は影の両手の間へと収縮を初めてたと思うと膨張、そして収縮と一定の動きをしながらその光量を強めていく。

その動きはあるで鼓動のようでありその光の動きからまるで生き物が生まれる様子が幻視させられてしまうようであった。

蓮夜「・・・来るか、」

彼が何かを感じて身構える。

すると影は自身の両手で光を中の物を砕くかのように力強く挟み込んだ。

光は淡い粒子を漏らしながら彼の手の中に収まる。

数秒後影が手を開いた。

手のあつた場所にはなにかの持ち手のように物が存在しそれは影は両手で掴む。

影が掴んだ瞬間、

持ち手の両端から粒子が溢れ出した。

その粒子は先程のように広がるのでは無く持ち手を中心に形を作っていく。

まず粒子は持ち手の周りをリング状に集まり光を強める。

その光は輪郭を持つと一際強くなると粒子が霧散し始める。

そして光がなくなつたその場所には黒いリングが姿を現した。そのリングは全ての面の中心からリングを一周するように黒銀色のラインが刻めれていた。

そのリングを外側に光が集まる。

その光は先程とは違い何かの形を作るのではなくある一定の速度でリングを周囲を旋回し続ける。

光はその密度を増やし続け、粒子では無く輪状になつたその時、持ち手に垂直の位置にある光が時計回りに半回転するように集まりだした。

その光が集まるとまるでガラスが割れるような音を立てながら粒子粒子が飛び散つた。

そこには鈍い鋼色の分厚い刀身を持った刃が生えており、その刃は大ぶりのナイフほどのサイズしかかないがまるで肉厚の大剣のような存在感を持っていた。

辺り一帯に存在していた粒子がなくなり、そこで変化が終わつたと

思ったその瞬間、持ち手の両端から先程とは比べられ程の量の粒子が吹き出した。

その光はあるで間欠泉の如く溢れ出し辺りの空間へと溶け込んでいく。

光が空間に溶け終わると周囲の空間が歪み初め次第にその歪みは収縮しながらその歪さを強めていく。

その歪みが持ち手の両端へと集まるとその歪みは輪郭を作り出しその形を生み出していく。

その時、

影が体勢を崩し倒れた。

??? 『ぐっ・・・ああ、』

影は呻き声を上げながら地面を転がる。

その反応は先程とは違い生き物であると認識させるものであった。

??? 『あっ・・・うあ・・・』

影は震える腕に力を入れて立ち上がる。

そして影が顔を上げるとそこには、

??? 『戻って・・・これた・・・か、』

先程までの何も感情の無い影では無く、黒鉄理性を持った彼がいた。

蓮夜? 『どうにか成功したが・・・、』

彼が視線を下方方向へと向けるとそこには、

蓮夜? 『これが・・・俺の形か、』

彼の手には歪異形の武器な刃が握られていた。

それは、十字架のような姿をしており、その十字架は薄く長い刃と厚く短い刃の2種類の長さの刃で構成されていた。

その人が振るうには危険すぎる全てを破壊するために作られたかのような狂気をはらんだそれは振るえば使用者すらも切り裂いてしまう。

蓮夜？『……歪だな。』

一瞬間を歪めるが、

蓮夜？『……俺にはお似合いだな。』

すぐに平然とした顔となり、まるで自身を嘲笑うかのように笑う。それを握りしめた彼はその刃を振るった。

その刃は周囲にあった木々を抵抗もなく切り裂き音を立てて倒れる。

それと同時に《ゴトリ》という音と共に何が落ちた。

彼がそれを目で追うとそこには彼の左腕が落ちており彼の足元へと血の池を作り出していた。

蓮夜？『自罰をしながら壊す……か、』

彼はそれを見てより笑みを深める。

まるでこれを欲していたかのように、その表情は狂気に包まれていた。

蓮夜？『……行くか、』

笑い終わった彼は崖を飛び降りどこかへと向かう。

蓮夜「……これがコイツの理由……か、」

過去の自身を見ていた彼は自身の手に収まるものを見た。

それは過去〔黒鉄 蓮夜〕の彼の持っていた歪な刃〔武器〕だった。

蓮夜「自罰、ねえ……」

それを興味深そうに見ながら彼はそれを後ろへと振るつた。

蓮夜「……確かに自罰だな。」

彼の右腕が刃と共に落ちる。

それと同時に何が背後で崩れ落ちる音が聞こえた。

蓮夜「……。」

彼が振り返ると、そこには黒いモヤで形作られた何が存在した。

それは胴体から上下に分割されておりその切り口から徐々に形を失っていた。

蓮夜「……、」

彼はそれが完全に消えるのを確認すると《黒鉄 蓮夜》の向かった方を向き崖を飛び降りて行った。

## 過去

木々の生い茂る森の中、

生命が彩る緑の世界を赤と青の雨が穢す。

まるで全てを染めようとする意思があるかのように赤と青がその場を侵略していた。

自然現象では決して有り得るはずのないその現象の中、金属と金属がぶつかり合うような甲高い音が辺りに響き渡っていた。

その音は次第に大きく早くなっていき辺り一帯の空間から他の音を消し去った。

蓮夜？『……』

その中、彼は異形の生物・・・ヒュージへと向かって己の刃を振りかざす。

それによりまた新たな青が生まれると同時に彼からも赤が生まれた。

彼は木々を足場に変幻自在に動き回りヒュージの群れを刈り取る。

彼が一太刀振るう度に新たな青が生まれ、それと同じ数だけ赤も生まれた。

蓮夜？『……』

彼は表情を変えることなく近くにいるヒュージを切りつける。

彼が新たな標的を見つけ切りかかろうとした時、

背後から一振りの凶刃が彼へと迫る。

それを彼は認識するが、まるで無関係と言わんばかりに標的へと向かった。

凶刃は彼の肌へと触れ鈍い音を立てながらからの左腕を肩先から切断した。

しかし彼は、声ひとつ出さずに標的へと迫り一太刀にて標的を切り

裂く。

標的の確認をすることなく彼は振り返り新たな標的を定めた。

そして彼が踵を浮かした瞬間、

新たな標的の目の前に現れ自身の手に収まる刃を振り落ろす。

振り下ろした刃は右手を離れたのか地面に突き刺さり彼の動きが

一瞬止まった。

それをチャンスと見たか一体のヒュージが彼へと遅いかかる。しかし、それは彼に読まれていたのかすぐさま左手で刃を掴んだ彼はそれを横薙ぎに振るいヒュージを両断した。

しかし、ヒュージの背後にはもう一体の別個体がおり先の一振で体を崩した彼へと横薙ぎの一撃が襲いかかる。彼の頭部に凶刃が当たる寸前、彼の身体が急激に下へと動きその攻撃を躲した。

躲されたことを理解したヒュージは再び彼へと凶刃を振りかざそうとするが、行動を起こす前にヒュージの頭部が割れることでその身体は停止した。

蓮夜？『・・・静かだな。』

彼は体勢整えると前方へと駆け出す。

駆け出す勢いをそのままに彼が刃を振るうと、刃の軌道上に木々の間からヒュージが姿を現した。

切断したヒュージを踏み台に彼はさらに前へと森の奥へと進む。

蓮夜「・・・」

過去の自身の軌跡を眺める人影は彼の通り過ぎた場所を見た。

彼の通り過ぎた後には数え切れないほどのヒュージの残骸と人間の死体が埋めつくされており静けさと癒しを与えるはずの森を死と狂気が支配する場所へと変貌していた。

ヒュージの残骸は全て一太刀のとも両断されたものばかりだが、人体の折損は酷く、



腕しかないもの、  
脚のみのもの、  
上半身のないもの、  
首から上・・・頭部が半分しかないもの  
などとヒュージよりも悲惨な最後を遂げたものしか存在しなかつた。  
その中の一つ・・・頭部が半分しかない死体に彼は近づきその顔を  
確認する。  
するとそこには、

幼い時と彼・・・先程までこの場で戦っていた《黒鉄 蓮夜》の顔  
があつた。

蓮夜？『・・・この辺りか、』

彼は暗い森を進む。

木々が月の光を遮るため数メートル先すらも視認することが出来  
なくなっていた。

しかし、その中を彼は迷うことなく進む。

そしてしばらく進むと木々の隙間から光が差し込んできた。

そこはこの深い森の中で唯一月の光が入り込む程の大きな穴が空  
いており空を見上げると星々が空を彩っていた。

蓮夜？『あと少しだ、』

彼の言葉が止まる。

彼はふらつきながら後ずさると背後にある木を支えに座り込む。

蓮夜？『早い・・・』

彼は左手で頭を抑えると右手を前方へと突き出す。

右手を突き出すと光の粒子が生まれ前方へと集まりだした。

その光は生物のように動き出し脈動を始める。

光は脈動する毎に光量を強めその輝きを増していく。

蓮夜？ 『グツ・・・ギイツ！・・・』

彼が呻き声を上げると粒子の動きが早まり徐々に形を生み出す。

光はリングに集まりその光をさらに強めるが、一定の光量になると点滅を初め粒子が拡散し形を崩し始める。

集まっては拡散する、それをしばらく続けた光を彼は力強く掴んだ。

すると光が収まり最後に淡く光ると輝きを失った。

蓮夜？ 『・・・ハアハア、』

彼は息を落ち着かせると右手を目の前に移動させその手に握られているものを確認した。

蓮夜？ 『・・・』

そこには薄い水色のリングがあった。

そのリングには深い水色の宝石が一定間隔で配置されておりそれが月の光に照らされて輝いていた。

蓮夜？ 『・・・《無霧》・・・か、』

彼は呟くと立ち上がる。

そしてそのリングをポケットに入れると森の奥へと目を向ける。すると彼の視線の先から人影が1つ現れた。

その人影は音を立てずにこちらへと近づいてくる。  
正体不明の存在の出現、

しかし彼は警戒もせずに入影が来ることを待つ。

そして人影が木々を抜け森を出てくると月の光に照らされてその姿を現した。

光に照らされた人物は彼の信頼している人物である川添 美鈴であつた。

彼女はこちらに気がつくと足を早めこちらへと近づく。

彼は彼女に対して手を振りながら声をかけた。

蓮夜？ 『姐さん・・・お久しぶりです。』

簡潔であるが挨拶をすると彼女から帰ってきたのは、

美鈴 『本当に久しぶりだね。 蓮夜、』

彼女の声ではなく空中に浮かぶ文字であつた。

## 過去☒

蓮夜? 『……えっ?』

彼は世界が止まったかのような感覚に陥る。  
言葉を文字として認識する。

この現象に前例がなく彼は困惑してしまった。

彼は自身の視覚に異常が起きた可能性を考え、すぐに周りを見渡す。

《ザワザワ》

草木が風に揺れる音が、

《ザツザツ》

靴が草を踏みしめるこ音が、

《ギユウギユウ》

この森に住む動物の鳴き声が、

全てが文字と色として認識させられた。

それと同時に彼はあることに気付く。

蓮夜? (……音がなない?)

音が聞こえないのだ。

現在聞こえていなければおかしい彼女の声すらも……、  
静寂な世界でただ文字だけが彼の視界を支配する。

蓮夜 (まさか……音を文字として認識しているのか?)

彼にはこの事象の原因はそうとしか思えなかった。

彼の視界に異常があるのではなく、彼の聴覚に異常が起こっているのだ。

この文字は聞こえなくなった音を視界から得られる波長などの情報から再現しただけに過ぎないと彼は予測を立てた。

蓮夜？（・・・まさかさっきの影響か？）

何が原因かそれはある程度の予想は出来ている。しかし、それが事実だとした場合、

蓮夜？（・・・だとすると俺は、）

彼は最悪の事態を想像してしまう。

彼がその現実直面しようとしたその時、

美鈴『・・・どうしたんだい、顔色が悪いみたいだけど？』

蓮夜？『大丈夫ですよ。たださっきまで連続続きだったので少し疲れただけです。・・・!?!』

彼は彼女を心配させない為に軽い笑みを浮かべようとする。

しかし、思ったように表情が動かず表情が硬直する。

これに彼は目を見開き慌てて自身の身体の異変を確認した。

蓮夜？（・・・異変はないな。・・・ならどうして？）

再び直面する自身の異常に対して彼は思考を深める。

筋肉にも、骨格にも、神経にも以上はなくそれでいて確かに疲労はあるが身体的異常を起こす程ではない。

それならばこの異常の原因はどこにあるのか？

その可能性を彼は考える。

先程の結果から身体的な異常はない。

ヒュージの血液による汚染も先程の結果から考えられない。

それならば精神的な負担が問題かと考えるが、それも先程は不安定であつたが現在は安定している。

それならば聴覚の異常と同じものが原因だと考えられるが、この場合も先程否定した物が候補に上がってしまう。

原因の見えない現象に不安感を感じながらも彼は正解を導き出すために思考する。

美鈴『・・・蓮夜？』

蓮夜？『・・・』

美鈴『蓮夜!!』

蓮夜？『!?!』

思考の海に沈んでいた彼を彼女は彼の肩を揺らすことで引っぱり上げる。

蓮夜？『すいません・・・思ったよりも疲れが溜まっているみたいで、』

美鈴『・・・本当にそうなのかい?』

蓮夜？『はい、大丈夫です。さすがに2日間連続で戦い続けたのは良くなかったのかもしれませんが。』

美鈴『2日間続けて・・・無理は禁物だからね。』

蓮夜？『再生で疲労は取れるので大丈夫かと思つたんですけど。』

美鈴『・・・君はいつも無茶をするからね・・・心配なんだよ。』

蓮夜？『・・・すいません。』

彼女は彼を心配そうな表情で見る。

彼女の表情からは本当に自身を心配しているということが分かるくらいにその感情が滲み出ていた。

それに彼は作り笑みで返す。

蓮夜？（・・・作り笑みは出来るのか、）

（彼はこの現象を身体への異常ではないと確信を得た。）

蓮夜？（・・・なら、なんで俺は笑えなかったんだ？）

作り笑みは出来るが、本当には笑えない。

もしも笑えないのであればどちらも出来ないことが当たり前であるはずのこの現象、

蓮夜？（作り笑みと笑顔の違いはなんだ？）

本物か偽物か？

無意識に出るか意識的に出しているか？

彼の感覚がその考えを否定する。

蓮夜？（本当に何が原因なんだ？・・・意識的なものでも無いとすると・・・！）

そこで彼はある可能性へと至った。

蓮夜？（もしかして・・・感情か？）

感情・・・それは人間と他の生物との1番の違いとすら言われる精神的な事象でありそれがなければ人間ではないとすら言う学者がいますとされている。

生物に感情がないとは言ったがそれは正しくはない。

人間以外の生物にも感情という物は存在する。

それなのに人間が他の生物と違うと言われる所以、

それは感情の種類と量だ。

自然界の生物にも感情は存在するがそれは威嚇などの生存本能か

ら現れるものでありその目的以外ではその感情は顕にされない。

しかし人間の場合は自由に感情を表すことで相手へと情読を伝えることが出来るのだ。

人間の感情は大きく分けて『喜』『怒』『哀』『楽』の四種類に分かれている。

これだけでも生物として多いのだが人間はこの四大感情からさらに細分化して感情を制御することが出来るのだ。

この生物としては特殊なコミュニケーション能力こそが人間をここまで発展させたとすら言われる感情……、

もしも、この感情が欠如しているのだとすれば、

それは、人間と呼べるのだろうか？

蓮夜？（……）

彼はこの可能性に至った時一瞬動転したがすぐに冷静な思考へと戻る。

彼の中で何が抜け落ちる音が響いた。

しかし彼の内心は穏やかであり、

それはまるで悩み続けていた問題の答えが分かったかのような清々しさまで感じるものだった。

蓮夜？ 『姐さん、これを、』

ふと彼は自身のポケットへと手を入れてあるものを彼女へと投げ渡す。

美鈴 『これは……腕輪かな？』



彼女の手には水色のリングが握られており月の光を浴びて淡く輝いていた。

蓮夜？『・・・お守りみたいなものです。何かあった時はきつと力になつてくれます。』

美鈴『・・・そうか、大事にさせてもらおうよ。』

彼女は微笑むと自身の右腕にリングを嵌めた。

するとリングは霧のように霧散してその姿を消してしまう。

一瞬彼女は驚くがすぐにその仕組みを理解したのか自身の右腕を前へとかざした。

すると彼女の右腕に霧が集まると先程のリングが現れる。

美鈴『霊体にも変換出来るんだね。』

蓮夜？『姐さんの場合はその方が都合がいいですからな。・・・それでは俺はもう行きます。』

美鈴『・・・そうか、夢結に会わなくてもいいのかい？今は眠っていると思うけど・・・。』

蓮夜？『・・・大丈夫です。今は休ませてあげたいですから。』

美鈴『顔を見るくらいならいいと思うけどね。』

蓮夜？『気持ちだけ貰っておきます。』

美鈴『・・・そうだ、ご両親は無事だったんだろう。・・・本当に良かったよ。』

蓮夜？『はい、今は・・・避難所にいると思います。分身も居るので確認も出来ますし、』

美鈴『なら、絶対に無茶をしてはダメだからね。・・・私達以外だけじゃなくてご両親も悲しんでしまうから。』

蓮夜？『分かっていますよ。・・・大丈夫です無茶はしません。それでは、行きます。』

彼は先程来た方向へと走り出した。

そして木の上へと登ると森の奥へと進んでいく。

ふと思いつき、彼女のいる方向へと振り向く。

そこにはこちらに手を振る彼女の姿がありその笑顔は輝いているように感じた。

## 過去☒

視界いっぱい広がる緑豊かな草原、その生命に溢れた緑の世界に青が咲き乱れる。

蓮夜？『……』

彼が刃を振るう度に周囲の数箇所まで青が咲いた。

その緑と青の彩る世界に一点・・彼の経つ場所だけが赤く染まっていた。

その赤は他の色を拒絶するかのように塗りつぶし辺り一帯を支配していく。

その中で一人舞う彼の周りには数え切れないほどの人の四肢が転がっていた。

しかし草原あるはずのないそれすらも赤が塗りつぶし支配する。

まるで元々そこにあつたかのように、まるでこの違和感自体が違和感であるかのように、

蓮夜？『……』

この狂気に塗れた場所で彼は舞続ける。

この光景に違和感を抱かず、  
まるでこの光景こそが当たり前かのように、

この狂気の劇場をもともせず一体のヒュージが彼へと迫る。

その刃で彼の命を借り取ろうとするがその瞬間にはその体は深い切傷を受け動きを止める。それと同時に何が落ちる、

そこへ新たなヒュージが迫って来た為彼は再び刃を振るうがヒュージの体には何も起こらない。

それを見て彼が自身の右腕を確認すると彼の右肘から先が消えていた。

彼がヒュージから目を離した瞬間ヒュージは己の刃で彼を刺し貫く。

それによって宙を舞った彼は先程まで自身のいた場所の足元に歪な刃を握った己の右腕を見つけた。

彼にトドメを誘うともう片方の刃を振り下ろしたヒュージは塵になつて崩れ落ちる。

それにより開放された彼は音もなく地面に立つと左腕で歪な刃を握った。

そして拾い上げるとまだ刃を握っている自身の右腕を引き剥がして投げ捨てる。

放物線を描きながら落ちる彼の右腕は赤の上へと落ちる。

彼はそれすらも気にせず背後へ振り返りながら刃を振るつた。

その刃は背後から迫っていたヒュージを切り裂きそれと同時に彼の周囲にいた数体のヒュージからも青が咲きその機能を停止させる。不安定な体勢で刃を振るつた彼は足に力を入れて体勢を整えようとするが足が地面に着くことなく彼の体は倒れる。

倒れた彼は視線を己の足へと向けるがそこには彼の足はなかった。

それどころか彼の腰からした全体が消えている。

彼は次に背後へと視線を向けた。

そこには赤を盛大に咲かせている己の下半身が存在した。その赤は先程投げ捨てた自身の右腕にまで届き周りのものと同じように赤く染めた。

赤を咲かせていたそれも数秒するとその勢いを失いそれと同時に後ろへと倒れた。

しかし彼はこの事態にすら動揺しなかった。

それは自身の両腕に力を入れて飛び上がる。それと同時にヒュージが襲い掛かるがそれを握る刃によって切り伏せる。

そして彼は新たに現れた左足のない下半身をバネにして着地した。何故か存在しない左足、その傷口から光が漏れ出した時彼の上から彼の鼻先を通して何が落ちてきた。それは彼の左足でありその傷口からは赤が流れ出ていた。

彼が立ち上がると消えていた左足が元に戻っており彼は地面を踏みしめる。

そして彼が前へと目を向けると己の狙うヒュージの凶刃が迫っておりそれは彼の左肩口に食い込む。

彼の左肩から入った刃が彼の腹部へと至る直前彼の姿が消えた。

標的が唐突に消えたヒュージは固まりそのまま動かなくなった。

その背後には刃を振り下ろした彼がおりその背には己の刃が突き刺さり灰を咲かせていた。

蓮夜？『……つい到这里まで来たか、』

彼はそうつぶやく。

彼の周りを支配していた赤が突如灰色になってしまったのだ。

赤だけではない。

先程まで咲き乱れていた青も、

生命に溢れる緑も、

彼の視界にある全てが灰色へとその色を変化させていた。

それと同時に何が彼の左手には何が握られていた。

彼はそれを確認するとそこには一振の曲刀が握られていた。その

刃は月の光に照らされて怪しく輝きその姿を消した。

蓮夜？『……これで何回目だっけ……もう2桁から数えてないや、』

彼は笑う。

しかしその顔には表情はなくその姿からは諦めのようなものが漂う。

蓮夜？『……もう何も残ってないな。……まだ行けると思ったんだけど、』

彼は辺りを見渡した。  
すると彼の周囲にいたヒュージは全て溶けるようにこの空間から消える。

蓮夜？『……だけどまだ時間はある。』

彼は重い足取りで前へと進む。

その姿は先程までの彼の動きからは想像も出来ないほどに緩やかなものであった。

蓮夜？『まだ……れない。まだ……がいるから。』

彼は何かを呟きながら進み続ける。

蓮夜？『……帰るんだ。』

??? (……蓮夜、)

彼の脳内に声が響く。

夢結 (私は絶対に帰ってくるわ。だから蓮夜は心配しないで、)

蓮夜 (……夢結。)

夢結 (本当に貴方は心配性ね。……それなら……蓮夜？帰ってきたらお茶しましょう。私達がお茶する時は貴方のお菓子は必要ないから、だから絶対に無事でいてね……私も絶対に帰ってくるから、)

蓮夜 (分かった……約束だよ。)

夢結 (ええ、約束よ。)

これは彼の彼女との最後の記憶だ。

蓮夜？ 『……守るんだ約束を、』

彼は歩続ける。

重い身体に鞭を打ち、自身に残った意志を力に変えて、

彼は森へと足を踏み入れる。

彼は暗い森の中を進む。

しばらく進むと彼は突然苦しみ出した。

蓮夜？ 『……嘘だ……もう何もないのに、』

彼は地面に転がる落ちる。

蓮夜？ 『……あと少しなんだ、』

彼は動かない体を必死に動かそうとするが、その身体はまるで言うことを聞かずただ震えることしか出来ない。

蓮夜？ 『……あとすこしで、』

彼は己に残る意志を総動員する。

彼の祈りが通じたのか彼の右腕だけが動いた。

彼は右腕で身体引きずりながら進む。

蓮夜？ 『……帰るんだ！』

彼は吠えるように叫ぶ。

己を鼓舞しそれを進む力に変える。

その時彼の前方に光が差し込んで来た。

彼はそれを見るとまるで継り付くように光の方向へと進む。

彼が光に飛び込むとそこは彼がいつも彼女と会っていた広場であつた。

木々の隙間から差し込む光がこの一帯だけを照らしている。

蓮夜？『やつと……ここまで来た。』

彼は再び己の右腕へと力を入れようとした時、

《ビィー!!ビィー!!》

彼の目の前に文字が出現する。

彼は慌てたように己の右腕を地面ではなく自身の懐へと伸ばした。

彼が右腕を引き抜くとそこには端末が握られていたおりその画面を確認する。

そこには『v i t a l』という文字とその下には『黒鉄 蓮夜』と『川添 美鈴』と書かれた項目がありその中の彼女の v i t a l の数値が0になっていた。

蓮夜？『……姐さん、』

彼はそれを見て呆然とする。

蓮夜？『……行ってしまったんですね。』

それと同時に彼は安堵していた。

蓮夜？『……人間のまま居られたんですね。……お疲れ様でした、ゆっくりと休んでください。……あとは俺が、』

彼の意識はそこで途絶えた。



蓮夜？『うつ……。』

彼は目を覚ます。

そこは彼が意識を失った森の中でありすぐに自身に変化がないか確かめその兆候がないことに安堵する。

蓮夜？『まだ、無事みたいだな。』

彼は右腕に握られている端末を確認する。

そこには彼の意識を失った日から2日後の日にちが映し出されており彼の頭上には月が輝いていた。

蓮夜？『2日間も意識を失っていたのか、』

彼は身体を動かそうとするがやはり右腕以外は以前と動かない。

蓮夜？『あと少し休んだら!?!』

彼は急激な痛みに襲われる。

蓮夜？『……嘘だろ。』

そこで彼は悟った。

蓮夜？『……限界なのか、』

彼は右腕を使い仰向けになると月を眺めながら端末を操作する。

蓮夜？『……謝らないと、』

そして端末を操作し終わるとついに右腕も動かなくなり端末を握ったまま彼の耳元へと落ちていった。

《トウルルル！》

コール音が鳴り響く。

しばらく続いた経つとコール音のが鳴り止む。

蓮夜？『……夢結、こんばんは。』

夢結『……蓮夜。』

蓮夜？『夜遅くにごめん……君に、』

夢結『私に話しかけないで!!』

彼の言葉は彼女の声にかき消される。

蓮夜？『……ゆ……ゆ？』

夢結『話しかけないで！誰とも話したくないのよ！』

その言葉を最後に電話が切れてしまう。

彼は諦めのようなもの雰囲気を出すと目を瞑った。

蓮夜『最後に夢結の声……聞こうと思っただけだな……タイピングが悪かったかな……本当に空気読めないよな……俺……。』

彼の口調がたどたどしくなっていく。

言葉が途切れ途切れになりその声には生気がなくどんどんと声が平坦となっていく。

蓮夜『てか……俺バカ……ろう。そも……そも、俺はもう声……こえ……じゃんか。』

彼は仰向けになって倒れた。

蓮夜『もうげん……か、ごめんゆ……やくそ……かった。』

彼は瞳を閉じた。

蓮夜『だけ……君だけは……だから……。』

彼が瞳を開くとそこには壊始と生成の模様が浮かんでいた。

蓮夜『やつ……こわ……自分じゃ……るのは。本当……に……バカだ……あの……顔を……おけば……。』  
彼の身体を結晶が包み始める。

蓮夜『そうすれ……すこ……だったの……かな？』

結晶が完全に包む直前。

蓮夜『あとは頼むよ……俺<sup>次の僕</sup>。』

そうつぶやくと彼はそつと目を閉じた。

彼を包んだ結晶は強い光を発したあと音を立てて砕け散る。

蓮夜『ああ、任せろ……絶対に俺<sup>お前</sup>の願いを叶える。だから……少し眠っていてくれ。必ず幸せにしてみせるから。』

これが彼の始まりだった。

黒鉄 蓮夜が黒鉄<sup>夢結の守護者</sup> 蓮夜に生まれ変わる瞬間。

彼は自分が完全に獣に堕ちる前に自身を切り分けたのだ。

まだ吞まれない感情や記憶の残滓を切り離し、それらを集め

存在意義  
誓いを核として新しい自分を作るために。  
歪んでしまったん約束を  
彼女を守するために、

森の奥へと歩いていく彼を見つめる人影があつた。

蓮夜「俺が作った人形か・・・俺のことじゃないか。」

彼は笑う。

まるで自信を見下すように、

蓮夜「自分のことを棚に上げて罵倒してのか・・・最低だな、俺は。」

彼は近くの木に背を預け座った。

蓮夜「・・・もう少しで外かな。」

あれは頭上を見るそこには光輝く月とそれを優しく包む夜が映し出されていた。

蓮夜「・・・ごめんね夢結・・・君に酷いことを言ってしまった、」

彼は目を瞑る。

蓮夜「・・・これを知ったらきつと君は許してくれないよね・・・  
だけどうりするしかなかったんだ・・・俺のことなんか忘れて彼女  
達と幸せを・・・。」

彼は目を開く。

そして何かを決心したのか歪な刃を握る手には力を入れた。

蓮夜「……姐さん、夢結をよろしくお願いします。」

彼は自身の罪の象徴である歪な刃十字架を自身の首へとあてる。

蓮夜「……ごめん、夢結。……約束守れなかった。」

刃に左手を添える。

すると刃が彼の首に食い込み赤い筋が首を伝う。

蓮夜「……俺僕の分まで幸せを掴んでね。」

彼は再び目を瞑る。

その顔は何かをやり遂げたかのような達成感に満ちていた。

そして刃はどんと彼の首の奥へと進んでいく。

蓮夜「……なんで、」

彼の手が止まる。

それにより首を切り進む刃も止まりその刃を血が伝い手を赤く染める。

蓮夜「……もう帰ってくるはずなのに、」

彼は困惑した。

蓮夜「……どうして世界が崩れないんだ。」

この世界は彼女が居なくなると同時に彼女の記憶と共に消えるように仕組んでいた。

経過時間から彼女はもう外に出ているはずなのに、それなのにこの世界は消えない。

それに彼は戸惑う。

蓮夜「……もしかして帰れてないのか？……だとしたら、もう力もないのに、」

もう彼には打つ手がなかった。

彼女を現実へと返すための手段を作ることでは彼は自身に残っていた全ての力を使ってしまっていた。

だからもしも彼女がこの世界残っていたとしても彼にはどうすることも出来なのだ。

蓮夜「……どうにか彼女を帰さないと、……じゃないと……あつ、」

そこで彼の中に1つの景色が浮かび上がる。

それは幼い時の思い出、

日常的に行っていたお茶会で彼女が浮かべていた笑顔だった。

蓮夜「……今更すぎるでしょう。……まだ生きたいんだな、俺は……夢結と一緒にいたいんだ。」

彼の手が震える。

その手はまるで自身の意識を拒絶するかのように刃を押し戻そうとしていた。

蓮夜「……わかってくれよ俺……もう手遅れなんだ。もしもここで消えなかったら夢結を傷つけてしまうかもしれないから、だから言うことを聞いてくれ。」

すると彼の手の震えが収まる。

そして再び刃が動き出した。

蓮夜「……だけど良かった。……これなら夢結は外に出てるな。」

彼は自身の頬を雫が伝っていることに気がつく。

蓮夜「……まだ涙を流せたんだ。」

十字架  
刃が硬いものに当たり止まる。

蓮夜「……あと一押し、」

彼は刃を握り直す。十字架

そして1度深呼吸をすると、

蓮夜「……君に出会えて本当に幸せだった。……夢結、さよう  
な、」

??? 「言わせないわよ!」

彼の手が再び止まる。

彼は驚愕する。

今度は自ら止めたのではないからだ。

蓮夜「嘘だよね。……どうして、」

彼はゆっくりと目を開く。

そこには、

蓮夜「なんているんだよ。……夢結!」

夢結「言わせないわ……絶対にその言葉だけは、」

自身の腕を掴む彼女の姿が映し出された。

## 過去☒

いつもなら賑わっているはずの街の中、しかし今はその賑やかさが嘘かのように静まり返っていた。

まるで忽然と人が消えてしまったかのように感じるこの静寂の世界でただ一つだけ動きを見せるものがあつた。

夢結「・・・。」

静まり返つた街をただ歩き続ける彼女の瞳には何も写っておらず瞳に宿る輝きも存在せずその場所には虚空のみが存在した。

静かの世界を進む彼女の歩は遅くその動きにはまるで生氣を感じることが出来ない。

まるで意識が存在せず肉体のみが動き続ける人形のように、

・・・私は人形・・・そうよね。人形なのだから・・・人としての幸せなんて訪れるはずがないのよ。

彼女の中で彼の一言が反響し続ける。

その音は次第に大きくなり彼女の心を侵食する。

・・・奪つたのよ。・・・私は全てを、

彼女の中で生まれた闇が彼女そのものを食い潰そうと牙をむく。

その牙は鋭く彼女の肌ひを用意に引き裂いてしまふだろう。

・・・お姉様の人生を、・・・彼の幸せを、

しかし彼女にはどうでもよかった。

・・・これからも私は奪つてしまう。・・・誰かといえるだけでその



人の全てを、

彼女の中で1つの願望が生まれる。

・・・消えてしまいたい。

このような自分化け物なら消えてなくなってしまうたい。  
そうすれば犠牲者も減るのだろうと、

・・・けれどもそれは出来ないのよね。

彼女なら自身を消すことなら異能を使用すれば問題なく可能だ。  
しかし彼女にそれが出来なかった。

・・・私は、人形だから造り手彼の命令を聞かないと、

造り手・・・黒鉄 蓮夜の人形、それが彼女なのだ。

人形は造り手に逆らってはならない。

それが存在意義であるから、

・・・人形としても不良品の私を壊さないなんて・・・まだ私には  
利用価値があるのかしら？

彼女は僅かに残った意識を用いて考える。

何故彼は自身ではなく人形を選んだのかを、

・・・私にもっと苦しめということかしらね。・・・彼が苦しんだ  
ように、

それが罰となるならば、

そう考えると何故か彼女は身体が軽く感じた。

まるで自身にかかる重圧が減ったかのように、

・・・彼は恨んでいるのかしら？・・・恨んでいるでしょうね。私のせいで全てが狂ってしまったのだから、

この命令訓もそれならば妥当だと考える。

彼と同じ苦しみを味わいながら生活する。それがどれだけの苦痛か彼女には想像することが出来なかったが想像を遥かに超える苦しみであることだけは分かった。

思考を深める彼女の前に光が現れる。

彼女はそれに気づくと前方へと視線を向けた。

そこには光で出来た扉が存在しその向こう側には彼女がここに入る前にいた彼の部屋が映し出されていた。

夢結「・・・ここが出口？」

彼女は一度動きを止めるがすぐにまた歩き始める。

迷うことなく彼女が手を扉へと伸ばしたその時、

・・・本当にいいの？

誰かの声が響き渡った。

夢結「・・・誰なの？」

・・・本当に置いていくの？

その声は背後から聞こえた。

彼女は無視をしようと考えるが身体が無意識に動き背後へと視界を向けた。

そこには、

・・・1人にしちゃうの？

幼い頃の彼女の姿があった。

夢結「・・・わたし？」

・・・また泣いちゃうよ？

夢結「・・・また、泣く・・・どういうことなの？」

・・・可哀想だよ？

夢結「・・・だから、誰が可哀想なのよ！」

・・・思い出して、

夢結「・・・思い出すって何を、」

・・・彼を思い出して、

夢結「・・・彼って蓮夜のこと？」

・・・本当のれんやを思い出して、

夢結「・・・本当の蓮夜？」

何を言っているのか彼女には理解できなかった。

本当の彼とは何を指しているのか？

記憶を失う前の彼なのか？

それとも狂い始める前の彼なのか？

彼女には分からなかった。

夢結「本当と言われても・・・彼は何も変わっていないわよ。・・・

いつも冷静で、心が強くって、頼りにな・・・る？」

本当にそうだっただろうか？

自身の抱いている彼に違和感を感じる。

まるで何かが決定的に間違っって以下のように、

夢結「・・・なんなの、この違和感は、」

まるで自身の中の彼が偽りであるように、

『ゆくゆく。』

『どうしたの?』

「いなくなっちゃうから・・・。」

『ほんとうにこわがりね。』

「ゆゆ?」

『だいじょうぶよ。わたしがついていいるからだからなかなかないで

?』

『うん!』

夢結「・・・寂しがり屋で、怖がりで、だけど優しい。それが彼だった。」

違和感の正体はこれだ。

自身の持つ彼への印象が違っていたのだ。

夢結「・・・だけど人一番我慢強くて・・・何かあると一人で抱え込んでしまう、」

・・・そうだよ。やっと気づいてくれたね。

夢結「・・・ありがとう、やっと目が覚めたわ。」

・・・なら急いで、間に合わなくなる前に、

そう言う幼い頃の彼女は微笑みながらその姿を消した。

夢結「・・・急がないと、」

彼女は走り出した。

その方向は先程彼女が通ってきた方角ではないがこつちに彼がい

ると彼女には分かった。

それが何故かは分からないが彼女は迷うことなく進む。

夢結「・・・色が無い、」

そして気がつく。

世界に色が無いことを、

これが彼女の足を早めさせた。

夢結「・・・お願い、間に合って、」

彼女が走り続けると彼女の向かう先には彼が毎日来ていた森がありそこからは微かに彼の気配を感じ取れた。

夢結「・・・あと少し、」

木々の隙間から縫うように進む。

流れるように変わる景色の中彼女はとある光景を見つけた。

蓮夜？『・・・記憶を消す前に、』

それは過去の彼であった。

彼は自身両手を自身の前方へと出すと手を合わせる。

そこから光の粒子が溢れ出し辺り全体を埋めつくした。

その光が一際強くなると彼は手を広げてその光を集めた。

その光は1つに集まりその光量を強め弾ける。

すると光は2つに別れて彼の両手に一つづつ収まった。

そして光が収まるとそこには、

蓮夜『・・・《夜桜》に《輪菊》か・・・彼女を頼むぞ。』

そう呟き彼は倒れた。

彼女はその横を通りながらさらに森の奥へと進む。

しばらく走ると彼女の目の前に森の切れ目が姿を現した。

森の切れ目を抜けた先、そこには傷だらけの彼がおり自身の首へと十字架のような形をした武器を当てていた。

その刃は彼の首筋にくい込んでおりもう彼の首を切断する寸前であり、それを抑えるては震えている。

蓮夜「……わかつてくれよ俺……もう手遅れなんだ。もしもここで消えなかつたら夢結を傷つけてしまうかもしれないから、だから言うことを聞いてくれ。」

……手遅れではないわ。

彼は決意を決めたのか再び刃を動かす。

蓮夜「……だけど良かった。……これなら夢結は外に出てるな。」

……絶対に傷つけさせない。

彼は涙を流す。

蓮夜「……まだ涙を流せたんだ。」

……貴方の人形でもいい。

彼女は彼へと向かって駆け出す。

蓮夜「……あと一押し、」

……だから、

蓮夜「……君に出会えて本当に幸せだった。……夢結、さよう  
な、」

・・・そんなことを言わないで!!

??? 「言わせないわよ!」

・・・やつと本当の意味で掴めた。

彼女は彼の手を掴んだ

蓮夜「嘘だよね。・・・どうして、」

・・・貴方の手を、

彼はゆつくりと目を開く。

彼女は歪んだ表情をする彼へと微笑みながら、

蓮夜「なんでいるんだよ。・・・夢結!」

・・・もう決して離さないから、・・・だから、

繋いだ手を強く握り、

夢結「言わせないわ・・・絶対にその言葉だけは、」

・・・一緒に幸せを掴みましょう。

自身の心をさらけ出した。

## 過去☒

これは自身の願望が生み出した幻影なのだろうか？

彼は目の前にいる存在が偽物であると信じこもうとする。

そうしなければ彼は耐えられないからだ。

黒鉄 蓮夜彼の望みは彼女が白井 夢結幸せになることなのだ。

黒鉄 蓮夜彼の計画で彼女がここから出ていく時に記憶を改竄し自身の消滅と同時に世界から存在を消す予定だったのだ。

しかし、ここに彼女がいるのなら今までの計画が全て無駄になってしまう。

そうなれば黒鉄 蓮夜彼の今までの苦しみが、代償が無駄になってしまふ。そしてそれは、黒鉄 蓮夜彼が報われない。

しかしこの状況に歓喜する自身もいるのだ。

たとえそれが自身の存在理由から反していたとしても、黒鉄 蓮夜彼も彼なのだから、

蓮夜「・・・なんで帰らないんだよ、お前には会いたくないんだよ。・・・さつきも言っただろう俺はお前が憎いんだよ。」

夢結「・・・蓮夜、私が憎いのならなんでそんなにも悲しそうな表情をしているのかしら・・・」

蓮夜「・・・まだ生きたかったからだよ。・・・お前と出会わなければ俺はこんな目に会わなかったんだ。それなのに俺はお前と出会ったがばつかりに、」

夢結「・・・声が震えているわよ?・・・それに、」

彼女は彼の腕を引き彼の首筋から十字架刃を離す。

そして俯いた彼にそつと近寄り優しく包み込むように抱きしめる。

夢結「・・・涙を流している貴方を1人には出来ないわ。」

蓮夜「・・・どうして1人してくれないんだ。」



彼は顔を上げて彼女へと目を向けた。  
その彼の瞳には恐怖を宿っていた。

夢結「・・・知っているもの、貴方が寂しがり屋さんなども怖がりなことも、それに・・・他人のために立ち向かう強くて優しいことも。」

蓮夜「もしかして記憶が・・・。」

夢結「・・・ええ、思い出したわ・・・全てを、」

彼女の力が強まる。

まるで怯えているかのように震える彼を安心させるために、凍えてしまっている彼の心を解かせるように、

蓮夜「・・・なら分かっているでしょう？もう僕がどうにもならないことも、そしてあと少してここも消えてしまうことも、」

夢結「・・・ええ、わかってるわ。」

蓮夜「・・・ならなんで！」

夢結「貴方を1人にしたくないからよ。・・・もしも貴方が消えてしまうのなら私も一緒に行くわ。そうすれば少しは寂しさも和らぐでしょうから、」

蓮夜「・・・ダメだよ。そんなこと、それじゃ彼が報われない。僕は幸せになれないんだ。・・・僕は人じゃないから、」

彼の必死の抵抗として放った一言を聞き彼女は優しく笑う。

夢結「・・・人じゃないのだと言うのなら私もそうよ。貴方が言ったのよ？私は人形だって、だから貴方がそうなら私も幸せになれないわ。」

蓮夜「それは・・・！」

彼の言葉が止まる。

彼女を説得する方法を考えている彼を見ながら彼女は言葉を紡いでいく。

夢結「人形でも、私はいいのよ。貴方との繋がりを感じられるから、」

蓮夜「・・・でも、」

夢結「・・・それに貴方は私の幸せと言うけれど、貴方がいないと私は幸せになれないのよ？」

蓮夜「・・・璃梨さんは？それに一柳隊の皆もいるのに・・・なんで僕なの？」

夢結「あの日に貴方はこう言ったわよね。『ずっと一緒にいてください』って、それなのに貴方が私を置いて行くの？」

蓮夜「・・・それは、」

彼は再び彼女から目を背けた。

まるで彼女のことを見る資格がないと言わんばかりに、

夢結「私は貴方と生きていきたいの、もしもそれが叶わないなら私は生きていく意味がないのよ！」

蓮夜「・・・!?!」

生きていく意味がない。

その言葉が彼の中で響く。

『意味がない』その言葉は彼には身近なものだからだ。

その言葉は彼が自身に言い聞かせて来た言葉であり、彼の存在する理由でもある。

彼の存在理由・・・それは彼女が幸せを手に入れるまで彼女を守り抜くこと、

それが出来なければ彼は存在する意味がないのだ。

この言葉は彼を縛り付ける鎖であると同時に彼が彼である為の命綱でもあるのだ。

蓮夜「……意味がないなんて……そんなの僕と、」

夢結「同じよ。貴方と私は同じなの、お互いが幸せにならなければ存在する意味がない……それが私達なのよ。」

彼女は何かを決意したのか彼の頬を両手で包み彼女の方へと向かせる。

そして目を合わせると彼の頭を抱くように彼へと覆い被さった。

蓮夜「……夢結！なにを!」

夢結「……聞こえるでしょう?」

《トクン、トクン》

心臓の鼓動聞こえる。

その音色は彼の心に安らぎを与え満たすように彼の中へと浸透していく。

夢結「……私が生きているのは貴方がいるから、だから私は貴方の人形でもいいの……貴方が一緒に居てくれるのなら、」

蓮夜「……夢結、」

夢結「……素直になってもいいのよ。貴方は今まで頑張ってきたのだから、」

蓮夜「……そんな事言わないでよ。……そんな事言われたらもう、」

彼の中で何が溢れ出した。

まるでダムが決壊し今まで堰き止めていたものが濁流となって流れ出すかのよう、

もう彼には我慢出来なかった。

一度流れ出したものが戻ってこないように溢れかえったものは彼

の残された感情を拾い集める。

蓮夜「……僕だって……僕だって一緒に居たいよ。まだやりた  
いこともあるんだ。君と生きたいよ。」

夢結「……蓮夜、」

蓮夜「だけどダメなんだ。僕はもう負けたから、一度吞まれたら  
戻って来れないから、だから楽になりたかったのに、もう苦しみたく  
なかったのに。なんで君は僕を1人にしてくれないんだよ！」

夢結「……。」

これが彼の抱える闇なのだ。

苦しみ続けたがために苦しみたくない。

存在するだけで苦しむのなら楽になりたい。

彼女はそこで気づく、

彼女が死に場所を求めていることに、

白井彼女が夢結幸せになるとい黒鉄う彼の蓮夜幸せを手に入れて満たされた気持ち  
のまま眠るために、

もしも本当彼のことを思うのなら彼の願いどおりにすることが1  
番であろう。

しかし、彼女はそれを認められなかった。

夢結「……貴方だけ楽になるつもりかしら？」

蓮夜「……もう辛いんだ。存在すること事態が、」

夢結「……私はどうするの？」

蓮夜「……えっ？」

夢結「……置いて行かれる私はどうすればいいのよ？私は生きて  
行けないわ。もう失いたくないもの、だから貴方が居なくなるなら私  
も一緒よ。」

蓮夜「……夢結、」

彼を1人にしない……そして1人にならないこと、

彼と同じくもう1人苦しみたくになりたくない。

そのためならば命すらも断つ。

これが彼女の答えだった。

夢結「……だから私を1人にしないで……。」

蓮夜「……。」

彼も気づく、

もう寂しい思いをしたくない。

だから何も失いたくない。

それが彼女の幸せであると、

彼女を幸せにするのが彼の願いだ。

そして彼女が幸せになるには彼が必要でありもしもこの願いが叶わないのなら彼女は苦しむことになる。

ならば答えは簡単だ。

蓮夜「……わかったよ。」

夢結「……蓮夜!?!」

彼は彼女を抱き上げると彼女を強く抱きしめる。

いきなりの行動に彼女は驚くがすぐに身体力を抜き彼へと身を委ねる。

蓮夜「……夢結、君が僕がいないと幸せになれないんだっただ僕  
は君のために生きて続けるよ。たとえ……それが苦難の道であつても、」

夢結「……なら、私は貴方を幸せにするわ。貴方が苦しみ続ける  
のならその苦しみ以上の幸せにしてあげる。それが私の幸せでもある  
のだから、」

彼の瞳に光が宿る。

それは過去の彼が持っていた輝きでありそれは彼の決意を表すものでもあった。

それを見た彼女は微笑みながら自身の唇をそつと彼の唇へと触れさせた。

## 過去☒

夢結「……落ち着いたかしら？」

蓮夜「……うん、もう大丈夫だよ。」

彼が落ち着いたことを確認した彼女は彼から離れこれからの事を考え始めた。

夢結「……あのような事を言ってしまったけれど、解決策がないのよね。」

蓮夜「……だけでももう決めたんだ。どうかかしよう、」

彼女は考える。

彼のことだ彼の出来ることをやり尽くしたのだろう。

しかしそれでも足りなかったのだ。

彼女にはこの結果に辿り着くまでにどれだけの苦痛を伴ったか計り知れない。

しかしそれが彼の心を折ってしまうほどだった事だけは分かった。

夢結「蓮夜、今まではどうやって凌いでいたのかしら、」

蓮夜「……今までは侵食してきた所を切り離して進行を遅らせた感じかな？」

夢結「……侵食？……どういう事かしら？」

蓮夜「……これは多分こうなった人しか分からないと思うんだけど……どんどんと自分じゃ無くなるんだ。感情や感覚器官とかがどんどんと自分のものじゃなくなって行って最後には自身そのものが消えてしまう。……それを抑えるにはその侵食された所を切り離して隔離するのが最善策だったんだよ。……夢結？」

彼女は彼を再び抱きしめると震え始める。

その力が強く彼が驚いていると彼の耳元から嗚咽が聞こえ始めた。

夢結「・・・辛かったでしょう。ごめんなさい・・・気づいて上げられなくて、」

彼女は涙を流さずにはいられなかった。

何が消えてしまう恐怖は彼女も知っているから、

1回だけでも気の狂いそうになるあの絶望を彼は何回も繰り返しているのだ。

それなのに彼女はそんな彼に気づいてあげることが出来なかった。

彼の事を1番知っているはずなのに、

彼の事を1番わかかってあげられるはずなのに、

彼女には抱きしめずにはいられなかった。

彼は今までに多くのものを失っている。

もしかしたら触覚や温感も失っているかもしれない。

そして彼女声も彼には聞こえていないのだ。

だからせめて彼が自身の何かを感じられるように強くって抱きしめる。今まで何も感じる事が出来なかったであろう彼に、

夢結「・・・私が辛かった時・・・あの時私と同じく・・・いいえ、

私より辛かったのよね。苦しかったのよね。」

蓮夜「・・・大丈夫だよ。今こうして君を感じることが出来ているから、君の温もりを、」

夢結「・・・よかった。」

蓮夜「ありがとうね。心配してくれて、だけど大丈夫だよ。もう怖くないから、」

彼は彼女の頭を撫でながら彼女を抱き締め返す。

彼が撫で続けると彼女が泣き止み彼女はたどたどしい声で言葉を紡ぐ。

夢結「・・・何が・・・足りないのかしら、」



蓮夜「……ごめん、それはよく分からないんだ。多分もう僕の侵食を防ぐ為の何かが壊れたからだと思うんだけど、」

夢結「それが直せば助かるの?」

蓮夜「多分無理だと思うよ。」

夢結「どうしてなの?」

蓮夜「もう侵食されてるから……もしもどうにかするには1回侵食された部分ごとこちら側に引つ張り出さないと、」

夢結「……引つ張り出せばどうにかなるのね?」

蓮夜「:う、うん。そうすればあとは大丈夫だよ。今までは引つ張り出してもそれを収めるものがなかったからどうにもならなかったんだけど、もう殻はできてるから。君のおかげだね。」

夢結「……そう、引つ張り出すのには力が足りないのかしら?」

蓮夜「それもあるけどもう僕は能力が使えないんだ。」

夢結「どうして!?!」

蓮夜「君を返すようの道に全て使っちゃったから、」

夢結「もしかして力が不安定なことが原因なの?」

蓮夜「違うよ。ただ限界が来ただけなんだ。」

限界が来た。

つまり彼にはもう後がないのだ。

それに気づいた彼女は焦り始める。

もしも彼に力が残っていればどうにかなるかもしれない。

そこで彼女は思いついた。

しかしそれは彼の意識を無視するものであり絶対に言うてはいけない禁句でもある。

夢結「……私の心臓を使えないかしら、」

蓮夜「……えっ?何を言っているの?」

しかし彼女はその言葉を出してしまった。

彼女は自身胸を抑えながら彼へと真剣な眼差しを向ける。

彼女の考えついた方法・・・それは彼の力の片割れである自身の心臓を彼へと戻すことだった。

夢結「・・・貴方に返すのよ。貴方の瞳を、」

蓮夜「・・・君は何を言っているか分かつているの?」

夢結「・・・分かつているわ。貴方の瞳画元に戻れば再び能力を使うことが出来るはずよ。そうすれば、」

蓮夜「・・・そうしたら君はどうするのさ!」

夢結「・・・私の心臓は直せばいいのよ。」

蓮夜「・・・君だつて分かつているんだらう?もしもその心臓が無くなれば君は、」

この方法が禁句だと考えた理由、それはこの方法が彼女自身の命を犠牲にしなければいけないことだ。

今の彼女はこの心臓があるから生きることが出来ている。

もしもそれがなくなってしまうえば彼女はすぐにこの世を去ってしまうだろう。

それは彼女も分かっている。

しかし彼女にはこれしか思い浮かばなかったのだ。

夢結「・・・分かっているわよ。・・・だけれど私にはこれしか思い付かないの!」

蓮夜「・・・夢結、君の気持ちは嬉しいよ。だけどそれだとダメなんだよ?分かるでしょう?君がいるから僕は生きることを決めたんだ。それなのに君いなくなったら、」

夢結「・・・ごめんなさい。」

蓮夜「・・・僕もごめん。」

そんな事わかっていた。

この方法では2人とも救われないのだ。

彼は彼女がいなければ生きていけないし、

彼女を犠牲にしなければ彼は救われない、

この矛盾があるからこそ2人はお互いを救えないのだ。

2人とも生きていないと生きられないのにどちらかを犠牲にしなれば助からない。

それならばなにか方法がないか、

彼女は思考の海へと沈む。

何か答えがあるはずだ。

その答えに既に私は辿り着いている。

しかしその答えが分からない。

彼女はさらに深くへと沈む。

・・・私は1回諦めかけた時何を言ったの？

彼女の中でその声が響く。

諦めかけた時？何を言ったのか？

彼女はあの時を思い出す。

力を注ぐ。

鎖で縛る。

離さない。

あの時口にした言葉はこの3つのはずだ。

これが答えになるのか？

・・・私が作り出した力は何？

私が作った力・・・それは、

夢結「・・・分かったわ。」

蓮夜「・・・夢結？どうしたの？」

夢結「・・・分かったのよ！貴方も私も一緒に生きていける方法が

！」

蓮夜「・・・本当に？」

夢結「ええ、私に任せて・・・必ず成功させるから、」

彼女の瞳には確かな確信が宿っていた。

## 過去☒

蓮夜「・・・本当に生きていける方法があるの?」

夢結「ええ、信じて、」

蓮夜「・・・分かった。信じるよ。」

彼が頷くと彼女はすぐさま行動に移した。

彼女が一度彼から離れると彼女の全身からオーラが溢れ出す。

そのオーラは辺り全体を覆うように吹き荒れた。

オーラも次第と収まり彼女の身体に紋様が浮かび上がった。

その紋様は彼女の異能である『天獄纏』のものでありそれは彼女の手の甲から肩口へと上り全身へと広がりだした。

紋様が全身を覆い隠すと彼女の額から黒い角が背中から白い翼が現れ彼女の異能が最大出力になったことを示した。

それまでは彼の知っている事象であったがそこから彼女の異能に変化が起こる。

全身へと広がっていた紋様が彼女の手の甲へと戻り出す。

彼女の手の甲へと戻った模様はその存在を薄れさせその形を曖昧にさせた。それと同時に彼女を包むオーラが乱れ始めそれに伴い彼女の表情が歪み額から汗が溢れ出した。

蓮夜「大丈夫!?!」

彼女の異変気づいた彼が彼女に近寄りながら、

夢結「大丈夫よ。だから心配しないで、」

そう言うと彼女は深呼吸呼吸を始めた自身が纏うオーラを安定させていく。

すると彼女の手の甲の紋様がその姿を表し始めた。

新しく現れたその紋様は右手には黒色の「剣と鎖で出来た天秤」が、

左手には白色の「鎖で縛られた2振りの剣」がの形をしていた。

それに伴い両手の甲からそれぞれ黒色も白色の鎖のような紋様が伸び始め先程同様に全身へと広がり出した。

その鎖が彼女を覆い隠すと彼女から生えていた角と翼に変化が現れる。

角は次第に形を変えティアラのような形状に変化し、翼は純白だったその色に淡い金色を宿す。

角と翼が安定すると彼女の瞳と髪にも変化が起きた。

瞳の色が左目は透き通るような蒼色に変化し、右目は左目と対を成すように全てを呑み込むような紅色へと変化した。それと同時に彼女透き通るような黒髪もその色を失い、光を反射して輝く銀色へと変化する。

そこで彼女の変化が終わり、その姿が安定すると彼女の身体は浮き出す。

その姿は美しくも荒々しくその対極である2つの要素が見事に調和していた。

夢結「これで準備が出来たわ。・・・あとは、」

彼女は自身の身体を確認すると彼へと近づき左手を彼に右手を自身の胸へと添える。

その手からは無数の鎖が現れ彼女の腕に巻き付きながら鎖同士が重なり交わり1本の鎖へと変化を始めた。

夢結「・・・少し痛いかもしれないけれど、我慢してね。」

そう彼女が呟くと彼女の腕に巻き付いていた鎖はその手の先・・・2人の胸へと突き刺さり身体の奥へと進んでいく。

その痛みには彼は一瞬強ばるがすぐにその痛みは消え別の何かが始めた。

・・・これは、  
・・・繋がった見たいね。

彼の中に彼女声が響く。

しかし彼女は言葉を紡いでおらずこちらを真剣な眼差しで見ている。  
た。

・・・何？これ？

・・・今私と貴方の心を繋いだの、

・・・どうやって？

・・・私だっただけ見ていただけではないのよ？貴方を助けたくてね、過去の貴方を見て学んでいたのよ。私の能力は貴方の異能の派生なのだから貴方の力の使い方が私には合っていた見たいですぐに使い方が分かったわよ。

・・・大変だったでしょう？

・・・確かに大変だったわね。だけど別に苦労だとは思わなかったわよ？だって貴方のためですから、

・・・成功させよう。

・・・ええ、絶対に成功させましょう。

彼女は彼へと微笑みながら両手に巻き付いている鎖を重ね合わせた。  
た。

その鎖はお互い絡まりまいながら交わり合い白銀の鎖へとその色を変えて行く。

夢結「・・・制約『私』《白井 夢結》は彼《黒鉄 蓮夜》を決して孤独にさせない。』それを持って『彼』《黒鉄 蓮夜》と私《白井 夢結》の心を繋ぎそれを持ってお互いの楔とする。』」

彼女がそう宣言すると鎖は輝きを放ちその光は2人を包み込む。

それと同時に彼の中にもう1人の誰が現れその存在を強く感じら

れるようになった。

・・・夢結なの？

・・・ええ、そうよ。これで私達は2人で1つ・・・絶対に離れられなくなつたわ。

・・・もしかして2人とも生きる方法って、

・・・いいえ、まだよ。

彼女は彼の両手を掴み指を交わらすと彼の身体を引き寄せて彼の額へと自身の額を当てた。

夢結「・・・契約『私』白井 夢結』は彼『黒鉄 蓮夜』の心を守る。』それを持って『彼』黒鉄 蓮夜』は私『白井 夢結』の心を守らなくてはいけない。』」

・・・さあ、貴方も誓って、

・・・誓うってどうするの？

・・・宣言しようとするればわかるわ。

・・・分かった。

蓮夜『僕』黒鉄 蓮夜』は君『白井 夢結』を守り抜くこと』をここに誓う。』」

・・・私に合わせて、

・・・うん。

夢結・蓮夜「『この誓いを持って私』黒鉄 蓮夜』と彼』白井 夢結』の心を守り抜くこと』は一つとなりて新たな命となる。この誓いは未来永劫潰えることはなく2人を繋ぐ鎖とならん。』」

2人の宣言はこの世界心の中に響き渡る。

彼の心  
世界はその誓いを祝福するかのように2人を光が包み込み世界を閉  
ざした。



## 過去☒

蓮夜「夢結・・・大丈夫？」

夢結「ええ、大丈夫よ。」

2人は手を繋ぎお互いの存在を確認する。

光に塗りつぶされた視界が次第と晴れていく。

戻った視界に写り出されたものは、何もない世界だった。

黒い床に白い空、

この2色だけが彩る世界、その中に2人だけが存在する。

その異様な空間はどこまでも続いており果ては見えない。

蓮夜「・・・身体には異常はなさそうだね。」

夢結「そうね、これ以外は、」

彼女はそう言うと言自身の胸に突き刺さっている鎖を持ち上げた。

その鎖の端は彼の胸に突き刺さっておりそこからお互いの存在を感じることが出来る。

蓮夜「これがあるってことは成功したみたいだけど・・・何処なんだろう？」

夢結「貴方でも分からないの？・・・そうなると私だと分からないわね。」

確かに彼女の・・・2人の試みは成功した。

しかし、成功したのならば現実世界に戻るはずだったのだが、

蓮夜「・・・現実に戻って無いってことは何か問題があった？」

夢結「嘘でしょう・・・そうだとしたら、」

彼女は頭を抱えて蹲る。

もしや、自身が失敗してしまったのでは無いか？

そもそも、成功する可能性などなく彼に叶わぬ希望を与えただけでは無いのか？

可能性はいくらでも存在する。

しかし、現実へと戻れていないということはこの試みは失敗したということだ。

夢結「・・・ごめんなさい。」

蓮夜「・・・夢結、」

彼女は涙を流す。

あのような事を言いながら失敗してしまった事が悔しくて、絶対に成功させなくては行けなかった場面で失敗した自身が情けなくて、

誓ったのに彼を救うことが出来なくって、

彼女の中で気持ちりが混ざり合い心の中で感情が荒れ狂う。

荒れ狂った感情を抑えられずそれが溢れて涙となって流れ出す。

夢結「・・・ごめんなさい。貴方のこと、」

蓮夜「・・・。」

夢結「・・・やはり、私ではダメだったのよ。・・・そうよ、いつも失敗をし続ける私なんかでは無理だったのよ、」

蓮夜「夢結!!」

自身を罵る攻撃する彼女を彼は握っている手を強く引き強引に自身の目の前に立たせた。

夢結「!?!?・・・蓮夜、」

蓮夜「僕は君がいたから生きる事を選んだんだ。それなのに君が諦めたらどうすればいいんだよ!」

夢結「・・・だけど、」

蓮夜「だけどじゃない！僕はまっすぐな君が好きなんだよ。・・・今の卑屈な君なんか大っ嫌いだ！」

夢結「・・・!?!」

彼女の心に彼の言葉が響く。

大っ嫌い・・・この言葉が脳内を反響する。

蓮夜「・・・どうして君はそうなるんだ！昔の君はそんなじゃないかっただろう！」

夢結「・・・昔の私？」

蓮夜「そうだよ！僕が守りたいと思った君はいつも僕手を引っ張って行ってくれた君はどうしたんだよ！」

夢結「・・・。」

蓮夜「やつとあの頃に戻れると思ったのに・・・。」

夢結「・・・あっ！」

彼の瞳からも涙が溢れ出した。

悲しみ・・・感情によつて溢れ出たその涙、それは今の彼では流れることがないものだった。

そこで彼女は気づく・・・彼の本当の願いを、

彼の願い・・・それは彼女と生きること、

これが彼の純粋な願いでありそれは紛れもない事実だ。

しかし彼の願いはそれだけではなかったのだ。

彼の本当の願い・・・それはあの頃日常へと戻ること、

あの頃の心のまま止まってしまった彼の心が真に願ったものそれが彼の本当の願いだったのだ。

夢結「・・・馬鹿ね私は・・・本当に馬鹿。」

彼女の心に変化が生まれる。

いいや、これは変化ですらない・・・ただ止まっていた心が動き出

しただけだ。

彼の心の時が止まっていたように彼女の心もまた時を止まっていたのだ。

閉ざしていた彼女の心……それが彼の心に触れることで解き放たれる。

……やつと、始まる<sup>歩ける</sup>ね。

……うん、やつと進む<sup>あの続きが</sup>ことが出来るね。

空間内に声が響く。

その声は優しさとともに温もりを感じさせるものであり2人の心に浸透するように広がり包み込む。

蓮夜「……この声って、」

夢結「……もしかして、」

蓮夜・夢結「<sup>蓮夜?</sup>夢結?」

その声は幼い時の2人の声であった。

夢結「……もしかして貴方は、」

……また会えたね。

蓮夜「これはどういうことだ?」

……僕は初めましてかな?

夢結「貴方達は……。」

……いきなりだし分からないかな?

……そうだね。ちゃんと説明しないと、

蓮夜「……夢結、君は知っているの?」

夢結「……えっ、ええ、彼女がいたから今の私はここにいるから、」

……そっちの話は終わったかな?それじゃあ僕達も説明しようか、

……まず私達は、貴方達なの、

蓮夜「……僕達?」

・・・ええ、そうよ。私達は貴方で、貴方達は私達・・・貴方達にわかりやすく言うならあの頃の私達と云えばいいかしらね？

蓮夜「・・・あの頃？」

夢結「あの頃・・・もしかして！」

・・・夢結は分かった見たいだね。そう僕達は運命物語から踏み出した日、僕が異能者になった日までの僕達だよ。

蓮夜「なっ！」

夢結「・・・。」

・・・これから話すことは僕達が異能を持つことになった理由でありこの苦難の道を歩むこととなった理由だよ。

蓮夜「・・・異能を持つ理由、」

・・・僕に異能が宿った理由・・・それは僕という存在がこの世界におけるイレギュラーであったことなんだ。

蓮夜「・・・イレギュラー、つまり僕は元々この世界に存在するところが無いはずの人間だったわけか、」

・・・そう、僕はこの世界に存在するはずがなかった命であり世界が想定していなかった存在物語だったんだよ。

夢結「・・・そんな事、」

・・・辛いと思うけどこれは事実なんだよ。・・・この世界に生まれる人間はどのような人物でも必ずその人生の道筋・・・運命物語を持っているんだ。それはその人間に訪れる未来が記されていてそれを変えることは決してできない。

蓮夜「だけど元々生まれるはずのなかった僕にはそれがなく、それを補うために世界の修正力が働いた結果が異能ってことかな？」

・・・うん、そうだよ。その修正力異能によって僕はこの世界での存在を得たんだ。

蓮夜「つまり異能者は存在するはずのなかった存在または本来の道筋とは異なる結果を生み出す存在に異能が宿るってことか・・・。」

・・・そしてこれには大きなデメリットがある。この世界は等価交換の法則で成り立っているからね。強大な力にはそれ相応の代償がなくてはいけない。

蓮夜「・・・それがこの苦難の道、」

・・・そういうこと、僕は異能者になった時にこのことに気づいた。それと同時にこれから訪れる絶望を知ってしまった僕自身を守るために自身を切り離したんだ。

蓮夜「・・・だから異能者になった時の記憶が無いのか・・・それは分かったけどどうして夢結までいるの？」

・・・それは、私が原因ね。

夢結「・・・私が原因？」

・・・ええ、あの時蓮夜が私を蘇生した時に今の貴方達みたいに私と彼の存在が繋がったの、それでこの事を知った私は彼を1人にしたくなくて異能者として目覚めた私だけを切り離して彼と一緒に蓮夜の中で眠りにつくことにしたの。

夢結「・・・そうなのね。」

・・・ごめんなさい。貴方にも辛いと思いをさせてしまって、

夢結「・・・いいのよ。それは蓮夜を守るためだったのでしょう？」

・・・ええ、そうよ。

夢結「それなら謝らなくていいわ・・・蓮夜を守りたいのは私も同じ気持ちだから、」

蓮夜「・・・夢結、」

・・・話を戻すけど僕達が君達の前に現れた理由は他にもない。君たちの中に戻るためなんだよ。

蓮夜「僕の中に戻る？」

・・・そう、そのために君達をここに呼ばして貰ったんだ。

・・・貴方達が失敗したと思っていた試みは成功しているの、ごめんなさいね。こうしないと貴方達は本当の気持ちを思い出せなかったから、

蓮夜「・・・戻るって言ったけど僕は・・・夢結はどうなるの？」

・・・心配することはないよ。ただ一つに戻るだけだから、君達は君達のままだ。

夢結「・・・そうすると貴方達は？」

・・・私は大丈夫よ。だって貴方達は私達なのだから。消える訳で

は無いわ。

夢結「・・・良かったわ。だけれど本当にいいのかしら？」

・・・これでいいの、これで私達の役目は終わったのだから私達を貴方達の中に戻させて？

彼女の言葉を聞き2人はお互いの顔を見て頷き合う。

蓮夜「・・・分かった。」

夢結「・・・今までありがとうね。」

・・・うん！

・・・2人とも本当にお疲れ様。よく頑張ったね。

幼い時の2人は光になってそれぞれが2人の中へと入っていく。

それにより2人はあの時の最後の言葉を思い出した。

・・・たとえ僕が僕じゃなくても君を絶対を守るから、

これが彼の最後に紡いだ言葉だった。

蓮夜「・・・この言葉はもういらないかな？」

夢結「・・・そうね、だって私達は2人で生きて行くのだから。」

この言葉を最後に世界は崩れた。

それにより薄れゆく世界の中でも2人は手を決して離すことはなかった。

蓮夜「うつ・・・。」

暗くなった視界が晴れ、彼は重たい瞼を開いた。

蓮夜「・・・ここは僕の部屋？」

彼が周りを確認するとそこは彼の部屋でありベッドの上であることがわかる。

このことから彼は現実へと戻って来れたことに安堵すると不意に自身目の前にある布団が膨らんでいることに気づく。

彼はそれを不思議がりながら布団の端を持ち上げ中を確認すると、そこには丸まりながら眠っている彼女の姿があった。

穏やかに眠っている彼女を見た彼は彼女の頭を撫でながら微笑む。

蓮夜「ただいま、夢結。」

夢結「おかえりなさい、蓮夜。」

目覚めた彼女は彼に微笑み返した。

その2人の手は強く握られており、そんな2人を照らすように朝日が部屋へと差し込んだ。



Fallen Eyes 編 IFストーリー 罪過  
の果てに

「???」  
「・・・君に出会えて本当に幸せだった。・・・夢結、さようなら。」

木々の生い茂る森の中、全てを包み込むような緑色の世界に紅い飛沫が舞い上がる。

その紅はその主を伝い地面を染めた。

それにより紅く染められた空間はそこだけが異様さをかもちだす。

地面を紅が染め上げた時、それと同時に世界が壊れた。

まるで映し出される映像が画面のひび割れによつて歪むかのよう  
に、

ひび割れが大きくなりそれが辺り全体に広がると、世界は崩れ落ち  
そこには黒が生まれた。

黒に染められた世界、そこは重油のような重く纏わり付くような黒  
に覆われておりその底に何が沈んでいるのか見ることができない。

そんな世界の中央に一つだけ何かの影があった。

その影は片膝を立てて座っており顔は下を向いていた。

それ見た目から人であることがわかる影だが、その影からは異様さ  
が滲み出ている。

人影はボロボロの、既にその役割を果たしているのかすら分からな  
いほどに損傷した黒いロングコートを来ておりそこから伸びる手足  
もまるでなにかに挟られたかのような傷で埋め尽くされていた。

これだけでも生きているのか不思議な程の状態の人影だが、最大の  
異様さはその背中と首にあった。

その背中には十字架のようなものが生えておりそれは人影の背中  
を貫通し地面に深々と突き刺さっている。その傷口からは止めどな

く紅がたれ流されておりそれは人影の身体を染めながら地面へと流れている。しかしその紅も地面へと辿り着くと黒に飲み込まれて消えてしまった。

そして首、そこには一筋の線が入っておりそこから紅が流れている。

しかし、このような確実に死んでいるであろう状態でこの人影はその生命を終えていなかった。

人影の左瞳は常に下のある場所だけに向けられており、その瞳からは一筋の光となつて涙が流れていた。

人影の視線の先には己の右手がありそこには黒い何かが溜まっている。

その黒い何かは今でも上から流れておりその流れてきた分だけその掌からこぼれ落ちていた。

黒い何かが流れ出しているのは彼の右瞳であり、本来右瞳があるはずのそこには何も無くただ黒い空洞だけが顔を覗かしていた。

人影が流す涙が一滴下へと落ちる。

落ちた先には右手がありそこへと波紋を上げながら雫が入り込ん

だ。  
波紋が収まり再び黒い何かが動きが無くなると液面に何かが映し出された。

映し出された先には数名の少女が映し出されており、彼女達は明るい姿が映し出されるそれはこの場所とは相反する光景であった。

人影はその光景を見ていると再び瞳から雫がこぼれ波紋を立てる。

波紋により映し出されていた光景は歪み消えるが波紋が収まると今度は違う映像が映し出された。

そこには、晴れ着を見せ合いながら笑う少女達がいた。

それから雫が落ちる事に様々な映像が映し出され続けた。

その映像に統一性はなく写し出されるが、その中に2つの共通点が存在している。

1つ目は、必ず黒髪の少女が映し出されていること、

2つ目は、映し出されている人物が年齢を重ねて行っていること、

この2つから、この映像は黒髪の少女の年齢順に映し出されていることが分かった。

黒髪の少女はやがて、大人になっていきどんどんとその人生を歩んで行った。

そして長い時間が流れ少女は年老いその人生に幕を下ろす。すると映し出されていた映像は突如消える。

そこからはいくら雫が落ちても映像が映し出されなくなりついにその世界に静寂が訪れた。

静寂の支配された黒い世界、

全てが黒で染るこの場所に白い何が現れた。

それは人の形をしており覚束無い足取りで黒の中を進む。

白い影はただ前へと進み続けた。

その先には黒い何かが座っており、白い影はそこを目掛けて歩く。

白い影は目的の場所に辿り着くと黒い人影の前に立ち手を伸ばした。

白い影の手が人影に触れる寸前で、何故か白い影は手を引っ込めた。

そして自身の手を見ると再び人影へと手を伸ばす。

それからしばらく伸ばしては引っ込めてを続けついに人影に触れることができた白い影はその手を人影の頬へとそっと撫でる。

白い影は人影の顔へと自身の顔を近づけ額同士を合わせると人影の頭に手を回し抱きしめた。

強く抱き締めた人影は微動だにしないがその右瞳から流れていた黒い何かが止まりそこには先程までなかった右瞳が存在していた。

抱き締めていた白い影が離れると人影の頭に両手を添え持ち上げた。

人影の頭は首から離れ身体が崩れた。

自身の手の中にある頭部を胸に抱えた白い影は振り返り元の道に戻っていく。

白い影は覚束無い足取りで歩く。

その足には黒い何か絡みつき歩みを止めようとするが止まらない。

白い影は歩き続けると目の前に大きな建造物のようなものが姿を現す。

その建造物は一軒家ほどの大きさで外装は黒い何かに覆われており全貌は分からず、一つだけ人が通れそうな大きさの穴が空いていた。

その穴の中は外と同じく真っ暗であり中は見えないが白い影は躊躇いなくその中を進んでいく。

穴の中を進んでいく行くと白い影に変化が起きた。

白い影の覚束無い足取りはしつかりとした物に変わり、身長が高くなる。

さらに進むと、体の線が細くなり少し身長が低くなった。

しばらく進み続けると、道の脇から光が盛れており白い影はその中へと入っていく。

その中には、一般家庭にあるようなリビングが広がっており、そこには大きめのテーブルと向かい合うように置かれた椅子が2つ、そしてテーブルの上にはポットやカップ、お菓子などが並んでいた。

白い影は椅子近づくと腰を下ろし膝の上に人影の頭部を置いた。

そして白い影が人影の頭を撫でていると2人を覆う何かが溶けていく。

そこには先程まで人影の見ていた黒髪の少女と少女と同年代の少年が存在していた。

ここは2人の思い出の場所、

2人が他愛のない会話をした平和な世界、

彼が安らぎを得られた唯一の居場所、

2人でお茶会をした黒鉄 蓮夜の家だった。

黒髪の少女・・・白井 夢結は彼の顔を撫で続ける。  
その瞳からは涙が流れており、どれだけ流しても止まらない。

・・・遅くなつて、ごめんなさい。

声にならない声が辺りに響く、

・・・どれだけ謝つても、謝りきれないことは分かっているわ。

彼女の中にあるもの、それは後悔だった。

彼女は彼の言葉を信じて彼の世界から出ていった。

それにより記憶を失った彼女は彼のことを忘れてしまったのだ。

彼女だけではない。

一柳隊のみんなが・・・いいや、世界そのものから彼の存在が抹消された。

1人にしないと、支え続けると誓ったのに、

彼女は忘れてしまった。

彼を1人にしてしまった。

彼を孤独にしまった。

触れ合う事を怖がっていた彼に無理を言つて、繋がりを持つことを諦めていた彼の手を無理やり掴んで、

彼の意志を無視して自身の思いを伝えた。

自身の我儘なのに彼は受け入れてくれた。

それなのに、彼女は彼を裏切ってしまった。

彼に希望を見せるだけ見せて、ただ絶望だけを与える結果となつた。

これが彼女が犯してしまった彼女の罪、

そして今の彼が彼女の罰、

死したことで思い出したがもう遅かった。

思い出した彼女が探し続けた先に見つけた彼は既に彼女の知る彼

ではなくなっていた。  
もう元には戻せない。

・・・貴方はきつと、私のことを恨んでいるわよね。

彼は恨んでいるだろう。

拒否をしていた彼を無理やり引つ張つたの彼女自身なのだから、  
彼女は彼に謝罪をするために彼を探し続けた。

しかしもう彼女の声は彼には届かない。

・・・私がいたから、

彼女の心に罪の重みがのしかかる。

その押し潰されそうな重圧に必死に耐えて彼の顔を撫で続ける。  
これを彼が望んでいるとは思えなかった。

しかし、彼女にはもうこうすることしか出来なかった。

・・・ごめんね、ごめんね、夢結。

夢結「・・・えっ？」

彼女しかいないこの部屋で彼女以外の声が響く、

・・・約束を守れなくてごめんね。帰れなくて、守れなくてごめんね。

夢結「・・・なんで、なんで貴方が謝るのよ・・・。」

・・・置いて行っちゃってごめんね。約束したのに、約束したのに、

聞こえないはずの彼の声が聞こえる。

彼女はこれが幻聴かと考えるが彼の口が動いていることからこれが  
が真実であると確信する。

・・・君を幸せにするって言ったのに、悲しませてごめんね。

これは彼に唯一残っていた感情、それは彼女への罪の意識だった。

彼はずつと後悔していたのだ。

彼女を幸せにする、それが彼が彼であるための存在意義であり、彼の願いだったから、

夢結「・・・貴方が謝る必要なんてないのに、謝らないですよ。・・・バカ、」

彼女は彼を強く抱き締めた。

決して離さないように、決して離れないように強く。すると彼は開いていた瞳を閉じる。

蓮夜「・・・あたたかい、」

彼の口から言葉が漏れる。

蓮夜「・・・ねむい、」

夢結「・・・そうね、疲れたでしょうね。・・・もう眠ってもいいのよ?」

蓮夜「・・・おやすみ、」

夢結「ええ、おやすみなさい。もう悪夢なんて見ないで幸せな夢を見るのよ。・・・貴方は頑張ったのだから、」

彼は幸せそうな表情をすると安らかな寝息を立てた。

その寝息を聞きながら彼女は彼を抱き締めながら撫で続ける。

彼が苦しみ続けないように彼を眠らせ夢を見させ続けること、それが彼女が彼にできる唯一のことだった。

彼女は彼に触れた時あることに気づいていた。

彼の呪いである寿命の喪失がなくなっていることに、

彼が獣になってまで失わなかった目白井 夢結を見守ること的。それを果たしたところ

で失った生存本能、

それらの要素が重なり合ったことで生まれた奇跡寿命。

しかし、これはただ無限が有限になったに過ぎない。

彼の鼓動が止まるまであとどれくらいの年月があるか彼女には分からない。

数年?・・・数十年?・・・数百年?

それ以上かもしれない。

しかし彼女はただ彼の頭を撫で続ける。

彼が目を覚まさないように、

彼がこれ以上悪夢苦しみなを見ないように、

それが彼女が彼にできる唯一の償いだと信じているから、



閑話2・FOLLOW EYES編

閑話2―①

灰色の世界、無数に鉄の塔がそびえ立っている。

鉄の塔・・・ビル群の並び立つ都市の大通りに1人の青年が佇んでいた。

??? 「・・・。」

彼は全身の力を抜いるが、その瞳を目まぐるしく動かし当たり全体を見渡していた。

その手の中には槍が握られておりその槍からは怪しい光が漏れ出していた。

彼が緩やかな動作で背後を向く。

そこには前方と同じくビル群がそびえ立つだけなのだが、彼は槍を持ち替え何かを迎え撃つような姿勢を取った。

槍から漏れ出す光が強まった瞬間、

??? 「・・・ッ！」

ビルのガラスを突き破りながら黒い影が彼へと迫る。

1秒にも満たない刹那の時間で接近した影が彼に武器を振り下ろすがそれを彼は焦る様子もなく弾く。

地面に降り立った影は両足と左手を地面につけて勢いを殺しながら後退する。

勢いを殺しきった人影が上体を起こした。

そうするとその姿がはつきりと見え始め人影の正体が女性だと分かった。

彼女の手には大振りの刀が握られており左腰後ろには手に持つものとは真逆に小ぶりな刀が収められていた。

彼女が体勢を整え終わるまで見ていた彼は槍を再び構え直し彼女へと向ける。

彼女はそれを確認したのか一気に距離を詰める。

彼は彼女の軌道線上に置くように槍を突き出す。彼女が輪郭が歪み出すと共にその姿をかき消した。

それを見た彼は瞬時に自身の上方へと槍を翳すと、その瞬間姿を消していた彼女が現れて彼へと刀を振り遅した。

ぶつかり合う槍と刀、先程は彼が勝った力勝負だが今回は彼が吹き飛ばされるといふ結果となる。

後方へと吹き飛ぶ彼は自身の身体を回転させると地面へと左脚を向け、左脚が地面へと触れた瞬間に蹴り上げバク転しながらその勢いを殺す。

彼女は体勢を崩している彼へと追撃のために接近しようとするが、何かを察知したのかすぐに止まり首を傾げる。

すると先程まで彼女の頭部があった位置を大針が通り過ぎ背後にあつたビルへと深々と突き刺さった。

彼女が動くを止めた隙に体勢を整えた彼は体勢を低くするの彼女へと急接近する。

彼女が彼の動きに認識した時には彼の姿は彼女の足元まで来ておりその手に持つ槍を彼女へと向けていた。

それに気づいた彼女は後ろへと飛ぶと同時に刀から左手を離し腰にあるもう一本の刀へと手を伸ばす。

彼女の手が刀へと届きその刀身を引き抜こうとしたその時、

??? 「勝負あり・・・かな？」

背後から声が聞こえた。

彼女の首元に槍が添えられており、背後を見ると彼が槍を突き出ししている姿が写った。

彼の言葉を聞いた彼女は身体力を抜き刀を鞘へと収めると同時に背後へと振り返り。

「今日もダメだったわ、」  
「だけど昨日よりもよく戦えていたよ。」

彼女の不満そうな言葉へ彼が苦笑しながら返す。

「・・・そうは言っているけれど・・・能力も使っていない人に言われても励ましにはならないわよ。・・・蓮夜、」  
「・・・あはは、そう言われても本心なんだけどな・・・本当に強くなったよ夢結は、」

拗ねたようにそっぽを向く彼女・・・『白井 夢結』を彼の・・・『黒鉄 蓮夜』は苦笑しながら宥める。

夢結「まあ、いいわ。・・・それで評価の程はいかがだったのかしら？」

蓮夜「よく力を使えるようになって来たと思うよ。能力の制御も使い方も問題ないレベルだし技の駆け引きも問題ないかな?・・・ただ視覚情報だけで行動を選択している感じがするからそこは直した方がいいかな?」

夢結「視覚以外ね・・・聴覚とかかしら?」

蓮夜「あとはマジの動きとかも重要かな?」

夢結「・・・分かったわ。次から試して見ましよう。」

蓮夜「それじゃ、帰ろうか、」

彼がそう言い放つと突然世界が崩れだした。

ビル群が崩れ地面もその色を失うが周りからは音が一切せず粉塵もまわらない。

そして世界の色が完全に消え去ると2人の目の前に1枚の扉が現れた。

彼がその扉を開けるとその先には大きめの部屋が存在しそこには

大きめテーブルとそれを挟むように大きめのソファアールが2つ並んでいた。

2人は部屋へと入ると片方のソファアールへと並んで座る。

夢結「・・・本当によく出来ているわね。・・・あの訓練室、」

蓮夜「これくらいないと異能の訓練なんて出来ないからね。」

彼はそう言いながら振り返ると考え深そうな顔をしながら扉へと視線を向けた。

蓮夜「地球規模の仮想世界の固定化とその情報のランダム生成・・・作った時は本当に大変だったな、」

彼の瞳から光がなくなり遠くを現実逃避をするかのように今度は壁を見始める。

夢結「・・・れ、蓮夜？」

蓮夜「・・・本当にアイツらが暴れるからこの規模の作らなくちゃ行けなくてね。・・・どれだけ壊せれては改良してを繰り返したことが・・・。」

夢結「ちよつと、落ち着いて・・・、」

蓮夜「何回やっても、何回やっても砕かれ燃やされ蜂の巣にされ・・・途中から深夜のテンションで作業したなくあはは、」

夢結「それ以上考えないで！考えたら酷いことになるわよ!?!」

彼女は突如暴走し始めた彼を止めるために肩を揺さぶりながら声をかけ続ける。

しばらく揺さぶり続けると、彼は正気を取り戻したのかその目に光を取り戻した。

蓮夜「・・・ごめんね。夢結・・・ちよつと黒いもの出てきたみた

い。」

夢結「・・・大丈夫よ。・・・だけど安心したわ。」

蓮夜「安心？どうして？」

夢結「・・・昔の感情豊かだった頃の貴方に戻ったからよ。今までの貴方は少し暗いような・・・感情が薄かったような印象があったから、」

彼女は嬉しそうに言葉を紡ぐ。

その表情を見た彼は微笑みながら彼女の手を握った。

蓮夜「・・・戻れるとは思ってなかったんだ。」

夢結「・・・。」

蓮夜「今まではもう全てを諦めていたから・・・。」

夢結「・・・蓮夜。」

蓮夜「だけでももう大丈夫：君のおかげで僕は戻って来れたんだ。」

彼女には彼の言葉に何か熱いものが宿っているように感じた。

その熱は暖かく心地よいものであり彼女の中心へと浸透していく。

蓮夜「・・・夢結、本当にありがとうね。」

夢結「ふふっ、どういたしまして、」

2人はお互いの手を強く握る。

その手の温もりを感じるために、強く握り締めたその手から温もり以外の何かを感じた。

## 閑話2―②

蓮夜「……。」

機械の駆動音のみが響き渡る一室で彼は一人目の前にあるモニターを凝視していた。

モニターないには無数の数式やグラフ、高速でスクロールされるプログラムが所狭しと埋め尽くされており、それは数秒おきに消えては新たなウインドが現れる。

彼の両サイドには目の前のモニターの半サイズのモニターが並んでおりそこには様々な武器の形をしたシルエツトがいくつも並んでおりそれはウインドが変わると共に姿を少しづつ変えて行く。

彼の後ろには10機の大きな機械が並んでおり駆動音とともに細かく振動している。機械の隙間からは彩色の光が漏れ出しておりそれは溝に沿って機械の全体へと走っていた。

蓮夜「……何か足りないな。」

彼は一旦ウインドを閉じるとサイドモニターに映し出されていたシルエツトをメインモニターへと持つてくる。

そこには映し出されている武器……CHARMはパラメータ上では全て完成品と行ってもいい仕上がりをしているがそれぞれのCHARMの中央……心臓部とも言えるマジクリスタル部分のみが空洞となっていた。

蓮夜「……2機のは問題ないんだけど、他の機体は上手くバイパスが繋がらないな……これがないとメインだけでの同調になるから負荷が大きいしな……ギアのシステムをCHARMのメインシステムに無理接続してるからどれだけ干渉部を修正しても不具合は発生するか……1から考え直しかな？」

彼はメインモニターに映し出されているシルエットをサイドモニターへと移すと再び作業を再開した。

モニターに映し出された情報を再び凝視していると彼のデスクに何が置かれる音が聞こえる。

蓮夜「・・・夢結か、ありがとうねこんなに遅くに、」

夢結「これくらいなら大丈夫よ。私達のために頑張ってくれているのだものこれくらいは当たり前でしょう？」

彼がデスクへと目を向けるとそこにはマグカップが置かれておりその中には湯気の立ち上る黒い液体が入っている。

彼はキーボードを操作すると画面に『スキャナー起動』の文字が現れるモニター内のデータが高速で流れ始めた。

それを確認するとマグカップを手に取り中の液体・・・コーヒーを口に含み息をつく。自身の座る椅子を回転させるとそこには夢結がおり彼女の手にもマグカップが握られていた。

彼は立ち上がりふと壁にかけてある時計を確認すると、そこには2:00と表情されており今学院内は消灯時間であることが分かった。

蓮夜「もうこんな時間か・・・夢結はここにいて大丈夫なの？祀さんが心配すると思うんだけど？」

夢結「それは心配無用よ・・・幻覚を使っているから彼女にはバレないわ。」

蓮夜「君も異能を日常生活に使うようになったか・・・姐さん見たいに講義をサボるのに使っちゃダメだよ？」

夢結「そんな事しないわよ！失礼するわ・・・あら？今の言い方からするとお姉様が異能を使って講義を受講して居ないように聞こえるのだけど・・・。」

蓮夜「・・・いやあ、姐さんの場合は分身体に講義を受けさせてたって感じだけど、たまに分身体に反抗されて自分自身と喧嘩したとか笑

い話で話していたからね。」

夢結「・・・お姉様、」

彼女は頭痛が起きたのか頭を押させながら天を仰ぐ。

それを見た彼は苦笑しコーヒを口に含んだ。

夢結「・・・そうだったわ。蓮夜？」

蓮夜「どうしたの？」

夢結「先程の貴方の反応が遅かったようだけど疲労が溜まっているのではないかしら？無理は禁物よ。もしも疲れているのならもう休みなさい。」

蓮夜「大丈夫だよ。元々疲労とは無縁だったしそれに睡眠は必要じゃなかったからね。反応が遅れたのは視覚の情報をカットしてたからだよ。さすがにいつも全方位の情報はいらないからね。視覚の制御が出来るようになったからその辺を調整しているんだ。」

夢結「そうなのね、良かったわ。・・・。」

不意に彼女の雰囲気が悪くなり悲しそうな表情になったので彼はそつと彼女の頭を撫でる。

蓮夜「もう過去のことなんだから心配しないで、今僕がここにいるのは君のおかげなんだ。だから君が自身を責める必要なんてないんだ。」

夢結「そうよね・・・ありがとう。」

蓮夜「どういたしまして、」

2人が話しているとモニターからアラームが鳴る。

それを聞いた彼は椅子に座りモニターを確認する。

モニターには先程と同じ複数のシルエットが並んでおりその中の2つには『ALL CLEAR』の文字が残りの全てには『ERROR』の文字が表示されている。



蓮夜「やっぱりダメか・・・」

夢結「何がダメなのかしら？」

彼の上方から声が聞こえる。

そちらに視線を向けると、彼女は椅子の背もたれを支えに覗き込んでいた。

蓮夜「それがCHARMの設計が上手くいかなくてね。ほとんど出来てるんだけどコア・・・マギクリスタルとの接続部で干渉が起きて動作不良が起きるんだよ。それも機能停止や術式同士の干渉による誤動作伝達回路の司令コードの逆転みたいな致命的なものばかりだね。実用で使えるものじゃないんだ。」

夢結「私には良くは分からないのだけど危険ことはわかるわ。」

蓮夜「あと少し・・・あと一つ何か足りないんだよ。」

夢結「蓮夜、この2つ完成しているのよね？どうしてこの2つだけは不具合がないのかしら？」

彼女は『ALL CLEAR』と表情がある2つのシルエットを指をさしながら彼へと問いかける。

彼は2つのシルエットのパラメータを拡大し彼女の見やすいように位置を変えた。

そのシルエットは片方は大刀と小刀の2本の刀のセットになっているもの、もう片方は幅の広いバスタードソードのような西洋剣であった。

それぞれには機体コードがありそれぞれ『O-001・YOZAKURA&RINGIKU』『O-002・TASHOGARE』となっていた。

夢結「・・・これって、」

彼女にはこの2つの名前に見覚えがあった。

それもそのはず、このコードの1つは今彼女が持っている二刀と同じ名前なのだから、

蓮夜「そう、これらは現象OriginシリーズをCHARMへと変換したものだよ。・・・コイツみたいだね。」

彼が右腕を横へと向けてかざすとそこには1つの武器が握られていた。

それは大小2種類の刃で構成された歪な十字架であった。

蓮夜「・・・『O—000・KYOKUYA』異能者用の特殊機能特化型CHARMであり一つ一つに異能が暴走した時の因果律干渉能力が内包された対概念兵装・・・そのプロトタイプだよ。」

夢結「・・・平気なの？」

蓮夜「原初シリーズは権能を失った因果律の塊に外部装置画備わっているだけだからね。暴走の可能性はないから安心して。」

夢結「・・・そう、」

蓮夜「・・・この2つには原初シリーズが内包されるからその因果律がCHARM全体の制御権を掌握・・・操作するから干渉も起きずに1つの兵装として制御することが出来るんだ。」

彼は拡大したものだウィンドを縮小すると再びデータに目を向ける。

蓮夜「干渉を緩和するためのクッションになるものがあればいいんだけど・・・それに適したものが無いんだよ。」

夢結「・・・それなら他のCHARMにも同じく・・・いいえダメね。そうしたら彼女達が使うことが出来ないわ。」

蓮夜「そうなんだよね。原初シリーズは適性が必要だし、そもそも異能者じゃないと情報量が多すぎて持つことも難しいからな。因果

律による干渉力を軽減すれ・・・ば、」

彼女の疑問に答えたいた彼が突然止まる。

まるで時が止まったかのように固まっている彼を見て彼女は心配になり彼の顔を覗き込む。

夢結「・・・蓮夜?どうしたの?」

蓮夜「・・・そうすると・・・だけど」

夢結「聞こえているのかしら?」

蓮夜「・・・これだ!」

夢結「!?!」

突如大声をあげながら立ち上がる彼に驚き彼女は飛び退く。

彼は彼女の方へと振り返ると近寄り、彼女を抱きしめた。

唐突に抱き締められた彼女は目を白黒させながら混乱する。

夢結「れ、蓮夜!?!本当にどうしたの?」

蓮夜「解決方法が分かったんだよ!君のおかげだ!」

夢結「そうなのね。よく分からないのだけど良かったわ。」

蓮夜「早速作業に取り掛からないと・・・いいや今日はやめようかな。」

夢結「どうして?あと少しなのでしよう?」

蓮夜「僕も身体を大事にしないとなくなって思っただね。・・・君も心配するし、僕だけのものじゃないから。」

夢結「ふふっ、そうね。なら休みましようか。」

2人は扉へと向かって歩き出した。

彼が扉のドアノブを掴んだその時、

《ピィィィィィ!》

突如部屋全体に警報音が鳴り響く。  
それを聞いた彼は端末を取り出すと画面へと目を向けた。  
そこに表示されていたのは、

蓮夜「百合ヶ丘周辺・・・いや、都市圏隣接部複数ネストの急速  
な活性化！」

新たな危機の始まりだった。

## ラストバレット第一章 ラストバレット1章①

??? 「やああああっ!!」

崩れた建築物や今にも倒れてしまいそうな傾いたビル群が立ち並び沿岸部、普段ならただ漣の音のみが聞こえるであろう生命を感じない静かであるはずのこの場所で2人のは少女が舞っていた。

彼女達の手には自身の身長程の武器があるが、彼女達は重量がありそうなそれらを持っているのにも関わらずまるで重さを感じないかのごとく舞い踊る。

??? 「梨璃、大丈夫?」

梨璃 「はあ・・・はあ・・・。はい、このくらい・・・何ともありません!」

梨璃と呼ばれた少女は息が荒いながらしつかりとした口調で返事を返した。

彼女へと声を掛けた少女・・・夢結は彼女の方を向くと険しい顔をした。

夢結 「そうは見えないわ。無理だと感じたらさがりなさい。」

夢結は彼女を気遣うような口調で呼び掛けるが、梨璃は首を横に振り前に出た。

梨璃 「いえ、一柳隊のみんなも戦っているんです。わたしだけ退くなんてできません!」

彼女は一瞬彼女へと視線を向けるがすぐに、強い意志を宿した目を前方へと向ける。

梨璃「それに、ここを突破されたら居住区域に被害がでます！だから、絶対に引くわけにはいきません！」

彼女の目前に触手状の何かが迫り来る。その触手は奇妙な生物から伸びておりその表皮が金属のような光沢をしておりますまるで生物を感じない造形をしていた。

それを自身の武器・・・CHARMで弾きながら後ろに下がり夢結の横へと戻る。

夢結「疲労したままでは守る者も守れないわ。私だけでもしばらくは抑えることも出来るわ。だから、貴方は少し休みなさい。」

梨璃「いえ、大丈夫です。これくらいでへこたれていたらお姉様に追いつけません・・・わたしはお姉様をみんなを守るリリイになりたいんですから！」

梨璃は真剣な眼差しを彼女へと向ける。

それを見た彼女は諦めたような顔をしながら大きなため息を吐いた。

夢結「梨璃・・・、わかったわ。貴方は一度決めたら話を聞かないものね・・・。それなら、必ず死守するわよ。」

梨璃「はい！」

その後も奇妙な生物・・・ヒュージとの戦闘を続けていた2人、周りには数え切れないほどのヒュージの残骸があるにもかかわらず前方には地面を埋め尽くすほどの大量のヒュージがおりその後ろには海から這い出てくるヒュージの姿が確認できた。

あれからも戦い続けた梨璃は肩で息をしておりCHARMを杖代わりにして立っていた。

梨璃「だけど、どうしてこんなにヒュージが…？由比ヶ丘のヒュージネストは破壊したはずなのに…。」

夢結「ヒュージネストは他にもあるから、あの程度で、ヒュージは居なくなったりはしないわ。」

夢結は当たりを見渡しながらつぶやく。

ヒュージの群れは視界ので抑えきれないほどに増加しておりなおその個体数を増やし続ける。

夢結「…とはいえ、確かに、この数は異常ね。正体不明のヒュージとの遭遇報告もあるようだし、現在避難区域付近の中で2番目に多い場所でこれなんて…1番の危険地域には彼が行ったから心配ないでしょうけど、一体何が…。」

梨璃「くっ！あぁー!!」

夢結「梨璃！」

疲労により集中力切れた梨璃へとヒュージが己の凶刃を振り下ろす。

ヒュージの攻撃に気づくのが遅れた彼女はどうか自身と凶刃の間にCHARMを滑り込ませたが彼女の軽い体は宙を舞い後方へと吹き飛ばされてしまった。

それに気づいた夢結は彼女を攻撃したヒュージへとCHARMを向け射撃、それにより風穴を開けたヒュージはその生命活動を停止した。

それを確認した彼女はすぐに梨璃へと駆け寄る。

彼女には目立った外傷もなく意識もしっかりとしていた夢結は安堵する。

梨璃「はあ・・・はあ・・・」

夢結「梨璃、やはりもう限界ね。この連戦だもの仕方ないわ。」

梨璃「大丈夫・・・です・・・」

梨璃は立ち上がろうとするが身体に力が入らないようにで立ち上がることが出来ないでいる。

梨璃の様子を見ながら彼女は現在の状況を確認する。

夢結（梨璃だけじゃない、正直、私も限界が近い・・・）

彼女は自身の身体にも疲労が溜まっていることを認識していた。

今はまだ問題ないがそれも長くは続かないだろう。

夢結（だけど、他の一柳隊のメンバーも別の地点で交戦中。他の百合ヶ丘のレギオンも同様。救援は望めない・・・）

彼女が思考していると物々しい音を立てながらヒュージの群れが2人へと迫ってくる。

夢結「くっ・・・。次から次へと・・・」

ヒュージの群れを確認した夢結はCHARMを地面に突き立て両腕の力を抜く。

彼女の両腕は力なく揺れておりその手はシルクでできた袖の中まですで隠せる程の丈の白い手袋が嵌められていた。

夢結「梨璃、私の後ろにさがりなさい！」

梨璃を庇うように彼女の前に立ちヒュージを睨みつける。

夢結（使うしかないわね。）



夢結の手袋が淡く光出し手の甲から袖の中へと光が伸びる。

夢結「貴方のことは、私が護るから。」

夢結の両手に力がこもり掌の中が歪み出した。

その歪みが掌から漏れそうになった時、

梨璃「さがりません！わたしだつて、お姉様をまもりたいんです！」

夢結「貴方つて子は……。」

彼女が振り向くと梨璃が立ち上がっていた。手足は力が入らず震えており、CHARMで身体を支えることでどうにか立ち上がることに成功した彼女の瞳に宿る意識は全く衰えて居らず真剣な眼差しで彼女を見つめていた。

それを見た夢結は再び溜め息を吐きながら微笑む。

彼女達にヒュージが飛び掛ろうとしたその時、

〈ズドンッ！、ズドンッ！〉

梨璃「え!？」

夢結「これは……CHARMによる射撃!?どこから!？」

ヒュージを狙い撃つように銃弾が放たれる。

夢結が銃弾の放たれた先を確認しようとしたその時、

???・??? 「はあああ!!」

人影が2人の前へと躍り出てその手に持つCHARMでヒュージを切り裂いた。

梨璃「あなた方は!？」

「詳しい話はあと!今はー」

「はい、一緒に、ヒュージを殲滅しましょう!」

銀髪の少女と黒髪の少女は2人に近づくとお互いのCHARMをヒュージへと構えながら。

夢結「梨璃、あと一息、行ける?」

梨璃「もちろんです、お姉様!」

夢結は梨璃へと声を掛けると同時に地面に突き立てたCHARMを引き抜き構える。

梨璃も彼女に続くようにCHARMを構えると元気よく返事をする。

夢結「それじゃ、行くわよ!」

4人は己のCHARMを手にヒュージへと駆け出した。

彼女達の戦闘していた場所から少し離れた地点そこには多くの丘が並ぶように存在していた。

「……」

その丘の上に人影が1つ存在しそれはまるでリラックスしているかのように自然体で立っている。

危険地帯であるはずのこの場所で、その人影の手には何も握られておらず自殺行為にも等しい光景を作り出していた。

そんな人影に向かってヒュージがものすごい速さで迫る。

ヒュージは己の凶刃を人影へと向けて薙ぎ払うように振るうがその凶刃が人影に触れる寸前で人影は消えてしまった。

ヒュージは突然消えた獲物を探して周りを見渡すがその姿は確認できず丘から降りようとした次の瞬間、突如ヒュージはその動きを止めて崩れるように倒れる。

倒れたヒュージの上には右腕をヒュージの背面へと突き立てる人影の姿がありその手を抜くと青い液体がヒュージから溢れ出した。

ヒュージへと突き刺した右腕には黒い手甲が嵌められておりそれとは細部の違う手甲が左手にも嵌められている。

左手は人影の頭上に掲げられておりその手は軽く握るような形になっていた。

人影が左手を自身の正面へと持つてくると丘の下に在る数体ヒュージが空中へと浮かび上がりまるでなにかに締め付けられているかのごとくその体を丸める。

そして人影が左手を握り締めたその時、空中に浮いていたヒュージが無数の刃物に切られたかのようにバラバラに切断されてしまった。

それを確認した人影は先程倒したヒュージに腰掛けて当たりを確認する。

そこには丘のように高く積み上げられたヒュージの残骸が無数に存在しておりこの場所での戦闘の規模が伺えた。

蓮夜「……これで終わりかな？」

そう呟いた人影・・・蓮夜は辺りにヒュージがないことを確認すると大きく息を吐いた。

蓮夜「そこに在るのはわかつてる。・・・早く出てきたらどうだ？」

彼はとある方向へと視線を向けた。

視線の先には木々の生い茂る森が存在しそこは戦闘のあとがあるこちらとは真逆で穏やかな雰囲気を出している。

そんな景色の中、彼が睨んでいる先で何かが動く。

蓮夜「なんでこんな場所にいるんだ？・・・茜、音羽。」

彼の言葉と同時に2人のは少女が木々の後ろから姿を表した。

## ラスバレー1章②

梨璃「はあ・・・、はあ・・・。」

目の前にいたヒュージにトドメを指すと梨璃は荒い呼吸をしながらCHARMを下ろした。

疲労が限界を迎えたのか両手を膝に当ててどうにか立っている彼女へと夢結が近づく。

夢結「どうやら、今ので最後みたいね。」

夢結が辺りを見渡すとそこにはヒュージの残骸のみが映し出されており活動している個体は見つからない。

梨璃「・・・まだです。まだ、他のみんなが戦っています。そつちを助けに行かないと・・・。」

梨璃は膝に置いた手を上げ歩こうとするが足が震え崩れ落ちそうになる。

それでも進もうとする彼女を夢結は静止し、

夢結「先ほど、他の地点でも戦闘が終了したと連絡があったわ。」

自身の端末を確認する夢結が彼女へと自身の端末を見せるとそこには作戦完了の文字が浮かび上がっていた。

それを見た梨璃は安堵したのか大きく息を吐く。

???「よくおふたりであの数のヒュージを・・・流石です。ヒュージの数が一、二を争うほど多かった地点がここだったんです。・・・ですが、このこと同じ規模の地点を一人で防衛している人が居たはずですが・・・その方は大丈夫でしょうか。」

2人のはそばに黒髪の少女が近づいてくる。

彼女は2人のことを賞賛すると、この地点と同規模を1人で相手している蓮夜のことを心配していた。

夢結「それは問題ないわ。彼は私より強いから…先程連絡もあつたわ。あちらは一足先にヒュージの殲滅を終わらせているわよ。」

???「そうですか…それは良かったです。私のレギオンからも援軍として1人その地点に向かったのですが…間に合ったみたいですね。」

梨璃「それじゃ…みんな、無事なんですね…?」

???「ええ、安心してください。」

梨璃の言葉に銀髪の少女が近寄り答える。

その言葉に安心したのか彼女の表情は穏やかなものとなった。

梨璃「そっか…よかった…た…。」

???「ー!?!」

夢結「梨璃! 梨璃!!」

梨璃は3人に笑顔を向けると糸が切れた人形のようにその場に崩れ落ちた。

突然倒れた彼女に驚いた3人は彼女へと近寄る。

彼女を確認すると呼吸は安定しており疲労困憊によるものだと推測できた。

夢結「良かった…ただの疲労のようね。」

???「そうですか…無事で何よりです。」

???「頑張っていたものね…仕方ないわ。」

夢結は梨璃をおぶると2人へと向き直り、

夢結「改めて、救援感謝します。」

「いいえ、私たちは当たり前のことをしたままでです。」

「そうよ、困っている時はお互い様。そう畏まらないでください。」

夢結「・・・それでもです。」

「あはは、とにかく1度帰りましょう。彼女を安静にさせないと行けませんし。」

「そうですね。それでは行きましょう。」

銀髪の少女は夢結のおぶっている梨璃を見る。そこには幸せそうな表情で眠っている彼女がおりそれを見た3人は表情を緩めた。

3人は再度ヒュージがいなかったかを確認すると、この場所を後にした。

梨璃「・・・。」

夢結「もういいの?」

とある一室そこに置いてあるソファに梨璃は腰掛けていた。

そこへ夢結が現れた彼女へと声をかける。

彼女に気づいた梨璃は夢結の方を向く、

梨璃「はい、疲労によるものだと思います。ご心配おかけしてすみません。」

夢結「そう、無事でよかったですわ。」

彼女の状態を聞いた夢結は安心したのようで大きく息を吐いた。そんな夢結を見ていた梨璃は突如顔を下へ向ける。

梨璃「・・・わたし、一柳隊のリーダーなのに、かつこ悪いところ

見せちゃいましたね。」

彼女は自分1人だけ倒れてしまったことを気にしているようでの表情も暗い。

梨璃「お姉様にも言われていたのに、結局無茶して、倒れて……。」

夢結「梨璃……。こっちにいらつしやい。」

そんな彼女を見た夢結は梨璃へ自身の元へと来るように促した。

梨璃は首を傾げながら彼女への近寄ると、夢結は梨璃の頬へとそつと自身の手を添えた。

夢結「私の前では、どんなにかつこ悪くても、いくら弱音を吐いても構わないわ。」

夢結は彼女へと優しい口調で囁く。

夢結「貴方の全てを私は受け入れる。貴方は一柳隊のリーダーであると同時に、私の大切な『シルト』なのだから。」

梨璃「お姉様……。」

夢結「だけどー」

夢結の言葉が止まる。

梨璃は彼女が何を言おうとしているのかと首を傾げる。

夢結は1度呼吸を整えると再び口を開いた。

夢結「お願いだから、私の傍から居なくならないでね。もう、大切な人を失うことも傷つけることもしたくないの。」

不安そうな表情をする夢結を見て梨璃は真剣な眼差しを彼女へと向けた。



梨璃「わたしは、居なくなったりしません! ずっと、お姉様のそばにいます!」

強い意志の籠った口調で梨璃はそう宣言した。

決して夢結を悲しませないと、

梨璃「お姉様の笑顔は、わたしが必ず護ります!」

夢結「ふふっ、それなら、貴方の笑顔は私が護るわ。」

梨璃「えへへ。」

それを聞いた夢結は微笑みながら梨璃へと宣言した。

それを聞いた梨璃は嬉しそうな表情をすると、すぐに凛々しい表情になり、

梨璃「お姉様、わたしもつと強くなります! どんなヒュージにも負けないくらい強く!」

夢結「ええ、でも、強くなるのは貴方1人じゃないわよ。私も、一柳隊のみんなも一緒にー」

???「そして、リリイ同士の結束も。ですね。」

梨璃・夢結「ー!?!」

2人しか居ないはずの部屋に誰かの声が響く。

それを聞いた2人は驚きながら声の方を向く、

そこには先程共闘をした2人のは少女の姿があった。

夢結「あ、貴方達、どうして!?!」

???「一応、ノックはしたんだけど。なんだかとても入り込める空気ではなかったの・・・。」

夢結の間に銀髪の少女が困ったような表情をしながら答えた。

??? 「これが『シユツツエンゲルの契り』なんですね。素晴らしいです！」

??? 「紅巴ちゃんが見たら悶絶するところだわ。」

梨璃 「あ、あの・・・、おふたりは、どうして？それにリリイ同士の結束って？」

銀髪の少女に続いて黒髪の少女が目を輝かせながら興奮した声を出すと苦笑しながら銀髪少女は何かを呟いた。

そんな2人に突然のことに困惑した梨璃が質問する。

??? 「あ、そうでした！では改めてー」

彼女の間に2人は姿勢をただす。

??? 「エレンスゲ女学園高等学校、1年、相澤 一葉。レギオンは、『ヘルヴォル』。」

??? 「神庭女子藝術高等学校、2年、今 叶星。レギオンは、『グラン・エプレ』。」

銀髪の少女・・・叶星と黒髪の少女・・・一葉は自己紹介をするが梨璃はなぜ別のガーデンのリリイが百合ヶ丘にいるのかがわからず首を傾げる。

一葉 「百合ヶ丘の一柳隊を含むこの3校、3レギオンは、ヒュージに対抗するため、協力し合うことが決まったんです！」

叶星 「学校の垣根を超えたりリリイ同士の結束強化。私達も一緒に強くなるわ。」

梨璃 「みんなで、一緒に・・・。」

夢結 「そう、リリイは、決して百合ヶ丘だけではないわ。この結束は、私達にとって大きな力となんでしょう。」

夢結は3人を見渡すと1度呼吸を整える。

夢結「さあ、私達の戦いを始めましょう。」

梨璃「はい！お姉様！」

夢結の言葉に梨璃は真剣な表情で返事をした。

4人はお互いの親睦を深めるためにお茶会を始めた。

梨璃「そういえば……。」

夢結「梨璃？どうしたの？」

梨璃「みんなや叶星様、一葉さんのレギオンの人たちもどこにいますのしょうか？」

一葉「私と1人を除いたレギオンメンバーはエレンスゲに帰っています。……エレンスゲと百合ヶ丘は中があまりよくありませんから、」

叶星「私のレギオンのみんなも1人を除いて神庭女子に帰ったわ。みんな疲れていたからね。」

夢結「一柳隊の皆は今メデイカルチェック中よ。かなり長時間の戦闘をしていたから疲労も溜まっていたでしょうし今日は辞めて起きましよう。」

梨璃「そうなんですか、残念です。」

梨璃は残念そうな顔をするがすぐに顔をあげた。

梨璃「そうだ！叶星様も一葉さんもレギオンの人が1人居るって言うてましたよね？その人達は？」

叶星「……ああ、彼女はね、今隣の部屋にいるわ。」

一葉「私のところもです。……ただ、」

梨璃「……ただ？」

2人は何か考えるような表情をしながら梨璃の間に答える。  
梨璃はどうして2人はそのような表情をしているのかとわからず  
再び首を傾げてしまった。

叶星「・・・隣の部屋へ行ってみるかしら？」

一葉「そうですね・・・それが1番の説明しやすいと思います。」

梨璃「・・・？よく分かりませんが行きましよう！」

夢結（そういえば、蓮夜は何処にいるのかしら？メデイカルチエツ  
クは終了しているみたいだけど自室かしら・・・？）

梨璃は2人の提案に乗り部屋を出ようとする。

それを見た夢結も3人を追いかけて部屋から出て行った。

4人は隣の部屋の扉に着くと中から声が聞こえる。

しかし、その声低くは女性のような高いものではなかった。

叶星「それじゃ、開けるわよ。」

叶星はドアノブを捻り扉を開ける。

その部屋には、

蓮夜「どうしてお前らは、この1年間なんの連絡もよこさなかったんだ？」

そこには一柳隊のメンバーである黒鉄 蓮夜が仁王立ちをしており、その視線の先には正座をする2人のは少女の姿があった。

## ラスバレー1章③

蓮夜の表情は険しいものとなっており少女達の顔は青い。

蓮夜「・・・2人とも無茶したり何かやらかす事が多いから心配してたんだぞ？連絡しても返信なかったからな・・・。」

???「・・・。」

蓮夜「それに院長さんに連絡とつても、悠月荘に住んでないって言うし・・・学校の寮に入ったって聞いたから学校で急ぎいのかと思つたらガーデンに入学してたからな。音羽も茜もリイにはならないつて言つてなかったけ・・・特に茜、」

音羽・茜「・・・。」

音羽と呼ばれた青髪の少女と茜と呼ばれた赤髪の少女は顔を下へと向けたまま彼の言葉に何も口出さず聞き続ける。

蓮夜「一応俺は2人のは保護責任者なんだからそういう連絡くらいはしてくれよな。・・・と、みんなも来たみたいだしこの話も終わるか、」

そういうと彼はこちらを向く。

彼の視線がないことに気づいた2人のは立ち上がりそれぞれのレギオンの隊長の元へと駆け寄った。

夢結「なんで貴方は彼女達に説教をしていたのかしら?・・・それに保護責任者って、」

蓮夜「それは後でいいだろう?今は自己紹介の方が先決じゃないか?」

夢結「・・・後でしつかりと説明して貰うわよ。」

蓮夜「了解、・・・おつと話がズレるところだった。今 叶星さんと相澤 一葉さんだったかな?俺は黒鉄 蓮夜、所属レギオンは『一柳

隊』だ。まあ、男だとか色々あると思うところはあろうけど気にしないでくれると助かる。」

叶星「黒鉄君ね。私は今 叶星、よろしくね。それと私のことは叶星でいいわよ。」

一葉「はい、よろしくお願いします。改めまして私の名前は相澤一葉、レギオンは『ヘルヴォル』です。それと私のことは一葉で結構です黒鉄様。」

蓮夜「わかった。叶星さん、一葉さん、俺のことは好きに読んでくれて大丈夫だから・・・出来れば様付けはやめて欲しいかな？」

一葉「それでは、黒鉄さんと呼ばせていただきます。」

蓮夜「ああ、改めてよろしく。」

彼は2人に軽い挨拶を済ませると梨璃と夢結の前に音羽と茜がやってくる。

音羽「初めまして・・・私は波風 音羽・・・です。『グラン・エプレ』に所属しています。」

茜「初めまして夢結様、梨璃さん、アタシは竜胆 茜！よろしくお願いします！」

大人しそうな音羽と活発そうな茜、

青髪と赤髪という対極の印象を受ける2人はそれぞれ夢結達に挨拶をする。

梨璃「初めまして、私は一柳 梨璃です。よろしくお願いします。音羽さん、茜さん！」

夢結「音羽さん、茜さん初めまして、私は白井 夢結よ。よろしくね。」

茜「はい！よろしくお願いしますー！」

音羽「よろしく、お願いします。」

それぞれの挨拶が終わると彼はポケットから着信音が鳴る。彼は端末を取り出すと中を確認する。彼は端末に目を通すと端末をポケットへと戻し溜息を吐く。

蓮夜「あいつ・・・またか、」

夢結「どうしたの？」

蓮夜「百由からの呼び出しだよ。・・・よく分からないけど・・・天葉のCHARMが爆散したらしい。」

梨璃「爆散!!」

夢結「何が起こったのよ・・・。」

蓮夜「：：なんでも百由がバレットギアを参考にした特殊弾を作ったらしくそれを使った天葉が爆散したらしい。」

彼の説明を聞いた夢結は深く溜息を吐いた。

蓮夜「・・・これで何回目だよ。・・・すみませんがここで失礼します。」

一葉「い、いえ・・・お気になさらずに、」

彼は遠い目をしながら部屋を出ていく。

彼が部屋を出ると彼女達は再び会話に花を咲かせていた。

夢結「茜さん、音羽さん、少しよろしいかしら？」

茜「なんですか？」

夢結「先程蓮夜が貴方達の保護責任者と口にしていただけれど・・・彼とはどのような関係なの？」

叶星「それは私も気になるわ。」

一葉「そうですね・・・茜、もしかして前に言っていた先輩って彼のことなのでしょうか？」

夢結は先程から疑問に思っていたことを2人に質問する。

それ内容に興味があるのか叶星と一葉もその話題に入ってきた。

茜「ああ、それはですね……。」

音羽「……蓮夜さんが私達を拾ったから、」

茜、音羽以外『えっ!?!』

茜「音羽、言い方!」

茜が悩んだような表情をしていると音羽が口を挟んだ。

その内容に驚愕した夢結達は口が塞がらなくなってしまう、それを見た茜が音羽の頭を叩いた。

音羽「痛い……。」

茜「音羽が変な言い方したからでしょうが!」

音羽「わかりやすく、簡単に言っただけ、」

茜「その言い方が行けないんだよ!」

音羽はなんで怒られているか分からないのか首を傾げ、それを見た茜は頭を抱えた。

夢結「ひ、拾ったって……。」

茜「違います!違います!皆さんが考えているようなことじゃないんですよ!」

叶星「どういうことかしら?」

茜「アタシ達は蓮夜先輩に学院に入るまでいた孤児院を紹介してもらったんです。」

梨璃「孤児院……ですか?」

茜「はい、アタシ達……親が居ないんです。」

夢結「そう、なのね。」

音羽「私は通り魔に……。」

茜「アタシは親が帰って来なくて、」



2人の表情が暗くなる。

それを見た彼女達は話を変えようとするが口に出せず黙ってしまった。

音羽「それで私は誘拐されて、そこから逃げ出せたけど知らない街で、彷徨っていた時に蓮夜さんに出会ったんです。」

茜「アタシも似た感じで家で待っていても親が何日も帰って来なくて、怪しい人達がいきなり家に入ってきたから逃げて・・・その時に先輩に出会ったんです。」

夢結「そうなのね。ごめんなさい、辛かったでしょう。」

2人が彼と出会った理由が想定していたものよりも壮絶であり夢結は彼のことを思い出したのか悲しそうな表情で彼女達へと謝った。

茜「大丈夫ですよ。アタシも最初は参ってましたけど今は院長先生に悠月荘のみんな、先輩、レギオンのみんながいますから、」

音羽「私も・・・グラン・エプレのみんながいるから大丈夫、」

一葉「・・・茜、」

叶星「・・・音羽ちゃん、」

2人の言葉に瞳に涙を貯める2人は2人に抱きついた。その光景を見ていた梨璃はふと顔を上げる。

梨璃「そ、そうだ皆さん！」

叶星「えっ？梨璃さん？」

梨璃「今度叶星様や一葉のレギオンメンバーと私達のレギオンメンバーで交流会のようなものしませんか？」

一葉「交流会、ですか？」

梨璃「はい！みんなで集まってお話したりお菓子を食べたりするんです！お話は大勢の方が楽しいですから！」

叶星「梨璃さん、ええ、そうね。今度集まってお茶会でもしましよ

う。」

一葉「ええ、そうですね。」

梨璃の一言により空気が変わりこの後は、いつお茶会をするかなどのたわいの無い会話が続いた。

## ラスバレー1章④

雨の降る森の中、一つの影が駆け抜ける。

二水「こちら一柳隊所属、二川 二水です。ただいま現場に到着しました。」

彼女は雨の音だけが響く森の開けた場所まで走ると足を止め周囲を確認する。

二水「これより、要請のあったエレンスゲ女学院に所属するリリイの救助捜索活動を開始します。」

彼女はインカムを通じて連絡を取ると自身のレアスキル『鷹の目』を発動される。

二水「作戦地域は雨でよく見えない・・・じゃなくて雨天により視界不良。ケイブ反応もあり、一刻も早い救助が必要だと思えますっ。」

辺りの状況を方向していると遠くから大きな音が鳴り響いた。

二水「っ!?!戦闘音あり!あちらは・・・梨璃さんも夢結様の索敵範囲です!」

自身の記憶上にある地図と現在地を照らし合わせて音の発生源を探る。

するとそこは梨璃と夢結の索敵範囲であることがわかった。

二水「二川 二水、これより戦闘地点に向かいます!以上、通信終わりっ!」

彼女は手早く報告を終えると足早に音の地点へと向かった。

??? 「やああああー!!」

雨により視界の霞む森の中、金属特有の甲高い音が鳴り響く。

??? 「こちらのヒュージは倒しました!お姉様の方はー」

そこにはCHARMを持った少女の姿があり、目の前には活動を停止したヒュージが倒れている。

彼女はヒュージの活動停止を確認すると後ろを向いた。そこには黒髪の少女がおり彼女の方を見ている。

??? 「私は大丈夫よ。」

黒髪の少女の後ろにもヒュージの死骸が何体も倒れていた。

??? 「それより、梨璃、焦りは禁物よ。今も、かなり無理しているように見えたわ。」

梨璃 「ごめんなさいお姉様。」

梨璃は自身のシュツツエンゲルである夢結に注意されると少し顔を伏せる。

梨璃 「エレンスゲ女学院のリリイがこの森で今も救助を待っていると思うと、いてもたってもいられなくて!」

夢結 「そうね・・・でも、貴方が怪我をしては元も子もないわ。この隊のリーダーは梨璃なのだから。」

梨璃 「はい・・・!ありがとうございます、お姉様!」

??? 「そうだぞ!」

梨璃・夢結「!?!」

2人は突如聞こえた声に驚きながら声の方向を確認する。そこには2人よりも少し幼げな少女がおり自身のCHARMを地面に突き立てながら胸を張っていた。

梨璃「結梨ちゃん!」

夢結「結梨!?!...どうしてここに?楓さんは?」

???'「ちよおおつと、お待ちになつてー!」

結梨を確認した2人は彼女と共にいるはずの楓がないことに気づき辺りを見回した。すると、木々の隙間から人影が姿を表した。

梨璃「か、楓さん!」

楓「私に隠れて何をイチャイチャしてますの?いくら夢結様とて、抜け駆けは許しませんわよ!あと、結梨さんは早すぎます!」

結梨「...?」

彼女達が会話をしていると森の奥から二水が現れこちらへと向かってきた。

夢結「3人とも追いついたようね。」

楓「無視ですのっ!」

夢結にスルーされた楓が彼女に抗議していると二水が突如声を上げる。

二水「あつ、待ってください!梅様より通信です!」

梨璃「えっ、本当!」

二水からの連絡に梨璃はインカムで梅へと通信を入れた。

梨璃「もしもし、梅様ですかっ？そちらの様子はどうですかー？」  
梅「おう、梨璃か。うんうん、通信は良好だゾ。」

ミアム「エレンスゲ女学院のリリイはまだ見つかつたらんかの。」  
鶴紗「一応、争った形跡とヒュージの残骸は見つかった。近くに  
いると思う。」

インカムから3人の声が聞こえた。

梅「外征にきたエレンスゲのレギオンが消息を絶って5時間が経過。そろそろ救助してやらないと危ないな。」

ミアム「こう視界が悪くては搜索もままならん。手分けをして探したいところじゃが・・・。」

梅「これ以上、隊を分けるのは避けるべきだろう。」

ミアムは辺りを確認しているらしくその視界の悪さから搜索が困難であるにつぶやく。

搜索方法を悩んでいるとインカムから新たな声が聞こえた。

神琳「皆さん！雨嘉さんがヒュージを発見したようです！」

雨嘉「2時の方向、茂みの向こう。まだこちらには気づいてない・・・！」

声の主は神琳であり、彼女達は近くにヒュージがいること報告した。

梅「梨璃、いったん通信を切る！そっちは頼んだゾ、夢結つ。」

神琳「奇襲を仕掛けましょう。梅様、鶴紗さんお願い致します。」

梅「おう、任せておけ！」

鶴紗「速攻でいく。」

ミリアム『・・・ワシは？』

神琳『私と雨嘉さんで援護射撃を行います。射線には気をつけてください。』

雨嘉『うん、わかった。』

ミリアム『・・・おい。』

神琳『ヒュージの規模は不明です。要救助者もいることを念頭に、各員臨機応変に対応お願いします。』

神琳は梅達に手早く作戦を知らせると自身も準備に取り掛かる。そして全員が準備を整えるとヒュージへと向かって飛び出した。

神琳『戦闘開始です！』

ミリアム『ワシを無視するな！』

そんな中で1人の少女の声が森の中に悲しく響いた。

## ラスバレー1章⑤

一柳隊のメンバーが各々の行動に出ている時、

蓮夜「……。」

蓮夜は彼女達から離れた地点を駆けていた。

蓮夜（……あつちか、）

彼は彼女達のいる方を睨みながら舌打ちをした。

美鈴（……機嫌が悪いみたいだけど、何かあったのかい？）

蓮夜（いや、救助対象を見つけたんですけど、自分の索敵範囲から外れているんです。）

美鈴（ああ、見つけたのに行けないからか……。いつもなら、行っても大丈夫だけど、）

蓮夜（エレンスゲ……G・E・H・E・N・A・に關係ある場所の目がありますから、迂闊に動くとは面倒事になります。）

彼は木々の隙間から縫うように走り抜けると少し開けた広場に到着する。

蓮夜「こちら一柳隊所属、黒鉄 蓮夜。目標地点に到着しました。現在救助対象であるエレンスゲ女学院所属のリリイを発見できていません。これより、索敵を開始します。」

美鈴（どうしようか、わかっているても行けないとなるともどかしいね。）

蓮夜（今は1箇所留まって居るみたいなので、夢結に連絡を入れて向かって貰います。）



彼は周囲を見渡す振りをしながら精神を集中させる。  
すると彼の中に何かが灯る。

蓮夜（夢結、聞こえる？）

夢結（ええ、聞こえるわ。どうしたの？）

蓮夜（夢結達のいる地点から北東に進んだ場所に救助者を見つけた。僕の索敵範囲外だから先に行ってくれないかな？）

夢結（大丈夫よ。そうなると貴方は？）

蓮夜（僕は範囲内のヒュージを掃討してから向かうよ。こっちは結構な数いるから減らしておかないと後々大変なことになりそうだし、）

夢結（わかったわ。これから私達は救助者の方へ向かうわ。．．．そちらはお願いするわね。）

蓮夜（わかった。それじゃ後で、）

夢結（ええ、）

蓮夜「．．．さてと、」

彼は彼女との連絡を切ると、己のCHARMを構えた。

蓮夜「前方にヒュージを発見、戦闘を開始します。」

彼の目の前で刃を向ける複数のヒュージへと弾丸を打ち込んだ。

同時刻岩の影に2人の少女が身を寄せあっていた。

??? 「はあ、はあ、はあ．．．急いで！ヒュージがすぐそこまで来て  
る．．．！」

??? 「っ、ダメ．．．さっきの戦闘で足がー」

1人の少女がもう1人に状況を確認するが彼女の足首は酷く腫れておりそこから血が滲み出ていた。

??? 「っ・・・!?」

怪我した少女「あ・・・ああ・・・っ！ヒュージが、あ、あんなに沢山・・・っ。」

怪我の手当をしようとしたその時、森の奥からヒュージの大群が現れた。

??? 「っ、私たちはエレンスゲのリリイよ。このままでは終わらせない・・・！」

怪我した少女「いやああああ・・・っ!!」

ヒュージの大群を目の当たりにして1人が絶叫しその少女を庇うようにもう1人が前に立つ。

ヒュージは彼女達を発見し己の触腕に付いた刃を振り上げ少女達へと飛びかかった。

ヒュージが少女達の目と鼻の距離まで近づいたその時、飛来した弾丸がヒュージを襲った。

夢結「梨璃、結梨、ヒュージの足は止めたわ！今よ！」

梨璃「はい、お姉様っ！」

結梨「わかった！」

弾丸の飛来した場所を向くとそこにはCHARMを射撃形態にして射撃をする少女とCHARMを構えこちらに駆け出す2人の少女の姿があった。

梨璃「やああああ！」

結梨「はああああ！」

梨璃と結梨は少女達に迫るヒュージを切り伏せ前に出ると迫り来るヒュージを迎え撃つ。

梨璃は迫るヒュージを弾き飛ばすことでヒュージ達の歩みを止めさせると前方を注意しつつ少女達の方を向いた。

梨璃「大丈夫ですかっ？ エレンスゲの方ですよね？」

???「ありがとうございます。助かりました。その制服・・・あなた方はもしかしてー」

怪我した少女「百合ヶ丘の・・・！」

梨璃「はい、一柳隊です！」

夢結「挨拶は後よ。今は一刻も早く、ここから離れましょう。」

梨璃「はい、お姉様。」

梨璃が少女達と話していると夢結が射撃で牽制しつつこちらへと向かってきた。

梨璃「おふたりとも、走れますか？ 怪我をしているようでしたら、わたしに掴まって！」

???「大丈夫です。さあ、あなたも行きましょう。」

少女が怪我をしたもう一人の手を引き歩こうとすると、怪我をした少女が蹲り足を抑えた。

怪我した少女「うつ、く・・・ごめんなさい・・・足が・・・折れて、いるみたいです。」

???「そんな!？」

怪我をした少女の足首を確認すると青黒く腫れておりとても歩ける状況ではないことがわかった。

結梨「大丈夫？」

怪我した少女「大丈夫、っ！」

結梨が心配そうに話しかけると彼女は安心させるために立ち上がろうとするが足に力が入らずその場に崩れ落ちる。

楓「10時の方向からさらにヒュージが！気を付けてくださいまし！」

倒れそうになった彼女を支えると遅れてやって来た楓達が合流し新たな敵影の存在を知らせた。

楓が見ている場所を確認するとそこには新たなヒュージがおりこちらへと向かってきた。

二水「ま、待ってください！あのヒュージ、体中に真新しい傷が……！」

鶴紗「手負い……あれはCHARMによる刀傷。どこかでリリースと交戦した……？」

梨璃「ええっ、逃げ出した……っ！」

ヒュージにはココ最近付けられたであろう傷が無数に付けられておりその表皮はボロボロになっていた。

こちらに向かってきていたヒュージだがこちらに気づくとヒュージは進行方向を変え彼女達から逃げるように飛んでいく。

神琳「逃がしません！雨嘉さん、十字砲火を仕掛けましょう！」

雨嘉「っ、駄目……遮蔽物が多い。それに動きが速い……！」

神琳は逃げるヒュージに追撃を仕掛けようとするが遮蔽物が多く動きが速いため雨嘉の狙撃が機能せず攻めあぐねる。

梅「速さ比べなら私の出番だな！」

夢結「いえ、下がって・・・梅。もう掴まっているわ。」

梅「どうということだ？」

梅がヒュージを追おうとすると夢結が止めに入る。

夢結の発言に疑問を持ちながら梅はヒュージを追うのをやめると、突如上から銃弾の雨が降り注いだ。

ヒュージはそれに気づかず不意打ちをくらい地面へと落ちる。

その落ちたヒュージへと向かって黒い何かが落ちてくるとヒュージにぶつかる。

それにより何が深々と突き刺さったヒュージはどうか浮かび上がり再び彼女達から逃げようとするが、ヒュージの背部から轟音が鳴り響き再び地面へと縫い付けられた。

それにより影はヒュージが離れこちらへと飛んでくる。

影が一回転すると勢いが落ち、音もなく彼女達の前に着地した。

梨璃「黒鉄さん!？」

ミアム「索敵範囲はかなり遠いはずじゃぞ!？」

夢結「・・・遅いわよ。」

蓮夜「ごめん、遅くなった。・・・怪我してるみたいだな。」

彼はこちらに振り向くとすぐさま救助者を確認する。

すると懐から金属板を取り出すとそれを二水へと投げ渡した。

蓮夜「二水さん、これで応急処置を頼む。」

二水「はい、わかりました！」

二水はそれを受け取ると怪我をした少女へと近寄り自身の持つ救急キットを取り出し応急処置を開始した。

蓮夜「不審な動きをしているヒュージがいたから攻撃を試みたん

だが、どうしたんだ？攻撃する前から傷だらけだったが、

夢結「私達が発見した時からそうなのよ。それに私達を見た途端に逃げようとしたして、」

蓮夜「逃げる？・・・何かに追われ、」

彼が夢結から状況を聞いていると、突如彼の声が止まる。

彼女達はそれを不思議そうに見ていると、鶴紗も何かに反応し森の奥へと目を向けた。

鶴紗「・・・ん？この気配、なんだ・・・？」

彼女が森の奥を中止していると、

??? 「ええええええええいつ！」

森の奥から巨大な物体が飛んでくる。

二水「な、なにあれ・・・っ!? 巨大なCHARM・・・？」

ミリアム「あんなCHARM、わしでも見たことがないぞっ！」

飛んできた物体はCHARMでありそれは進行方向の木々をなぎ倒しながらヒュージへと迫る。

??? 「ヒュージ、見つけたあああっ！」

雨嘉「えっ、子供・・・？」

CHARMの飛んできた方向、

そこには幼さを残した小さな少女が立っていた。

## ラスバレー1章⑥

CHARMを飛んできた方向から声が聞こえそちらをむくと、小さな少女がこちらへと走ってきておりヒュージへと一直線に近づいていく。

神琳「いえ、リリイです！きっきのCHARMを投擲してきたようです。」

楓「なんて無茶な戦い方・・・。」

??? 「藍、待ちなさい!!」

少女が駆け出してきた奥から数人の人影が飛び出してきた。

その人影達は雨によりよく見えず誰か分からないがヒュージの方へと接近する。

ヒュージに近づくにつれ霞んでいた姿がわかるようになりその人影の中にヘルヴォルのリーダーである一葉がいることがわかった。

??? 「うわー、遮蔽物なんて関係ないね。藍ってば、相変わらずワイルドな戦い方するねー。」

??? 「今はとにかく藍ちゃんを追いましょう。敵の規模はまだ分からないんだし、孤立させるのは危険よ。」

??? 「そうだね・・・一葉。」

一葉「はい！恋花様と瑤様は前衛を頼みます。」

恋花「お任せー！」

瑤「うん、わかった。」

恋花と瑤と呼ばれた2人は一葉の言葉を聞いて藍を足を早めヒュージへと急接近する。

一葉「千香瑠様は死角からの奇襲に備えてください。特に藍は防御

が手薄なので巻き込まれない程度にアシストを。」

千香瑠と呼ばれた少女は自身のCHARMを射撃形態へと変形させて周囲を警戒し始める。

一葉「私はヒュージを牽制しつつ誘導します。各員、CHARM構えー」

一葉も己のCHARMを構え直し重心を前に傾けると、

一葉「ヘルヴォル、状況開始！」

その言葉と共に先にヒュージへと向かった3人を追いかけて走り出した。

藍は小柄な身体をヒュージの体の中に滑り込ませるように接近するとCHARMを振り上げる。

藍「やあああああつ！」

藍のCHARMはヒュージへと吸い込まれるように叩き込まれヒュージの巨体を宙へと浮かせる。

足場を失い姿勢を崩したヒュージは自身の触腕を最大限動かし体制を整えようとするが、その隙を狙うかのように恋花と瑠が空中へと飛び出しヒュージを撃ち落とした。

恋花「自分ばかり目立つてずるいんだー。あたしたちの分まで残しておいてよ……ねっ！」

藍「っ……！」

瑠「わたしは別に目立ちたくない……。」



恋花が気の抜けるような言葉を言いながら藍の横に降りると、3人は地面に叩きつけられたヒュージが硬直している隙を狙い打ちをかけた。

3人の猛攻により動けないでいるヒュージだが、その触腕がかすかに揺れる。

一葉「3人とも気をつけて！そのヒュージ、まだ力を残しています。」

一葉なヒュージの様子にいち早く気づき3人に警告を出すと、その瞬間ヒュージがいきなり動き出し瑤へと向かって突進をする。

瑤「く・・・っ！」

恋花「獣と一緒にだね。手負いの方が厄介なんだから、まじで。」

瑤はCHARMを盾にしてどうにか防ぐことに成功するが強い衝撃に体制を崩す。

ヒュージはその隙を狙い再度瑤へと攻撃を仕掛けるがそれは恋花が間に入ることので防ぎヒュージを押し返すと、瑤を庇うように前に立ちヒュージを牽制した。

藍「たおす・・・らんが、ヒュージ・・・やっつける！」

2人に意識を向けているヒュージに藍が急接近した。

集中しすぎたことで藍に気づくのが遅れたヒュージは彼女の攻撃をまともに受け大きく吹き飛ばされる。

藍「っ！」

藍は攻撃の勢いをそのままにヒュージへと接近するが、ヒュージが触腕を伸ばして彼女の進行ルートに乗せる形で置くと彼女は止まることができず刃へと吸い込まれて行った。

彼女に刃が触れる寸前、触腕へと数発の銃弾が打ち込まれる。

千香瑠「藍ちゃんに・・・私の仲間たちに手出しするのは許しませんよ？」

藍「・・・千香瑠。」

射撃音の方向には、CHARMをこちら側へと向ける千香瑠がおり、その表情は静かではあるが確かに強い意志を感じた。

一葉「いい感じですよ、千香瑠様！そのままプレッシャーをかけて押しつぶしましょう。」

ヒュージが再び態勢を崩していると一葉が3人に追いつき、そこからは4人で圧をかけるように怒涛の連撃を繰り出し始めた。

二水「すごい・・・すごいです！あんな高度なハイプレス戦術、久々に見ました！」

楓「そうですね・・・あのちびっこの無秩序な動き。それすらも計算に入れて連携を撮っているように見受けられますわ。」

梨璃「あれは・・・あのリリイはー」

夢結「エレンスゲのトップレギオン、ヘルヴォルのリーダー・・・」

相澤、一葉ー」

蓮夜「・・・。」

梨璃達が各々で驚愕していると、一葉達が一気に畳み掛ける。

激しい猛攻に防御の暇すら与えられないヒュージはその身を丸めることでどうにか身を守ること成功していたが、さらに勢いをまじった攻撃の嵐に、ヒュージは触腕を弾かれ好きだらけの胴体をさらけ出してしまふ。

その隙を狙って一葉達は全面に残っている触腕を弾き飛ばすながら後退、

それとすれ違おうように藍がCHARMを大きく振りかぶりながらヒューズへと飛びかかり、そのまま渾身の一撃を頭部へと打ち下ろした。

そのとてつもない衝撃にヒューズは頭部を陥没かせながら地面に叩きつけられるとヒューズを中心にヒビが地面に広がる。

藍がCHARMを持ち上げると、

そこには、物言わぬ塊となりその生命活動を停止させた。

## ラスバレー1章⑦

ヘルヴォルがヒュージを倒すと同時に勢い良く降り続けていた雨が止み、雲の隙間から晴れ間が見える。

梅「んんっ。雨もすっかりやんだな。」

ミアム「ヒュージの方も、あいつらが倒したのが最後だったようじゃ。この付近からはもう反応がない。」

梅は背筋を伸ばしながら周りを見渡す。

その意図を察したのかミアムが周囲にヒュージの反応がないことを伝えると彼女達は警戒を緩くし始めた。

梨璃はヘルヴォルのメンバーが警戒を解いたことに気づくと一葉へと声をかける。

梨璃「一葉さん！またお会い出来ましたね！嬉しいですよ！」

一葉「私もです。先日は簡単な挨拶だけでしたからね。」

一葉もこちらの事に気が付き近づきながら挨拶をしてきた。

一葉「夢結様も来て頂き、ありがとうございます。」

夢結「ええ、随分と早い再開になってしまったけど。」

一葉が2人と話している事に気づいたのか、ヘルヴォルのメンバーもこちらへと駆け寄る。

恋花「なになに、一葉ってば百合ヶ丘の子たちと仲良しだったんだ。」

一葉「いえ、仲良しというかー」

梨璃「はいっ！お友達です！」

一葉「・・・ふふっ、そうみたいです。」

恋花の言葉に一葉は戸惑いながらも否定しようとするが、彼女の言葉に梨璃が言葉を重ねてしまい、少し惚けながらも微笑しながら自身の言葉を訂正した。

一葉が梨璃達から一柳隊の方へと目線をずらすとそこには負傷をした少女達があり、それに気づいた彼女はそちらへと近寄った。

一葉「あなたたちも無事でよかったです。」

??? 「いえ……。まさかヘルヴォルに来ていただけるとは思いませんでした。」

一葉は彼女達の無事を確認すると改めてこちらへと振り返った。

一葉「あつ、まずは御礼を申し上げます。」

彼女は自身の姿勢を正すところらへと真剣な視線を向ける。

一葉「この度は救援要請に快諾いただき、我がエレンスゲ女学園に所属するリリィを保護していただいたこと誠にありがとうございます。正式な感謝状は後日、学園を通して送られると思いますがー」

彼女は一柳隊へと感謝の言葉を述べていると、横から恋花が割り込んで来て話を遮る。

恋花「かたい！かたい、かたい、かたい！買ったのを忘れて3日後に冷蔵庫から発掘されたドーナツくらいカチカチでパツサパツサだよ、一葉！」

一葉「そんなこと言われても……。」

堅苦しい一葉の言葉に我慢出来なくなった恋花は彼女に文句を言い始め、言われた一葉もどうすればいいのか分からなくなってしまい

固まってしまう。

そんな2人に対して一柳隊のメンバーはどう声をかければいいか悩んでいると、二水が躊躇いながらも前に出る。

二水「あの、あなたは……。」

彼女の疑問の声を聞いた恋花は待つていたと言わんばかりに勢いよく飛び出す。

恋花「おっと、自己紹介が遅れたね♪ヘルヴォルのおしゃれ番長、飯島 恋花とはあたしのことよ！」

梨璃「ばんちよう……？」

夢結「エレンスゲには変わった役所があるのね。」

一葉「気にしないでください、夢結様。」

美鈴（……ただの自称だと思うよ。）

夢結達は彼女の言葉が理解出来ず困惑していると、一葉も困惑しながら彼女達へと気にしないようにと言う。

彼女達へとフォローを入れた一葉は嬉しそうに喜んでいる恋花へと振り向くと、

一葉「恋花様もあんまりふざけないように。」

恋花「だって、一葉がかたいからさ。」

一葉「恋花様が柔らかすぎるんですよ……。」

一葉は恋花のことを叱ろうとするが、その言葉を彼女は受け流し態度を変えずに話し続ける。

それを見た一葉は情けない声を出しながら軽く頭を抑える。

ミアム「ふむ、あれがエレンスゲのトップレギオンか。思ったよりも愉快的連中のようなじゃの。」

一柳隊が、そのやり取りを見て雰囲気やを緩めお互いに会話を始めていると、先程までミアムと会話をしていた梅が千香瑠へと向かって歩み寄る。

梅「なかなか面白いレギオンに入ったみたいだな、千香瑠。」

千香瑠「ふふふ・・・梅さんこそ。」

梅の言葉を受けて千香瑠は微笑みながら返事をする。視線を夢結へと向けた。

千香瑠「それにまた夢結さんと同じレギオンに所属しているなんて、私まで嬉しくなってます。」

梅「あー、あれはまあ、うちのリーダーのお陰というか・・・うん。」

2人が会話の花を咲かせているとミアムがそちらに気づき近づいてくる。

ミアム「なんじゃ、お主ら顔見知りじゃったのか。夢結様のことも知っておるとはな。」

千香瑠「ええ、何度か戦場で一緒にする栄誉にあずかりました。」

梅「ははは、謙遜はよせよせ。大人しそうなナリをしてるけど、千香瑠は相当の使い手だからな。」

ミアム「ふむ・・・まあ、そのCHARMを見ればわかる。百由様から話は聞いていたが直接見るのは初めてじゃな。」

ミアムが千香瑠の持つCHARM、ゲイボルクに興味を示していると後ろから瑠がやってきた。

瑠「あの・・・千香瑠。携帯食、余ってないかな？藍がお腹減ったって騒いでて・・・。」

瑠の言葉に千香瑠は藍のいる方向を向く、そこにはウロウロと何かを探すように周りを見渡したす藍の姿があり、それを見た千香瑠は微笑みながらしかし困ったような表情をする。

千香瑠「ああ、いっぱい動きまわったもんね。でも急な出勤だったから藍ちゃんの好きなお菓子はなにかも……。」

藍「甘くないの、やだな。もそもそしたクラッカーとドロミみたいなスープはいらない。」

ボソボソと力の抜けた声を出す彼女はこちらへと近づいてくる。

梅「おつ、さっきのルナティックトランサーの子か。それと、そこらは初めましてかな？」

藍「らんだよ、ささきらん。」

瑠「あ、ご挨拶が遅れました……。初鹿野 瑠です……。よろしくお願いします。」

梅「私は吉村・T h i ・梅。さっきも話していたけど、千香瑠とは何度か戦場で会った仲だ。」

ミリアム「わしはミリアム・ヒルデガルド・v・グロピウス。リリイじやが、アーセナルとしてC H A R Mの開発調整も請け負っておる。」

藍「ミリ村……。昼で、マイ?……。わかんない。」

ミリアム「いやいや、混ぜつとる混ぜつとる。」

藍は2人の自己紹介を続けて聞いたせいか分からなくなってしまう2人の名前が混ぜってしまう。

梅「ははは、難しい名前だもんな。こっちはぜび、ぐろつぴと呼んでやってくれ。」

瑠「ぐろつぴ……。ですか?」



ミリアム「やめい、梅様。変なあだ名で呼ばれるのは百由様だけで十分じゃ。」

梅が揶揄うようにミリアムのあだ名を言うと瑤は困惑しミリアムは梅の発言にツツコミを入れる。

藍「ぐろっぴ・・・覚えやすくて、いい。」

ミリアム「むむ・・・まあ、どうしてもというならよかろう。あまり人前で連呼されたくはないが・・・。」

藍があだ名を気に入ってしまったせいでミリアムは苦笑いをしながら何も言えなくなってしまう。

藍「むふー、ぐろっぴー。」

ミリアムの言葉を聞くと藍は喜びながら嬉しそうにそのあだ名を言い続ける。

瑤「なんだか、すいません・・・。」

ミリアム「わははは、面白い娘じやの。さっきまであんな戦い方していたリリイとは思えん。」

瑤「・・・でも、藍は藍・・・です。」

梅「ああ、そうだな。見事な戦いだっつゾ。」

梅が藍のことを褒めると彼女は満面の笑みを浮かべながらはしやぎ出す。

結梨「藍って言うの?。」

はしやいでいる藍の前に結梨がやってきた。

結梨は不思議そうな顔をしながら、藍の周りを回りながら彼女を見

る。

それに気づいた藍も不思議そうな顔をして、結梨の動きを追うように身体の向きを変えながら彼女の事情を見始めた。

藍「うん、らんだよ。」

結梨「わたしは結梨、よろしくね。」

藍「うん、よろしくねー。」

2人は何かを感じたのかすぐに打ち解け楽しそうに会話を始めた。

その後一通りの自己紹介が終わり各々の帰還地点に戻ろうとした時、

一葉「あれ？そういうば……。」

梨璃「一葉さん……？どうしたんですか？」

一葉「梨璃さん、そういうば黒鉄さんが居ないと思ひまして、」

梨璃「黒鉄さんですか……？そこにいますけど？」

梨璃は一葉の言葉に不思議そうな表情をするとある場所に向かって指を向ける。

一葉は彼女の指を指す方を見るとそこには夢結の姿があり、そこには彼の姿がなかった。

一葉「……えつ？夢結様しかないような気がしますが……。」

夢結「私の隣にいるわよ……。蓮夜、」

蓮夜「……ん？どうかしたか？」

夢結は自身の隣へと視線を向けた。

するとその空間が歪み、その歪みから彼が姿を現す。

その光景を見たヘルヴォルのメンバーは驚愕するが一柳隊のメンバーは苦笑し夢結は頭を抑えてため息を吐いた。

夢結「蓮夜、貴方・・・レアスキル解いてないでしょう。」

蓮夜「・・・すまん、考え事してて解くの忘れてた。」

夢結「いいわ、とにかく自己紹介をしなさい。してないのは貴方だけよ。」

蓮夜「ああ、そうだな。」

夢結との会話を終えると彼はヘルヴォルのメンバーの方へと向き直る。

蓮夜「遅くなったけど、俺は黒鉄　蓮夜、一柳隊所属で2年です。こちらの隊に所属している茜とは知り合いで、この隊ではミリアムさんと同じくこの隊のCHARMの整備や調整をしています。これから、よろしくお願いします。」

そこからは彼の自己紹介がしばらく続き、話終わると彼は周りを見渡しながら一葉へと1つの疑問を投げかけた。

蓮夜「そういえば、一葉さん？・・・ここに茜が居ないような気がするのですけど、」

一葉「茜ですか？彼女はCHARMの調整が終わらずにここには来ていません。」

蓮夜「そうですか、何かあったのかと心配になって、それなら安心です。」

一葉「ええ、大丈夫ですよ。彼女もCHARM持たずに来ようとしているくらいには元気でした。」

蓮夜「あはは、・・・そうなら説教だな。」

彼は軽く笑うと表情が一変し、平坦な口調で言葉を紡ぐ。

一葉「そ、そうですね。・・・良かった、止めることができます、」

挨拶も終わった彼女達は各々で会話の花を咲かせ始める。  
その影で彼だけが森の奥を覗むように見つめていた。

## ラスバレー1章⑧

一葉「私たちは準備を整えたら再出撃します。このキャンプ地は柳隊の皆さんで好きに使ってください。」

皆が一通り話を終わると一葉はこちらに向き直りこちらへと話しかける。

その言葉に楓が不思議に思い彼女へと問いかけた。

楓「そちらのリリーの救助はもう完了したようですが、それでも再出撃ということは、あなた方の目的は――」

夢結「ヒュージの殲滅、でしょうか？」

一葉「・・・はい、その通りです。」

蓮夜「一葉さん・・・殲滅と言ったが、この周辺のヒュージは討伐し尽くしたと思うが？」

二水「はい、本部からもそう通達が来ています。」

夢結「そうとなると・・・一葉さん、何かあるのね？」

楓と夢結の質問に答えた一葉の言葉に違和感を感じた蓮夜は彼女へと質問を投げかけた。

一葉「・・・先遣隊の報告でこの森には通常とは異なる個体・・・。特型ヒュージが潜伏している可能性があります。」

二水「特型ヒュージ・・・!?!」

千香瑠「詳しい情報はまだまとめ切れていないのですが、我が校のレギオンのリリーが交戦したようです。」

一葉の言葉に続き千香瑠が説明を始めると、ミリアムが1歩前に出る。

ミリアム「その情報なら、わしの方にも届いておるぞ。なんでも戦

闘中に形状を変化させるヒュージらしいのう。」

蓮夜「あとは通常のヒュージとは行動パターンが違うらしく思考能力があるのかも知れないって報告にあったな。」

梨璃「そんなヒュージがこの森のどこかに……。」

ミリアムに続き蓮夜もその情報を知っていたらしく各々が知る情報を皆に対して報告した。

それにより不安を感じる梨璃を見た一葉は梨璃の前へと立つと真剣な視線を彼女へと向ける。

一葉「私たちヘルヴォルはその特型ヒュージの討伐任務を果たします。エレンスゲのトップレギオンの名に懸けて。」

梨璃「……。」

彼女の凛々しく気迫のこもった声を聞いた梨璃は何かを考え始めた。

梨璃「あの……みんなに相談があるんだけど……。」

夢結「わかっているわ。あなたの好きなようにしなさい。」

梨璃「えっ?」

梨璃がこちらへと振り返り真剣な眼差しで言葉を紡ぐ。

それを見た夢結は微笑みながら梨璃へと言葉を返した。

楓「梨璃さんの考えることはみんなもうわかっていることですわ。相談なんて必要ありません。」

梨璃が夢結の反応に驚いていると楓が彼女へと話しかける。そして楓が一柳隊のメンバーへと視線を向けたので梨璃も彼女に習いそちらを見ると、

そこには一柳隊メンバー全員が彼女を見ながら微笑んでいる姿が

あつた。

梨璃「……ありがとう、みなさん！」

みんなの姿を見た梨璃はいつもの笑顔を取り戻し、一葉の方へと向いた。

梨璃「一葉さん！」

一葉「は、はい！どうかしましたか？」

梨璃「わたしたち、一柳隊も同行します。」

一葉「え？ですが……。」

真剣な表情で言った梨璃の言葉を一葉は動揺を示す。

梨璃「リリイ同士の結束ですよ！一葉さん！一緒に戦いましょう！」

一葉「……。」

恋花「一葉も本当は、一柳隊と協力し会いたいんだよね？でも、これ以上助けて貰うわけにはいかないと思ってる。」

一葉は梨璃の提案を聞いて悩み始める。

それを見た恋花は、苦笑しながら彼女へと話しかけた。

一葉「……はい、確かに協力し合うことは決まりました。ですが、既にエレンスゲのリリイを助けて貰っています。」

一葉は恋花の言葉を聞き彼女の悩みを打ち明けた。

一葉「これ以上、一柳隊の力をお借りするのは……。」

梨璃「一葉さん、そんなの気にする必要なんてありません！」

夢結「梨璃の言う通りよ。それに貴方たちの言う特型ヒュージの情

報は、百合ヶ丘としても是非欲しいところ。」

蓮夜「それに、その特型ヒュージを放置していたら進化する可能性も十分にある。これはエレンスゲだけじゃなく近辺に存在する全ガーデンの問題ですからね。」

夢結「そうね。だからこれは、百合ヶ丘のためでもあるのよ。」

一葉「梨璃さん、夢結様・・・それに黒鉄さんも。」

梨璃達の言葉を聞いた一葉は揺れ始める。

恋花「いいじゃん、一葉。戦力が多い方がいいし、賑やかなのもっといいし！」

藍「らんもぐるつぴたち、好き。」

ミリアム「わっはっはっはっ！餌付けに成功したようじゃな。」

一葉「・・・はあ、まったく。私が見ていないところで勝手に仲良くなっちゃって。」

恋花と藍の言葉を聞いた一葉は少し驚いた表情をするが、すぐに苦笑しながら肩の力を抜いた。

一葉「わかりました。百合ヶ丘女学院、一柳隊の皆さんとの共同任務に当たります。軍令部には略式で報告しておきます。」

一葉は瞳を閉じる。

そして1度深呼吸すると目を開き彼女達へと向き直った。

一葉「梨璃さん、夢結様、一柳隊の皆さん。ありがとうございます。」

そして、よろしくお願ひします。」

梨璃「はい！一葉さん！一緒に頑張りましょうね！」

梨璃と一葉の言葉を聞くと2レギオンのメンバーはお互いに情報交換を開始した。



楓「改めてお願いいたしますわ、ヘルヴォルの皆様。」

瑤「こちらこそ・・・よろしく、です。」

夢結「お互いに情報を付き合わせれば、ヒュージの潜伏地点を探るのに何か手がかりがつかめるかもしれないわね。」

千香瑠「はい、こちらも早急にデータをご用意しますね。」

蓮夜「それならこれが使えらんじゃないか？」

彼女達が情報を照らし合わせていると彼が間に入り込む。

彼の手にはいつものものとは形状の違う端末が握られておりそこにはこの地域一帯の地図が映し出されていた。

千香瑠「これはいったい？」

夢結「蓮夜、それはもしかしたら、」

蓮夜「大気中のマジの乱れを感知するセンサー・・・簡単に言うケイブ探知機だな。」

一葉「そのようなものがあるのですか!？」

蓮夜「最近完成した試作機だからな。知らなくて当然か・・・、これは百由、俺の知り合いと共同で開発したもので周囲のマジの流れを調べ、ケイブ特有の乱れを感知する所でケイブの位置を特定する装置・・・と言えはいいかな？」

一葉「百合ヶ丘ではそのような物が作られているのですね。やはり世界でも有数のガーデン・・・流星です!」

蓮夜「・・・いや、これは百由が他データラメなだけだと思うが、・・・これを使えば特型の潜伏している可能性のあるエリアを絞れるんじゃないかな？」

ミリアム「百由様と何か作ってると思つてたらそれかい・・・、まあ、それがあれば潜伏範囲をかなり絞れるわい。」

ミリアムの返答を聞くと彼はすぐに端末を起動させる。

すると地図に魚群探知機のようなソナー画像が写りだし、彼女達が

ら少し離れた場所に黒い影が映し出されていた。

蓮夜「最後にケイブが開いたのはここみたいだな。」

夢結「なら、この辺りを搜索すれば特型ヒューズを発見できる可能性が高いという事ね。」

梨璃「でしたら早く行きましょう！」

一葉「そうですね。では準備が整い次第に、出発しましょう。ヘルヴォル・一柳隊の共同任務です。」

梨璃「はい！出発進行ですー！！」

目標地点を決めた彼女達は森の奥へと進んで行った。

## ラスバレー1章⑨

雨降る森の中、少女達は駆け抜ける。

一葉「目的地まであと少しですね。」

梨璃「はい、到着したらどうしましょうか?」

夢結「隊を分割して捜索するのが定石でしょうね。」

一葉「そうですね。それなら分隊の振り分けはどうしましょうか?」

恋花「それぞれのレギオンで分隊をつくるのが妥当だと思うよ。」

彼女達は走りながらこれからの行動を話し合う。

夢結「それが一番でしょうね。それならそれぞれのレギオンに別れ、」

梨璃「すいません。よろしいでしょうか?」

夢結が話をまとめ行動に移そうとした時、梨璃が彼女の言葉を遮った。

夢結「梨璃?どうしたのかしら?」

梨璃「話を切ってしまったてすみません。わたしに提案があるんですけど、いいですか?」

一葉「提案ですか?大丈夫ですよ。」

梨璃「ありがとうございます。その提案ですけど、ここにいるメンバーで混合の分隊をつくるのはどうでしょうか?」

一葉「混合で...ですか?」

梨璃「はい!わたしたちこれから一緒にすることが多くなるじゃないですか、だからそれぞれのメンバー同士の結束を深めるために思っています。」

一葉「確かにその通りですが...いきなりでは危険では、」

梨璃「そうですね。ごめんなさい、今の、」

梨璃は自身の意見を撤回しようとする。  
そんな彼女の横に恋花がやってきた。

恋花「いいじゃん！やろうよ！」

一葉「恋花様・・・さすがに危険では？」

恋花「こういう機会はなかなかないと思うよ？それに特型のおおよその場所は割れてるんだから大丈夫でしょ。」

恋花の言葉に一葉は考える素振りをする。と再び梨璃へと向き直った。

一葉「そうですね。百聞は一見にしかずと言いますし、試してみましよう。」

梨璃「は、はい！」

蓮夜「・・・ん？」

彼女達が方針を固めていると蓮夜は森の奥を覗む。  
しばらく森の奥を見つめた彼は梨璃達の元へと駆け寄った。

蓮夜「ちよつといいかな？」

梨璃「蓮夜さん？どうしたんですか？」

蓮夜「今森の奥に動く影が見えたんだ。」

一葉「本当ですか！もしかして特型ヒュージが！」

蓮夜「いいや、多分違うと思う。サイズが小さかったから多分スモール、大きくてラージ級だと思う。」

一葉「そうですね・・・。」

彼は彼女達と会話をしながら一瞬夢結へと視線を向けた。

視線を向けられた夢結はまるで向けられることが分かっていたかのようにこちらを見ておりお互いの目が合う。

夢結「ラージ級までなら一度放置しても問題ないんじゃないかしら？」

蓮夜「普通ならそうだけど、進行方向がもしかするとさっきのリリース達の所かもしれないからな、ちよつと様子を見てこようと思う。」  
夢結「確かに負傷者が遭遇したら危険ね。1人で大丈夫なのかしら？」

蓮夜「見た感じ個体数は少なかったから大丈夫だ。だから梨璃さん、1回俺は別行動をとるけど大丈夫か？」

梨璃「はい！大丈夫です。」

一葉「人命優先ですからね。こちらも大丈夫です。」

蓮夜「分かった。片付けたらすぐにみんなの所に向かうからそれまで頼む。」

そういうと彼は森の奥へと消えて行った。

一葉「それでは私達は私達で搜索を開始しましょう。」

梨璃「はい！一葉さん！」

彼女が見えなくなると彼女達はさらに速度を上げて目的地へと向かって行った。

彼女達と別れた蓮夜は森の中を駆け抜ける。

木々の隙間を縫うように時にはその木そのものを足場として一切速度を落とすことなく進んで行く。

蓮夜「・・・君は来なくて良かったんだよ？」

彼は駆ける速度を落とさずに背後へと視線を向ける。  
そこにはただ木々が生い茂るのみであり誰もいない。

蓮夜「・・・夢結。」

彼がここには居ないはずの少女の名前を口にする。  
すると彼の後方の一部が歪んだ。

その歪みが直るとそこには夢結がおり彼女は彼の横まで駆け寄ると彼へと視線を向けた。

蓮夜「梨璃さん達のことをお願いしたんだけど、」

夢結「・・・大丈夫よ。お姉様の分身がいるから、それに私の幻影もいるからバレることもないわ。」

蓮夜「・・・ただのヒュージだから問題はないよ?」

夢結「・・・嘘はやめなさい。お互いに分かるのよ?」

蓮夜「：：：やつぱり無理か、君にはまだ早いから誤魔化そうと思っただけけど。」

夢結「どんなことがあっても覚悟はできているわ。」

美鈴（蓮夜、これは諦めるしかないよ。）

彼は彼女を帰そうとするが意思は固く一向に引こうとしない。

そんな彼女をどうにか説得しようと考えるが美鈴の言葉を聞いた  
め息を吐きながら彼女へと向き直った。

蓮夜「わかったよ・・・だけど一つだけ約束して、」

夢結「何かしら?」

蓮夜「絶対に無理だけはしないで、」

真剣な表情で言葉を紡ぐ彼を見た彼女は微笑み彼の手を握った。

夢結「ふふっ、大丈夫よ。貴方がいるもの。」

彼女の言葉を聞いた蓮夜は一瞬顔を綻ばせる。  
そして3人が少し開けた場所に出たその時、

蓮夜「来るよ！」

彼の表情が真剣なものへと変わる。

彼女には彼のその顔に見覚えがあった。

その表情を見た夢結は周りを警戒すると、

夢結「・・・あれは!？」

彼等の視線の先、その森の奥から青白い何が姿を表した。

## ラスバレー1章⑩

蓮夜「……もう居ないか。」

蓮夜は森の中を見渡しながらつぶやく。

彼のいる場所は木々が生い茂る森の中であるはずだが彼の周りには木々は1本として生えていなかった。

彼の周囲の地面には無数の切断痕が存在し、正常な地面を探す方が大変であり、地面には生々しい傷跡を残した木々が倒れている。

木々の傷跡は多岐にわたり、切断痕、弾痕、焼け跡、そして菱形の傷跡が所狭しと残されていた。

その中で唯一無傷である彼は周りを見渡し終えるとある方向へと駆け出す。

その先は木々の生い茂る普通の森であるがその木々は何かの爪痕や虫食い状になっているなどの異常を来たしているものも点々と存在していた。

彼がしばらく走り続けると森の中に開けた場所が現れる。

そこは地面は焼きただれており木々は黒焦げた炭となり地面一面を灰が覆っていた。その中には未だに赤熱な状態の場所にもあり一部ではガラス化している場所も見られた。

そんな異様な光景の中央に1人の少女が畳んずんでいる。

蓮夜「夢結!……?」

その少女、白井 夢結は彼の言葉が聞こえなかったのか顔を下に向けたままその場を動かない。

彼はその様子を心配そうに近づくと、彼女は彼に気づいたのか彼の方へと身体を向けた。

蓮夜「……大丈夫、!?!」

夢結「……。」



彼が再び彼女へと声をかけると彼女は彼に向かってかけ出す。その行動に動揺した彼へと向かって来た彼女は彼にしがみつくように彼を抱き締め、自身の顔を彼の胸板で隠すように押し付ける。冷静さを取り戻した彼は夢結へと視線を向ける。彼女は無言のままこちらを抱き締めているが、その方は細かく震えていた。

蓮夜「・・・夢結、ごめんね。・・・辛かったですよ。」  
夢結「・・・。」

彼は彼女の背中へと手を回すと強く抱き締め、優しい口調で問いかけながら彼女の頭を撫でる。  
しばらくすると彼女も落ち着いてきたのか震えが止まり抱き締める力も弱くなった。

夢結「・・・怖かったの。」  
蓮夜「・・・。」  
夢結「・・・覚悟はしてたわ。・・・だけど怖かったの。」  
蓮夜「・・・大丈夫だよ。夢結、それが当たり前なんだ。」  
夢結「・・・けれど、」  
蓮夜「・・・普通なら僕みたいに、こんなこと慣れちゃ行けないんだよ。だから大丈夫、」

夢結「・・・いいえ、ダメよ。」  
蓮夜「どうしてかな？」  
夢結「貴方と一緒にいる・・・そう言ったでしょう？」  
蓮夜「だからって無理する必要はないんだよ？」  
夢結「・・・確かに無理はしているかもしれないわね。だけどダメなの、」

蓮夜「・・・。」

夢結「私は貴方を支え続けるって決めたから、本当は貴方も辛いの

でしょう?」

蓮夜「・・・いや、辛くないよ。もう、慣れてるから。」

夢結「いいえ、それは無いわ。確かに貴方は平然そうに見えるけど、本当は貴方も泣きたいのでしょうか?」

蓮夜「・・・そう、なのかな?」

夢結「・・・きつとそうよ。今の貴方の中心は悲しみに溢れているもの。」

蓮夜「・・・。」

夢結「だから私が支えて投げないと、少しでも貴方の悲しみが少なくなるように、」

蓮夜「・・・それで夢結が無茶をするなら僕は余計悲しくなるんだけどな。」

夢結「貴方は優しいものね。今の私を見てると辛いんでしょう?」

蓮夜「そう・・・だね。」

夢結「・・・ごめんなさい。けれど私はやめられないのよ。そうしないと貴方が何処かに言ってしまういそうで。」

蓮夜「・・・僕は何処にも行かないよ?」

夢結「分かっているわ。貴方は私に寄り添い続けてくれる。それは分かっているのだけど、もしもやめてしまったら心の奥のそれとは違う何か離れてしまう。・・・そう感じてしまうの。」

彼女の願望、それは彼を支え続けること、

支えるそれだけなら簡単だろう。

しかし、彼女はそれだけでは満足出来なかったのだ。

彼の苦しみを、悲しみを共に背負う。

それが彼女が考える「支える」ということだから。

夢結「私は貴方の隣に居たいの。ただ隣にではなく、本当の意味での隣に、」

蓮夜「本当の意味?」

夢結「ええ、苦しみも、悲しみも、怒りも、そして喜びも、全てを貴方と共に感じたい。」

蓮夜「……。」

夢結「……面倒な女かもしれないけど私はそういう性格なのよ。」

夢結は少し暗い表情をしながら顔を背けた。

彼女も分かっているのだろう。

これが、ただのエゴであることを、

蓮夜「……面倒なんて思ったことは1度もないよ。」

夢結「……。」

蓮夜「確かに僕は夢結が苦しむ姿を見たくない。できることなら君をこの世界に関わらせたくなかったんだ。」

夢結「……。」

蓮夜「だけど君は僕を助けるためだけにこの世界へと入って来た。原因である僕が君に何かを言う資格なんてないんだよ。」

夢結「資格なんて……それをいうなら私が、」

彼の言葉を聞いた彼女は慌てた口調で言葉を紡ぐ。

資格がない……それは彼の言葉ではなく自身の言葉であるはずだからだ。

彼がこの世界に入った……彼の人生を狂わせた原因は白井 夢結、

彼女自信に存在しているから。

そんな彼女の口を何が塞ぐ。

その柔らかい感触に思考を持っていかれる。

蓮夜「……そう、僕達はお互いにそんな資格はないんだ。だから僕は君の全てを受け入れる。だから君ももっと自由になっていいんだよ。」

彼の言葉を聞いた彼女は一瞬身体を硬直させると彼へと視線を向

ける。

夢結「……本当にいいのかしら？」

蓮夜「何を言っているんだい？いいに決まってるじゃないか。君は僕で僕は君なんだ。お互いにお互いを縛れない。けど、それはお互いの全てを受け入れるってことでもあるんだよ。」

夢結「……。」

蓮夜「だから君は君のままでもいいんだ。誓いを立てた白井夢結ではなく、僕のままの白井夢結で、僕が好きないつもの君で、」

彼の言葉を聞いた瞬間彼女の瞳から雫が零れ落ちる。

彼の真実を知った彼女はとあることに縛られていた。

彼のことを苦しめ続けていた私は、彼を幸せにしなければいけない。

だから変わらなければいけない。

彼の全てを狂わせた私ではなく、彼を支えることができる私に、それが正解だと信じていた。

しかし、それは間違いだった。

彼が望んでいること、

それを分かっているながら間違えていたのだ。

彼の願望、

それはあの頃の日常を送ること、

それは彼を支えることができるだけの私ではダメなのだ。

彼が望む彼女、それは彼の日常にいる私、

それこそが彼が最も安らげる場所、白井夢結との日常なのだから、

夢結「……そうよね。何か勘違いをしていたわ。」

蓮夜「……。」

彼女は1度深呼吸をすると彼へと向き直る。

その表情は晴れ晴れとしておりそれを見た彼は安心した表情で彼女の言葉を聞き入れる。

夢結「私の悪い所ね・・・でも大丈夫、もう固執することはしないわ。」

蓮夜「・・・うん。」

夢結「けれど、貴方の隣にいることはやめないわよ？」

蓮夜「・・・これからも、つらい思いをすることになるよ？」

夢結「分かっているわ。だけど、これは私の考<sup>暫</sup>えたからではなく、私の自信がそう成りたいと思<sup>た</sup>ったからよ。」

そういうと再び彼女は彼の胸板へ自身の頬を擦り寄せた。

夢結「絶対に話さないわよ。」

彼女はそつと呟くと自身の身体を彼へと預ける。

それを受け止めた彼は彼女へと微笑みながら彼女を抱き締め返す。

それは、梨璃達からの連絡が来るまで続いた。

「特型ヒューズに逃走された。」

これが彼女達から送られてきたものだった。

## ラスバレー1章⑪

救助作戦から数日が経ち百合ヶ丘も落ち着き平穏な日常を送っていた。

蓮夜「・・・あとは調整だけだな。」

その中蓮夜は自身の部屋でコンソールを操作していた。

その画面には8つのシルエットが映し出されておりそのシルエットの上にCLEARというラベルが流れていた。

彼はそれを確認すると背を伸ばしコンソールを閉じた。

首や肩を回し立ち上がろうとした時、ドアからノックする音が聞こえた。

百由「蓮夜く、いるかしら?」

蓮夜「百由か・・・いるぞ。」

ドアの向こうから聞こえた声は百由のものであり彼が返事をする  
と彼女は部屋へと入ってきた。

百由「ごきげんよう。いたのね、よかったわ。蓮夜、アレの調子は  
どうなの?」

彼女は彼へと挨拶をすると本題を述べた。

彼は彼女の言葉に反応しとある一点に視線を向けた。

蓮夜「ああ、『Agateram』のことか、」

その視線の先には黒色のガントレットがありそれは無数のコード  
に繋がっていた。

蓮夜「さすがに量産は無理だろうけど、オーダーメイドならできると思うぞ。」

百由「もうそこまで行ったの？さすがね。」

蓮夜「元々考えてはいたからな。データが取れたらあとは調整だけだしな。それでオプシヨンの方はどうだ？」

百由「こつちもあとは調整だけね。」

蓮夜「そつちも早いじゃないか・・・。」

百由「そうかしら？とにかく『強化』<sup>ブースト</sup>『放出』<sup>シュート</sup>『補助』<sup>アシスト</sup>の基本システムは完成したわ。ただ派生型はもう少しデータ画必要ね。」

蓮夜「それで十分だろう？それでテストは誰にしてもらおう予定なんだ？」

百由「何機ベースができているの？」

蓮夜「今は3機だな。これでテスト成功すれば増産も容易なんだが、」

百由「3機ね・・・。」

彼から告げられた情報から百由は思考を始める。

彼女はしばらく考えると自身の端末を出し操作を始めた。

百由「なら、」

彼女の提案を聞いた彼は頷き、それから2人は会話を続けた。

あの日から数日が経ったある日彼は救助作戦へと向かった森へと来ていた。

蓮夜「・・・。」

彼は森の奥へと入っていく。

その足取りはしっかりとしておりただ1つの方向への進む。

しばらく進み続けると彼の足が止まった。

そこは先日彼と夢結が訪れた広場であり悲惨な光景が、あの時の状態のままに残っていた。

蓮夜「やっぱり無理か」

彼は呟くとため息を吐き周りを見渡す。

そこには倒れた木々と灰だけ残っており、その奥には青々とした木々が映し出されていた。

蓮夜「夢結達はグリーンフェアーだっただけ。」

彼は端末を起動させるとカレンダーを確認する。

そこには今日がグリーンフェアーと記されていた。

蓮夜「グラン・エプレとヘルヴォルも一緒だから何かあっても大丈夫だと思うが……。」

その後彼はしばらく森の中を探索し、森を一周したあたりで元の場所へと戻って来た。

蓮夜「……調べてもどうにもならないか、」

彼が手を翳すと地面と倒れた木々に光が集まりその形を変え始めた。

光の形が固まると霧散し中からは元の森が姿を現す。

森が元に戻ったことを確認すると彼は森から出ようとする。

その時、

《ビーッ！ビーッ！》

蓮夜「……なんだ!?!」



彼の端末からアラームがなる。  
端末を開き中身を確認した彼は顔を青くしその場からその姿を霧散させた。

天葉「・・・ここね。」

依奈「ええ、」

天葉「それでは探索を開始しましょう！」

依奈「ここは異常なマジ反応が出た地点よ。気をつけなさい。」

天葉「分かってるわよ。それじゃあ行きましよう樟美。」

樟美「はい！天葉姉様！」

依奈「はあ、壱私達も行くわよ。」

壱「はい、依奈様。」

彼女達アールヴヘイムの4人はとある森へと来ていた。

そこは一柳隊が向かった地点から少し離れた場所に位置しており森は深く暗く怪しい空気をかもちだしている。

4人が森進んで行く。

樟美「天葉姉様。」

天葉「どうしたの樟美？」

樟美「異常なマジってどういうことなのですか？」

天葉「えくつと・・・依奈？」

依奈「ちゃんと覚えておきなさいよね。まったく・・・高濃度のマジ反応が急増殖と急消失を続けているらしいわ。」

天葉「そ、そうだったわね・・・。」

樟美「・・・天葉姉様。」

天葉の様子に依奈は頭を抑えながらため息を吐き、樟美は残念な人

を見る目をしたため天葉は涙目になってしまった。

天葉「・・・前にもこんなことなかった？」

依奈「気のせいよ。」

壱「皆さん今は任務中なんですから集中してください。」

天葉「そうよ！早く原因を見つけなさい！」

依奈「はあ、そうね・・・ごめんなさい壱。」

いつもの空気を出し始めた3人に壱の一言により気を引き締め直した。

そして4人が周りを見渡しながら警戒を始める。

彼女達の視界には木々が並ぶだけの光景が広がっており薄暗いせいか森の奥は見えない。

樟美「・・・良く見えません。」

壱「そうね・・・依奈様どうしましよか？」

依奈「進むしかないでしょうね。」

樟美「・・・暗くて怖い。」

天葉「大丈夫よ樟美、私が着いているから、」

樟美「はい、」

森の中を進み続けると辺りはより暗くなっていく。

前方数mしか見えないほどに暗くなった森の中、木々の隙間から薄らと青白い光が覗く。

壱「あれは・・・。」

樟美「・・・人。」

壱「もしかしたら怪我しているかも！」

その光により地面に黒い人影が映し出される。

こんな森の中で1人である人影を怪我人だと考えた壺と樟美は人影の方へと駆け出す。

それを天葉と依奈もあとを追う。

樟美達の手が人影に届いく距離まで近づいた時、

天葉・依奈「樟美！（壺！）」

天葉達が彼女達の背中を強く押す。  
それにより2人は前へ倒れた。

樟美「・・・痛た。」

壺「依奈様！なに、を・・・。」

樟美「壺、どうし・・・天葉姉様？」

樟美と壺2人の瞳に写ったものは、

天葉「アツ・・・！ガツ・・・！」

依奈「うっ・・・が、」

右足のある場所を抑える天葉と左腕のある場所を抑える依奈。

そして、地面に転がる誰かの右足と左腕であった。

## ラスバレー1章⑫

樟美「天葉姉様？」

壱「依奈様？」

2人は何が起きたのか理解出来なかった。

どうして天葉と依奈が苦しんでいるのか？

どうして彼女達の倒れてる地面が紅く染まっているのか？

どうして彼女達の手足がないのか？

樟美「いや・・・。」

天葉「樟・・・美。」

木々の後ろから人影が姿を現す。

その身体は青白い光を発しており上手く視認出来ないが、その手にはCHARMが握られていることだけが確認できた。

CHARMには紅い何かが付いておりそこから雫が零れ落ちる。

樟美「嫌アアアア!!」

壱「よくも!!」

現状を理解できた樟美は悲鳴を上げ、壱は激怒し人影に向かって襲いかかった。

壱「はああ！」

壱ら目の前の人影に己のCHARMを振り下ろす。

その速度は凄まじく構えていない人影では対応出来ずにそのまま切り裂かれてしまうであろう威力を持ち合わせていた。

これが当たってしまうえば人影を殺傷してしまうかもしれないが今の壱にはそのような考えは思いつかず、ただ怒りのままに目の前に存

在する何かを斬ることのみを考えていた。

彼女の刃が人影に当たる瞬間、

壺「なんですって!?!」

彼女のCHARMは人影の持つCHARMに防がれてしまう。

その事実には彼女は驚愕した。

この一撃は対処不可能であると考えていたからだ。

それと同時に彼女の頭に登った血は下がり冷静さを取り戻すと共に自身の顔を青くさせた。

それもそのはずだ。

彼女は自らの手で人を殺めようとしてしまったのだから、そのような戦闘慣れをしているとはいえ一人の少女には重い現実であった。

その事実気づいた彼女はその思考を停止させる。

真っ白になったその視界で、

私は何をしようとしていたのか？

自身に対して問いかける。

しかしその答えは、帰ってくることなく彼女の身体は硬直した。

どうして、私は躊躇いもなく・・・

これでは私は・・・

樟美「天葉姉様!!しっかりとってください!」

思考の底に沈んでいた彼女の意識が一人の少女の悲痛な叫びによって引き戻される。

壺が慌てて樟美の方を確認すると、蹲り自身の傷口を抑える2人と、それを悲痛な表情のまま固まった樟美の姿があった。

今の樟美は現状が余りにも理解出来ず正常な思考ができなくなっていた。

それを見た壺は自身の目の前にいるはずの人影へと視線を戻す。

今の樟美では人影には対処できない。

そして、その原因を作り出した張本人が目の前にいるのだ。

これを抑えていなければ余計な被害を受ける。

そう理解した彼女だが、

壱「・・・えっ？」

再び彼女の思考が停止する。

彼女の視界に映し出されたもの、それは・・・

壱「・・・なによ?・・・これ?」

吸い込んでしまいそうな、濁り切った眼だった。

壱「ひっ!?!」

相手と視線が会った瞬間彼女は強烈な寒気と恐怖感に襲われる。

彼女はその恐怖から少しでも遠ざかれるようにと己のCHARMを力いっぱい振るい人影から距離を取った。

壱「はあ、・・・はあ、・・・なんだったの?今のは?」

壱は深呼吸をしてひとたび気を落ち着かせると再び人影へと視線を向けた。

彼女は人影が先程とは違い光が薄れその輪郭をしっかりと視認できようになることに気づきその姿を確認する。

その正体は自身とそう年齢が違わない少女であり、その手にCHARMを持つことからリイであることがわかる。

エレンスゲ女学院の制服を来ていることからエレンスゲ所属であることがわかるが、その姿は異様であった。

まずその少女の左腕は肘から下が存在していない。

左袖はまるで千切られたかのような切れ方をしておりそこから覗きだす肉体はノコギリで切られたかのような荒々しい傷跡が残っていた。

その異様な姿に壱は自身の身体を震わせる。

口は開いたまま塞がらずその視線はなぜが少女から話せない。

壱はまるで意識が少女の瞳に吸い込まれるような感覚に襲われながらその身体を動かすことができない。

動けない彼女へと少女がゆっくりと歩み寄る。

その足取りは思おもしろく、左足を引きずっていた。

よく見ると左足首が酷く腫れており骨が俺であることがわかる。

そして少女の後ろにそびえる木の影からは何体もの青白い人影が姿を表していた。

壱「・・・あつ、」

少女は壱が先程開いた距離を少しずつ縮めて行く。

1歩、1歩と着実に近づいてくる足音を聞きながら彼女は動けない。

壱「・・・いや、」

彼女も今の現状に気づき必死に身体を動かそうとするが動かない。

その間も少女は1歩ずつ確実に壱へと近づいてくる。

少女は彼女の目の前に近寄ると力無く下げていたCHARMを頭上に上げた。

依奈「壱！」

依奈の叫びを聞いた壱の身体が無意識に後ろへと動く。

それにより壱の命を狙っていた凶刃は彼女の鼻先を通り過ぎた。

壱はその凶刃の行き先を確認する前にすぐさま身体を翻し依奈達

の元へと駆け寄った。

壱「依奈様！」

依奈「壱・・・聞きなさい。」

壱が依奈の元に駆け寄るとそれに気づいた彼女は顔を上げた。

依奈「・・・壱、樟美を連れて逃げなさい。」

壱「何を言ってるのですか!?!依奈様も一緒に！」

依奈「・・・無理よ。私は大丈夫かもしれないけれど、」

依奈は1度言葉を止めると視線をある方向に向けた。

壱がその視線を追うとそこには無いはずの足を押させる天葉とそれを見て泣いている樟美の姿があった。

依奈「重傷者を2人も連れて、多数の敵を相手するのは無理よ。・・・

だから樟美を連れて逃げなさい。」

壱「・・・救援を要請しましょう！救助が来るまでならどうか、」

依奈「それも無理よ。・・・ここは何故か電波が繋がらないみたいなの。」

依奈はそう言いながら自身の端末を見せた。

するとそこには圏外と表示されておりそれは救助の要請が不可能なことを指している。

依奈「だから電波の送信が可能な場所まで行って救助を呼んでちょうだい。」

壱「・・・依奈。」

依奈「私達は大丈夫よ。・・・私達が強いのは知っているでしょう。」

壱「・・・はい、」

依奈「だからお願い、」



彼女の言葉に壱は1度顔を俯かせる。

そして1度深く深呼吸をすると彼女は依奈へと視線を向けた。

壱「分かり……ました。」

その言葉と共に壱は樟美の元へと駆け出す。

壱「樟美！行くわよ！」

樟美「いや！天葉姉様が！」

壱は樟美の腕を掴むとその場を離れようとするが樟美はそれに抵抗する。

壱「助けるために行くのよ！」

樟美「……だけど、」

樟美も壱の意図は分かっていた。

しかし彼女はそれを拒む。

天葉「樟美……行きなさい。」

樟美「天葉……姉様？」

天葉「大丈夫よ。絶対に帰るから……樟美を置いて何処かに行くなんて絶対しないから、樟美のシユツツエンゲルとして……ね。」

天葉は樟美に言い聞かせながら彼女の背中を押す。

それを見た壱は天葉を見ると会釈する。

それを見た天葉は壱へと微笑みながら、

天葉「樟美を、お願いね。」

壱「はい！……必ず救援を読んできます！」

そして2人は森の奥へと消えていった。

## ラスバレー1章⑬

依奈「とは言ったけれど・・・どうしましょうか天葉?」

天葉「どうしましょうって、そんなの耐えるしかないんじゃない?」

2人のことを見送った依奈は天葉に意見を求める。

周囲を青白い人影に囲まれ2人とも重傷と言っていいほどの負傷をしているのにそのやり取りは軽い。

天葉「それにしてもこれってどういうことなのかしら?あの子たち見るからに大怪我なだけ?」

依奈「・・・大怪我で済むのかしら?・・・見るからに致命傷の子もいるわよ?」

幸いにも人影の動きは遅くその距離が2人の余裕となっていた。

その中で彼女達は人影を観察する。

先程の左腕で無い者、

足が無い者、

脇腹に大きな穴が空いている者、

酷いものに至っては顔の右半分が消失しているものまで存在していた。

その人影・・・少女達の服装もバラバラでありシエルリントのものやルドビコイルマが多く見られ、中には最近百合ヶ丘と連携を取っているエレンスゲや百合ヶ丘、御台場女の制服も存在している。

統一性の少ない集団だが一つだけ少女達全てに該当するものが存在した。

それは眼だ。

生気ない濁り切った眼。

それだけが少女達に見られる慣例性でありそれと共に最も異様な部分でもあった。

依奈「どうやったたらあの状態で生きていられるのかしら?」

天葉「こういうのって映画で見たことがあるわね。・・・確かゾンビだったかしら?」

依奈「現実になんかそんなものあるわけじゃないでしょう?」

天葉「それならマジも一緒でしょう。それにG・E・H・E・N・A・とかならやりかねないわよ?」

依奈「・・・」

天葉の言葉に依奈は無言になる。

それを同意と感じた天葉は苦笑するとその表情を真剣なものへと変える。

天葉「お話は一旦終わりね。」

依奈「ええ、」

2人はお互いに視線を向けると立ち上がった。

そして依奈はCHARMを少女達へと向け、天葉はCHARMを杖がわりに自身の身体を支える。

依奈「絶対に生き残れるわよ!」

天葉「当たり前前よ!樟美を泣かせる訳には行かないわ!」

依奈が前へと飛び出す。

少女達はそれを追いかけるようにその体を彼女の方へと向けると射撃音と共に少女達のいる場所の地面が吹き飛んだ。

音のする方向は先程まで依奈がいた場所でありそこを見ると射撃形態のCHARMを持った天葉がおりその銃身からは煙が立っていた。

天葉は再び射撃をしようとするが身体が射撃の反動に耐えきれず倒れる。

依奈「ごめんなさい。」

倒れた天葉を見た少女達が彼女を襲おうとそちらへ向きを変えるとその背後から依奈がCHARMの腹で薙ぎ払った。

それによって吹き飛ぶ少女達は木々に衝突し手足の折れた物や酷いものでは枝が腹部に刺さった者までいるが、少女達は何事も無かったかなように少女達は立ち上がる。

依奈「痛覚がないの!?!」

その事に驚く彼女だが身体は無意識に次の行動へと動いている。

依奈は近くにある木々の中から太いの枝を選びCHARMで切り落とすとそれを天葉へと向かって投げる。

それに気づいた天葉はその枝を掴むとそれを右手に持ち支えとして左手でCHARMを構え直し射撃を再開した。

天葉「ありがとう依奈、」

依奈「どういたしまして、援護は任せたわよ!」

天葉「任せなさい!」

依奈が近ずいてくる少女達を押し戻し、天葉が行動を阻害する。

これを繰り返すこと数十分経ち2人の表情には焦りと共に疲労が見えた。

依奈「きゃっ!!」

天葉「依奈!」

疲労による一瞬の思考の乱れ、それが彼女達の動きを狂わせた。

動きが一瞬鈍った依奈のCHARMが弾かれる。

それにより無防備な身体を晒してしまった彼女を少女達が襲った。振り下ろされるCHARMを身体を捻じることと躲す彼女だが手

首を掠めてしまいそこから鮮鉄が舞う。

それを見た天葉は慌てて依奈の周囲に群がる少女達へと射撃を行うが、

天葉「なに!？」

彼女の足首を何かが掴まれたような圧迫感が襲った。

天葉はすぐに確認するとそこには地面から生えた無数の手が存在しておりそれが彼女の足を掴んでいた。

天葉「離せつての!」

天葉はCHARMを近接形態に変え手の生える地面へと突き立てる。

そのままCHARMを射撃形態に変えるとその勢いのまま射撃、その勢いで手を無理やり引き剥がした。

天葉「依奈!大丈夫!」

依奈「ええ、掠っただけよ。」

依奈は彼女へと返事を返しながら落としたCHARMを持ち上げようとするが、

依奈「・・・えっ?」

彼女の手に力が入らずCHARMは滑り落ちた。

予想外の自体に困惑していると彼女の背後を弾丸が通り過ぎた。

天葉「依奈!急いで!」

依奈「え、ええ。」

天葉の叫びにも似た声に我に返った依奈は自身の拳を握ろうとするが手首から先が動かない。

依奈「まさか・・・天葉！手の健が切れたみたい！」

天葉「嘘でしょう!?!」

彼女の手が動かない理由、それは先程の怪我で手の健が切れたからだ。

それにより武器を失った彼女はジリジリと追い詰められていく。

天葉「依奈！どうするのこれ!?!」

依奈「はつきりと言つてもう積んでいるわね？」

天葉「そうだとしても私は諦めないわよ！依奈もでしょう?」

依奈「当たり前よ！」

そういって依奈は再び少女達の方へと駆け出す。

飛び出してきた依奈に反応して少女がCHARMを振り下ろすが彼女のそれを横に倒れるように躲すことで横を通り過ぎる。

そしてCHARMを振り下ろし隙をできた少女へと天葉の射撃が襲った。

その弾丸により少女の腹部に風穴が生まれるがそれでも少女は止まらない。

2人は相手を傷つけない戦闘は不可能だと悟り自身等が生き残るための最適解・・・相手の行動不能へと戦闘方法をシフトする。

依奈が囷となりそれで生まれた隙に天葉が少女達の手足を撃ち抜き動けなくするが、それでも少女達は進み続ける。

たとえ手足が欠損しても表情一つ変えずに襲い来るそれに彼女達は恐怖を覚えた。

天葉「もう、なんなのよ！」

依奈「天葉！後ろ！」

天葉は余りにも非現実的な状態に怖気付い1歩後ろへと引いた。その彼女の背後に煙があがるとそこから腹部に風穴の空いた少女が姿を表した。

少女の持つCHARMは振り下ろされる直前であり天葉の頭上に刃が迫る。

それに気づいた依奈は彼女の元へと飛び込み右腕で天葉の身体を押しした。

それにより体勢を崩した天葉は横へと倒れる。

天葉「依奈!?!何を・・・ツ!?!」

依奈「くく!?!?!」

振り下ろされたCHARMから天葉をずらすことには成功したがそれは完璧ではなかった。

無理な体制で天葉を押しした依奈は腕を戻すことができず、唐突なことに反応出来なかった天葉はその足をCHARMの軌道に残ってしまう。

そして2人から鮮血が飛び散る。

それと同時に2人は焼かれるような激痛に襲われた。

2人は自身に起こっている激痛の発生源に目を向けるとそこには先程まであった彼女達の手足は存在していなかった。

両腕を失った依奈は倒れたまま動けず、両足を失った天葉は身体を翻するとCHARMの射撃で抵抗する。

しかし少女達は先程までの動きとは全く別物となっており歴戦のリリイと同等の動きで天葉へと迫る。

その顔は僅かに笑っておりそれがより恐怖を煽った。

天葉「ごめん・・・樟美、」

天葉の瞳はその光景に絶望に染まる。



そして一粒の雫を流しながらそつと目を閉じた。

すぐに自身を襲うであろう刃の群れ、

しかしそれはいつまで経っても彼女達を襲わない。

それに不思議に思った天葉は少しづつ目を開く。

樟美「……天葉姉様!!」

天葉「樟……美？」

一瞬白んだ彼女の視界、

白い世界に色が戻るとそこには彼女のシルトである樟美の姿があった。

彼女の背後には依奈を支える壺の姿があり、その後ろでは誰かが少女達を抑えていた。

涙を拭い霞んだ視界を無理矢理戻しその誰かを確認する。

そこには、

蓮夜「……。」

大振りの槍を持った彼の姿があった。

## ラスバレ1章⑭

蓮夜「・・・遅かったか。」

彼は少女達を手に持つ槍で牽制しながら天葉達を横目に確認する。

蓮夜「2人とも、天葉達を連れて後退してくれ。」

壱「は、はい！」

樟美「天葉姉様！行きましょう！」

天葉「・・・。」

依奈「・・・。」

壱達は2人を支えると後ろへと歩き始めた。

それを確認した彼は槍を大振りして少女達を弾き飛ばす。

彼は体勢を崩した少女を一瞬だけ確認するとバックステップで後退し彼女達のあとを着いていく。

壱「あと少しです！頑張ってください！」

樟美「天葉姉様！しつかり！」

依奈「・・・。」

天葉「・・・。」

壱達は懸命に依奈達へ声を掛けるが2人からは反応はない。

2人の身体は四肢の欠損を除くと多数の浅い傷があるだけでありその傷からは出血もしていない。

しかし欠損した四肢の辺りは血で汚れていたため出血多量の危険があるため命に関わる可能性があった。

そのため3人は全速力で森の外へと目指す。

樟美「そんな!？」

壹「・・・っ!？」

3人の進行方向の先にある木々の影から少女達が姿を現した。

蓮夜「そのまま進め！」

壹達は少女達を回避するために進行方向を変えようとするが彼の言葉を聞きその思考を放棄しそのまま前へと進む。

彼は叫ぶと共に彼女達の前へと出る。

少女へと向かって接近した彼は槍を横風に薙ぎ払うがそれは少女が持つCHARMにより防がれる。

防がれたことで動きを止めてしまった彼を唐突に背後の地面から生えたCHARMを握った腕が襲う。

彼はそれに気づいていないのか目の前の少女を強引に引き剥がすと一度槍を身体を軸に回転させながら前進し体勢を崩した少女へと叩き込む。

それにより目の前の少女の体は空を舞い離れた位置にある木に衝突する。

その時には彼の背後にCHARMの刃が迫っており彼を貫く寸前、地面から現れた少女のCHARMが横へと弾き飛ばされた。

その衝撃で腕が曲がるはずのない方向へと曲がった少女に彼は振り向きざまに回し蹴りを放つとそれは少女へと命中し先程弾き飛ばした少女と同じ木に衝突し倒れた。

少女達は再び動き出そうとするが、その木に何かが接触する。

それは振り返った鋭い刃でありそれは木を切断すると彼の方へと迫ってきた。

自身へと飛んでくる刃に対して彼は自身の持つ槍の石突を刃へと向けた。

刃はまるで吸い込まれるように石突へと迫ると衝突それに伴い甲高い金属音と共に鈍い音が辺りに響く。

すると刃はその形を変え石突に接続された。

その刃と接続された槍……大鎌が彼は身体は軸をして回転させ迫ってきていた少女を弾き飛ばすと構えをとる。

すると先程少女達が少女した木がズレ少女達は木の下敷きとなった。

蓮夜「……やっぱりダメか、」

彼は辺りを確認すると大鎌を振るうと刃が分離され少女達へと飛んでいく。

それは彼女達の持つCHARMを刈り取りその衝撃により数人の少女はその手が折れたり欠損したりするが少女達の半教程は煙と共にその形を元へと戻した。

蓮夜「2人とも……道を作るから急いで外へ、」

壱・樟美「は、はい!!」

彼は彼女達の返事を聞くと大鎌を前方へと投げた。

投げた大鎌は再び分離し、その刃はこちらへと襲い来る少女達を襲う。

刃に触れたものは切り裂かれるか弾かれ、刃の通った跡に道ができ、壱達は依奈達を連れて木々の奥へと消えていった。

蓮夜「……さすがにここから先は見せられないからね。……広

範囲系は4人を巻き込むかもしれないし、」

彼は彼女達が見えなくなったことを確認するとそう呟く。

その間にも少女達はどんどんと距離を詰めて来ていた。

それを見ながら彼は懐へと両手を入れる。

ついに彼の首へと2人の少女の刃が届く寸前、彼の姿が消えた。

蓮夜「……これが1番かな?」

少女達の視界から消えた彼は数瞬後彼女達の後ろへと姿を現した。彼の手には大振りのナイフが握られておりその刃は鈍い光を放つ。彼を見つけた少女達は彼へと襲いかかろうとするがその最後列の2人・・・彼へとCHARMを振るつた2人の首が落ちた。

蓮夜「やっぱり再生するか・・・だけど再生しない個体もいる?・・・条件があるのか?」

首を落とされ体が崩れ落ち始めた2人だが、その体は不自然な挙動で立ち上がり片方は煙と共に再生しもう片方は頭部がないまま彼へと駆け出す。

それを観察する彼は不思議そうにそれを確認するがその目には油断はなく鋭い視線で少女達を視認する。

蓮夜「・・・再生するなら、」

彼は重力に身を任せるように身体を前方へと倒す。そのの身体が地面へと上達する寸前。

蓮夜「何処かに核でもあるのかな?」

彼の姿が消失する。

それと同時に1人の少女の腹部が切り裂かれる。切り裂かれた少女の上半身は地面へと力無く落ちるが下半身は直立し続ける。

蓮夜「中央じゃない?それとも条件?」

彼は少女の状態を見向きもせず他の背後標の少女的へと左手のナイフを投げる。

投げられたそのナイフは目視していないはずの少女の首へと命中しその先端は鈍い音と共に少女のうなじから姿を現した。

しかし少女はそれすらも気にすることなく彼へ獲物と襲いかかった。

少女の大振りの一撃を半身になることで躲し少女の背後から現れた別の少女が目の前の少女の体ごと彼を両断しようとCHARMを薙ぎ払う。

その一撃は少女の体を両断するがやはり少女は何事も無かったかのように再生した。それを彼は上方へと飛び上がり身体を丸めるように前方へと回転することで躲し、

蓮夜「とりあえず法則性から探るか、」

回転の勢いを利用し懐から強引な動きで取り出した棒状の何かを後方の少女標的へと投げつける。棒状の何かは彼の手を離れた瞬間肥大化し小ぶりのエストックへと変化それは標的へと飛んでいきそれは少女の胸部へと深々と突き刺さる。

彼は投げた動きから体勢を直し踵落としの要領で少女の首に刺さるナイフを踏み抜く。するとナイフは強い力により刃を上方へと向けていき少女の首が飛んだ。

蓮夜「胸部・・・心臓か、」

彼は空中で体勢を整えながら少女達の状態を確認する。

首のない少女は既に再生を始めておりあと数秒で再生するだろうがその背後の少女はその形を崩し始めていた。

それを確認した彼は辺りを見渡す。

その時には既に彼の背後に別の少女がおり手に持つCHARMを振りかぶっており目の前の少女も頭部を生成させながら彼へと向けてCHARMを振りかぶった。

蓮夜「・・・。」

その時彼の瞳が変わる。

そこには何も感情はなくてただ静けさのみが存在していた。

彼は地面へと降り立つとすぐに左足を軽く振り上げると、そのまま重心を前方へと傾け右腕を後ろへと引いた。

しかしその時には前方の少女のCHARMが彼へと迫っておりそれは瞬きする間もなく彼へと到達するが彼は動じずに迎撃の構えをとる。

刃が彼の方へと触れた瞬間、軽い金属音とともに少女のCHARMが弾かれた。

彼の肩部には先程彼の投げたエストックと同じものが存在していた。

それと同時に目の前の少女の両肩と心臓付近にエストックが突き刺さった。

胸部のものは浅いが両肩のものは深く突き刺さっておりそれは少女の動きを制限した。

それと同時に背後彼迫る少女と彼の間在先程まで少女に刺さっていたものと同じく形のナイフが跳ね上がってくる。

ナイフの柄は吸い込まれるように彼の右肘と衝突しそれは背後の少女の胸部へと深々と刺さった。

彼はそれを確認することなく右肘と連動させ左腕を前へと突き出す。

それは前方の少女に刺さるエストックを穿ちエストックは少女の体を貫通した。

蓮夜「・・・またか、」

2人の少女の体が消失することを確認した彼が辺りを見渡すとそこには先程までいた少女達の姿はなく一帯を静寂が支配していた。

蓮夜「2人と、」

彼が彼女達の元へと合流しようと走り出した時、

樟美「きゃあああああ!!」

樟美の悲鳴が辺りに鳴り響いた。

それを聞いた彼はその音の元へと駆け出す。

そして森を進み彼が目にしたものは、

壱「依奈様!どうしたんですか!?!落ち着いて!」

依奈「……。」

樟美「天……葉姉……様……、」

天葉「……。」

暴れるようにのたうち回る依奈を抑える壱と、

天葉に首を締められる樟美の姿だった。



## ラスバレー1章⑮

蓮夜「……。」

彼の目の前にある光景、それは本来なら有り得ないものでありこの光景そのものが最悪を意味していた。

天葉「……。」

脚のないはずの天葉、だが彼女は立ち上がっていた。

彼女の目には生気を感じられず、その光を失った濁った目はただただ樟美のことを見つめていた。

元々足のあつた場所からは青白いモヤのようなものが伸びており、それが彼女の体を支えるようにして浮いている。

そして手には彼女のシルトである樟美の首が握られており指が食い込むほどに強く握りしめられている。

樟美「……天葉姉様……どう、して？」

樟美彼女の手を抑えながら弱々しい声で天葉へと呼びかけるが彼女からの反応はない。

壱「依奈様！どうしてしまったんですか!?!依奈!!」

依奈「……。」

依奈は天葉とは逆に地面に横たわっているが足をばたつかせ暴れている。

それを壱は必死に抑えるが依奈の力が強いのか彼女の身体自体も大きく揺れていた

天葉「……。」

樟美「お願い・・・正気に、」

樟美は瞳から一粒の雫を零すと、その身体から力が抜ける。それにより阻むものなくなった天葉はの指がより深く食込み、

蓮夜「・・・ごめんね。」

樟美の首にかかっていた圧力が消えた。

樟美「・・・カハツ！」

空気を得られるようになった彼女の肺は酸素を求め一心不乱に空気を吸い始める。

それにより意識が回復した彼女が霞んだ視界で天葉のことを見る。

そこには糸状の光で拘束された天葉とその首に太刀を添える蓮夜の姿があつた。

樟美「黒鉄さん!?なにを!？」

蓮夜「・・・。」

樟美は今起きていることを理解出来ず一瞬硬直してしまうが、すぐに正気に戻り彼へと問いかける。

しかし彼は彼女の言葉に反応を示さない。

彼の目には感情がこもっておらずその視線は目の前の少女にのみ注がれていた。

その瞳はただただ冷たくそこからは彼が何を思っているかは分からない。

しかし樟美にはこれだけはわかった。

樟美「黒鉄さん・・・まさか、」

蓮夜「……。」

樟美「ダメです！天葉姉様は、」

蓮夜「……もう間に合わないよ。」

樟美「えっ……？」

ここで彼は初めて口を開く。

その声はただ平坦でありその中には感情が入っていない。

蓮夜「こうなってしまったらもう助からない。」

樟美「分からないじゃないですか！」

蓮夜「……もう人ではなくなっていたとしても？」

彼の口から紡がれた言葉、それは彼女には分からなかった。

樟美「人ではない？」

蓮夜「さつき襲ってきた少女達と同じだ。……わかっているんだろう？」

樟美「……。」

その言葉に彼女は口を閉じてしまう。

言い返せないのだ。

蓮夜「もうアレ等と同じ……何かに作り変えられているんだよ。」

樟美「……そんなこと、」

蓮夜「……あるんだ。今はまだ人としての部分も残っているが……、」

樟美は彼の言葉を聞くと壺の方へと視線を向ける。

そこには暴れる依奈を必死に抑える壺の姿があり、それはいつもの彼女達ではありえない光景だった。

蓮夜「……だから俺はせめて人であるうちに……人でなくなる

前に、」

そう言うのと彼の手に力がこもる。  
その刃はどんどんと天葉の首筋へと近づいて行く。

蓮夜「ごめんな、天葉……。」

本当にこれでいいのか？

この言葉が樟美の頭の中を駆け巡る。

確かに今の彼女はいつも天葉姉様の彼女ではない。

そして彼の言う通り今の2人は余りにも似すぎているのだ。

あの光を失った濁った眼が、

そして少女達の中には百合ヶ丘の制服も存在した。

つまりこれは彼の言う通り2人の身体は今の先程の少女人ではない何かに変化し

つつあるのだろう。

蓮夜「……俺にはこれしかできない。」

だとするならばアレは感染する可能性があるということだ。

もしも広がってしまえば手遅れになってしまう。

ならばこれが最前の手なのだろう。

大を救うために小を切り捨てる。

今まで人類が繰り返し返してきた方法だ。

蓮夜「せめて……。」

しかし本当にそれでいいのかだろうか？

確かにそれが最善なのだろうか本当に正しいのだろうか？

樟美は彼へと視線を向け直す。

やはり彼の表情は変わっておらずその手の刃は徐々に彼女の首筋天葉へと迫っていた。

樟（・・・あれ？）

しかしここで彼女は違和感を感じる。

まるで何かが決定的に違うような、

まるでカーテンを開けると空の色が緑だったような、決定的な違い。

その発生源はどこなのだろうか？

彼女はその原因を探す。

そして見つけた。

それは彼の持つ太刀・・・それを握る手であった。

彼の手が震えているのだ。

まるで、

蓮夜「・・・君が獣になる前に、」

彼自身がこの結果を拒んでいるように、

樟美（もしかして！）

彼女は思い至る。

彼自身が1番この事態信じられていないのではないかと、

天葉を通じて顔見知ってはいるが、彼女自身は彼との接待は少ない。

それでも彼がやさしいことはわかるのだ。

よく天葉に振り回されている彼を彼女はよく見ているのだ。

彼は普通なら嫌気がさしてもおかしくない程に振り回されているが溜め息をついたり説教をすることはあるが、それでも彼女の我儘を聞いていた。

蓮夜「・・・せめて君の手が赤く染まらない内に、」

そんな彼が本当に何も感じずに彼女のことを手にかけられるのだろうか？

蓮夜「……俺が、」全ての原因

樟美「ダメー！！」

彼女の身体は彼女の意志とは関係なく動いた。

彼が刃を振り抜く寸前、天葉を押し倒す形で倒れる。

天葉は拘束されているため倒れず、樟美の頭上を刃が通過した。

蓮夜「樟美さん……。」

樟美「だめです。……天葉姉様は天葉姉様なんです。」

蓮夜「……。」

樟美「天葉姉様！戻ってきてください！」

天葉「……。」

樟美「約束したじゃないですか！絶対に帰ってくるって！」

天葉「……。」

樟美「なのに……帰ってきて、天葉姉様……私をひとりにしないで、」

樟美の瞳から雫が零れ落ちる。

それは彼女の頬を伝い天葉の頬へと落ちた。

天葉の頬へと落ちた雫は彼女の頬を伝い彼女の口へと入り込んだ。

それを眺めていた彼だが意を決したのか彼は再び太刀を構える。

それを見た樟美は身体のを抜き天葉へと身体を預けた。

樟美「……黒鉄さん、」

蓮夜「……。」

樟美「私も一緒をお願いします。」

蓮夜「……。」

樟美「私は天葉姉様がいなくてダメなんです。・・・壱ちゃんには可哀想なことをしようとしていると思うけど、」

蓮夜「・・・。」

樟美「私は天葉姉様と一緒にいいんです。」

蓮夜『・・・ごめんな。』

樟美「いいえ、むしろごめんなさい。黒鉄さんに辛い思いをさせて、」

樟美が目を閉じるのを確認すると彼はその手に持つ刃を振り下ろした。

それは吸い込まれるように彼女達の首筋へと落ちていく。

目を瞑っているがレアスキルにより把握できる樟美はその凶刃に對して恐怖を感じなかった。

その刃には殺意などは籠っていないなかったのだから、

それに籠っていたものそれは、

彼女がそう考えているうちに刃は彼女の首筋へと迫る。

そしてあと数瞬で彼女へと到達する所までできたその時、

蓮夜「っ!?!」

彼の刃は何かによって止められた。

天葉「・・・ワたしノカワイイクスミに、なにシヨウとシテルノヨ、」

そこには力なく倒れる身体を鞭打つように腕に握られたCHARMで樟美へと迫る凶刃を防ぐ天葉の姿があった。

## ラスバレー1章⑩

天葉「……れンヤ、これはどうイウじョウキョウヨ。」

蓮夜「天葉……お前、意識があるのか？」

天葉「そんなことヨリアンた、クスミになにシヨウトしてタノ、  
蓮夜「……。」」

彼は天葉の言葉に驚愕の表情を浮かべながら彼女を見つめる。

天葉「ソレにシャベリニクイワね。……ワタし、たシカあのコたちニ、」

樟美「天葉姉様!!」

天葉の意識が戻ったことにより樟美は涙を流しながら彼女へと飛びつく。

天葉「く、クスミ……どうシタの……うまくうゴカナイわね、」

天葉は自身の状態に困惑しながら唯一自身の意思で動かすことができる右腕で樟美を抱き締める。

天葉「ナカないノ、ほう、わたシはココにいるワよ。」

樟美「天葉姉様!天葉姉様!天葉姉様!!」

樟美は彼女の声を聞く度にその涙の勢いを増していきそれをどうにかしようと天葉は彼女を撫でる。

しばらく撫で続けると樟美も泣き止み、それを確認した天葉は彼女へと視線を向け直した。

天葉「ハナしがトグレタケれど、どうイウじョウキョウなのかしら、」



蓮夜「天葉は今自身の現状を理解しているのか？」

天葉「どうイウことよ、ミギていがいウマクうごカナイけど・・・  
どういウことよ、」

彼女は彼の言葉に反応し自身の体を見渡す。

すると彼女の足があるはずの場所には青白い霞が存在するのみであつた。

それを見て彼女の口が開いたまま塞がらず、その視線は霞へと向けられていた。

天葉「コレって、」

蓮夜「単刀直入に言うと、今の天葉はあの子達と同じ存在になりかけている。」

彼の言葉を聞いた彼女は視線を樟美へと向け直した。

彼女は微かに嗚咽を零しながら自身のことを見つめていた。

そんな彼女の首には痣があり、それは手の形をしていた。その手は細い女性の指のようで、

天葉「もしかシテ、ワタしが、」

樟美「天葉姉様のせいじゃないです。・・・良かった、本当に良かった、」

蓮夜「・・・いや、まだ終わってない。」

樟美「えっ？」

天葉「そうヨネ、」

彼の言葉を聞いた樟美の顔がくもる。

その表情からは不安が滲み出ており、視線は彼と天葉を歩き来する。

蓮夜「・・・今は意識があるけど多分長くは、」

樟美「そんな・・・。」

天葉「そんなコトだろウトオモったワよ、」

樟美の身体から力が抜け崩れ落ちる。

そして彼女は俯くとその瞳から光が消えた。

それを見ている彼は1度、眼を強く閉じる。

そして1度深呼吸をするとその瞳を開いた。

彼の瞳は光を発しており、そこには何かの模様なようなものが描かれており、その瞳には決意が宿っているように見える。

樟美「黒鉄さん!？」

蓮夜「天葉・・・樟美さん、貴方達に覚悟はあるか？」

樟美「・・・覚悟？」

天葉「どういウコトヨ、」

蓮夜「天葉と依奈を直せる可能性ができた。・・・だけど成功するかは分からないし、始めてしまえば後戻り出来なくなる。・・・4人とも命を狙われる可能性すら有り得る。・・・それでも実行する覚悟はあるか？」

天葉「・・・。」

彼の言葉に天葉は口を閉じてしまう。

樟美の命に関わるかもしれない。

彼女自身、樟美が危険に晒されるならやめた方がいいと考えるが、それと同時にとある欲望が生まれた。

樟美シルトと一緒にいたい。

しかし、自身の命のためにシルトを危険な目に合わせてしまえばシユツツエンゲル失格だ。

そんな葛藤に彼女が襲われていると、

樟美「やります。」

天葉「クすみ・・・。」

樟美の真剣な表情で放ったその言葉に、隣にいる天葉は不安そうな声をあげる。

天葉はどうかにか止めようと考えるが、しかし彼女のその瞳には確固たる意思が宿っており決して曲がらないことが感じ取れた。

壺「助かるのですか？」

彼女がそう思い悩んでいると横から壺の声が聞こえる。

壺「依奈様は・・・助かるのですか？」

蓮夜「・・・确实ではないが、可能性は十分にある。」

壺「それならやります。・・・これは私達が招いた結果ですから、」

天葉「いちまで・・・、」

樟美に続くように告げられた壺の言葉に天葉天を仰ぐ、

天葉「ほんトウニばカよ、ふたりとモ、」

彼女はそう呟くと彼へと視線を向け直す。

天葉「わかツタワ、やりまショウ、・・・だケド、これダケハやくソクシテ、・・・ゼツたいにむりだけハ、しなイデ、」

樟美「分かっていますよ。天葉姉・・・だって、何かあつたら一緒にいられませんから、」

壺「私もです。・・・私が帰らなかつたら悲しむ人もいますから。」

そう言うとき壺は依奈へと視線を向ける。

依奈はまだ暴れているが先程に比べ落ち着いておりその動きは緩慢なものとなっていた。

蓮夜「本当にいいんだな？」

樟美・壺「はい！」

天葉「このコたちがガガンバルのだから、ワタしがやらなクテどうスルノヨ、」

彼は彼女達へと再び問い掛けるも、彼女達の意味は固くその瞳には強い信念がこもっていた。

蓮夜「・・・わかった。」

彼は眼を瞑る。

蓮夜「ならここだと危険だから、」

眼を閉じた彼は深く深呼吸をすると再び眼を開く。

蓮夜「君達にはこちらへと来てもらうかな。」

彼がそう呟くと辺りが白い光に包まれる。

樟美と壺はそのあまりの眩しさに目を閉じてしまう。

そして数秒経ち光が落ち着いたことを確認すると2人は目を開けた。

壺「・・・えっ？」

樟美「ここは・・・？」

2人の目にした光景それは何処までも真っ白な白紙の世界だった。

## ラスバレー1章①7

そこは何も無く白く染め上げられた場所だった。

地面どころか音もなく空もない。

その中で5人だけが色を持ちその存在感を放っている。

蓮夜「さて、ここなら邪魔は入らないな。」

壱「ここは何処なのですか？」

樟美「・・・異界の門？」

天葉「いいエ、ちがウわネ、」

蓮夜「ここは俺が造った場所と思ってくれればいい。」

彼はそう答えると右手をそつと持ち上げた。

掌を上に向け身体の横へと持ち上げた手へと彼は視線を向ける。

蓮夜「・・・時間がないから始めようか。」

彼がそう呟くと掌の周辺の景色が歪み不明瞭になる。

蓮夜「・・・来てくれ、夢結。」

彼が呟いた言葉に彼女達は首を傾げる。

何故彼女の名前を呼ぶのか？

彼女の今この場に居るはずがなく百合ヶ丘を離れ鎌倉府に居るはずだ。

彼女達がそう考えていると、不明瞭になっていた景色が晴れる。

壱「夢結様!？」

樟美「・・・なんで？」

天葉「・・・、」

歪みが晴れた場所には先程までいなかった夢結の姿があり、彼女の左手は彼の右手の上に添えられておりそれを支えにするようにゆっくりと地面へと降りていく。

夢結「蓮夜？・・・急にどうしたのかしら？・・・そういう事ね。」

彼女は音もなく地面へと降り立つと彼へと問いかける。

彼へと視線を向けた彼女は周囲を見渡すと納得したような表情になる。

夢結「何を手伝えばいいのかしら？」

蓮夜「2人のこととアレを引き上げてくれるかな？」

夢結「わかったわ。それで2人の方は固定すればいいのね。」

蓮夜「うん、それでアレは外へ・・・大変かもしれないけどお願いね。」

夢結「問題ないわ。・・・けれどその後は、」

蓮夜「分かってるよ。あとは任せて、」

2人は手早く会話を終わらせると天葉達の前へと移動する。

蓮夜「樟美さん、壱さん、2人は天葉達の手を握って彼女達に呼びかけて、」

樟美・壱「はいー！」

彼の言葉を聞き終わる前に2人は即座に行動に移した。

彼女達は2人の手を握るとそれを額に当て眼を閉じる。

それを確認した夢結は天葉達の間へと移動した。

彼女の手袋から淡い光が漏れだし掌から白と黒の鎖がそれぞれ2本ずつ飛び出す。

夢結「制約・・・『私へ白井 夢結』は2人の存在を縛ることでの

世界に繋ぎ止める。』」

彼女がそう呟くと左手から飛び出した白い鎖が天葉達の中へと入り込む。

その鎖は彼女達の身体の中へと伸びていき何かを探すように蠢く。そしてしばらく動き続けると鎖がピンと張り彼女の身体から複数の鎖が飛び出し空中に波紋を出して固定される。

夢結「契約：．．『私へ白井 夢結』は2人に巢食うモノを取り去ることで2人に自由を与える。』」

続いて彼女が呟くと今度は右手の黒い鎖が2人の中へと入り込んだ。

鎖は先程と同じく何かを探すように動き続けると、鎖がピンと張る。

それを確認した夢結は黒の鎖を思いつきり引つ張った。

すると鎖はどんどんと2人の身体から引き抜かれていき彼女達の体内から鎖の先端が飛び出す。

鎖の先端は青白いモヤを貫いとおり、そのモヤは怪しい光を放ちながら不気味に点滅していた。

夢結「蓮夜！」

彼女が彼に向かって叫ぶと彼女の後ろにいた彼がモヤへと向かって飛び出す。

彼はモヤに接近すると太刀を抜き放ち両断した。

切り裂かれたモヤは徐々にその形を失いその存在を薄め消えていった。

蓮夜「夢結！もう少し頼む。」

夢結「ええ！」

彼は太刀を地面に突き立てると両手で2人に刺さる白い鎖を掴むと結晶が彼の手を覆った。

その結晶は鎖を伝い天葉達へと伸びていき彼女達へと入り込む。すると彼女達の身体から・・・手足のある場所から結晶が生えだした。

それは徐々にその形を変えていきながら伸びていく。

しばらく増殖と変形を続けていた結晶がその活動を止めるとそこには結晶でできた手足が存在していた。

それを確認した彼は鎖から手を話すと鎖も彼女達の中から抜けていく。

彼女達の体内から鎖が完全に抜けると、結晶が砕けそこから失ったはずの彼女達のでありがその姿を表す。

その手足は青白く冷たかったが、徐々に赤みを取り戻し熱を帯びる。

蓮夜「2人とも、終わったぞ。」

彼の声を聞き樟美達は目を開ける。

彼女達の視界に写し出されたものは、静かに寝息を立てる天葉達の姿でありそれを見た彼女達の瞳から涙が零れ落ちた。

樟美「天葉姉さま!!」

壱の身体から力が抜け座りこむ横で樟美が天葉へと抱きついた。

天葉「痛った!?!樟美!?!」

その痛みで目を覚ました天葉はその状況に目を白黒させる。

だが樟美はその事に気付かず天葉を強く抱きしめた。



天葉「痛い！痛いって、樟美!!」

天葉は樟美を止めようと声をかけるが彼女は止まらない。それを見て諦めたような表情になった天葉は空を見上げる。

天葉「・・・そういう事ね。・・・もう、樟美は甘えん坊なんだから、」

落ち着いた天葉は思考がまとまると共に現状を理解するとそつと彼女の頭をそつと撫でる。

すると樟美は落ち着き抱きしめる力が弱まる。

その後も撫で続けると樟美は泣き疲れたように寝息を立てた。

それを確認すると彼女の頭を自身の膝に乗せ、彼等へと視線を向ける。

天葉「・・・それで、さっきのはなんだったのかしら?」

蓮夜「・・・。」

天葉が放ったその言葉、

それは彼女達を核心へと進ませる言葉呪いだった。

## ラスバレ1章⑱

6人以外に何もない白い世界、そこから完全に音が消える。その静寂の中、天葉はただ彼へと視線を向け続けた。

蓮夜「……。」

天葉「さっきのはなんだったの？……あの子達、本当なら動けるはずのない怪我なのに何も感じてないかのように動いていたわ。……あんなの普通じゃない……。」

蓮夜「……。」

天葉「それに私も依奈もおかしくなってた……それに、」

そう言うとな彼女は視線を下へと向ける。

そこには安心した顔で眠っている樟美の姿がありその下には失ったはずの両脚が存在していた。

天葉「私の足、それに依奈の腕だってさっきので無くなっていたはずよ！それなのに戻ってる。……こんなことリイだとしても不可能なのに……。」

蓮夜「……。」

彼女は叫ぶように彼に向かって問いかけるが彼は口を開かない。

天葉「貴方は何をしたの？……それに夢結も……。」

夢結「……それは、」

彼女の悲鳴にも似た叫びに夢結が答えそうになるがそれを蓮夜が手で制す。

蓮夜「夢結は帰っていてくれ、……梨璃さん達も心配するだろうか。」

夢結「・・・わかったわ。」

夢結は1度天葉を見るとその身体は不明瞭になっていきこの世界から姿を消した。

蓮夜「・・・すまない。」

そこで彼の口が開く。

彼の口から紡がれた言葉、  
それは謝罪だった。

蓮夜「・・・今は言えないんだ。」

天葉「・・・どういことよ?」

蓮夜「準備がいる。」

天葉「・・・準備?」

蓮夜「ああ、・・・だから言えない。」

彼の言葉を聞いた彼女は何かを考える素振りをする。と再び彼へと視線を向ける。

天葉「言えない理由があるのね。」

蓮夜「そういう事だ。・・・言う側も言われる側もここではリスクが高い。」

天葉「ここではね。・・・つまりここでなかったら言えるってこと?」

蓮夜「ここだけってわけじゃない。話すにも場所を用意しないとまずいからな。」

天葉「わかったわ。助けて貰ったんだしそこまで無理強いは出来ないからね。・・・今は聞かないけどちゃんと説明しなさいよ。」

蓮夜「わかってる。・・・けど、」

天葉「誰にも言うな、でしょう? わかっているわよ。」

蓮夜「・・・助かる。・・・それじゃこれから森の外に送るから救  
援を呼んでくれ。」

天葉「そのために怪我は残したのね。」

蓮夜「そういう事だ。すまないな。」

天葉「これくらい慣れてるから平気よ。」

2人が言葉を交わし終わると視界が白い光に染まる。

そして光が収まるとそこは先程までの白い世界ではなく草木生い  
茂る草原だった。

天葉が辺りを見渡すと依奈達が寝息を立てており、背後にはあの森  
が見える。

そして彼がいないことを確認すると大きいため息を吐き、天葉は自  
身の端末を操作し始めた。

蓮夜「・・・。」

日も落ち暗くなった部屋で彼はただ座り込んでいた。

彼は微動だもせず何を喋らずにただ下を見続ける。

月明かりもなく数cm先すらも視認できない部屋に存在するから  
はただそれだけだ異様さをかもちだしていた。

彼のいる部屋・・・彼の自室にはベットがあるだけでありそれ以外  
には収納棚などの生活に必要なものしかない。

そんな物静かな部屋で1人彼は何かを考え続ける。

夢結「少しいかしら?」

彼が思考の底に沈んでいると突如ドアをノックされる。

ドアの外からは夢結の声が聞こえており、それは音の無い部屋に響  
き渡る。

しかし彼はこれに反応を示さない。

夢結「……入るわよ。」

彼が反応を示さないため断りを入れながら彼女は部屋の中へと入ってきた。

彼女は真つ暗な部屋を見渡すと先の見えない中彼の元へと迷うことなく歩いていく。

そして彼の元へと辿り着くと彼女はそつと彼の横へと腰掛けた。

夢結「今日のことを気にしているの？」

蓮夜「……。」

彼女は再び彼に向かって声をかけるがやはり反応がない。

夢結「確かに彼女達を巻き込んでしまったけれど、貴方は最善を尽くしたわ。」

蓮夜「……。」

返事は帰って来ない。

けれど彼女は彼へと優しく問いかける。

彼女には彼がこうなっている原因がわかっているのだ。

彼の感じている感情……それは後悔だ。

夢結「それに2人とも助かったじゃない？」

彼は天葉達を巻き込んでしまったことを後悔しているのだろう。それが彼の心を蝕んでいる。

夢結「貴方がいなかったら2人とも……。それに樟美さん達だつて、」

だから彼女は彼へと言葉をかけ続ける。

彼の心が壊れないように、

彼が自身の意思で歩んで行けるように、

それが今まで、彼女が2年の間、彼にして貰ったことなのだから、

夢結「今日のことは仕方がなかったのよ。」

蓮夜「・・・違う。」

夢結「・・・ごめんなさい、聞き取れなかったわ。もう一度話して貰えるかしら？」

ここで初めて彼の口から言葉がこぼれる。

しかしその声は掠れており彼女には何を言っているのか聞き取れなかった。

蓮夜「違うんだ!!」

静寂が支配していた部屋に、彼の悲鳴にも似た絶叫がこだました。

## ラスバレー1章①9

暗闇と静寂が支配していた部屋に悲鳴に似た絶叫が響き渡る。

蓮夜「違う！しょうがなくなる！」

夢結「れ、蓮夜!?!」

蓮夜「僕がああの方に仕留めておけば！あの時にもっと早く辿り着いていれば……！」

彼は勢いよく立ち上がると頭を抑えながら蹲る。

彼の突然の行動に驚いた彼女は一瞬呆然としてしまいがすぐに我に返り彼の側へと近寄る。

蓮夜「……いつもなんだ！……いつも僕は間に合わない！」

夢結「どうしたのよ!?!蓮夜!!」

彼を落ち着かせようと、彼女は必死に呼びかけるが、彼は聞こえておらず落ち着く様子もない。

蓮夜「……夢結の時も！……姐さんの時も！」

彼は自身の喉を壊さんばかりに叫び、

彼の叫び声は大きくはあるが、その中に寂しさを感じた。

蓮夜「……今回も！……それに、」

ここで彼の様子が落ち着き、その声にはより明確な感情が感じ取れた。

その感情は、

蓮夜「……父さんと母さんの時も、」

夢結「・・・貴方は、」

それは恐怖だった。

彼は、今まで失い続けてきた。

大切な人の危機に彼は1度も間に合ったことがないのだ。

ほんの少し早く異能に目覚めていれば、

ほんの少し早く超越者の存在を知れば、

ほんの少し早くたどり着ければ、

そう少しなのだ。

この少しの時間が彼へと恐怖を与える。

いつも間に合わなかったから、力を求めた、

いつも間に合わなかったから、知識を求めた、

いつも間に合わなかったから、早く行動力を求めた、

しかし彼は間に合わない。

力を求めれば、全てが終わった後に力を得る。

知識を求めれば、後戻り出来なくなってから情読を得る。

行動力を求めれば、早いことが裏目に出て本当に大切な時に間に合わない。

このように彼は恐少し怖何かに囚呪われているのだ。

だからこそ彼は自身を責める。

どうしても自身を責めずには居られない。

蓮夜「もう少し早く・・・そうすれば夢結に辛い思いを、  
夢結「・・・」。」



彼は想像してしまったのだろう。

また夢結大切な人が消えてしまうことを、

それが彼を蝕み続ける。

やっと訪れた日常安らぎを失うことを恐れて、

やっと見つけられた道未来を失うことを恐れて、

やっと手に入れた幸せ最愛の人を失うことを恐れて、

今まで諦めていた全てを取り戻してしまったからこそできてしまった心の歪み。

それは取り戻したものが増える度に大きく強くなっていく。

蓮夜「僕がしつかりしないと、……もう嫌なんだ！失いたくないよ。」

夢結「……蓮夜。」

蓮夜「もう1人はやだよ。……怖いよ……。」

そんな彼を見た夢結は動けなくなる。

どう声をかけてあげればいいのか？

今まで声をかけられるだけだった彼女にはそれが分からない。

いつも彼女は失う側であり与える側ではなかったからだ。

彼は彼女が怯えていた時、ずっと支えていてくれた。

蓮夜「……だから失敗なんかできないんだ。……もう間違えは

許されない。」

夢結「……蓮夜！」

彼女は強く彼を抱き締める。

どれだけ突き放そうと彼は何も言わずにただ支えてくれていた。

だから今度は彼にもしてあげよう。

彼女にはそれしか思い浮かばない。

夢結「無理をししないで、……大丈夫よ、私は決して貴方を1人にし

ないから。」

蓮夜「……。」

彼女は声を濡らしながら彼を抱き締めた。

その瞳からは雫が零れ落ち、抱き締める腕は大きく震える。

彼の苦しむこんな姿を見たくない。

しかし彼は蝕まれ続け、今も苦しみ続けている。

それが彼女には耐えられなかった。

本当に泣きたいのは彼なのだろう。

けれど彼は涙を流せない。

今まで泣くことすらも忘れていたのだから、

だから彼の代わりに涙を流す。

きっとそれは何の解決にもならないがそうしなければいけないと  
感じたから、

蓮夜「……なんで泣いてるの？」

夢結「……悲しいからよ。」

蓮夜「……僕のせいなの？」

夢結「……いいえ、違うわ。」

蓮夜「やっぱり僕はダメなんだ。」

夢結「……違うのよ。」

蓮夜「君を悲しませたくないのに……僕じゃ」

夢結「貴方が苦しんでいることを気づけなかったことが悔しくて……それなのに何もしてあげられなくて、……それなのに私のことを心配してくれる貴方をいる姿を見ていると悲しくなるの、」

蓮夜「……。」

夢結「貴方には幸せになつて欲しいのよ!……貴方の幸せを奪い続けていた私が言えることではないことは分かっているわ。けれど、私は貴方に今まで苦しんで来た以上に幸せになつて欲しいの!」

それこそが彼女が持つ本当の願い。

彼が幸せになること、

彼女は彼の幸せを奪い続けることで生きていた。

本当なら既にこの世に居ないはずの彼女を彼は自身を生贄にすることでのこの世界に彼女の存在をとどめ続けていたのだ。

存在維持の代償がただ1人の少年の幸せを奪い続けること満たされるのだろうか？

その答えは否、

彼は幸せだけでなく彼の全てを捧げることで1人の少女を繋ぎ止める続けていたのだ。

記憶も感覚も感情も、

彼に残る全てを犠牲にすることで、彼は彼女を幸せにしようとした。

しかしその結果は彼女を苦しめるだけだった。

だから彼は自身を責め続けるのだろう。

彼は自身の全てが存在自体が無意味であると考えているから、

## ラスバレー1章②0

蓮夜「なんで君はそんなに僕を、」

責めないの？

彼はそう言おうとするが、それを彼女は強く抱き締めることで無理矢理止める。

夢結「・・・責めないの、でしょう？」

蓮夜「・・・うん、・・・だって！」

夢結「出来るわけじゃないじゃない、・・・貴方はもう十分に苦しんで来たのよ。・・・それなのに私は貴方を責めることなんてできないわ。」

蓮夜「苦しんで来たか、・・・僕は全然苦しんでないよ。それを言うなら夢結の方が、」

夢結「そんなことないわ。・・・だって私は貴方から貰った・・・いいえ、貴方から奪った幸せの中で生きてきたのよ。」

彼は自身のことに対して関心がない。

違う・・・関心がないのではなく、持つことができないのだ。

2年以上感情を失っていた彼には自身への関心などない。

それどころか生存本能すらも欠如しているのだ。

ただ一つ残っているものは白井<sup>大切な存在</sup> 夢結<sup>使命感</sup>への感情のみ。

夢結「・・・そうよね。・・・貴方は分からないのよね？」

蓮夜「・・・？」

夢結「・・・今までずっと削り続けて、」

蓮夜「・・・どうしたの？」

夢結「・・・もう擦り切れてしまっているのよね。」

彼女の声を言葉を紡ぐ度にその声を濡らして行く。

抱き締める力も強くなっていき彼の身体が軋み始めるが、それでも

彼女は離さない。

夢結「……ごめんなさい、こんなになつてしまうまで気づいてあげてあげられなくて、」

蓮夜「……なんで泣いてるの？」

彼女は彼の言葉で初めて自身が涙を流していることに気づくが、それと同時に胸を締め付ける悲しさもその強さを増す。

夢結「……ごめんなさい、……私にはこれしか言えないの、」

もはや嗚咽となつた彼女の声が部屋全体に響き渡る。

なんでこうなつてしまふまで気づいてあげられなかったのか？  
彼女の中を、この言葉が埋め尽くす。

夢結（ああ……そうなのね。）

ここで彼女は気づく、

彼女の中にある本当の思罪いを、

夢結（……貴方は、）

彼がこの2年間……いや、10年間の間抱望えていたものを、

夢結「……蓮夜、」

蓮夜「……なに？」

彼女は1度彼から離れると彼へと声をかける。

その声は先程までのように悲しみの混ざつたものではなく優しみのこもつた安らぎを感じさせる響きだった。

彼は彼女へと視線を向ける。

そこには先程まで泣いていた彼女はいなかった。

夢結「……今まで、よく頑張ったわね。」

蓮夜「……えっ？」

そこにあつたもの、

それは満面の笑みを浮かべた穏やか表情をした彼女だった。

夢結「どれだけ辛かったかは、私には想像も付かないけれど……  
苦しかったでしょう？寂しかったでしょう？」

蓮夜「……。」

夢結「誰にも相談出来なくて、全てを一人で抱え込み続けて、よく頑張ったわね。」

そう言うと彼女はゆっくりと彼を自身の胸に抱き、そつと頭を撫でる。

夢結「でも、もういいのよ？」

蓮夜「……やめて、」

夢結「……いいえ、やめないわ。」

蓮夜「……なんで責めないの？」

夢結「貴方はこれまでずっと一人で頑張つて来たのよ？責めることなんて出来るわけないわ。」

蓮夜「責めてよ！……僕には、……僕にはこれしか、」

夢結「分かっているわ。……分からないのでしょう？」

蓮夜「……!？」

彼の肩が大きく揺れた。

その反応に彼女は苦笑する。

夢結「それならこれから学んで行きましょう？……私にも貴方に

も時間は沢山あるのだから、

蓮夜「……。」

彼は自身を責めることしか知らない。

ならどうすれば彼を蝕み続けるものを取り除くことが出来るのか？

彼の言葉を受け入れる？

彼を蝕み続けるものを見て見ぬふりをする？

彼の言葉通り彼を責める？

いいや、そんなことでは彼をどうにかすることなんてできない。  
ならば、どうすればいいのか？

そんなこと簡単だ。

夢結「だから一緒に頑張って行きましょう。」

蓮夜「……本当に？」

夢結「もちろんよ。」

蓮夜「……どれくらいかかるか分からないよ？」

夢結「ええ、何日だって、何ヶ月だって……何年だって待つわ。」

蓮夜「どうしてここまでしてくれるの？」

夢結「……そんなこと分かりきっていることでしょう？」

彼女はそう言うのと再び腕を離す。

そして彼の頬に手の平を添えると、

夢結「……貴方のことを愛しているからよ。」

彼の唇へとそつと自身の唇を重ねた。

彼女が得た答え、

それは、彼の心を解かすことだった。

彼の心は失ったと共に閉ざされてしまったているのだ。  
まるで凍り付きたかのように、

だから彼女がしなくてはいけないこと、それは、彼の固まってしまった心を解かしてあげること、彼が閉ざしてしまったものを開きその中にある彼の心全てを前を向いて歩いて行けるように導いてあげることこそが彼女が出来る彼への最大の恩返しであった。

夢結「だからもう自分を責めないで、何かあっても貴方の隣に私がいるから、」

蓮夜「ゆ、夢結……。」

彼は上擦った声を上げながら彼女へと抱きついた。

それを彼女は抱きしめ返す。

その時彼の中で何かが染み渡る。

それは彼の奥底に眠るものまで浸透していき固まった心を少しずつ暖め始めた。

彼の心が完全に解かされるまでまだまだ時間がかかるだろう。

しかし、この時に真の意味で何かが動き始めた。



## ラスバレー1章

どうして彼女は悲しんでいるのだろうか？

それが彼の中で最初に思い浮かんだ疑問だった。

彼には彼女が悲しんでいる理由が分からない。

だった自分が遅れてしまったから起きた事実を述べただけなのに、自分はいつもギリギリで間に合わない。

それは彼が自身に対して思っていることであった。

大事な時に限って彼はいつも間に合わなかったり足りなかったりする。

美鈴の時だって、

両親の時だって、

今回だってそうだ。

もしも自身が気づくことができなければ天葉達は苦しまずに済んだはずだ。

そもそも彼が初めて接敵した時に仕留められていればそんな可能性すら存在しなかった。

なのになぜ今回の事態が発生したか、

それは自身の力が足りなかったからだ。

もしも自身の搜索能力が高ければ被害を出す前に駆けつけることができただろう。

もしも自身の殲滅力が高ければ初の接敵時に仕留め切れていたはずだ。

彼自身多くの力を生み出しそれを制御する訓練を積んできた。

だが、まだ足りない。

能力の幅も、制御能力も、練度も、

身体能力も、知覚能力も、知力も、

判断力も、思考力も、何もかもが足りない。

これではダメだ。

今日は上手くいったがまた同じく上手くいくとは限らない。

それに今日だって彼は迷ってしまった。  
彼女達と親しかったとはいえ即座にその刃を振り下ろせず躊躇ってしまっただから、

今回はそれが好機となったが次はどうなるか、最悪の場合彼女達は人でなくなる可能性すらあったのだ。

そうなってしまえば後戻り出来ない。

だから躊躇っては行けないのだ。

彼はこの2年間そうやってきた。

今まではなんの躊躇いもなくできていた行為、

しかし今日の彼には出来なかったのだ。

これは致命的だ、

このままでは、本当に大切な時にまた間に合わなくなってしまふ。

そうなってしまえば後戻り出来ない。

どうして躊躇ってしまったか、

それは分かっている。

その原因・・・それは心だ。

この2年間失っていたものを取り戻しそしてそれが躊躇いを生んでしまった。

だから彼は戻らなくては行けないのだ。

ただでさえいつも間に合わなかったから自身へと

しかしそれを見た彼女は悲しそうな表情で彼を見ていた。

どうしてそんな表情をするのだろうか？

それが彼には分からぬ。

自身の行動は正しいはずなのに、

何がいけないのだろうか？

何が足りないのか？

やはり彼には分からなかった。

自身の願望・・・それは彼女を幸せにすることだ。

そのために彼は自身の全てをかけた。

彼女へと危険が及ぶ可能性を全てを排除し、危害を加える可能性のあるものを全てを壊した。

この2年間徹底的に……、その過程で彼の手は紅く染まってしまったが、彼はそれに対して何も感じることはなかった。

それこそが最適であるのだから、だってそのはずだ、危険が及ぶ可能性を全て排除すれば彼女やその周りに以外が及ぶ可能性は低くなる。

そして危害を加える可能性のあるものを全て壊せば、そもそも可能性そのものを潰すことが出来る。

だから彼は違法施設へと侵入し可能性を排除し続けて来たのだ。

全ては彼女の幸せのために、そして躊躇わないことはその時に最初に学んだことだった。

躊躇っては望んだ結果は手に入れられない。

そんな当たり前のことすら出来ないでいる自分自身に、彼は落胆していた。

どうしてそんなことすら出来ないのかと、

だからこそ彼はもう一度捨てようとしているのに、それを彼女は認めない。

なんで止めるのだろうか？

なんで泣いているのだろうか？

蓮夜（だってこれは君のために、）

そこで彼は違和感を感じた。

なんで彼女を幸せにしようとしているのか？

あの時、力を得たのに彼女を助けることが出来なかったからか？

いいや、それは違うはずだ。

だって彼女は今自分の隣にいる。

確かに彼女の心臓は彼が新たに生み出したものであり彼女は1度

死んでいるが、それを負い目に感じているのなら幸せにするではおかしい筈だ。

普通なら守るが適切であり、幸せにするではない。

では、姐さんを失った彼女を見たからだろうか？

それも違う、

その時には自分はほとんどの感情を失っていた。

そんな中で幸せにするという単語が思い浮かぶだろうか？

それに自身がそう考え始めたのはあの時より前だ。

だからこれも違う。

それではなぜ自分は彼女白井 夢結を幸せにするという願望存在意義を持ったのだろうか？

彼は自身の記憶を遡る。

この違和感の原因を見つげるために自身の記憶を紐解く。

2年前の惨劇を、姐さんと出会った日を、

次々と記憶を遡り続ける彼は異能に目覚めた日ついに始まりの日にまで遡るがそこにも答えが見つからない。

さらに記憶を遡り続け諦めかけたその時、

・・・ゆゆはつらくないの？

・・・つらいよ。だけどわたしはなりたいの、

・・・どうして？

・・・わたしは、みんなをしあわせにしたいから！

・・・ならばくは、ゆゆをしあわせにするよ。ぼくにはみんななんてできないから、だからがんばるゆゆをしあわせにする。

蓮夜（・・・そうだ。）

彼は答えへとたどり着いた。

それは彼女の願いを聞いた自身が彼女へとした約束、

蓮夜（なんで、忘れてたんだらう。）

これが本当の始まりだった。

彼女の夢を聞いて、彼は彼女を支えると決意した。

蓮夜（・・・大事なことで忘れてたのか、）

その時は深く考えていなかったが、今の彼にはその会話はより鮮明により輝かしく感じられた。

この道は険しく苦難な道であることは明確だ。

だからこそそんな苦難の道に行く彼女だけを幸せにすることの出来る人間になりたかった。

それこそが彼の原点、  
存在意義願望では無い本当の願い、

たとえ記憶を失っても、感情を失っても、

心すら失っても、残り続けていた意思心だった。

本当の意味すら忘れさり、それでも消えなかったその思いが彼の中心心に染み渡っていく。

それは彼の中で閉じ込められていた感切り捨てたもの情を解き放ち彼の身体中へと広げていく。

その感覚に意識の遠のく彼を何かが優しく受け止めた。

彼が目には夢結がおり彼女は彼へと微笑みかけていた。

それを見た彼は安心したように彼女へと身を任せ、そのまま彼の視界は黒く染まった。

## ラスバレー1章☒

穏やかで優しい微睡みの中、  
何年も得ることのなかったその幸福の中から彼の意識は浮上する。

蓮夜「……。」

脳が上手く働かず思考が纏まらない中、彼は目を開けた。

白け良く見えない視界を目を正常に戻そうと目を擦る。

正常になった視界で周りを見渡すとそこは彼の部屋であり自身がベットのの上にいることがわかった。

重く感じる上体を起こしたその時部屋のドアが静かに開いた。

夢結「起きたのね。」

蓮夜「うん……。」

夢結「調子はどうかしら？」

蓮夜「特に異常はないと思うけど、なんだか少し身体が重く感じる……かな？」

夢結「起きてすぐなら仕方がないわよ。」

蓮夜「……そうなんだ、よく分からないや。」

夢結「……そうよね。」

蓮夜「これが普通なんだ……。不思議な感覚だね？」

夢結「……。」

蓮夜「……今まで眠る行為そのものをしていただけだったし……全然感覚も違うや……ただ悪い感覚ではないの……かな？」

夢結「……！」

蓮夜「ゆ、夢結!？」

彼の言葉を聞くと彼女は彼を抱き締める。

いきなりのことに目を白黒させながら彼は戸惑うがすぐに彼女を抱き締め返した。

夢結「・・・ごめんなさい、気づいてあげられなくて、貴方はずっと苦しんでいたのよね。・・・貴方は謝罪なんて求めていないことは分かっているけれど・・・今だけお願い、」

蓮夜「・・・いいよ。これは僕が自分の意思でしたことなんだ。・・・確かに辛いこともあったよ？だけどそのおかげで今があるんだから。」

夢結「・・・ありがとう。」

蓮夜「・・・だけど、」

夢結「どうかしたの？」

優しい声で返した彼は少し気まずそうな顔になり彼女へと問いかける。

その様子を見た彼女は少し不思議そうに首を傾げた。

蓮夜「その・・・謝罪の代わりと言ってはなんだけど、まだ僕は普通がよく分からないんだ？・・・だから、僕に教えてくれないかな？」

夢結「それくらいお易い御用よ。」

蓮夜「良かった・・・断られたらどうしようかと思ったよ。」

夢結「失礼ね・・・これくらいのことならするわよ。」

彼の軽口に拗ねるように頬を膨らませる彼女に苦笑をしながら彼女の頭を撫でる。

すると機嫌が治ったのか頬を緩ませた彼女は目を閉じ彼へと身体を預けた。

彼の肩に頭を乗せて全身の力を抜いた彼女は彼の右手を握る。

蓮夜「・・・夢結、」

夢結「どうしたの？」

蓮夜「ありがとうね。」

夢結「どういたしまして、」

彼は上を見上げる。

そこには何の変哲もない天井があるだけだが、それが彼には何かいっつもと違く感じた。

蓮夜「・・・なんだか不思議だね。」

夢結「・・・どうしたの？」

蓮夜「今まで見続けた光景が、いっつもと違うように感じるんだよ。」

夢結「・・・そう。」

蓮夜「なんなんだろう？・・・ただの天井の筈なのに、鮮やかかって言えばいいのかな？・・・綺麗に見えるんだ。」

夢結「・・・。」

蓮夜「最初は色彩が戻ったからかなって思ったんだけど、それも違うように感じてね。」

夢結「・・・。」

蓮夜「暖かいのかな？・・・目に映る全てが暖かくって心地いいんだ。」

夢結「そうね・・・確かに世界は残酷なものよ。だけどそれと同時に暖かくって優しいのよ。」

蓮夜「・・・そうだね。辛いこともいっぱいあった。悲しいこともいっぱいあった。・・・生きることを諦めなくなる時もあった。・・・けど、」

彼は目を瞑ると何かを思い出すように言葉を紡ぐ、

それを口にする度に声が震えだし、彼の中から熱い何かが進み上げる。

蓮夜「やっぱり生きてて良かった・・・。」

夢結「・・・まだよ。」

蓮夜「えっ？」

夢結「まだ、貴方は始まったばかりよ。・・・これから貴方の本当



の日常が始まるの、」

蓮夜「そつか・・・そう、だよね。」

夢結「そうよ。・・・けれど、これからが大変なのよ。わかってい  
るかしら?」

蓮夜「わかっているよ。・・・だってなんにも分からないんだから、  
だって色はただの情報だと思ってたんだよ。」

夢結「なら、まずはそこから覚えて行きましょうか。」

蓮夜「・・・そうだね。」

夢結「・・・だけど、その前に!」

彼女は一度目を開けて彼を見ると彼をベットへと押し倒す。

彼はその行動に身体を硬直させるがすぐに冷静に戻り身体を起こ  
そうとするが彼女の力が強く身体を少しも動かすことができない。

蓮夜「ゆ、夢結?」

夢結「何かしら?」

蓮夜「これはどういうことなのかな?」

夢結「私ね、昨夜眠ることが出来なかったのよ。」

蓮夜「・・・ごめん。」

夢結「いいのよ?・・・けれど今少し眠いのよね。それに今日は休  
日で予定がないのよ。・・・だから、」

蓮夜「・・・だから?」

夢結「少し・・・ね?」

そういうと彼女は目を閉じ寝息を立てる。

それを見た彼はため息を吐くとそつと彼女を抱き締め、

蓮夜「・・・おやすみ、夢結。」

彼も彼女の後を追い再び微睡みへと戻って行った。

## ラスバレー1章

無数の建築物が立ち並ぶ静かな街並み、その建物の全てに草木や苔などが生い茂りそこにはまるで生活感を感じさせない。

??? 「……。」

その建物の合間を黒い影が駆け抜ける。

それは人影であり、建物の影を縫うように進むと目の前に大きめの建築物が存在しておりこのままでは衝突してしまうが、人影は気にせず駆け抜けながら己の手を前へと突き出す。

すると人影の身体はなにかに引つ張られるように宙を舞い、その足を地面から遠ざけた。

浮上した身体は建物の屋上を乗り越え、人影はそのまま何事も無かったかのように進み続けた。

??? 「まだまだ行くゾ！」

辺りを波の音が包み込む海岸、

普段ならその波と風の音のみが聞こえるだろうこの場所で金属音響き渡る。

その音は重く、甲高く、まるで周りの空気を震わせるかのように辺りの音を支配する

それは2人の少女が己の身長程の武器をぶつけ合う音だった。

音の発生源である2人の内1人、緑髪の少女は金髪の少女の周りを円を描くように駆け抜けていた。

その速度は凄まじく、まるで少女が複数人いるかのように残像を生み出しながら駆け抜ける。

それにより生み出された砂煙が辺りに充満し金髪の少女の視界を遮ったその時、緑髪の少女が円の中心へと方向変化し金髪の少女へと

急接近する。

その速度は方向変化をしたのに全く衰えていない。

そして残像を生み出しながら進む少女の刃が金髪の少女へと迫る。

砂煙により視界の悪い中、金髪の少女と刃の距離が残り僅かとなった瞬間少女の菅田が掻き消える。

「さすがにこれじゃあ、取れないカ。」

「いいえ、今は危うく取られてしまうところでした。」

そう言うとき金髪の少女は自身の武器へと視線を向ける。

彼女の武器である大斧には青白く光る球体状のものが着いており緑髪の少女の視線もそれへ向く。

「お世辞はいいゾ？」

「いいえ、本心です。・・・ですが、」

金髪の少女は1度緑髪の少女へと向き直ると深く深呼吸をする。

そして顔を下へと向けると一気に緑髪の少女へと駆け出した。

それを見た緑髪の少女は一瞬固まってしまいがすぐに冷静に戻り逆に金髪の少女へと駆け出す。

お互いに凄まじい勢いで接近し合う2人、

2人が目と鼻の距離に来た時、

「・・・紅巴さん！」

紅巴「ふえっ!?わ、わたしですかっ?」

体勢を低くしたままの金髪の少女が自身の身体を捻じるように回転させながら横へ向き直る。

その先には大人しげな少女がおりいきなりの事に狼狽えていたが

その手に持つ武器はしつかりとこちら側へと向けられていた。

緑髪の少女はそれを視認すると瞬時に金髪の少女の横へと回り込もうとするが、金髪の少女は再び身体を捻じり球体を真後ろへと投げた。

「……やらせない！」  
「……邪魔はさせません！」  
「っ……!？」

それを見た緑髪の少女は再び方向転換し球体を追おうとするが、それを金髪の少女は大斧を盾のように使い行く手を阻む。

それによりフリーになった球体を白髪の少女は受け止める。

「受け取ったわ、高嶺ちゃん！これで……フィニッシュよ!!」

白髪の少女は1度球体を上へと上げると自身の武器を変形させ銃身で球体を受け止め離れた位置にある的へと撃ち込んだ。

「や……やったああ〜！」  
「……ほう。」  
「す、すごいです！フェイントからのフィニッシュショット！こんなに鮮やかに決まるなんて……！」

球体が的に命中したことを確認した瞬間辺りに満ちていた張り詰めた空気が霧散し周りからは様々な声が響き渡った。

「ははは、してやられたな。梅に心理戦を仕掛けてくるとは……実に面白い！」

高嶺「こうでもしないとパスコースが見つかりませんでしたか。」

そんな中緑髪の少女は金髪の少女へと近づくとお互いに賞賛し合

いその中に何人かの少女が近づいてくる。

??? 「高嶺様もですけど、叶星様の方もすごいです！高嶺様がパスするのわかって先回りしていたなんて。」

??? 「土壇場で急にできる動きではありませんわね。気が遠くなるような長い時間を経て身体に染み付けた動き……。グラン・エプレの戦い方、しかと見させていただきましたわ！」

叶星 「……お褒めに預かり、光栄です。」

その言葉に照れるような表情をしながら白髪の少女……。叶星は少女が達へと声をかけた。

そうして会話を続けていると海とは逆側……。森の方から足音が聞こえます。

少女達はその音に気づき森の方へと向くと木々の隙間から黒い影が姿を表した。

??? 「……遅いわよ、蓮夜！」

蓮夜 「……ごめん！急用が来て……。って夢結は知ってるはずだけど!？」

夢結 「知ってはいるけれど連絡ぐらい入れなさい！」

蓮夜 「……以後気をつけます。」

彼の姿を見た夢結が避難の声を上げたため、彼もそれに不満があるのか抗議の声を上げる。

しかし彼女がすぐさま正論を述べたため彼は何も言えずに謝る。

叶星 「……貴方は、」

蓮夜 「お迎えに行けず申し訳ありません。少し急用が出来てしまった、それに対処していたため遅れてしまいました。」

叶星 「大丈夫ですよ。」

蓮夜「ありがとうございます。・・・すみません自己紹介が遅れました。俺は黒鉄 蓮夜、工廠科の2年で一柳隊に所属しています。」  
高嶺「ご丁寧ありがとうございます。私の名前は宮川 高嶺と言います。」

音羽「蓮夜さん、久しぶり・・・。」

蓮夜「ああ、久しぶりだな。」

音羽「・・・紅巴、灯莉、定盛・・・みんなも自己紹介すれば？」

紅巴「ふえっ!?・・・あう、わ、私土岐 紅巴と言います!・・・えっ、えつとよろしく願います。」

灯莉「次はぼくだね!ぼくは丹羽 灯莉!よろしくね!」

定盛「こら音羽!私のことはひめひめって言いなさいって言っていないでしょう!・・・すみません。私は定盛 姫歌です。」

灯莉「定盛、そうカリカリしちやダメだよ!」

定盛「だくかくらく!ひめひめって言っているでしょう!!」

叶星「・・・ごめんなさいね。あの子達いつもこんな感じなの、」

蓮夜「大丈夫ですよ。・・・それに、」

彼は1度口を閉じるとある方向へと視線を向けた。

そこには音羽と灯莉が姫歌をいじり、いじられて怒る姫歌を抑えようとする紅巴の姿があった。

蓮夜「音羽があんな顔するのは久しぶりに見れましたから、」

叶星「音羽ちゃんと中がいいんですね?」

蓮夜「・・・そうなんですかね?俺としては心配の方が強いのですが。」

叶星「確かにあの子は少し心配にあることもありますから・・・ですけど大丈夫ですよ。」

蓮夜「・・・そのようですね。」

叶星「はい、・・・それと敬語でなくても大丈夫ですよ。」

高嶺「私も敬語はなくても構いません。」

蓮夜「それならそうさせてもらおうかな?ならそちらも敬語じゃな

くて大丈夫です。」

叶星「なら私もそうさせて貰うわ。よろしくね蓮夜さん。」

蓮夜「あらためてよろしく。」

夢結「・・・蓮夜、」

彼等が軽く挨拶を済ませると3人の所に夢結が近づいてくる。

蓮夜「夢結? どうしたんだ?」

夢結「私達、今までノインヴェルトの訓練をしていたのだけれど：：  
貴方も手伝って貰えないかしら?」

蓮夜「いいけど、何すればいいんだ?」

彼は彼女の提案に快く承諾する。

そして彼がその内容を聞くと彼女は1度言葉を区切り。

夢結「貴方には敵役として彼女達の相手をして欲しいの?」

そして彼女はグラン・エプレのメンバーを見ながら言葉を紡いだ。

## ラスバレ1章☒

蓮夜「・・・俺1人で？」

夢結「ええ、そうよ。」

蓮夜「確かに連絡入れなかったのは悪いと思ってるが・・・さすがに酷くないか・・・。」

夢結「違うわよ・・・貴方の戦闘方法はリリイとしても特殊だから訓練になると思っただからよ・・・そもそも貴方、一对多が1番得意でしょう？」

蓮夜「確かにそうだが・・・、」

そう言うとは彼はグラン・エプレのメンバーへと目を向ける。

彼は彼女達のCHARMなどを確認するとすぐに辺りを見渡し夢結へと視線を向け直した。

蓮夜「この場所であの構成はきついんだが、」

夢結「全力でやれば行けると思うのだけど、やはり無理かしら？」

蓮夜「だからこれを持ってくるように言ったのか。」

そう言うとは彼は自身の方にかかっている大型のアタツシケースを下ろした。

それは思い音を立てながら地面に立てられると彼が取手に着くダイヤルをそうさしアタツシケースを開ける。

蓮夜「確かにこれなら善戦できるか・・・わかった、やるよ。」

夢結「ありがとう。」

彼は夢結との会話を終わると叶星へと視線を向ける。

蓮夜「と言うことでそちらがよろしければ1戦お願いします。」

叶星「えっと・・・蓮夜君が言っているのって模擬戦のことよね？・・・」



さつきみたいな条件付きじゃないみたいだし、さすがに1人じゃ、」

蓮夜「それなら大丈夫だぞ。・・・確かにきついけど俺の戦い方は一対多で1番強みを発揮するから、」

叶星「でも射撃があると打ち所によっては大怪我してしまうかも・・・。」

蓮夜「そっか・・・その可能性もあるか・・・。」

彼は叶星の言葉を聞き何かを考え始める。

蓮夜「いつも天葉とやってるから忘れてたな・・・なら。」

しばらく考えていると彼は何かを思い出したかのように先程開いたアタツシケースの中へと手を入れた。

何かを探るように手を動かしていると彼は目的のものを見つけたのかその手を引き抜いた。

その手にはT字の小さな箱状の物が7つ握られておりその中の6つを叶星へと渡した。

叶星「・・・これは？」

蓮夜「これは前に試作で作った訓練用のバレットでそれを装填口に付けると弾丸がマグ反応を発生させるペイント弾の役割を果たすんだ。これがあれば安全なはずだが、」

叶星「こういうものもあるのね。・・・すごいわね。」

蓮夜「まあこれは百由・・・俺の知り合いのアーセナルとノリと勢いで作った感じだから実用化はされてないけど・・・1度あいつと話してみるか、」

何故か空を見て遠い目をしたので叶星は首を傾げるが、何故か触れては行けない気がしたので彼女はその疑問を留める。

蓮夜「それにCHARMの強化も1部カットすれば安全性も十分だ

と思うからどうか？」

叶星「え、ええ・・・それなら、みんなはどうか？」

彼の提案に叶星は1度自身のレギオンメンバーへと向き直り彼女達の意見を聞こうとする。

みんな何かを考えるようにしばらく悩むような仕草をすると高嶺が口を開いた。

高嶺「私は構わないわ。」

灯莉「ぼくの大丈夫！」

紅巴「わっ！私も・・・大丈夫です。」

定盛「私も大丈夫です。」

音羽「・・・問題ない・・・です。」

叶星「そう・・・ならお願いできるかしら？」

蓮夜「こちらこそよろしく・・・そもそもこっちから提案したことでだから断るとかはないんだけどね。」

そう言うとは彼は再びアタッシュケースを弄り始める。

その中には複数のアタッシュケースや機器が入っており所狭しと並んでいた。

彼はアタッシュケースを取り出すと開き中にあるものを装備していく。

叶星「・・・いくつあるのかしら？」

高嶺「少なくとも7つはあるわね。」

定盛「あんなに持って大丈夫なのかしら？」

灯莉「わからなくい！」

音羽「・・・。」

準備を整える彼を見た彼女達は不安な表情になる。

紅巴「あ、あの。」

蓮夜「どうかしたのかな？」

紅巴「えつと・・・そんなにたくさん持って重くないのですか？」

蓮夜「ああ・・・これ？」

そう言うとは彼は背負った2つよアタツシユケースを見る。

それはそれぞれCHARMと同等の大きさを持っておりそれを見る紅巴は心配そうな表情で彼へと尋ねる。

蓮夜「これは既に重量軽減系の術式を起動させているから重さは感じないんだ。」

紅巴「・・・起動していないのに？・・・ですか？」

彼は彼女が、それだけのものを背負っては動けないのではと考えてると感じたようで苦笑しながら彼女の疑問に答えた。

しかしその発言に違和感を感じた紅巴が首を傾げる。

それを見た彼は彼女に自身の手に嵌められている手甲を彼女の前に出す。

蓮夜「このガントレットが制御装置の役割を担っているんだ。だからこれを会して俺の持つ装備は全て触れていなくても起動出来るんだよ。」

紅巴「そうなのですか？」

蓮夜「そう・・・これはCHARMを使用時の補助装備として開発しているものの試作品だけど、こっちは実用化する予定だからね。・・・結構力を入れて開発してるんだよ。・・・だから色々データが欲しくてね。」

叶星「百合ヶ丘のアーセナルはすごいわね。」

蓮夜「・・・百合ヶ丘と言うよりも、・・・百由がすごいだけのよう  
な気が・・・。」

叶星「それでこれの名前は何なのかしら？」

蓮夜「一応今は『アガートラム P : T C』という型番だけ最終的にはアガートラムで落ち着くことになるかな。・・・まあ、あとは模擬戦を楽しみにしてくれるかな？」

叶星「ええ、そうね。」

彼は言葉を切ると立ち上がる。

その背には交差させる形で2つのアタッシュケースを背負い腰後には大型の鞆、左右の腰には銃剣用のアタッチメントが取り付けられておりその側面には拳銃がホルスターが付けられていた。

見るからに重装備を身に付けているはずなのに軽々とした足取りに彼にグラン・エプレは己のCHARMを握りしめる。

そして彼が腰後にある柄を握った時戦いの火蓋が切って落とされた。

## ラスバレー1章☒

蓮夜「まずは……。」

彼は地面に倒れ込むように体勢を低くしながらグラン・エプレへと駆け寄る。

彼の右腕は後腰にある柄を握っており、左手はホルスターへと手を伸ばしていた。

蓮夜「分断から始めますか、」

彼は鞘から剣を抜くと右肩を背後に捻じるようにし刀身を隠すとその動きに合わせるように左肩を前に出しその手に握られた拳銃を彼女達へと撃ち放つ。

拳銃から打ち出された弾丸は正確に彼女の足へと飛んでいきその全てが関節に命中するコースになっていた。

だが彼女達はそれを余裕を持ってそれを躲す。

その動きには無駄が少ないその動きからどれほどの修練を積んできたかが伺える。

叶星「……すごく正確ね。」

みんなが少し大きく躲している中危なげなく最小限の動きで避けた定盛は弾丸が通り過ぎたことを確認するとすぐに彼のいる方へと視線を向けた。

定盛「……いきなり危ない!？」

そんな彼女の目の前に鈍い光を放つ刃が迫る。

それは先程まで少し離れた位置にいた彼でありその右腕には彼女へと襲いかかろうとする刃が握られていた。

蓮夜「……。」

彼は彼女達が回避のために視線を弾丸へと向けていた隙に一番誰との距離も離れた定盛へと接近していたのだ。

そんな彼に反応が遅れた彼女は慌ててCHARMを上げようとするがそれは彼の刃は既に目の前であり間に合わない。

彼女に刃が触れる寸前彼は急に側転の要領で彼女の右側方へと位置を入れ替えた。

その行動に疑問を持った定盛は不審に思っていると彼女の目の前を弾丸が通り過ぎる。

定盛は右側に身体を向けながら後方を確認するとそこには射撃形態のCHARMを構えた叶星の姿がありその銃口からは微かに煙が上がっていた。

蓮夜「やつぱり、いい連携してるな。」

高嶺「ありがとうございます。」

彼の声を聞いた定盛が慌てて前方へ視線を向けるのそこには彼の姿があり、その背後にはCHARMを彼に向けて振るう高嶺の姿があった。

彼女のCHARMは彼の胴体へと吸い込まれて行くがそれを彼は背負うように背中に剣を添わせるようにCHARMとの間に遮るように置くことで防ぐ。

彼女の不意打ちを防いだ彼だが完全には勢いを殺しきれなかったようで彼の身体は前方へと浮いた。

それを確認した定盛はCHARMを横薙ぎに振るい彼へと追撃を加えようとする。

彼女の後方から叶星が駆け寄ってきており彼を左右から挟み込むように紅巴と灯莉も駆け出してくる。

彼は一瞬見渡すと身体を捻りながら右足を折り畳むと左足を振り

上げる。

彼の身体は振り上げた勢いで少し上方へと浮き彼を狙ったCHARMの上を通り過ぎる。

この時に右腕で定盛のCHARMに足を乗せるとその勢いに身を任せるように身体を回転させる。

それにより反転した視界の中で彼は両手の武器を手放すと銃剣を取り出し自身の側頭部へと持ち上げた。

そこに左右から紅巴と灯莉が挟撃を加えてくるが、彼は銃剣の刀身と銃身の隙間で挟み込むように2人のCHARMを絡め取るように2人の身体を引き寄せる。

いきなりのことに2人は身体が前に倒れそうになるがそれを上体を起こすことで踏ん張りすぐに体制を整え用途するがその時腹部を軽い衝撃が襲った。

その衝撃に2人は自身の腹部へと視線を向けるとそこにはうつつすらと光る何かが付いており彼の銃口が淡く輝いていた。

蓮夜「はい、アウトね。」

灯莉「うっそく!？」

定盛「ちよつと!なんですすぐにやられてるのよ!？」

紅巴「ご、ごめんなさい!」

彼がそう呟きながら身体を一回転させて地面へと降りると背後へと視線を向けることなく射撃することで迫ってきていた高嶺を後退させると自身も左側方へと跳び距離をとった。

叶星「今ので責めきれないなんて……。」

蓮夜「上手く行ってよかったよ。」

高嶺「……これが夢結さんが言っていたことですか、」

彼が距離を取り体制を整えなおしている間に叶星と高嶺、定盛の3人は合流する。

叶星「どうしようか？」

定盛「紅巴も灯莉もやられましたしマズイのではないですか？」

叶星「そうね。・・・彼の動きを予想出来れば、」

高嶺「・・・でも彼の戦い方はかなり不規則よ。」

叶星「そうなのよね。目の前にいるのに不意打ちを成立させるなんて、今まで経験したこと・・・。」

悩むような表情をしながら話す叶星の言葉が詰まる。

何かを思い出したような表情をした彼女は1度後ろへと視線を向けると薄く微笑む。

叶星「高嶺ちゃん、姫歌ちゃん・・・。」

定盛「は、はい！」

高嶺「・・・何か思いついたのかしら？」

叶星「・・・ええ、」

そう呟くと彼女は2人に聞こえる程度の小さな声で言葉を紡ぐ。

それを聞いた2人は頷くと高嶺は後方に下がり、叶星と定盛は彼へと駆け出した。

蓮夜「ここまででは上手く言ったが・・・。」

彼は彼女達の様子を見ながら思考に耽る。

先程までは上手くいっていたが、これからは何か対策をされるはずだ。

それに対して対応策を練らなくては自身は人数差で押し切られてしまうと理解している彼は彼女達の取り得る策とそれに対する打開策を模索する。

蓮夜「・・・特に厄介なのはアイツだよな。」



そう言いながら彼が手に持つ銃剣を構え直していると、叶星と定盛の2人が接近してきた。

それを確認した彼は左右の銃剣をそれぞれ2人に向けて撃つがそれはことごとく躲されるかいなされて距離を詰められてしまう。

それを確認した彼はすぐさま牽制しながら後退することで距離を取ろうとするが、

蓮夜「ッ!？」

彼が首を傾けた瞬間、耳元を1発の銃弾が通り過ぎる。

その弾道の先には射撃形態のCHARMを持った高嶺と音羽の姿があり、その銃口からは絶えず銃弾が打ち出されていた。

蓮夜「そう来たか！」

彼は銃弾を危なげなく避ける。

しかし避ける動作により後退が出来なくなった彼へと叶星達が迫る。

叶星達が目に映った彼はすぐさま銃剣で迎撃しようとするが彼へと銃弾が迫り来るため彼はそれを防御を余儀なくされ迎撃が一瞬遅れる。

その隙を狙うかのように叶星の鋭い一撃が彼へと迫るがそれを彼は半身になるようにして避け彼女の身体を射線に入れるように動く。と彼女の脇から定盛が迫る。

それにより回避を余儀なくされた彼は定盛の懐に潜る形で回避をする。がそこにサイドステップで距離を取った叶星の射撃が打ち込まれた。

それと同時に定盛は彼の回避スペースを無くすように、叶星の射線に被らないコースでCHARMを横薙ぎに振るう。

躲せば弾丸が、躲さなければ刃と言う2択を迫られた彼は膝から力

を抜くことで身体を後方へと沈ませ、上体を仰け反らせた勢いで腕と足を折り畳むようにバク転をする。

それにより弾丸と刃の軌道から抜け出した彼は銃弾が通り過ぎると畳んだ身体をバネにし上を通り過ぎようとするCHARMの腹を蹴り上げた。

それにより体制を崩した貞盛へと彼は腕の力で飛び上がりながら銃剣を振るう。

その刃が彼女の身体を捉える寸前、彼の身体は突如現れた高嶺によつて武器ごと吹き飛ばされる。

彼が身体を捻じることとで体勢を整え着地する頃には、彼の目の前に叶星がおり、彼女のCHARMにより左手の銃剣が腕ごと後方へと弾かれる。

そこへと迫ってきた高嶺に対して彼は右手の銃剣を振るおうとするがそこに音羽が銃剣へと射撃することで右の銃剣も弾かれてしまった。

高嶺「これで終わりです！」

完全に守りを失った彼へと高嶺の一撃が迫る。

彼の左右には叶星と定盛がおり退路を絶たれたことを確認した彼は銃剣から手を離れた。

それを見て勝利を確信した定盛がCHARMを下ろそうとした時、

轟音とともに高嶺が弾き飛ばされた。

驚愕により固まってしまった彼女が彼へと視線を向けると、そこには左手を突き出した彼の姿があった。

彼の手には先程まで握られていた銃剣はなく、その代わりに重厚な刃とナツクルガードを持った双剣が握られていた。

## ラスバレー1章☒

叶星「高嶺ちゃん!？」

定盛「高嶺様!この!!」

轟音と共に伝わる重い一撃に高嶺は尻もちを着いてしまう。

いきなりの出来事に動転した叶星が彼女の元に駆けつけようとしたところ、彼が追撃を加えようとするがそれに気づいた定盛が、CHARMを盾にするように、彼の方へと向けることで壁とし彼の行動を阻止するとそのまま押し込むことで叶星達から距離を離れた。

叶星「高嶺ちゃん!大丈夫!？」

高嶺「ええ、大丈夫よ。」

定盛「お2人は体勢を整えてください!私が彼を抑えます!」

叶星は高嶺に怪我がないことがわかると安堵の表情を見せるが、定盛が彼へと駆け出したことで、その思考はすぐに切り替わった。

定盛「やあああ!!」

蓮夜「……。」

彼女が彼等の方を向くと定盛が彼のことを押していた。

彼女は自身のCHARMのリーチと重量を利用して彼の持つ武器の間合いに入らないように距離を取りながら戦いを進めることで、彼は攻勢に出ることが出来ず守りに専念することしかできない。

定盛「このまま!」

蓮夜「……。」

彼女は戦いの流れがこちらに向いているうちに削り切ろうとその攻めは激しくなっていた。

彼は両手に持った双剣を順手、逆手を切り替えながらそれを丁寧に捌いていくが、その激しい攻めとリーチ差により反撃に出ることが出来ず後退していくが、その顔に焦りはなくただ着々と攻撃を捌き続けていく。

叶星「姫歌ちゃんが押ししてる！高嶺ちゃん！私達も行きましょう！！」

高嶺「・・・。」

叶星は定盛が彼を押していることを確認すると彼女に加勢しようと立ち上がるが、高嶺からの返事がないため彼女は高嶺へと向き直る。

高嶺（あの感覚・・・。）

叶星「・・・高嶺ちゃん？」

高嶺「・・・え、ええ、行きましょう！」

高嶺は何かを考えるような表情をしており、それを見た叶星は心配になるがすぐに彼女の表情が引き締まったため彼等の方へと向き直り駆け出していった。

定盛「・・・攻めきれない。」

定盛の猛攻を捌き続ける彼は2人がこちらへ近づいて来る姿を見るや、後ろへと距離をとる。

それを見た彼女はチャンスとばかりに距離を詰めながら攻撃を繰り返すが、彼が持つ双剣にいなされ距離を置かれてしまう。

距離を取られた彼女はCHARMを射撃形態にして追撃するがそれも彼が身体を逸らすだけで躲かされてしまった。

追撃を躲かされてしまったため射撃が無意味と判断した彼女が射撃を止めると彼は彼女へと向かって一気に駆けだす。

それを見た彼女は射撃が間に合わない判断したためすぐさま変形させて迎え撃とうとする。

蓮夜「……。」

定盛「なっ!？」

彼女があと一步の距離まで近づいたつぎの瞬間、彼女の思考が停止した。

彼女に攻撃しようと、振り上げて双剣が突如彼の手から抜け落ちてしまったのだ。

叶星「姫歌ちゃん!!」

いきなりの自体に目を白黒させている彼女へと叶星が叫ぶ。

それにより我に戻った彼女は彼の双剣へと視線を向ける。

双剣は重力に逆らうことなくゆっくりと落ちていく。

高嶺「彼の手を見なさい!!」

現在の自身に対する最大の脅威へと視線を向けていた彼女に今度は高嶺が叫んだ。

その言葉に彼女が反射的に彼の手を見るとそこには一本の小さな短剣があり彼はそれを振るっていた。

自ら最大の武器を捨てることで一撃に繋げる認識誘導、それにより完全に無防備になってしまった彼女へと刃が襲いかかるその時、

定盛「……えっ?」

蓮夜「……やっぱりか、」

彼の手から短剣が弾かれた。

短剣は横へと子を描きながら飛んでいく。

蓮夜「そう上手く行かないか、」

空中に浮いている短剣を見た彼は1度短剣を拾い直そうと手を伸ばすがそこへ駆けつけた叶星と高嶺に阻まれてしまった為後ろへと下がる。

叶星「姫歌ちゃん、大丈夫？」

定盛「はい、平気です。」

高嶺「それなら良かったわ。」

2人は彼女の無事を確認すると横へと視線を向けた。

叶星「音羽ちゃん、助かったわ。」

音羽「・・・どういたしまして、」

そこにはCHARMを構えた音羽の姿があり彼女は一瞬彼女達へと視線を向けるとすぐさま彼へと向き直りCHARMを構え直し数発撃ち放つ。

彼はそれを後方に刺さっていた双剣を抜き取り防御すると両方を見やすいように移動し構え直す。

蓮夜「音羽は警戒するよな。・・・それにしてもよくあつたな？それ、」

音羽「・・・作って貰った。」

蓮夜「カタログになかったからそんな事だろうと思ったよ。」

彼は音羽へと視線を向けると言葉を投げかける。

それに反応した彼女は短く返事を返すと、自身のCHARM・・・大弓の弦を引いく。

それを見た彼は音羽へと駆け出した。

彼女は彼の動きを見ると弦を離す。  
すると彼女の弓からマジで構成された弾丸彼へと向かって放たれる。

その弾丸は彼へと正確に進んでいくがそれは彼がステップを踏むことで躲かれてしまう。

彼女はその様子を見ても表情を変えずに黙々と弓を引き続ける。

彼は先程と同じようにステップで躲すが躲した先に弾丸がありそれをそれを見た彼は躲す時の勢いを利用して身体を捻ることで突き進む。

蓮夜「・・・」

音羽「・・・」

2人の距離がなくなると彼は双剣を振るう。

それを弓の両端に付いた刃で逸らしながら彼へと弾丸を撃ち放つがそれは彼が双剣で逸らすことで無力化される。

お互いの位置を入れ替えるように相手の攻撃を捌き続ける2人、それはまるで踊りを踊っているかのように軽やかであり、それと同時に相手の命を奪うかのように荒々しくもあつた。

攻防がしばらく続き彼女が彼の攻撃を捌くために刃を右手に握られた剣へと添わせた瞬間、

音羽「・・・ッ！」

彼は右手剣を手中で回した。

すると剣は変形し戦う前に持っていた銃剣へと姿を変えた。

その変形に巻き込む形で彼女の弓を巻き込むとその力に彼女は弓を手放してしまい、その隙に彼は銃剣を後ろへと投げ左手を剣を彼女へと振るう。

CHARMが無く無防備になってしまった彼女は身体を逸らして躲そうとするが彼が右手を後方に振るうと彼女の身体を突然前へと

倒れた。

音羽「・・・!?」

体勢を崩され防御の術のない彼女へと決着を告げる刃が到達する  
その瞬間、

音羽「・・・甘い、」

蓮夜「・・・!?」

彼の剣が横へと逸らされる。

それにより前方へ体勢を崩された彼は、勢いを利用して前へと飛び  
込み前転の要領で距離を取った。

距離を取った彼が彼女へと向き直る。

蓮夜「・・・それがお前のレアスキルか、」

音羽「・・・。」

そこには悠然と立つ彼女の姿があり、  
その手に半透明の短剣が握られており、彼女はそれを彼へと向けて  
いた。



ALAT 1周年記念特別編 『画面の外から』

薄らと霞んだ街並みの中を少女は歩く。

彼女は俯いているため表情が見えないが、彼女の周りには重い空気が纏わり付いている。

そんな彼女の前には1人の少女が歩いていった。

少女は彼女と年齢は近いであろうがその顔立ちから彼女よりも歳下であることがわかった。

その少女は透き通るような綺麗な黒髪を風になびかせながらただ黙々と歩き続ける。

??? 「・・・。」

街中は人々が行き交い賑やかであるが何故か通り過ぎる人々の顔には白いモヤがかかっておりその表情を見ることが出来なかった。

・・・どうして

彼女は少女を追いかけながら考える。

その表情は悲痛に歪み彼女の手は強く握りしめられその肌は青白くなっていた。

少女の後ろをしばらく歩いてみると、少女の足が止まった。

止まった先には花屋がありそこには色鮮やかな花々が並べられていた。

・・・どうして、

少女は店員に声をかけようとする。

しかし店には先客がいたようで、店員はそちらの対応をしており少女に気づかない。

それに気づいた少女は店の外で待ちながら店内を覗いた。

そこには外に置いてある花々で作ったであろう花束が幾つも置いてあり、その奥にあるカウンターで店員が先客の対応をしていた。

先客は身長から少女と歳が変わらないであろう少年で、黒いフード付きのパーカーを来ておりその顔は深々と被ったフードで見ることが出来ない。

少年は店員に何かを伝えると店員は奥へと入っていく。

それを確認した少年は店内を見渡し初めた。

何かを考えながら見渡す少年は少女に気づいたようでそちらを向く。

「・・・夢結」

「・・・」

少年は少女と知り合いのようで少女へと近づくと声をかけた。

しかし、少年の言葉に少女は反応を示さない。

「・・・ここに来るってことはアレだね？」

「・・・」

「ごめん、変なこと聞いて」

彼は何とかして少女の反応してもらおうと言葉を紡ぐが、やはり少女は反応を示さない。

・・・どうして、

「・・・」

「・・・ごめん、俺の方は出来たみたい。」

少年がしばらく奮闘していると奥から店員が出てきたためカウンターへと戻って行った。

そして店員と少し会話すると彼は5つの花束を受け取り店の外へと出て来る。

そして1度少女へと視線を向けると、悲しそうな顔をしながら店を後にしようとした。

??? 「・・・貴方もお墓参りなのかしら？」

その時反応を示さなかった少女から言葉が紡がれた。  
それに気づいた少女は振り返る。

???????? 「そうだよ。」

「・・・多いわね。」

「・・・知り合いがね、」

???????? 「・・・そう、」

そう言うと少女は店の中へと入って行く。

その光景を見て彼女は胸が締め付けられるような感覚に陥った。  
彼女は必死にそれを抑えると1度少年へと視線を向ける。

??? 「・・・」

視線の先にはこちらを向く少年の姿がありお互いの目が合うのし  
ばらく見つめ合った。

少年は彼女の表情を見るとフードを被り直し何処かへと歩いて  
行った。

・・・どうして、

少年の姿が見えなくなると彼女は少女へと視線を向ける。

少女はカウンターで店員に何かを話しているようで花々を見なが

ら考え込むように俯いていた。

その姿を彼女が見ていると、彼女の横を大きなカバンを背負った人がその真後ろを横切った。

そのカバンは位置的に彼女に当たりそうであったが、そのカバンは何ともぶつかることなく通り過ぎた。

しばらく考え込んでいた少女は顔を上げ店員に何かを伝えると店員は再び奥へと入っていく。

??? 「・・・お姉様、」

それを見た少女は俯きながら一言呟く、

彼女には何を言っていたか分からなかったが少女の表情から決して明るい言葉でないことはわかった。

そして店員が戻ってくると少女は花束を受け取ると店を出る。

その手には大事そうに花束が抱えられており、少女の表情は俯いているため見えない。

店を出た少女はそのまま来た道を帰り始めたため彼女の少女のあとを追って行った。

深い森のなか少年は歩き続ける。

その手には2つの花束があり、その花木々の隙間から射す光で鮮やかに輝いていた。

少年が歩き続けると前から光が漏れ出す。

その光の先には広めの広場があり陽の光を浴びて草が青々と生い茂っていた。

少年はその中を歩くと1本の木の前で立ち止まる。

??? 「姐さん・・・来ましたよ。」

少年は木の前でしゃがみ込むと手に持つ花束を1つ木の根元に置

いた。

??? 「・・・俺じゃ、姐さんのお墓まで行けないので」

花束を置いた少年は立ち上がると木を背にして歩き出した。

??? 「姐さんは夢結をお願いします。」

少年は何かを呟くと再び森の奥に消えて行く。

その少年の背後の木の裏・・・そこには輪郭の曖昧な影が立っていた。

??? 「・・・」

夕日の射す丘の上、桜の花弁が舞い散るその場所に少女はいた。

少女は自身の目の前にあるお墓を見ると持っている花束を強く握りしめる。

??? 「・・・遅くなってしまいました。」

少女は花束を置くとお墓の前に立つと胸元から何かを取りだしそれを握りながら目を瞑る。

・・・どうして、こんなってしまったんだろうか？

その姿を見る彼女の表情はどんどんと暗くなっていく。

・・・どうして、こんなことになってしまったのだろうか？

彼女の表情を暗くするもの、

それは後悔だった。

目の前の少女がこうなってしまったのは自身のせいだ。  
それが彼女の中に後悔を生み出し溜まっていく。  
しかしそれは仕方がないことだったのだ。

もしも、こうならなければ彼女は彼女ではなくなっていた。

それを回避するために取った行動の結果がこれだ。

確実に起こる事実・・・必然とも呼べるそれが少女の心を傷つけてしまった。

いいや、違う。

これは自分が自分でなくなることを恐れた自身の心の弱さが招いた惨劇だ。

彼女のために動いた人少年が居たのに、  
彼女が諦めたことを諦めなかった人少年が居たのに、

しかし彼女はその可能性を自らの手で刈り取ってしまった。

自ら可能性を捨ててしまったのだ。

もしかしたら回避出来たかもしれないことを、彼女は恐怖から逃げるために捨てた。

その結果がこれなのだ。

苦しみ続ける少女達を見続けること、

それが自身彼女に対して課せられた罰であった。

??? 「・・・お姉様、」

少女はぼつりと呟くと目を開き握られたモノへと目を向ける。

そこにはペンダントが握られておりそれは夕日に照らされ輝いていた。

そして彼女がペンダントを開くと、中から1枚の写真が現れる。

その中には少女よりも少し大人びた少女が映し出されており、その

姿は少女の背後にいる彼女と瓜二つであり、

少女の前のお墓には、

『川添 美鈴』

と書かれていた。

## ラスバレー1章 ⊠

彼は距離を取ると右腰から拳銃を取り出し音羽へと向ける。それを見ていた彼女はただ彼を睨むだけで動こうとしない。その右手には先程彼の攻撃を逸らしたであろう短剣が握られておりその半透明の刀身は陽の光を浴びて輝いていた。

蓮夜「見た感じ、マジの擬似的物質化現象の派生か？」

音羽「……。」

蓮夜「……無言は制定と取るぞ？」

音羽「……好きに、」

蓮夜「……だから武器を奪われた時すぐに手を話せたのか、武器を作るなら無理に死守する必要もないからな。」

音羽「……。」

彼は拳銃を彼女に向けながら声をかけるが、彼女は無表情のまま受け流す。

彼が動かないことがわかった彼女は短剣を左手に持ち変えると右手を自身の前に出した。突き出した掌から霧状の光が漏れだしそれは弓の形になると霧散しする。

その手には先程彼女が持っていた大弓と同じ形の半透明の弓が握られており、それを静かに彼へと向けた。

蓮夜「……お前が弓を使うのは何となく想像出来たがそのレアスキルには驚きだな。……それと、」

お互いに狙いを定め会う中、彼は前へと重心を傾け体勢を低くしながら左手の剣を上へと上げる。

彼女はそれを見るとすぐに短剣を上へと投げ、弓を射った。

しかし彼女の弾丸は彼の頭上を通り過ぎ後方へと飛んでいく。

それを見ることなく彼は剣を回すしながら変形させ、その勢いのま



ま銃剣の銃身を背後に向けると発砲した。

定盛「ちよつと音羽!!何するの・・・ッ!」

2人が発砲した先・・・彼の背後には定盛の姿があり彼女は自身のCHARMを盾にして2人の弾丸を受け止めていた。

蓮夜「・・・バレバレだから、」

音羽「・・・不注意すぎ、」

2人の声が重なる。

音羽は彼が背後から迫り来る定盛を狙っている事を把握すると彼女を狙って弓を射つたのだ。

そのいきなりの自体に定盛は慌てながら自身のCHARMをで防御する。

そして、彼女が音羽文句を言おうとしたその数瞬後彼の弾丸が音羽の射撃を防いでいたCHARMへとぶつかったのだ。

それにより体勢を崩すが直撃を免れた定盛が後ろに倒れる中、その背後から2つの影が彼へと迫る。

彼は音羽へと向けていた拳銃を背後に向けると背後を確認することなく発砲しながら右足を軸として身体を回転させる。

回転の勢いを乗せて左手での銃剣を振るうと甲高い金属音を響かせながら弾かれた。

その反動で背後に飛びながら前方を確認すると目の前には彼と同じようにCHARMを弾かれた叶星の姿とその横から彼へと迫る高嶺の姿があった。至近距離まで近づいた彼女は戦斧を振り下ろすが、それは身体を回転させた彼が弾かれた銃剣を勢いのままに自身の前に戻して盾にした。

空中にいるため踏ん張りの効かず後方に飛ばさせるが、彼は冷静に体勢を整えると地面へと着地する。

着地した瞬間、高嶺へと拳銃を撃つことで牽制すると、拳銃を空中

に置くように手を離し腰後の柄へと手を伸ばす。

そのまま刀身を半分ほど抜き出すと左足を前に出すことで半身になりながら踏みしめた左足で後ろへ飛んだ。

高嶺と距離を取った彼の背後で軽い金属音が鳴る。

彼が背後を見るとそこ何は音羽がおり、彼女の左手に握られた短剣が彼へと突き立てられていた。

しかしその短剣は彼の剣に遮られており、そのまま彼身体が彼女にぶつかる。

刀身に抑えられ奇襲を防がれた音羽へと、いつの間にか彼の左手に握られていた短剣が遅いがかかるが、それは弓で逸らすことで防ぐ。

無理な体勢で防いでしまったためバランスを崩した音羽だが、彼女は崩れた重心を利用し左足を軸にして回転しながら短剣で切りかかる。

それを彼は左手甲の側面で逸らすと彼女の左手首を掴み投げる。

投げられたことで距離を取れた音羽が後ろに下がろうとすると既に目の前には彼の姿があり、彼の両手に短剣が握られていた。

それを見た彼女は前に出ながら弓を彼に向けて投げる。

それを身体を逸らすことで躲した彼に彼女の右手が迫る。

彼女の右手からは光が盛れ出しておりそれを見た、彼は左手の短剣が光を切り裂くと手から漏れていた光は消えるが、次は彼女の右袖の中で何かが輝いた。

その光は先程のものとは違い鈍いものであり、その変化に警戒した彼はバックステップを踏む。

彼の身体が後ろへと動いたその瞬間、彼女の袖からナイフが飛び出す。

それを振り切っていた右手甲を盾にして防ぐと彼の視界から彼女が消えた。

突然の出来事であるが彼は冷静な表情で上へと跳ぶ。

視界の広がった彼が下を確認すると先程まで彼がいた場所の後ろに短剣を振り抜いた音羽の姿があり、彼女は感情の見えない瞳で彼を見つめている。

音羽「やつぱり捕まらない……」

蓮夜「……」

呼吸の乱れ初めた彼女は一言呟くと身体力を抜き前に倒れる。

それを見ていた彼は左手のナイフを離すと辺りを確認する。

彼が辺りを見渡していると彼女は地面に接する寸前で左手を地面に付け押した。その反動で音無く身体を回転させた彼女の手には小さなめの弓が握られており、それは空中という不安定な場所である中でも確実に彼のことを狙っている。

音羽「……フツ！」

彼がこちらを見ていないと認識した彼女は息を殺しながら弓を射った。完全に気配を消しながら射った一弾は音も無く彼へと迫る。

しかし、弾丸が彼を穿つ直前、彼の身体が横へと移動した。足場のない空中で回避した彼を見つめる彼女は回転の勢いを利用し立ち上がると彼の動いた方向と逆の方向に駆け出す。

定盛「酷い目にあつたわ。」

3人に置いてかれた定盛は立ち上がると周りを見渡す。

彼女の目には少し離れた位置に音羽の姿があり彼女が遠ざかっていることがわかった。

定盛「音羽には助けられたけど、もう少し優しく出来ないのかしら。」

そう言いながら自身のCHARMを拾い上げると彼女は音羽の方へと駆け出す。

そんな彼女の方へと叶星達が駆け寄ってくる。

定盛「叶星様！あの人は、」

叶星「姫歌ちゃん、上!!」

2人を見つけた彼女が叶星達に声をかけると返って来たのは叶星の叫び声だった。

その必死な表情を見た彼女が上を向こうとすると、彼女に影が落ちる。

急な事態に慌てて上を確認するとそこには剣を振り下ろそうとする彼の姿がありそれを見た彼女は咄嗟に横へ躲す。

間一髪で躲すことの出来た彼女が彼へとC H A R Mを向けようとする、彼は既に振り下ろす体勢から横薙に剣の軌道を変えており、それを見た彼女はバックステップで躲す。

彼女が距離を取ろうとしていると考えた彼はコートの裏から短剣を2本取り出し彼女へと投げる。

それは無理な体勢だったからか彼女の足元に刺さるにとどまってしまう、それを隙と見た彼女は一気に彼へと近づこうとする。

彼に狙いをバレないためワザと下がりながら後ろに傾けていた重心を、無理やり倒れるような前傾姿勢になることで身体の進む向きを前に向ける。

それにより彼女が距離を離すと考えた彼が拳銃をホルスターから抜こうとしており、彼の動きが一瞬遅れた。

その一瞬を気にする為に距離を詰めようと彼女が駆け出したその時、彼が薄らと笑い左手を背後へと動かした。

定盛「きやつ!?!」

それが見えていない彼女が1歩前に出ようとする、突如足が引く張られる。

それにより前のめりに倒れてしまった彼女は後方へと引きずられ

ていく。

定盛「ちよつと!? なんなのよ!!」

目を白黒させながら引つ張られる足を確認した彼女は自身の足首に糸状の何かが絡みついていることがわかった。

その糸の両端は彼が先程投げた短剣と繋がっており、短剣そのものも自身の後方にある短剣に繋がっている。

彼女が遠ざかることを確認した彼はすぐに叶星達へと視線を向け直すと拳銃を握りながら2人へと接近した。

彼の接近に気づいた2人は左右に別れ彼を挟み撃つ。

2人の緻密な連携に右手の剣1本しか近接武器がない彼は防戦一方になるが、それでも彼は2人の攻撃を冷静に捌き続ける。

高嶺「・・・ッ!」

なかなか崩れない彼に焦りを感じたのか高嶺は攻勢を強めそれを見た叶星もテンポを上げていく。

蓮夜「これは・・・キツイ、」

嵐のような剣撃に表情を歪めた彼は2人の連携を崩すために叶星の攻撃を銃身で受け止めると、そのまま彼女の足を払い転ばせる。

叶星が止まってしまったため、リズムが崩れてしまった高嶺は大振りの一撃で彼から距離を取ろうとするがこれを逆手に取られCHA RMを弾き飛ばされる。

武器を失った彼女はすぐに下がろうとするがそれを彼は許さない。彼は右手に握る剣を彼女に投げる。

それを見た高嶺は身体を逸らすことで躲すことに成功するが、それにより足の止まってしまった彼女に彼は拳銃を向けた。

蓮夜「……これであと3人！」

高嶺「……姫歌！」

定盛「高嶺様、これを！」

彼が引き金に引こうとした瞬間、高嶺が右手を横に伸ばし、その手が伸び切ったタイミングで寸分たがわず彼女の手にCHARMが戻ってくる。

彼が横目にCHARMの飛んできた方向を確認するとそこにはCHARMを投げたであろう定盛の姿があり彼女の足元には砕けた短剣とそれを壊したであろうCHARMが地面に突き刺さっていた。

彼女は握ったものを確認することなく彼へと振るう。

だが今振るい始めた彼女では引き金を引こうとしている彼には間に合わない。

それを理解している彼は焦ることなく引き金を引くが、

蓮夜「……ッ！」

拳銃からは弾丸が射出されなかった。

彼は先程の衝撃で銃身が歪んだかと目を向けると拳銃の銃口が焼けただけでありそれにより銃口が塞がっていた。

音羽「……。」

拳銃が使えないことを把握した彼はすぐにそれを盾にしようとするが音羽の放った一弾により弾かれてしまい、その手から拳銃が無くなり。

叶星「これで終わりよ。」

背後から聞こえるその声が彼の敗北を示した。

## ラスバレー1章☒

蓮夜「やっぱりダメだったか……。」

彼はそう呟くと両手を上げて降参の意を示す。

そんな彼の表情には疲労の色が濃く出ており、一度大きなため息を吐くとその場に座り込んだ。

叶星「流石に、1人相手に負けちゃったらね？」

高嶺「けれどこちらは2人も落とされてしまったのだから、負けたと言ってもいいのではないのかしら？」

彼の様子を見た2人もCHARMを下ろすと、こちらも疲労が大きいのか息を荒くしている。

蓮夜「もう少し行けると思ったんだが、まだまだか……戦い方の見直しが必要かな？」

叶星「アレでまだまだなの？」

蓮夜「いや……今の装備だとあれが限界なんだが……。」

高嶺「今の装備だと？」

蓮夜「ちよつと元々の戦い方が問題でな。……既存のCHARMじゃ合わないんだよ。……一応工廠科だから結構好き勝手にCHARMの改造やら試作が出来るんだが、なかなか納得行く物が出来ないのが現状だな。」

高嶺「貴方、アーセナルだったのね。」

叶星「確かにさつきも試作しているって言っていたけれど……。」

蓮夜「……以外か？」

叶星「いいえ、そうじゃないの。ただ……。」

蓮夜「どうかしたか？」

叶星「貴方、戦い方にCHARMが合わないって言ったじゃない？それが気になってね？」

蓮夜「ああ、それ?・・・簡単に言うところ来るまで1人でヒュージ狩りしてたんだよ。」

叶星「・・・え?」

蓮夜「・・・そんな時はCHARMなんてなかったから、色々調べて武器を作って、元々レアスキルとかは使えたからそれを利用した騙し討ちメインでな。・・・今考えるとよく独学であそこまで行けたよ。」  
高嶺「それはおかしいわ。基本的にヒュージにはCHARM以外効果がないはずよ。」

叶星「それにどうしてそんな危険なことをしたの?」

蓮夜「2年前に甲州撤退戦があっただろう?・・・その時に鎌倉付近にケープが発生したのは知ってるよな?」

叶星「ええ、民間人にも被害が出・・・!!」

蓮夜「そう、俺の両親は・・・それで自暴自棄になつてな?確かに危険なことをした自覚はあるが・・・あの時はそんなこと考えてすらいなかったから、」

高嶺「ごめんなさい。」

蓮夜「大丈夫、もう過ぎたことだから、」

3人の雰囲気暗くなる中、彼等へと近づいてくる足音が聞こえた。

それに気づいた3人が足音のする方を見るとそこには定盛達と合流した夢結達の姿があり、彼女達は彼や音羽が落とした武器を回収しながらこちらへと歩み寄ってくる。

夢結「お疲れ様。」

蓮夜「マジで今回はキツかったよ。」

彼はこちらへと労いの言葉をかけながら手を差し伸べた夢結の手を取ると軽口を叩きながら立ち上がる。

夢結「いきなりでごめんなさいね。」



蓮夜「いや、大丈夫だよ。それに色々気づくこともあったしいい勉強になった。」

夢結「そう、それは良かったわ。」

彼の返事に彼女は微笑みながら返す。

その横では紅巴が申し訳なさそうな顔をしながら叶星達の前に立っていた。

紅巴「叶星様、高嶺様、申し訳ございません。」

灯莉「ごめんなさ〜い。」

叶星「大丈夫よ2人とも、」

高嶺「ええ、アレは彼が一枚上手だっただけよ。」

紅巴「は、はい・・・。」

叶星「そう落ち込まないの、人間誰だって失敗するものよ。もしそう思うなら今日の事を次に活かせばいいのよ。」

紅巴「はい!!」

灯莉「そうそう、とつきーは考えすぎなんだよ。少しはのんびりしないと〜ボクみたいにく。」

高嶺「・・・貴方は少し考えた方がいいと思うわ。」

灯莉「??」

ため息を吐く高嶺に首を傾げる灯莉とその様子を見て笑う叶星達は少し離れた場所に音羽と定盛を見つける。

2人は何か揉めているようで、それを不思議に思った灯莉は2人へと駆け寄った。

定盛「だから、やめなさいって言ってるでしょう!？」

音羽「・・・だけど1番楽、」

定盛「楽とかの問題じゃないのよ!」

灯莉「2人とも、何してるの?」

音羽「・・・姫歌の足に付いたコレを取ろうとしてる。」

灯莉は音羽が定盛の左足首を指さしたため、そこを見るとそこには糸状の何かが絡まっておりその両端には短剣が結ばれていた。

灯莉「取ればいいんじゃないの〜?」

定盛「それはわかっているわよ!けど、音羽がなんて言ったと思う?」

灯莉「わからなくい!」

定盛「切ればいいって言ったのよ!危ないじゃない!」

音羽「けど・・・1番手っ取り早い・・・それに切るのには自信がある。」

定盛「その言葉が1番信用ならないのよ!」

蓮夜「短剣を切り離せば消えるぞ。」

堂々巡り始めた2人の声が彼は2人に声をかけた。

それを聞いた音羽は彼の言う通り短剣付近の糸を切ると霧散するように消えていきものの数秒で消えてしまう。

蓮夜「ごめんな、先にそっちの対処すれば良かった。」

定盛「い、いえ・・・お氣遣いありがとうございます。」

蓮夜「いいよ。元々俺がやったことだし・・・それより怪我はなかった?」

定盛「はい、大丈夫です!」

蓮夜「なら、良かった。」

彼はそう言うのと端末を取り出し何かを確認し、端末をしまうと梨璃へと歩み寄って行った。

蓮夜「梨璃さん、もうそろそろ時間だけど、」

梨璃「も、もうそんな時間ですか!?!」

彼の言葉に焦りながら自身の端末を確認する。

梨璃「本当だ!?・・・皆さん!」

夢結「梨璃、どうしたの?」

叶星「梨璃さん?」

梨璃「もうそろそろヘルヴォルの皆さんとの待ち合わせの時間です。」

叶星「そうなの!?急がなくちゃ!」

梨璃の言葉を聞いた両レギオンのメンバーは急いで準備を整え、と待ち合わせ場所である駅へと移動を初めた。

蓮夜「そうだ、夢結。」

夢結「どうしたのかしら?」

駅への道中、彼は何かを思い出すと夢結へと声をかける。

それに不思議そうに彼女が返事を返すと彼は自身の端末の画面を見せる。

蓮夜「百由から連絡で、アレが完成したってさ。」

夢結「そうなの?ずいぶん早かったわね。」

蓮夜「急ピッチでやったからな。俺もそうだけど夢結も合わないんだらう?」

夢結「まあ、そうね。」

蓮夜「今最終調整してるから学院に帰ったら終わってるはずだから、」

夢結「わかったわ。・・・ありがとうね。」

蓮夜「俺も百由も好きでやってるんだから大丈夫だよ。」

夢結「気持ちを受け取っておくわ。それで貴方の方はどうなのかしら?」

蓮夜「俺の方も完成した。今は百由に最終調整任せてるんだよ。」

夢結「それは良かったわ。」

梨璃「お二人共何をなさっているのですか？もう時間がないですよ！」

2人が話し込んでいると前から梨璃の声が聞こえる。

それに気づいた2人が彼女の方を向くと前を歩く彼女達と距離が離れており2人が遅れていることに気づいた梨璃が手を振っていた。

夢結「今行くわ！・・・行きましようか。」

蓮夜「そうだな。」

2人は一度頷き合うと彼女達へと駆け寄って行った。

## ラスバレー1章

灯莉「まっだかな、まっだかな、まっだっかな♪」

音羽「灯莉、はしやぎすぎ・・・。」

灯莉「だつて、楽しみなんだもくん♪」

海岸を後にした彼女達はヘルヴォルのメンバーとの待ち合わせ場所である駅に来ていた。

蓮夜「思ったよりも早く着いたな。」

夢結「皆急いで来てたものね。」

彼は端末を開き時間を確認すると予想よりも早く到着していたことに気づく。

梨璃「ああ、もう我慢出来ません！わたし、お迎えに行つてきますね！」

楓「でも、ヘルヴォルのみなさんの到着予定時刻は30分後ですよ？電車の本数も限られていますし、意味はありませんわ。」

梨璃「それでも行きたいんですっ！」

叶星「でしたら私も一緒にいいかしら？一葉と会うのは久しぶりだもの。それにヘルヴォルのメンバーにも早く会ってみたいわ。」

梨璃「は、はいっ！ぜひぜひ、一緒にいたしましょう！」

結梨「わたしも行く！」

叶星「それなら3人で行きましょう。」

紅巴「あ、あの、叶星様っ。」

叶星「紅巴ちゃん？・・・どうしたの？」

3人はヘルヴォルを迎えに行こうとすると、紅巴の申し訳なさそうは声に止められた。

紅巴「灯莉ちゃんがどこかへ消えてしまいました・・・。」  
定盛「はあああ、本当に団体行動に向いてない子ねっ。」  
音羽「・・・この1年組の全員に言えると思う。」  
蓮夜「いや、それブーメランだぞ・・・。」

唐突な灯莉の行動に定盛達が頭を抱えていると梅が笑い出す。

梅「はははは、うちにもそういうやつがいるゾ、なあ?」

鶴紗「・・・自由行動の時だけだよ。」

梅がそう言いながら鶴紗へと目を向けるとそれに気づいた彼女は目を逸らしながら小さく呟いた。

叶星「あ、そうか。じゃあ、灯莉ちゃんを探しに行かないと。」

高嶺「いいわ、叶星。こっちは私が見てるから行ってらっしゃい。」

叶星「あ、うん、ありがとう。それじゃあ、頼むわね、高嶺ちゃん。行きましょう2人とも!」

梨璃「は、はい!」

結梨「お〜!」

高嶺の言葉を聞いた叶星は、駅へと向かって走りながら梨璃達に声をかける。

それを聞いた2人は勢いよく返事をする、叶星のあとを追って行った。

定盛「見つけたら説教よ、説教!あんなの放ってたら、ヘルヴォルの方々に示しがつかないもの!」

ミアム「あやつらはそんなもの気にしないと思うがのー。」

蓮夜「とにかく探すか・・・。」

音羽「・・・賛成。」

夢結「私は彼女が戻ってきた時のためにここに残っているわ。」

紅巴「私も灯莉ちゃんを探しに行きます！」

定盛の言葉を皮切り彼女達は灯莉を探すために行動を始めた。

灯莉を探すに至つてこの街に不慣れなグラン・エプレのメンバーが迷つてしまわないように2人1組で彼女を探すことにした。その中で前から交友関係にあった蓮夜と音羽が組むこととなり2人は街中を歩いていった。

蓮夜「それにしても・・・お前がリリイになるなんてな。」

音羽「・・・少し気になる事があって、」

蓮夜「自分で決めたならいいんだ。・・・だが、」

音羽「・・・どうしたの？」

蓮夜「茜がエレンスゲに行くとはな。」

音羽「それを聞いた時、私も驚いた。」

蓮夜「お前は知つてたから良いとして、俺はいきなりだからな本当に驚いたぞ。」

音羽「それは当たり前、」

彼女の反応にため息を吐くと、彼は最近ため息が多いと感じながら彼女に文句を言う。

蓮夜「知つてたなら教えてくれよ。・・・心配してたんだからな。」

音羽「あの時の黒鉄さんの状態で？」

蓮夜「・・・ああ、それくらいはできる。」

音羽「・・・ごめんなさい。」

蓮夜「お前らが無事ならいい。・・・俺はな。」

その言葉を聞いた音羽の顔色が悪くなる。

蓮夜「俺はもう何も言わないが院長からの説教は確定だから、」

音羽「・・・助けて。」

彼女は弱弱しい声で彼に助けを求めるが彼は応じない。

蓮夜「俺より心配してたんだぞ？」

音羽「そ、それは・・・。」

蓮夜「後で茜にも言うが今度休みの日院長の所に行くぞ。」

音羽「・・・はい。」

諦めたような表情になる彼女を他所に彼はふと何かを思いついた。

蓮夜「それにしてもエレンスゲか・・・。」

音羽「・・・？」

彼は会話の途中で何か思うことがあったのか悩ましい表情を見せる。それを見た彼女が不思議そうに見ていると彼は上を見上げた。

蓮夜「・・・エレンスゲはG・E・H・E・N・A・派の中ではま

ともな方だが、」

音羽「・・・まとも？」

蓮夜「全体的には・・・だ。」

彼の一言に一瞬顔を顰めた彼女に彼はため息をつきながら話を続けた。

蓮夜「そんなG・E・H・E・N・A・派のあそこが反G・E・

H・E・N・A・派の百合ヶ丘に自校のトップレギオンを行かせるかと思つてな。」

音羽「確かに・・・。」

蓮夜「3レギオンは協力関係にあるがガーデン同士はそうでもないからな。」



音羽「と言うよりもエレンスゲが嫌ってるだけ、」  
蓮夜「そうとも言うが、・・・あれは、」

会話の途中彼はなにかに気づいたのか会話をやめる。  
それに気づいた音羽も彼の視線を追うと、

灯莉「かわいいでしょ〜!」

藍「・・・うん、かわいい、」

そこには2人が探していた灯莉と何故か藍の姿があった。

2人は木陰の下で何かを見ながら笑っておりそれを見た2人は一度顔を見合わせる。

蓮夜「・・・行くか、」

音羽「・・・。」

そして2人は一度ため息を吐くと2人へと近づいて行った。

## ラスバレー1章

音羽「灯莉・・・やっと見つけた。」

灯莉「とわわだ〜。」

藍「・・・とわわ?」

灯莉「そう、とわわだよ〜!」

音羽「私の名前は音羽・・・とわわじゃない。」

灯莉「ええ〜、いいじゃん!」

音羽が灯莉に声をかけるとこちらに気づいた彼女は藍を連れて此方へと走ってくる。

蓮夜「それはそうと藍さんだよな?」

藍「うん、らんだよ。」

蓮夜「確か待ち合わせ時間までまだ時間があるはずだけど・・・どうしてこんな所にいるのかな?」

藍「えつとね。一葉が早く着いたから自由行動だって、だからお腹空いたから、」

蓮夜「買い食いしてたらはぐれたってことかな?」

藍「らんがはぐれたんじやないよ?皆がはぐれたんだよ?」

蓮夜「そ、そうか・・・。」

彼は藍から事情を聞くと夢結へと連絡を入れる。すると彼女から一葉と茜以外のヘルヴォルメンバーと合流したことを知らされたため戻ることにした。

蓮夜「夢結達が一葉さんと茜以外とは合流出来たみたいだから戻るぞ。」

音羽「・・・わかった。」

灯莉「らんらん行つくぞ〜!」

藍「お〜!!」

??? 「おい!!」

4人が戻るために歩き出そうとした時間き慣れた声が彼の耳に入った。

音羽もその声に気づいたようで2人が辺りを見渡すと、

茜「先輩!!音羽!!」

蓮夜「やっぱり茜か、」

音羽「これで一葉だけ。」

藍「茜だく。」

此方へと茜が走ってくる。

彼女は彼等の元に着くと藍に説教を始めた。

茜「藍、なんで1人でどっかに行っちゃうのさ?」

藍「らんはどっかに行つてないよ?皆がどっかに行つたんだよ?」

茜「それが1人でどっかに行くって言ってるの!」

藍「そうなの?」

茜「皆心配してたんだからね。」

藍「・・・ごめんなさい。」

茜「今回は何も無かったからいいけど次からはせめて何処に行くかだけでも誰かに伝えるんだよ。」

藍「わかった。」

茜が俯いてしまった藍の頭を撫でると、彼女は気持ち良さそうな表情をしながら茜に抱きついた。

茜「先輩が見つつけてくれたんですよね。ありがとうございます。それに音羽もありがとな。」

音羽「・・・どういたしまして、」

蓮夜「まあ、俺たちは藍さんじゃなくて灯莉さん探してたんだけど

な。」

茜「・・・灯莉さん？」

灯莉「ボクのことだよ！ボクの名前は丹羽　灯莉！よろしくね！」

茜「アタシの名前は竜胆　茜！よろしくね灯莉。」

灯莉「うん、よろしくねリンリン！」

茜「り、リンリン？」

灯莉「うん！竜胆だからリンリン！かわいいでしょう！」

茜「ま、まあ、いいけど。」

蓮夜「・・・自己紹介は行ったん置いておいて一度戻るぞ。茜も一葉さん以外のメンバーはもうこっちと合流したらしいから、」

茜「わかりました。」

各々の目的を達成した彼等は他メンバーと合流するために歩き出す。その後他メンバーと合流した彼等のが各々自己紹介をしていると梨璃達と一緒に一葉がやって来た。

恋花「あつ、一葉ー！やっと会えたー。」

一葉「恋花様・・・それに藍たちも。」

藍「どこ行つてたの、一葉。かつてに迷子になるのはダメなんだよ？」

一葉「く・・・誰のせいでこうなつたと思つてるのよ・・・っ。」

茜「藍・・・ブーマランって知ってる？」

藍「投げたら戻ってくるアレ？」

茜「知らないならいいや・・・。」

藍「・・・？」

藍の反応に茜がため息を吐いていると梨璃が此方へと近づいて来た。

梨璃「ヘルヴォルのみなさん！もう合流されてたんですねっ。」

夢結「ええ、貴方達が行った後で偶然出会えたの。」

梅「一通り、自己紹介も済ませたゾ！」

灯莉「よろしくね、ヘルヴォルの人たち☆」

千香瑠「はい、こちらこそよろしく願います。」

ミアム「うーむ、一気に大所帯になったのー。ここで集まっていたは通行人の邪魔になるかもしれんな。」

梨璃「そうですね！まずはわたしたちのガーデンにご案内します  
！」

瑠「っ、百合ヶ丘のガーデン・・・。」

百合ヶ丘に案内しようと梨璃のかけた言葉にヘルヴォルのメン  
バーは困ったような表情になる。

恋花「一葉・・・どうするの？」

一葉「・・・ひとまず向かいましょう。」

そして彼女達は百合ヶ丘へと向かって歩き始めた。

## ラスバレー1章☒

梨璃「到着です！こちらがわたしたちのガーデン、百合ヶ丘女学院となります！」

駅を後にした彼女達は百合ヶ丘女学院の正門へと来ていた。

千香瑠「訪れるのはいつぶりでしょうか……。やはり、歴史が長いだけあって趣のある素敵な校舎ですね。」

灯莉「だよ、だよね☆特にあの門の柱とこのデザイン、あれすごく好きー！」

二水「そういえば、千香瑠様は過去に百合ヶ丘へいらっしやったことがあったんですねー。」

千香瑠「ええ、その際は色々な方にお世話になりました。お時間があるようでしたらご挨拶させていただければと思います。」

楓「わかりましたわ、その旨を関係各所に通達しておきましょう。」

梨璃「では、中の方をご案内しますね。宿泊するのはグラン・エプレのみなさんやわたしたちと同じ、寮の新館になります！」

一葉「そのことなのですが……。私たちはここから先へは行けません。」

梨璃「……えっ？どういう、ことですか……？」

梨璃が張り切って案内しようとした時に出た一葉の言葉に彼女は困惑した声をもらした。

蓮夜「G・E・H・E・N・A・か……。」

一葉「は、はい……。予想していたのですか？」

蓮夜「……百合ヶ丘は反G・E・H・E・N・A・派だからな。」

音羽「……予想通り。」

叶星「音羽ちゃんもわかってたの？」

音羽「G・E・H・E・N・A・のことを考えれば妥当……。」

高嶺「・・・新雑ね。」

音羽「当たり前・・・です。」

音羽の新雑な反応に高嶺が苦笑いしていると茜がこちらも苦笑いしながら音羽へと近づいてくる。

茜「一応アタシの所属なんだけどな・・・。」

音羽「茜には何も無い・・・ただ私は思ったことを言っただけ。」

茜「思ったことを言うのはいいけどもう少しオブラートに包んで・・・もういいや。」

音羽の返答に茜が大きいため息を吐いていると申し訳なさそうな表情をした恋花が口を開いた。

恋花「え、えっと・・・だからこれをよしとしない人が多くてね。一

応エレンスゲからの許可はもらっているけど・・・。」

梨璃「そ、そんな・・・で、でも確かこの前一葉さんは来ていましたよね？」

一葉「はい、そうなのですが、以前来たときは、私ひとりでしたので・・・、それでもかなり配慮していただきました。」

夢結「今回も、理事長代行には、わたしと百由とで直接許可を取っているわよ。」

恋花「それは聞いてるよ。だけど・・・、それでも、この人数で百合ヶ丘の学院の敷地に入るのは・・・ちよつとね。」

梨璃「そう、だったんですか・・・。」

彼女達の言葉に悲しそうな声を漏らす梨璃の姿を見た一葉は一度呼吸を整えると彼女前に立った。

一葉「ですが、ヘルヴォルはなにがあらうと、一柳隊とグラン・エプレと共に戦います。結束に偽りはありません！」

梨璃「……一葉さん、」

彼女の宣言に暗くなっていた梨璃の表情に戻るが、次はその様子を見ていた定盛が困惑した表情になってしまう。

定盛「えつと、さつきからどういうこと？百合ヶ丘とエレンスゲって何かあるの？」

高嶺「姫歌さん、今は口を挟まないでおきましょう。」

音羽「……知らなくていいこともある。」

定盛「あ……は、はい。」

定盛が威圧感に襲われている中、鶴紗は眉間にしわを寄せる。

鶴紗「エレンスゲは、あのゲヘナの息がかかった学校……。正直、わたしは嫌い……。」

二水「鶴紗さん……。」

二水が心配そうに鶴紗を見てると彼女はある方へと目を向ける。

鶴紗の視線の先、そこには藍がおり彼女を見た鶴紗は不機嫌そうな雰囲気なくなり微笑み始めた。

鶴紗「だけど、藍たちのことは嫌いじゃない……。ゲヘナとか関係ない、一緒に戦った仲間だから。」

藍「うんっ、らんたち友達だよ！」

鶴紗「……。」

夢結「それでどうするの？ここまで言われても、やっぱり言っしまうの？」

鶴紗の言葉に嬉しそうにはしゃぐ藍を横に他のメンバーはこれらの事を考えていた。



一葉「・・・宿は街の方でとる予定でした。当然、合同演習自体は参加させていただきます。」

楓「もう、頑固な方ですわね！おとなしく同じ釜の飯を食べればいいんですわ！」

雨嘉「その言い方はちよつと・・・。」

梨璃「わかりました！」

焦れつたくなつた楓の言葉に困惑する雨嘉を横に梨璃は何かを思いついたのか顔をあげる。

梨璃「一葉さんたちが百合ヶ丘に泊まらないということでしたら、わたしたちが一葉さんたちの宿にお邪魔します！」

一葉「・・・えっ？」

いきなりのことに口が塞がらない一葉に梨璃は嬉しそうに言葉を紡ぐ。

梨璃「わたし、ホテルに泊まるのって憧れだったんですよ！みなさん一緒だったらきつと楽しいと思います！」

音羽「・・・やるのが大胆、」

梨璃「あつ、でもさすがにこの人数は空き部屋はないですかね？できればグラン・エプレのみなさんもお連れしたいですし・・・。」

叶星「ええ、よろしければ私たちも一緒にさせてください。いいわよね、みんな？」

灯莉「いいよ、いいよ☆新しいところに泊まれるの、面白そうだし！」

定盛「まあ、合宿なのに色々な場所で寝起きするのはなんか違うわよね。あ、でもひめかの部屋は可愛いのでお願いしますね！カプセルホテルとかはダメですっ。」

紅巴「可愛い部屋というのはい体・・・。」

楓「ですが、お金の方は問題ありませんの？地方のホテルとはいえ

何泊もするなら結構なお値段になりますわ。」

蓮夜「1番気にしな、」

楓「特にわたくしはロイヤルスイートを所望致しますから！ですわよね、梨璃さんっ!？」

蓮夜「・・・。」

ミリアム「ナチュラルに梨璃と同室になる流れにしておるな。」

楓の自信満々に放った言葉に彼が言葉を失っていると後ろにいる夢結達が苦笑いしながら彼女へと視線を向けた。

一葉「ま、待ってください！今回のことは私たちの勝手な思惑で決めたこととして、一柳隊やグラン・エプレのみなさんを巻き込むわけには・・・。」

高嶺「あら、私たちはこれから同じ目標で動く、いわば運命共同体よ。巻き込むも何もないのではなくて？」

一葉「う・・・それは・・・っ。」

彼女達が盛り上がる中正気に戻った一葉は慌てたながら言葉を紡ぐが彼女達はまるで気にする様子はなく彼女は助けを求め恋花達に視線を向けるが、

恋花「あははっ！してやられたね、一葉。こっちの負けだよ、うんうん。」

彼女達もお手上げのようで助けるどころか恋花に至ってはノリノリであった。

そんな四面楚歌な状況でどうにか突破口がないかと思考を巡らせていると、

二水「あつ、あの・・・ちよつとよろしいでしょうか！」

梨璃「どうしたの、二水ちゃん？ホテルのお金ないなら、わたしバ

イトするよ！」

定盛「いやいや、今からだと間に合わないでしょう。」

蓮夜「代行の事だから必要経費扱いしてくれそんな気もするが……最悪俺が出すか、」

そう言いながら彼は自身の財布の中身を確認しながらホテル代を計算をしているのか考えふけていた。

そんな彼の財布にはお札が詰まっておりそれを見たミアムは表情を引き攣らせる。

ミアム「……どうして、そんなに持つておるのじゃ、」

蓮夜「俺の専門ギアの特許 百由との合同研究とデスマーチ……七割型後者な。」

ミアム「う、うむ……。」

彼の言葉を聞いた彼女はその光景地獄がはっきり見えたのか彼から目を逸らし離れる。

二水「い、いえ、そうではなくて、あのっ、あのですね……。わ、わたしにいい考えがありますっ!!」

その一言に全員の視線が彼女へと向いた。

## ラスバレー1章☒

二水「えーと・・・こちらです、みなさん！」

灯莉「わあああ、すつごーい☆なんだか今にもケンタウロスが出てきそう♪」

藍「けんたろう・・・だれ？」

楓「ケンタウロスはともかく、たしかに今にも野生動物が飛び出してきたような山道ですわね。」

ヘルヴォルのメンバーが百合ヶ丘に入れない問題への解決案を考えていた彼女達は今二水の案内の元森の中を歩いていた。

そこは左右を岩肌に囲まれた天然の要塞となっておりその壁一面に草木や蔦が生い茂っておりそれが神秘的な情景を生み出していた。

楓「本当にこの先に合宿に使える施設なんてあるんですの、二水さん。」

二水「わ、わたしも直接見に行ったことがあるわけでは・・・でも百合ヶ丘商店街の会長さんがおっしゃるにはたしかにあると・・・。」

叶星「百合ヶ丘商店街・・・それってもしかして、百合ヶ丘グリーンフェアでお世話になったところかしら？」

二水「そ、そうですっ！なんでも自治体で定期的に行っているキャンプで使っているロッジがこの先にあるとか・・・。」

恋花「それを特別にタダで貸してくれるなんでも太っ腹だねー。」

蓮夜「・・・俺は参加してないから分からないがなんかあったのか？」

ミリアム「色々あったのじゃよ。灯莉も看板を描いていたのじやが、あれが会長にえらく気に入られたらしい。」

灯莉「えー、本当!? やった、嬉しいな〜♪」

ミリアムから自身の作品が好評だったことを聞いた灯莉は彼女の

周りを回りながら嬉しそうにはしゃぎ始める。

定盛「やるじゃない、灯莉。」

音羽「・・・さすが、」

灯莉「えへへ♪」

定盛「ひめかもやっぱりステージイベントをやるべきだったわね。そして、それが切っ掛けで、」

音羽「それはない・・・。」

定盛「なんでよ!？」

音羽「・・・予算的な問題。」

定盛「現実的に!？」

音羽「それにステージの制作時間自体がない。」

定盛「・・・たしかにそうだけど、とにかく出来てればファッション誌の表紙をひめかが飾ってたわ! 神琳さん、あなたには負けないんだから!」

神琳「は、はい・・・? お手柔らかにお願いいたします?」

突然標的にされた神琳は彼女の言葉が理解出来ず困惑してしまうが、そこに高嶺が苦笑しながら近寄ってくる。

高嶺「ごめんなさいね、神琳さん。でも散歩中に大型犬に喧嘩を売るチワワみたいで可愛いでしょう?」

定盛「高嶺様、チワワって・・・!」

音羽「・・・たしかに、」

定盛「ちよつと、音羽まで!・・・あれ? でも可愛いつて・・・だったら別にいつか。えっ? 待って、今ほめられたの・・・?」

蓮夜「・・・大丈夫か?」

二水「あつ、もうすぐ着きますよ! この先に進めば、合宿するためのロッジが・・・!」

彼が2人に遊ばれている定盛に不安感を覚えていると前方から二

水の声が聞こえた。

それに気づいたら彼が彼女の方を見ると木々隙間からロτζジが見えていた。

ロτζジは木材特有の優しい色合いをしており、木々の生い茂る森の中というシチュエーションと調和しており、安らぎを感じるものとなっていた。

梨璃「うわああ・・・素敵です！」

千香瑠「とても雰囲気の良いロτζジですね。」

音羽「落ち着けそう、」

結梨「大きい〜！」

蓮夜「・・・ここならしつかり休息も取れそうだな、」

茜「景色じゃなくてそこですか？」

蓮夜「景色も合わせてだ。・・・一応今回の目的は合宿だからな。しつかり休めないと意味がない。」

茜「そうですね、もう少し・・・。」

彼の反応に茜は文句を言おうとするが何かを思い出したのか口を噤む。

二水「す、すごい・・・。」

鶴紗「なんで二水が驚いてるの。」

二水「いえ、だって、こんなに立派な施設だと思わなくて！会長さん、ありがとうございます・・・！」

叶星「大切に使用させていただきましようね。来た時よりも美しくしてお返ししなくては。」

一葉「・・・。」

夢結「どうかしら、ヘルヴォルのみなさん。ここでしたらガーデン同士のしがらみは関係ないわ。」

各々で感想を言い合う中、一葉は唾然としていた。

それに気づいた夢結が彼女に話しかけると彼女はハツとした表情になる。

一葉「・・・はい、そうですね。では、お言葉に甘えて私たちも一緒にさせてください。」

茜「改めてよろしくお願いします。」

夢結「こちらこそ、よろしくお願いするわ。」

一葉の一言によりロッジを使うことが決定したヘルヴオルのメンバーが喜んでいると恋花がロッジへと駆け出す。

恋花「いえーい、やったー！おしゃれなロッジでおしゃれなバーベキューやるぞー！」

藍「ばーベきゅー！」

結梨「バーベキューー！」

瑠「いつ決まったの・・・？」

バーベキューという言葉に藍と結梨も跳ねるように駆け出すと、瑠は困惑するが、それを見た恋花は当たり前前とでも言いたげな表情になると、

恋花「屋外で大勢が集まったらバーベキューしかないでさしよ♪もしくはカレーでもいいよっ。」

紅巴「わぁ・・・林間学校みたいで楽しそうです・・・っ。」

恋花「でしょー？ほらほら、もうやるっきゃないってー！」

一葉「その決定権は私たちにありませんよ、恋花様。第一、道具も何もないのにー」

テンションを上げていくメンバーを見て一葉はため息を吐きながら、恋花達をなだめようとすると、

??? 「道具だったらここにあるわよ。」  
一葉「え・・・っ？」

ここにいるメンバーの誰のものでもない声が響いた。  
それに気づいた一葉が慌てたそちらを向くと、

百由「コンロに薪、それから人数分の食器まであるわ。会長さんも  
気が利くわねー。」

天葉「遅いわよ。特に蓮夜、貴方これ重いんだから早く受け取って  
よね！」

そこにはロッジから出てくる百由と疲れた表情で3つのケースを  
背負う天葉の姿合宿あった。



## ラスバレー1章 ⊠

梨璃「百由様！それに天葉様も！いらっしやってたんですかっ？」  
百由「ええ、今回の作戦の一部は私が立案したからね。作戦本部長として帯同させていただくわ。」

ミリアム「作戦本部長って……自分で勝手に言ってるだけじゃろ。」  
梨璃「それでは天葉様は？」

百由「天葉は荷物持ちよ。」

天葉「流石に酷くない!？」

百由「だってそれを持ってくるために来ただけじゃない。」

天葉「貴方が手伝っていただんでしょう！」

百由の新雑な発言に天葉は嘸み付くが百由はそれを受け流す。

百由「そんな事より蓮夜、持ってきたわよ。」

天葉「ワ タ シ ガ ネ!!」

蓮夜「……なんかすまん。」

天葉「それはいいわ。私も完成品が気になっていたから、」

そう言いながら彼女は背負ったケースを2つ地面に下ろす。

ケースはどちらも大きく片方は彼女の身長よりも少し高い程度であるが、もう片方は高さ4mと巨大なものとなっていた。

巨大なケースは重さもかなりのものとなつていようで地面に置いた瞬間重々しい音が鳴り響き底が地面に埋まってしまうほどであり彼女はそれを地面に下ろすと重荷が減ったからか軽やかな動きでもう片方のケースも地面に置く。

天葉「本当に重かったのよ、コレ。」

蓮夜「だろいな、だがもう片方は軽いだろ？」

天葉「まあね。」

夢結「ごめんなさいね。」

天葉「だから、いいって、とにかく早く開けましょうよ！」

蓮夜「わかった。」

夢結「そうね。」

一葉「あ、あの・・・すこしよろしいでしょうか？」

2人は天葉に急かされるとケースの元へと歩き出す。

それを見て理解が追い付いていない一葉はおずおずと2人に話しかける。

夢結「どうしたのかしら？」

一葉「あの、それは？」

蓮夜「これか、これは俺と夢結の新しいCHARMだよ。」

叶星「そうなの？夢結さんともかく貴方は色々と使っていたけど？」

蓮夜「なかなか俺の戦い方に会うものがなかったから色々使ってたんだが、やっと完成してな。」

叶星「そ、そうなのね・・・。」

先程の戦闘で彼が全力を出せていなかったことを知った叶星の表情が引き攣らしている中2人はケースの前まで近寄り各々のケースを持つ。

一葉「夢結様がそちらなのですわ・・・。」

夢結「以外かしら？」

夢結は一葉の発言に首を傾げながら自身の持つケースへと目を向ける。

彼女の持つケースは彼女の身の丈の倍以上あり持ち手からは軋む音が響いていた。

一葉「い、いいえ、ただかなりの重量があるようなので黒鉄さんが

使うのかと・・・。」

蓮夜「使えはするだろうが、流石に俺もこれはきついぞ?」

一葉「そこまでなんですか?」

夢結「持ってみるかしら?」

夢結はそう言うと一葉の前に自身のケースを出すと彼女は両手でケースの取っ手を握った。

夢結「離すわよ。」

一葉「はい、わかりまっ!」

彼女が握ったことを確認した夢結が手を離すとケースは重力にしたがって地面へと落ちる。

一葉も必死に落とさないようにしているがその健闘むなしく大きな音を立てながら地面へと落としてしまう。

梨璃「一葉さん!」

恋花「一葉!大丈夫!」

一葉「は、はい、大丈夫です。・・・しかし、持ち上がりませんね。」

突然のことに驚いた梨璃と恋花が一葉に駆け寄ると彼女は無事であると言うと、再びケースを持ち上げ用途するが持ち上がらない。

それを見た夢結は苦笑しながらケースを軽々と持ち上げるとそのまま天葉の元に歩いて行く。

一葉「あんなに重いものを軽々と・・・。」

恋花「そんなに重かったの?」

一葉「はい、持ったく持ち上がりませんでした。・・・鍛え直さなくてはいけません!」

恋花「程々にね・・・。」

夢結の姿を見て闘志に燃える一葉に、恋花は悟ったような表情をしながら細く呟いていた

蓮夜「……とにかく開けるか、」

夢結「ええ、そうね。」

2人は一葉達のやり取りを横目にケースの留め金に手をかける。留め金を外すとケースが開きその中身が姿を表す。

蓮夜「……これなら行けるな。」

彼の持つケースからは一本の異形の太刀が姿を覗かせる。その太刀は柄と刀身が直接繋がっており柄の先には小型の銃身を備えはエンジンの様なものが繋がっておりそこから峰に備わった固定具へと繋がっていた。

それを手持った彼は握り心地を確認すると頬を弛め腰に着装する。

百由「どうかしら？」

蓮夜「バッチリだ。アレと合わせれば思い通りに戦える。」

百由「それを使うためだけにCHARMを全部改修したものね。」

彼は百由に感想を述べると再び柄を握り鞘から抜く。

鞘から抜き放たれた刀身は薄くその厚みは5mmもないだろう細さであり、少しでも力を加えてしまえば折れてしまうのではないかという危うさと美しさを兼ね備えていた。

叶星「……かなり細いけど大丈夫なのかしら？」

恋花「これ、本当に使えるの？」

蓮夜「そもそも受けに使う予定はないからな。基本的に回避と受け流しを主軸に受ける時はこつちを使う予定だ。」

そう言いながら彼は自身の腰に携えられた銃剣に手を添える。

蓮夜「元々複数の武器から戦況に合わせて使い分けるのが俺の十八番だからな。弱点があるなら他で補えばいいんだよ。」

高嶺「つまり複数のCHARMを使い分けることの出来る技量があると言うことかしら？」

天葉「そうよ！」

彼の考えとそこから予想できる技量に彼女達が驚愕していると、そこに天葉が割り込んでくる。

蓮夜「お前が言うのかよ……。」

天葉「いいじゃない、彼ね、一つ一つの練度は武器種によるけれどそこまで高くないのだけれど、使える武器種が本当に多いのよ。……練度もそこまで高くないって言ったけど1つのCHARMを使い続けた人って言う意味で普通に高いのよね。」

蓮夜「……なんか器用貧乏みたいな言い方だな。」

天葉「みたいじゃなくてそうでしょう？……まあ、何種類かはすごいことになっているけど、」

夢結「そうね。……特に長もものでの距離の取り方が絶妙なのよね。」  
天葉「そうなのよ！いつも私の間合いのギリギリ外から攻めて来るのよね！」

蓮夜「だけど、特訓にはなるだろう？」

天葉「そうだけれど、」

彼の言葉にぐうの音も出ない彼女は彼握る太刀へと目を向ける。

天葉「それには酷い目に合わされたわ。」

蓮夜「それに関してはすまん。」

天葉「いいのよ、ただ百由にドヤされたただけだから、」

そう言うと彼女は空を見上げながら遠い目をし始める。  
それを見て何があったのか気になった恋花は彼女に声をかける。

恋花「酷い目にあったってどうしたの？」

天葉「それはね……。」

彼女の間に天葉は遠い目をしたまま、その時の出来事を話し始めた。

## ラスバレー1章☒

天葉「貴方から誘うなんて珍しいわね？」

蓮夜「試したいことがあってな。・・・迷惑だったか？」

彼女は彼に呼ばれて訓練場に来ていた。

普段なら訓練に精を出すリリイ達が多くいるのだが、今は2人以外に人影はない。

天葉「いいえ、元々暇だったから大丈夫よ。」

蓮夜「なら良かった。」

そう言うと彼は観戦席へと歩いて行く。

彼女は自身のCHARMに手をかけるが、彼が何も持っていないことに気づき1度CHARMから手を離す。

天葉「いつもみたいの色々持ってきてないのね？」

蓮夜「ああ、今日は一本だけなんだ。」

そう言うと彼は観客席に置いてあるケースから一本の刀を取り出した。

天葉「変わった形ね・・・。」

蓮夜「色々と試行錯誤した結果こうなったんだが・・・やっぱり機能重視にするとどうしてもデザインがな・・・。」

天葉「・・・そうらしいわね。・・・よく百由から愚痴られるわ。」

彼は一通り刀を確認すると腰に携え彼女の元へと戻って来る。

それを見た彼女は先程までの雰囲気とは打って変わって真剣な眼差しでCHARMを取り出し構えた。

天葉「貴方のことだから、普通じゃないのでしょうか？」  
蓮夜「それは戦ってみてからののお楽しみということだ！」

彼女の変化に気づいた彼は彼女から距離を置くと左手で鞘を、右手で柄を握ると地面を蹴って彼女へと急接近する。

素早く彼女へと接近した彼はその勢いのまま刀を抜き放つ。

最速で最短距離を攻める一撃、実践慣れしているリリイでも反応が困難であろう一撃を彼は放つが、彼女は後方に重心を移動させるだけで躲してしまう。

彼の一撃を躲した彼女は、振り抜いて無防備になった彼に横薙の一撃を放つ。

しかし彼も予想をしていたのか右足の力を抜く事で重心バランスを崩すと重力に身を任せ彼女のCHARMの下へと潜り込む。

彼女のCHARMが彼の頭上を通過した瞬間彼は再び足に力を入れると前方に飛ぶ。

お互いに前方へと進むことで2人の位置が入れ替わると振り返ると同時にお互いの得物を振り下ろした。

鈍い金属音を響かせながら弾き合うと2人とも弾かれた勢いを利用して身体を回転させながら再び斬り掛かる。

先程よりも重い音を響かせながら火花を散らすお互いの得物に力を込める2人、

天葉「力押しつて、貴方にしては珍しいわね！」

蓮夜「試作機だからな、調整が済んでないんだよ！」

鏢迫り合いをする2人は埒が明かないと判断したのかお互いに後方に飛び体勢を整えると超近距離での接近戦を開始した。

彼女がCHARMを振り下ろすと、彼がそれを半身になって躲し。

彼が刀を切り上げると、彼女は上体を逸らして躲す。

相手の一撃を躲して斬り返す。

一手でも間違えてしまえば即敗北という状況で2人は相手を崩す



ためにお互い思考を巡らせる。

天葉「いつもみたいに距離は取らなくていいのかしら？」

蓮夜「わかってて言ってるだろ、」

彼女の言葉に彼は返すと彼女に突きを放つ。

それを見た彼女は手首のスナップを利用してコンパクトに切り上げることで彼の刀を弾こうとするがそこで彼女は違和感を感じる。

天葉（軽い・・・ッ!?)

彼の一撃が軽かったのだ、

彼女の予想よりも簡単に弾かれた彼の刀に不信感を持った彼女が彼の手を確認すると彼女は焦りの表情を見せる。

彼は突き出された刀を握っていなかったのだ。

指を開切り完全に得物を失ってしまった手、これだけならば彼女は焦らなかつたであろう、

彼の親指が柄の上方に存在していなければ、

天葉「マズっ!!」

蓮夜「・・・」

彼女に弾かれた刀は彼の親指を軸にして回転する。

刀は親指から手首へと軸を変えると一周し再び彼の手に収まった。それに気づいた彼女の急いでCHARMを引き戻そうとするが既に動き出している彼とではあまりにも速度に違いがあり過ぎた。

それを察した彼女はすぐさまCHARMを手放すと後ろに飛ぶ。

勢いよく手放したCHARMは回転しながら落ちていくが彼はそれを気にすること彼女へと前進する。

彼女が離そうとした距離を一瞬で詰めた彼の一撃が彼女に届こうとした時、彼の視線から彼女が消える。

蓮夜「・・・ツ!？」

彼女を見失った彼はすぐさま周囲を確認しようとするが、背筋が凍る感覚に襲われたため思考を切り替え前転の要領でさらに前に出る。彼が反転した世界で後方を確認するとそこには片足立ちでCHARMを振り抜いた状態の彼女の姿があり、そこ刃の軌道はちょうど彼の頭のあつた場所を通り過ぎていた。

天葉「あつぶな・・・やってくれたわね！」

蓮夜「・・・それはこっちのセリフなんだが、」

距離を取り体勢を整えた彼が振り向くと、そこにはこちらに対して文句を言いながら靴を履き治している彼女の姿があつた。

蓮夜「・・・CHARMに足を掛けて無理やり躲すつて無茶するよ。」

天葉「成功したんだからいいじゃない、それになりふり構つてたら・・・ね?！」

蓮夜「・・・。」

天葉「もう、躊躇わないわよ！」

彼が構え直すのを見ると彼女は先程彼にされたように急接近し、それを彼は迎え撃とうとする。

彼女はCHARMを背後に回し自身の身体で隠すと彼の懐に入り込み切り上げる。

それを彼は後ろに下がることで空間を作り刀を振り下ろした。

蓮夜「なっ!？」

自身の得物が彼女へと迫る中彼は彼女のCHARMを見て驚愕する。

彼女のCHARMはこちらに対して刃を向けていなかったのだ。刃ではなく腹による一撃、それを見てこちらの体勢崩すことを目的としていると判断した彼はもう一度驚愕することとなる。

彼の得物と衝突する寸前、彼女のCHARMの刀身が割れたのだ。彼女は彼の刀と当たる寸前にCHARMを射撃形態にしたのだ。

それにより守りを失った彼女に彼の一撃が迫る。

彼は彼女の奇行に驚愕しながら得物を自身側に引くことで勢いを殺す。

彼が作った一瞬の隙、驚愕の連続で正常な判断が出来ない彼に彼女は勝負を仕掛ける。

彼が引き戻そうとしている刀を再び近接形態に変形させることで挟みこんだのだ。

蓮夜「ウツソだろお前！」

天葉「おりゃー!!」

彼女は自身のCHARMを使えなくすることで彼の刀を同じく使用出来なくしたのだ。

そのまま刀を巻き込むように自身のCHARMを引き戻そうとする彼女を見て、自身の得物が破壊されると判断した彼はすぐさま手を離す。

それを見た彼女すぐさまCHARMの軌道を修正し上へと振り上げる。

彼女の行動を見て彼は飛び上がると右手で柄を握り直しCHARMを足場に跳躍した。

それによりちようど彼女がCHARMを射撃形態に変えたことにより拘束が解けた刀と一緒に彼は彼女から距離を取ると1度呼吸を整えた。

蓮夜「流石に今のは危険すぎるぞ！」

天葉「どうせ貴方なら止めていたでしょう？なら大丈夫よ。」

蓮夜「・・・躊躇いどころか、」

彼は彼女の行動を注意するが、彼女は彼の言葉を聞こうとしない。それを見た彼の雰囲気が変わる。

冷たく突き刺さるような、鋭い刃の様な気配を纏った彼は得物を構えなおすと腰を落とし、

蓮夜「・・・行くぞ、」

彼は彼女に向かって駆け出した。

天葉「その後、百由が来るまで1時間くらいかしら？ぶっ続けてやってたらCHARMが壊れちゃってね・・・。」

蓮夜「壊したのマジですまん・・・俺も調子に乗りすぎた。」

2人の話を聞いた彼女達の表情は引き攣っていた。

一葉「お二人共、お怪我はなかったのですか？」

天葉「なかったわよ？」

叶星「訓練にしては危険すぎないかしら？」

蓮夜「・・・俺も思うことはあるが、コイツとの場合だいたいこうなるからな・・・慣れたよ。」

高嶺「・・・慣れでいいのかしら？」

百由「良くないわよ！いつも壊れたCHARM直すのは私なのよ！」

天葉「・・・ごめんなさい。」

蓮夜「・・・。」

天葉の話聞きヒートアップした百由を宥めていると、彼女の端末から着信音が鳴り響く。

それに気づいた天葉は端末を取り出し確認すると顔を青くした。

天葉「急いで帰らないと!!」

夢結「どうかしたのかしら？」

天葉「楠美が怪我したって!!」

蓮夜「マジか、様態は？」

天葉「分からないわよ!とにかく急がないと!今日はお暇させてもらわね!」

夢結「え、ええ・・・。」

そう言うと彼女は森の奥へと走り去って行った。

それを見た彼はため息を吐くと太刀をケースへとしまう。

蓮夜「アイツも帰ったし、俺も帰るとするか、」

突然のことに困惑する彼女達に彼はケースを持つとそう呟いた。

## ラスバレー1章☒

梨璃「・・・えっ？」

蓮夜「そうだが？」

ミリアム「このまま泊まる流れだと思っただんじやが・・・。」

蓮夜「・・・いやみんな忘れてない？」

梨璃「忘れてるって何がですか？」

彼の言葉に疑問を持った面々は彼の言葉の意図を考える。

今合宿にて彼は彼女達と共に行動する予定だったのだからこのままここに泊まっても何も問題ないだろう。

なのに彼は学院に戻ると言う。

雨嘉「工廠科の方で用事があるんですか？」

蓮夜「やることはあるが急ぎではないぞ。」

ミリアム「なら、百由様が何かやらかしたのかのう？」

百由「ちよっと！それは失礼じゃないかしら!？」

蓮夜「今回は違うぞ。」

楓「普段ならそれが正解ですね・・・。」

彼女達は思い当たる節を次々と確認していくが、彼は首を縦に振らない。

蓮夜「・・・マジで分からないのか？」

梨璃「え・・・あつ、はい、」

そんな彼女達に驚愕と呆れの混ざった表情を向ける彼に梨璃は顔を俯かしてしまう。

夢結「・・・貴方達、」

二水「夢結様はわかったのですか？」

夢結「ええ、……そもそも一般的な常識よ？」

神琳「常識……ですか？」

鶴紗「……わかった。」

梨璃「鶴紗さんわかったの！教えて！」

鶴紗「……教えるも何も本当に常識的なものだぞ？」

楓「常識と言われましても、もう少し具体的にしてもらいませんと、」

鶴紗「……黒鉄さんと私の違い。」

神琳「私達と彼の……ああ、たしかにそうですね。」

鶴紗の出したヒントに神琳は納得いったように頷いているが、他の面々は腑に落ちないのか首を傾げる。

結梨「ねえ、神琳？……何が違うの？」

神琳「結梨さんに分かり易く例えるなら彼だけ制服が違うことでしょうか？」

結梨「雨嘉も違うよ？」

神琳「雨嘉さんの違うとは別にあるでしょう？……もしも彼が着ていたら警察の方にお世話になるのではないのでしょうか？」

結梨「……？」

二水「黒鉄さんが来てたら捕まる……あつ！そういう事ですか！」

神琳の言葉に引っかかる所があったのか二水は思考に耽ける。数秒悩み続けていると何か思いついたのか顔を上げた。

梨璃「二水ちゃんもわかったの！」

二水「はい！性別ですよ性別！」

雨嘉「……あつ！」

ミリアム「そういえばそうじゃったの……。」

楓「すっかり、忘れてましたわ。」

蓮夜「……それはそれで酷くないか？」

二水の一言に納得いった表情になる彼女達だが、その反応に彼は項垂れる。

蓮夜「そういうことで、男の俺がこのメンツの中に入るの不味いだろう。・・・下手すると社会的に死ぬぞ。」

梨璃「あはは、・・・たしかにそうですね。」

蓮夜「だから俺は帰る、ここはそこまで学院から離れてないからすぐに来れるし毎日必ずここに来るから、それでいいかな?」

梨璃「は、はい。それで問題ないです。」

蓮夜「それじゃあ改めて帰らして貰うよ。欲しいものがあつたら連絡してくれこっち来る時に持つてくるから、」

梨璃「はい、ありがとうございます。」

夢結「・・・気をつけなさいよ。」

蓮夜「わかってるって、また明日な。」

その後一通りの挨拶を終えると彼は天葉の消えた方へと歩いて行った。

少し暗くなり始めた森の中、彼は学院への帰路に着いていた。

蓮夜「・・・。」

草木が風の揺れる音のみが響く森の中、彼は辺りを見回す。

蓮夜「いるのはわかってるから出てこいよ。」

天葉「・・・本当に鋭いわね。」

ただ木々のみが映る景色の中、彼はある一点に目を向けると一言呟いた。



彼の視線の先、そこには何の変哲もない大きめの木が一本生えてい  
るだけだったが、そこから声が聞こえ人影が現れる。

蓮夜「そもそも隠れる気なかつたら？」

天葉「そうね。・・・少しいかしら？」

蓮夜「いいぞ、」

彼の返事を聞いた彼女は彼の横まで来ると2人はそのまま歩き始  
める。

蓮夜「今回の作戦・・・アールヴ Heim も参加するんだろう？」

天葉「ええ、ただ直接じゃなくて作戦区域の周囲防衛よ。」

蓮夜「だと思ったよ。・・・じやなきや楠美さんの誘いを断って百  
由の手伝いなんてするわけないからな。・・・おおよそ他レギオンの  
確認ってところだろう？」

天葉「そうよ。別行動でしょうけど、ある程度は把握しておかない  
とね。・・・それで、まだなのかしら？」

彼の質問に笑いながら返していた彼女であったが彼の質問が終  
わった途端彼女の雰囲気が変わる。

先程とは違う真剣な眼差しに彼の纏う空気が重くなる。

蓮夜「・・・今は無理だ。」

天葉「いつなら大丈夫なのかしら？」

蓮夜「・・・今回の件が終わったらすぐに、」

天葉「そう、わかったわ。」

彼女は彼の言葉を聞くと張り詰めた空気が霧散しいつもの空気に  
戻る。

蓮夜「これが本当の目的だったか、」

天葉「あら？目的は彼女達の様子見よ？・・・これはついだね。」

蓮夜「そうか、すまないな。」

天葉「いいのよ。そっちにも事情があるのでしよう？」

蓮夜「・・・ああ、」

天葉「なら待つしかないでしょう。でもちゃんと説明はしてもらってからね。」

蓮夜「わかってるって、」

天葉「それじゃあさっさと帰るわよ。楠美が待ってるわ!!」

彼女は満足してように笑みを浮かべると帰路を駆けて行く。それを見た彼は1度空を見上げると頭を振り彼女のあとを追っていった。

## ラスバレー1章☒

百由「・・・さて、集まったわね。」

梨璃「はい・・・っ！」

夢結「全員集めなくてもよかつたの？」

翌日の朝、百由により梨璃達はロッジの前に集められていた。しかし、夢結は数人しかいないことを疑問に思い彼女は百由に問いかける。

百由「ええ、方向性を決めるだけだからね。まずは戦術理解度が高いであろうメンバーだけでいいわ。」

定盛「なるほど、それでひめが呼ばれたのですね！可愛くて頭もキレル・・・それがアイドルリリイですから！」

二水「・・・ほあく。」

百由の言葉を聞いた夢結は納得したようで頷いていると、横で定森が興奮した様子で胸を張る。

定盛「ちよつと、なに?!?ひめかがここにいるのがおかしいっていのっ?」

二水「ほえっ?!?ち、違いますーっ!ものすごい自身だなど思ってますすがです、ひめひめさん！」

定盛「え・・・今、ひめかのことひめひめって呼んだ!?!」

そんな彼女の様子に二水が蓬けていると、それが気に食わなかったのか定森は彼女に詰め寄る。

突然のことに驚いた二水は一瞬硬直してしまうが、すぐに正気を取り戻し、彼女を褒めると気を良くしたようで嬉しそうに身体を揺らす。

二水「は、はい・・・そう呼ぶようにおっしやってましたから。」  
定盛「あなた、いい人ね！特別にサインを書いてあげるわ！」  
二水「え・・・っ。」

彼女が気を良くしてくれたことに二水が安堵していると、何故かサインを貰える？ことになり再び啞然としてしまう。

叶星「姫歌ちゃん、それは後でね。今は作戦会議に集中しましょう。」

定盛「はい、叶星様っ。」

一葉「ヘルヴォルからは私と恋花様が参加させていただきます。」

恋花「おっすおっす、よろしくねー。」

百由「それでは作戦会議を初めようと思ったんだけど・・・遅いわね。」

彼女達の準備が終わったことを確認した百由は周りを見渡すとため息を吐く。

夢結「ちゃんと連絡したのかしら？」

百由「ええ、もちろんよ。」

叶星「・・・何かあったのかしら？」

一葉「たしかに心配ですね。」

百由「いつも集合時間前にはいるはずなのに・・・来たら文句の一つでも言いたい気分だわ。」

梨璃「・・・アレ？」

夢結「梨璃、どうかしたの？」

百由が苛立ちながら端末を操作し始めると、梨璃は何か思い出したのか声を上げた。

梨璃「それが、百由様が私たちに連絡したのって今朝だったような

気がしまして、」

夢結「そういえばそうね・・・百由。」

百由「ちよつと、蓮夜！今どこにいるのよ！」

蓮夜『何処って今そつち向かつてる途中だ！』

彼女の言葉にある可能性に至った夢結が百由に声を掛けようとする  
と彼女の端末から彼の声が響いた。

百由「遅いじゃない！もう集合時間すぎてるわよ！」

蓮夜『朝いきなり連絡来てすぐに来いはさすがに無理だろ！それに  
コツチはお前に頼まれたものの準備があるんだぞ！・・・そのせいで  
寝不足だしやつと終わって時間あるから仮眠取ろうとした途端これ  
だ。お前に付き合わされて慣れてはいるが限度があるぞ!!』

百由「・・・。」

蓮夜『それに集合時間まで1時間前つて、本当にギリギリじゃない  
か！その間に準備諸々済ませては物理的に無理だ！・・・あと10分  
以内に着くから先にやっけてくれ！』

彼の叫び声とともに通話が切れる。

百由は端末の電源を切ると懐にしまい1度咳払いをすると、

百由「・・・それではまだ会敵したことのないグラン・エプレのみ  
なさんのために、ざつと特型ヒューズの説明を行うわね。」

夢結「・・・百由。」

百由「・・・ごめんなさい。」

夢結「後で謝りなさい。」

百由「・・・はい、」

夢結の無言の威圧に百由は項垂れるが、すぐに立ち直り資料を配  
る。彼女達が資料に目を通すとそこには姿の似た二体のヒューズの  
写真があつた

定盛「えつと、画像が2つあるんですけど。2種類のヒュージがいるってことですか？」

百由「いえ、そのヒュージは形態を変えたの。それも戦闘中に。」

叶星「形態変化・・・っ。」

定盛「う・・・可愛くない・・・。」

百由「形態変化後は火力が大幅にアップしたらしいの。あー・・・そうよね？」

梨璃「はい、この羽の目玉みたいなところから強力なビームが・・・。」

2人の質問に百由は返そうとするが、実際に目にしていなかったため確信を持っていないのか梨璃達に確認する。

恋花「攻撃力だけじゃないよ。防御の方もやたら硬くて攻撃が通じなくてねー。」

恋花が梨璃の言葉に補足を入れると叶星は眉間に皺を寄せ考え始める。

叶星「そうなると通常的手段で倒すのは難しいですね。一つだけ手があるとするば・・・。」

定盛「ノインヴェルト戦術！ですねっ。」

二水「はい・・・ですが前は大量のヒュージに囲まれて、ノインヴェルト戦術を展開することが出来なかったんです・・・。」

定盛の発言に二水が申し訳なさそうに返すと、一葉も彼女以上に申し訳なさそうな表情をして近寄ってくる。

一葉「・・・申し訳ありません。その役目は私たちヘルヴォルが請け負っていたのに・・・。」

楓「あの状況では仕方ありませんわ。見通しの悪い戦場に密集した

ヒュージ・・・最悪の環境でしたから。」

話が行き詰まり暗い雰囲気になる面々、その耳に甲高く乾いた音が聞こえる。

皆がその音の方を見るとそこには手を合わせた百由の姿があった。

百由「だけど、戦略自体は悪くないと思うの。前は手数の順番に問題があったのよ。」

梨璃「順番、ですか？」

百由「そうよ、前回の課題を踏まえ、新しく私が考えた案はこれ。3レギオンによるウェーブ・・・つまり波状攻撃ね。」

???「それでこれを使うってわけだ。」

百由が作戦の概要を説明した時、森の方から声が聞こえた。

それを聞いたメンバーがそちらを向くと、

蓮夜「すまん、遅くなった。」

そこには彼の姿があった。

## ラスバレー1章☒

百由「やっと来たわね。」

蓮夜「いや、遅れたのは俺だけどさすがに時間が足りないんだが……。」

夢結「……百由？」

百由「……ごめんなさい、」

夢結「私にはないわよ？」

百由「……私の自分勝手でした、ごめんなさい。」

蓮夜「お、おう、焦っただけで別に怒ってないぞ……。」

彼の姿を見た百由が文句を言おうとすると、夢結から冷たい風が吹く。

それを感じた彼女は顔を青くして震えると彼の前に来ると頭を下げた。

その光景に、彼は唾然としてしまうがすぐに正気を取り戻し彼女を宥める。

百由「……改めて今回の作戦は3レギオンによる波状攻撃よ。」

一葉「……あの、大丈夫ですか？」

百由「……ええ、大丈夫よ。それで作戦の概要なのだけど、まずはサポートチームによる遠距離射撃で周囲のヒュージを撃滅する。これは数を削るのではなく文字通り殲滅するだけの火力が必要よ。」

一葉「殲滅……。」

百由「このサポートチームを担当するのは以下のリリィよ。」

そう言うと彼女は端末を操作しホログラフを出すと、そこにはグループ分けされた表があり、そこに3レギオンメンバーの名前が乗っていた。

百由「ヘルヴオルから飯島 恋花、初鹿野 瑤、芹沢 千香瑠。グ



ラン・エプレから定盛 姫歌、丹羽 灯莉、土岐 紅巴。そして、一柳隊から王 雨嘉、郭 神琳、二川 二水。チームリーダーはとりあえず、恋花さんにお任せするわ。」

恋花「おっけー！みんな、よろしくっ！」

楓「ここからは私が説明を。」

百由の説明を聞いた恋花は元気な声で他メンバーに挨拶をしていると、今度は楓が説明を始める。

楓「サポートチームはヒュージの索敵に成功した段階で雨嘉さん、灯莉さんによるレアスキル『天の秤目』を展開。ヒュージたちの正確な位置を割り出してもらいます。」

定盛「・・・なんとかあたしがコントロールするわ。」

楓「次に雨嘉さんと千香瑠様を中心とした精密狙撃を実行。その際、神琳さんや紅巴さんのレアスキルで能力の底上げを行う。」

叶星『『テストアメント』ですね。他者のレアスキルの効果範囲を広げる能力。』

百由「理論上、これだけの火力を集中させれば通常のレンジ程度なら十分に殲滅が可能だとシユミレートできたわ。」

一葉「恋花様、お願いします。」

恋花「まー、任せときなさいって♪」

楓「ヒュージの殲滅を確認したら、次はアタックチームの出番ですわ。」

二水「・・・あの、すいません。」

楓「二水さん？どうかしましたの？」

サポートチームの説明を一通り終えた楓は、次のチームの説明をしようとするが、そこに二水が手を上げる。

二水「今回の標的である特型ヒュージはかなり異質です。ですのでシユミレート通りに行くか心配で、」

百由「その気持ちはわかるわ。だから、蓮夜？」

蓮夜「大丈夫だ。持ってきてる。」

二水の心配そうな声に、その気持ちがわかった百由は頷くと彼へと視線を向ける。

すると彼は自身の背負ったアタッシュケースを下ろすと中身を取り出した。

そのアタッシュケースは特殊な形状をしており1.5m程の長方形の形をしておりその開け口は2つに別れていた。

二水「・・・それは？」

蓮夜「これはサポートチーム用のアタッチメントだよ。」

アタッシュケースの中身からは大小様々な筒が組み合わさった様な形状をしているものと手の平サイズの箱状のものが出てくる。

蓮夜「これは狙撃用の補助ユニットと『テストAMENT』の効果補助ユニットだ。」

そう言うのと狙撃用を雨嘉と灯莉に、『テストAMENT』用を神琳と紅巴に渡す。

灯莉「これどうやって使うの〜!!」

蓮夜「そこにソケットがあるだろう？それをCHARMの挿入口に挿すと自動的に装着されるようになってる。」

彼から装着方を聞いた灯莉は自身のCHARMにユニットを装着させる。するとCHARMが自動的に射撃形態になりその銃口に中央の筒が接続される。

その後もユニットは変形し続け最後には大型の狙撃銃の様な形状に変化する。

灯莉「おく、大きい☆」

雨嘉「でも軽い……。」

蓮夜「照準やブレ、長距離での命中補助をしてくれる。射撃形態でしか使用できないが、近接形態にすればその瞬間分離するから接近戦にもすぐに対応可能だ。」

神琳「それではこちらは？」

蓮夜「そつちは『テストメント』の欠点である防御低下を抑えるために広げる範囲を指向性に広げるためのものだな。」

紅巴「……指向性ですか？」

蓮夜「ああ、能力の拡張範囲を通常の円形ではなく線状、扇状にすることで必要以上の防御低下の抑制や最大射程の増加ができるんだ。」

神琳「……いつも思いますが凄まじい技術ですね。」

蓮夜「俺の専門は付属装置アタックメントだからな。これくらい出来ないとかいつに巻き込まれて生きていけないんだよ……。」

神琳「そ、そうですか……。」

百由を親指で指しながら放った彼の言葉に、神琳が頬を引き攣らせていると、指を指された本人である百由が咳払いをする。

百由「……話を戻すわよ。それでは楓さん説明のつづきを、」

楓「はい、そしてヒュージの殲滅が確認したら、次はアタックチームの出番ですわ。」

百由「アタックチームはグラン・エプレの今 叶星、宮川 高嶺。そしてヘルヴォルからは相澤 一葉、佐々木 藍。」

楓「アタックチームのリーダーは叶星様をお願いします。」

叶星「……はい、承りました。」

梨璃「あれ……わたしや楓さんの名前がなかったけど……。」

楓の言葉を聞き自身達の名前が出なかったことに気づいた梨璃は

彼女に問いかける。

楓「私たちは最後の要、ノインヴェルトチームですわ。」

梨璃「はっ・・・そうでした!」

蓮夜「だが、茜と音羽はどうするんだ?一柳隊の残りメンバーが9人だから2人残るぞ?」

楓「それはですね。サポートチームで仕事を終えた神琳さんたちを合流させるため残りの4名は3チームの補助兼遊撃をするアシストチームを頼みたいのです。」

気になることがあり、楓に質問した彼はその答えを聞き納得したように頷く。

結梨「わたしも違うの?」

蓮夜「たしかに通常の連携はいいとして俺と結梨さんはノインヴェルトに参加すること少なかったからな・・・。」

楓「はい、今回は確実性を取るためにノインヴェルト戦術の連携精度で決めさせて頂きました。それにお2人は個別での戦闘で力を発揮いたしますし。」

蓮夜「了解した。」

結梨「・・・わかった!頑張る!」

楓「それではアシストチームのリーダーは黒鉄さんをお願いいたしますわ。」

蓮夜「わかった。3人ともよろしくな。」

百由「ノインヴェルト戦術の展開まで夢結達はリザーブってことでいつでも動けるようにしておいて、今回の作戦の要だから手薄なところのカバーはアシストチームに任せてそれだけに集中して、」

夢結「了解したわ。」

楓「サポートチーム、アタックチーム、ノインヴェルト戦術。この3つの波で特型ヒュージを完膚なきまでに叩き潰します。そしてアシストチームにより万が一も起こさせません!」

梨璃「す、すごい・・・前回もすごかったけど、今回はえーと何人だろ・・・。」

夢結「23人による波状攻撃ね。」

蓮夜「いや、27人だぞ、」

夢結「他にも人員がいるのかしら？」

蓮夜「アールヴ Heim から天葉と依奈、壱さんに楠美さんが作戦領域内の警備をするらしい。」

梨璃「そうなんですか!!」

夢結「だから天葉が来ていたのね。」

蓮夜「そういう事だ。今回はイレギュラーだからなどんな事態にも対処出来るようにらしい。」

夢結「それは心強いわね。」

百由「彼に言われちゃったけど、以上が現状、考えうる私の最適解よ。不足の自体にも確実に対処出来るように万全の体勢で挑むわよ。」

一葉「・・・ここまで嚴重な体制・・・これは厳しい戦いになりそうですね。」

梨璃「でも、やるしかありませんよね!あの特型ヒュージを倒せるのはわたしたちだけなんです!」

一葉の不安そうな呟きに梨璃はみんなを鼓舞するように大きな声で宣言する。

一葉「・・・そうね、私たちがあいつを倒せば、これ以上犠牲は増えない。やるしかないですね・・・!」

叶星「やりましょう、私たちの力を集結して・・・ひとつの大きな力に。」

梨璃「はい・・・っ!みなさん、どうぞよろしくお願いいたします・・・!!」

彼女に鼓舞され他メンバーの指揮が上がる。

それを見た彼女は嬉しそうに声を上げた。

## ラスバレー1章☒

恋花「それじゃ、ヒュージの探索に出発するよー。」

二水「はい、よろしく願います、恋花様！」

叶星「姫歌ちゃんたちをよろしく願います。みんなも怪我をしないように気をつけてね。」

灯莉「はーいっ！いってきまーす☆」

恋花の号令の元サポートチームの面々は森の奥へと歩いて行った。

夢結「：・アタックチームが連携強化の特訓をしている間、サポートチームが特型ヒュージの索敵。」

百由「どう？効率的なチーム運用でしょ？」

高嶺「でも、特型ヒュージの正確な場所は分からないのでは？」

百由「ええ、ピンポイントでここ！ってのはわからないわね。でも、あのヒュージが姿を消したケイブから特殊な反応が検出されたの。」

楓「つまり、本体は細く出来なくてもあのケイブかそれに類似したケイブの反応があればそこを索敵すればいい、と。」

百由「こっちは効率的とは言えないけど、何もしないよりはね。それにサポートチームの方は実戦で連携のコツを掴んでほしいし。」

一葉「逆に言うと、私たちアタックチームはまだ実戦で戦うほど戦術が練れていないということですね。」

藍「そうなのー？でも、らんたち強いよー？」

一葉の言葉に藍が首を傾げると、それを聞いた楓で微笑みながら彼女へと近づく。

楓「通常のヒュージでしたら個の強さによるゴリ押しも可能でしょう。ですが、相手は「あの」特型ヒュージですから。」

梨璃「油断できない・・・ううん、精一杯やらないときつと勝てない！恋花様たちサポートチームを驚かせるくらい、力をつけましょう

！」

叶星「ええ・・・頑張りましょう。」

一葉「もう逃がさない・・・次こそは必ず倒します！」

蓮夜「今回はイレギュラーが多いからな準備は過剰くらいがちょうどいいだろうな。」

夢結「・・・あなたはこれからどうするのかしら？」

蓮夜「こっちは1度、茜と音羽を連れて地形の把握だな。」

結梨「・・・結梨は？」

蓮夜「結梨さんは梨璃さん達と一緒にいてくれるかな？結梨さんはこの一体の地形はある程度わかるから彼女達の動きを見て覚えて欲しい。」

結梨「・・・どうして？」

蓮夜「結梨さんはよく一柳隊で訓練はするけど他の人とはしないだろう？だから戦い方を見て一柳隊以外の人がどう戦うか見て欲しいんだ。きつと力になるから。」

結梨「・・・よく、分からないけど？わかった！」

蓮夜「ありがとう・・・それじゃ、2人とも行くぞ。」

音羽「・・・わかった。」

茜「・・・了解です！」

彼は2人を呼ぶと先程、恋花達が進んで行った方へと歩いていく。こうして、作戦会議を終えた一同は各々のチームで行動を開始した。

茜「・・・本当に複雑な地形してますね。」

音羽「・・・天然要塞。」

蓮夜「まあ、そんな感じだな。」

彼女達と別れた3人は森の中を歩いていた。

彼等の視界には生い茂る木々と反り立つ岩肌が所狭しと並んでおり、音羽の言う通り天然の要塞のようにも思える。



蓮夜「この一帯はここと同じく高低差が激しい場所が多いから隠れる場所には困らないな。」

茜「防御壁としても使えますね。」

音羽「・・・逆に射線が通しにくい。」

蓮夜「だから狙撃ポイントはあそこら辺になるかな。」

そう言つて彼が指を指したため2人が、そちらへと視線を移すとそこには丘があつた。その丘は辺りの障害物よりも一際高くなつており、狙撃ポイントとして最適であろう。

彼女達がそう考えていると、その丘に人影が見える。

蓮夜「やつぱりそこは確認するよな。」

茜「・・・誰がいますか？」

音羽「・・・感じ的に灯莉達。」

蓮夜「だな、サポートチームのメンバーだ。」

音羽「だけど動きが・・・。」

その人影がサポートチームのメンバーだとわかつた音羽は違和感を感じる。

彼女達はCHARMを東に向けて構えていたのだ。

蓮夜「ヒュージでも見つけたのか？」

茜「なら、加勢に行きましょうよ。」

音羽「・・・賛成。」

蓮夜「それじゃ、行くか。」

そう言うのと彼等は西へと向かつて走り出した。

## ラスバレー1章☒

夢結・梨璃「はあああああーっ!!」

崩れた市街地の中、2人の少女の気迫の籠った声が響き渡る。

2人の視線の先には異様な姿をしたヒュージがおり、そのヒュージ・・・特型ヒュージの付近には禍々しい黒い翼が落ちていた。

ヒュージも2人を妨害しようとするがその両腕はヒビだらけになっっており上手く動かせないのか、その動きは鈍い。

そんなヒュージへと彼女達の虹色の光を纏ったCHARMが迫る。勝利を確信した彼女達の刃が特型ヒュージに当たる寸前、

青白い光がヒュージを包むように爆ぜた。

梨璃「な、なに!?!」

夢結「・・・これは!」

爆風により後方へと飛ばされた2人は突然のことに驚愕する。爆風に煽られた2人だが空中で体制を整えると特型ヒュージへとCHARMを向けながら着地し、後方へと下がる。

二水「梨璃さん!夢結様!大丈夫ですか!?!」

梨璃「うん、大丈夫だよ。」

紅巴「何が起こったのですか!?!」

夢結「・・・。」

梅「・・・夢結?」

2人の元に少女達は駆け寄ると2人の無事に安堵の表情を見せる。しかし、夢結だけが焦りと困惑の入り交じった表情をしており、それに気づいた梅は彼女に声をかけた。

夢結「・・・よりにもよって、」  
梅「だから、どうしたんだって!!」

自分の世界に入り込んでしまった彼女に梅が声を荒らげると、特型ヒュージを包む光が嵐のように吹き荒れる。

その勢いに少女達の身体は煽られそうになるが踏ん張ることで体を崩すことを阻止するが顔を腕で隠してしまうためヒュージのことが視認できない。

神琳「みなさん大丈夫ですか!」

雨嘉「うん、大丈夫。」

灯莉「大丈夫だよ!」

結梨「大丈夫!」

光が落ち着いたため神琳が皆の状態を確認すると各々が返事をする。

梨璃「・・・あれ、楓さんは?」

一葉「恋花様?」

叶星「・・・紅巴ちゃん?」

しかし、全員が答える中、楓、恋花、紅巴の3人からは返事が帰って来なかった。

それに気づいたりリーダー3人が周りを見渡そうとした時、

夢結「・・・ツ!!」

突如梨璃の横に居たはずの夢結が吹き飛ばされる。

いきなりの事で彼女達の思考が停止してしまうが、梨璃はすぐに正気を取り戻し彼女へと駆け寄った。

梨璃「お姉様!？」

夢結「直撃はしていないから大丈夫よ。・・・でも、」

夢結は地面に転がるように着地することで衝撃を逃がすと梨璃に自身の安否を伝えながら自身の右手を見る。その言葉に安堵する彼女だが夢結の視線の先を見たことでその表情は一変し驚愕に染まる。彼女の右手に握られているCHARMの柄から先がなくなっていたのだ。

そして彼女の周りには多くの金属片が散乱しており、それが彼女のCHARMの残骸であることがわかる。

梨璃が困惑する中、自身の現状を把握した彼女は自身を攻撃したであろう相手・・・特型ヒュージのいる方向を見る。

そこには先程までのヒュージの姿はなく違う存在が佇んでいた。

それは先程の堅牢な攻殻ではなく滑らかな表皮に覆われており、先程まで存在しなかった脚部を有し、その碗部は剣のように鋭く陽の光を反射し輝いている。

2対になっていった翼も6対に増えておりその翼からは青白い霧が溢れていた。

そして1番違う部分・・・それは頭部だ。

先程までは通常のヒュージのように単眼であったな現在の特型ヒュージは2つの眼球・・・そして薄気味悪く笑う口が存在していた。

そんな奇怪な姿へと進化した特型は自身の碗部を後方へと動かすと前方へと突き出した。

突き出された碗部は伸びていき未だに放心状態のメンバーへと迫る。

それに気づいた彼女は皆に防ぐように伝えようとするが、急激な寒気に襲われたことで口籠り自身のCHARMへと目を向けた。

夢結「そろそろ部品の交換が必要な頃だったけれど・・・。」

彼女は自身のCHARMを見つめながらそう呟く。

確かに彼女のCHARMは最近酷使していたため近日中に部品の交換が必要であったがそれでもこの壊れ方はおかしいはずだ。

元々彼女の使うCHARM・・・ブリューナクは攻撃と基本速度の向上に主眼を置いており防御能力はそこまででもないが、彼女の戦闘スタイルに合わせて重量を増加させることで強度もかなり向上している機体であった。

その強度はブリューナクの前行機であり防御性能に主眼を置いていたグングニルと同等でありその強度は現行するCHARMの中でも上位であったであろう。

しかし、壊れにくいはずのCHARMが壊れてしまった。それが指す意味は、

夢結「皆避けなさい、アレの攻撃は防いではダメよ！」

現在この場にいるメンバーの誰も防ぐことが出来ないことを指していた。

それに気づいた彼女は防ぐのではなく躲すように彼女達へと伝える。

その声を聞いた彼女達は正気を取り戻し反射的に敵の攻撃を回避した。

それにより何にも当たることのなかった刃は彼女達を通り過ぎると背後にあった壁を陥没させながら突き刺さる。

叶星「なんて威力なの!？」

千香瑠「皆さん、絶対に当たってはいけません!？」

その破壊力に顔を青くしながら2人が必死な声を上げるとほかのメンバーもヒュージから距離を取る。

その間に刃を引き抜いたヒュージは碗部を鞭のようにしならせながら距離を詰めてくる。

その移動速度は早くはないが刃の密度が濃くまるで斬撃の壁のよ

うだ。

それが迫る中夢結の元へと集まった彼女達は焦りの色を見せる。

一葉「・・・どうしましょう、このままでは相手に近づくことができませぬ！」

叶星「足自体は早くないみたいだから距離感を間違えなければ当たることはないけど。」

梨璃「・・・それも問題なのですが楓さん達もいません！」

ジリジリと近づいてくるヒュージから距離を取りながら相談を続ける彼女達の前に夢結が出ていく。

梨璃「お姉様!?!」

夢結「私がかすめるわ、だから任せてちょうだい。」

一葉「・・・何が策があるのですか？」

梨璃「・・・でも、CHARMが、」

夢結「大丈夫よ、コレがあるもの。」

彼女は自身の背負うケースへと手を添えるとヒュージへと向かって駆け出した。

一瞬で最高速になった夢結はヒュージへと急接近する。

彼女がヒュージに近づくにつれて迫る斬撃の壁に臆することなく進む彼女を梨璃達が制止させようとするが、既にその時には彼女の目の前には死の壁がありもう止まることは出来ない。

そして彼女がその壁にぶつかる寸前、この後起こるであろう光景を想像した面々が目を逸らそうとしたその時、

彼女の右手が動いた。

梨璃「お姉様ツ!!」

梨璃の叫びと共に轟音が鳴り響く。

その轟音に耳を塞いで顔を背けた面々が夢結の方を見るとそこには、

夢結「……まだ、使いこなせていないから……荒っぽくさせてもらうわよ?」

碗部の刃を砕かれた特型ヒュージと、自身の身長のはるばる大剣を振り抜いた夢結の姿があった。

## ラスバレ1章☒

その大剣は圧倒的な重圧感を放っていた。

2 mはあるだろう漆黒の刀身は日の光を鈍く反射し、12 cmという現実からかけ離れた見厚の刀身からその規格外の重量もわかるだろう。実際に彼女の足元には亀裂が出来ている。

その刃以外にも手を引くものがあり、その分厚い刀身を挟むように取り付けられた2つの砲身と峰につけられた銃身と3つの銃身がつけられており、そしてなりよりその刀身の本来の長さだろうか、

先程刀身の長さは2 mと述べたがそれは柄からの長さであり、本来の刀身は柄よりも後方まで伸びていた。

その長さはおおよそ3.5 m、決して人が扱えるわけのなさそうなそれを1人の少女が振るう。

夢結「はあああ!!」

彼女の気迫の籠った一撃で再び轟音が鳴り響く。その刃の標的である特型は当たる寸前に回避するが、地面に大剣がぶつかるとめくれ上がり礫となって特型を襲う。

しかし特型は礫に怯むことなく彼女へと迫る。

接近とともに再生させた刃を振り抜く特型の一撃をその重鈍そうな大剣を持っていると思えない軽やかな身のこなしで回避した彼女は特型へと砲身を向けると引き金を引く。

それと同時に砲身にマジガが収縮していき2つの砲弾となって放たれた。

至近距離での砲撃に回避の余裕のない特型は自身の碗部を盾して防ぐが、その砲撃の威力は凄まじく碗部を粉碎され胴体にもヒビが入る。

傷口から青い液体を溢れさせながら体勢を崩す特型に彼女は追撃を加えようとするが特型翼から霧を噴出したためそれを警戒して後方に下がる。



梨璃「お姉様、大丈夫ですか！」

夢結「ええ、大丈夫よ。」

彼女が特型と距離を取るとそこに梨璃が近寄って来てた。

彼女は特型から目を離さないまま射撃牽制をしながら返答する。

夢結「それにしても・・・厄介ね。」

二水「そうですね、特にあの再生能力をどうにかしないと・・・。」

夢結「・・・。」

梨璃のあとを着いてきた二水は既に再生を終えている特型を見てそう呟く。それを聞いた夢結は無言のまま特型を見据える。

お互い決め手に欠けていることを理解してか、夢結と特型は睨み合い動かない。

そんな中彼女の背後から弾丸の雨が特型へと降りそそぐ。

特型がそちらに意識が向いており上方を見ていることを確認した彼女は倒れ込むように視線を低くして特型へと迫り身体全体を捻りながら振り上げの一撃を加える。

意識外からの一撃に対応の遅れた特型の腹部は大きく切り裂かれる。脇から肩口にかけて大きな残痕が刻まれそこからは止めとまなく紫色の液体が吹き出る。

それを見た彼女は振り上げた大剣の勢いに身を任せ身体を回転させながら砲撃を地面に打ち込み反動で飛ぶ。

そりにより特型の胸部に残痕が刻まれ砲撃で起こった衝撃も相まり前方へと倒れ込む。

夢結「・・・はあああ!!」

特型へと背面を向けている彼女は空を蹴ることで身体を反転させると再び砲撃、その砲撃の反動で勢いの増した彼女の一撃が体勢を崩

し無防備になった特型へと襲いかかる。

その一撃を受けた特型は頭部から地面へと落ちていきそこを中心に10m程のクレーターができた。

クレーターが紫色の水溜まりになったことを確認すると、彼女は梨璃達の元へと下がる。

夢結「・・・決め手がかけるわね。」

梨璃「なら全員で攻撃すれば！」

ミアム「・・・無理じゃな。」

叶星「どうしてなのかしら？」

夢結が決め手のないことに首を傾げていると、梨璃が全員で攻撃することを提案する。しかし、それはミアムの一言で止められてしまった。

ミアム「夢結様・・・そのCHARMは『黒薔薇』であっているかろう？」

夢結「ええ、そうよ。」

ミアム「百由様が設計しているのを見たのじゃ。」

夢結「つまり、スペックもわかるという事ね。」

ミアム「正直リイが持てるのか疑問じゃったが・・・存外いけるのう。」

梨璃「そんなにすごいのか？」

ミアム「重量軽減込で総重量500kg・・・ホツキョクグマくらいと言えればわかりやすいと思うが、」

梨璃「・・・えっ？」

ミアム「確か複合板にして術式を重ねた結果、作成にも整備にも通常のCHARMの数倍かかるとあの百由様が珍しく嘆いておったのう。」

二水「そ、そうなのですか・・・。」

ミアム「じゃが、それだけあってバカげた火力になっておるが・・・」

それでもダメとなるとやはり、」

夢結「……ノインヴェルト戦術しかないわね。」

夢結はそう言いながら自身の懐に手を伸ばしノインヴェルト戦術用特殊弾を取り出す。

夢結「私が特型を惹き付けるからその間にフィニッシュショットを決めなさい。」

梨璃「わかりました、早く倒して楓さん達を探しましょう!」

夢結「なら行くわよ、梅!」

梅「おう!」

梨璃の返事を聞いた夢結は自身のCHARMに特型弾を装填し梅へと放つ。

それを受け取った梅を確認すると夢結は再び特型へと接近していく。

梅「ワンワン!」

迫る彼女を確認した特型が刃を振り下ろす。  
マギスフィアが梅から雨嘉へと渡る。

雨嘉「……鶴紗!」

刃を躲した彼女の一撃が特型へと迫る。

雨嘉から鶴紗へ、

鶴紗「次行くぞ、神琳!!」

彼女の一撃をもう一方の刃で防ぐ。

鶴紗から神琳へ、

神琳「よろしくお願いしますね、結梨さん！」

特型の翼から霧が噴出される。

神琳から結梨へ、

結梨「うん、行くよ、グロツピ！」

地面を砲撃して霧を吹き飛ばす。

結梨からミリアムへ、

ミリアム「任されたのじゃ、二水！」

霧が晴れた瞬間2本の刃が彼女に迫るがそれをCHARMを盾にして受け止める。

ミリアムから二水へ、

二水「・・・梨璃さん、お願いします！」

剣先を蹴ることでCHARMを上方へと振り上げ特型の刃を弾く。

二水から梨璃へ、

梨璃「はい、フィンツシユショット行きます！」

青から始まり、黄色、緑、赤、オレンジ、躑躅、紫、水色と色を変え梨璃の元へとたどり着いたマジスファイアは一瞬桃色になった後、膨張しながら虹色に変わる。

梨璃が特型へとCHARMを構えた瞬間、特型の身体が網状の光に囚われる。

その網のからは糸が繋がっており、その糸の先には後退する夢結のCHARMに繋がっていた。

彼女が夢結の後退したのを確認し引き金を引こうとしたその時、

一葉「・・・恋花様!？」

一葉の悲鳴じみた叫び声が響き渡る。

それに反応して彼女達が一葉の視線を追うと・・・そこには、

二水「楓さんッ！」

叶星「紅巴ちゃん!!」

特型が出している霧と同じく青白い、そして不気味な雰囲気の内包する霧に包まれた3人の姿があった。

## ラスバレー1章☒

梨璃「楓さん！」

楓・紅巴・恋花『……』

霧にの中から微かに見える3人の姿、

それを見つけた梨璃が声を掛けるが3人とも意識がないのか反応を示さない。

叶星「……あれは何なのかしら？」

一葉「そんな事よりも早く助けなくては!!」

その異様な光景に警戒しながら思考を巡らせる叶星を横に、一葉は3人へと駆け寄る。

夢結「一葉さん止まりなさい!……梨璃、早く撃つのよ!!」

梨璃「は、はい!フィニッシュショット行きま……ッ!」

冷静さの欠けた一葉の行動に静止しようとするが彼女は聞こえていないのか止まらない。

それに気づいた夢結が梨璃に特型にフィニッシュショットを撃つように指示すると彼女も気を取り直して特型へとCHARMを向けるが彼女の目の前には凶刃が迫っていた。

梨璃は強引にCHARMを引き戻すことで防御することに成功するがCHARM全体にヒビが走り刀身が砕け散る。

梨璃「お姉様、申し訳ありません!」

夢結「今の状況なら仕方ないわ。……一旦下がって一葉を止めるわよ。」

梨璃「……はい!」

ノインヴェルト戦術が失敗してしまい決め手を失ってしまったことを理解した夢結は梨璃を連れて下がる。

その先には一葉がおり、彼女を羽交い締めにする形で千香瑠が彼女を止めていた。

一葉「千香瑠様、離してください！早く恋花様を助けないと！」

千香瑠「一葉さん落ち着いてください・・・無策に近づいてしまつては危険です。」

一葉「ツ・・・でも！」

瑠「落ち着かないと、助けられるものも助けられないから、落ち着いて！」

2人の説得によようやく落ち着いた一葉の元に他のメンバーが集まる。

夢結「・・・。」

高嶺「・・・どうしましょうか？」

藍「倒せばいいんじゃないの？」

ミアム「それじゃと、3人が危険ではないかの？・・・まずは、あの霧？をどうにかしなければ、」

梨璃「そもそも、アレは何なんでしょうか？」

叶星「マジ・・・なのかしら？」

千香瑠「霧状反物質化しているのでしょうか？」

定盛「・・・それは、音羽のレアスキルと似ている感じなんでしょうか？」

鶴紗「・・・でも、なんか違うような、」

藍「なんだか嫌な感じがする・・・。」

皆が3人を包み込む霧状の何がについて思考を巡らせるが彼女達はその答えを導き出すことが出来ない。

そんな中で鶴紗と藍から理解の出来ない言葉が紡がれる。

マジではない、それは現在目の前に存在する現象からありえないことだ。

この世界で起こりうる非現実的な事象にはなんらかの形でマジ関わっている。

それがこの世界で起こりうる可能性であり常識だ。

しかし、2人はマジと違うと言った。

それは、現在起きている現象が全くの未知であるということを目指すのだ。

高嶺「でも、あの霧は特型から放出されているものと同じではないのかしら？」

鶴紗「・・・分からない、けど違うことだけはわかる。」

結梨「結梨もそう思うよ。」

雨嘉「だけど・・・そうになると特型はヒュージじゃないってことになるんじゃない。」

神琳「そうですね・・・ヒュージの特性として体がマジで構成されていることが前提となっております。」

ミアム「じゃが、構成物質がマジでないとなると・・・どうしてマジ反応が出るのじゃ？」

梅「あの特型が進化してマジの性質でも変わったのか？」

瑤「別の姿に進化するとしても、ヒュージとしての性質は変わらないんじゃない・・・。」

夢結「・・・まずいわね。」

彼女達が思考を巡らせ続ける中、夢結は自身の左手を胸に添える。その事に気づいた梨璃が夢結を隠すように移動し、他メンバーから左手が見えなくなった。

梨璃「・・・お姉様、」

夢結「・・・貴方の考えている通りよ。」



2人はお互いにしか聞こえない程小さな声で短い会話を終わらせるとCHARMを構えた。

梨璃「皆さん、特型のことを考えるのは後にしてまずは、楓さん達を助けましょう！」

夢結「特型は私が抑えるわ、だから皆は彼女達を！」

2人は他メンバーを声を掛けるとそれぞれ特型と3人の元へと駆け出した。

それにいち早く気づいた叶星と一葉を先頭に他の面々も梨璃の後を追う。

一葉「助けると言いましたが、どうするのですか？」

梨璃「神琳さん鶴紗さんにテストメントを、そして鶴紗さんはあの霧に触れたら何かあるか見てください。」

神琳「わかりました、鶴紗さん！」

鶴紗「わかった！」

梨璃の指示で神琳がレアスキルを発動させると鶴紗は3人を包む霧を凝視する。

梨璃「どうですか？」

鶴紗「・・・触れただけなら大丈夫だ！」

二水「それなら一気に行きましょう！」

叶星「わかったわ、高嶺ちゃん!!」

高嶺「ええ!!」

鶴紗の言葉で接触では害がないと判明した霧へと叶星と高嶺が迫る。

梨璃達を置いて先へと走る彼女達へと霧が迫る。

しかしそれが無害だと知った彼女達は口元を服の袖で塞ぎながら

突き抜ける。

叶星「鶴紗さんの言う通りね。」

高嶺「・・・そうね。」

霧を抜けた2人は体勢を低くしてさらに速度を上げる。

叶星達と彼女達の距離が僅かになった時、再び霧が2人を襲いかかる。

それを見た2人が通り抜けようとした時、

鶴紗「下がれ!!」

後方から鶴紗の叫び声が響き渡った。

それを聞いた2人は反射的に後方へと下がる。

後退する視界の中、彼女が先程まで彼女の周りにあつた木々が切り倒されて行くことを確認した2人はCHARMを盾にしながら梨璃達の元へと下がると左右に大きく別れそれに灯莉と定盛が追行する。

叶星「私達が左右から攻めるから、梨璃さん達はその隙に!」

梨璃「はい!」

梨璃の返事を聞いたグラン・エプレのメンバーは囚われている3人に当たらないように周りへ射撃を開始する。

攻撃を加えられたことに反応した霧が左右に大きく広がったことを確認した彼女達はさらに距離を取り霧の範囲を広げて行った。

一葉「千香溜様!」

千香溜「はい!」

一葉の掛け声に千香溜がヘリオスファイアを発動、それにより光の膜に包まれた梨璃達は霧を抜けて3人の目の前まで辿り着いた。

梨璃「楓さん！」

一葉「恋花様、大丈夫ですか！」

二水「紅巴さん・・・良かった意識を失っているだけのようです。」

3人を確保した梨璃達は急いでその場から離脱すると3人の安否を確認する。

意識を失っているが傷1つない彼女達に安堵していると、

鶴紗「雨嘉!!」

雨嘉「えっ？」

鶴紗が雨嘉を突き飛ばした。

突然のことに困惑している彼女が鶴紗の方を向くとそこにはCHARMを構えた鶴紗と彼女に襲いかかる刃の姿があった。

梨璃「鶴紗さん、大丈夫ですか！」

鶴紗「大丈夫・・・。」

自身に迫る凶刃を防ぐことに成功したが無理な体勢で防いだためCHARMを大きく弾かれた鶴紗に彼女の真下から別の刃が襲いかかる。

それを梨璃が壊れた自身のCHARMを滑り込ませることで防ぐことで鶴紗を助けるが彼女のCHARMはクリスタルごと砕かれてしまった。

梅「・・・今、地面から生えてきたゾ？」

瑤「それに気配も無かった。」

雨嘉「鶴紗、ありがとう。」

鶴紗「気にするな、それよりこれで終わりだよな？」

神琳「・・・いいえ、まだのようです。」

冷や汗を流す鶴紗の言葉を神琳は静かに返す。

彼女達がCHARMを失った梨璃を囲うように警戒していると地面から無数の手が生えてきた。

雨嘉「ひっ!？」

ミリアム「ホラーじゃないんじやぞ!？」

地面から這い出てるように出てきた少女達は力なくただ佇むような姿勢で彼女達へと近づいて来る。

視点が定まらず無表情なままだ笑う少女達に恐怖を感じていると、梨璃の背後にCHARMを構えた少女が現れる。

二水「梨璃さん!？」

それにいち早く気づいた二水が叫ぶがその時には既に凶刃が彼女へと迫っており誰も間に合わない。CHARMなく防御する術のない梨璃に凶刃が触れるする寸前、

夢結「梨璃!」

いつの間に彼女の隣にいた夢結が彼女を突き飛ばす。

それにより剣線から外れた梨璃だが、彼女を突き飛ばしたため突き出された夢結の右腕が切り飛ばされてしまう。紅を散らしながら宙を舞い彼女の右腕が地面に落ちると同時に切り口から噴水のように紅が吹き出した。すぐに切り口を抑えてるが一向に収まる気配のない紅に顔を顰める夢結へと梨璃が駆け寄った。

梨璃「お姉様?!？」

夢結「・・・梨璃、怪我はない?」

梨璃「はい、私は大丈夫です・・・でもお姉様が!」

夢結「・・・私は大丈夫よ。」

彼女の状態を見た他の面々が顔を青くしているなか、少女達はゆっくりとした足取りで迫る。

そして少女達の凶刃が彼女達に届く所まで来た瞬間、

夢結「・・・間に合った見たいね。」

彼女の言葉と共に少女達の胸から刃が生えた。

## ラスバレー1章☒

梨璃「・・・えっ？」

彼女達を囲うように群がる少女達の胸から生えた刃、

それは突然の事であり現実離れしたその光景に、唐突な出来事に梨璃は思考を止める。

それは細く、薄いしかしその黒く染った刀身は脆そうに見えると共にしつかりとした堅牢さが見て取れる。

少女達を貫く刃は全て同じ場所から生えておりそれがより奇妙な光景を作り出していた。胸の中央部より僅かに左に逸れて生えたそれを少女達は気にする様子もなく歩こうとする少女達だが1歩足を踏み出した瞬間少女達は糸の切れた人形のように崩れ落ちた。

定盛「ひっ!!」

叶星「何が起きているの?!?」

二水「・・・背後から刺されてる?」

雨嘉「だけど・・・全部違う方向から、」

二水「レアスキルで周囲を見ていましたが、人影なんて見えませんでしたよ?」

倒れた少女達の背中には柄のようなものが生えており刃は背中から貫通する形で生えていることがわかった。

それを見た雨嘉はこの周囲を複数人が囲っているのかと考えるがそれは二水の一言で否定された。

鶴紗「・・・なんだか、見たことがあるような。」

高嶺「・・・奇遇ね、私もよ。」

鶴紗「ツ!?!」

その現象に既視感を覚えた鶴紗が首を傾げていると、そこに高嶺が

同意する。

彼女の言葉を聞いた鶴紗が動揺を見せる

それは鶴紗が・・・一柳隊のみが知っている現象だからだ。

動揺の中彼女が思考を巡らせていると、

一葉「彼女達はどこに!？」

瑤「・・・突然消えた。」

突然の出来事に動揺していた一葉達が倒れた少女達を確認しよう  
とするとそこには少女の姿は無かった。

少女の倒れた場所には何も残っておらず微かに青白い霧が漂って  
いるだけだった。

夢結「・・・ひとまず、危機は去ったみたいね。」

梨璃「お姉様!!」

周りを見渡した夢結がそう呟くと、梨璃が彼女へと抱き着いた。  
それを左手で受け止めると彼女の頭を撫でる。

夢結「・・・もう大丈夫よ。」

梨璃「・・・でも、腕が、」

夢結「これくらい大したことないわ。」

梨璃が泣きそうな表情に対して涼しそうな表情で優しそうな笑み  
を見せていた。

そんな彼女に他の面々が駆け寄る。

一葉「夢結様、大丈夫ですか!？」

叶星「・・・酷い、」

何も無いような夢結に安堵すると共に、彼女の存在しない右腕に彼

女達は絶句する。

定盛「右腕が……。」

夢結「梨璃にも言ったけれど大したことないわよ?」

瑤「……それを見て大したことがないわないと思う。」

千香瑠「そうですよ、早く止血しませんと!?!」

肘から先のない右腕、そこからはまだ赤黒い血が止めどなく流れており切断面からは白いモノが見え隠れし引きちぎられたかのように抉れていた。

神琳「……それよりも、夢結様?」

夢結「何かしら?」

神琳「……その、痛みの程は?」

夢結「大丈夫よ、支障はないわ。」

神琳「ですが……普通なら喋れる状態ではないのでは、」

夢結「これくらいのことなら慣れてるから、」

神琳「……慣れてる?」

夢結の平然とした姿に異常感を覚えた神琳が彼女に問いかけると、彼女は何も無いかのように返答する。

そして彼女の言葉の違和感に彼女が首を傾げていると、

藍「……特型はどうしたの?」

藍の言葉に全員の視線が彼女へと向く。

二水「そうですよ、特型の方が解決していません!」

ミリアム「アレを抑えていた夢結様がこちらにいるからもう……

早く対処せんと、」

叶星「そうね……梨璃さん、」



梨璃「は、はい、どうしましたか？」

叶星「・・・梨璃さんは夢結さんを連れてここを離脱なさい。」

梨璃「・・・でも、」

叶星「CHARMのない貴方と、重症の彼女がいてはただの足でまといになるだけよ。」

神琳「・・・叶星様の言う通りです。ですので梨璃は早く夢結様を安全な場所に、」

梨璃「・・・。」

叶星の言葉に面を食らった梨璃は反論しようとするがその前に神琳からも同じ言葉をかけられる。

2人の言葉に反論の余地のない彼女が俯いていると、

夢結「・・・その点は問題ないわ。」

瑤「でも、早くしないと逃げるかも、」

夢結「だから、大丈夫なのよ。もう、終わっているから、」

高嶺「・・・終わっているとは？」

夢結はそう呟くと視線をある方向へと向ける。それを彼女の言葉に疑問を覚えた高嶺が彼女の視線を追うと大きく目を見開く。

そこには地面に付した特型の姿があり、それは胴体部を除き全てが崩れていた。

全身から紫色の液体を流しているそれは動こうと蠢いているがその体は地面にめり込んでおり、身じろぐ事もできない。

そんな特型の上に1つの人影があった。

茜「・・・。」

その人影は、ここには居ないはずの茜であり、彼女は特型を見下ろすように佇んでいた。

静かな表情で佇む茜は視線に気づいたのか、こちらへと向くと軽く

微笑む。

視線を外し意識を彼女達へと向けた瞬間、

鶴紗「危ない!!」

特型の傷口から大量の触手が生え、茜へと襲いかかる。

触手の先端には鋭い針のようなものが着いておりそこからは液状の何かが滴っていた。

茜「大人しくしてろ・・・、」

茜は自身に迫る凶刃に目を向けることなく右足をあげると軽く踏みしめた。

歩くかのような軽い力しか籠っていないであろうその動作、ただ軽く音が鳴る程度のものであろうそれから鼓膜を揺さぶるような轟音が鳴り響いた。

地面が揺れると同時に特型を中心に地面は凹みそこを中心に亀裂が走る。

その衝撃に触手が重力に押しつぶされるかのように地面にめり込むと、そこに突如現れた無数のナイフが降り注ぎ固定した。

??? 「遊びすぎ・・・早くとどめを刺す。」

先程の轟音で皆が茜へと視線を向けていると突如森の奥から声が響いた。声のする方を向くとそこにはいつもと変わらぬ無感情な表情をした音羽が姿を現す。

森の奥からゆったりとした足取りで歩いている彼女の両手には大振りのナイフが握られており、その形状は特型に刺さっているものと酷似していた。

茜「だけど、アタシだと逃げられるかもしれないし抑えてた方がい

いんじゃない？」

音羽「・・・確かにそうだけど、彼女を抑えるにしてももう少し方法があつたはず、」

茜「確かにあるけど・・・苦しませたくないじゃん？」

2人は特型には目もくれず会話を始める。

その様子はいつもの彼女達と変わりなく、この異常な状態では限りなく異質であつた。

茜「そうだ、あの人まだ来ないの？」

音羽「・・・後始末に時間がかかつてる。」

茜「出来れば後始末の前に済ませて欲しいんだけどな・・・。」

音羽「時間が経つと隠蔽が困難になる・・・それに原因は茜、」

茜「・・・それを言われると何も言えないや。」

2人の会話する中、内容が理解できない一葉達は彼女達へと近寄る。

一葉「・・・茜、これはいったい？」

茜「見ての通り特型を抑えてるんだけど？」

瑤「そうじゃない・・・音羽とはどういう関係なの？」

茜「関係って、同じ孤児院で暮らしていて、境遇が似ているだけですよ？」

千香瑠「・・・どうして、この状況で平然と会話出来ているのでしょうか？・・・それに彼女とは？」

茜「・・・それは、ですね。」

レギオンメンバーからの言葉に大したことが無いかのように返答する茜だが、千香瑠の一言に声を詰まらせ目を泳がす。

その様子を見ていた音羽がため息をつきながら自身が出てきた森の奥へと視線を向ける。

音羽「・・・説明なら、あの人がしてくれる。」

彼女の意味深な言葉に一葉達が彼女の視線を追うと、

蓮夜「茜、もう少し周囲に気を使え。」

そこには感情の抜け落ちた、寒気すらも感じさせる表情をした彼の姿があった。

## ラスバレー1章☒

茜「彼女は抑えときましたよ。」

蓮夜「それは助かるんだが、もう少し周囲のこと考えてくれないか？・・・被害が大きいと時間かかるから、」

茜「・・・すみません。」

蓮夜「延焼しないように考えてたみたいだからいいが、俺がいない時は気をつけな、お前らだと隠蔽しにくいんだからさ。」

茜「了解です！」

音羽「お疲れ様です。」

蓮夜「ああ、そっちもな、」

彼の小言を聞いた茜はバツの悪いのか居心地悪そうに顔を背ける。それを見た彼は彼女が抑えている特型へと近づいて行った。

蓮夜「・・・まさか特型に憑いてるとはな、」

音羽「他の反応は？」

蓮夜「ない、デコイは全て破壊したからコレが最後のはずだ。多分デコイを作って、自身の反応を偽装してたんだろう。」

茜「なら、早く楽にしてあげましょうよ。」

蓮夜「・・・そうだな。」

茜が特型に悲しげな視線を送っていると、彼が自身のCHARMである大太刀を取り出す。

蓮夜「俺はこれくらいしかしてやれない・・・。」

彼はそう呟くと刃を上段に構える。

その刃は光を浴び透き通るよう輝き出した。

蓮夜「・・・せめてこれ以上、苦しまないように、」

特型を見つめていた彼は右瞳を閉じて静かに振り下ろした。ゆっくりとした速度で特型へと迫る刃、それは特型の表皮を裂き奥へと進んでいく。

蓮夜「次の目覚めが・・・良きものであり・・・ッ!!」

その刃が特型の中心を通り抜けようとした時、彼は唐突に刃を引き抜き振り返った。

彼の先程の行動に首を傾げていた面々はいきなりすることに驚いていると、

背後から不気味な気配が襲いかかる。

彼女達が慌てて背後を向くと、

そこには先程の少女達がおりそれぞれがCHARMを振り下ろそうとしていた。

定盛「またなの!？」

千香瑠「いつの間に!!」

それに気づいた彼女達はすぐに対応するためにCHARMを構えるが、次の瞬間には意味をなくしていた。

瑠「・・・えっ?」

叶星「今度は何が起きているの!？」

彼女達に迫る少女達、その尽くが活動を停止したのだ。

あるものは胸部に風穴を開けられ、

あるものは胸部から脇にかけて切り裂かれ、

あるものは胴体部を消し飛ばされ、

明らかに致命傷であるその傷、

それを見た彼女達は恐怖に支配される。

夢結「……梨璃、危ないわよ？」

梨璃「……お姉様、」

その中で夢結だけは冷静さを保っていた。

まるであやすように梨璃を抱きしめる彼女、その右手にはCHARMが握られておりその切先は梨璃を背後から襲おうとしていた少女へと突き刺さっている。

蓮夜「……やられた、」

彼の小さいが鮮明に聞こえる言葉に我に返った彼女達はその声の主へと視線を変える。

そこには太刀を振り抜いた姿勢の彼がおり、その背後には音羽と地面に突き刺さるナイフだけが存在しており茜の姿がない。

音羽「生存本能が高い……。」

蓮夜「それだけ生への欲求が強いってことだ。」

音羽「……可哀想、」

彼等は悲しげな口調で会話を始めると再び特型へと視線を向ける。

そこには先程までこの場から抜け出そうともがいていた特型の姿はなくなったその場に横たわるだけの存在へと変わっていた。

茜「……すみません。」

蓮夜「いいや、お前のせいじゃない。今回は彼女が一枚上手だっただけだ。」

茜「……でも、」

音羽「……幸い特定方法はわかった。だから、大丈夫、」

茜「わかった……。」

何を言っているのか理解出来ずに彼等を凝視していた一葉達の横を通って茜が姿を表した。

その表情は暗く、普段の彼女を知る一葉は心配そうに駆け寄ろうとすると、音羽が彼女へと近寄り慰める。

夢結「・・・どういふ状況なのかしら？」

蓮夜「単刀直入に言うのと逃げられたな。」

音羽「茜の性格を逆手に取られた・・・」

蓮夜「・・・高い生存本能と加虐的性質が合わさった結果だろうな。」

夢結「加虐的となると早く対処しないと行けないんじゃないかしら、最悪の場合関東圏が崩壊するわよ？」

蓮夜「一応霊格に損傷は与えたからな、それを修復するまで身を潜めているだろう。だから、そこまで焦らなくていいはずだ。」

夢結「それなら良かったわ。」

音羽「・・・だけど元々霊的事象への干渉を得意としているみたいだから急がないと、」

蓮夜「こっちはそこら辺得意なのがないからな。」

茜「申し訳ないです。」

蓮夜「・・・気にするなどは言えないが、そこまで気負わなくていい。」

音羽「そう、今回は私達も責任がある。」

蓮夜「とにかく、一旦退却して彼女達の安全確保が最優先だ。」

夢結が加わり内容がより奇妙なものとなる中、彼は手早く話を済ませ、彼女達へと視線を向けた。

彼女達は現状理解の出来ていないようで視線を右往左往しているが彼からの視線に気づき彼等の元へも集まり出す。

一葉「黒鉄さん・・・先程のはいったい？」

叶星「貴方は何か知っているみたいだから説明をお願いしたいのだ



けど、それに音羽ちゃんも茜ちゃんもね？」

瑤「……夢結も何か知っているの？」

蓮夜「……ここでは言えないな。」

高嶺「……ここでは？」

蓮夜「ああ、今は対策してあるから見られてないが、いつ勘づかれるか分からない。」

定盛「勘づかれるって誰に……、」

一葉「それよりも早く夢結様を病院に……？」

彼女達の質問に彼は意味深な言葉を返す。それを聞いた定盛が解いた出そうとした時、一葉は夢結の怪我を思い出した。

夢結本人が平然とした表情でその場にいるが、彼女右腕の欠損という重症を負ってしまったている。

そんな彼女を病院へと送らなければならぬと一葉は彼女に駆け寄ろうとするが、そこで彼女の失っているはずの右腕であることに気がついた。

一葉「……右腕がある？」

定盛「……えっ？でもさつき確かに彼女達に……、」

夢結「だから言ったでしょう、大丈夫って、」

蓮夜「とにかくここから離れるぞ……奴等が来る前に、」

定盛「だから何が……!？」

立て続けに起こる理解の出来ない現象に定盛が声を荒らげながら叫ぶと彼女の背後から金属音がなる。

彼女がそれ音に驚きながら背後を見るとそこにはCHARMを振り下ろす少女達とその一撃を左手のナイフだけで受け止める音羽の姿があった。大振りであるとは言えナイフの範疇にある大きさの刃だけで複数のCHARMを抑える左腕はビクともしない。

音羽「……もう来た。」

蓮夜「・・・行くぞ。」

それを見た彼は表情一つ変えずに森の奥へと進んで行く。

音羽は彼の行動を見ると、すぐさま右手に持つナイフを下へ投げる。

砕けたコンクリート片以外何も無い地面、微かな傷を残して弾かれるであろうナイフはまるで水に入るかのように音も立てずにその刀身を潜り込ませた。

それと同時に少女達の体が後方へと倒れる。

音羽は倒れた少女達に目も向けず振り返るとそのまま彼の進んだ方へと歩き始めた。

音羽「・・・また来る前に、早く。」

叶星「え、ええ・・・。」

普段通りの筈なのに氷の様な冷たさを内包した音羽の声に、ただ言われるがままに叶星達は彼女のあとを追う。

茜「アタシ達も行きましょう。」

一葉「行きましようってどこに?」

茜「来れば分かりますよ。・・・それよりも早く、また来られたら大変ですから。」

音羽とは打って変わって茜は一葉達を促すように背中を押す。

そんな彼女に内容も理解できないまま森の奥へと進んでいくと茜は1度足を止め。

茜「・・・今度は絶対に、」

倒れ伏した特型へと視線を向け何かを呟くと、彼女達のあとを追っていった。

## ラスバレー1章☒

蓮夜「・・・ああ、だから早急に撤退してくれ、」

流れるように移り変わる景色の中、彼は誰かに連絡を取りながら木々の間を駆け抜ける。

蓮夜「全力で排除に来るだろうから、今度こそダメだろうから、」

そんな彼を追う3レギオンのメンバーは忙しなく周囲を見渡しなから彼に置いていかれないように走る。

蓮夜「ああ、手筈通りそこで・・・それじゃ待っててくれ、」

彼は通話を終えたのか端末をしまうと背後にいる彼女達へと視線を向ける。

貫かれるかなような鋭い視線に彼女達が身体をこわばらせる速度を落とすが、彼の視線は一瞬であったためすぐに彼に追いついた。

夢結「・・・蓮夜、」

蓮夜「わかつてる・・・。」

夢結の言葉に彼は頷くと足を止め周囲を見渡し始めた。

それを見た夢結は自身のCHARMを構え直し彼の周囲を警戒する。

夢結「どうかしら?」

蓮夜「・・・大丈夫そうだ。」

音羽「こつちも反応はない。」

茜「・・・警戒しておきますね。」

蓮夜「2人とも頼む・・・。皆、悪いがこれに入ってくれないか?」

音羽と茜に軽く指示を出すと彼はいつの間にか持つていた球体を上へと投げる。

手から離れ数秒経つと球体が歪みそこを起点として空間に人ひとりが通れる程の歪みが発生する。

一葉「これはケイブ!？」

叶星「まだ特型が!!」

その光景にヘルヴォル、グラン・エブレ両レギオンが神経を尖らせるが、逆に一柳隊のメンバーは安堵の表情を見せた。

二水「やつと落ち着けます。」

鶴紗「さっさと入るぞ。」

神琳「そうですね、ここでは精神を疲弊させてしまいますし。」

定盛「反応薄くない!?これ非常事態なのよ!!」

一柳隊の面々が臆することなく歪みの中に入っていくのを見た定盛が狼狽しているとそこに梨璃が駆け寄る。

梨璃「みなさん、大丈夫ですよ。危険なものでは無いので!」

一葉「・・・言われなくても、」

高嶺「警戒しないで、と言われる方が無理でしょうね。」

雨嘉「・・・まあ、そうなるのかな?」

ミリアム「むしろが慣れ過ぎただけじゃろう。」

瑤「・・・慣れとかの問題?」

灯莉「わくわく!なにこれ、面白そう!!」

叶星「ちよつと、灯莉ちゃん!」

2レギオンが梨璃達の言葉に疑問の目を向けていると、興味津々だった灯莉が楽しそうに歪みの中に入っていく。

それを見た叶星が慌てて彼女を追って行くと高嶺達も恐る恐る歪みの中に入って行く。

藍「らんも行く!」

一葉「藍まで!?!」

千香瑠「あらあら・・・。」

瑤「・・・行くしかないかな、」

一葉「・・・お二人まで、」

楽しそうな灯莉の姿を見た藍も彼女達の後を追いつ中に入って行ってしまったため困った表情をしながら千香瑠と瑤も中に入って行く。それを見た一葉は諦めたような表情をしながらしぶしぶと歪みの中へと消えて行った。

蓮夜「各レギオンに別れた方がいいだろうから、2人は自分のエリアに連れて行ってあげてくれ。」

音羽「元からそのつもり・・・、」

茜「軽く説明しておきますね。」

蓮夜「ああ、それじゃ、3人とも彼女達のこと頼む。」

梨璃「わかりました!」

音羽「・・・了解、」

茜「任せてください。」

3人は返事をする歪みの中に入って行く。彼女達が入るとすぐに歪みが消え森の中には彼と夢結だけが取り残された。

蓮夜「それじゃ、僕達も行こうか、」

夢結「そうね、急ぎましょう。」

2人は頷き合うと再び森の奥へと消えて行った。

灯莉「わくわく、何これ☆」

瑤「・・・これは、」

高嶺「どうなっているのかしら?」

歪みの奥に広がる光景、それは現実とは掛け離れた光景であった。彼女の立つ足場を囲うように聳え立つ円形の壁には色や形の違う無数の扉が並んでおりその数は優に100を超えている。

しかしその扉に続く足場は存在しておらず無数の箱状の物体が目まぐるしく上下左右に移動を繰り返していた。

足場から下を覗くとそこには先程と同じ光景以外に変化はなかった先の見えない暗闇が続いている。

雨嘉「・・・ここ、どこなんだろう?」

鶴紗「見覚えはないけど多分いつもの施設の中だろ。」

二水「私たち結構見て回っているんですけど、まだ知らない場所あつたんですね。」

ミリアム「中央棟じゃな。」

梨璃「そうですよ!」

神琳「やはり、そうでしたか。」

二水「わかるんですか?」

梨璃「うん、ここにはよく来るから。」

神琳「はい、構造が前に見せていただいた地図と一致しますのでもしやと、」

ミリアム「百由とちよつとあつてのう・・・。」

一柳隊の面々も初めての場所に困惑しているところの場所のわかる3人がそれに答える。

どうしてわかるのか疑問に思った二水が3人に問いかけるとそれぞれ答えるが、ミリアムだけどこか遠い目をし始めたため距離を離す。

茜「確かにここが1番迷わないからな。」

音羽「これが南区なら地獄・・・。」

定盛「そもそもここがどこか分からないけど、地獄って・・・。」

音羽「・・・下手すると、死人が続出する場所？」

茜「防衛設備でもないのに存在だけで防衛できるからなく。」

瑤「南はダメなんだ・・・。」

千香瑠「そもそもどちらが南なのか分かりませんが・・・。」

一葉「私には全て危険が見えるのは気のせいでしょうか？」

ミリアム「・・・危険表示がなければ基本的に安全じゃぞ。」

梅「・・・百由か？」

ミリアム「入るなど言われておっただのに入ら・・・何回死にかけたことか、あの扉だけは絶対に入らないことをおすすめるのう。」

会話に反応したミリアムが遠い目をしたままある場所を指指す。

「そこには深い黄色をした重々しい扉があり、それには扉いっぱい赤いハザードマークが描かれていた。」

茜「・・・逆に死ななかったの？」

音羽「最低でも腕1本は持っていられるはずだけど、」

ミリアム「開けた瞬間まずいとわかったの、すぐに閉めたんじや。その後すぐに黒鉄さんが来たからどうにかなったんじやが、それでも吐き気と頭痛で酷い目にあっただわい。」

茜「あそこ秒間100回変化する100桁のパスワードが何重にもかかっているはずなのに・・・。」

ミリアム「・・・百由様曰く、勘とのことじや。」

音羽「あの人・・・本当に人間？」

ミリアム「最近ワシにもわからんのじやよ・・・あの時もワシの隣で平然としておったからのう。」

音羽「・・・ドンマイ？」

彼女からどんとドス黒い何か溢れ出す中他の面々は物珍し

そうに辺りを見渡す。

そんな中梨璃と茜が中央に設置されているコンソールを操作していることに気づいた一葉と叶星は2人の様子が気になり彼女達へと近寄った。

一葉「茜、何をしているのですか？」

叶星「これコンソール端末よね？」

梨璃「道の準備ですよ。」

茜「梨璃さん、音羽の分はアタシがやるから先輩のエリアへの通路だけ通して。」

梨璃「はい、わかりました。」

一葉達の質問に答えながらも2人は黙々と作業を続ける。

それに気づいた他の面々も梨璃達の元へと向かうと辺り一帯に小さい音が鈍い音が響く。

それに気づいた高嶺が音の発生源へと目を向けると、そこには宙に浮かんでいた箱状の物体が集まっており、壁に備わっている扉への道を作り出していた。

高嶺「……。」

鶴紗「そういう感じか……。」

梅「面白い仕掛けを作るな！」

梨璃「出来ました。」

茜「こつちももうすぐ終わる。……音羽、道できるから案内しろよ！」

音羽「……以外に早かった、叶星様達、こつち来てください。」

2人がコンソールから手を離す頃には3本の道ができており、それぞれ別の扉へと繋がる。茜の声を聞いた音羽は3本の道のうちの1つの前に立つと振り返り グラン・エプレ のメンバーを呼んだ。

それを見た茜も彼女とは別の道の前に立つと一葉達を呼び始めた



ため叶星と一葉はお互いに顔を見合わせると、それぞれのレギオンメンバーを促し2人の元へと歩き始めた。

梨璃「私たちも行きましょうか。」

二水「一緒ではないのですか？」

梨璃「・・・それぞれで話し合った方が良さそうなので、」

神琳「確かにそうですね、ここは1度自身達だけで話し合った方が都合がいいでしょう。」

鶴紗「なら早く行こう、・・・正直疲れた。」

何か躊躇いのある二水の背中を押すように鶴紗は最後に残った道へと歩いていく。

それを見た梨璃は他の面々を連れて扉へと歩いていくのであった。

## ラスバレー1章☒

二水「ふう、やっと一息つけますう……。」

鶴紗「……まだ終わってないけどな。」

神琳「あの人の雰囲気からして、間違いないでしょうね。」

2レギオンの面々と別れた梨璃達は前日に彼に案内された応接室へと来ていた。

彼女達は気を失っている楓をソファーに寝かせると、緊張が解けたからか酷使し続けた身体は崩れ落ちるように座り込む。

その中で梨璃だけが涼しい顔をしながら部屋に備え付けであるティーセットの準備を始めた。

梅「梨璃は疲れてないの力？」

梨璃「いいえ、疲れていますよ。……ですけど、これくらいのこととで休んじやったら黒鉄さんに怒られますから。」

ミリアム「……流石に厳しすぎではないかのう？」

梨璃「確かに厳しいけど、私から頼んだよ。」

鶴紗「……これからのためか？」

梨璃「そうだね、……力が目覚めたら心が弱いと、だからね。」

美鈴「……そうだね、」

梨璃「美鈴お姉様……。」

美鈴「……普段はどれだけ気が強くても、ほんの一瞬の隙だけで呑まれるから、どうしてもその隙を作らないようにしなければ行けないんだ。」

梨璃が無理をしていないか不安になり問い掛ける彼女達に、梨璃は彼女達を安心させるように微笑みながら答える。

それを見た鶴紗が呟いた言葉に梨璃は少し表情を曇らせる。その様子に気づいた彼女達の雰囲気が悪くしていると、突如美鈴が姿を現し楓が寝ているソファーに腰をかけたながら彼女を心境を静かな口

調で呟く。

梨璃「黒鉄さん曰く、私は絶対に目覚めるらしいので……。」

梅「まあ、いつものことを考えるとそんだろうナ。」

梨璃「……本当に誰も信用してくれませんかよね。」

鶴紗「……それは……な？」

二水「……はい、」

神琳「目に見えてますからね。」

雨嘉「普段の行動を考えた方がいいと思うよ？」

梨璃「……みんな、ひどいよ。」

ミアム「そう言われてものう……。」

結梨「大丈夫だぞ、梨璃！」

梨璃「……結梨ちゃん、」

皆の新雑な言葉に徐々に影を落とし始める彼女に結梨が抱きついた。結梨の言葉に表情を緩め抱き締め返していると、ふと梨璃の脳裏に嫌な予感がよぎる。

結梨「梨璃のそう言うところが好きだから！」

梨璃「……そういえば、前にも似た事があったね。……結梨、嬉しいけど違うんだよ、」

既視感とともに嫌な予感が的中し彼女の目尻から一雫の光がこぼれ落ちる。

美鈴「……わかっていただろうに、」

ミアム「いつそ、哀れじゃな。」

梅「ははは、でもこれが梨璃らしくていいんじゃないか？」

楓「……うつ、なんの騒ぎですか？」

二水「楓さん、目が覚められたんですね！」

楓「……ここはいつたい？」

神琳「黒鉄さんの秘密基地、でいいんですかね？とにかく、前日説明をして頂いた応接室ですよ。どこか具合の悪い所はありますか？」

楓「いいえ、ただ少し目眩が……。」

美鈴「それは疲労だろう。精神干渉されていたんだ無理もないさ。」

梨璃「楓さんは大丈夫なんですか？」

美鈴「ああ、干渉されそうになった形跡はあるけど、特に干渉自体はされてないみたいだね。他の2人も大丈夫みたいだよ。」

梨璃「そうですか、良かったです。」

美鈴「本当にそうだね。……だけどこれくらいなら君でもわかるんじゃないのかい？」

梨璃「……感覚的には理解出来るんですけど、ちよつと自信がなくて、」

美鈴「それだけ出来れば上出来さ、これから克服していけばいい。」  
梨璃「はい！」

自信を持ってない梨璃を慰めるように諭すような口調で声かける美鈴、彼女の意味深な発言に神琳は先程まで疲労の滲み出ていた表情が一転、真剣なものへと変わる。

神琳「……その言い方、やはりまだ終わっていないのですね。」

美鈴「その通り、まだあの子は生きているよ。」

二水「特型ヒューズがそうなんですよね？……ですけど特型は、」

雨嘉「うん、活動停止してた。」

美鈴「まあ、本当ならそんならただけだね。」

彼女から再び放たれた意味深な発言に梨璃以外のメンバーが疑問を覚えていると、

梨璃「よく理解出来てないんだけど特型の中にいたんだけど、倒す前に逃げたのかな？」

美鈴「その考えていいと思うよ。……確実じゃないけれど、あの

子は私と同じ支配型だ。」

梅「美鈴様と同じ・・・。」

美鈴「これも予測だけど特型ヒュージを支配した後に本体が服を着るように中に入ったんじゃないかな？」

楓「・・・それでは、振り出しに戻ったということでしょうか？」

美鈴「そうでも無いか？・・・蓮夜が損傷を負わせることには成功しているから、しばらくは大人しくしているはずだ。」

神琳「・・・それは、ひとまず安心なのでしょうか？」

梨璃「そうでも無いよ。・・・支配型だと時間が経てば経つほど規模が大きくなるから。」

美鈴「それも人も支配するみたいだからね。民間人にも被害が出かねない。」

2人の言葉にことに深刻さを理解した神琳は口を噤むぐ。

それと共に室内に暗い空気が漂い出した時、

美鈴「この話は一旦置いておこう。それで梨璃、」

梨璃「どうしたんですか？」

美鈴「彼からの預かりものだよ。」

そういうと彼女は何も無い空間から大きな包みを取り出した。

それは、梨璃の身長よりも大きく、いきなり渡された彼女は前のめりになるが、包みを杖代わりにすることで転倒を避けた。

梨璃「あ、あの・・・これは？」

見覚えのない包みに梨璃が目を白黒させていると、

美鈴「これはね・・・梨璃、君の新しいCHARMだよ。」

彼女は静かな口調でそう言い放った。

## ラスバレー1章☒

梨璃「できていたんですか！・・・黒鉄さんはもう少しかかるって  
言っていましたけど、」

美鈴「最終調整が終わってないみたいなんだけど、君のCHARM  
が壊れたことを知ってね。・・・とにかく開けてみたらどうだい？」

梨璃は驚きながらも、美鈴に急かされるままに包みを開くと、その  
中には白亜の剣が入っていた。

梨璃「・・・これは、」

美鈴「・・・機体コードは『無垢百合』、黄昏を君専用にも再構成し直  
したもののらしい。」

梨璃「・・・無垢百合、ですか。」

剣の名を聞いた梨璃は再びそれへ目を向ける。

それは刀身から柄まで、全てが透き通るような白で染まっており、  
クリスタルのみが黄色に輝いていた。

今までのグングニルのようなランスタイプとは違い夢結が扱おうブ  
レードタイプの形をしており、その大きさから鶴紗のティルフィング  
と同じバスターソードタイプとでも呼ぶべきだろう。

その刀身を照明に掲げると光を反射し淡い黄色へと色を変えなが  
ら鏡のように梨璃の表情を写す。

ミアム「グングニルとは全く別の形状じやのう？」

鶴紗「かなり使い勝手が違うと思うんだが、大丈夫か？」

梨璃「うん、元々変わることにはわかっていたから、練習もしたし大  
丈夫だよ。」

二水「それにしてもこの持ち手・・・すごい形ですね。」

珍しいそうに梨璃のCHARMを見る面々、その中で二水が彼女の

握る持ち手へと目を向けた。

純白の刀身から伸びる柄、通常なら真つ直ぐと伸びているはずのそれが異様な形に変形しているのだ。持ち手の中半から銃ストックのように刀身側えと曲がってしまった柄、通常ではまず使われないであろう形になってしまっているのだ。

梨璃「これはね、受け流すためらしいんだ。」

神琳「受け流す・・・ですか？」

梨璃「私の体格じゃあ正面から受け止めるのは厳しいらしくて、わざと力の入れにくい構造にしているんだって。」

雨嘉「それじゃあ、攻撃に力が入らないんじゃない？・・・？」

梨璃「元々守ることに重視していて、攻撃は二の次らしいよ。・・・それに力で斬る使い方はしないし。」

梅「なら、どうやって切るんだ？」

梨璃「そうですね・・・美鈴様。」

美鈴「わかった、皆着いてきてくれるかな？」

そういうと2人は部屋を出ていく。

それを見た梅達も2人に着いていくと、そこには学院の訓練所程の大きさの部屋があり、その中央に梨璃と美鈴がそれぞれ向き合うように立つ。

梨璃「お願いします！」

美鈴「・・・。」

梨璃の声と共に美鈴は彼女へと向けて駆け出した。

それを迎え撃つためにCHARMを正面に構えていると、彼女は腕を上げる。彼女の手には何も握られていないが一瞬彼女の手が霞むと共にブリューナクが握られていた。そして現れた刃は上段から梨璃へと襲いかかる。刃が彼女に当たる寸前、彼女は右手首を軸にするようにCHARMを回転させることで刃を受け流し美鈴へと迫る。

CHARMを振り切った美鈴へと柄を向けて使い出す梨璃だが、それを勢いに身を任せるように身体を捻じること回避しもう一度刃を振り下ろした。

滑らかにかつ鋭く通る剣線、嵐のように荒々しくしかし舞を踊るかなように優雅なそれを、梨璃は自身の身体を回し円を描きながら受け流す。

二水「いつもの梨璃さんと違いますね。」

雨嘉「……うん、いつもならしつかりと受け止めて様子を見るのに、」

神琳「確かに……普段は夢結様の戦闘法の面影がありますが、これは別物ですね。」

ミリアム「……どちらかと言うと黒鉄さんに似ておるのかのう?」

梅「違うんじゃないか?」

二水「私には良くんからなのですが……。」

鶴紗「……あの人はそもそも受けないからな。」

神琳「受けるにしても手首だけで流しますからね。」

結梨「良く分からないけど、梨璃、すごく静かだよ?」

神琳「冷静ということでしょうか?」

結梨「……分からない。」

2人の戦いを見ている彼女達は普段とは違う梨璃の戦い方に戸惑いの声をあげる。

その中で結梨だけが梨璃が放つ違和感を感じた。

結梨「ただ、すごく静かなの……いつもポカポカしているのに、」

雨嘉「……もしかして感情?」

結梨の言葉を聞き、無意識に言い放った雨嘉の呟いた一言に彼女達は一斉に梨璃の顔へと視線を向ける。

いつもなら陽だまりのような微笑み溢れる彼女の顔、しかし今その



面影は存在しない。

そこにあるのは無・・・その無色透明な表情は何を考えているのか何を思っているのかすら理解することが出来ない。

彼女はただ冷静に正確に、自信に迫る脅威に対処し続ける。

攻撃をせず相手の攻撃に合わせて回転することで威力を抑えながら守りに徹する。

ただそれだけの動作を精密機械の如く行い続ける彼女には全くの焦りの表情は見えない。ただでさえ回転するという性質上、視界の移り変わりが大きく視覚情報を上手く処理することが困難になる。

それなのに彼女は丸でどこに攻撃が来るかわかっているかのごとく正確に相手の凶刃を捌き続ける。

普段から諦めることを嫌い、強い精神力を持つ彼女だとしてもこれは異常だ。

その異常性に気づいた彼女達は恐怖に支配される。

本当に彼女は私達の知る、一柳 梨璃なのかと、

二水「本当に梨璃さんなのでしょうか、」

神琳「・・・まるであの人見たいですね。」

ミアム「黒鉄さんか？」

神琳「ええ、あの人も感情を表に出しませんからね。」

楓「訓練中、驚くような表情は出していますわよ？」

神琳「・・・あれは仮面ですよ。」

鶴紗「・・・嘘つてことか？」

神琳「はい・・・確信はありませんがあの人はわざと別の表情を出すことで自身の考えを悟られないようにしているように感じます。」

彼女達が話し合っている中でも着実に防ぎ続ける梨璃に、彼の姿を重ねていると彼女の動きが変わった。

自身の身体を回転させることで攻撃の威力を分散させ続けてきた梨璃だが、ここで1度後退するように大きく後ろに飛ぶ。

突然に変化した行動にも限らず美鈴はすぐさま梨璃へと再接近し

ながら鋭い一撃放つ。

それを見て先程と同じ光景が繰り広げられるであろうと考えていたその時、

美鈴「・・・ッ！」

梨璃は彼女の一撃を受け止めた。

先程まで回転することで受け流していたその衝撃は梨璃の身体を後方へ逸らす程の威力を持つが、彼女は膝を使い上手く力を分散させると鏝迫り合いをしたまま切っ先を地面へと突き立てる。

梨璃「・・・焦りすぎです！」

梨璃が叫ぶと美鈴の身体が宙を舞い、それと同時に切っ先付近の地面が砕け散り破片が勢いよく美鈴へと襲いかかる。

まるで弾丸の如き速度で迫り来る石片を美鈴はCHARMを巧みに使い逸らすしながら防御の合間に細かくCHARMを変形させ梨璃がいる場所へと牽制射撃を行うが既にそこには彼女の姿は存在しない。

それに気づいた美鈴が素早く周囲を見渡すと不意に彼女の下に黒い影が生まれる。

それに対して彼女がCHARMを振るうと、そこには己のCHARMを振るう梨璃の姿がありCHARM同士が触れた瞬間再び美鈴の身体が大きく弾かれる。

再び体勢を崩した彼女へと梨璃は接近し追撃を加えようとするが、それは体勢を整えた美鈴に防がられるが空中という足場のない世界ににいる彼女は反撃することが出来ない。

これを好機と梨璃先程の防戦一方の戦いが嘘のように攻める。それを美鈴は捌きながら反撃の機会を狙うが、弾かれる攻撃と弾かれないう攻撃の二択に見切りかねており、彼女から徐々に焦りの表情が浮かび上がった。

攻守の逆転した状況はしばらく続くが、

美鈴「しまった!？」

美鈴は1度受け止めた梨璃の攻撃で弾かれたことで、CHARMを大きく弾かれる。

梨璃「これで、終わりです！」

梨璃のCHARMに触れた瞬間弾かれるか弾かれないかの二択……それは本来三択だったのだ。

1つ目は、『触れた瞬間に弾かれる。』  
2つ目は、『触れても弾かれない。』  
そして3つ目の『受け止めてから弾かれる。』

最初に梨璃がとった行動、それは受け止めたのちに彼女を弾くことで体勢を崩すことだった。

しかし、その後に迫る二択により選択肢の幅が狭まっていた彼女は本来存在する三択目を読み逃してしまったのだ。

それにより生まれた隙を梨璃は見逃さない。  
手首を軸としてCHARMを回すことで直前の振るう動作を強引に突きへと変え、それにより生まれた遠心力を力と速さへと変える。  
建て直しの時間すら与えず、本来の威力を超えた突きが美鈴へと迫る。

それを見た彼女は何か思ったのか左手をCHARMから離し自身を狙う刃へと向ける。

美鈴「強くなったね、梨璃。」

美鈴と刃が触れる寸前、彼女の姿が掻き消えと同時に梨璃の首筋に冷たい何かが触れる。

美鈴「・・・だけど、まだ負ける訳には行かないんだ。」

そして美鈴の声が背後から聞こえた梨璃が声の方へと視線を向けると、

そこには左手でCHARMを握る美鈴の姿があった。

## ラスバレー1章

梨璃「勝てたと思ったんですけどね。」

美鈴「いい線は行っていたよ。……だけど、爪が甘かったね。」

自身の敗北に気づいた梨璃はCHARMを下ろすと美鈴へと振り返る。

彼女に戦意が無いことを把握した美鈴も彼女にならないCHARMを下ろすと、苦笑している彼女の頭を撫で始め、それに梨璃は困ったように頬をかく。

二水「……えっ？」

雨嘉「当たったように見えたけど……どうして？」

梅「……逸らしたんだ。」

梨璃の勝利が確実であったはずの状況からの敗北、あまりにも一瞬の出来事に状況を理解出来なかった二水達が頭を悩ませていると、梅が確信の籠った口調で言葉を紡ぐ。

楓「逸らした……ですか？」

梅「ああ、梨璃の攻撃を逸らし、その勢いを利用して背後に移動したんだ。」

普段から高速機動戦を得意としている梅は、それにより鍛えられた動体視力にて瞬きの合間に行われた2人の攻防をしっかりと捉えていた。

まず、梨璃が美鈴へとCHARMを振るう瞬間、彼女の右手からブリューナクが姿を消える。

それと同時に左手が霞、それと同時に彼女の左手には先程のブリューナクが握られていたのだ。

そして、彼女は迫る刃にCHARMを添わせるとその勢いを利用し

て梨璃の背後へと移動し彼女の首筋へと己の刃を当てたのだ。

現実的に不可解な部分もあるが、この刹那の時間の中でそれを実行した美鈴に尊敬の眼差しを向けながら、梅は他の面々に自身の見たものを説明する。

梅「・・・最後の最後で梨璃が欲を出した感じだな。」

美鈴「その通り流石は梅だ、よく見ている。」

梅「アハハ・・・元々速さには自信がありますからね。」

梅の言葉が聞こえていたのか、美鈴は梨璃を連れて彼女達の元へと歩いてくる。

美鈴「そう謙虚にならなくていいんだけど・・・梨璃。」

梨璃「は、はい!」

美鈴「・・・梅が言ったように、君の詰めの甘さが今回の敗因だ。」

美鈴は梅と軽く会話を終えると梨璃へと振り返り、辺り全体に冷たい風が吹き荒れた。

先程までの優しい雰囲気は存在せずただただ冷たい何か彼女達を撫でる。

梨璃「・・・はい、わかっています。」

美鈴「今回はその慣らしを兼ねた模擬戦だったから良かったが・・・これが実戦だったら死んでいたのは君だよ。」

梨璃「・・・。」

楓「美鈴は流石に言い過ぎでは!」

美鈴「言い過ぎではないよ・・・。」

楓は梨璃を庇おうとするが、美鈴は諭すようにしかし感情の感じられない声で言葉を紡ぎ続ける。

美鈴「楓、君は梨璃の状況を把握しているのかい？」

楓「・・・狙われる可能性があるのでしょうか？」

美鈴「・・・可能性じゃない、確実にだ。これから彼女は常に狙われ続ける。今は気づかれてないからであって、表面化していないだけで確実にその事態は起きる。」

二水「で、でも気づかれなければ！」

美鈴「彼女の性格でそれが可能だと思ukai？」

二水・楓「・・・。」

美鈴「そもそも、梨璃は決して裏に関わらないで生きていくことが出来ない。・・・リリイである時点でね。」

神琳「リリイである時点で・・・。」

俯きながら紡がれた美鈴の一言に神琳は何か思い当たる節があるのか真剣な表情で思考に耽ける。

神琳「・・・そういう事ですか！」

思考の中である一つの可能性に行き着いた彼女は勢いよく顔を上げると、それを見た美鈴は一瞬表情を緩めるがすぐさま元の表情に戻ってしまった。

ミアム「どういうことじゃ？」

神琳「私達リリイはCHARMなどのヒュージに対抗できる武器を使いますよね。」

ミアム「当たり前じゃのう。」

雨嘉「・・・当たり前じゃないかな？」

神琳「それではCHARMの情報はどのような扱いにあっているのでしょうか？」

ミアム「そうじゃのう・・・モノによって違うが、機密事ツ！」

鶴紗「・・・そういうことか。」

雨嘉「えっ？なに!？」

ミリアムを始めたした面々が、神琳の言いたいことに気づくと彼女達の表情は引き締まったものとなる。

ミリアム「守秘義務じゃよ。」

神琳「はい、私達リリイにはCHARRMの使用許可と同時にCHARRMについての守秘義務が課せられます。これはそこまで多くの制約はありませんがそれでもある程度の期間での監視や個人情報の管理がなされます。」

美鈴「その通り、本来の目的はテロリストなどの反政府組織にCHARRMの情報が漏洩しないようにする対策なんだけど・・・意味があるとは言えないね。」

神琳「これは個人を守るものでもありますが、逆に情報を知られてしまうことでもありますからね。」

美鈴「普通のリリイなら別に気にすることでもなんだけど・・・私達みたいな異能者や鶴紗や結梨みたいな強化リリイにとつてはかなり危険なことだからね。」

神琳「黒鉄さんも予想外のようにでしたし、対策も遅れているでしょうから隠蔽も不可能に近いでしょうね。」

梨璃に起こりうる可能性、先日に見せられたあの光景を彼女達は思いつく。い出す。

そして想像よりも深刻である梨璃の現状に彼女達は危機感と共に、それは自身達にも降り注ぐものでもあることを思い出す。

二水「・・・今思うとわたしたちってかなり危ない状況なんですわね。」

梅「まあ、蓮夜も言ってたしナ。」

ミリアム「・・・かなり念押しで確認されたからのう。」

鶴紗「今更後悔しても遅いだろ・・・。」

二水「い、いえ・・・後悔というよりも現状を再認識したと言いますか、」



神琳「実感がなかったということでしょうか？」

二水「・・・は、はい、わたしの場合は実際に見た訳ではありませんから、」

ミリアム「・・・寝てたからじゃろう。」

美鈴「・・・それについては人のことを言えないな。」

不安そうな表情の二水へと新雑な言葉をミリアムが放つと、思うことがあった美鈴は苦笑しながら元の雰囲気へと戻る。

その横には疲労の色を見せる梨璃の姿があり、2人の雰囲気から美鈴からの総評が終わったことがわかる。

神琳「そちらは終わったのでしょうか？」

美鈴「ああ、ごめんね・・・キツかっただろう？」

神琳「確かに精神的に辛い部分もありましたが、改めて私達の状況を認識し直す良い機会になりました。」

美鈴「ならいいんだ。・・・だけどこれだけは覚えて置いて欲しい、今君達が見出した可能性・・・それは決して可能性ではないということをと、」

美鈴の放った言葉が彼女達に重く押し掛ける。

可能性ではない・・・それはかなりの確率で起こりうるということなのだから、

部屋一帯に暗い空気が流れる中、彼女達の耳に電子音が鳴り響く。発信源を探すとそれは皆の端末であり、その画面には黒鉄 蓮夜という文字が映し出されていた。

## ラスバレー1章☒

二水「・・・ここは、」

神琳「会議室・・・でしょうか？」

先程まで訓練室にいた梨璃達一柳隊の面々は、とある部屋へと来ていた。

その部屋には中央に球状の水晶体が存在し、それを円形のテーブルで囲うよう構造になっており、床や壁に使われた木材や優しい光を放つ照明が、落ち着いた雰囲気をかもちだしていた。

二水「梨璃さんはこのことをご存知なのですか？」

梨璃「私も初めてだよ・・・だけど、」

神琳「何か心当たりがおありなのでしょうか？」

梨璃「多分だけど、ここは資料室もなんだと思うんだ。」

鶴紗「資料室？・・・ここがか？」

梨璃の言葉に鶴紗が疑問の声をあげると、彼女はテーブルへと近寄り手を置いた。

すると彼女の手を中心にテーブルが光出し水晶体が回転を開始した。

楓「な、なんですの!?!」

梨璃「・・・やっぱり。」

徐々にその速度をあげる水晶体は、その形を解き螺旋を描きながら宙を舞う。

ミリアム「・・・これは、」

雨嘉「・・・ディスプレイ端末？」

初めは乱れていた螺旋だが、徐々に安定した螺旋を描き出し、それと共に螺旋の周囲に結晶で出来た板が生み出された。その結晶板には様々な文字体が映し出されるが文字化けしており内容は読み取ることが出来ない。

梨璃「この施設はね、全部情報体認証式みたいなんだ。」

雨嘉「・・・情報体認証？」

梨璃「わたしも聞いただけでよく分からないんだ。」

梅「・・・蓮夜がよく言うアレじゃないか？」

二水「アレ・・・ですか？」

梅「あいつが能力を使う時に情報を見てから改変する・・・みたい  
に言ってただろう？」

二水「はい・・・確かにそのような言っていましたね。」

神琳「・・・視覚内にあるモノの情報を読み取り操作する力だった  
はずですね。」

梅「だからその情報体？を確認する仕組みを作ったんじゃないか  
？」

梨璃「多分それであっていると思います。」

梨璃は彼女達の会話を聞きながら淡々と操作を続ける。すると文字化けして読めずにいた部分が読めるようになり、書かれているモノの全貌が明らかとなっていく。

そこには計画書やレポートなどの資料が数多映し出されていた。

二水「これは・・・何かの実験資料でしょうか？」

ミリアム「CHARMについての実験資料もあるのう。」

雨嘉「これは医療関係かな？」

神琳「・・・これは!？」

映し出された資料を各々が読んでみると、神琳が大きな声をあげる。



鶴紗「再生・・・これって、」  
梨璃「皆さん、コレ次のページがありますよ。」

読めば読むほど不信感を煽る文章に楓達が眉間に皺を寄せていると無言のまま画面を見続ける鶴紗に気づいた雨嘉は彼女に声をかける。

声をかけるが反応のない鶴紗の姿に不安を覚えた雨嘉が彼女へと手を伸ばすと、梨璃がこの文章に続きがあることに気づき声をあげた。

鶴紗「梨璃、続きを見せてくれ、」  
梨璃「う、うん・・・わかった。」

少し食い気味に梨璃へ迫る鶴紗に、違和感を覚えながら彼女は画面を操作する。

すると画面内の映像が変わり、先程とは別の文章が姿を現した。

あか「

あかあか・試験内容① ○○○○の効果検証。

あかあか識別名称「AM-001」に○○レベル

あかあかの○○を与えた状況からの身体の

あかあか○○時間を測定。

あかあか・試験結果

あかあか結果① 識別名称「AM-001」の○○

あかあかを○○した後、約○時間後に完治。

あかあか結果② 識別名称「AM-001」の○○

あかあかの30%を○○した後、約○○時間後

あかあかに完治。

あかあか上記の結果より識別名称「AM-001」

あかあかは部位により完治時間が異なり○○

あかあかなどの○○に関わる○○では、それ



いきなりの自体に彼女達が困惑する中も結晶体は動き続け本来の形である球体へと姿を戻す。

??? 「もうこっちに着いてたんですね。」

それと同時に聞こえた声に反応し、声の方へと視線を向けると、

茜 「音羽がゆっくりしてたから待たせちゃったじゃん！」

音羽 「・・・しっかりと説明してただけ、」

そこには茜と音羽、そして彼女達が所属する2レギオンの姿があった。

## ラスバレー1章☒

梨璃「みなさん!」

音羽「・・・さつきぶり、」

茜「遅くなっちゃいましたかね?」

梨璃「いいえ、私達も今さつき来たばかりなので、」

部屋に入ってきた音羽と茜は自身のレギオンメンバーを促しながら部屋へ入ってきた。そして入ってきた面々が部屋の中見渡す中、2人は梨璃へと近づくとテーブルに触れている梨璃の手へと視線を向ける。

梨璃「ダメでしたかね?」

音羽「別に・・・。」

茜「大丈夫ですよ、元々先輩がプロテクトかけてるんで見せていい情報しか見れませんから。」

梨璃「やっぱりそんなんだ。」

音羽「・・・でも、少し刺激が強いから切らしてもらった。」

勝手に使用したため気まずそうに言う梨璃に、茜が笑いながら返すと、音羽が背後へと視線を向けた。

それに気づいた梨璃がそちらへと視線を向けると、そこには興味深そうに部屋を見渡したり、何かを思考する2レギオンのメンバーの姿があった。

梨璃「ありがとうございます。」

音羽「気にしないで・・・。」

茜「そうそう、気にすることじゃないですよ。・・・ただそちらのメンバーはよく見れましたね?」

茜の一言に難しい表情をする一柳隊の面々、それは慣れすぎたこと



による違和感だろうか何か煮え切らないような雰囲気を出しながらお互いに顔を見合わせる。

雨嘉「一柳隊に入った頃は考えられなかったかな？」

ミアム「確かにここ最近こういったことをよく見るからのう。」

神琳「元々リリイですから、こういった事柄に慣れていますが……この近頃慣れすぎてしまったのかも知れませんね。」

慣れすぎる……それはリリイにとっては日常的であり当たり前のことである。

慣れると言っても様々なものが存在し、

人類の脅威である『ヒュージ』への慣れ。

その脅威に対抗出来る『CHARM』への慣れ。

脅威から人類を守るための『戦場』への慣れ。

そしてあの場所では決して逃れ慣れない『死』への慣れ。

それは自分にも他人にも起こりうる。

誰かが『死』ねば、確かに悲しいが、それでも時間が経てばそれも薄れてしまう。

リリイはそれを繰り返すことで『死』への恐怖耐えられるようになっていき、それと同時に『死』に慣れてしまうのだ。

本来なら争いとは無縁であろう年頃の少女達が戦場で『脅威』対抗し『死』に慣れる。それは道徳的に考えれば異常であるが、それと同時に世界の常識でもあるのだ。

茜「本当ならアタシ達の歳だと、ただ学校に行って、ただ友達と遊んで……そんな感じのただただ当たり前の日常を送るものなんですけどね。」

梨璃「……。」

茜「それなのにアタシ達は『死』に慣れるところまで来ちゃってる……確かにアタシ達リリイじゃなきやヒュージに対抗出来ないでしょうけど……やっぱり悲しいんですよね。」

音羽「・・・それは当たり前、確かに主力になるのはリリイだけだけど、決して何もなくて言い訳じゃない。」

神琳「私達のガーデンはリリイ第一の校風ですが、そのような場所は数少ないですからね。・・・私達が恵まれているのでしよう。」

茜「音羽のところも大丈夫かどうかは・・・結構おかしいからな〜。」

音羽「そもそも人として見てない。」

茜「いや、見ている人は見てる。・・・けどあるんだよね、アタシ達のことをモノとしてみる視線が、」

音羽「・・・以外、」

茜「音羽からするとそうかもしれないけど大半はまともだから・・・ただ飛び抜けているのが多いだけで、・・・それにアタシ達は怪しいか、」

梨璃「それを言うなら私もですよ。・・・それにどのように考えられるんですからお二人共人間です！」

2人は何も感じていないのか平然とした表情で言葉を紡ぎ続ける。彼女達の話聞く事に雰囲気暗くなる中、梨璃が2人の間に割り込むように言葉を遮った。

それに驚き少し放心する2人だが、すぐに正気を取り戻すと笑いながら梨璃へと視線を向ける。

茜「アハハ、ありがとう梨璃さん、・・・でもそれ、先輩に言われたんではない？」

梨璃「・・・やっぱりわかっちゃいますか？」

音羽「・・・私達もよく言われたから、」

茜「それに始まりは理不尽だけど、自分で決めたことだからね。」

音羽「後悔はしていない・・・。」

梨璃「やっぱりお二人ともお強いんですね。」

梨璃の言葉に照れくさそうに顔を逸らす2人に彼女はクスリと笑

う。

それに気づいた2人は顔を赤らめながら梨璃に近づくと左右から彼女の頬を引っ張った。

茜「悪いことを言う口はこれかな？」

梨璃「おふはりとは、いひやいですうよ！」

音羽「・・・自業自得、」

???「そろそろお遊びはおやめなさい。」

2人が梨璃の頬を引っ張り遊んでいると、後ろから声が聞こえた。それに気づいた3人が後ろを向くと、

梨璃「お姉様!!」

夢結「皆元気な良かったわ。」

そこには数時間前に別れた夢結の姿があった。

茜「用事は終わったんですか？」

夢結「ええ、終わったわ。待たせてしまったかしら？」

音羽「・・・さつき来たところ、です。」

夢結「なら良かったわ。」

彼女達の元へ近づくと彼女は部屋内を見渡し始める。

夢結「全員揃っているみたいね。」

梨璃「・・・あの、」

夢結「どうしたのかしら？」

梨璃「黒鉄さんがいないと思ひまして、」

夢結「すぐに来るから大丈夫よ、ほら。」

梨璃は彼がいないことを疑問に思ひ夢結へと問いかけると、彼女は

入口へと視線を向けた。  
すると外から彼の姿が現れる。

夢結「もう全員いるわよ。」

蓮夜「そうか、ありがとう。・・・入ってきてください。」

1度部屋を見渡した彼は、廊下へと声をかける。  
すると彼の背後にある扉から5人の人影が姿を表した。

天葉「まくた、凄いところに出たわね。」

依奈「ここ、どうなっているのかしら？」

樟美「・・・さつきまで草原にいたのに、」

壺「・・・他にも工業地帯があったわね。」

梅「お前達も呼ばれたの力？」

天葉「ええ、そもそも色々と聞く予定だったのよ。・・・それに私達だけじゃないわよ？」

梅「他にもいるの力?・・・百由じゃないだろうし誰なっ!？」

梅の質問に天葉は後ろに視線を向けながら答えた。それを疑問に  
思い彼女の視線を追うと、

??? 「・・・これは色々と覚悟しなくてはいけないようじゃな。」

そこには彼女の所属する百合ヶ丘女学院の理事長代行である高松  
咬月の姿があった。

## ラスバレー1章☒

梅「理事長代行!？」

一葉「えッ!?ここは百合ヶ丘の中なのですか!？」

二水「・・・違うと思います。」

千香瑠「それではなぜこちらに・・・。」

蓮夜「・・・私が呼んだからだよ。」

理事長代行という思いにもよらない人物に驚きの表情を見せる。

その中で彼は静かに彼女達の疑問に答えた。

短い時間ではなるが彼の人となりを感じてきた2レギオンの面々は普段と全然違う彼の雰囲気困惑の表情を見せながら彼へと視線を向ける。

蓮夜「本来なら情報漏洩のリスクなどを加味して秘匿するが・・・

本件は百合ヶ丘女学院にも被害が出ているからね

。説明の必要があると考えたんだよ。」

一葉「口調が普段のものと違うような?」

神琳「それは今回の件に対するあの人の立ち位置から変えてるのだと思われまますよ。」

二水「相手によって色々と変わりますからね。」

紅巴「そんなに違うのですか?」

楓「私と梨璃さんは入学初日から行動を共にしておりますが今のあの人を知っていますと、とても信じられませんもの。」

梨璃「・・・あはは、あの時はすごく固かったですからね。」

夢結「私が止めなければずっと続けていたでしょうね。」

千香瑠「・・・それほどなのですね。」

楓と梨璃がああの時の事を思い出していると、呆れたような表情をしながら彼女達に言葉を返す。それを見た千香瑠は苦笑すると彼へと視線を向けると、

恋花「色々と固いと疲れちゃうぞ、顔見知りしかないんだから  
そう固くならない!」

蓮夜「・・・こちらにも体制とかがあるからね。そうは行かない  
だよ。」

恋花「だけど、堅苦しいの苦手なんだよね、そうだ! 私達にだけ  
普通に戻せない?」

蓮夜「そう言われても・・・。」

茜「恋花様、先輩の方にも事情があるので困らせないであげてくだ  
さいよ。」

恋花「ちよつと、茜!」

困ったように表情で首を傾げる彼を見た茜は、恋花へと近寄るとそ  
の手を引き少し離れた場所でこちらを見ている揺の元へと歩いて  
行った。

一葉「恋花様が申し訳ありません。」

蓮夜「いや、こちらもいきなりの事だから仕方ないことですから気  
になさらないでください。」

恋花が遠ざかるのを確認し彼が改めて理事長代行・・・高松へと視  
線を向けると彼は室内を確認しているのか部屋全体へと視線を向け  
観察している。

蓮夜「お待たせしてしまい申し訳ありません。」

高松「いや、こちら興味深いものを見せてもらっているので問題  
はないのじゃが・・・時間をかけるとお互いにまずいじゃろう?」

蓮夜「お心遣い感謝致します。それでははじめましょうか。」

会話を終わると蓮夜はテーブルへと近づき手を置いた。

すると先程梨璃が触れた時と同じく光を発するとテーブル周囲の

床が光そこから椅子が姿を表した。その椅子29席が6つの括り均等に並んでおりその個数からそれぞれ各レギオンや所属によって分けられていることが分かる。

蓮夜「それでは皆さんこちらへ、」

彼の言葉に茜と音羽は自身のレギオンメンバーを促しながら席へと座ったため、それを見た梨璃達も彼女達にならない席へと座る。

彼女達のが席に着くのと同時にアールヴヘイムの面々と高松も席に座りそれを見た彼は隣の空いた席へと座る。

蓮夜「それでははじめましょか・・・まず、現状について質問がある方はいますか？」

席に着いた皆が落ち着いていることを確認した彼は彼女達へと質問がないか問う。

彼女達は何から聞こうか考えているのか難しい表情をしていると、叶星と高嶺が手を挙げた。

蓮夜「お二人共、どうぞ、」

叶星「それでは聞かせて貰うわ。・・・そもそもここはどこにあるのかしら？施設の規模的に個人で秘匿するには限界があると思うのだけだ？」

高嶺「そうね、私達が見た場所だけでもかなりの広さあるはずよ。」  
蓮夜「この位置ですか・・・ならこちらをご覧下さい。」

2人の質問に彼は自身の目の前にディスプレイ画面を作るとそれを横へと軽く押す。するとディスプレイ姿を振らしながらテーブルに沿うように円形に動いて行く。

そして人も前に到達するとディスプレイは分裂するようにその数を増やしていき全員に行き渡ると彼の元へと戻って行った。

叶星「・・・これは!？」

高嶺「どういうことなのかしら?」

彼女達の目の前にある画面、そこに映し出されているものはこの施設のものであろう見取り図とその寸法などの基礎情報だった。

依奈「平面積だけでも50万?ですって!？」

蓮夜「それらの空間が計200階層・・・それが本施設の規模です。」  
ミリアム「なんじやこりゃ!!どうやって隠すなんて不可能じゃろうが!？」

梨璃「・・・えつと、これってどれくらい広いのかな?」

神琳「そうですね・・・地球の表面積が約5億?なので、おおよそ地球の5分の1と言えわかりやすいと思われれますよ。」

梨璃「・・・えっ?」

夢結「そして地球の表面積の中で陸地は約3割なの・・・つまりここは地球の陸地と変わらない程の広さがあるという事ね。」

梨璃「それじゃあここはどこにあるのですか!?!もしかして宇宙!？」

二水「流星にそれはないと思いますよ?」

一葉「そうですよ、そもそも宇宙にあるとしても見つからないのはおかしいです。」

蓮夜「・・・地球上にないという点は正解だね。」

一葉「・・・?」

一葉は彼から発せられた言葉に首を傾げ始めたため、それを見た彼はディスプレイを操作する。

すると彼女達の前にあるディスプレイの画面が変わりそこには世界地図と太平洋の中央に正方形の物体が映し出されていた。

高松「・・・これは、」

蓮夜「地球上の座標と照らし合わせた場合の本施設の位置情報で



す。」

高松「これがこの場所の位置ということか、」

一葉「そ、そうすると太平洋の真ん中にあることになるますよ!？」

叶星「もしかして海底かしら?」

高嶺「そうだとしても見つからないのはおかしいわ。」

定森「ならここはどこにあるのでしょうか?」

天葉「それも説明してくれるんでしょう?」

蓮夜「もちろん：：確かに本施設の位置情報は地図上の位置であります。：：しかし、本施設は事実上この世界に存在もしません。」

依奈「それだとあるのにないってことにならないかしら?」

蓮夜「その通り、本施設は私達の暮らす世界線には存在しないのです。」

思考の海に沈む彼女達は、彼の口から放たれた予想外の一言により浮上した。

## ラスバレ1章51

彼が再びディスプレイを操作すると彼女達の前にある画面が2つに増え新たな画像が移し出された。

そこには半透明の地球が2つ並んでおりその間に箱状の物体があることが分かった。

天葉「・・・これって地球よね？」

依奈「どうして2つも映し出されているのかしら？」

樟美「・・・？」

壱「樟美、どうしたの？」

樟美「何かおかしくないかな？」

天葉「おかしい？・・・どこかわかるかしら？」

樟美「・・・えっと、ここです。」

そう言つて樟美が指さした先には右側に映し出された地球があり、それは一定の速度で左回転を続けている。

天葉「これってただの地球の画像でしょう？」

壱「見たところ違いは、左側のものと回転方向が逆であることでしようか？」

樟美「・・・そこも確かに違うけど・・・違うの。」

壱は自身の思い当たる節を答えるが樟美の感じているものとは違うらしく首を傾げる。

違和感を覚えながらも、その答えを得られない樟美が必死に、その違和感を探していると二水が彼女の肩を叩く。

二水「樟美さん、樟美さん、」

樟美「ん？・・・どうしたの、二水ちゃん？」

二水「これ鏡合わせじゃないですか？」

依奈「・・・確かに、」

天葉「そう言えば気にしていなかったわ。」

樟美「天葉様、これです!」

天葉「おっと、いきなり飛びついたら危ないわよ?」

違和感の正体が判明し樟美は嬉しそうに天葉へと抱きつく、それを優しく受け止めた天葉は注意しながら彼女の頭を撫でる。

それが気持ちいいのか樟美は目を細め力を抜いて天葉に身体を預けると視線だけ画面に向き直る。

樟美「これはどういう意味なのでしょうか?」

天葉「それは・・・、依奈?」

依奈「いきなり振られても分からないわよ?・・・そうね、」

いきなり話を振られた依奈は天葉に呆れたような視線を向けたあともう一度画面を確認する。

依奈「・・・鏡合わせの地球以外に怪しいのは、この立方体くらいかしら?」

壺「もしかしてこの場所なのではないでしょうか?」

天葉「そうすると私達は地球と地球の間にいるってことにならないかしら?」

樟美「天葉姉様、そもそも地球は2つありませんよ?」

依奈「そんな事も分からなくなっただのかしら?」

天葉「そんなわけないでしょう。でもこの画像をそのままに表すとそうなるのよ!」

依奈「そんな非現実的なことあるわけないでしょう?」

天葉「そんな非現実的なことに巻き込まてるのよ私達!・・・さてはからかってるわね!」

依奈「からかってないわよ?・・・」

笑う依奈に天葉がジト目で向けると彼女は話題を逸らすために画面へと目を向ける。

依奈「他に手掛かりはないかしらね？」

天葉「分からないわよ・・・もういつそのこと異世界とかでいいんじゃないの？」

樟美「天葉姉様・・・流石に投げやりすぎますよ。」

蓮夜「いいや、それでも無いよ。」

樟美「・・・えっ？」

答えが見つからず、不貞腐れ始める天葉を樟美がなだめようとしていると彼から言葉を投げかけられる。

天葉「どういうことよ、もしかして本当に異世界なんてものがあるの!？」

蓮夜「ああ、異世界と呼べるものは確かに存在している。そして本施設は世界と世界の間・・・世界の狭間と言うべき場所に存在している。」

梨璃「魔法のある世界とかもあるんですか!？」

夢結「・・・璃梨、そもそも私達リリーの存在自体が魔法のようなものよ・・・。」

彼の言葉に目を輝かせながら的はずれな質問をする梨璃に夢結は溜息をつきながら彼女を宥める。

蓮夜「・・・異世界、厳密的に言うならば並行世界とでも言うべきものは無数に存在するんだよ。そもそも私の考えではこの世界自体が世界の基礎となった世界・・・今は基礎世界としようか、その基礎世界から生み出された並行世界の1つであると考えている。」

依奈「並行世界ですって、それも私達の暮らしているこの世界は数ある世界の1つでしかないって言うの!？」

蓮夜「そもそも考えたことはないかい？・・・どうしてヒュージなんて言う自然の摂理に属さない生物が存在するのかと、」

全員『!?!』

確かにそうだ。

人間のように摂理から離れた行為を行うものもいるが、生物は必ず自然の摂理の中で生きている。

これは人間も例外ではなく枠組みから外れては生きては行けないのだ。

例えば生物が生きていくためには栄養が必要であり、その取得方法は様々であれど必ず必要量の摂取が必要となってくる。

このように生物は必ず共通した当行動原理が存在するのだ。

しかし、ヒュージにはそれが存在しない。

そもそもヒュージは栄養の摂取をしないのだ。

たとえヒュージの栄養素がマギであるとしても、同じくマギを保有するリリイにはその性質は存在しない。

それはマギが自動車を動かすための燃料と同じく役割だからである。

つまり生物が生きていく上で必要な要素ではないのだ。

そしてヒュージを形作るヒュージ細胞は捕食・寄生・成長といった機能を有しているが再生という細胞が持つ基本的な機能を有していない。

確かにレストアードと呼ばれる損傷をネスト内で修復した個体なども存在しているがそれはマギによって損傷部を再構成しているだけであって細胞の力で再生している訳では無いのだ。

そう考えると彼女達の中だとある疑問が生まれる。

・・・『ヒュージとは本当に生物なのか』と、

そして・・・、

蓮夜「そしてリリイも、本来ならおかしい存在だ。・・・そう思わないかな？突如現れたヒュージと同タイミングにマギと呼ばれる未

知のエネルギーが発見される。・・・タイミングが良すぎるんですよ。だからこそ私はこう考える。」

彼が言葉を紡ぐごとに室内どんどんと冷たくなっていく。

しかし画面の端に見える室温計では実際の室温に変化はない。

蓮夜「・・・マギとは、基軸世界から分離する時に生じた因果性のズレを修正するために、世界が修正時に生まれた力を矛盾点を出さなために本来なら存在しない新たな要素として作り出したものであると、そしてヒュージはそのマギという要素・・・それを世界に定着させるために作られた緩衝材のようなものなのではないのかと、」

それではこの寒さはどこから来るのか、

まるで聞いてはいけないことを聞いてしまったかのように彼女達の中に恐怖が駆け巡る。

それは恐怖であると同時に警鐘のように鳴り響き彼女達の脳裏から離れない。

そして心はここから離れようと叫ぶが身体は、まるで蛇に睨まれたか蛙のように1ミリたりとも動かなかった。

その中で彼はゆっくりと口を開き、

蓮夜「そしてリリイとはヒュージが現れたことによって生まれた一種の変異体・・・世界に存在するはずのなかったバグのような存在では無いかと考えている。」

彼の言い放った言葉、それは彼女達自身の存在を否定するかのようなものであった。

## ラスバレ1章52

天葉「……どう言うことよ、」

蓮夜「……。」

天葉「どういうことって聞いているのよ!!」

上手く声が出ないのか、掠れた音を出す天葉の口から言葉が紡がれる。

しかしその答えは誰からも帰ってこず、ただ沈黙だけが支配する空気の中、彼は静かに目を閉じると、そのまま動かない。

そんな沈黙の中、今まで溜まっていたものを吐き出すかのように、天葉は絶叫の如く怒りの籠った言葉を解き放つ。

部屋全体に広がる彼女の叫び呼応するように少女達の中に理解の出来ない感情が渦巻く。

今、彼はなんと言った？

……変異体？

……存在するはずがない？

……バグ？

彼は何がそうだと言った？

……ヒュージ？

いや、違う。

彼はヒュージ以外のマギを持つ生物を指し示していた。

それは何だったか？

少女達はその答えを自身の記憶の中から探す。

しかし、少女達にはその答えが出てこない。

……いや、違う。

少女達はただ認めたくないのだ。

理解してしまえば、それを認めてしまうから、

理解してしまえば、自身がおかしくなってしまうと分かっているか

ら、

天葉「答えなさいよ!!……そのために私達をここに呼んだんでしよう!!」

蓮夜「……。」

天葉「……答えなさい、答えてよ……私達はなんなの?」

答えが帰ってこない天葉は怒りのあまり彼の元へと歩いていきそのまま胸倉を掴みながら叫ぶ。

その声はとて悲痛であり、言葉を紡ぐ事に弱々しくなっていく彼女の声は震えと共に濡れていく。

彼女は怖いのだ。

それは自身の事ではなく……ただ大切な自身の<sup>シルト</sup>大切な人の身を案じるが故に、

自身の事など彼女はいつでも良かった。

しかし彼女には己の身よりも大切な、どんなことがあると必ず守ると誓った存在がいるのだ。

そんな彼女が、最愛の<sup>江川 樟美</sup>シルトが存在するはずのなかった人物だった

言われ、まるで存在を否定するかのような言葉を彼女は認めることが出来ない。

天葉「私達リリイがいるからヒュージが生まれたって言うの?」

蓮夜「……それは違う、先も言ったようにヒュージが生まれたからこそリリイと言う存在が生まれたと言える。」

天葉の悲痛な叫びが響く中、やっと彼は沈黙を破る。

蓮夜「それにこれは、私達のような存在が通って来た<sup>地獄</sup>道だ……。それと同時にこの真実は私達が<sup>この世界を生きるための道標</sup>向き合わなくては行けない課題でもある。」

天葉「か……だい?」



蓮夜「・・・そう、これは生きとし生けるもの全てが直面する命の課題そのもの、そしてこの課題を達成することが本来世界が定めた運命<sup>物語</sup>なのだから、」

ここで彼は今まで閉じていた瞳を開く、そこには彼女をそして少女達に対する優さが込められていた。

蓮夜「だから大丈夫、だって君達は僕達のようにこの世界が産まれてくることを許されていない存在ではない、望んだ存在なのだから、」

彼は優しげな口調でそう呟くと、彼女を席へと促す。

そこには彼女の大切な少女がおり彼女は微笑みながら天葉を迎え入れた。

天葉「・・・。」

蓮夜「落ち着いたかな？」

天葉「取り乱してごめんさい、もう大丈夫よ。」

樟美の頭を撫でながら落ち着いた口調で返事を返す彼女を見た彼は1度微笑むと再び表情を変える。

蓮夜「・・・それでは話を戻しましょう、これから話すことはあまりに非現実的ですが、これから話すことは全て真実であり、この場に皆さんの知りたいと考えているものの答えです。」

そこから彼は、彼女達が知りえたい事、<sup>異能者</sup>彼等が持つ異常性について語り始めた。

それは彼の言う通りあまりにも非現実的であり、決して真実だと確信を持てるものではなく、直接見ることがなければただ妄想を語っていただけとしか感じる事が出来なかったであろう。

しかし同時に彼の口から紡がれる言葉には、彼女達の持つ常識を根

本から破壊するだけの力を秘められていた。

高松「……にわかに信じ難いが、君がここまで念入りに準備をしての行動に移しているのだから真実なのじゃろうな。」

蓮夜「はい、今お話したことは全て真実であり、そしてこれから直面するであろう危機でもあります。……ですが、」

高松「どうかしたか？」

蓮夜「いえ、こうも早く信じて貰えると考えていなかっただけ、少し驚いただけです。」

高松「なに、ただ君を……いいやりリイ達を信じているだけじゃ。これでもワシは君にも信用されていると思っておるのだが、それほどでもなかったか？」

蓮夜「いいえ、信頼しているからこそ、この場に呼ばせて頂いた次第です。」

ここまで信頼されていたことが予想外だったのか高松に訪ねる。すると彼は1度全員の顔を見渡すと微笑みながら答えを返した。

蓮夜「……ただ、やはり信じられない人も多いようなので、数例証拠を見せようかと思えます。」

高松の答えに満足したのか彼は1度頷くと彼に習うように周りを見渡した。

そこには元々真実を知っているため静かに彼の言葉を待つメンバーと、内容が内容のため半信半疑となり周りと相談するメンバーに別れていた。

それに気づいた彼は立ち上がると入口前まで歩いていきドアを背にするように佇んだ。

蓮夜「……いきなり刺激的なものを見せても行けないでしょうし、これにしましょうか。」

彼は1度目を瞑ると右腕を前方へと突き出した。それを見て首を傾げる面々だが、すぐにその表情は驚愕へと変わる。

叶星「・・・えっ？」

高嶺「どういうことなの・・・？」

驚愕する彼女達の視線の先、そこには叶星の使用CHARMであるクラウ・ソラスの姿があった。

それを確認した叶星はすぐさま自身の座る椅子横に置いてあるケースの中を確認した。

そこには入れた時と変わらぬ姿のまま収められたクラウ・ソラスの姿があり、それに安堵すると同時に困惑の表情を見せる。

叶星「蓮夜君、ちよつとそれを見せてもらえるかしら？」

蓮夜「構いませんよ。どうぞ、」

彼は彼女に対して言葉を返すと、静かにCHARMを握る手を話した。

彼が手を離すと同時に、CHARMはその輪郭を朧気にしながら姿を眩ませる。

いきなり現れたそして消えたCHARM、そのあまりに非現実的な光景に唾然としていたがすぐに正気を取り戻した消えたCHARMを探す。

少女達が周囲を見渡すと消えたCHARMはすぐに見つかる。

CHARMは叶星の座る席に置かれており、叶星は予想外のことに驚きながらもCHARMの全身を見渡していた。

叶星「これ、私のCHARMよ。」

紅巴「で、でも叶星様のクラウ・ソラスはそこにありますよね!？」

叶星「ええ、でもカスタムや調整部・・・それに戦闘でついた傷が同じなの。」

定盛「そうすると同じCHARMが2機あるということになるのでは？」

高嶺「そうね、でも叶星が持っているCHARMはこれだけよ。・・・それにクラウ・ソラス自体がオリジナルと叶星の限定先行機他数機・・・百合ヶ丘にこの機体があるはずがないわ。」

定盛「百合ヶ丘の人が研究用に作ったとかはないんですかね？」

紅巴「・・・それも考えられるけど、傷も全く同じだとすると無理よ。」

灯莉「デッサンみたい☆」

蓮夜「デッサンよりは模写に近いが、その考え方であっているよ。」

灯莉「わーい！正解だ☆でもでもどうやって作ったの？」

蓮夜「今言った通り模写したんだよ。私の能力は先程も説明したが見たものに干渉する力、それを利用して彼女のCHARMを空間に転写実態のある幻影を作ったんだ。・・・本当は物質としても複製可能なんだけれど、それをしては色々と問題になってしまうからね。」

定盛「つまりこれは精密にできたハリボテみたいなものなんですか？」

蓮夜「大まかに言えばそうだけど、転写時に性能も同時に転写されているため普段使用しているものと同じ間隔で使用可能になっているんだ。」

天葉「それってアーセナル泣かせじゃない!？」

蓮夜「今回は性質から説明のために使ったけれど、これは元々非常時のためのものであり普段は使用しないよ。・・・けれど、まだ信じられない人がいるようですので、」

彼の視線の先、そこには悩ましい表情をしている依奈の姿がありその目には疑いの色が見え隠れしていた。

それを見た彼は入口の前から横に移動するとその先の廊下へと視線を向ける。

蓮夜「姐さん・・・お願いします。」

彼は静かに呟くと、つられて皆の視線が廊下へと向くが、いくら待とうと視線の先に変化は起きない。

??? 「・・・やつと出番かい？」

静寂に包まれた部屋、その中にいる誰とも違う声が響き渡る。

樟美「・・・えっ!？」

壺「・・・そんな、」

天葉「うそ、でしょう?」

高松「・・・なるほど、」

依奈「・・・どうして、貴方はもう、」

アールヴヘイムの面々の表情が驚愕の色に染まる。

彼女達の今までにない動揺ぶりにヘルヴォル、グラン・エプレの面々は激しく動揺した。

一葉「どうかなさったのですか!？」

叶星「大丈夫かしら、あの人に何かあるの!？」

高松「・・・。」

一葉や叶星が必死に声をかけるが彼女達は反応せずただただその人物を見つめ続ける。

その中でも、高松は冷静に表情のまま思考を巡らせていた。

依奈「・・・美鈴様!!」

美鈴「2年ぶりだねみんな、」

彼女達の視線の先、

そこには2年前・・・甲州撤退戦で散り、白井 夢結に深い傷を与えた存在、

川添 美鈴の姿があった。

## ラスバレ1章53

天葉「・・・どういふこと、もしかして・・・でも、」

叶星「天葉さん、どうしたのかしら？・・・彼女、制服を見た感じ百合ヶ丘の人よね。」

美鈴「そうだよ、君達は初めましてだね？・・・僕は川添 美鈴、一応百合ヶ丘の1年生・・・なのかな？」

一葉「・・・一応？」

夢結「はあ、お姉様それは最終的な学年ですよ？一応ですけど貴方は3年ですよ？・・・それと少々お巫山戯がすぎるかと、」

美鈴「でも僕は3年どころか2年にも上がれてないからね。1年が適切じゃないかな？それに第一印象は大事だよ、しっかりと印象付けさせないと、」

動揺する天葉達を置いてけぼりにし挨拶を始める美鈴、それを見た夢結はため息を吐きながら彼女の言葉を訂正すると共に苦言を述べるが、彼女は気にする様子もなく流していく。

蓮夜「姐さん・・・最初から飛ばすのは流石にやめて貰えませんか？・・・現に混乱している人がいますし、」

美鈴「いやあ、天葉達の反応が見たくてついね？・・・夢結達は別として君は驚いてくれなかったし、」

蓮夜「知ってるのにどうやって驚けって言うんですか・・・。」

翻弄される夢結の姿を見た彼は美鈴へと声をかけるが、やはり彼女は気にする様子もなく会話を続けていく。

それに彼は諦めの表情を見せながら彼女へと近寄ると彼女の後ろ襟を掴んで夢結の元へと向かうと椅子を作り出し座らせる。

蓮夜「・・・少し場の空気が乱れましたが気を取り直して続きと行きましょう、彼女自身が述べましたが改めて、彼女の名前は 川添

美鈴「・・・元百合ヶ丘のリリイであり夢結のシュツツエンゲルでもあります。」

高嶺「・・・元？、それにシュツツエンゲルは契の中で上の学年の名称ではなかったかしら？けれど彼女は今年1年つて言いましたよね？」

恋花「それに3年どころか2年にも上がれてないって、言っただけかどうか？」

依奈「・・・亡くなられているからよ。」

瑤「・・・亡くなっている？」

依奈「ええ・・・あの人は初代アールヴヘイムのメンバーとして甲州撤退戦に参加したの、その時に亡くなられているのよ。」

瑤「・・・!?!」

恋花「どういうこと!?!・・・でも今日の前にいるじゃない?」

依奈「だから私達も混乱しているの・・・死んだはずの人が目の前にいることに、だって埋葬の時にちゃんと遺体も確認しているのよ!?!なのになんかこうやって目の前にいるなってありえないわ!!」

高松「・・・簡単じゃろう、」

依奈「・・・理事長代行?」

高松「・・・元々彼女はそちらだったというだけのこと、違うかね?」

理解不能な状況に混沌とした空気が漂う中、高松は小さくしかしはつきりと皆に聞こえる声で呟く。

それにより部屋が静寂に包まれると彼はゆっくりと蓮夜へと向き直り自身の考えを問いかける。

蓮夜「・・・現状そう考えるのが妥当でしょうね。」

高松「なんじゃ、違うのか?」

蓮夜「元々こちら側・・・というのは正しいのですが彼女の生死に關しては私は何も関わっていません・・・確かに死体の偽装程度なら簡単に出来ませんが死者の蘇生は専門外ですから、」



しかし彼の予想は外れていたようで蓮夜は彼の問いに答えていく。

蓮夜「皆さんの認識通り川添 美鈴と呼ばれる人間は甲州撤退戦にて死亡しています。物理的な死因はヒューズによる腹部の裂傷による失血多量と神経節及び脊髄の損傷による身体の機能不全……。」

高松「それで彼女は……。」

蓮夜「もちろん川添 美鈴本人ですよ。彼女は私の作った模造品でもなく、しっかりと個を確立されている個人です。」

高松「確か君は先程死者の蘇生と言っておったな？」

蓮夜「はい、」

高松「……それが彼女の力なのか？」

蓮夜「いいえ、能力……と言うよりは副次効果ですね。姐さん簡単な説明をお願いします。」

美鈴「……という事だから夢結、これ解いてくれないかな？」

彼はそう言うのと美鈴へと視線を向ける。そこには隣に座る美鈴を冷たい表情で見る夢結と白色の鎖で椅子に固定されるように縛られた美鈴の姿があった。その鎖は夢結の手元から伸びておりまるで生き物のように蠢く。

そのような状態に流石の彼女も余裕が無いのか冷や汗を流している。

夢結「……真面目にしてくださいよ。」

美鈴「わかったって……見ないうちにかなり暴力的になったよね、昔はお淑やかで可愛かったのに……。」

夢結「……お姉様？」

美鈴「わかった、わかったから!!」

鎖が解けると彼女は元気よく立ち上がり、自身の状態と能力の簡単な説明を行った。

高松「自身の複製のう、だからか？」

蓮夜「何か引つかかる点でも？」

高松「ああ、一時期彼女がガーデン内の複数箇所で同時刻に見られる現象があつてのう。・・・あの時はレアスキルの練習かと思つたのじゃが、しっかりと個々に行動をしていたらしくて不思議に思つていたのじゃ。」

蓮夜・夢結「……………」

高松「結局は同一人物が複数人いるわけがないと言う結論が出てその話はお開きとなつたのじゃが、やっと謎が解けたわい。」

蓮夜「……………姐さん。」

美鈴「な、何かな？」

高松待つの発言を期に再び部屋全体に冷たい風が吹く。

しかしそれは先程の日ではなくまるで暴風のように荒れ狂い刃のように彼女達の肌へと突き刺さつた。

その発生源は先程と同じく蓮夜、そしていつの間にかその横に並び立つ夢結であり2人の目は鋭く美鈴を捉えていた。

蓮夜「日常から使用していることは知っていましたが……………認識可能個体は1人のみにしているって言つてましたよね？」

美鈴「あ、あの時は色々用事が立て込んでこうでもしないとま、」

高松「……………確か5箇所では別々のレポート内容を同学年の生徒に相談しており、1箇所はシルトと一緒に花見をしていると報告があつたのう。」

美鈴「……………」

彼女もどうにか弁解しようとするが高松の追撃によりそれも叶わず2人は彼女へと歩より始めた。

美鈴「……………ちよつと用事を思い出したから失礼させ!!」

蓮夜「・・・先程、用事はないと仰っていましたよね？」

自身の危機的状況に彼女はすぐにその場を離れようとするが彼女の首元には複数の刃がまるで首輪のように円を描きながら添わされており身動きを封じられていた。

夢結「理事長代行、それはもしかしてお姉様が高等部1年の時の春ではありませんか？」

高松「あ、ああ、そうじゃが、」

夢結「お姉様、あの時提出レポートは全て終わっているからと言って誘われましたよね？・・・私の記憶が正しければ最終提出日当日だったはずですが？」

美鈴「それとは違って、」

夢結「それ以外にレポートはなかったはずですが？」

彼に続き夢結の冷たい眼差しに美鈴が表情を青くしていると彼女の足を這い上がるように先程の鎖が彼女を縛り上げる。

夢結「・・・少しお外でお話をしましょうか？・・・蓮夜、少し席を外すことになるけれどいいかしら？」

蓮夜「どうぞ、こっちは説明を続けているからゆっくりと話をするといい。」

夢結「感謝するわ・・・それではお姉様、行きましょう。」

夢結は彼へと断りを入れると廊下へと歩いていく。

その手にはそれぞれ美鈴を縛る鎖と彼女の首を添えられていた刃・・・直剣が1本握られておりその表情は背中により見ることは出来ないが黒く濁った気配だけが滲み出していた。

夢結「わざわざ能力を使ってまで何をやっているんですか!?!リスクはわかっているはずでしょう!!」



## ラスバレ1章54

蓮夜「それでは続きと行きましょうか。」

天葉「ちよつと、流石にさっきのを見て続けようとは思えないわよね？」

蓮夜「いつもの事なのでお気になさらず、あの人は元々死んでいるので死にませんし度々夢結から制裁を受けていますからね。」

天葉「そういう問題じゃ……。」

先程とは別の意味で混沌とした空気を無理やり元に戻そうとする彼に天葉は異を唱えようとするが、彼はまるで直前に断末魔をあげていた彼女のように受け流し話を進め始めた。

蓮夜「能力の詳細は省かせて頂きますが、私の力は視覚領域内に干渉するものです。……このように予め紋章として能力を制作しそれを視覚を通して発動します。」

依奈「……それなら貴方の目線にさえ気をつければいいってことよね？」

蓮夜「本来ならそうですが私達異能者……その中でも知覚型は特性として知覚範囲が拡張されるため基本的に全方位を知覚することが出来ます。私の場合には視覚ですので自身を中心として全方位を知覚することが可能です。」

依奈「そうなると確かに脅威ね。……奇襲も不意打ちも基本的に効かないものそれに、」

天葉「現物と全く同じものを複製出来るんでしょう？なら消耗戦になるとしたら悪夢だわ。」

再開された彼の説明に聞いた天葉と依奈は、その力の異常性と脅威を理解すると共に思考を深めていく。

その後も彼女達と彼の応答は続いていき、

蓮夜「ですので、本日3レギオン相對した特型ヒュージ・・・彼女には接触しないで頂きたいのです。」

一葉「それは出来ません!!」

蓮夜「どうしてでしょうか?」

最後に彼が放った言葉に一葉は食いかかる。

一葉「特型ヒュージは3レギオンで撃破することになっています。それなのに私達以外が撃破したとなってしまうえば余計な混乱を、」

蓮夜「建前でしょうか?」

一葉「・・・えっ?」

一葉の言葉を遮るように放たれた言葉、それを境に彼の雰囲気が一変する。

蓮夜「戦績を上げるための建前だと言っているんですよ。・・・元々ヘルヴォルは先代の問題により世間的にもかなり危険視されていますからね。それを払拭するには分かりやすい功績、撃破困難な特型ヒュージの撃破という戦績が現状最も簡単に手に入りますからね。」

一葉「そういう訳では、」

蓮夜「それにエレンスゲとしても兵器転用のためにデータが欲しいのでしようし、例えば特型の特性を利用した強化リイの実験の素体の確保・・・あとはヒュージ細胞の人間への移植時の拒絶反応実験のためのサンプルでしょうか?」

一葉「何を言って・・・?」

蓮夜「今年は既に被検体モルモットを72人も犠牲使い捨てにしたらしいじゃないですか：。もしもサンプルを手に入れたらあと何人犠牲になるのでしょうか?」

茜「・・・先輩!？」

先程までは変わっても冷たいだけだった彼の雰囲気、しかし今の彼

からはその冷たさも感じなかった。

蓮夜「いくら潰しても、潰しても無尽蔵に湧いて出てくるあの研究者共は、自分達が楽しむために他の人達を人とも思わず使う研究者共は、狂人．．．本当にどれだけ消壊しても消えやしない。」

そこにあるのはただの無、

何も変化は感じられず、ただ理解の出来ない言葉を並べていた。

しかし、それと同時に彼女は不思議な感覚に襲われる。

まるで溶岩の中でのような異常な熱さが肌を焼き、だが身体の芯は極寒の中に晒されるかのように凍てつくような。

相反する2つを同時に受けるような違和感のある感覚、それを何も感じとることの出来ない彼からは伝わってくるのだ。

茜「音羽!!」

音羽「．．．元々不安定だったけどより酷くなってる。」

蓮夜「．．．どれだけの人を傷つければ気が済む？どれだけの人を悲しませれば気が済む．．．ただ平穩に過ごしたいだけなのに？ただいつもの日常を送りたいだけなのに、」

明らかな異常事態に皆が固まり動けない中、茜と音羽だけが立ち上がり武器をとる。

茜「．．．アタシ達で止められると思う？」

音羽「．．．理性はあるみたいだからそもそも大丈夫だと思うけど、

飛んだら無理、」

一葉「これはどういうことで、」

茜「一葉は黙っててください!!」

音羽「これ以上刺激したらどうなるか分からない。」

2人の会話を聞き我に返った一葉は現状を聞こうとするが、圧力の

籠った言葉で止める。

その間も彼は何かを呟きながら手を握りしめる。

その手からは鮮血が流れ落ちており、彼の瞳はその血のように鮮やかな赤に点滅していた。

音羽「どうする?」

茜「一旦皆を外に避難させるとかどう?」

音羽「それをしてる間に落ち着きそうだけど、少し出てきただけみたいだし、」

夢結「その通り、大丈夫よ。」

彼の現状に判断を迷っている2人の耳に夢結の声が響く。

それと同時に廊下から先程の鎖が現れると彼の右手に絡みつき、彼は鎖に気づくとそれを掴み深呼吸を始める。

彼が呼吸をする度に彼の纏っていた気配は薄れていき徐々に本来の空気へと戻っていく。

夢結「落ち着きなさい、私ならここにいるから。・・・そこにいる彼女達はアレらとは無関係よ。」

蓮夜「・・・そうだね。ありがとう、」

廊下から気を失った美鈴を引きずりながら現れた夢結は鎖を手繰り寄せながら彼へと近づき優しく声をかける。

その時には部屋の空気は戻っており、少し疲労があるのか息の絶えた口調で彼は返事を返すと1度瞳を閉じた。

その後1度深呼吸をすると再び開けるとそこには本来の黒色に戻った瞳に戻っておりそれと同時に彼が纏う雰囲気も普段のものへと戻っていた。

蓮夜「ご迷惑をお掛けしてしまい申し訳ありません。」

一葉「い、いえ、」



蓮夜「……こちらの勝手に申し訳ありませんが1度休憩もしまし  
う。各々認識の擦り合わせも必要でしょうし、」

叶星「そ、そうね。」

蓮夜「梨璃さん、茜、音羽頼めるかな？」

梨璃「分かりました！」

茜「了解です、」

音羽「……了解、」

彼が3人に了承を取ると彼女達は各々のレギオンメンバーを促し  
部屋を出ていく。

蓮夜「起きているのでしょうか？ 姐さんは天葉達をお願いします。」

美鈴「やっぱりバレてたか、わかった任せてくれ、」

彼女達が出ていくのを確認した彼は気を失っている美鈴へと声を  
かける。

すると彼女は何事も無かったかのように立ち上がり依奈達を連れ  
て廊下へと歩き出した。

天葉「夢結、」

夢結「どうかしたのかしら？」

天葉「……少しいいかしら？」

他の面々が外へと出ていく中、天葉だけは夢結の前で足を止め声を  
かける。

それを聞いた夢結は1度彼へと視線を向けると彼は1度頷き、それ  
を見た彼女は天葉とともに部屋を出ていった。

蓮夜「それでは理事長代行も、」

高松「ここでもいい、」

蓮夜「そうですね、ならこれを、」

高松の返事を聞いた彼は彼へと腕輪状の輪を渡す。

蓮夜「それがあれば本質内の資料を閲覧することが出来ます。身につけてテーブルに近づければキーボードが出ますのであとはPCと基本的に変わりません。」

高松「・・・感謝する。」

蓮夜「いいえ、それでは少しお時間をもらいます。」

腕輪の説明を簡単に済ませると彼も退出するために扉へと足を進める。

高松「・・・黒鉄君、」

蓮夜「・・・。」

高松「・・・無理だけはしないように。」

蓮夜「お気遣い感謝します。」

お互いに背を向け合う中、高松の言葉に彼は一言返事をする、その声には微かに暖かい何かが宿っていた。

## ラスバレ1章55

天葉「・・・本当になんでもありね。・・・ここは、」

天葉達は美鈴に案内されて部屋を後にすると、そこには緑豊かな庭園が広がっていた。

色とりどり花たちが咲き乱れる中、その中央には風景に合わせるように設置されたアンティーク調のベンチ型の椅子とテーブルがそしてそれを囲うように水路が巡らされており外と内は4箇所にかかる小橋によって繋がっている。

依奈「室内に庭園って・・・空もある見たいけどどういう構造をしているのかしら？」

樟美「外は普通の廊下でしたのに扉を開けたら外ですからね？」

天葉「もともとちが外なのか分からないわ。それに部屋の大きさが廊下にあった扉の間隔と合っていないわよ？」

壺「そもそもどうやってこのような広大な施設を管理しているのでしょうか？」

依奈「まあ、説明されても分からないでしょうから気にしないようにしましょう。」

各々に疑問を口にしていく面々だが、誰からも答えが返ってくることはなく促される持ったままに椅子へと座った。

夢結「・・・聞きたいこととは何かしら？」

天葉「単刀直入に聞くわよ。・・・夢結、貴方はいつから知っていたの？」

一同が座り一息つくると夢結は天葉へと言葉を投げかけた。

それに彼女は決まっていたようですぐさま夢結へと質問をする。

夢結「そうね・・・私がこの力のことを知ったのは先日あったネス  
ト攻略の前日、ヒュージの百合ヶ丘襲撃事件が起きた日ね。」

夢結は1度考えるような仕草を取ると顔の前まで左手を上げ鎖を  
出しながらながら彼女の質問に答える。

天葉「それまでは彼がこのようなことをしていたことも知らなかつ  
たかしら？」

夢結「そうよ、彼とは幼少期からいるけれど2年前から最低限の会  
話しかしてこなくなつたから・・・それも私が拒絶していただけのこ  
とですけれど、」

天葉「・・・なんかトゲがある言い方ね。・・・つぎの質問よ。・・・  
さっきのは何なの、まるで別人だつたわよ？」

夢結「・・・怒りよ、G・E・H・E・N・Aへの、ね。」

天葉「・・・怒り？」

夢結「そうよ、貴方達も彼がG・E・H・E・N・Aを良く思つ  
ていないことは知っているわね？」

意味ありげな夢結の言葉にその場にいる全員が頷くと彼女は立ち  
上がった。

夢結「彼は甲州撤退戦後から2年間G・E・H・E・N・Aの違  
法施設に侵入しては破壊を繰り返しているの。」

天葉「・・・はあ!？」

夢結「その時に、色々と見ているのよ。・・・無理矢理に身体を弄  
られた子や、致死率の高い実験を強要された子・・・リリイどうして  
殺し合いをさせていた場所もあるそうよ。」

依奈「・・・何よ、それ、」

夢結「強化リリイも必ず成功する訳では無い、むしろ成功率の方が  
低いのではないかしら。失敗時の症状として精神の崩壊や身体の機  
能不全などが主なのだけれど・・・そうした失敗した子達はどうなる

と思うかしら？」

夢結はただ冷静に言葉を紡いでいく。

しかし、彼女の足元は赤く染まっておりそれは彼女の右手が流れていた。

夢結「まず精神崩壊を起こした子は兵器に転用されるわ。意思もな  
くただG・E・H・E・N・Aの命令に従う兵隊<sup>人形</sup>ね。」

天葉「……。」

夢結「けれどこれはまだマシな方よ。」

天葉「……えっ？」

夢結「……身体機能不全に鳴ってしまった後達は処分されるの  
よ。……まるでゴミのように焼却炉にね。」

天葉「何よ……それ、」

彼女の言い放った一言、それは少女達にはあまりにも重いものだった。

先の兵器転用は予想もできた。

だが処分とはなんだ。

いいように利用して使えなくなれば捨てる。

そんなこと人に対する行いでは無い。

それではまるで、

天葉「玩具だって言うの……。」

夢結「大まかに言えばそういうことになるわ。」

天葉「そんなの、そんなの……。」

夢結「流石に全ての場所で行われている訳ではなく、しっかりと埋  
葬する場所もあるけれど1部では起こっているのよ。」

夢結は1度言葉を区切ると彼女達へと視線を向ける。

青ざめるもの、想像してしまい吐き気を覚えるもの、信じられない

もの、そして怒りを覚えるもの、  
様々な感情が入り交じる中夢結は目を閉じ深呼吸する。  
まるで自分自身を落ち着かせるように、

夢結「それを見続けているからこそ人一倍被害者に対してそしてこの事態を引き起きた人達に強い思いがあるのよ。」

天葉「……。」

夢結「まあ、それだけでは表には出さないでしょうけれど、  
依奈「……え？でもさつきは、」

夢結「それは無理をし続けてきた代償よ。」

樟美「代償……ですか？」

夢結「ええ、彼はこの力に目覚めてから7年なのは聞いたわね？」

天葉「ええ、」

夢結「そして他の人達は長くても4年……お姉様ね。」

夢結は1度この部屋に入ってから1度も口を開かない美鈴へと視線を向ける。

しかし彼女は話す気がないのか目を閉じたまま静かに佇むだけだった。

夢結「お姉様は特殊だったから負担が大きかったのだけれど、意思の強いお姉様が4年で潰れる程の精神負担がかかるのよ。……それを何も知らない少年が耐えられると思う？」

そこで天葉達は彼女言いたいことが理解出来た。

確かに美鈴も精神の未熟な少女ではあるがリリースとしての訓練などで強い精神を持っている。

そんな彼女が数年で限界が来る精神負担になんの訓練も受けていない年行かない少年が耐えることが出来るのか、

夢結「耐えられるわけがないわ。特に彼のは精神負担はお姉様より

も軽いけれど精神以外にも肉体、脳への負担も大きいので、それを幼少期の彼に耐える・・・ましては制御なんて無理なのよ。」

天葉「・・・なら、どうして無事なのかしら？」

夢結「それは彼の能力に耐えられるまで急成長させられたからよ。」  
依奈「・・・成長、」

夢結「彼は覚醒するのが早すぎたの・・・だから無理矢理耐えられるレベルに作り替えられたのよ。」

天葉「・・・。」

夢結「彼の言動がおかしくなることがあるでしょう？それもこれが原因で無理矢理成長させられた分、彼の精神の成長が止まっているから・・・彼は知識上の会話を元に喋っているだけでまだ覚醒した時の精神のままなのよ。」

普段の彼を見る限り想像も出来ない現実、

彼女の言う通りなら彼はここにいる誰よりも幼いのだ。

しかし今の彼<sup>作られた彼</sup>だけを知る彼女達には想像が出来ない。

夢結「信じられないでしょうけれど事実よ。そして覚醒した時の精神状態が不安定だったこともあって彼はずっと精神が不安定な状態で生きているの・・・そして7年前のあの日に彼は取り残されている。」

天葉「・・・。」

夢結「だから普段は冷静を装っているけれど一度スイッチが入ると一気に不安定になるのよ。・・・今回の彼は一葉さんの言動がトリガーになった見たいね。」

あまりにも重いものないように目を伏せていた天葉は夢結へと視線を向ける。

そこには先程よりも多くの赤を流し続ける右手と、悲痛な今にも泣きそうな夢結の姿があり、この事実が彼女に取ってどれほどの苦痛なのか伺えた。

そして彼女を見た天葉は1つの疑問に気づく、

天葉「夢結、最後に1つのいいかしら?」

夢結「ええ・・・どうぞ、」

天葉「貴方、今『あの日』って言ったわよね?」

夢結「・・・そうね。」

天葉「・・・それが私には貴方がちよくせつその光景を見たいに聞こえたのだけど、」

夢結「・・・。」

天葉「知ったのは最近なのでしよう?ならなんで『あの日』と言ったのかしら?」

夢結「・・・少しおかしな話をしましょうか、」

天葉「・・・えっ?」

天葉の言葉を聞いた彼女は1度笑うと静かに口を動かし始める。

夢結「人が胸を刺されたらどうなるかわかるわよね?」

天葉「・・・いきなりどうしたのよ?」

夢結「身体を中心に冷たい何かを通り抜ける感覚、」

天葉「何を言ってるのよ・・・、」

言葉を重ねる毎におかしくなっていく彼女に天葉は止めようとするが彼女は止まらない。

夢結「理解出来ないまま噴水みたいに赤い何かを吹き出すの、」

天葉「ちよつと!!」

夢結「ねえ・・・天葉、」

天葉「・・・1度おちつ、」

夢結「もしも、私の心臓が2つ目だとしたらどう思う?」

天葉「・・・えっ、」



突如放たれた言葉に天葉は疑問する持てなかった。

なぜ当たり前前の常識を聞いてくるのか、

なぜ体験しなければ出てこないような言葉が彼女から出てくるのか、

そもそも、2個目の心臓とは何のことなのか？

考える中天葉は1つの結論に至り、美鈴へと視線を向けた。

すると彼女は閉じていた目を開いておりただ静かに夢結を見つめている。

それを見た彼女は有り得ないと思いつつも確信する。

そして自身の考えるが間違っていることを願うが、

夢結「・・・もしも、私が死んでいると言ったらどう思うかしら？」

彼女から返ってきた言葉は天葉の予想して言葉であり、

それを言い放った彼女の瞳からは大粒の雫が流れていた。

## ラスバレ1章56

天葉「・・・冗談だとしても、流石に笑えないわよ？」

夢結「いいえ、事実よ。」

笑えない冗談だと言う天葉に、夢結のその言葉を曲げずに言葉を紡ぎ続ける。

夢結「・・・7年前にね。正確に言うと、『死』という自称自体を破壊されていると言えばいいかしら？」

天葉「・・・依奈私は中等部からだから初等部は知らないけどその頃夢結に変化はあったの？」

依奈「いいえ、今と比べると活発なくらいで大きな変化はないわ。」

夢結「・・・それもそうよ、覚えてなかったのだから。」

天葉「覚えてないって・・・ならなんで知ってるのよ。」

夢結「・・・彼の記憶を辿ったのよ。」

樟美「・・・記憶を辿るですか？」

夢結「ええ、詳しいことは言えないのだけれど彼の力が不安定になっってしまったって、それを治すために彼の記憶に入り込み辿る必要があったのよ。」

壱「記憶に入り込む・・・ですか、」

夢結「・・・入るのに使ったのは、お姉様の力よ。そして見てしまったのよ・・・私がどれだけ愚かで救いようがないかをね。」

まるで自身を罵るような言葉を聞いた少女達は夢結から今までとは別の感情が出ていることに気づく、

それは暗く重い・・・自己嫌悪とでも言うべきものでありその中には明確な怒りが混ざっていた。

夢結「ここからは少し独り言になるわ。・・・その日私は彼を連れて家の近くの森に来ていたの、そこは一般的には立ち入り禁止区域

だったけれど、ここ数年ヒュージなどの発見報告がなくて初等部のリイの地形把握訓練に用いられていたわ。」

依奈「・・・あっ、」

それを聞いた依奈は思い当たる点があるのか声を上げる。

天葉「どうしたの？」

依奈「夢結の言っている森のことを思い出したのよ。・・・確かあそこは私達の訓練に使われて以来使用されてないのよ。」

樟美「そうなのですか？」

依奈「ええ、私達の訓練が終わってからしばらくしてヒュージの発見報告があつてね。・・・だけどその報告を最後に発見報告も消えてしまったのよ、」

夢結「そして訓練中に景色のいい場所を見つけて、彼にそれを見せたくて連れて行ったのよ。・・・ちょうどその報告が届いた前日に、」

天葉「・・・まさか!!」

夢結「本当に馬鹿だったわ。どうして行ってしまったのかしら？・・・彼はあれ程に止めてくれていたのに、」

天葉「・・・。」

夢結「そんな私への罰なのでしょうね。・・・私達はヒュージに遭遇してしまったのよ。・・・その時の私には自衛手段がなく彼も気づいていなくて、どうすればいいのか考えていた時ヒュージは彼を標的にしたのよ。・・・私はただ彼を助けたくって彼を突き飛びしたわ。・・・まあ、そのせいで彼は崖から転落して大怪我を負ってしまったのだけれど、」

言葉を紡ぐごとに大きくなっていく怒り、

それはまるで重力が何倍にもかかっているかのような重圧を感じさせながらも少女達には恐怖を与えていなかった。

夢結「そして最後に見たのは胸から刃が生える自分の姿、・・・この

時に私の命は終わってしまったのよ。」

天葉「それなら今の貴方は誰なの？」

夢結「…そうね、例えるならば人形マリオンネット又は動く死体リビングデッドかしらね。…

本来生きていてはいけない者が意地汚く留まり続けるだけの存在、それが私なのよ、」

天葉「…。」

夢結「きつと信じられなかったのでしょうね。…あの頃の彼は幼くて現実を理解することが出来ずに行動したのでしょうけれど、本当なら私なんかのために使つてはいけないものなのに、」

彼女の抱くもの…それは自身への怒り、

彼の全てを奪つてしまい、何も知らずに日常を生きてきた自分自身に、何よりも苦しむ彼に気づいてあげられなかった自分自身に、

夢結「それにこの力も本来私の持つべきものではないのよ。…

こんなものがあるから彼は!!」

依奈「ちよつと夢結、落ち着きなさい!!」

怒りの籠つた声は次第に悲痛なものへと変わり、苦しそうな表情を浮かべながら左手を胸の前で握つた。

明らかに様子のおかしい彼女に依奈は声をかけるがそれは彼女には届かない。

夢結「彼も彼よ!なんで力を私なんかに分け与えたの!…そんなことをしたら自身もタダでは済まないことくらいわかっていたはずなのに、」

天葉「…夢結、」

夢結「私が貴方に何をしてあげたつて言うのよ!…ただ私は貴方に貰つてばかりじゃない!!今も、昔も、それに命までも、…なんで貴方はいつも自分勝手なの!」

まるで壊れた人形のように崩れ落ちる彼女、その表情を見ることは出来ないが、その声色から彼女が今出している言葉は彼女の本心そのものであり最も辛いものであることがわかる。

夢結「・・・何も教えずにずっと、自身を削りながら・・・そんなに私に優しくしないで、本当なら憎むべきなのに、なんで貴方は謝るの。」

きつと彼女は彼の前ではこの気持ちを隠しているのだろう。

今の言葉を聞く限り彼は、彼女のためならどんな事でもしてしまう。それが彼女には一番辛いのだ・・・自身のせいで彼が傷つくことが、

いくら声を変えようが気持ちを伝えようが、それでも彼は止まらないのだろう。

夢結「もういいの、お願いよ・・・お願いだからもう休んで、これ以上壊れる貴方を見たくないの。・・・やつと本当の貴方に出会えたのに、」

これまでの言葉から少女達は彼の不安定さは、目の前の彼女が関係していることと、彼女本人が自身を責めている事を理解した。

夢結「・・・どうして世界は貴方を苦しめるの、もう十分苦しんで来たのに、やつと歩き出せたのに・・・そんなに彼を苦しめるなら代わりに私を苦しめなさいよ！」

どれだけ言葉を並べても過去を変えることは出来ない。

しかし叫ぶしかないのだ。この理不尽な世界に、彼を苦しめ続ける全てに、そして何よりも、

夢結「・・・私なんて、私なんて生まれてこ・・・ッ!!」

彼を苦しめ続ける元凶である自分自身に、

彼を苦しめ続けることしか出来ないのなら生まれて来なければよかつた。

彼女がそう叫ぼうとした時、突如彼女の叫びは止まる。

夢結「それではまた同じよ、いつまで引きずっているのよ。こんな気の持ちようではダメよ、心をしっかり持たないと、・・・それに私が居なくなったら彼はもう生きていけないのよ。そんな無責任なことをしてはいけない。」

ここで少女達は確信する・・・白井 夢結は狂っていると、

いやこの言葉は正しくない。

きっと彼女は、彼女達は、

夢結「・・・ごめんなさい、話が逸れたわね。・・・続きをしましよ  
う。」

お互いに狂い合っているのだから、

## ラスバレー1章57

お互いに狂う・・・まるで壊れかけの歯車同士が歪みながら回るかのように、

それは壊れては直し続けたがために、他の歯車とは決して噛み合うことがないほどに変形をしてしまった・・・本来なら回るどころか壊れていないことが奇跡とも言える代物。

しかし2人のそれは奇跡的に噛み合っているのだ・・・少しでもズレてしまえば自壊してしまう程紙一重の状態で、

夢結「私の心臓が作られたものである事は理解出来たわね？」

天葉「・・・頭は拒否したいけれど、そうね。」

先程まで突然の崩れ落ちていたはずの夢結は、まるで何事も無かったかのように会話を始める。

夢結「今ある私の心臓・・・それは彼の片瞳が変質したものなのよ。」

依奈「おかしくないかしら？・・・もしも心臓の1日目があるのなら定期的にある健康診断でわかるはずよ？」

夢結「作り替えたのよ・・・見た目や機能を心臓のものに変えて、でもそれだけではダメだったの・・・。」

天葉「・・・ダメって？」

夢結「・・・彼が確認した時には私は蘇生不可の状態まで来ていて心臓があつたからってどうこうなる問題ではなかったの、」

天葉「・・・。」

夢結「だから彼はある行動に出た。・・・自身の力の片割れ『壊始』の瞳を私に埋め込むという手段に、」

夢結は1度言葉を区切ると両手を自身の胸・・・心臓の位置で重ねる。

夢結「そうすれば私の『死』を破壊して、生き返ると考えたのでしようね。・・・そして彼はその賭けに勝ったのよ

・・・重すぎる代償と共に、」

樟美「・・・代償、」

彼が負ってしまった代償、それは少女達にも容易に想像することができた。

それこそが先程の彼の行動そのものであり、2人が狂ってしまった原因なのだから、

夢結「彼の精神に異常をきたしてしまったの、自己意識の希薄化ね、・・・異能は自身の側面の1つであると共に心そのもの、元々覚醒したばかりで不安定だったものを2つに分けてしまったのですもの、まともに機能するわけがないわ。・・・そのせいで彼は自身に対する関心が希薄となってしまった。」

自己意識の希薄化・・・それは自己が存在することを認識することが出来ないことを指す。

地球上の生物・・・その中でも人間にとって、自己の認識は自我を獲得する上で最も重要な役割を担うものであり、それがなければ人は己を認識することが出来ない。

例え鏡に映る自身を見ても、それを自身であると認識することができないのだ。

もしも希薄化してしまえば、自身が誰なのか分からなくなってしまいい何もすることの出来ない植物と変わらない存在となるだろう。

夢結「その中で最後に取った行動・・・私を助けることだけは認識出来たのでしょうかね、」

そして彼はこの自体に陥ってしまった。

己が誰なのかすら分からずに、何をすればいいのかすら分からな



い。

その中で最後に取った行動白井 夢結を守るだけは認識することが出来たのだ。

それさえわかかってしまえばあとは簡単だ。

もしも人が1つのことしか認識出来たのならどうなるか？

・・・その1つの事のみ注力を注ぐようになる。

まるで継り付くかのよう、

夢結「・・・そのせいで彼は全てを投げ出して1つ目的への行動を取るようになった、他のことをしたとしてもそれは結局目的のため前段階に過ぎない、・・・そのせいで彼の精神はおかしくなってしまうた。」

天葉「・・・。」

夢結「完全な消失ではないから時間が経てばある程度自身を認識出来るようにはなってしまうの、・・・でもその時には自身を認識すること自体に違和感を感じてしまい正常を正常と判断できなくなってしまうのよ。」

天葉「・・・。」

夢結「おかしいとわかっているのに気づくことが出来ない。・・・それはどれだけ辛いのでしょうか？その負荷から彼は心の中に新しい自分を作ってしまった。・・・年相応の少年である彼を、」

壱「・・・それは二重人格のことでしょうか？」

夢結「そうね、日常は少年正としての彼が、非日常は壊自身を認識出来まない彼がそれぞれ行動するようになったわ。・・・精神の不安定化はこの2人の彼の異差が感情の制御を困難としてしまうことで生まれた負荷によるもの。・・・それが彼の精神異常の正体よ。」

天葉「・・・そう、」

あまりにも悲惨過ぎる現実には少女達は夢結に声をかけることが出来ない。

夢結にとって彼に起こっている精神の異常性は全て彼女自身のせいなのだ。

それは耐え難い苦痛であるだろうが、その状態に陥ってしまったている彼はその何倍もの苦痛を味わい続けているのだ。・・・いいや、もしかしたら苦痛という認識すらないのかもしれない。

もしそうだとすれば彼も、彼女も、どちらにも救いがない。

夢結「今は精神も安定し始めて落ち着いているから、そこまで心配することでもないわ。けれど先程見たいに心傷となったことを連想させるものを知覚した場合にああなってしまうの、」

そんな彼女にどうか声をかけられないかと頭を悩ませる少女達、その中でも、現状を見れば改善の方向にあることはわかるため少しの安堵感を覚えた。

しかし彼女の次の言葉で、少女達は知ることになる。

夢結「ここまでは精神異常の発生・・・彼の壊れる要因本当の問題は甲州撤退戦で起こったわ。」

本当の地獄はまだ始まってすらいないことを、

## ラスバレ1章58

夢結「甲州撤退戦時にリリイ以外に前線で戦っていた人がいることは知っているわね？」

天葉「・・・ええ、『死神』でしよう？」

夢結「そう、そして『死神』の正体は彼よ。」

依奈「それ本当なの・・・。」

夢結「ええ、その頃には面識があつたお姉様から私参加する情報を聞いたみたいだね。・・・これは他言無用にしてほしいのだけれど、甲州撤退戦の原因となったヒュージの進行はネストの異常変異により生まれた2体目のアルトラ級・・・それにより容量を超えたネストからヒュージが溢れ出したことが原因らしいわ。」

天葉「2体目!?!それ本当にマズイじゃない!!」

何事もないかなように飛び出した彼女の言葉に、少女達は焦りの表情を見せる。

本来アルトラ級とはネストに一体のみ存在する規格外な個体でありアルトラ級を撃破することでネスト自体が崩壊すると言われていた。しかしその逆でネストが崩壊してしまえば巢なしのアルトラと呼ばれるとても凶暴な個体へと変質してしまうのだ。それを阻止するためにネスト攻略はアルトラ級の撃破が最大目標となっておりその間決してネストを崩壊させてはならない。

この特性からアルトラ級はネストがあれば外部に危険を与えないが、同じネストに2体目のアルトラ級が産まれればどうなるか、実例がないため想像でしかないが夢結の言葉からネストが存在する状態でアルトラ級が外へと出てしまう可能性が出てしまうのだ。そうなるってしまった場合の被害は計り知れない。

このことから天葉達は慌てて出すが、それを夢結は宥める。

夢結「それは彼が間引いたから問題ないわ。そもそも彼が参加した理由がアルトラ級の間引きとネストの安定化よ?」

天葉「・・・間引きって、」

夢結「そもそも、甲州撤退戦から2年間経っているのよ。放置されていたら既に現れているわ。」

依奈「・・・そう、」

どうか天葉達を宥めることに成功したが納得いかない表情をする少女達、しかし夢結は気にする素振りもなく話しを続けている。

夢結「間引きを終えたあと彼は増えすぎたヒュージを撃破しながら情報操作をしていたらしいわ。アルトラ級の撃破で調査結果が変化する可能性を考えたのでしよう。」

天葉「その頃から暗躍していたの?」

夢結「暗躍って・・・。まあいいわ、問題はその後よ。」

壱「その後ですか・・・まさか!」

依奈「何かわかったの?」

壱「甲州撤退戦時に鎌倉府近辺でケイブが発生したのは覚えていますか?」

天葉「ええ、すぐに殲滅出来たのよね・・・でも確か数名の行方不明者がって、そういうこと・・・。」

夢結「そう行方不明者の中に彼のご両親もいたのよ・・・彼もケイブの発生を聞いて急いで戻ったらしいわ、でも間に合わなかった。」

樟美「・・・間に合わなかった?」

夢結「・・・彼の目の前で・・・ね。」

ここに来て初めて彼女は口を噤むいだ。

まるでそこから先の出来事を認めたくないかのようになり、それでも少女達には彼女の言いたいことは理解出来た。

夢結「・・・その瞬間、彼は墮ち壊れててしまったのよ。」

樟美「・・・墮ちる、ですか?」

夢結「・・・そうよ、『獣』にね。貴方達も聞いたでしょう・・・異

能者の末路を、」

『獣』・・・それは異能者の末路であり、人の根源の1つであり、どれだけ拒絶しようが、それは決して否定出来ない本質である。

人は皆全て『獣』であり、抗うことの出来ない真実

この思想はかなり根深く、とある経典には、

『ここに知恵が必要である。賢い人は、獣の数字にどのような意味があるかを考えるがよい。数字は人間を指している。そして、数字は666である。』

と書かれている。

このように古来より『人』と『獣』は密接な関係にある。

人は知性を持つがそれと同じく獣性を内包する。

そして獣性は強い意志カを持つものほど強まり、強ければ強いほど1度落ちてしまつては自身の力では戻ることが出来ないことを示す。

一般的な人達でも獣を宿すのだ、それよりも強い力意志を持つ異能者ではどうなるか、

本能全のままに生きる獣壊し尽くすになつてしまうのだ。暴れてしまえば目につくものを全て壊してしまう。

そして1度落ちてしまえば、2度と戻ることが出来ない。

天葉「・・・それじゃもしかして彼は、」

夢結「堕ちているわ。」

依奈「・・・ならなんで彼は人として暮らせているの?」

夢結「完全には堕ちていなかったからよ。」

依奈「でも堕ちたつて・・・、」

夢結「獣になる時徐々に堕ちて行くのよ、まるで侵食されていくかのようにね。だから完全に堕ちる前に必要最低限のものだけを切り離して保護したのよ。」

天葉「・・・。」

夢結「感情を、記憶を、心を、生きるために、目的を達成するために、必要最低限のものだけを残すことで無理矢理超越者になったの

よ。」

天葉「無理矢理・・・、」

夢結「無理矢理よ。だから彼は超越者であると同時に獣でもあったのよ。・・・これは私も体感した事があるからわかるわ、どこまでも暗くて冷たい誰もいない場所に引きずり込まれてしまうの、・・・寂しくて、怖くて、」

その時のことを思い出しのか彼女は身体を震わせた。

夢結「そこからは先程彼が話した通り・・・人の負の部分を見続けて来たから過剰に反応してしまうのよ。」

そこまで言い終わると彼女席へと戻り腰かける。

夢結「・・・私と言えるのはここまでね、これでよかったかしら？」  
天葉「ええ、むしろこれ以上聞かされたら頭パンクしてたわ、ありがとう。」

夢結「どういたしまして、」

天葉達からの質問が終わったことを確認した夢結は1度深呼吸をすると普段の雰囲気へと戻り、たわいのない会話を花咲かせ始めた。

## ラスバレ1章59

茜「……そんな感じで先輩はG・E・H・E・N・Aの事になるとあなることがあるんですよ。」

一葉「……そうですか、」

夢結が説明を終えた頃、一葉達は茜に連れられてとある部屋へと来ていた。

そこは床一面大理石で出来ており古びた石柱が並びことから遺跡が連想される風景となっておりその中央には同じく大理石で出来た円柱状の椅子が並んでおりそのそれぞれに小さなテーブルが置いてある。

そんな、まず現代では見れないであろう風景の中、一葉、千香溜、恋花の3人は茜の話しを聞きながら各々考える表情を見せた。

恋花「これは流石に笑えないね。」

一葉「……そもそも初めから笑えるものなんてありませんよ。」

千香溜「……この話が真実なら彼が豹変したことが納得行きますね。」

一葉「……はい、」

各々が様々な思考の元、表情を二転三転させる中、一葉だけは普段と変わらない表情を見せていた。

一葉「……茜、この話は真実なのです。」

茜「もちろん……こんな場面で嘘を言えると思いますか？」

一葉「……いいえ、貴方が嘘をつかない事はよく知っています。……ですが、やはり信じられなくて、」

茜「まあ、そうですね。うちは基本的にまともな方ですから、」

千香溜「茜ちゃん、まともとは何を指しているのですか？」

茜「そのまんまの意味ですよ。エレンズゲはG・E・H・E・N・

A. 派の中でも比較的にまともなんです。基本的なリリイへの待遇や研究関連・・・あとは捨て駒を使わないとかですかね？」

恋花「捨て駒って・・・流石に言い過ぎじゃない？」

茜「そうでもないですよ？・・・だって強化リリイは基本捨て駒や道具として使うために研究されたものですから、」

質問を飛ばす事に飛び出すG. E. H. E. N. A. の負の側面、それを聞いた一葉達は思い当たる節があるのか顔を青くしながらも茜へと質問を繰り返す。

一葉「確かに強化リリイは危険な任務が多いと聞きますがそれは一般リリイも変わりませんし、それに強化手術も志願した人が、」

茜「・・・それも表向きですがね。」

一葉「・・・えっ？」

淀み始めた雰囲気を変えようと一葉が自身の見解を述べるが途中で茜によって遮られてしまう。

その声は普段の明るいものとは打って変わり、静かで冷たいものがあり、そんな彼女が初めて見せる側面に一葉は言葉も忘れ固まってしまった。

茜「借金返済のため、治療のため、大切な人を救うため、恐怖から助かるため、色々とありますよ？・・・まあ、借金とかは自業自得ですし治療は致し方ない気もしますが残り2つはどうなんですかね？」

一葉「ど、どうって言われましても、」

茜「・・・多分ですけど、一柳隊の鶴紗さんとかは後者ですよ。」

千香瑠「なぜそう思うのですか？」

茜「だって強化手術を受けたのに反G. E. H. E. N. A. 派の百合ヶ丘にいるんですよ。普通に考えておかしいでしょう？・・・ヒュージと戦いたいだけならそのままG. E. H. E. N. A. 派



のガーデンに入れば言い訳ですし、

一葉「・・・確かにそうですが、」

茜「それにアタシも、そう言うのを見てきましたから、」

千香瑠「・・・先程のことでしょうか？」

茜「はい、アタシも先輩と音羽の手伝いでよく暴れましたからね。・・・何回更地にしたっけな？」

冷たい雰囲気になりを潜め普段と変わらない雰囲気に戻ったが、物騒な発言を始める茜に、一葉達は表情を引き攣らせながら、なんとか流れを変えようとする。

一葉「茜、一つ気になったことが、」

茜「なんですか？」

一葉「今までの会話から貴方がG・E・H・E・N・A・を好んでいないことはわかりました。・・・なら、どうしてエレンズゲに入学したのですか？そもそもリイになる気がないと黒鉄さんも言っていましたし、」

茜「・・・見解を広げるためですかね？」

一葉「・・・見解、ですか、」

茜「はい、色々見てきましたがあタシはそれが全てではないと思うんです。・・・確かに裏はあんな感じですけど、ちゃんとした『人』もいるんじゃないかって、」

一葉「・・・。」

茜「・・・だからアタシは比較的にもともとであったここに入ったんですよ。そして一葉達に出会った、・・・アタシも驚きましたよ。理念通り力が全て感がありますけど、しっかりと『人』としての心を持つ人がいるんだって、」

一葉「・・・茜、」

茜「だからこれからアタシは見ていく気です。・・・何せ時間は要らないくらいありますからね。」

千香瑠「茜ちゃんは強いんですね。」

茜のただ真っ直ぐな瞳に、千香瑠は強い意志を感じた。彼女は無意識にそれを口に出すと茜は笑い始める。

茜「アタシは全然強くありませんよ、」

千香瑠「いいえ、貴方は強い心を持っていますよ。」

茜「アタシなんかまだまだ、先輩と音羽はアタシよりも『力』も、『意志』も、『技術』も上ですから、アタシが2人とやり合っても瞬殺されるのが落ちですよ。何せアタシが3人の中で1番死にやすいですから、」

恋花「茜が1番弱い?!・・・蓮夜はなんとなく強いのは分かってたけど音羽も?」

茜「はい、全力で戦ったら多分かすり傷も与えられないんじゃないですかね?先輩には『範囲、威力共に驚異的だが的が大き過ぎるから当てやすい』って言われますし、音羽にも『攻撃に転用できる部位が人よりも多いけど動きが遅いから当たらない』って言われてますから、」  
恋花「大き過ぎる的って、・・・そもそも茜のレアスキルの近づくことも難しいのに、てか硬すぎて傷負わないしすぐ治るからどうしようもないし・・・。」

一葉「それにあの攻撃レンジと範囲で当たらないのですか?」

茜「・・・言っておきますけど、能力使ったアタシはもつと酷いんですよ。」

藍「・・・一葉、茜!見て見て!!」

彼女の発言に唾然としていると外から元気な声が聞こえる。

それを聞いた彼女達が声のした方を向くとそこには白く小さい何かを抱える藍とその後ろを着いてくる瑠の姿があった。

茜「終わりにしましょうか。」

千香瑠「そうですね、2人も戻って来ましたし、」

一葉「・・・藍に聞かせなくて良かったですね。」

茜「後で瑤様には伝えておいてください、」  
恋花「まっかせなさい！」

2人に聞こえない程の小さな声で話しを閉めると彼女達は藍達の元へと向かった。

## ラスバレ1章60

音羽「あの人にしては変……。」

叶星「……どうしたの？」

時を同じくとある一室で音羽は叶星達と共に居た。

その部屋は古い洋館にあるであろうアンティークを意識した造りとなっており少々の目新しさと、落ち着いたをかもちだしていた。

音羽「……あの人が不安定なのは元々だけど今日のは酷すぎる。」

高嶺「確かに、あの豹変具合は異常ね。」

音羽「豹変はいつものことです。」

高嶺「……そう、」

音羽「私が問題にしているのは、簡単に表に出したこと、いつものあの人なら絶対にあんなミスしない。……きつと何かあったはず、です。」

高嶺「……原因はわかるのかしら？」

音羽「……きつと夢結様、」

高嶺「……彼女が？」

音羽「彼女という時だけあの人の雰囲気少し違う。それに無自覚だろうけど微かに表情に出てるし、」

高嶺「なら危険なのかしら？」

音羽「それはない、です。」

高嶺「……どうしてなの？」

音羽「最後のあの人の瞳……彼女の声で穏やかな瞳になったから、」

予想外の返答に高嶺が動けないでいると、隣にいる叶星が笑い出す。

叶星「随分彼のこと知っているのね。」

音羽「……裏では1番付き合いが長いので、美鈴様以外と、」

高嶺「そうだとしてもよ、それほど心配なのかしら？」

音羽「・・・当たり前、私はあの人のお陰で今を生きてる。・・・命の恩人を助けるのは当然、」

音羽は冷淡に言葉を並べていくが、叶星はその中に微かに熱を感じた。

それは小さくあるが強く決して消えない炎、それを灯した存在はすぐに予想がついた。

音羽「・・・それにあの人には全てをもらった。」

叶星「・・・全てを？」

音羽「はい・・・住む場所も、生きる術も、生きる意味も、・・・そして大切な家族を、あの人は気にしてないだろうけど、貰った分の恩は必ず返す・・・それが私の恩返し、」

高嶺「・・・言葉そのままね。」

音羽「だけど事実です。・・・そしてこれは曲げない。」

固い意思の元紡がれる言葉、どれだけ膨大で困難であろうとも絶対に返しきる。

彼女自身もこれがただの自己満足であると分かっているだろうが、それでいいのだろう。

それがきつと彼女の・・・、

叶星「暗い話はこれで終わり！明るい話題にしましょう!!」

高嶺「・・・そうね。」

灯莉「賛々成々!!」

紅巴「ですね、土岐はこれ以上お話についていきません・・・。」  
定森「そうですね。ストレスはお肌の天敵ですしアイドルであるものストレス管理はしっかりとしないと!」

1人ズレた返答をするものもいるが皆が賛成したため音羽は席を

立ち棚へとからお茶類を取り出しテーブルへと並べ始めた。

蓮夜「僕も未熟だな。」

1人そう呟く彼は草原の上に座っていた。

辺り一面緑が生い茂るそこには均等に並べられた石板が無数に配置されておりそれを包むように赤い花が咲き誇っていた。

美鈴「それは成長だと思っただけだね。」

蓮夜「・・・姐さん、」

美鈴「やっぱりここにいたか、」

蓮夜「はい、少し思う所がありました、」

1人しかないはずの空間に新たな声が響いたため、声の方へと視線を向けるとそこには美鈴の姿があった。

蓮夜「天葉達はいいんですか？」

美鈴「夢結がいるから大丈夫さ、それで君の方は落ち着いたかい？」

蓮夜「はい、ただ・・・。」

美鈴「・・・ただ？」

蓮夜「ただ思うんです。・・・もっと上手く立ち回れていれば助けられる命はまだあったんじゃないかって、」

美鈴「それは慢心が過ぎると思うよ。」

蓮夜「そうですね？」

美鈴「・・・おや？今日は素直じゃないか、昔はよく噛み付いて来たのに。」

蓮夜「・・・もう子供じゃないんですから、そこら辺の区別は着いているつもりです。」

美鈴「本当にそうかな？・・・さっきの言葉が出る時点でまだ引き攣っているみたいだけど、」

彼女の返しに反論できないのか、苦笑いで返す彼の横に彼女は座る。

美鈴「ここ、百合ヶ丘よりも凄いんじゃないかな？」

蓮夜「かもですね。・・・多すぎて狭いかも、」

美鈴「そうかな？逆に喜んでいるかもよ。」

蓮夜「ならいいですけど、」

美鈴「そういえば僕のはあるのかい？」

蓮夜「あるわけないでしょう。今ここにいますから、」

美鈴「それもそうか、」

そこからはばらくお互いに言葉が思い浮かばないのか沈黙が続く。

ただ進み続ける時の中、草原に吹くそよ風と擦れる草花の音だけが響く中2人は静かに眺め続けた。

そしていくらか時が経った時、彼の端末から着信音が響く。気づいた彼が端末を確認するとゆっくりと立ち上がり背伸びをした。

蓮夜「皆落ち着いたみたいですから行きましょう。かなり時間も掛かってしまいました、」

美鈴「そうだね、行こうか、」

彼の言葉を聞いた美鈴も立ち上がるとこの部屋を後にする。

それをみたい彼は1度目の前の石板へと近寄ると近くに合った花を手折り石板の前に置いた。

その花は茎に6つ程の花円状に外へと向かって咲いており、花弁は細長く放射状に広がり鮮やかな深紅に染まっていた。

蓮夜「また来ますからね、お姉さん。」

彼はそう呟くと彼女の後を追うようにこの部屋を後にした。

## ラスバレ1章61

蓮夜「ヘルヴォルの皆さん、先程は申し訳ございません。」

一葉「いい、いいえ、事情は茜から聞きましたから・・・お気にならないでください。」

蓮夜「ありがとうございます。」

各々のレギオンで別れていた面々は、先程の部屋に集まっていた。

蓮夜「先程の内容に戻りますが、私は各レギオンに本標的への接触避けて欲しいのです。」

一葉「・・・ですが、」

蓮夜「それは皆さんの身を案じてのことなのですよ。」

一葉「私達も多くの戦闘を経験していますからその点は心配ないと思いますが、」

蓮夜「確かに表ではそうでしょうね。・・・しかし今回の標的は裏の存在・・・それも災害に分類される存在です。そもそも人では相手になりません。」

一葉「・・・ですが、私達はリリイ、一般兵器が効かないヒュージに對抗出来る存在です。」

蓮夜「次元が違うのですよ。・・・そもそもの話、異能者・獣には現行兵器も問題なく通じはします。」

一葉「それなら！」

蓮夜「ですが、殺すことは出来ません。」

一葉「えっ？」

現行兵器が通用する。

それはリリイの力が通用するということだ。

それなのにどうして彼は少女達を戦わせたくないのか、一葉は疑問に思いながらも彼に声をかける。

するとすぐに答えが帰ってきた・・・理解不能な形で、



蓮夜「私達異能者は因果律に鑑賞して能力を行使します。．．．これは世界の理における絶対的な命令権、それを自身の持ち得る権限を振るうことでその力をこの世に権限させる。それは無意識下でも発揮されます。．．．例えば、生存本能ですね。」

一葉「．．．。」

蓮夜「生存本能とは誰もが持つ無意識的な行動理念です。誰もが死を恐れて行動します。それは本能で動く生物程強く働きます。．．．そして本能のまま動き続ける『獣』はその生存本能が高く自身の死にすら何らかの方法で干渉します。．．．私は拒死性と呼んでおり、それが本当の脅威なのです。」

一葉「つまり撃破できないということですか？」

蓮夜「ええ、例え傷を負わせられても、同じく因果律への干渉が可能な異能者出なければ拒死性を上書きすることが出来ず半永久的に戦闘を行うことになります。．．．そして『獣』の体力は無尽蔵、意味は分かりますね。」

一葉「最初は優勢だとしても長期戦になり、いずれ負ける。」

蓮夜「そういうことです。」

彼の言葉が理解できると、そのあまりにも理不尽な内容に項垂れる。

確かに勝てる訳が無い、

それもそうだ、彼女達には負けがあるが、『獣』には負けがないのだ。例え有利な状況に持ち込んでも倒しきれずいざ押し潰されてしま

う。

それを理不尽以外になんとと言えるだろうか？

蓮夜「それに能力にもよりますが基本的に異能者は殺傷能力が高い、．．．私達の中でも最も殺傷能力の低い姐さん．．．美鈴様でも世界を相手取って戦えますから、茜に至っては条件次第で天体の破壊も可能です。」

茜「アタシだけじゃなくて先輩もでしょう。」

蓮夜「私のは条件がかなり厳しいから論外だ。」

天体の破壊・・・つまりそれは地球を破壊出来るということ、そして殺傷能力の低い人でも世界を相手取れるということとはここにいる数人だけで世界に勝てるということだ。

群を潰す圧倒的な個、それが彼らの本日のだろう。それを知らなかった少女達はあまりにも無力だった。

決して勝てない相手、そんな存在がいるはずがないと思っていた一葉の自信心にヒビが入る。

叶星「流石に盛りすぎじゃないのかしら？」

蓮夜「本当ですよ？・・・そうですね。」

一葉が俯き動くなってしまう、どう声を掛ければいいのか分からないヘルヴォルが視線を右往左往させる中、叶星は彼へと質問を投げかける。

その返答に悩む表情を見せた彼は何かを閃いたのか顔を投げると茜達へと視線を向けた。

蓮夜「夢結達の中で2人、模擬戦をしてくれないか？姐さん以外で、」

美鈴「なんで僕は除外なのさ？」

蓮夜「貴方の戦い見たら普通の人は即S A N値直葬だからですよ。」

美鈴「・・・解せないね。」

蓮夜「・・・そうだな、茜、夢結頼めないかな？」

彼女の苦言を無視しながら彼は室内を見渡すと、模擬戦に茜と夢結を指名した。

茜「アタシ達ですか？」

夢結「・・・構わないけれど、どうして私と茜さんナノかしら？」  
蓮夜「音羽だと私以外は一方的になつてしまうし、私は説明のため  
ここにいないくは行けない。そして姐さんは先程言った通り、つま  
り消去方だ。」

夢結「わかつたわ、茜さんお願い出来るかしら？」

茜「大丈夫ですよ！でもアタシも手を抜きませんから、」

彼の説明を聞き了承した2人はお互いに声をかける。

その声は普段通りに聞こえたが、しかしその声の裏に何か知っては  
行けない何かがあると感じとれた。

蓮夜「訓練室で準備を頼む。・・・それでは彼女達の準備が終わる  
まで少々お待ちください。」

高嶺「今の流れる的にもしかしてですけど、」

蓮夜「模擬戦ですよ、・・・異能ありの、」

定森「・・・すみません、音羽が一方的とはどのような意味ですか  
？」

蓮夜「それはですね。」

部屋を出ていく2人を見送ると彼はディスプレイを操作し始める。  
そして生まれる静寂の中、定森が出した質問に彼は少し考えるとす  
ぐに答えを返す。

蓮夜「音羽が出てしまうと一瞬で終わってしまうからですよ。例え  
彼女達が2人がかりでもね。」

彼は音羽へと視線を向けると共に意味深な言葉を放った。

## ラスバレ1章62

天葉「結構時間が経ってるけれどもどうかしたの?」

蓮夜「着替えてるのでそれに時間がかかっているのだと思いますよ。」

天葉「着替え? 制服じゃダメなの?」

蓮夜「俺と音羽なら関係ないのですが、あの二人は速度域が違うのでリイ用の制服でも持たないんですよ。それに自動修復機能付いてませんし、」

依奈「服が勝手に直るのかしら?」

蓮夜「そうですよ、二元々異能者や獣の戦闘は怪我を負うこと前提なので修復しないとただのボロ切れになりますし、」

彼は天葉達の質問に答えながらも黙々とディスプレイの操作を続ける。

蓮夜「それには偽装の役割もあるため、身元を特定されないために基本的に皆1着は持ってます。こんな感じのをね。」

叶星「音羽ちゃん!」

彼がそう呟くと彼の身体に霞だしその姿を曖昧にしていく。

彼が完全に見えなくなって数秒すると鮮明になるがその姿は先程とはまるで別物となっていた。

先程まで百合ヶ丘の制服を男性用にしたものを着ていた彼だが今は黒いロングコートに、ズボンそしてコートに付いているフードと全身が黒に染まっていた。

天葉達が彼の変化に戸惑っていると、叶星の声が響き渡りそちらを確認すると彼女は音羽を見て驚愕している。

彼女の視線の先には先程までと全く異なる服装をした音羽の姿があり、左腕だけ存在しない灰色のサーコートを着ていた。

頭には服と同色のトリコーンを首には白色のマフラーをしており目以外の顔の部位は見る事が出来ない。

高嶺「随分と雰囲気が違うわね。」

音羽「これを着ると気が引き締まるので、」

蓮夜「私達みたいに夢結達も戦闘服を持っているのです。．．．繋がりました。」

ディスプレイを操作し続けていた彼が手を止めると少女達の前にある画面から映像が流れ出す。

そこには無数のビルが立ち並んだ風景が映し出されておりその隙間からは陽光が差し込んでいた。

彼が席に座り画面に触れると画面の景色は変わっていき、ビル同士の間にある通りを映し出した。

そこには身長のはある大剣と白色軍服とも修道服とも呼べる服装をした夢結と、紅いフード付きショートコートにショートパンツ、手甲、脚甲をつけた茜の姿があった。

こちらには聞こえて来ないが2人は何か会話をするとお互いに数歩離れ向き直る。

夢結「．．．。」

茜「．．．。」

お互いに見合い数瞬たったその時、2人の姿が掻き消える。

それと同時にお互いの背後のビルにヒビが入りそれはビル全体に広がり建物そのものが砕け散る。

瓦礫の山となった二棟のビル、砂埃により視界の悪くなる中、瓦礫が盛り上がると辺り一帯に散らばる用に吹き飛びその中から2人が現れる。

お互い傷らしきものはなく、散歩をするかのような軽快な歩みで近寄る2人、

夢結「．．．ツ!!。」

ゆつくりとしかし着実に近づくと2人、お互いの距離が数m程になった時、夢結が新たな動きを見せる。

彼女は大剣を上段に構えると同時に後ろに飛んだのだ。

その行動を警戒した茜も後ろに下がろうとした時、2人の間に歪みが生まれそこに引き摺られる用にお互いの距離が近づいて行く。

この現象を予想していたであろう夢結は彼女に近づくと瞬間大剣を振り下ろし、茜はすぐさま右手を頭上に上げることで防いだ。

茜は足を地面に埋めながら夢結の一撃を防ぐことに成功し、反撃に左手を彼女へと打ち込もうとするが、次の瞬間2人の間にある歪みが元に戻りそれと同時に2人は吹き飛ばされ距離が離れた。

お互い同時に着地する2人だが茜が夢結へと視線を向けると既に彼女の姿はなく完全に見失ってしまった。

茜「・・・。」

周囲を警戒する茜、様々な状況に対応出来るように構えたまま細かくステップで移動を繰り返しながら周囲を見渡す彼女の背後に白い影が姿を現した。

右手を振り下ろす影、それに気づくのが遅れた茜は身体を捻り回避しようとするが一瞬間に合わず背中から鮮血が舞う。

しかし怯むことなく茜は後ろ回し蹴りを繰り返すがそれは空を切りその先には何もいない。

茜「・・・ッ!？」

捕捉し逃した茜は再び周囲を警戒し始めるがやはり夢結を見つめることが出来ずただ時間だけが過ぎる中、再び彼女の背後に影が現れた。

影は先程の再現の用に右手を振り下ろそうとするが、今回は茜も対

応が間に合い影の右手と茜の左足がぶつかり合う。

茜が攻撃の正体を確認するとそこには右手と両足を獣のように変えた夢結の姿があり彼女の左頬には黒い模様が浮かんでいた。

地面から離れていた分夢結の力が劣ったのか吹き飛ばされる彼女、しかし彼女は着地すると同時に体勢を低くし一気に茜へと詰め寄り左手に握られた大剣を振り下ろす。

だがそれは茜が右手の甲で簡単に弾いてしまった為不発に終わるが、失敗したとわかった途端夢結は彼女から距離をとり地面はもちろんビルの壁などを足場として茜へと同等の攻めを仕掛けた。

まるで獣のような敏捷性で襲い掛かる夢結、それを茜は冷静に捌くが攻撃の密度が高すぎて徐々にその身体に赤い線が浮き上がる。

攻撃する事に速度を上げる夢結、彼女の姿が画面では見えない程になったその時、

茜「・・・ッ!!」

茜は地面を踏みしめた。

地面は彼女足を中心にヒビ割れ、砕けた破片が宙に浮く、それにより生まれた振動で夢結が動きを止めると、すぐに走り出す茜、ビルを足場の上へと登る彼女はビルの屋上に辿り着くとすぐさま右手を振り下ろし足場にしたビルを砕いた。

それによって完全に足場を失った彼女が下を見るとそこには手足を人のものに戻した夢結の姿があり彼女の左手には彼女の数倍はある火球が存在していた。

夢結は茜を目視すると、左手を彼女へと向ける。すると火球もその動きに従い茜へと迫り炎が彼女を飲み込み爆発した。

飲み込まれたことを確認した夢結は直ぐに火球を生み出し先程茜がいた場所に放とうとした瞬間、

夢結「・・・ッ!?!」

夢結の脇腹は抉られ、爆炎の中に黒い影が映し出されていた。



## ラスバレ1章63

天葉「……ちよつと何よこれ!」

蓮夜「模擬戦ですが?」

天葉「規模がおかしいでしょうが規模が!あんなのアルトラ級でもそうならないわよ!!」

蓮夜「そう言われましてもあれが現実です。……いいや、現実を捻じ曲げ自身の法則を映し出すと言った方が正しいでしょうか。」

画面内の状況に困惑したまま彼に問いたただす天葉、しかし彼はそれを平然と返すと再び視線を画面へと向けた。

そこには脇腹を抉られたまま駆け回る夢結と爆炎の中に佇む大きな影が映し出されていた。

音羽「これでもまだ小規模。」

叶星「音羽ちゃん?……流星に冗談よね?」

音羽「冗談じゃないです。……茜もまだ火力出でないし、たぶん夢結様も広範囲に影響が出る行動を取ってない。……でしょう?」

蓮夜「やつぱりお前にはわかるか、」

音羽「……当たり前、だって戦闘スタイルは違うけど癖が似てる。……たぶん手札を切るタイプ。」

蓮夜「……正解。」

高嶺「手札……駆け引きでもするのかしら?」

音羽「はい、……元々戦い方とかを蓮夜さんに教えて貰ってるから私達はそっちによってる。……茜は微妙だけど、」

しばらく膠着状態だった戦場、お互いに相手の出方を伺う中今度は茜が動き出す。爆炎に包まれていた影が炎を纏って夢結へと襲いかかったのだ。

それを彼女は跳ぶことで躲すが、それを読んでいたのかすぐさま方向転換し再び彼女へと襲いかかる。

夢結『・・・ツ!!』

それを大剣を盾にして身体ごと逸らすことで回避に成功する夢結、しかし体制が悪かった影響で近くにあったビルに激突してしまう。

しかしそれで彼女の正確な位置を補足出来なくなった影は速度を緩め着地すると彼女が激突したビルへと視線を向けた。

しばらくビルを睨む中、影に纏わりついていた炎は次第に消えていきその中から現れたのは、

定森「ド、ド、ド、ドラゴン!?」

灯莉「わく!すつごうい!どうなってるの?」

蓮夜「・・・」。

そこに現れたの10mはあろう巨体のドラゴンだった。

その身に纏う鱗は燃え上がるような赤でありまるで茜の髪を連想させる。

一葉「もしかして茜が言っていた大きな的って・・・」

恋花「間違いなくこれでしょう・・・確かに大きいわ!」

藍「茜大きい!」

音羽「・・・」。

茜であろうドラゴンは重々しく顎を開く。その中からは赤い光溢れ出しており、それは意思があるかな用に動き回り集まり、やがて先程夢結の放った火球の倍はある光球となっていた。彼女はそれを夢結のいると思われるビルへ撃ち込む。

目で追えない速度で放たれたソレはビルに着弾すると一気に広がり自身を含んだ辺り一面を飲み込んだ。

光により見えなくなる画面に皆啞然としていると光は納まっていた。そこには灰だけが残されていた。

標的のビル以外のビルも瓦礫も全てが灰となって燃え尽きる。赤熱化し硝子状になった地面、その中でドラゴンは悠然と立っている。その身体には傷はなく何事もなかったかなようにただある一点・・・光球を打ち込んだビルのあった場所を見続ける彼女は再び顎を開き光球を作り出していった。

天葉「何よこれ・・・戦術兵器の方がマシじゃない。」

依奈「アレを向けられたら・・・どうしようもないわね。」

蓮夜「・・・まだまだだな。」

音羽「・・・詰めが甘い。」

天葉「詰めが甘いつてあれで!？」

蓮夜「そうです。・・・あんな中途半端な攻撃じゃ傷一つつきません。だから彼女はもう一度攻撃の準備をしているのですよ。」

彼が天葉の疑問に答えていると茜は光球を打ち出した。

それは先程と同じルートを通り地面にぶつかる寸前、跡形もなく消えてしまう。

元々存在しないかのように消えた光球、その着弾地点に目を向けるとそこには右手を突き出した夢結の姿があった。

彼女の右手を黒く得体の知れない何かが覆っておりそれは爪の形状をしてその規則的に並んだ見た目からまるで牙を連想させる。

そんな得体の知れない何かを纏う夢結は先程とは違う姿をしていた。

透き通るような淡い金色をした翼、それが彼女から生えているのだ。軽く羽ばたく度に羽が舞い散る翼、それはその色も相まって幻想的であり現実ではないように感じさせる。

そんな彼女を見た茜は羽ばたくとその巨体を浮かし空から火の雨を降らせる。

触れた地面が溶ける程の圧倒的な熱量を秘めた炎は夢結へと襲いかかる。

しかし彼女は慌てることなく炎へと右手を翳すと吸い込まれるよ

うに何処かへ消えてしまったのだ。

夢結『……。』

焼けた大地を臆することなく進む夢結、それを見た茜は彼女へと襲いかかる。

空中から落下するように振るわれる爪、それを大剣をで受け流すと腹部目掛けて刃を振るう。

しかしそれは鱗に弾かれてしまい、体勢を崩した所に尻尾を打ち付けられ遠くへと弾き飛ばされてしまう。

そこに追撃の光球を撃ち込もうとする茜だが、その時には既に夢結が迫ってきており撃つ隙を与えない。

近づいては離され、離れては近づかれを繰り返す2人、お互いに決定打のない両者は同時に動き出す。

お互いに距離を離したのだ。  
まるで相手に邪魔をされないために、

夢結『……。』

茜『……!!』

茜は顎を夢結は左手を天へと突き出す。

茜は顎内に光球を生み出し夢結は白い鎖を生み出す。

それまではその光景を見ている少女達も見たことのあるものだが、それは何もかもが違った。

お互いに自身を覆い尽くすほどの光球と鎖、それが時間が経つと共に光を強める。

その光が最高点まで達した時、2人はお互いにそれを解き放った。光球と鎖が衝突する瞬間、再び辺りを光が包んだ。

蓮夜「終わりましたね。……迎えに行ってきますので少々お待ち

を、  
「

彼はそれを見ると廊下へと出ていった。

彼が出ていきしばらくした時、光が収まりそこには、

全身を鎖に縛られるドラゴンの姿をした茜と左手足が灰になった  
夢結の姿があった。

## ラスバレ1章64

天葉「・・・依奈、」

依奈「・・・。」

天葉「貴方ならどうする?」

依奈「・・・。」

画面から目を離すことなく依奈へと問いかける天葉、それに対して反応することなく無言で画面を見続ける彼女の表情は険しいものだった。

叶星「音羽ちゃん。」

音羽「・・・まだましです。」

叶星「やっぱりそうなのね。」

音羽「今のも様子見しすぎて能力を生かしきれてなかったですから。」

定森「結構大暴れしてるように見たけど!」

音羽「・・・あんなの序の口、最後の方でやっと調子が出てきていたけど、それに茜は殲滅力だけなら私達の中でも随一、街一つ消えてないだけでも・・・。」

叶星「もうわかったから大丈夫よ。・・・でもこれを見せられちゃうと彼の言葉の正当性が増すわね。」

普段口数の少ない音羽から漏れ出す言葉に微かな怒りを感じた叶星は彼女から目を逸らしながら悩ましい表情をし始めた。

高嶺「ならアレもこれほどの被害を出すのかしら?」

音羽「・・・分かりません。ただ物理的にはここまで出ないと思います。」

高嶺「物理的・・・なら他の被害は?」

音羽「情報、精神、人的被害は茜以上、だから早く眠らせてあげな

いと・・・これ以上赤く汚れてしまう前に、

高嶺「・・・そう、」

その言葉を最後に黙ってしまおう音羽、その表情はどこか悲しげでありそれを見た高嶺は画面へと視線を戻した。

すると画面内には人の姿に戻り背伸びをする茜と左半身が光の羽に覆われている夢結、そんな2人の様子を見ながら映像を逆再生させるようにビル群を生み出している彼の姿が映し出されていた。

ミリアム「・・・いつ見ても非常識な光景じゃのう。」

鶴紗「確かに翼なんて生えないからな。」

ミリアム「そつちじゃないわい!!ビルが生えてくるほうじゃ!!」

梨璃「・・・そうですか?」

楓「梨璃さん・・・。」

二水「常識が壊されていますよ!」

神琳「可哀想に・・・。」

梨璃「皆さん酷くないですか?!?!」

当たり前と言わんばかりの梨璃の反応にレギオンメンバーは彼女を見ながら悲しげの表情を向ける。

その反応に梨璃は声を荒らげながら抗議の声をあげるが彼女達はそれを気にすることなく梨璃をからかい続ける。

そのおかげか少し暗くなっていた室内の雰囲気緩和されたのか皆の雰囲気が明るい方へと向き始めた。

蓮夜「お待たせしました。」

茜「いや、強かったよ。」

音羽「・・・油断しすぎ、」

茜「うへえ、いきなり辛辣、」

梨璃「お姉様、大丈夫でしたか!」

夢結「ええ、大丈夫よ。」

天葉「いや、あれ見て大丈夫だとは思えないわよ。」

いつの間にか画面から消えていた3人が戻って来ており音羽は茜に冷たい声で苦言を述べるとそれを痛そうな表情で頬をひくつかせ、梨璃は夢結へと抱きつくつと先程まで無くなっていた左半身を触りだす。

そんな彼女に苦笑しながら頭を撫でる夢結、そんな姿を見た天葉は焦りの表情ながらツツコミを入れた。

夢結「・・・そうかしら？」

天葉「そうよ!?というよりなんで間が空いたの!?そんなに自覚なかったわけ!?!」

夢結「そうね・・・手足が無くなるくらいならかすり傷じゃないかしら?」

天葉「普通に重症よ!!」

天葉の反応に首を傾げる夢結、そんな彼女の姿に頭を押えながらため息を吐くと蓮夜へ非難の目を向ける。

蓮夜「・・・確かに中途半端だったな。」

音羽「・・・待ちすぎ、」

茜「でも、相手を把握してから動かないところちg、」

蓮夜「音羽の言った通り待ちすぎだ。お前の能力は相手に合わせるものではなく自身から仕掛けていくものだからな。慢心もいいが足元を掬われるぞ。」

茜「・・・はい、」

その視線の先にある彼は音羽と茜と先程の戦闘のおさらいをしており、茜に対してそれぞれが苦言を述べていく。

それを受ける彼女の表情は引き攣り何か言い返そうとするがそれを正論でねじ伏せられるため口を閉ざしてしまふ。



天葉「ちよつと蓮夜!!」

蓮夜「どうかしましたか?」

天葉「どうかしたもないわよ! 夢結がおかしくなっちゃてるじゃない!? どうするのよ!!」

夢結「・・・何処がおかしいのかしら?」

天葉「貴方は黙ってなさい!!」

蓮夜「そう言われましてもこちらではあれが当たり前なので・・・。」

天葉「四肢が欠損するのが当たり前ってどんだけ頭いかれてるの!?!」

蓮夜「・・・いかれてないと生き残れませんから、」

天葉「っ!?!」

半ば八つ当たりのような天葉の言葉、それを聞いた彼は1度視線を落とすと静かに彼女へと視線を向ける。

その瞬間に彼女の身体を冷たい風が吹き抜けた。

身体の内から冷めていき、まるで自身の内から食い破られるかのような錯覚に陥るほどの痛みすら感じる気配、それを感じて彼女は改めて理解した。

異能者  
彼は・・・いや彼等は後戻り出来ないほどに壊れていることに、

天葉「貴方達はそうやって生きてきたのね・・・。」

蓮夜「そうですね・・・異能者に覚醒してからはこの思考を元に生活していますね。」

天葉「そう・・・、」

彼の答えを聞き話を切る天葉、そんな彼女を見つめる瞳は深く濁っていた。

## ラスバレ1章65

高松「……これが彼女達を戦わせたくない理由かね？」

蓮夜「はい……理事長代行、貴方は先程の戦闘を見てどう感じましたか？」

真剣な表情で画面へと見ていた高松は静かに彼へと視線を向けると疑問を呟く。それに対して彼は疑問で返した。

彼の言葉に1度目を見開く高松は1度視線を下げ思考を始めた。

高松「……そうじゃのう、まずあの戦場に突入するだけで百合ヶ丘の全生徒が出なければ行けないじゃろうか、そして……。」

蓮夜「この状況なら2人の元に辿り着けるのはその中でも数人でしょうね。」

高松「やはりそうか、……そして少数での無力化は不可能……番匠谷君、君ならどうする？」

依奈「そうですね……国連と協力した飽和攻撃を目眩しをして少数精鋭を2人の元へ送り出しあとはノインヴェルト戦術で一撃必殺を狙うくらいでしょうか。」

天葉「それ大丈夫なの？……なんだかさっきの夢結見てるとノインヴェルト戦術が防がれそうに見えるんだけど……。」

楠美「……最近よく防がれてましたからね。」

依奈「そういうなら貴方は何か思いつくの？……私にはこれ以上のものは思いつかないわよ。」

突然投げられた言葉に戸惑いながら自身の考えを述べる依奈、それに対して天葉が疑問を口にするのと気が立っているのか少し強めの口調に彼女へ文句を口にする。

夢結「……視認範囲であれば吞めるから問題なく無力化できるわね。」

茜「アタシの場合そもそも効かないかも・・・。」

依奈「・・・どうするのよ、答え帰ってきたわよ?」

天葉「そんな事言われてもどうもできないわよ。・・・いつそ戦術核でも落とすしかないんじゃない?」

依奈「ダメに決まってるでしょう!?!」

天葉「ノインヴェルト戦術で無理ならそれくらいしなないと無理でしょう!」

蓮夜「・・・そもそも放射能汚染ならすぐに適応しますよ?」

天葉「・・・。」

当事者達から出される答えに依奈が絶句する姿を見た天葉は天井を見上げた。それを見て不思議そうに首を傾げる楠美が彼女の肩を揺ると天葉はまるで悟ったかのような表情を楠美に見せる。

天葉「・・・諦めない?」

依奈「なんでそうなるのよ・・・。」

天葉「どう考えたって無理でしょう!?!あんなのもう災害よ、災害! 触らぬ神に祟りなして言うでしょう?・・・つまりそういうことよ。」

蓮夜「災害ですか・・・確かにそうですね。」

音羽「災害というより厄災、」

夢結「それも人の形をした・・・ね。」

茜「・・・というか意思がある分こっちの方が厄介では?」

天葉「当の本人達があんな感想出してるのよ。・・・無理でしょう。」

依奈「もしも楠美が巻き込まれたら?」

天葉「殴ってでも止める!!」

依奈「でしょうね・・・理事長代行、これが私の、私達の考えです。」

高松「・・・。」

彼女達の会話を聞いていた高松はもう一度画面へと目を向けた。そこには先程の戦闘映像が流されており、そのフィクションじみた内容に大きなため息を吐いた。

高松「この条件以外ならどうなるんじや？」

蓮夜「やはり分かりましたか・・・。」

高松「あまりにも整っていたからのう、何か制限があると思ったのじやよ。・・・それに君も先程言っていたじやろう?・・・『この状況なら』と、」

蓮夜「正解です。・・・2人には『一瞬でも行動不能』になれば模擬戦終了と『できる限り』被害を抑える条件の戦闘を行ってもらいました。」

天葉「あれで被害を抑えたっていうの?」

蓮夜「終盤は怪しいところですが初めは抑えてましたよ?・・・2人とも範囲の広い攻撃を行っていませんでしたし何より茜は竜化しませんでしたからね。」

依奈「確かに変身したのは途中からね。・・・つまり彼女は本気を出していなかったということかしら?」

蓮夜「そうではありませんよ。茜は人の状態での本気で戦っていました。」

茜「アタシは対人戦や狭い場所ならなら人として、殲滅戦や広い場所なら竜として戦うんです。その方が効率がいいですしなにより戦いやすいですから。」

音羽「・・・元々対人戦苦手だから全力とはいえない。」

茜「ですよね・・・まあ、全力ではなかったかもですけど本気では戦っていましたからそこまで差はありませんよ。」

依奈「そ、そうなのね・・・、」

先程自分達が予想したものよりも悲惨な状況が想像できた依奈が顔を引き攣らせているとそれを見た茜は天井を見上げた。

それと同時に答えを聞いた高松はそっと彼へと目を向けると彼は領きディスプレイを操作する。そこには本日の作戦範囲の地図が映し出されており地図全体が赤く塗られていた。

蓮夜「そしてこれが次回の戦闘で予想される物理的な被害範囲です。」

高松「・・・作戦域全てが先程のようになると言うことか？」

蓮夜「見た目だけならあれ程の惨状にはならないと予想されますが人的被害はそちらの想定通りかと、」

高松「・・・。」

蓮夜「そして相手は心理的な有利状況を作ること得意にしているので、」

高松「多ければ多いほど被害が大きくなっていくということじゃない。」

蓮夜「はい、ですので本件はこちらで任せていただけないでしょうか？・・・情報の隠蔽などは私達が行いますのでそちらに負担をおかけする事はございません。」

彼の言葉を聞いた高松は部屋を見渡す、そこには緊張した表情をした少女達の姿がありその中には顔を青くしている者もいた。

高松「・・・それは守るためか？」

蓮夜「・・・はい、」

高松「承知した・・・じゃがこの範囲外には彼女達を警戒のために配置させてもらうがよいか？」

蓮夜「ありがとうございます。それで問題ありません。ただ遭遇した場合すぐに撤退してもらうことが条件となります。」

高松「わかっておる、そちらの方が大切じゃからのう。・・・皆にはすまないがこちらで結論を出させてもらった。不満はあるだろうが我慢してくれると助かる。」

叶星「私達は構いません。私の、私達にとって、この子達の方が任務よりも大切ですから、」

一葉「私達も構いません。直接の戦闘は出来ませんが、できることは精一杯やらせて頂きます！」

蓮夜「ありがとうございます。・・・それでは少々急ぎになります

がこれにて解散とさせて頂きましよう。方針も決まりましたし、これ以上は疑問を持たれる可能性があるので、」

そう言うとは彼は1度お辞儀をし、ポケットから何かを取り出し中へと投げた。

それはここに来る時にも見た球体に似ており、それは一瞬空中に留まると弾けると同時にまばゆい閃光を放った。

## ラスバレ1章66

夢結「本当に厄介ね！」

蓮夜「……。」

密談を終えた日の夜、夢結は蓮夜と戦っていた。

場所は先程茜と模擬戦をした街であり、あの時の悲惨な状況が嘘かなように綺麗に整った街並み、しかし街の中でも都会と言われるような規模であるはずのそこは2人しかいないため異様なほどの静寂に包まれていた。

その中でお互いの獲物がぶつかり合う音だけが響く中で冷静な彼とは正反対に彼女は焦りの表情を見せていた。

2人が正反対の反応を見せる理由、それは2人の状態にあった。衣服の上からもわかるほどの切り傷ができている彼女に対して彼の服には塵一つ付いていない。

これ程の差ができてしまった理由、それは彼女が1度も攻勢に出られていないから……いや、彼女は彼にペースを握らせないために攻めていた。しかしどれだけ必死に攻めてもそれが攻勢にまで繋がることは無かった。

身体能力では圧倒的に上であるはずの彼女は1度も攻勢に出れない理由は2つ。

1つ目は彼の距離操作が上手いこと、どれだけ彼女が距離を変えようとしても彼はそれを許さず付かず離れず彼女の最も戦いにくい距離を保ち続けているからこそ彼女は全力で己の獲物<sup>大剣</sup>を振るうことが出来ない。

そして2つ目は……、

夢結「本当に躲し辛い！」

蓮夜「……。」

彼の使う武器にあった。

今の彼女は彼の攻撃を避け続けていた。本来彼女の武器である大剣は彼女よりも大きなことから相手の攻撃を盾として受け止めての反撃やその長大なリーチから相手の攻撃範囲外からの強烈な一撃に向いており本来回避を優先する武器ではない。

しかし彼の使う武器・・・大鎌は彼女に防御の選択肢を与えない。彼の獲物である大鎌は全長2mと彼女の獲物にリーチで勝るわけでもなくその横から生える刃の性質上細かい攻撃には向かない。その対策だろうか石突が槍状になってはいるがそれでも彼女の回避を選択する理由にはならないはずだったのだが、先程欠点としてあげた細かい攻撃に向かない刃が彼女から回避という選択肢を奪っていた。

夢結「防御の上からでも刃が襲ってくる・・・使う人が少ないから気づかなかつたけれど盾殺しとして優秀ね。」

蓮夜「・・・だから使ってる。」

盾殺し・・・横に長く伸びている刃が備え付けられている性質上例え障害物があったとしても対象に届いてしまうのだ。

初めは受けてから反撃する戦法を取っていた彼女だが、その性質に気づいた今では常に回避することを余儀なくされている。彼女が躲す以外選択肢のない状況かで彼は縦横無尽に大鎌を振るい続ける。右から左へ、上から下へ、右手から左手へと様々な角度から襲いかかる連撃、その全てが長物系の特徴である長い持ち手を利用した巧みなりーチ操作により攻撃の距離感を読ませてはくれない。そして戻しの遅さを石突の刃で埋めるため攻撃同士の間割って入ることもできないため彼女は常に回避を余儀なくされていた。

ならば長物系の宿命である武器の内側に入ればいいと考えるのだが、彼もそこまで甘くは無い。

蓮夜「ちよつと前に出すぎだよ。」

夢結「ツ!!」



彼の言葉にすぐさま獲物を背後に移動させる夢結、そんな彼女の背後から強い衝撃が襲いかかる。

彼女を襲った犯人は先程から致命の一撃を狙い続ける彼の大鎌であり、その刃は彼が引き戻す動作をするのに合わせて彼女へと襲いかかる。

元々鎌とは農業に使われる道具であり穀物や雑草などを刈り取るために作られたものであり、手元へと引き戻すことで対象を切るのが正しい使い方であり、本来ならこれこそが大鎌の正しい使用法だと言える。

そしてこれこそが同じ槍や斧などの長物にない鎌という武器の持つ最大の利点でもあった。

その利点とは対象を引き寄せる能力、

対象の外から囲いように刃を置くと同時に自身へ向かって引くことで背後から襲いかかる一撃、それは奇襲であると同時に相手が自身から距離を取ることに對する牽制を同時に行うことができる。

この一つの動作で2つ同時に行う能力こそが大鎌の最大の利点あり、それと同時に最大の欠点でもある。

この動作の性質上相手は必ず自身の獲物の内側に入ることになる。それは離れられないと同時に内側に潜り込まれると同義だからだ。

それを理解しているならば彼女は何も遮るものもない彼に肉弾戦を仕掛けただけのだが、彼女の取った次の行動は回避だった。

全身を限界まで捻りながら大鎌の支柱側へと体を逸らす夢結、そんな彼女の脇腹を掠めるように鋭い何か突き出される。

蓮夜「よく躲せたね。」

夢結「何回も同じことをされれば慣れるわよ！」

それは先程まで彼女の背後から襲いかかっていた大鎌の石突でありそれは彼の背中に沿うように突き出されている。

引くと同時に背面から突きの動作へと流れるように移行する二段構えの奇襲、それをかすりながらも回避に成功した彼女は身体の捻り

を利用して大剣振り向く。それは無理な体勢から放たれた一撃だったが、彼自身も無理な体勢で攻撃に及んだために隙ができてしまっている今の状況で彼に回避する術は無く。

この一千一隅のチャンスに夢結が小さく微笑んだその時、

蓮夜「なら、これは見せたことないよね？」

夢結「しまっ!？」

彼は大鎌の刃付近を掴むと突き出した石突を蹴り上げながら倒れることで身体を沈めた。

彼が倒れると同時に直上を進む刃、それは鎌の柄にぶつかることで甲高い金属音を上げながら柄を押しつけるように通り過ぎる。

それにより生まれた衝撃により回転する大鎌を手首の動きだけで制御した彼は力の流れに身を任せるように身体を回すと先程通り過ぎた大剣に向かって振り下ろす。

突如襲いかかった上からの衝撃に落ちる刃、それは地面に接触すると深々と突き刺さり大量の砂埃を巻き上げながら停止した。

それに気づいた夢結はすぐさま獲物から手を離し距離を置こうとするのだが、

蓮夜「ちよつと遅かったかな。」

既に彼女の首筋には己の敗北を告げる刃が添えられていた。

## ラスバレ1章67

蓮夜「……詰めが甘かったね。」

夢結「……むう、」

蓮夜「ほらほら、不貞腐れない。最初と比べてかなり成長したよ。」

夢結「……でも、」

蓮夜「最初なんて3手で終わってたんだから、それに比べたら10分まで伸びたのは成長でしょう。」

夢結「その言い方少し傷つくわ……。」

蓮夜「ご、ごめん!？」

見るからに落ち込む夢結に慌てた様子で視線を右往左往させる蓮夜にクスリと笑う彼女、それを見た彼はジト目を向ける。

蓮夜「……。」

夢結「私が言うのもなんだけれど不貞腐れるのをやめなさい。」

蓮夜「……心配してるんだよ。」

夢結「はいはい、ありがとうね。」

不機嫌そうに視線を逸らす彼、それを笑みを浮かべながら回り込む彼女はつま先立ちするとそっと彼の頭を撫でる。

夢結「貴方には感謝しているわ。こうやって私に付き合ってくれてるもの。」

蓮夜「それは僕のエゴもあるんだ。感謝されることでもないよ。……それに僕も君に感謝しているんだ。君のおかげで僕は僕でいられる。」

夢結「そう思えるようになってくれたなら嬉しいわ。」

蓮夜「……こうやって過ごすこと、ずっと諦めていたんだ。」

夢結「……そうよね。」

蓮夜「何も感じなくて何も思えなくて、その中でも唯一君のまもる

ことだけしか考えられなくて、だからそれだけのために生きてきた。」  
夢結「……。」

蓮夜「どんな手を使っても、どれだけ手を汚してでも、唯一残っているそれだけはどうしても手放したくなくって、自分のことなんてどうでもいいと思ってた。」

夢結「……。」

蓮夜「たぶんこれも僕が無意識に生きたいと思ってたからなんだろうね。……何も残ってなくても、いいや残ってないからこそ昔持っていた幻想に縋り続けた。」

夢結「……もう幻想ではないわ。」

蓮夜「……そうだね。」

夢結「確かに貴方は今まで全てを捨てていたわ。でも今は違うでしょう?」

蓮夜「そうだね。……君が居てくれるなら僕はもう諦めない。」

夢結「わかっているわ、だって蓮夜……貴方の心からその気持ちに私にも流れ込んでくるのだから。だからこそ私も言わせてもらわね。どんなことがあるかと貴方を一人にしないわ……決してね。」

蓮夜「……ありがとう。」

彼は優しい表情をしながら自身の頭を撫でる手を握ると自身の胸に寄せる。

そして深呼吸とともに目を閉じるとその雰囲気は真剣なものへと変化した。

蓮夜「本当に君は優しいね。……だからこそ君を連れて行くことは出来ない。」

夢結「……なんのことかしら?」

蓮夜「しらばつくないでいいよ。……君も出る気だったんだよね。彼女との戦いに……言わなくてもわかるよ。君が僕を心配してくれていることはよくわかっているから、僕はトラウマが多いもんね。」

夢結「なら・・・それがわかっているならどうして。」

蓮夜「ひとつ問題をいいかな。」

夢結「急にどうしたのかしら?」

表情を影に落とす彼を心配そうに見つめる夢結、そんな彼女に彼はひとつの問いを投げかけた。

蓮夜「まず初めにこの問題に正解は存在しない。これだけは覚えておいて、」

夢結「え、ええ。」

蓮夜「じゃあ問題です。」

『貴方は今2択の選択肢に迫られています。』

1つは自身の守るべきもの、君の場合は梨璃さんだね。

そしてもう1つは親しいもの、これは一柳隊の皆としよう。

君の目の前でこの2組が危機的状況に晒されている。そんな中で後者なら確実に救うことが出来るがそうすると前者は救うことが出来ない。逆に前者を助ける場合その人を救える可能性は5割、そして後者が助かる可能性が1割になってしまう。

この状況で君は前者と後者、どちらを選ぶ?』

夢結「梨璃かレギオンの皆・・・。」

蓮夜「やっぱり悩むよね。・・・でもそれじゃダメなんだ。」

夢結「・・・え?」

蓮夜「この問題夢結以外にも梨璃さんと天葉、依奈、そして理事長代行にしたんだよ。」

夢結「なんで!？」

彼の口から出たないように夢結は彼に掴みかかる。

彼はそれを抵抗することなく受け入れると、胸倉を捕まれその身体は宙に浮くが、気にする様子もなくそのままの状態で話を続けた。

蓮夜「これに対して僕の望んだ答えを出したのは梨璃さんと天葉

だった。」

夢結「……どういこと？」

蓮夜「その時の梨璃さんの答えはこうだ『私は前者を救います。ど  
れだけ大変でも諦めなければどうとでもなりますから！それに皆な  
ら大丈夫ですよ。むしろ私が行くとかえって邪魔になりそうです  
し、』って即答だったよ。」

夢結「……。」

蓮夜「ついでに天葉は『楠美に決まってるでしょう!! 依奈達ならい  
いのよ! どうせ自分達でどうにかするでしょうから』……こつちも即  
答だったね。」

夢結「……すぐに決定できる判断力がないってことかしら？」

蓮夜「……次に依奈だけど、彼女は君と同じ感じだったから割愛  
するよ。そして代行だけあの人は『……後者を選ぶ、例え可能性  
があるとしても彼女達を危険な目には……。』あの人も即答ではあつ  
た。」

夢結「何が違うの？」

蓮夜「迷っていたんだよ。あの人は……多分全員救いたいんだと  
思うよ。でも現実的に考えてそんなリスクを背負わせる訳には行か  
ない。だからこそ自分の気持ちを押しさえ込んで確実な方を選んだ。」

夢結「けれどそれも大切なことじゃ……。」

蓮夜「確かに大切だね。……だけど刹那の時間で状況が変わる異  
能者の戦いでは気持ちを押しさえ込むことすらも隙になってしまっ  
た。」

夢結「……。」

蓮夜「特に僕みたいに搦手が得意なタイプは少しでも隙を見せると  
その瞬間に何もかもがひっくり返される。」

彼は彼女から数歩離れると先程まで何も持っていなかった手にナ  
イフが握られておりそれは彼がそつと手を離すと重力に従い下へと  
落ちていった。

それは地面に接触すると吸い込まれるように地面に突き刺さ

り・・・。

蓮夜「・・・こんな感じだね。」

夢結「ツ?!?!」

蓮夜「・・・大丈夫、そのままじつとしてて、」

むき出しになった刀身が彼女の腹部から生えていた。

それに気づいた夢結は慌てたそれを引き抜こうとするがその瞬間彼女の首筋にナイフが添えられる。

蓮夜「大丈夫、それは君の服の上から生えてるだけだから君に傷はつかないよ。」

夢結「そ、そうなのね・・・良かったわ。」

蓮夜「・・・でも、やっぱりそうなんだね。」

夢結「どうしたの？」

彼の言葉と同時に消えたナイフを見てほっとする彼女、けれどそれを見た彼は視線を下げ寂しそうな表情をすると彼女ことを抱きしめた。

蓮夜「やっぱり君を連れて行くことは出来ない。」

不意なことであつたがその温もりに力を抜く夢結、しかし彼返ってきた言葉は彼女にとって残酷なものであつた。

## ラスバレ1章68

夢結「……。」

二水「ゆ、夢結様？」

夢結「……。」

梅「おーい！聞こえてるか？」

夢結「……。」

ミリアム「ダメじゃ……完全に沈んでおるぞ。」

密会の翌日、彼女達はロツジにいた。

休憩中なのかソファーに座る面々、その中で1人テーブルに突っ伏しながら暗い雰囲気をかもちだしていた。

そんな彼女……夢結が心配な一柳隊の面々が彼女に声をかけるが反応を示さない。

梨璃「お姉様？……何かあったのですか？」

夢結「……何がいけないのかしら？」

神琳「やつと反応を示しましたが……よく分かりませんね。」

しばらく経ちようやく反応を示した夢結、しかし返された言葉は意図が分からないため梨璃達の悩みはより深くなってしまった。

楓「……この感じは黒鉄さんでしょうか？」

神琳「それ以外に要因が思いつきませんかね。……あの人ちやうど今いませんし。」

ミリアム「じゃが、なにが原因なのかのう？」

雨嘉「……梨璃、何か夢結様から聞けない？」

梨璃「えつと……お姉様？昨日黒鉄さんと何かあったのですか？」

それぞれの考えの元に夢結がこうなっている原因であろう人物を予想した彼女達、そんな中で唯一夢結が反応を示す梨璃が彼女に対し



て質問する。

夢結「・・・私って本当に彼に返せるのかしらね。不器用で頭も固くて、戦闘でも足でまといで、そういえば私も普通の子供ってどういうことかよくわかっていないのよね。・・・こんなことなら交友関係ももしかりとしておけば良かったわ。・・・ふっ無理ね。だって私が出来なかったから彼はあんなってしまったのよ。」

ミアム「・・・悪化しおった!？」

鶴紗「・・・逆効果だったか？」

神琳「・・・その可能性は否定できませんが情報も出てきましたね。」  
雨嘉「色々と言ってるけど半分くらい聞いちゃいけないもののような・・・。」

二水「それ、まずくないですか？」

神琳「ふーみんな、言ってみてください。」

二水「ふえ!?なんで私なんですか!？」

神琳「私達の中で一番聞き取りに慣れているのは貴方ですかかね。・・・それに得意でしょう、地雷を踏み抜くのは？」

楓「確かに適任ですわね。行きなさい梨璃さんのために!!」

ミアム「・・・まるで生贄扱いじゃないか。」

鶴紗「普段の行いじゃないか？」

突然のことに涙目になる二水と、それに詰寄る神琳と楓、そんな二人をみてミアム達が遠い目をする中、夢結は重々しく顔を上げた。

夢結「自覚はあるけれどそこまで酷いかしら・・・。」

神琳「夢結様お気づきになりましたか、それでどうしたのでしようか?」

夢結「・・・無視なのね。」

自信の扱いに不満を覚えた夢結だが神琳は彼女の言葉を受け流しながら質問を投げかける。

その様子に彼女の雰囲気がいよいよ暗くなるが、自覚はあるのか特に反論をすることなく先日の出来事を話始めた。

夢結「・・・その足りない何かが分からなければ参加させられないらしいのよ。」

二水「・・・ただ夢結様が危険な目にあって欲しくないだけじゃないですか？」

夢結「それも考えたわ。・・・けれど彼、嘘をついていなかったのよ。」

神琳「・・・繋がりですか？」

夢結「ええ、今の私は彼と繋がっているからお互いの感情くらいなら簡単に理解できるのよ。でも彼には罪悪感みたいな嘘をつく時の感情がなかったわ。」

楓「でしたら他にあの人は何か言っていますんでして？」

夢結「・・・あるとするなら『実力があつたら、梨璃さんと天葉なら参加させても良かったかもしれない』ね。」

梨璃「わ、私ですか!？」

雨嘉「質問のことかな？」

神琳「それなら、最後に取った行動の意図が分かりませんね。」

二水「動揺してしまっただからじゃないですか？瞬時に判断しないといけないと仰っていますし。」

神琳「でしたら心臓・・・は無理ですが腎臓などの急所でも良かったはずですよ。それなのに腹部、それも話からして鳩尾でもない場所では刺された程度ならどうとでもなりますから、」

茜「あの人実戦派の現実主義だから絶対に急所ねらいますよ。」

音羽「なんなら毒まで仕込んでくるまでがデフォ。」

梨璃「茜さんに音羽さん!どうしてこちらに?」

茜「様子見ですよ。アタシも音羽も作戦時別行動なんで連携とかの見直して邪魔になりますし、やることありませんから。」

音羽「それにあんな空気が漏れ出てたら気になる。」

夢結「ごめんなさいね。」

茜「いえいえ、ちよつと外から聞いてましたけど先輩と何かあったんですか？なんだつたら聞きますよ。」

音羽「助けになるか分かりませんが……。」

夢結「……お願いできるかしら。」

二人の言葉に悩ましい表情をする夢結、彼女は数秒考え込むと彼女達に目を向け先程の内容を伝えた。

それを聞いた二人は少し考えると彼女へと質問を投げかける。

茜「……今回戦闘に関しては何も言われてないんですね？」

夢結「ええ、そうよ。」

音羽「なら、殺しに対する感情とかは？」

夢結「聞かれてないわ。そもそもヒューズと戦っている時点で覚悟出来ているもの。」

茜「ですよね。なら刺され位置は本当に鳩尾じゃなかったんですか？」

夢結「ええ、近いけれど少し下ね。」

音羽「……茜、」

茜「……アレかな。」

梨璃「お二人とも何かわかったんですか!？」

茜「わかったけど……これは本当に誰かに教えて貰っちゃダメなやつだ。」

音羽「教えてもらった時点であの人なら戦闘すらさせて貰えない。」  
夢結「……それほど大切という事ね。」

茜「はい、あの人はわかったんでしょうね。貴方を大切に思っているからこそ。」

音羽「多分、あの人が1番精神的に参ってるはず。もしかして今癡狂してるかも……。」

二水「そんなにですか!？」

神琳「確かにあの人は夢結様至上主義ですけどそこまでは……。」  
夢結「……。」

ミリアム「……まさか、」

夢結「なっている可能性が高いわ。先程から彼の感情が読めないから、」

茜「だから先輩はいないんですよ。」

音羽「それに美鈴様？もそつち言ってるみたいだからフォローしてる。」

夢結「わかるの？」

音羽「あの人の性格は昨日把握したから、あと一つだけヒントを言える。」

夢結「……何かしら？」

音羽「1度あの人の全力と戦うこと。」

梨璃「それはいつもしてもらってますよ。確かに手加減はされてるますけど、1度だけ危険性を教えて貰った時に、」

音羽「それでも傷つけないように細心の注意を払ってやってる。私が言いたいのはそれじゃない。」

梨璃「どういうことですか？」

音羽「夢結様……貴方には黒鉄さんと殺し合いをしてもらう。」

音羽の放った一言、その意味にそして彼女の放つ異様な気配によって部屋の中を凍えるような冷たい冷気が撫でた。

夢結の元に2人が訪れる少し前蓮夜は1人訓練室にいた。

蓮夜「……!!」

周囲のビルを無差別に壊す彼、その動きにはいつもの洗練されたものではなくただ荒々しくおおよそ訓練と呼べるものではない。

蓮夜「……アアアああ!!」

それは八つ当たりのようであり、彼の感情を表すかのようにビルの

破片は縦横無尽に辺りに飛び散り近くのビルを傷つけていく。

蓮夜「他にも方法はあっただろ！・・・でも夢結自信が気づかないと、でもよりにもよってなんであんな手を取った!!」

2 転3 転と変わりゆく感情、それに精神を掻き乱された彼は意味もなく暴れ続ける。

蓮夜「夢結が無理をするのはわかってる・・・だから僕は、僕は、僕はッ!?!?」

頭を抑えて呻く彼の首に一筋の線が入る。

それは黒から次第に赤へと変わり線が完全に赤く染まった時彼の頭は宙を舞った。

切断面から吹き出る鮮血が空を彩る中彼の首は地面を転がる。そこに表情は無くただ虚無をのみを映す瞳を持つそれはゆっくりと地面を進み続けると何かにぶつかる事でその動きを止めた。

美鈴「・・・落ち着いたかい？」

蓮夜「・・・ありがとうございます。」

彼の首を止めた正体は美鈴の足であり彼女は悲しげな表情をしながら彼を見下ろしていた。

それを認識した彼は一言礼を入れるとその頭を結晶へと変えて姿を消した。

蓮夜「どうして俺は傷つけることしか出来ないんですかね？」

美鈴「それは皆同じだと思うよ。人は傷つけながらでなければ生きていけない。」

蓮夜「わかってますよ。・・・でも考えるんです。もつと夢結を傷つけないで済む方法があったんじゃないかって。」

美鈴「・・・はあああ。」

声の方を向くと先程まで首のなかった彼の胴体に首が繋がっており、悔しそうに震える彼の姿があった。

そんな彼を見た美鈴は1度ため息を吐くと彼へと近づき、

美鈴「1回全力でやろうか。」

彼の首へと刃を添えた。

夢結「殺し合い・・・ですって、」

音羽「そう相手の命を奪うまで行かなくてもその直前まで行く本当の致命傷まで、」

梨璃「どうしてそんなこと！」

音羽「つらいかもしれないけど必要。それに死ぬことは絶対にならない。」

神琳「・・・殺し合いなのですか？」

音羽「そうまずあの人は獣にでもならない限り基本死なない。」

夢結「・・・そうね。でも私はそうではないわ。」

音羽「わかってる。でも大丈夫・・・あの人は絶対に殺せない。・・・少し違う、あの人は異能者が相手なら絶対に殺せない。」

夢結「・・・殺せない？」

音羽「そう、だってあの人は、」

蓮夜「本気で言ってますか？」

美鈴「もちろん、最後までいこうか。」

蓮夜「でも姐さんでは俺は殺せませんよからいいですけど、俺は姐さんを殺せません。もし何かあれば、」

美鈴「それがないことは君が1番理解しているはずじゃないかい

？」

蓮夜「……。」

美鈴「確かに君の力は強大だろう。汎用性、攻撃性、防御性、全てにおいて異能者としても逸脱している。そして君の異能者への最大の強みであるアレは異能者同士の戦いで絶対的なアドバンテージだろう。」

蓮夜「……。」

美鈴「確かに無力化なら勝負にならないだろうけど、殺し合いなら状況が違う、だって君は、」

別々の場所で語られる言葉、それは偶然かそれとも必然なのか一つに重なる。

音羽・美鈴「その力は異能者の中で最も異能者を殺すことに向かない力なのだから、」

1字1句変わらぬ2つの言葉は2つの場所で同時に響いた。

## ラスバレ1章69

静寂な街並みの中で蓮夜は何かを考えているのか空を見上げる。

蓮夜「……。」

美鈴「そうだろう？」

蓮夜「……確かに否定はしません。」

美鈴「なら大丈夫……ということでしょうか、」

美鈴の言葉に彼が返信をすると、それを聞いた彼女は1度微笑み、霞のようにその姿を消した。

夢結「どういうこと？」

音羽「……どうもこうも言った通り、あの人は殺すことに向かない。」

梨璃「確かにあの人は優しいですけど……でも躊躇わないような？」

音羽「言い方が悪かった。……あの人の力の性質が殺傷に向かないすぎる。」

神琳「……ですが、以前見せてもらったのですよ？」

音羽「……それはどういう状況？」

神琳の言葉に質問を上げかける音羽、それを聞いた彼女はあの日……過去の映像獣による惨状を見たことを答えていく。

音羽「それは状況が良かっただけ。」

神琳「状況……ですか？」

音羽「あの人能力系統はわかる？」

神琳「……確か刻印でしたね。」

音羽「じゃ、その特徴は？」



神琳「自信の能力の発動点となる感覚器官に刻印を発生させ、その刻印を通すことで能力を行使するでしょうか。」

音羽「・・・レンジは？」戦闘距離

神琳「確か遠距離ロングよりの中距離ミドルですね。」

音羽「そう・・・次にあの人の戦い方は？」

神琳「・・・。」

夢結「ミドルよりの近距離ショットで行う格闘戦ね。武器を振るう隙間や起点に能力を使うわ。相手のスタイルに応じて超近接クロスもするけれど基本はこうね。」

音羽「・・・そこまでわかってるなら疑問に思わない？」

夢結「・・・能力系統のレンジと彼のレンジが噛み合っていないことかしら？」

音羽「そう、それがあの人の持つ能力の欠点歪みであり、殺しに向かない理由、」

そこまで言うと言羽は何処からか取り出した小型のホワイトボードに何かを書き始めた。

その頃蓮夜はビルの狭間、大通りに1人立っていた。

その右手には大太刀が握られているが顔が俯いており、手にも力が入っていないのか剣先は地面に突き刺さっている。

蓮夜「・・・。」

そんな彼はしばらくする無造作に太刀を握る手を上げた。

まるで力の籠っていないゆっくりとした動き、それはただただ虚空を切るがその剣先が頭上へと至った時、

蓮夜「・・・。」

空が・・・空間がヒビ割れた。

まるで蜘蛛の巣があるかのように広がるヒビ、それは徐々に範囲を拡大するとともにその密度を濃くしていく。

ヒビが彼の視界を覆い尽くした瞬間周りの全てが地理となった。彼の足元にある道も周りのビルもそしてヒビ割れた空も全てが塵となり消える。

美鈴「相変わらず、やることが派手だね！」

蓮夜「……。」

美鈴「前よりも酷くなつてないかい？」

蓮夜「……知りません。」

そんな中で姿を保つものが二人いた。

1人はこの現状を作り出した蓮夜本人。

そしてもう1人は、そんな彼の後ろに佇み美鈴の姿だった。

目の前に広がる惨状を呆れたような表情で見ている彼女の輪郭は揺れている。

その声を聞いた彼は持ち手を軸に回転させる要領で声の方向へと切りかかる。

美鈴「流石にこれくらいだと当たらないよ？」

躲す素振りを見せない彼女に襲いかかる刃、その刃は標的の身体を両断する。縦一線に左右に別れる美鈴、しかしその表情は崩れない。

蓮夜「ならこれなるどうですか？」

余裕の表情を見せる彼女に彼が一言返すと辺り一帯に複数の黒い球体が現れるとそれは彼女を囲うように動き始める。

美鈴「……これ1人に向けるものじゃないんじゃないかな？」

蓮夜「……1人じゃないでしょう。」

美鈴「いや、ここにいるの僕だけだからね！」  
蓮夜「・・・遠慮なくどうぞ。」

そんな彼の言葉と共に辺り一帯が闇に呑まれた。

音羽「・・・出来た。」

訓練室  
街が悲惨な状態になる中、音羽は夢結達へホワイトボードを見せる。  
そこには縦に並ぶ『干渉』『抵抗』『強化』の文字とその下に『24』  
という数字が書かれていた。

夢結「・・・これは？」

音羽「私達が調べた能力傾向を簡単に表したもの。・・・異能の能力は大きくわけてこの3つに別れてる。」

梨璃「まるでゲーム見たいですね？」

音羽「その方がわかりやすいから、・・・例えば、」

梨璃の質問に答えた音羽は手早くホワイトボードに文字を書き足すと再び彼女達へと向ける。

そこには新しく『干渉2』『抵抗8』『強化5』と書かれていた。

音羽「一応これは例、5を基準として数値が高い程その力が強く、低いと弱くなる。」

神琳「そう言われましても何を指すのか分からなければ理解できませんので・・・。」

音羽『『干渉』は外への因果干渉強度、『抵抗』自信内での被干渉への耐性強度、『強化』は何かの情報量への拡張強度。・・・簡単に言うと『干渉』は攻撃力、『抵抗』が防御力、『強化』が補助力。それを下のリソースから振り分ける。』

梨璃「そこまでゲームに似せなくても・・・あれ？これ下の数値か

ら振り分けるんですよね？でも合計で15しかありませんよ？」

ゲームで例えようとする音羽に苦笑する梨璃、そんな彼女は違和感を感じて彼女へと問いかける。

すると今度は文字と数字の間に(3)と書き足した。

音羽「・・・一つの項目に3のリソースがかかるようにしてる。」

夢結「それって意味があるのかしら？」

音羽「本当ならない。・・・あの人がいなければ、」

夢結「・・・蓮夜が？」

音羽「・・・。」

そう言葉を残すと音羽はホワイトボードを書き直す。

そこには、

『干渉(3) 21』

『抵抗(0) 0』

『強化(0) 0』

(24)

と書かれていた。

夢結「・・・これは、」

神琳「・・・あまりにも歪ですね。」

梨璃「・・・極振り？」

ミアム「・・・極振りじゃな。」

鶴紗「・・・極振りだな。」

音羽「その3人は置いといて・・・これがあの人の能力を表したものの・・・『干渉』に特化した力、だからこそどんなに不利な状況下でも相手の能力を上からねじ伏せられる。」

楓「つまりあの人は異能者同士の戦いに置いて絶対的な有利性があるということではありませんか？なら殺傷力が低い理由が分かりません。」

音羽「確かにそう、どんな能力にも有利に立てる。ある意味で理不尽までの圧倒的な相性差があの人最大の強み。だからこそあ的那个人は戦闘に関して無類の強さを持つことができる。」

そこまで言うと言羽は一度ため息を吐くとホワイトボードをテーブルに置くと目を細め。

音羽「でもあの方は殺すことに向かない。・・・能力の性質が戦闘型ではなく補助特化型だから、」

部屋内皆が持つであろう疑問の答えを呟いた。

## ラスバレ1章70

美鈴「けほ、けっほ・・・酷いじゃないか、全身煤だらけだよ!!」

蓮夜「普通重力崩壊内でそれだけなのがおかしいんですよ?」

美鈴「それ、君にも言えるからね?」

蓮夜「自分の行使したもので損傷を受けるわけないでしょう・・・でも流石にここまで聞かないと嘆きたくなりますよ。」

先程までビルが立ち並んでいたはずの街中、しかし現在はビルも道も何もかもが消えていた。

その中で太刀を降ろしながら項垂れる蓮夜とその後ろで咳をしなから服に着いた煤を払う美鈴だけが存在している。

蓮夜「正直ここまで殺傷力が低いとは思いませんでした。・・・戦うだけなら強いのですが、」

美鈴「・・・天は二物を与えずって言うからそれじゃないかな?」

蓮夜「・・・はあああ、早く直したらどうです?」

美鈴「そうだね。・・・君が荒っぽいから穴だらけになったじゃないか。」

自身の力の無さにため息を吐きながら振り返る彼、その視界の先には彼女の姿が映るが、その姿は先程までとは違っていた。

その身体はまるで虫食いになったかのように抉られている。

だがそれも数秒経つとその傷も霞とともに元通りに戻ってしまっ

た。  
美鈴「これで大丈夫!・・・さあ、まだまだやろうか!!」

蓮夜「・・・本当にどうにもなりませんね、これ・・・そうだ。」

傷が治った瞬間彼へと襲いかかる美鈴、そんな彼女を見て何か思いついたのか自身の両手へと視線を向けた彼は彼女が斬り掛かると同

時に姿を消した。

蓮夜「……。」

美鈴「君の十八番はどうしたんだい？」

蓮夜「少し思うことがありますね。試そうと思っただけですよ。」

数瞬の後、彼女の目の前に姿を表す彼、そんな意味の無い行動に訝し見ながら様子を見てみると彼の両手と周囲に光の粒子が現れる。

その今までに見たことの無い現象に彼女が距離をとると光が形を作りながら収縮し、光が解けると同時にその姿を表した。

蓮夜「使いたくなかったんだけどな。」

美鈴「……それは？」

蓮夜「今まで使えなかった。……使う気になれなかったものですよ。」

美鈴「君が様々な武器を扱うことが出来ることは知っているけど、」

蓮夜「確かに姐さんどころか誰にも見せたことがないですね。……」

そもそもし出したのも最近ですし、

美鈴「そうじゃない……それが、そんな使用することを考えてないものが武器だと言うのかい？」

蓮夜「……とにかく続きと行きましょう。そうじゃなきゃ、分からない。」

そういうと彼は両腕と周囲に付けられたモノ武器を彼女へと向けた。

夢結「補助特化?……あれで？」

音羽「疑問もわかる、けれどこれが真実。」

梨璃「確か音羽さんも茜さんも勝てないんですよ？」

音羽「死にはしないけど勝つのは無理、」

楓「お2人は戦闘型なのでしょう?」

音羽「そう、私は少し怪しいところがあるけど茜は完全な戦闘特化

型、」

二水「ではあの人はそもそも非戦闘員であるのに戦闘員より強いと  
言うことですか!？」

音羽から告げられた驚愕の事実、それを聞いた彼女達は信じられない  
いものを見たような表情になる。

しかし彼女の言葉に嘘を感じられず質問を重ねる毎にそれが現実  
だと認識させられる。

神琳「どうして補助特化だとわかるのでしょうか？」

音羽「あの人の能力が万能だから、」

楓「万能なら戦闘でも有利になるのでは？」

音羽「異能だと違う、万能ということは干渉するために違うものに  
まで干渉しなくてはいけないということ、だから彼の作用する干渉は  
全て間接的な干渉になってしまう。」

夢結「なら私も間接的な干渉になるわ。」

音羽「貴方の場合、干渉した存在を憑依させることで能力を行使す  
る。これは憑依する干渉と憑依した存在を用いた干渉で別の干渉に  
なる、だから違う。」

梨璃「・・・でも、それなら武器で攻撃すればいいのでは？黒鉄さ  
んもそうしてますし？」

音羽「確かにそう・・・でもそれは抵抗がある場合。」

神琳「ここで抵抗ですか？」

音羽の言葉に疑問を持った神琳が質問すると、彼女はテーブルに置  
いてあったカップとティーポットを手に取ると紅茶を入れた。

神琳「・・・？」

音羽「抵抗は簡単に言うて器の中を自身の色で染め上げることで他  
の色を受け付けないようにすること、でも。」



カップに入った鮮やかな朱色をした紅茶を見つめる音羽、それを見て皆が視線を向けると、彼女は徐に傍に置いてある角砂糖を入れる。

音羽「それは外からの色を受け付けないだけ、直接入れられた色は混ざって濁ってしまう。」

鮮やかな朱色が薄く濁ってしまった紅茶、その中に今度はミルクを入れた。

音羽「それは入れられた量や種類によって本来の色を無くしていく。」

完全に白く濁ってしまった紅茶、それを彼女は一口含みテーブルに置くと、そこには微かな水滴だけが残された何も入っていないカップだけが残された。

音羽「抵抗は相手の抵抗を薄くすることにも使える。だからこそ抵抗のないあの人は普通の手段で仕留めることが出来ない。」

夢結「・・・だからこそあの太刀なのね。」

音羽「そう、あの人の太刀が持つ力は干渉・・・その名の通り刃に触れたものに干渉する力、その力を使うことでやっとな可能性が生まれる。」

神琳「つまりそれを使わせなければ負けることはないということですかね？」

音羽「そういうこと、・・・そしてその能力も直接触れないといけない。だからあの人と戦う場合太刀に触れなければ殺されることは決してない。」

夢結「・・・。」

音羽「思い当たる節がありますね。」

夢結「・・・ええ、」

音羽「あの人は貴方に太刀は向けない。だからこそ貴方はあの人と

本気で殺し合うことが出来る。」

夢結「……。」

音羽「……だからもう一度言わせてもらおう。」

表情を暗くした彼女へと近寄る音羽、彼女の瞳が夢結を見つめた時、

音羽「夢結様、貴方にはあの人と殺し合いをしてもらおう。」

彼女の口から再び聞きたくない言葉が紡がれた。

## ラスバレ1章71

音羽「これから先は夢結自身の決めてください。…茜、行くよ。」  
茜「えっ!?アタシの出番はなしなの!」

その一言を最後に部屋を出ていく音羽、それを追うように茜も外へと出ていくと室内は静寂に包まれた。

夢結「……。」

梨璃「お姉様……。」

夢結「少し席を外すわね。」

沈黙の中心配そうな梨璃の表情を見た夢結は、席を立つと外へと出ていってしまう。

それを追おうと梨璃も席を立つが、神琳が彼女の手を握ることで止めた。

神琳「梨璃さん、今は1人にさせてあげてください。」

梨璃「……でも、」

神琳「今追っても夢結様が余計に悩んでしまうだけです。……今のあの人には時間が必要なんですよ。」

梨璃「……わかりました。」

神琳の言葉を聞き表情を曇らせる梨璃、彼女が顔を俯かせること数秒、1度深呼吸をした梨璃は席に座り治すと自信の持つ端末を操作し始めた。

梨璃「お姉様が考えているあいだ私達もできることをしましょう!」

ミリアム「できることってなんじゃ?」

鶴紗「……そもそも今日は何をやるんだ?」

梅「そういえば聞いてなかったな……。梨璃、何をするんだ？」  
梨璃「それはですね……。これです!!」

梅の質問に端末を操作していた梨璃は再び立ち上がると部屋の隅へと移動し端末を床に置いた。すると端末の周囲にノイズが発生すると同時に8つのアタッシュケースが姿を表した。

楓「これは……。まさか!」

神琳「……。完成したんですね。」

梨璃「はい!今朝預かりました!」

鶴紗「……。そもそも、これ、どうやって持ってたんだ?」

梨璃「えっと……。詳しくは分からないんですね私の端末を改造?したらしくて……。それで擬似拡張空間?を付与したらしいです。」

ミリアム「……。前に魔が付いたらんか?」

雨嘉「……。絶対についてる。」

梨璃「それは置いておいて皆さん開けてみてください!」

彼女の言葉に促せるようにアタッシュケースの前に集まる面々、アタッシュケースにはそれぞれの名前が書いてあり、その横にはこのC H A R Mの名称であろう名前が書いてあった。

鶴紗「……。紅薊か、」

鶴紗の手には五枚の爪が重なったような等身を持つ大剣が、

二水「……。残華、これが私の、」

神琳「双薺……。確か薺は朝顔の別称でしたか、」

神琳の両腕には棺桶形のプレートが、

雨嘉「束華?読み方あってるのかな?」

雨嘉の手には大振りの弓が、

梅「T・染四片……。コレ、変わりすぎじゃないか?」

梅の両手には新異形しくななった愛機が、

楓「S M ・ I C ・ ・ ・ 私のは大丈夫そうですね。 . . . 確

かアイリスの花言葉は、」

楓の手には変わらぬ愛機が、

結梨「おお! . . . 何これ?」

結梨の背には大振りのバックパックと指に嵌められた10の指輪が、

それぞれの新たな力が脈動を打つかのようにクリスタルに輝きを宿した。

少女達が新たな道を歩もうとする時、蓮夜は1人佇んでいた。

その周りには何も存在しておらず彼は1度溜息をつくど地面に腰掛けると同時に地面から壁が生え彼の身体を支える。

蓮夜「あの人逃げたな . . . 確かに実戦では正解だけど流石に酷いでしょう。」

先程までいた美鈴は状況が悪くなったのかその場から離れたようでそれに気づいた彼は身体の力を抜き空を見上げる。

蓮夜「 . . . でもあの感覚、悪くなかった . . . いや、馴染み過ぎてたつて言うべきかな?」

彼は何かを掴むように天へと右手を伸ばすと何回か開いては閉じを繰り返す。

蓮夜「まだ抵抗はあるけど、使えるものは使わないと . . . 。」

そういうと下げていた左手を右手と同じ位置に上げ、両手のあいだ

に光を生み出す。

蓮夜「A p o c a l y p s i s 禁 忌 目 録 か・・・この場合は赤き竜かな？ 黙示録に出てくる禁忌。世界で最も罪ない人を殺すことに向いている僕にはお似合いだ。」

それと同時に彼の背後の壁が崩れその中から7機の白剣が姿を表した。

7つの剣は1本の大剣と6本の十字剣に別れており、大剣は幅広で切先は存在せず俗に言うならエクスキューソー<sup>処刑人</sup>の<sup>剣</sup>と呼ばれるものであり、十字剣も刀身が二又に別れており、ノコギリ状の刃はまるで牙の剥き出しとなった顎を連想させる。

蓮夜「・・・やっぱりお前もこっちに引つ張られて来たんだな。」

その刃は彼が手を動かすとそれに合わせるように滑らかに宙を舞う。

軽やかに時には荒々しく、しばらく彼はその動きを見るとそつと手を下ろしそれと同時に剣も彼の前に並んだ。

蓮夜「・・・こっちは少し慣れが必要だけど、表でも使えそうだね。」

彼が立ち上がると剣達はその後ろに控えるそうに移動する。

蓮夜「僕達は何があろうとも進み続けないとならない。僕の彼女のために、それには僕には手が足りない。だから彼女を守るための手<sup>カ</sup>になつてくれ、どこまでも広<sup>こ</sup>がり届<sup>わ</sup>くその刃で、」

彼は振り返るとそれに向かって手を差し伸べる。

蓮夜「そうだ、名前が必要だね。・・・初めて僕の意味で生み出さ

れた力、ならそれにふさわしい名前がいい。・・・広がり消えない僕の望んだ・・・そうだ！」

差し伸べた手に大剣が近づき刀身の腹を添えると、それを見た彼は笑うと付き物の落ちたように明るい表情になった。

蓮夜「これからよろしく頼むよ。『白夜』」

剣達は彼に名前を呼ばれるとそれに答えるように刃を淡く光らせた。

## ラスバレ72

夢結「……どうすればいいの？」

他の面々が行動を起こす中、夢結は1人森の中を歩いていた。その表情は暗く頭痛がするのか数分事に頭を抑えている。

夢結「蓮夜と……。」

彼女は悩んでいた。

音羽の言葉を信じるべきか否かを、

夢結「……どうすればいいのかしらね。『黒薔薇』貴方ならわかるかしら？」

そんな中彼女は、背負っているケースへと手を添えるとその中身に對して語りかけた。

対異能者用CHARM『黒薔薇』

それは彼が制作した力であり現在の自身の力でもある。

2人の写し身と言うべき存在である、その刃に彼女は答えを求めたのだ。

これ以上彼を傷つけたくないから、

……これ以上自身が傷つきたくないから、

夢結「苦しみたくない、結局私は我が身がかわいいのね。……本当に嫌になるわ。」

自身の中に浮かんだ言葉に苦虫を噛み潰したよう表情をする彼女、それと同時にケースに添えていない手を強く握る。

血管が浮かび出るほど強く握られた拳はすぐに青白く血の気を失っていき、その隙間から赤い雫が零れ落ちた。



夢結「ツ!?・・・ここは、」

どうしても自身の保身に意識が向いてしまう自身の心、そしてそれを抑えきれない自身の意思に彼女の心情はより荒れていく。

そして己への憎悪を胸に歩き続ける彼女、その足は何かぶつかる事でその動きを止めた。

そこにあつたのは1本の木だった。

本来ならば何の変哲もないただの樹木、しかしそれを見た彼女は激しく動揺する。

夢結「・・・なんで、なんでここに着いてしまうの。」

慌てて彼女は周囲を確認する。

見渡す彼女の視界に移るものは前にある1本の木と青い空のみ、そこは森を一望できる丘の上であった。

夢結「・・・な・で、・れ・・・方のこ・えなの?・・・私に・をさ・・・のよ。」

彼女は膝から崩れ落ち呆然し始めると掠れた声で何かを呟き始めた。

手と同じように全身の血の気が抜け青白くなっていく肌に自身を抱きしめことで熱も求める彼女。しかし改善されるところか全身が震え出してしまふ彼女は必死に止めようとするが止まらない。

夢結「止まって、止まって、止まって、止まって、お願い止まって・・・」

もう終わったのよ、それに決めたでしょう。・・・私はい、」

音羽「ここが貴方の傷ですか?」

夢結「!?!?・・・音羽さん?」

背後から突然かけられた声に彼女の肩が跳ねる。

そして声の主に覚えがあった彼女はぎこちない動きで後ろへと目を向けると、そこには予想通りの人物、先程彼女に難題を出した音羽の姿があった。

夢結「・・・なんでここに？」

音羽「追わせてもらいました。」

夢結「そう・・・で、傷とは？」

音羽「それは貴方が1番理解しているはず、」

夢結「・・・そうね。音羽さん、ここは私が死んだ場所なのよ。」

音羽「・・・それを蓮夜さんがどうにかした、」

夢結「そうよ、ここは私が生まれ変わった場所であると同時に彼が異能者として生まれ変わった場所でもあるの、・・・そして今も彼を苦しみ続けている原因を作り出してしまった場所でもあるわ。」

音羽「・・・。」

顔を俯かせたまま自分達に起こった出来事罪と罰を話していく夢結、それを音羽は何も言わずに聞く。

夢結「・・・本当は私を殺したいのでしょうか？」

音羽「なんで、ですか？」

夢結「貴方、蓮夜に対して思いがあるのではないかしら？」

音羽「恋愛に興味ありませんよ。」

夢結「それはわかってるわ。・・・信仰ね。」

音羽「・・・。」

夢結「そして貴方は彼の幸せを願った。・・・でも元凶である私を彼は守ってしまう。」

音羽「・・・。」

夢結「別に先程貴方の言ったことを信じない訳では無いのよ。むしろ真実だと思ってるわ。」

音羽「・・・なぜ？」

夢結「それは似てるからよ。」

音羽「？」

夢結「……貴方からすると納得いかないでしょうけれど私も貴方も蓮夜の幸せを望んでいる。」

音羽「……」

そこまで言うのと徐に笑いだす夢結、それを見下ろす音羽の顔には表情はなくなつただただ彼女を見つめ続ける。

夢結「それに私もそうなのよ。」

音羽「……」

夢結「私は私自身を殺したっ!？」

夢結が音羽へと向き直つた瞬間、乾いた音と共に彼女の頬に痛みが走つた。

音羽「……ふぎ……な、」

夢結「音羽……さん？」

音羽「ふぎけるな!!」

夢結「?!?」

音羽「自身を殺したい? 貴方はあの人の気持ちをわかつてるのか!! どれだけ傷ついてもどれだけ救いがなくても、それでも足掻き続けて来たあの人の痛みを悲しみを!!」

夢結「そ、それは、」

音羽「わかっているはずだろ! だって繋がってるんだもん!! あの人がどれだけ貴方が大事なのか貴方がいるだけであの人が救われていることが!!」

夢結「で、でも……」。

音羽「でもじゃない!! わかつてるならなぜその言葉が出る!!」

荒々しい口調で問い詰める音羽、その姿は普段見せる彼女とは似て

も似つかないものであり、関わりが深い訳では無い夢結でもそれが以上であると理解出来た。

音羽「ああ、そうだよ！憎いよ！！平穩の中をただ生きる貴方が！あの人の異変に気づけなかつた貴方が！自分の世界に閉じこもり本当の地獄も知らないで自分が可哀想みたいになっていた貴方が！」

夢結「・・・ッ！」

彼女の言葉に夢結は表情をしかめる。

その理由は明白、彼女の言うことが全て真実だからだ。

もしも彼の状態に早く気づいていれば、あの時に電話を切らなければ、彼はここまで苦しまなかつたのかもしれない。

しかし、それが出来なかつた。・・・我が身可愛さに自分の世界に逃げていた。

だからこそ彼女の言葉を否定したくなかつた。

音羽「本当だつたら私の出て貴方を始末したい。でもそれをしたらあの人は壊れてしまう。そうしたらあの人は死ねずにただ壊すことしか出来ない獣になってしまうんだよ！」

夢結「・・・、」

音羽「出来るなら私が救いたかつた。あの人が私を救ってくれたように、でも私じゃああの人達を救うことが出来なかつた。」

夢結「・・・、」

音羽「私じゃ救えない程にあの人を壊した貴方が憎い！でもなあ！！」

夢結「・・・、」

表情を曇らせていく夢結に向かつて音羽は手を振りあげた。それを見た彼女はその後自身に起きることを予想出来たが夢結は無言のまま彼女を見つめ続ける。

彼女の怒りが理解出来るから、彼女の願いがわかるから、そしてそ

の願いのせいで彼女が苦しんでいることも、そしてその原因が自身にあることも。

だからこそ受け入れるために夢結は動かないのだ。

少しでも彼女の怒りを受け入れるために、

彼女の手が振り下ろされるのを確認した夢結は目を閉じる。数瞬

後には痛みが襲い掛かるであろうと予想した夢結だが、

しかし夢結の予想することは起きなかった。

音羽「・・・あの人にとつても私にとつても貴方が希望でもあるんだよ！」

夢結「・・・え？」

肩に何かが乗せられた感覚に夢結が目を開けると、そこには涙を流し自身の肩を掴む音羽の姿があった。

## ラスバレ1章73

希望・・・その言葉を聞いた夢結は混乱の中にいた。

彼女は『希望』と言う単語が理解出来ないのだ。

漢字2文字、平仮名だとしても3文字しかない言葉、そんな単純な意味しかないこの単語を今の彼女には理解することが出来ない。

夢結「・・・希望？」

音羽「そうだよ！私にとっては唯一の・・・ね！」

夢結「・・・どういう意味かしら？」

音羽「・・・へっ？」

首を傾げながら疑問を口にする夢結の姿に音羽は一瞬惚けるが、すぐさま冷静さを取り戻した音羽はある違和感を覚えた。

・・・どうして《どういう『意味』》といったのかと、

どうしてその答えに至ったのかを問いたただす《どうして》や《なぜ》ならわかる、しかし彼女は《意味》と言った。

それは、言葉に対して理解出来ないことがある場合に用いられる言葉だ。

たしかに抽象的であったがそれでも彼女になら理解出来るはず、それなのに彼女は《意味》を理解出来ない。

音羽「意味って、そんなこッ!？」

夢結「・・・？」

なぜ理解出来ないのか、それを確かめるために音羽は彼女の顔を目を見た口籠る。

夢結の瞳に光がなかったのだ。

そこで音羽は一つの可能性にたどり着いた。それは理解出来ないのではなく、理解したくないと言うこと。

彼女は理解しないために心を閉ざしてしまっている。

それを見た音羽は険しい表情をし、

音羽「逃げるな!!」

夢結の頬を殴り抜いた。

音羽「ふざけるな!なんで逃げるんだよ!!」

夢結「・・・どうしたの?」

音羽「どうしたのじゃない!ふざけるのも大概にしろ!!」

夢結「そう言われても本当に意味がわからないのよ。」

音羽「何も難しいことを言っていないだろ!」

夢結「それはわかるわ。でもわからないのよ?どうして私なんかを『希望』と言うのか、」

音羽「・・・ッ!」

激昂のままに言葉をぶつける音羽に対して、やはり首を傾げながら穏やかな表情で返す夢結、そんな彼女をもう一度殴ろうと拳を握りこんだ時、夢結はとある言葉を紡ぐ。

それを聞いた瞬間、音羽は全てを理解した。

なぜ理解出来ないのか、

それなのになぜわかるというのか、

そしてなぜ夢結は微かに震えながら涙を流しているのか、

音羽「・・・罪悪感、」

夢結「?!?」

音羽の放った一言に夢結は微かに反応を示す。

それを見て彼女は理解した。

彼女が理解出来ない理由、いいや理解したくない理由は今も膨らみ続けている罪悪感にあったのだ。

音羽「……あの人に対して少し距離があるように感じてたけど……それが理由？」

夢結「だってそうでしょう？ 私は本来生きては行けない存在なのよ？ それを彼の人生を対価にして生きている。」

音羽「……。」

夢結「この身体も、この記憶も、この思いも、この温もりも、本当なら全部私の持つべきものじゃなかった。……本来なら彼自身が持つべきものだったのよ。」

音羽「……。」

夢結「それを私は奪ってしまったのよ。……そのせいで彼は今も苦しみ続けている。そのような存在が『希望』なんて言えるのかしら？」

音羽「……。」

夢結「それに悲しむから彼に言えてないけれど、私は私自身のことを人形だと思っているわ。彼の思うがままに動き続ける人形、もしも望むなら私は自身の命すら平然と捨てられる。」

音羽「……。」

夢結「人形、壊れるまで主人の命令のままに動く物、そもそも私は人ですらないのよ。……それなのに人ですらないのに彼を救おうなんて私には言えないわ。」

どんどんと闇の深くなる夢結の瞳、それを見て理解は核心へと変わった。

音羽「あの人と同じなんだ……。」

同じなのだ……2人とも、

お互いにお互いのことを壊してしまった。  
だからお互いに罪悪感が根付いている。

それが2人を狂わせているのだ。

それを知って音羽は笑う。



その笑みから見える感情、それは喜びだった。  
彼女は今まで方法が分からなかったため苦しみ続けていた。  
助けたい人がいる、しかし自身には助ける手段がない。  
それでも彼女はもがき続けた。

音羽「・・・だからか、」

・・・笑って欲しかったから、救ってもらった時の自身がしたように、

彼がいるから私は今を生きていけている。  
だから恩返しがしたかった。

それが彼の望んでいないことだとしても、それがただの自己満足であつたとしても、

あの日の彼のように、今度は彼を救いたかった。

だからこそ今、彼女は笑う。

どれだけ考えても、どれだけ行動に移しても、決して彼に響くことはなかった。

それでも諦めきれず様々な手段を模索した。

そのために必要なことは全て実行した。

それでも足りない。

力も、知識も、思いも、自身の持ち得る全てを用いても、その全てが失敗に終わる。

・・・足りないのだ。

一つだけ足りないパズルのように、

何か大切なものが足りない。

それを理解した彼女は、その足りないものを探した。

そして見つけたのが目の前の少女<sup>白井夢結</sup>だった。

唯一彼が心を許せる存在、彼を救うための鍵に、

そして彼女に触れる事で遂に答えを発見した。

遂に得たのだ。

彼女の中でカチリと最後のピースがハマる音が聞こえる。

あとは実行に移すだけだ。

そのためには闇に沈んだ夢結をどうにかしなければならぬ。

完全に壊れていると確信出来る彼女の心をどうにかしなければならぬ、本来ならお手上げあるだろうこの事態だが彼女には関係なかった。

確信したからこそ取れる手段があるのだから、

音羽「夢結様……。」

夢結「……何かしら？」

音羽「……それでいいの?」

ピースは得た。

だからこそ音羽は一言呟く、実行に移すための鍵を開けるために、

## ラスバレ1章74

夢結「・・・どうということかしら？」

音羽「本当に諦めていいのかってことです。」

音羽の言葉に光を失っていた夢結の瞳が揺れる。

夢結「・・・私は諦めてないわ。」

音羽「諦めてる。」

夢結「どうしてそう思うのかしら？」

音羽「貴方は自身のことを『人形』と言いましたよね？」

夢結「・・・ええ、私はそう思っているわ。」

音羽「だとしたらおかしいですよ。」

音羽はそこまで言うのと夢結の周りを回るように歩き始める。

音羽「だって人形ならどうして主の言うことを聞かないのですか？」

夢結「・・・何も言われてないからできないのよ？」

音羽「いいえ言われてますよ？」

夢結「ないわね。・・・彼が私に何も命令出来ないことは貴方も理解しているはずよ？」

音羽「いいえ、言ったはず。」

音羽の言葉に彼女は否定で返す。

しかし音羽はその言葉を聞き流し言葉を並べ続ける。

音羽「あの人は貴方の幸せを願っている。・・・それは間違いはいはず。」

夢結「・・・ええ、そうね、」

音羽「それで貴方は彼の『幸せ』を願っている。」

夢結「そうよ、」

音羽「ならその『願い』も叶えないとダメじゃないの？だって『人形』は造り手の『願い』が込められていることなのだから、」

彼女の言葉を聞いた夢結は目を見開いた。

その反応を見た音羽は細く微笑むとさらに言葉を重ねていった。

音羽「それなのに造り手であるあの人の願いを叶えようとしないうんて・・・本当に人形？」

夢結「私はそうだと信じているわ。」

音羽「怪しい・・・だって、所有物なら主を幸せにすることが最優先なのでは？」

夢結「・・・でも、人形は主の言うことを聞くものよ？だから、命令されなければ、」

音羽「だから『願い』をどうするか聞いている。」

そこで夢結は口を閉じた。

それを見た音羽は彼女の後ろに行くとその表情を大きく歪笑ったませた。

音羽「貴方が言ってることはただの言い訳。」

夢結「そ、そんなわけ、」

音羽「もう辛い思いをしたくない。・・・そう思ってますんか？」

夢結「・・・そんなこと、」

音羽「目を背けたらダメ、貴方はそう思ってる。」

夢結は必死な表情で反論しようとするが、その言葉は全て音羽の一言によりその全てが遮られてしまう。

着々と追い詰めるように言葉を重ね続ける音羽に、夢結は身体を震わせながら両手で顔を隠そうとするがそれは音羽防がれてしまい出来ない。

音羽「だから貴方は助けられない。」

夢結「いや、」

音羽「だから貴方は1人になる。」

夢結「やめて、」

音羽「きつとそれは変わらない。」

夢結「・・・おね、がい。」

音羽「どれだけ考えていても、心が逃げてたら意味がない。」

夢結「・・・もう、やめて、」

背後から囁くように聞こえ続ける声、それに対して必死に耳を塞ぐうとするが、両手は掴まれているためそれは叶わない。

そんな夢結はまるで幼子のようにいやいやと首を振る。

それは普段の凛々しい姿とはかけ離れており普段の彼女を知る人が見たら目を疑うだろう。

音羽「ダメ、やめない・・・。」

夢結「・・・どうして、」

音羽「許せないから、」

夢結「・・・それは分かっているわ、私は今でも彼を、」

音羽「自分のことを見えてない貴方に、」

夢結「・・・えっ？」

脅えた表情で必死に逃げようとする夢結は耳を疑う。

今彼女はなんと言ったのか？

自分が見えていない？

・・・誰が？

夢結「私が・・・？」

音羽「そう、貴方は何も見えていない。自分が何なのか、何のために存在するのか、何を思っているのか・・・そして何を願う望んでいるのかを、」

夢結「分かっているわ。」

音羽「そう言ってる時点でわかってない。……もう一度聞く、貴方は何を願う何を望む。」

私自身が見えていない。

その言葉が夢結の脳裏を駆け巡る。

しかし彼女は否定した。

それは分かっているからだ。

私は人形、彼に作られた存在し得ない存在。

彼の全てを代価に生まれた歪な存在。

だからこそ私は彼役に立たなくては、意味が無い。

彼がそう思っていないくても、これは私の存在意義であり、目的、奥底にある思いなのだから、

どう言われようとも、それは変わらない。

はずなのだが、彼女の中でこの言葉に違和感を感じる。

それもまるで前提条件が違うかのように明確な、そして致命的な違和感。

その正体を探るために彼女は無意識に思考の海へと潜る。

白井 夢結らしきもの私 白井 夢結が生まれた理由は『彼が彼女の死を拒んだから』

異能者としての夢結私 人形の存在する理由は『彼と共にいるため』

私の生きる理由は『彼の命令を受けるため、』

何でも無い何か私 私の願いは……

夢結「……。」

音羽「……。」

夢結は弱々しい足取りで崖へと向かって歩き出した。

それに気づいた音羽は手を離し、静かに彼女の傍から離れる。

出来の悪い人形のような不安定な足取りで何度も転びそうになる彼女を見守る音羽は彼女に背を向けて歩き出した。

そして音羽が森の奥に消えたその時、夢結は何者かに手を引かれる

ように崖下へと落ちていった。

茜「・・・お疲れ様。」

音羽「・・・疲れた。」

音羽がしばらく歩いてしていると頭上から声が聞こえたため声の方へと視線を向けると、そこには茜の姿があつた。

茜「随分と声を荒らげていたけど・・・すごく溜まっていたみたいだね。」

音羽「元々出さないから・・・かなり溜まってた、」

茜「それもそうか・・・ありがとうね。ワタシじゃあんなこと言えないからなあ。」

音羽「性格的に無理なのはわかってる。こういうのは性格的に私の方が向いてる。」

優しい声色で喋る茜に怠そうに頷く音羽、それを見た茜は苦笑すると彼女の隣に飛び降りる。

茜「それでも、ありがとう。」

音羽「どうしましたまして、」

茜「・・・大丈夫かな？」

音羽「それはあの人達次第、」

茜「・・・そうだね。」

音羽「・・・帰ろ。」

茜「・・・うん、」

2人は頷き合うそれぞれが帰る場所へと向かって歩いていった。

夢結「……。」

彼女達が帰路に着く中、夢結は真っ白な空間にいた。

そんな彼女の表情は無く、力の抜けた身体で何とか立っている印象を受ける彼女は、その髪や服の色から純白の空間に滲む黒い点に見える。

壁も床も、空すらも純白な空間に存在する2つの黒点の内の1人である彼女は、その手に握る刃をもう1つの黒点、蓮夜へと向ける。

蓮夜「……。」

それを見た彼は一度深呼吸をすると虚空から大鎌を取り出し彼女へと向けると、彼女は弾かれるように彼へと襲いかかった。